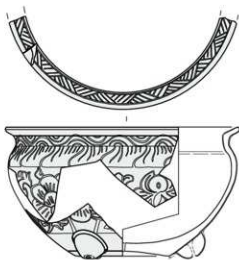


は ん ざん ばる
平安山原A遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・21・22・23年度）—



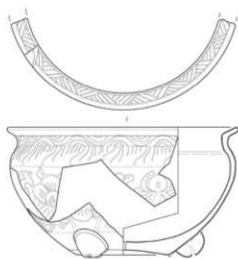
青磁香炉 (18～19c)

2016（平成28）年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

は ん ざん ばる
平安山原A遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・21・22・23年度）—



青磁香炉 (18～19c)

2016（平成28）年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

本報告書は、桑江伊平土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査として、平成19年度から23年度にかけて調査区を分割し、記録保存を行った平安山原A遺跡発掘調査についての成果をまとめたものです。

本遺跡は、平成15年3月に返還された在沖米軍基地キャンプ桑江北側地区について、返還前に実施した試掘調査によって発見された異なる時代の痕跡が重複する遺跡です。

弥生時代に相当する貝塚時代後期の頃は、隣接する他遺跡との関連を示す土器や石器等の遺物の出土とともに埋葬地であったことが判明し、被葬者には先史時代に見られる習俗の抜歯が認められております。

近世以前の集落は、建物等の柱穴群や耕作地に伴うものと見られる石列や溝、さらに、集落の外れから、刀子が刺さった状態の20代前半の成人女性と推測される埋葬人骨が見られました。

1945年の米軍沖繩上陸後、数年間のうちに行われた基地整備の造成によって地中に埋もれた旧平安山集落跡では、近世から近代にかけて様々な時代背景による集落形成の規制や計画性、耕作地との区割、屋敷跡など平安山祝女殿内を中心としたムラの痕跡がありました。

その中には、綱引きが行われた道やその際に東西に分けた道、屋敷に伴う井戸や排水溝など、出土品からは証言や現存する企業の記録から浮かび上がる暮らしぶりが窺えます。

本発掘調査によって得られた成果は、先史時代から現代に至る本町の歴史・文化についての文化財調査、地名調査、町史編纂の成果を結びつけ、裏付けるものであります。

このことは、町民はもとより多くの方々に本町の歴史や文化を実感し、理解する資料の一助となれば幸いです。さらに、本町においては、現在、町立博物館建設を進めており、開館された暁には、さらに活用され町民の心の豊かさと魅力あるまちづくりに繋がるものと考えております。

末尾になりましたが、様々なご指導やご助言、ご協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成28年3月

北谷町教育委員会
教育長 川上 啓一

例 言

1. 本報告書は、北谷町教育委員会が桑江伊平土地区画整理事業に伴い、平成19年度、21年度～23年度に実施した「平安山A遺跡」発掘調査の成果をまとめたものである。

2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図(昭和54年測量)を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本書に掲載した緯度、経度の平面直角座標はすべて世界測地系にもとづくものである。

3. 遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。(敬称略)記して感謝申し上げます。

脊椎動物遺体	植泉 岳二(早稲田大学教育学部)
貝類遺体	黒住 耐二(千葉県立中央博物館)
人骨	藤田 祐樹(沖縄県立博物館・美術館)
石質	大城 逸朗(おきなわ石の会)
堆積学	松田順一郎(史跡湧池新田会所管理事務所)

4. 植泉岳二氏・黒住耐二氏・藤田祐樹氏には玉稿を賜った。記して謝意を表します。

5. 放射性炭素年代測定 バリノ・サーヴェイ(株)

鉄製品分析 株式会社文化財サービスに依頼した。

6. 本報告書の編集は、土岐耕司の協力を得て、島袋春美が行った。執筆分担は下記のとおりである。

第1章 第2章 第3章 第1節	松原 哲志
第3章 第2節 第5節(24)	山城 安生
第3章 第3節2(9) 第5節(3・18・19・28・29) 第V章 第4節	島袋 春美
第3章 第5節(10～15)	比嘉 優子
第3章 第3節2(7・8・10) 第5節(20～23・27)	上地千賀子
第3章 第5節(4・16・17)	呉屋 広江
第3章 第5節2(1・2・5～9)	北條 真子
第3章 第2節 第3節1・2(1～6) 第4節 第5節(25・26) 第V章 第1～3節	土岐 耕司

7. 本遺跡の遺物の注記及び、遺構、取上の凡例は次のとおりである。

・注記 HA ①地区(平安山原A遺跡 H19 年度調査)

遺跡名	袋台帳番号	地区	グリッド	遺構名	層位	取上日
⑥平A	台15	B4	L16	0025SD		08.02.13

→ ⑥平A台 15.B.4L16.
0025SD- 08.02.13

・注記 HA ②地区(平安山原A遺跡 H21 年度調査)

遺跡名	取台番号	グリッド	遺構	層位	取上日
⑦平A	839	B-20	加屋敷		H220112

→ ⑦平A台 839.B.20
加屋敷、H220112

・注記 HA ③地区(平安山原A遺跡 H22 年度調査)

遺跡名	台帳番号	グリッド	遺構番号	層	調査日
⑧平A	764	C12	S-8	暗褐色砂質土	100122

→ ⑧平A-764.C12.
S.8, 暗褐色砂.100122

・注記 HA ④地区(平安山原A遺跡 H23 年度調査)

遺跡名	台帳番号	グリッド	遺構番号	層位	調査日
⑨平A	2066	E18	S-8	Ⅲ層	100122

→ ⑨平A 2066.E18
Ⅲ層 H23.12.06

・遺構記号

性格	溝・河川	土壌	柱穴	石列	貝集積	掘乱	その他
遺構記号	S D	S K	P	S L	S S	S Z	S X

8. 本報告の編年表記は沖縄編年を基本とするが、出土遺物には時代幅があり、その種類によって時代表記が異なる。

(伊礼原D遺跡(2013)例言(沖縄・九州時代区分対象表)参考)

9. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会が保管している。



HA①(手前側)と伊礼原D遺跡(奥側)(北西より)



HA① 完掘全景(南西より)



HA②と北谷の市街地（浜川方面を望む）



HA② 1 面目 祝女殿内屋敷跡周辺（南西より）



祝女殿内 屋敷跡 (北西より)



屋敷跡 検出作業風景



井戸 01 断割状況 (南西より)



II層盛土上に構築された上水路 (西より)



パショウ葉脈痕のあるコンクリート蓋



アガリミチ付近 (南西より)



三良又吉小・照屋先生 屋敷付近 (西より)



照屋先生 屋敷跡の収納坑 (北東より)



砂層出土人骨と調査区壁面 (北西より)



2 面目ピット群 検出状況 (南東より)



HA③と北谷の市街地（嘉手納基地方面を望む）



HA③と北谷の市街地（役場方面を望む）



自然流路 完掘全景 (西より)



蒲伊礼小 屋敷跡 (南西より)



屋敷間を走るワキミチ 2 (南より)



大屋 屋敷跡 (西より)



Ⅱ層上から掘り込まれる戦前遺構 (南西より)



HA④と北谷の市街地（美浜方面を望む）



HA④-4・5区1面目完掘（北より）



HA④ 主要部完掘全景 (北西より)



HA④ 遺構密集地区 完掘 (北西より)



HA④-1～3区 完掘 (北西より)



HA④-11区 完掘 (南東より)



HA④-12区 自然流路完掘 (北より)



人骨12 検出 (南西より)



刀子が刺さった状態 (北東より)



人骨 11 検出 (北東より)



人骨 01 検出 (北西より)



人骨 02 検出 (西より)



人骨 03 検出 (南西より)



人骨 04 検出 (南西より)



人骨 05 検出 (北西より)



人骨 06 検出 (北西より)



人骨 07 検出 (南より)



人骨 08 検出 (西より)



HA② 磨製石斧 出土状況



HA② 磨石 出土状況



HA④ 鉄刀 出土状況



HA① 青磁椀 出土状況



HA① ウマ下顎骨 出土



HA③ イノシシ or ブタ下顎骨 出土



HA④ ウシ頭骨 出土



HA① 骨 出土



HA② 陶製煙管・骨製筭 出土



HA④ 石製煙管 出土



HA② 沖縄産陶器・靴底 出土



HA②「北谷」陶製章 出土



碗



小碗



皿



卷首圖版 13 本土產磁器（近代）・沖縄産無釉陶器



壺・罍・瓶類他



碗①



碗②



小碗・急須



皿・酒器・火取・杯



鍋・火鉢・香炉



瓶・灯明具



卷首图版 15 煙管·簪



石斧



緑石・磨石・ウガニ石



砥石



牛乳瓶 (左から) 三ツツメガラス瓶、瓶蓋、三ツツメ瓶、三ツツメ



美顔水【桃谷福天閣】

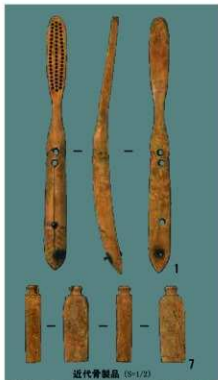
メヌマボマード【井田東栄堂】

底面にエンボスのある瓶 (B-1/2)

パニシングクリーム【ウテナ】

不明【平尾分店】

歯の膏【鈴木商店】



近代骨製品 (B-1/2)



入れ歯 (B-1/2)

「北谷」陶製筆 (B-1/2)

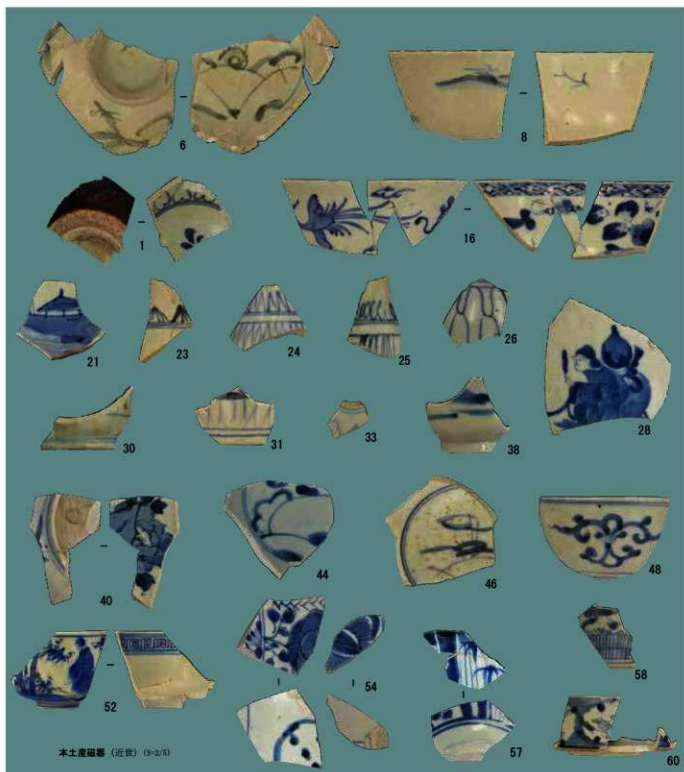
信楽焼の和式便器 (B-1/2)

14



卷首图版 18 本土産磁器（近代）(S=1/3)

(番号は図番号と一致)



卷首图版 19 近代玩具・本土産磁器 (近世)

(番号は図番号と一致)



卷首図版 20 本土産陶器（近世）1 (S=1/3)

(番号は図番号と一致)



本土産陶器（近世）2（63・65は5-1/4、それ以外は5-1/3）



染付（5-2/5）

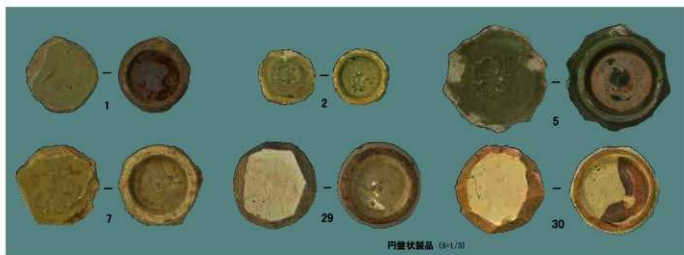
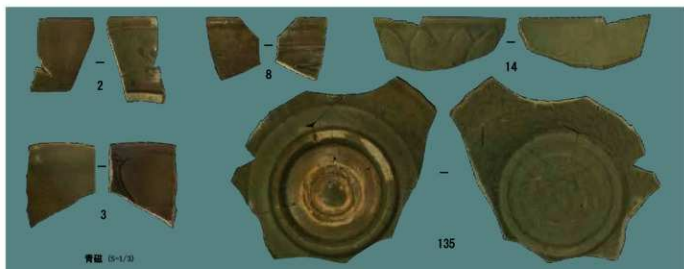
卷首図版 21 本土産陶器（近世）2・染付 1

（番号は図番号と一致）



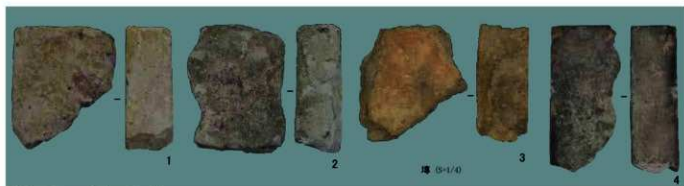
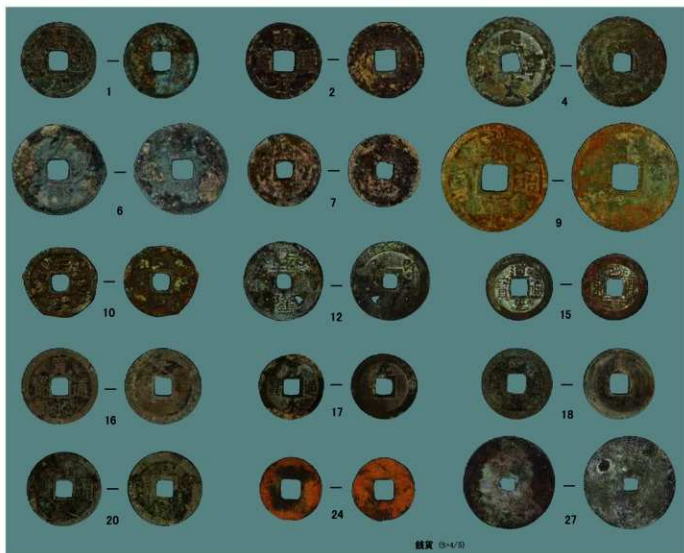
卷首図版 22 染付 2・その他の輸入陶磁器

(番号は図番号と一致)



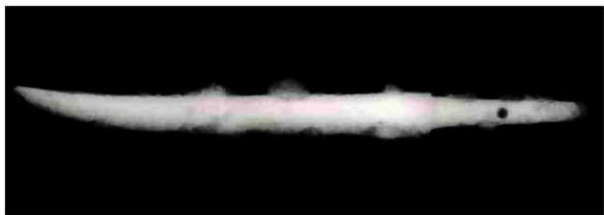
卷首图版 23 青磁・円盤状製品・土器・土製品

(番号は図番号と一致)





鉄製短刀 (S-2/5)



鉄製短刀のX線写真 (S-2/5)



鉄製刀子 (S-2/5)



骨骨に刺さった状態の刀子 (05集)



卷首図版 26 貝製品 (S=1/2)

(番号は図番号と一致)



卷首图版 27 貝類遺体 1 (巻貝)

(番号は第 129 表と一致)



卷首圖版 28 貝類遺體 2 (卷貝)

(番号は第 129 表と一致)



卷首図版 29 貝類遺体 3 (巻貝)

(番号は第 129 表と一致)

ユキノカサ科 (2リュウキュウウノアシ) **ヨメガカサ科** (3オオベッコウガサ) **ミミガイ科** (4イボアナゴ、5マアナゴ) **リュウテン科** (7チョウセンサザエ、8チョウセンサザエの蓋、9ヤコウガイ、10ヤコウガイの蓋、11カンギク、12カンギクの蓋、13オオウラウズ、15リュウテン、16コシダカサザエ) **ニシキウス科** (17ムラサキウズ、18ニシキウズ、19ギンタカハマ、20コシダカギンタカハマ、22サラサバテイラ、23オキナワイシダタミ、24ムラサキイチモンジ?) **アマオブネ科** (26イシダタミアマオブネ、27ヒメイシダタミアマオブネ、28キバアマガイ、29リュウキュウアマガイ、30アマオブネ、31マルアマオブネ、32オオマルアマオブネ、33アラスジアマガイ、35ニシキアマオブネ、38カノコガイ、39ニセヒロクチカノコ) **オニノツノガイ科** (41オニノツノガイ、42コオニノツノガイ、43メオニノツノガイ、45クワノミカニモリ、46カヤノミカニモリ) **フトヘナタリ科** (51センニンガイ、52マドモチウミナ、53フトヘナタリ) **ウミナナ科** (54リュウキュウウミナ) **ゴマフナナ科** (60ゴマフナナ) **スイショウガイ科** (62ムカシタモト、65ネジマガキガイ、66マガキガイ、67イボソデ、68マイノソデガイ、69スイショウガイ、70アツソデ、72クモガイ、74スイジガイ、75オハダログガイ、76ベニソデ) **ムカデガイ科** (78リュウキュウヘビガイ、79フタモチヘビガイ) **タカラガイ科** (80キイログカラ、81ハナピラダカラ、82ナツメモドキ、83コモダカラ、84ハナナルユキ、85ヤクシマダカラ、86ホツヤクシマダカラ、90ヒメホシダカラ、91ホシキヌタ、95ハチジョウダカラ? (幼貝)、96ヤナギシボリダカラ) **タマガイ科** (99トミガイ、100ヘソアキトミガイ、101シロヘソアキトミガイ、102リスガイ、104ホウシュノタマ、105コハクダマ、107アラゴマフダマ) **ヤツシロガイ科** (108イワカワトキワ、109ウズラガイ、110スクミウズラ) **フジツガイ科** (111ミツカドボラ、112サツマボラ、113シノマキ、115シオボラ、116オオゾウガイ、117ホラガイ、119フジツガイ) **オキニシ科** (120オキニシ、121シワクチナルトボラ、122オオナルトボラ、123シロナルトボラ、125イワカワウネボラ) **トウカムリ科** (126アメガイ、127ヒナヅル) **アッキガイ科** (128ガンゼキボラ、131シラクモガイ、132ツノテツレイシ、133ツノレイシ、134レイシ類、135ムラサキイガレイシ、136アカイガレイシ、137シロイガレイシ、138ハナワレイシ、139レイシダマシモドキ、140コイワニシ、141キイロイガレイシ) **オニコブシ科** (143オニコブシ、144コニコブシ) **フトコロガイ科** (145フトコロガイ) **オリレيوفバイ科** (147ヒメオリレムシロ、148イボヨフバイ、149アワムシロガイ、150オリレيوفバイ) **エソバイ科** (151シマベッコウバイ) **イトマキボラ科** (153イトマキボラ、154ヒメイトマキボラ、155ナガイトマキボラ、156リュウキュウツノマタ、157ツノマタモドキ、158マルニシ、159チトセボラ) **ショックコウラ科** (162ヒメショックコウラ) **マクラガイ科** (163サツマビナ) **ミノムシガイ科** (166オオミノムシガイ) **フデガイ科** (167イモフデ、168チョウセンフデ、169オオオビフデ、170ヒメチョウセンフデ、171コガネヤタテ、172シロオビヤタテ) **イモガイ科** (173マダライモ、174サヤガタイモ、177シロマダライモ、178キヌカツギイモ、179ハナイモ?、180イボシマイモ、181ヤセイモ、183ヤナギシボリイモ、184サラサミナシ、185カバミナシ、187ナガサラサミナシ、190ハイイロミナシ、191ヤキイモ、192サラサミナシモドキ、193アジロイモ、194タガヤサンミナシ、197ツボイモ、198ニシキミナシ、199アンボイナ、200ナンヨウクロミナシ、201ミカドミナシ、202アカシマミナシ、203ゴマファイモ、204コモシイモ、208クロザメモドキ、209アンボンクロザメ、210クロフモドキ、213中形イモ) **タケノコガイ科** (217タケノコガイ、218リュウキュウタケ) **タマゴガイ科** (219カイコガイ) **ナツメガイ科** (220ナツメガイ) **タニシ科** (221マルタニシ) **ヤマタニシ科** (222オキナワヤマタニシ) **トウガタカワニナ科** (224トウガタカワニナ ※aは幼貝、225ヌノメカワニナ、227ヨシカワニナ?、228スグカワニナ) **カワニナ科** (230カワニナ) **アフリカマイマイ科** (231アフリカマイマイ) **ナンバンマイマイ科** (232シュリマイマイ、236カツレンマイマイ) **オナジマイマイ科** (238バンダナマイマイ、239オキナワウスカワマイマイ)

(番号は第129表と一致)



卷首図版 30 貝類遺体 4 (二枚貝)

(番号は第 129 表と一致)



巻首図版 31 貝類遺体5 (二枚貝)

(番号は第129表と一致)

〈二枚貝〉

フネガイ科 (1 エガイ、2 フネガイ、3 クロミノエガイ、4 オオミノエガイ、5 オオタカノハ、6 ベニエガイ、7 オオカリガネエガイ、8 ハイガイ、9 リュウキュウサルボオ) **イガイ科** (11 リュウキュウヒバリ) **ウグイスガイ科** (12 クロチョウガイ、14 ミドリアオリ) **シュモクアオリ科** (15 シュモクアオリ、16 カイシアオリの一種) **イタヤガイ科** (17 リュウキュウオウキ) **ミノガイ科** (18 ミノガイ) **ウミギク科** (20 メンガイ類) **イタボガキ科** (21 オハグロガキ、22 オハグロガキモドキ、23 ノコギリガキ、24 シロヒメガキ、25 シマガキ) **ツキガイ科** (27 ツキガイ、28 クチベニツキガイ、29 ウラキツキガイ、30 ヒメツキガイ、31 カブラツキガイ) **ベッコウガキ科** (a シヤコガキ) **キクザル科** (34 カネツケザル、35 ケイトウガイ、36 シロザル、37 キクザル類) **ザルガイ科** (38 リュウキュウザルガイ、39 カワラガイ、40 オキナワヒシガイ、41 オオヒシガイ、43 リュウキュウアオイ) **シャコガイ科** (44 オオシラナミ、46 ナガジャコ、47 ヒレジャコ、48 ヒメジャコ、49 シャコガイ類、51 シャコウ) **バカガイ科** (52 リュウキュウバカガイ、53 タママキ、54 ユキガイ) **チドリマスオ科** (56 イソハマグリ、57 クチバガイ類、58 ナミノコマスオ) **ナミノコガイ科** (59 リュウキュウナミノコ) **ニッコウガイ科** (60 ニッコウガイ、61 ヒメニッコウガイ、62 ミガキヒメザラ、63 アマサギガイ、64 リュウキュウシラトリ、66 ヌノメイチョウシラトリ、67 サメザラ、68 モチツキザラ) **アサジガイ科** (69 サメザラモドキ) **イソシジミ科** (70 リュウキュウマスオ、71 マスオガイ) **シジミ科** (72 シレナシジミ) **マルスダレガイ科** (73 ヌノメガイ、74 オオヌノメガイ、75 アラヌノメガイ、76 カノアサリ、77 ホソスジイナミ、78 アラスジケマン、79 ユウカゲハマグリ、80 ウスハマグリ類、81 ケショウオミナエシ、82 オイノカガミ、83 ダテオキシジミ、85 リュウキュウアサリ、86 ヒメアサリ、87 スダレハマグリ、88 トウドウマリハマグリ、89 ハマグリ類似種、93 オミナエシ、94 レモンハマグリ?、95 マルオミナエシガイ) **トマヤガイ科** (98 トマヤガイ)

(番号は第129表と一致)

二枚貝名称 (巻首図版 30 ~ 31)

本文目次

はじめに

例言

巻首図版

第I章 調査経緯・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	3
第II章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第III章 調査の方法と成果	12
第1節 調査の方法	12
第2節 層序	14
第3節 近現代の遺構と出土遺物	35
第4節 近世以前の遺構	60
第5節 近代以前の出土遺物	81
第IV章 科学的分析	396
第1節 平安山原A遺跡から採集された脊椎動物遺体の概要	396
第2節 平安山原A遺跡の調査で得られた貝類遺体	408
第3節 平安山原A遺跡より出土した人骨について	424
第4節 平安山原A遺跡の自然科学分析	432
第5節 平安山原A遺跡ピーチロックの年代測定	439
第6節 平安山原A遺跡鉄製品分析結果報告	442
第V章 まとめ	444
第1節 遺物・遺構が示す近代化	444
第2節 戦前の平安山ノロについて	453
第3節 各期遺物の平面分布の検討	455
第4節 出土遺物のまとめ	463

CD収録

- ・平安山原A遺跡から採集された脊椎動物遺体の同定結果
- ・平安山原A遺跡遺物台帳

図版目次

巻首図版1 平安山原A遺跡(HA①地区)遠景	巻首図版17 ガラス瓶・近代骨製品・近代日用品
巻首図版2 平安山原A遺跡(HA②地区)遠景	巻首図版18 本土産磁器(近代)
巻首図版3 平安山原A遺跡(HA②地区)	巻首図版19 近代玩具・本土産磁器(近世)
巻首図版4 平安山原A遺跡(HA②地区)	巻首図版20 本土産陶器(近世1)
巻首図版5 平安山原A遺跡(HA③地区)遠景	巻首図版21 本土産陶器(近世2・染付)
巻首図版6 平安山原A遺跡(HA③地区)	巻首図版22 染付2・その他の輸入陶磁器
巻首図版7 平安山原A遺跡(HA④地区)	巻首図版23 青磁・円盤状製品・土器・土製品
巻首図版8 平安山原A遺跡(HA④地区)	巻首図版24 銭貨・硯・埴
巻首図版9 人骨12(HA④地区)	巻首図版25 鉄製品
巻首図版10 IV層中で検出された人骨	巻首図版26 貝製品
巻首図版11 IV層中で検出された人骨・遺物出土状況	巻首図版27 貝類遺体1(巻貝)
巻首図版12 遺物出土状況	巻首図版28 貝類遺体2(巻貝)
巻首図版13 本土産磁器(近代)・沖縄産無釉陶器	巻首図版29 貝類遺体3(巻貝)
巻首図版14 本土産陶器(近世)・沖縄産施釉陶器	巻首図版30 貝類遺体4(二枚貝)
巻首図版15 煙管・甕	巻首図版31 貝類遺体5(二枚貝)
巻首図版16 石器	

図版1	整理作業風景	5	図版55	瓦質土器(b)	173
図版2	遺跡外観(浜川方面より)	13	図版56	その他の不明陶器	175
図版3	遺跡外観(美浜方面より)	13	図版57	本土産磁器(近世)1	181
図版4	祝女殿内屋敷	33	図版58	本土産磁器(近世)2	183
図版5	取納坑内遺物	43	図版59	本土産磁器(近世)3	184
図版6	HA② 埋堯内食料残滓 検出(東より)	43	図版60	本土産陶器(近世)1	191
図版7	HA③ 埋堯内食料残滓 検出(南西より)	43	図版61	本土産陶器(近世)2	193
図版8	1面目 遺構共存遺物	44	図版62	本土産陶器(近世)3	195
図版9	近代金属製品	46	図版63	染付1	209
図版10	ガラス瓶	51	図版64	染付2	211
図版11	近代円盤状製品	51	図版65	染付3	213
図版12	近代骨製品	52	図版66	染付4	215
図版13	近代日用品	54	図版67	染付5	217
図版14	石臼・軽石製品	56	図版68	染付6	219
図版15	瓦	58	図版69	染付7	221
図版16	瓦二次製品	59	図版70	染付8	223
図版17	S-11検出状況(北東より)	60	図版71	青磁1	239
図版18	S-11とS-640立地状況(南西より)	60	図版72	青磁2	241
図版19	石列・自然流路検出状況(南西より)	63	図版73	青磁3	243
図版20	024SD土層断面(南西より)	63	図版74	青磁4	245
図版21	SD1・2完掘状況(南西より)	64	図版75	青磁5	247
図版22	SD31～34完掘状況(南東より)	65	図版76	青磁6	249
図版23	SD60・61検出状況(北東より)	66	図版77	青磁7	251
図版24	005SL 上 貝集中部 検出状況(西より)	66	図版78	青磁8	253
図版25	埋葬大骨検出状況(南より)	68	図版79	青磁9	255
図版26	本土産磁器(近代)1	91	図版80	青磁10	257
図版27	本土産磁器(近代)2	92	図版81	白磁1	261
図版28	本土産磁器(近代)3	93	図版82	白磁2	263
図版29	本土産磁器(近代)4	94	図版83	白磁3	265
図版30	本土産磁器(近代)5	95	図版84	白磁4	267
図版31	本土産磁器(近代)6	96	図版85	その他の輸入陶磁器1	275
図版32	本土産磁器(近代)7	97	図版86	その他の輸入陶磁器2	277
図版33	本土産陶器(近代)	99	図版87	中国産褐輪陶器1	287
図版34	沖縄産施軸陶器1	115	図版88	中国産褐輪陶器2	289
図版35	沖縄産施軸陶器2	117	図版89	中国産褐輪陶器3	291
図版36	沖縄産施軸陶器3	119	図版90	中国産褐輪陶器4・東南アジア産褐輪陶器	293
図版37	沖縄産施軸陶器4	121	図版91	タイ産褐輪陶器・半練土器	295
図版38	沖縄産施軸陶器5	123	図版92	カマイヤキ1	299
図版39	沖縄産施軸陶器6	125	図版93	カマイヤキ2	300
図版40	沖縄産施軸陶器7	127	図版94	土器1	311
図版41	沖縄産施軸陶器8	129	図版95	土器2	313
図版42	沖縄産無軸陶器1	141	図版96	土器3	315
図版43	沖縄産無軸陶器2	143	図版97	土器4	317
図版44	沖縄産無軸陶器3	145	図版98	土器5	319
図版45	沖縄産無軸陶器4	147	図版99	土器6	320
図版46	沖縄産無軸陶器5	149	図版100	土製品	322
図版47	沖縄産無軸陶器6	151	図版101	甕	324
図版48	沖縄産無軸陶器7	153	図版102	銭貨	329
図版49	沖縄産無軸陶器8	155	図版103	円盤状製品1	335
図版50	沖縄産無軸陶器9	157	図版104	円盤状製品2	337
図版51	陶質土器1	163	図版105	硯	339
図版52	陶質土器2	165	図版106	煙管	345
図版53	陶質土器3	167	図版107	滑石製品・石製品・石板	346
図版54	瓦質土器(a)	171	図版108	羽巾・鉄滓・壁壘	349

図版109	埴	350
図版110	鉄製品	351
図版111	石器1	363
図版112	石器2	365
図版113	石器3	367
図版114	石器4	369
図版115	石器5	371
図版116	石器6	373
図版117	石器7	375
図版118	石器8	377
図版119	イトマキボラ製品	380
図版120	ゴホウラ・アツソダガイ	380
図版121	スジガイ(穿孔貝)	385
図版122	貝製品1	387
図版123	貝製品2	389
図版124	貝製品3	391
図版125	貝製品4	393
図版126	骨製品	395

図版127	脊椎動物遺体1(上段:魚類、下段:ウミガメ類・ジュゴン・ハクゾウ類・ヘビ類)	404
図版128	脊椎動物遺体2(上段:ネズミ科・ウサギ科・ネコ・イス・インシシノ/ブタ・ウシ、下段:ブタ・インシシノ/ブタ)	405
図版129	脊椎動物遺体3(上段:ブタ・インシシノ/ブタ、下段:ヤギ)	406
図版130	解体済のある脊椎動物遺体(上段:ブタ、下段:ブタ・ヤギ)	407
図版131	11号人骨の出土状況	427
図版132	3号人骨の頭骨(左:正面、右:左側面)	427
図版133	7号人骨の頭骨(左から正面、左側面、上面)	428
図版134	11号人骨の頭骨(左から正面、右側面、上面)	428
図版135	12号人骨の頭骨(左から正面、左側面、上面)	428
図版136	12号人骨の出土状況	429
図版137	刀子と椎骨の位置関係	429
図版138	刃物を伴う成人女性	429
図版139	平安山原A遺跡の種実遺体	438
図版140	下層確認状況	441
図版141	鉄刀の顕微鏡組織・EPMA調査結果	443
図版142	壺内検出ブタ歯(1.5kg)	476

挿図目次

第1図	北谷町の位置	6
第2図	北谷町周辺の地形分類	9
第3図	北谷町周辺の地層地質分類	9
第4図	北谷町の位置と遺跡分布	11
第5図	グリッド設定	13
第6図	平安山原A遺跡の位置	13
第7図	層序1(HA①地区)	15
第8図	層序2(HA②地区)	17
第9図	層序3(HA③地区)	19
第10図	層序4(HA③地区)	21
第11図	層序5(HA③地区)	23
第12図	層序6(HA④地区)	25
第13図	層序7(HA④地区)	27
第14図	1面目 戦前平安山集落 検出遺構配置	31
第15図	1面目 祝女殿内屋敷 平面図	33
第16図	1面目 井戸(1)	37
第17図	1面目 井戸(2)	38
第18図	1面目 井戸(3)	39
第19図	1面目 石組遺構(1)	39
第20図	1面目 石組遺構(2)	40
第21図	1面目 石組遺構(3)	41
第22図	1面目 遺構共存遺物	44
第23図	近代銭貨	45
第24図	近代金属製品	46
第25図	ガラス瓶 拓本	49
第26図	近代骨製品	52
第27図	近代日用品	54
第28図	石臼・軽石製品	56
第29図	瓦 平面分布	57
第30図	瓦	58
第31図	瓦二次製品	59
第32図	S-11・640	60

第33図	2面目 検出遺構配置図	61
第34図	005-006-008SL、021~025SD	63
第35図	SD1~3	64
第36図	SD31~34	65
第37図	SD60・61	66
第38図	出土人骨	67
第39図	人骨出土グリッド平面分布	67
第40図	人骨密集範囲詳細図	68
第41図	埋葬大骨	68
第42図	遺物分布変遷	82
第43図	遺物接合状況 平面分布	83
第44図	本土産磁器(近代) 平面分布	87
第45図	本土産磁器(近代) 1	91
第46図	本土産磁器(近代) 2	92
第47図	本土産磁器(近代) 3	93
第48図	本土産磁器(近代) 4	94
第49図	本土産磁器(近代) 5	95
第50図	本土産磁器(近代) 6	96
第51図	本土産磁器(近代) 7	97
第52図	本土産陶器(近代) 平面分布	98
第53図	本土産陶器(近代)	99
第54図	イチチン文様の変遷	105
第55図	碗類数別 分類比較	106
第56図	沖縄産藍軸陶器 平面分布	107
第57図	沖縄産藍軸陶器1	114
第58図	沖縄産藍軸陶器2	116
第59図	沖縄産藍軸陶器3	118
第60図	沖縄産藍軸陶器4	120
第61図	沖縄産藍軸陶器5	122
第62図	沖縄産藍軸陶器6	124
第63図	沖縄産藍軸陶器7	126
第64図	沖縄産藍軸陶器8	128

第65図	沖縄産無軸陶器(碗)平面分布	133	第119図	白磁3	264
第66図	沖縄産無軸陶器 平面分布	134	第120図	白磁4	266
第67図	沖縄産無軸陶器1	140	第121図	白磁 平面分布1(元・明初/明)	266
第68図	沖縄産無軸陶器2	142	第122図	白磁 平面分布2(清/不明)	267
第69図	沖縄産無軸陶器3	144	第123図	その他の輸入陶磁器1	274
第70図	沖縄産無軸陶器4	146	第124図	その他の輸入陶磁器2	276
第71図	沖縄産無軸陶器5	148	第125図	楊柳陶器 平面分布	285
第72図	沖縄産無軸陶器6	150	第126図	中国産楊柳陶器1	286
第73図	沖縄産無軸陶器7	152	第127図	中国産楊柳陶器2	288
第74図	沖縄産無軸陶器8	154	第128図	中国産楊柳陶器3	290
第75図	沖縄産無軸陶器9	156	第129図	中国産楊柳陶器4・東南アジア産楊柳陶器	292
第76図	陶質土器 平面分布	161	第130図	タイ産楊柳陶器・半埴土器	294
第77図	陶質土器1	162	第131図	カムイヤキ1	298
第78図	陶質土器2	164	第132図	カムイヤキ2	300
第79図	陶質土器3	166	第133図	カムイヤキ 平面分布	301
第80図	瓦質土器 平面分布	169	第134図	底部分類別出土量	304
第81図	瓦質土器(a)	170	第135図	後期土器 平面分布	304
第82図	瓦質土器(b)	172	第136図	グスク土器 平面分布	308
第83図	その他の不明陶器	175	第137図	土器1	310
第84図	本土産磁器(近世)平面分布	177	第138図	土器2	312
第85図	年代別碗・小碗出土量	177	第139図	土器3	314
第86図	肥前系統文様別構成(17C)	177	第140図	土器4	316
第87図	主要器種生産年別出土割合	177	第141図	土器5	318
第88図	本土産磁器(近世)1	180	第142図	土器6	320
第89図	本土産磁器(近世)2	182	第143図	土製品	322
第90図	本土産磁器(近世)3	184	第144図	甕 平面分布	323
第91図	生産年代及び生産地別出土数	184	第145図	甕	324
第92図	本土産陶器(近世)平面分布	188	第146図	銭貨 平面分布	326
第93図	本土産陶器(近世)1	190	第147図	銭貨	328
第94図	本土産陶器(近世)2	192	第148図	円盤状製品 平面分布	330
第95図	本土産陶器(近世)3	194	第149図	種類別使用部位	332
第96図	染付 平面分布	199	第150図	種類別計測値散布図(胴部)	332
第97図	染付1	208	第151図	種類別計測値散布図(底部)	332
第98図	染付2	210	第152図	円盤状製品1	334
第99図	染付3	212	第153図	円盤状製品2	336
第100図	染付4	214	第154図	碗の部位名称	338
第101図	染付5	216	第155図	硯	339
第102図	染付6	218	第156図	煙管 平面分布	340
第103図	染付7	220	第157図	煙管	344
第104図	染付8	222	第158図	滑石製品・石製品・石板	346
第105図	青磁 平面分布1(宋/元・明初)	236	第159図	羽口・鉄滓・焼土・炉壁 重量平面分布	348
第106図	青磁 平面分布2(明/清)	237	第160図	羽口・鉄滓・炉壁	349
第107図	青磁1	238	第161図	埴	350
第108図	青磁2	240	第162図	鉄製品	351
第109図	青磁3	242	第163図	石器 平面分布	352
第110図	青磁4	244	第164図	石斧(完形)長さ×幅の相関	353
第111図	青磁5	246	第165図	石斧 平面分布	355
第112図	青磁6	248	第166図	敲打器類サイズ比較	356
第113図	青磁7	250	第167図	砥石時期別 石質使用状況	358
第114図	青磁8	252	第168図	石質組成(%)	360
第115図	青磁9	254	第169図	器種別石質比率	360
第116図	青磁10	256	第170図	石器1	362
第117図	白磁1	260	第171図	石器2	364
第118図	白磁2	262	第172図	石器3	366

第173図	石器4	368	第192図	祝女殿内屋敷の便所	449
第174図	石器5	370	第193図	祝女殿内屋敷不明建物付近	455
第175図	石器6	372	第194図	遺物 時期別平面分布	456
第176図	石器7	374	第195図	青磁 時期別平面分布	457
第177図	石器8	376	第196図	白磁 時期別平面分布	458
第178図	貝製品 平面分布	379	第197図	染付 時期別平面分布	458
第179図	ヤコウガイの部位の分類	381	第198図	脊椎動物骨 種別平面分布	459
第180図	民俗例	385	第199図	貝製品 種別平面分布	460
第181図	貝製品1	386	第200図	沖縄産陶器・本土産磁器 平面分布	461
第182図	貝製品2	388	第201図	各屋敷における碗・小碗・皿の産地比率	461
第183図	貝製品3	390	第202図	沖縄産無軸陶器(播鉢)平面分布	462
第184図	貝製品4	392	第203図	沖縄産施軸陶器(碗)平面分布	462
第185図	骨製品	394	第204図	中国産磁器 時代・量別出土量	465
第186図	骨製品 平面分布	395	第205図	青磁 時代別変遷	466
第187図	平安山原A遺跡における層準・地区別の脊椎動物遺体の組成(NISP比)	403	第206図	白磁 時代別変遷	468
第188図	平安山原A遺跡 貝類遺体分析地区名	422	第207図	染付 時代別変遷	469
第189図	優先種のサイズ組成変化	423	第208図	沖縄産施軸陶器 分類	470
第190図	下層確認トレンチ	441	第209図	時代別出土遺物変遷	471
第191図	下層確認箇所	441	第210図	型紙地紋 地区・屋敷別比較	475
			第211図	円盤状製品 遺跡別比較	476

表目次

第1表	北谷町遺跡一覧	10	第31表	碗Ⅳ類(屋敷別)出土量	107
第2表	基本層序土層注記一覧	29	第32表	沖縄産施軸陶器 観察一覧	108
第3表	検出された平安山の屋敷	31	第33表	播鉢(口縁・頭部)分類	131
第4表	1面目 井戸一覧	39	第34表	沖縄産無軸陶器 出土量	134
第5表	1面目 石組遺構一覧	42	第35表	屋敷別 遺物出土量	134
第6表	1面目 遺構共存遺物 観察一覧	44	第36表	沖縄産無軸陶器 観察一覧	135
第7表	近代銭貨一覧	45	第37表	沖縄産無軸陶器(播鉢)観察一覧	138
第8表	近代金属製品一覧	48	第38表	陶質土器 観察一覧	159
第9表	主要なガラス瓶一覧	50	第39表	陶質土器 出土量	161
第10表	近代円盤状製品 観察一覧	51	第40表	屋敷別遺物 出土量	161
第11表	近代骨製品 観察一覧	52	第41表	瓦質土器(a)出土量	168
第12表	石臼 観察一覧	55	第42表	瓦質土器(a)観察一覧	168
第13表	瓦 出土量	57	第43表	瓦質土器(b)出土量	169
第14表	瓦二次製品 出土量	59	第44表	瓦質土器(b)観察一覧	169
第15表	瓦二次製品 観察一覧	59	第45表	その他の不明陶器 出土量	174
第16表	人骨出土地点	68	第46表	その他の不明陶器 観察一覧	174
第17表	土坑・ピット一覧	69	第47表	本土産磁器(近世)出土量	177
第18表	遺物 出土量	81	第48表	本土産磁器(近世)観察一覧	178
第19表	産地別 出土量	83	第49表	本土産陶器(近世)観察一覧	186
第20表	型紙文様別 出土個体数	84	第50表	本土産陶器(近世)出土量	189
第21表	銅板転写文様別 出土個体数	85	第51表	内野山産碗使用軸葉別出土量	189
第22表	本土産磁器(近代)出土量	86	第52表	染付碗分類	196
第23表	技法別 出土量	86	第53表	染付皿分類	198
第24表	屋敷別 主要器種出土量	87	第54表	染付碗 出土量	199
第25表	本土産磁器(近代)観察一覧	87	第55表	染付皿 出土量	199
第26表	皿技法別 出土量	90	第56表	染付(その他)出土量	200
第27表	産地別器種 出土量	98	第57表	染付(碗・皿)観察一覧	200
第28表	本土産陶器(近代)観察一覧	98	第58表	染付(その他)観察一覧	206
第29表	沖縄産施軸陶器 出土量	106	第59表	青磁(碗・皿)観察一覧	228
第30表	屋敷別 出土量	106	第60表	青磁(その他)観察一覧	233

第61表	青磁(皿)出土量	235
第62表	青磁(その他)出土量	235
第63表	青磁(碗)出土量	236
第64表	白磁 出土量	266
第65表	白磁 観察一覧	268
第66表	その他の輸入陶磁器 出土量	272
第67表	その他の輸入陶磁器 観察一覧	273
第68表	褐釉陶器 出土量	281
第69表	中国・東南アジア産褐釉陶器 観察一覧	282
第70表	タイ産褐釉陶器・半練土器 観察一覧	285
第71表	カムイヤキ 観察一覧	297
第72表	カムイヤキ 出土量	301
第73表	土器全体 出土量	302
第74表	後期土器(口縁部・胴部)観察一覧	303
第75表	くびれ平底 底径・底厚の関係	304
第76表	後期土器(底部)観察一覧	305
第77表	グスク土器(胴部)胎土分類別出土量	307
第78表	グスク土器(口縁部・胴部)観察一覧	307
第79表	グスク土器(底部)観察一覧	308
第80表	先島系土器 観察一覧	309
第81表	土製品 出土量	321
第82表	土製品 観察一覧	321
第83表	甕 出土量	323
第84表	甕 観察一覧	325
第85表	銭貨 出土量	326
第86表	銭貨 観察一覧	327
第87表	円盤状製品 出土量	330
第88表	屋敷別遺物 出土量	331
第89表	円盤状製品 観察一覧	333
第90表	硯 出土量	338
第91表	硯 観察一覧	338
第92表	煙管 出土量	340
第93表	煙管 屋敷別出土量	341
第94表	雁字煙管(雁首)観察一覧	343
第95表	雁字煙管(吸口)観察一覧	343
第96表	延べ煙管 観察一覧	343
第97表	滑石製品・石製品・石板 観察一覧	346
第98表	鍛冶関連遺物 出土量	348
第99表	埴 観察一覧	350
第100表	鉄製品 観察一覧	351
第101表	石器 出土量	352
第102表	石斧 形態別分類	353
第103表	石斧 観察一覧	354
第104表	礫石・礫石兼磨石・磨石 観察一覧	356
第105表	グアニ石 観察一覧	357
第106表	砥石形態別 使用面比較	358

第107表	砥石 観察一覧	359
第108表	大形イモガイ大きさ(殻径)別出土量	378
第109表	貝輪・円盤・巻貝・札状 観察一覧	378
第110表	貝製品 出土量	379
第111表	ゴホク・アツソデガイ製品・素材貝 観察一覧	380
第112表	ヤコウガイ未製品・自然貝分類別出土量	381
第113表	ヤコウガイ環状・匙 観察一覧	381
第114表	ホラガイ・ヤコウガイ容器 観察一覧	381
第115表	蠟蓋製利器・貝刀・貝包丁 観察一覧	382
第116表	二枚貝有孔製品 観察一覧	382
第117表	二枚貝有孔製品(孔位置)出土量	383
第118表	二枚貝有孔製品(重量別)出土量	383
第119表	ヤコウガイ貝匙(断面)観察一覧	383
第120表	タカラガイ製品出土量	384
第121表	タカラガイ製品 観察一覧	384
第122表	マガキガイ製品 観察一覧	384
第123表	巻貝粗孔製品 観察一覧	385
第124表	骨製品 出土量	394
第125表	骨製品 観察一覧	394
第126表	平安山原A遺跡から採集された脊椎動物遺体の種名一覧	397
第127表	平安山原A遺跡における脊椎動物遺体の組成(NISP)	398
第128表	平安山原A遺跡におけるリュウキュウシラトリとマガキガイの頻度	409
第129表	平安山原A遺跡出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型	410
第130表	平安山原A遺跡から得られた貝類遺体の同定標本数	412
第131表	平安山原A遺跡出土人骨の四肢骨計測値	430
第132表	平安山原A遺跡出土散乱人骨一覧	431
第133表	平安山原A遺跡の放射性炭素年代測定結果	433
第134表	平安山原A遺跡の暦年較正結果	433
第135表	平安山原A遺跡の種実同定結果	435
第136表	平安山原A遺跡の主な種実遺体の計測値	437
第137表	放射性炭素年代測定結果	439
第138表	暦年較正結果	440
第139表	各屋敷出土のガラス瓶	461
第140表	遺跡別主な遺物 出土量	463
第141表	砥石 遺跡・石質別出土量	464
第142表	中国産磁器 時代・器種別出土量	465
第143表	馬蹄形埴戸 出土遺跡一覧	475

CD収録

第144表	平安山原A遺跡から採集された魚類遺体の同定結果
第145表	平安山原A遺跡から採集された両生類・爬虫類・鳥類遺体の同定結果
第146表	平安山原A遺跡から採集された哺乳類遺体の同定結果
第147表	平安山原A遺跡遺物台帳(HA①・HA②・HA③・HA④)

第 I 章 調査経緯・経過

第 1 節 調査に至る経緯

本報告書は、桑江伊平土地区画整理事業に係る記録保存目的の緊急発掘調査成果をまとめたものである。

平安山原 A 遺跡は、平成 15 年 3 月に返還された在沖米海軍基地（キャンプ桑江北側地区）内に位置し、平成 7～9 年度¹及び平成 20 年度²に行った試掘調査で発見された「周知の埋蔵文化財」である。試掘調査の経緯等についてはここでは割愛し、緊急発掘調査に至った経緯を以下に記述する。

キャンプ桑江北側地区は本町でも数少ない平坦地であり、かつ、地理的に本町の中心部であることから、返還以前から町の中核ゾーンとして職住近接型の都市環境の創出及び地域活性化を図る計画がなされていた³。国道 58 号に東接する同地区は国道よりも地盤が低く、大雨時に度々冠水していたことから、左記現象を解消するため盛土による造成工事が計画された。事業地内の造成高は一様でないものの、埋蔵文化財に悪影響を及ぼす規模であった。

平成 11 年 9 月 14 日から平成 12 年 10 月 27 日にかけて、政府関係機関、沖縄県並びに北谷町による「キャンプ桑江北側地区跡地利用支援関係機関連絡会議（以下「連絡会議」という。）」が延べ 10 回開かれた。これらの会議を経て、同地区における埋蔵文化財は造成工事に先立ち緊急発掘調査を行う方向となった⁴。

平成 15 年 3 月 15 日には「桑江伊平土地区画整理事業」が事業認可され、平成 16 年 10 月 27 日、北谷町教育委員会は桑江伊平土地区画整理事業施行区域における埋蔵文化財の取扱いについて北谷町と協定を締結。平安山原 A 遺跡の規模、職員体制等から分割して調査を行うことにした（平成 19 年度から 23 年度にかけ計 5 回実施）。

町教育委員会においては、専門員の事務負担量が著しく増大していたため、発掘調査に係る諸作業の軽減を図る目的で、現地調査の測量、発掘作業員の手配等を民間業者に委託した。文化財保護法に係る諸手続きは下表のとおり。

遺跡名 調査区名	項目	文書番号 / 年月日	文化財保護法
平安山原 A 遺跡	発掘通知 発掘通知（進達） 土木工事等について（通知）	北区 18 第 3521 号 / 平成 18 年 8 月 28 日 北教社 18 第 1849 号 / 平成 18 年 9 月 14 日 教文第 1034 号 / 平成 18 年 10 月 2 日	94 条第 1 項
平安山原 A 遺跡 （その 1）	着手届	北教社 19 第 3566 号 / 平成 20 年 3 月 25 日	
	終了報告	北教社 20 第 988 号 / 平成 20 年 6 月 27 日	
平安山原 A 遺跡 （その 2）	着手届	北教社 21 第 2402 号 / 平成 21 年 10 月 27 日	
	終了報告	北教社 21 第 2402 号 / 平成 22 年 3 月 16 日	
平安山原 A 遺跡	範囲等変更（報告） 範囲等変更（回答）	北教社 22 第 1100 号 / 平成 22 年 6 月 21 日 教文第 635 号 / 平成 22 年 6 月 30 日	
平安山原 A 遺跡 （その 3）	着手届	北教社 22 第 1129 号 / 平成 22 年 6 月 24 日	99 条第 1 項
	終了報告	北教社 22 第 2537 号 / 平成 22 年 10 月 6 日	
平安山原 A 遺跡 （油分その 2）	着手届	北教社 22 第 1129 号 / 平成 23 年 1 月 5 日	
	終了報告	北教社 22 第 2537 号 / 平成 23 年 3 月 16 日	
平安山原 A 遺跡 （その 4）	着手届	北教社 23 第 1926 号 / 平成 23 年 8 月 16 日	
	終了報告	北教社 23 第 4496 号 / 平成 24 年 2 月 29 日	

第2節 調査体制

事業主体	教 育 長	瑞慶覧 朝宏 (平成19年度)
	同	比嘉 秀夫 (平成21～23年度)
	同	川上 啓一 (平成27年度)
事業総括	教 育 次 長	謝花 良継 (平成19・21年度)
	同	大城 操 (平成22・23年度)
	同	佐久本 盛正 (平成27年度)
	社会教育課長	大城 操 (平成19・21年度)
	同	知念 喜忠 (平成22・23年度)
調査総括	同	比嘉 敬文 (平成27年度)
	文 化 係 長	中村 暁 (平成19年度)
	同	嘉陽田 朝栄 (平成19・21～23年度)
調査担当	同	米須 健 (平成27年度)
	主 任 主 事	山城 安生 (平成19・21～23・27年度)
	同	東門 研治 (平成19・21～23・27年度)
	同	松原 哲志 (平成19・21～23・27年度)
	同	島袋 春美 (平成27年度)

資料整理作業員

(平成27年度)

嘱託 上地 千賀子、上間 真寿美、大城 光、金城 綾乃、呉屋 広江、佐久間 クリエ、曾木 菊枝
 知念 栄子、照屋 元子、富平 砂綾子、西原 美草、東 順子、比嘉 優子、山城 小百合
 臨時 新川 弘美、池原 辰樹、泉 恵子、伊波 弘子、大城 明香、崎濱 あすか、知花 良枝、照屋 朝子
 仲里 亜希子、仲宗根 円華、仲宗根 学、仲村渠 恵子、仲村渠 容子、又吉 朋子

調査指導及び助言（敬称略、所属は当時）

沖縄県教育庁文化財課	島袋 洋、田場 直樹
沖縄県立博物館・美術館	藤田 祐樹、片桐 千亜紀、山崎 真治
奥松島縄文村歴史資料館	岡村 道雄
鹿児島大学埋蔵文化財センター	新里 貴之
史跡鴻池新田会所管理事務所	松田 順一郎
樹昌院	喜瀬 了心
千葉県立中央博物館	黒住 耐二
北谷町文化財調査審議委員	知念 勇、大城 逸朗、高江洲 敦子
東京大学大学院新領域創成科学研究科	辻 誠一郎
琉球大学医学部	土肥 直美
早稲田大学教育学部	樋泉 岳二
佐賀県立九州陶磁文化館	大橋 康二

聞き取り調査協力

旧平安山集落 照屋 文吉（大正9年生）、玉城 清松（昭和10年生）

委託業務

年度	内容	委託名称	受託業者(当時)
H19	発掘調査 700㎡	平安山原A遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託	国際航業㈱
H21	発掘調査 2,400㎡	平安山原A遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託(その2)	㈱バスコ 沖繩支店
H22	発掘調査 3,500㎡	平安山原A遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託(その3)	㈱埋蔵文化財サポートシステム
	発掘調査 400㎡	平安山原A遺跡(油分地区)埋蔵文化財発掘調査業務委託(その2)	㈱アーキジオ沖繩
H23	発掘調査 3,700㎡	平安山原A遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託(その4)	㈱アーキジオ沖繩
H25	保存処理 1点	金属製品保存処理業務委託	㈱文化財サービス
H26	年代測定 7点	平安山原A遺跡ピーチロックの放射性炭素年代測定業務委託	バリノ・サーヴェイ㈱
	科学分析 5点	平安山原A・B・C遺跡の自然科学分析業務委託	バリノ・サーヴェイ㈱
H27	保存処理 1点	金属製品保存処理業務委託	㈱文化財サービス

第3節 調査経過

発掘作業

平成19年度(平成20年1月7日～2月29日)

1月7日から草刈り、磁気探査を実施。異常点が認められるも不発弾等の危険物は無く表土掘削に着手。隣接地には別事業の調査区(油分地区)が接し、土中に含まれる油臭・油分処理を行いつつ発掘調査を実施していた。両調査区における雨水・湧水が一緒くたになるため、油分地区とまとめて排水処理を行う。10日、表土下1mの経層調査中に不発弾(105mm榴弾砲2発、同莖菜2個、爆薬2箱)を確認。11日、陸上自衛隊が処理のため来跡(2月13日回収)。15日から作業員を投入し自然流路と石列を検出。22日には高所作業車を用い全景撮影、以後、図化作業と並行して流路埋土の掘削を行う。流路は概ね上層がカワニナを含む粘質シルト、下層は枝サンゴを含む粗砂を呈し、下層出土の遺物から埋没期はガスク時代以降と想定された。また、層理面から下層にかけて杭痕が見られ、上層の堆積に人為的関与が窺えた。流路底面には一見コンクリートと見紛うピーチロックが広がっており、下層調査の結果、調査区全体に広がっていることを確認。2月18日に完掘状況を撮影。調査期間中、管理濃度を超過するヘキサンが度々確認され安全管理上作業を中断することもあったが、29日には現地調査を完了し19年度の調査を終えた。

平成21年度(平成21年10月1日～2月25日)

10月13日から草刈り、16日から磁気探査を開始。異常点が多数認められるも不発弾等の危険物は無く、21日から表土掘削に着手。遺構面よりも深く攪乱されている箇所は重機で攪乱土を除去しつつ、28日から作業員を投入し戦前の遺構検出を行う。屋敷に伴う石積み・石列等は部分的に崩壊しているものの、配置、形状が判る状態であった。11月9日には旧平安山集落出身者を遺跡に招いて聞き取りを行い、当時の様子について貴重な言質を得る事が出来た。12日、ノロ殿内跡から底部に「平」と墨書された磁器が出土。平安山ノロの祭祀具と想定された。その他屋敷跡からは中身の入った壺や柳行李が出土する等、戦災を避けるため埋納された遺物が多数出土した。12月14日にはラジヘリを用いて検出状況の全景撮影を実施、翌15日には写真測量及びレーザー測量を行う。4日に続き16、17日に人骨を検出。以後人骨の出土は相次ぎ、最終的には11号まで確認。土肥氏、藤田氏を適宜招聘し指導助言を受け、これらの人骨は貝塚時代後期のものと判断された。1月20、21日に高所作業車を用いて写真撮影。ノロ殿内を始めとする居住域は近世から間断なく機能しており、時期毎の分層は困難であった。また遺構が多く調査に時間を要したため、1月29日に改定契約を行い2月25日まで工期を変更した。2月11日からは図化を終えた石積み等を除去。24日には井戸2基を半掘し、底面でピーチロックを確認した。25日には重機により下層確認を行い21年度の調査を終了した。

平成22年度（HA③：平成22年8月19日～2月21日、油分2：平成22年10月15日～11月12日）

平成22年度は2カ所にて調査を行った。先に着手したHA③は、平成20年度の試掘調査で遺跡の範囲変更が行われた箇所である。赤土等流出防止に係る許可後の9月27日から調査始動。まず残土置き場確保のため、調査対象地に残る基地建設後の盛土を掘削し、その土砂で21年度の調査区を埋め戻した。掘削深度は基地機能時の地盤高までとし、埋め戻しの際は深度30cm毎にタイヤローラーで転圧し、締固め検査を実施した。10月4日に表層探査、16日に経層探査を行い、埋設管や葉莢、鉄クズ等を確認。沖縄防衛局との協議により、これらは局で撤去することとなった。11月1日人力掘削開始。戦前の包含層掘削、遺構検出を行う。12月4日遺構検出状況をラジヘリにて撮影。以後、図化作業と並行して遺構掘削を行う。2月4～5日、ラジヘリにて全景撮影。6日から下層確認調査を行い、21日にHA③の調査は終了した。

油分2は、沖縄防衛局による油分含有土壌の改良工事と並行して行われていた文化財調査（油分1）の追加調査である。油分1では、安全管理上の観点から油分の含有深度内で発掘調査は実施せず、土壌改良後の土砂から遺物採集のみ行った。工事による掘削深度の浅い箇所では遺構が残存したため、急速区画整理事業の一環で油分2の調査を実施した。包含層及び遺構検出面は工事で削平されていたため、10月18日に高所作業車を用いて調査前状況の撮影を行い、直ぐさま図化作業に着手。遺構は、切り合いや埋土の濃淡から概ね3時期が混在し、遺構内から青磁、染付、本土磁器、沖縄産施釉陶器等が出土した。11月1～3日に完掘状況を撮影、下層確認後、12日に油分2の調査を終了した。

平成23年度（平成23年7月19日～1月31日）

23年度は工事に追われながらの調査となった。7月20日、前年度とは異なる土壌改良工事が間近に控えている調査区南側の作業方針について工事関係者と現地調整。調査面積は小さく遺構も希薄であり、29日には下層確認まで終え現場を引き渡した。他地区は8月16日から表層探査、23日から確認探査を行う。探査では、81mm迫撃砲弾1発、小銃弾・機関銃弾計600発以上、砲莢葉莢16個が断続的に発見され、全て自衛隊及び警察が回収した。29日表土掘削開始。31日、調査区西側に設置されるボックスカルバートの影響範囲について工事関係者と現地調整。西側を優先的に調査し、10月中旬に現場を引き渡すこととした。9月8日から作業員を投入。西側においては、10月7日戦前遺構完掘、25日グスク～近世遺構を完掘し現場を引き渡した。11月11日、現場への迂回路完成を受け未調査地に着手。磁気探査中、油臭に伴ってドラム缶や英語表記の空き缶等が多量に見えられ沖縄防衛局に確認を依頼。関係部署も交えて調整し、遺構も残存していないことから現場を防衛局へ引き渡した。この間、細切れになっている他調査区も段階的に調査を進め、11月下旬には戦前の調査を概ね終了。グスク～近世は遺構が多く天候不順により調査に時間を要したため、1月6日改定契約を行い31日まで工期を延長。遺構には特異な埋葬人骨が出土。関係者を招き指導助言を得た。28日には完掘全景を撮影後、下層調査を実施し調査終了。これにより23年度の調査及び平安山原A遺跡の全ての現地調査は終了した。

整理作業

平成27年度

出土遺物量は、標準的な遺物コンテナ（60cm×40cm×10cm）700箱、土嚢袋179袋であった。整理作業は現場作業の雨天時を利用して遺物の洗浄・乾燥及び脆弱遺物の強化を行い、本格的な作業は現地調査終了後の平成27年度から開始。出土遺物はナンバリング後、分類接合作業を行い主な資料を実測、デジタルトレスした。現場作業時に手実測、CAD化された遺構図等は、イラストレーターデータに変換後デジタルトレスを行った。報告書掲載写真はデジタルカメラ（1200万画素）で撮影したものを、35mmフィルムカメラの資料はアルバムにて整理・保管した。現場作業中に採取した炭化物等の理化学分析や保存処理は専門機関へ業務委託し、陶磁器・土器や石器、人骨等の同定は有識者へ依頼した。

註1 北谷町教育委員会2005『キャンパス桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—』

註2 北谷町教育委員会2011『平安山原地区試掘調査—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—』

註3 返還に先立つ平成10年3月には、共同使用という形態で北谷町役場新庁舎がキャンパス桑江北側地区内に建設されている。

註4 伊礼原遺跡（当時は伊礼原A遺跡、伊礼原C遺跡と呼称）は現地保存し、平成22年2月22日に約17,000㎡が国史跡に指定された。



土器接合・分類



遺物ラベル分類・整理



動物骨分類



遺物実測



遺物写真撮影



遺物集計表入力



デジタル図版作成



原稿編集・校正

図版1 整理作業風景

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

(1) 北谷町の位置と概要

北谷町は沖縄島中部の西海岸、県都那覇市から北東約16kmに位置している。北に嘉手納町、東に沖縄市と北中城村、南に宜野湾市と接し、西は全域が東シナ海に面し彼方に慶良間諸島が眺望される。町の総面積は13.93km²で、南北約6km、東西約4.3kmの長方形をなし、ほぼ中心(北緯26度18分58秒、東経127度45分55秒)に町役場は位置する。

2015(平成27)年12月末現在の人口は約29,093人で、現在進められている桑江伊平土地区画整理事業開始前(平成15年12月末)の26,358人に比べ2,735人増え、約1割増となっている。今後も公有水面埋立地の利用や返還軍用地の跡地利用に伴って、一層の人口増加が見込まれている。

本町は、米軍基地の多い沖縄県内においても基地占有率が3番目に高い自治体で(町総面積における軍用地の比率は52.3%)、基地の殆どは利便性に富む国道58号沿いの平地に集中している。そのため土地利用上大きな制約があり、丘陵台地からなる東部地域と海岸低地や埋立地の広がる西海岸地域の狭小な町土で、まちづくりや生活環境整備が行われている。

産業は、西海岸地域を中心に第三次産業の割合が大きく今後の伸びも予測されている一方、第一次・第二次産業は減少傾向にある。現在は、都市との共生・交流を目指したフィッシャリーナ整備事業や自然海製塩事業など、地域特性を生かした新しい地場産業の創出に取り組んでいる。

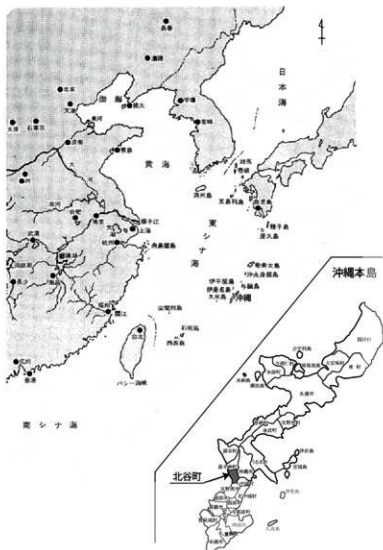
交通網は、那覇市から本島北部へ延びる主要幹線道路の国道58号が西海岸側を縦断し、町域北側より県道23号線・24号線・130号線がそれぞれ国道58号以东へ延び、概して交通の便に恵まれている。近年では、国道58号渋滞緩和のための道路拡幅や県道24号線のバイパス整備が進められている。

(2) 自然的環境

本町の気候は亜熱帯海洋性に属し、四季を通して温暖である。年平均気温は22度程度、年平均湿度は77%前後で、冬の期間が極めて短い。年降水量は2,000から3,000mmと多雨で、特に5月中旬から6月下旬の梅雨期と8～10月の台風期に集中する。

本町の地形を概観すると、町の北西-南東方向に走る桑江断層を大きな境とし、東高西低の様相を呈している。東・南部では標高100m以上、100～50m、50～30mの段丘地形が見られ、侵食が進んだ台地は起伏に富んだ地形を成し、北部では、洞穴やドリーネ・石灰岩堤・石灰岩丘等のカルスト地形が発達している。西部には低地及び海浜が見られ、海岸低地のほとんどは埋立地や人工ビーチとなっており、僅かに自然海浜が残る。主な河川には、白比川・普天蘭川の二級河川があり、東シナ海へ向け西流している。

表層地質は、基盤の第三期中新世末から鮮新



第1図 北谷町の位置

世の島尻層群を第四期更新世の琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆っている。琉球層群は非石灰質の国頭礫層と石灰質の琉球石灰岩層からなり、前者は沖縄本島北部、後者は中・南部に分布する。本町は国頭礫層の南限となり、基盤の影響を受けて酸性化した土壌（国頭マージ）が確認される。水理地質は、基盤のシルト質粘土層が不透水層となり、これを不整合で覆う琉球石灰岩層中の砂質石灰岩が本町一帯に分布している。石灰岩層は多孔質で透水性がよく、帯水層となり不整合部の各所で湧出している。

植生は、沖縄島北部に生育するイタジイ・イジュ・ヤマモモ等と、中南部に生息するアカガシ・オオバギ・ヤブニッケイ等が混生し、学術的にも貴重な地域となっている。森林は、嘉手納基地内やその周辺・庁舎北側の丘陵地・北谷城周辺、河川流域に比較的良好に残るものの、その割合は町土の7%と決して高くない（2006年4月現在）。動物相は、良好な植生が残っている場所を中心に、鳥類4目9科14種、爬虫類1目4科6種、両生類1目3科3種、大型土壌動物14目1,411種の個体が確認されている。また、2000（平成12）年に行われた動物調査では、希少性の高い哺乳類のオリイオオコウモリ、鳥類のミフズラ、昆虫類のクロイワゼミ等を含む陸棲動物や、海域・汽水域・河川域で多様な水棲動物が確認されている（北谷町教育委員会、2005）。

第2節 歴史的環境

本町では、平成28年1月現在で54遺跡が確認されている。以下に各時代の歴史的環境を概観する。

(1) 先史時代

先史時代に属する遺跡は主に西海岸に集中している。町内最古の遺跡（旧石器時代）である鹿化石出土地と桃原洞穴遺跡は、町東側の台地上に位置している。桃原洞穴遺跡からは化石人骨（約16,000年前）が発見されたこととされているが、近年の研究では中世または近世初めの可能性が指摘されている。

貝塚時代前I～V期（縄文時代相当期）の主な遺跡には伊礼原遺跡・伊礼原E遺跡・砂辺貝塚・クマヤー洞穴遺跡が挙げられる。伊礼原遺跡は本町のほぼ中心に位置し、ウーチヌカーと呼ばれる湧水を源とする低湿地区と砂丘区からなる。貝塚時代前I期から戦前に至るまでの複合遺跡である。低湿地区では古環境の復元が可能な程の植物遺体や、県内最古となる芥を伴う貯蔵穴が発見された。砂丘区では高波によって砂丘と居住地が侵食され、その後の砂丘の回復と共に居住域が拡大していく様子が確認された。出土遺物は、約7,000～6,000年前の爪形文土器から戦前までの長期に亘り、なかには九州の曾畑式土器や糸魚川産のヒスイ等、海を渡ってもたらされた遺物も確認された。この様に重要な発見が相次いでいることから、本遺跡は2010（平成22）年に国史跡に指定されている。伊礼原E遺跡は伊礼原遺跡の南に位置し、貝塚時代前IV期頃に遺跡の西側が津波により侵食され、伊礼原遺跡同様、自然災害に見舞われていたことが判明した。砂辺貝塚とクマヤー洞穴遺跡は本町の北西に位置し、前者からは前IV期の方形住居跡が、後者からは前V期の改葬人骨が検出されている。

貝塚時代後期（弥生～平安並行期）から古スク時代の代表遺跡には小堀原遺跡と後兼久原遺跡が挙げられる。前者は町役場の北西100mに位置し、県内最古の年代値（10～12世紀）を示す大麦・稲・アワが発見された。後者は町役場建設の際に緊急発掘調査が行われ、12世紀初頭の住居と高倉がセットで検出されたほか、同時期の畠址や埋葬人骨が発見された。両遺跡は、狩猟採集社会（貝塚時代）から農耕社会（古スク時代）への移行期に当たり、古スク時代の成り立ちを考える上で重要な遺跡である。

(2) 古スク時代・古琉球

本町における古スク時代の代表的な遺跡には北谷城が挙げられる。町役場から南へ約1.3kmの石灰岩丘陵上に立地する北谷城は本町で唯一残存する古スクで、発掘調査成果から12世紀に始まり、14世紀後半から15世紀中頃に石垣が構築され、15世紀後半に終焉を迎えたと考えられている。北谷城に関しての明確な記録はなく、金満按司や大川按司、谷茶按司の3系統の興亡があったと伝えられているが伝承の域を出ない。その他の言い伝えとしては、1609年の薩摩侵攻時に薩摩豊佐敷興道が北谷城に守備隊として配されたが、首里陥落の報を聞き自刃したという話が残っている。

「北谷」とは、いつからそう呼ばれるようになったか定かではないが、嘉靖年間（1522～1566年）の倉姓大家家譜中に「北谷間切平安山頭職」の文字が見られることから、古琉球には北谷という地名が存在していたようである。また、1577年に琉球国王が地方役人に給した辞令書に「きたたんまきり」と見られることから、当時は北谷を「きたたん」と読んでいたようである。その後「きたたん」は「きちやたん」から「ちちやたん」へと少しずつ言語上変化し、現在の「ちやたん」となっている。

(3) 近世

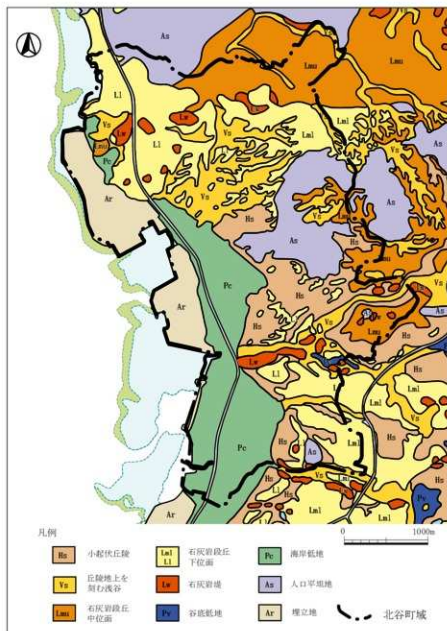
1649年に作成された『絵図郷村帳』をみると、近世の北谷間切には、北谷・くわい（現在の桑江）・平安山・すなへ（砂辺）・野国・屋郎（屋良）・賀手納（嘉手納）・山内・あきな（安仁屋）の9つの村があったことが分かる。1660～1670年代には間切の分割・新設に伴って、山内が越來間切に、あきなが宜野湾間切に割かれ、新たに玉代勢・伝道・伊礼・浜川・野里が誕生し、計12村となって近代まで引き継がれた。1700年代前半になると首里の士族層が地方へ下り、屋取として生活し始める。北谷は屋取が多い地域で、上勢頭古墓群や大作原古墓群は屋取集落の人々によって作られたものである。近世末期の1840年には、北谷沖にイギリス商船のインディアン・オーク号が座礁する事件が起こる。北谷間切の人々は同船の乗組員全員を救助・保護したほか、ジャンク船を建造・提供するなど、当時異国船打払令が発令されていた日本において異例の対応を取った。この事件後、英国では琉球人のことを「善きサマリア人」と称すようになった。この事件をきっかけに2000年の沖縄サミットでは英国のブレア首相（当時）が北谷町を訪問し、その後、北谷・英国間での語学留学が開催されるに至った。インディアン・オーク号座礁地では、当時の積み荷の一部が今も海底に残され、海底遺跡として位置付けられている。

(4) 近代・現代

1908（明治41）年に施行された島嶼町村制以後、北谷間切は北谷村きたたにとなった。戦前は水田の広がる農村として栄えていたが先の大戦で焦土と化し、沖縄戦や戦後の米軍基地建設により地形は大きく改変された。米軍上陸直前に守備隊が建設した特攻艇秘匿壕は、北谷城が立地する丘陵北側に現在も残されている。戦後は村全域が米軍の軍事占領下に置かれ、中でも嘉手納基地の存在は村を南北に二分し行政執行に支障をきたす要因となった。これらを受け、1948（昭和23）年には北谷村と嘉手納村に分村し、1980（昭和55）年には北谷村から北谷町へと町制移行した。県下でも近代化に積極的だった平安山集落もその面影はなくなり、キャンプ桑江北側返還の2003（平成15）年までバスターミナルや作業ヤードであった。その影響か、地中には油分等の汚染物質が含まれ、2004（平成16）年・2010（平成22）年には土壌改良工事が沖縄防衛局により実施された。その後も汚染箇所が確認され、2015（平成27）年現在未だ処理継続中であり、まちづくりに少なからぬ影響を与えている。

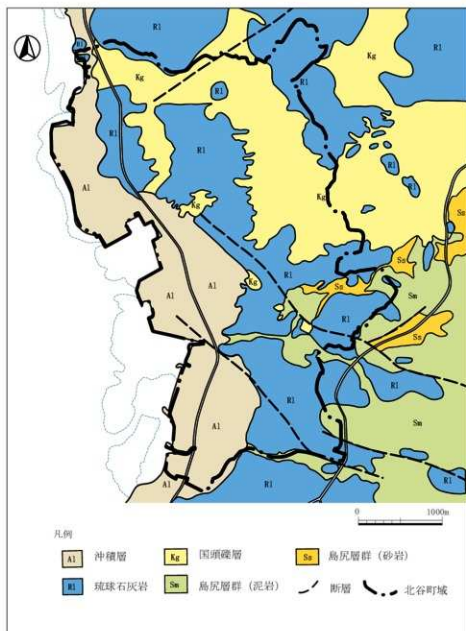
<引用・参考文献>

- 北谷町役場 1986 『北谷町史 第2巻 資料編1 前近代・近代文献資料』
 北谷町教育委員会 1994 『北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書—』北谷町文化財調査報告書 第14集
 北谷町役場 1994 『北谷町史 第3巻 資料編2 民俗下』
 沖縄県立博物館 2002 『沖縄県立博物館復館30周年記念特別展 港川人展～元祖ウチナーンチュ～』
 北谷町教育委員会 2005 『北谷町史 第1巻 通史編』
 北谷町教育委員会 2005 『キャンプ桑江返還に伴う試掘調査』北谷町文化財調査報告書 第23集
 北谷町教育委員会 2006 『北谷町の地名—戦前の北谷の姿—』北谷町文化財調査報告書 第24集
 北谷町教育委員会 2007 『伊礼原遺跡—伊礼原B遺跡ほか発掘調査—』北谷町文化財調査報告書 第26集
 北谷町教育委員会 2008 『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』北谷町文化財調査報告書 第27集
 北谷町教育委員会 2010 『伊礼原E遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査（平成16・17年度）—』北谷町文化財調査報告書 第31集



第2図 北谷町周辺の地形分類

上図は『土地分類基本調査 沖縄本島北部 5万分の1』を一部抜粋し、改変・トレース



第3図 北谷町周辺の地層地質分類

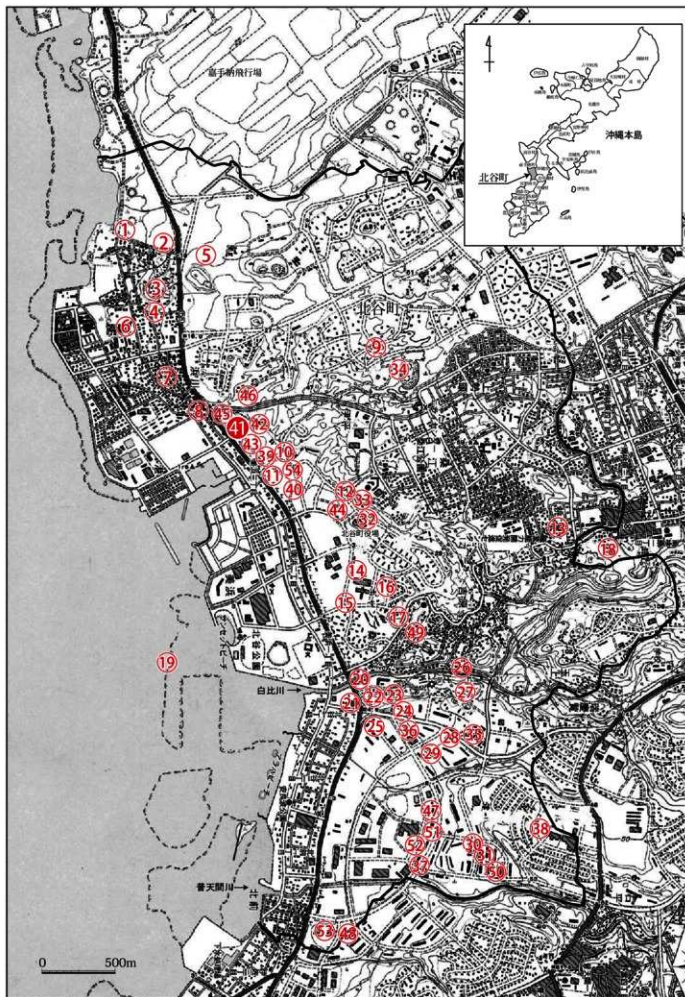
上図は『土地分類基本調査 沖縄本島中南部地域 5万分の1』を一部抜粋し、改変・トレース

第1表 北谷町遺跡一覧

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなべ) サーク原貝塚	貝塚後期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	貝塚前IV期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	貝塚前IV期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	貝塚後期	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	貝塚前V期	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	貝塚前II期～戦前	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山(はまがわせんぼるいむやま) 遺物散布地	貝塚前V期	字浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	貝塚後期	字浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しもせどくこぼくん)	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いれいばる) 遺跡	貝塚前I期～戦前	字伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	貝塚I～V期・晩期・近世・戦前	字伊平伊礼原
12	桑江ノ殿(くわえのとうん) 遺物散布地	グスク～近世	字桑江小堀原
13	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
14	前原古島(めいばるふるじま) A遺跡	近世	字桑江桑江原・前原
15	前原古島B遺跡	近世	字桑江前原
16	伊地差久原(いじさくばる) 古墓	近世	字桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	字桑江前原
18	桃原(とうばる) 洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の座敷地	近世	字北谷地先
20	池(いち) グスク	グスク	字吉原東宇地原・西宇地原
21	白比川(しらひがわ) 河口遺物散布地	貝塚前II期	字北谷西表原
22	北谷城(ちゃたんぐすく) 遺跡群	貝塚後期末～グスク	字大村城原
23	北谷城	貝塚後期末～近世	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	貝塚後期～グスク	字大村城原
25	北谷番所址	近世	字北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしほらあがりちめまたばる) 遺物散布地	グスク	字吉原東角双原・西角双原
27	山川原(やまがーばる) 古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原(たまよせばる) 遺跡	貝塚後期末～グスク	字大村玉代勢原
29	長老山(ちやうろうやま) 遺物散布地	グスク～近世	字大村玉代勢原
30	大道原(うふどうばる) A遺跡	グスク	字北谷大道原
31	大道原B遺跡	貝塚前V期	字北谷大道原
32	後兼久原(くしかにくばる) 遺跡	グスク	字桑江後兼久原・字桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	字桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いりーいむいばる) 遺跡	グスク	字上勢頭伊礼伊森原
35	後原(くしばる) 遺跡	グスク～近世	字大村玉代勢原
36	堀川原(すーがーばる) 遺跡	グスク	字北谷堀川原
37	稲千原(んにふしばる) 遺跡	貝塚後期	字北前稲千原
38	横高原(よこたけばる) 遺跡	グスク	字北前横高原
39	伊礼原D遺跡	貝塚後期～近世	字伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	貝塚前II期～近世	字伊平伊礼原
41	平安山原(はんざんばる) A遺跡	貝塚後期～近世	字伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	貝塚後期～近世・戦前	字伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	貝塚後期～近世	字伊平平安山原
44	小堀原(くいばる) 遺跡	貝塚後期～近世	字桑江小堀原
45	千原(せんばる) 遺跡	グスク	字伊平千原
46	大作原(うふさくばる) 古墓群	貝塚後期・近世	字伊平大作原
47	東表原(あがりうむいばる) 遺跡	貝塚前V期	字北谷東表原
48	新城下原(あらぐすくしちやばる) 第2遺跡	貝塚前I期～近世	字北谷安仁屋原
49	東宇地原(あがりうじばる) 古墓群	近世	字伝道原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	字北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	字北谷大当原
52	高畔原(たかふしばる) 水田跡	近世～戦前	字北谷高畔原
53	安仁屋原(あにやばる) 遺跡	グスク～近世	字北谷安仁屋原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前III期～貝塚後期	字伊平伊礼原

注:時代表記は概ね「グスク」→「10～17世紀前半」,「近世」→「17世紀後半～明治以前」,「戦前」→「1945年以前」。

*番号は第4図と一致



第4図 北谷町の位置と遺跡分布

第三章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区及びグリッド設定

延べ15,000㎡にも及ぶ平安山原A遺跡は、うち約5,000㎡が油分に汚染されており、調査区設定においても過分に影響を受けた結果、特にHA③は調査区が細切れとなった。グリッドの設定は、1辺100mの大グリッドで区画整理事業地全体を覆い、大グリッドの中に1辺5mの小グリッドを設け、それを個々の調査区に落とし込むことを基本とした。任意のグリッドのためグリッドラインと東西南北の軸はリンクしない。グリッド名称は、大小ともグリッドの北西隅を基準に、南東へO1～20、南西へA～Tとした(第5図)。本書での調査区は、大グリッドA2～A4及びB2～B4の範囲内に位置している。

表土掘削

調査区の設定後、磁気探査を実施し機械力を用いて表土掘削を行った。磁気探査では、米軍に帰属する不発弾等が認められた。これらを除去しつつ、0.8㎡のバックホウと10tダンプにて米軍基地建設時の造成土・確認調査時の埋土・沖縄防衛局による土壤改良土を掘削・運搬した。

包含層掘削及び遺構検出

遺物包含層は、遺物量や出土状況に応じて小形のスコップや手鍬、ねじり鎌を用いて掘削した。出土遺物は層位・グリッド毎に取り上げ、特徴的な遺物や一括遺物については実測図作成と写真撮影を行った。遺構検出作業は基本的にジョレンを用いたが、より精査が必要な箇所についてはねじり鎌を用いた。排土はベルトコンベアを使用して場外搬出し、バケット容量0.3㎡級のバックホウと4tダンプを用いて残土置き場へ運搬した。

遺構掘削

土坑や柱穴は基本的に長軸で半載し、溝は規模に応じて数箇所の土層観察用畦を残し掘削した。掘削には移植ゴてやスプーン等を用いつつ、遺構内遺物を傷つけないように必要に応じて竹串や竹べら等を用いた。一部の遺構埋土については、今後の分析資料用サンプルとして採取した。

記録作業

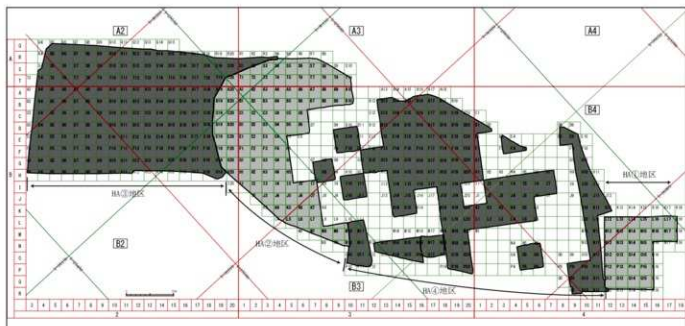
実測は主に平面図をトータルステーションで、壁面図を手実測で行った。写真撮影は、35mm(カラーリバーサル)及び6×7のフィルムカメラ(カラーリバーサル・モノクロネガ)と、500～1000万画素のデジタルカメラを使用した。遺構検出時と完掘時にはブーム式の高所作業車24mを適宜使用し、全景の撮影を行った。

年代測定・自然科学分析

年代測定では、HA④のビーチロック直上から採取した貝類7点を、自然科学分析では、HA②から採取した炭化物(豆類)の同定を専門機関に委託した。分析結果は第IV章第3節を参照。

整理作業

洗浄済み遺物の注記後は、分類・接合を行い、復元可能な資料については焼石膏を用いて復元を行った。復元した資料は土器10点、沖縄産無軸陶器1点の計11点である。接合後の資料は特徴的な遺物を抽出し、実測・デジタルトレース(Illustrator CS)を行った。写真撮影では1200万画素のデジタルカメラを用い、Photoshop CSを使用して背景処理等を行った。



第5図 グリッド設定



第6図 平安山原A遺跡の位置



図版2 遺跡外観（浜川方面より）



図版3 遺跡外観（美浜方面より）

第2節 層序

今回報告する平安山原A遺跡は、計4次の調査（HA①～HA④）に区分されるが、平面的にはほぼ隣接していると言っても良い。総面積10,700㎡にわたるため、遺跡の土層堆積は俄かには一律できるものではないが、基本層序として4大別した。以下、各層について記述し、詳細は第7～13図及び第2表に示す。

第Ⅰ層 戦後の造成土

概念的には1945年の米軍上陸以後の土層を第Ⅰ層として一括した。各層を大別すると、①キャンプ桑江返還（2003年）以降の造成土（汚染土壌の入替土を含む）、②キャンプ桑江内バスターミナル造営に伴う大規模な盛土・整地土、③1945年の米軍上陸直後の活動に伴う土層、とすることができる。②については、1948年の資料において既に「Motor Pool」として整備されていることが確認されている。戦後3年という短期間のうちに、現在とほぼ変わらぬ平坦地形が米軍によって形作られ、以後度々部分的な整地がなされたようである。これらの層上面から深く掘り込まれる工事攪乱や廃棄坑等も多数認められた。③はⅡ層直上層とも換言できる。Ⅱ層上面には戦前平安山集落（1面目遺構）が構築されていたが、米軍によって直接的な集落破壊がなされたことにより、戦前集落に共存する多くの遺物を包含する結果となった。そのため、第Ⅰ層についての厳密な定義は、米軍による集落破壊がなされて以降、ということになる。

第Ⅱ層 戦前の表土～近世の遺物包含層

戦中まで存続した平安山集落は、近代に入ってから再構成されたものと思われ、その大きな契機となったのが1899（明治33）年から始まった土地整理事業であると考えられる。道路の形成やそれに伴う屋敷割りを行う前に、居住地域の広範囲に盛土を施しており、この盛土は旧北谷村内でも平安山集落や隣の伊礼集落に限られた特有の行為であるという。また、集落範囲には元々大きな自然流路（S-640）が存在していた。この自然流路の埋め立ては近世の頃から段階的になされており、近代に至って平坦化が完了する。集落の居住域においては、これらの人為堆積層を第Ⅱ層として一括した。周辺土壌がその供給源と考えられるが、Ⅲ層以下の遺物包含層を激しく攪乱・削平したことにより、Ⅱ層から出土した遺物は新旧入り乱れる状況となっている。また居住域の外側は、近世から引き続き耕作域であったことが予想される。近代～近世の年代観が考えられるため、この耕作土壌にも第Ⅱ層を充てて一括した。

第Ⅲ層 近世前半～グスク時代の遺物包含層

Ⅱ層よりも古相を示す遺物包含層（近世前半～グスク時代）を確認し、これを第Ⅲ層と設定した。分布範囲は広くなく、HA①・②・③の一部に限られる。全面に残存しない理由の1つに、後代の掘削・削平行為があったことが予想されるが、Ⅲ層が検出されない区域においても同時期の遺物出土が決して少なくないということが、その傍証になろう。一方、Ⅲ層の現存が比較的多かったHA④での土層観察によると、同層は非常に細かく分層され、遺構の掘り込み開始面も一律でないという知見が得られている。

第Ⅳ層 貝塚時代以前の砂層

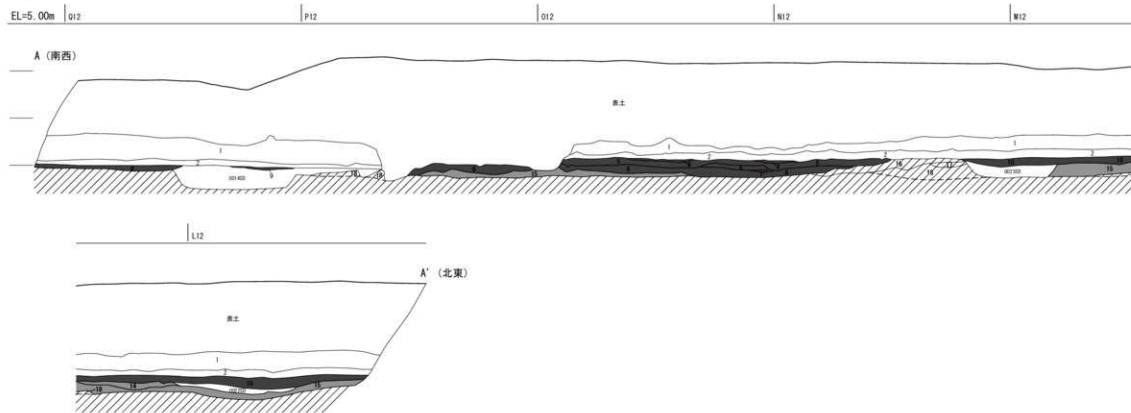
Ⅱ・Ⅲ層の除去後に検出された砂層を、第Ⅳ層として一括した。殆どは風成砂丘であるが、低標高のHA①においては互層状の水成堆積が認められ、HA③北側においては傾斜上方からの供給された可能性のある赤味がかった粗砂が多くなる。このⅣ層上面において非砂土壌の埋土をもつ遺構群（2面目遺構）を認識することができ、各遺構の調査を行っている。従って、同一遺構面で検出された遺構であっても、Ⅱ層直下のものとⅢ層各層直下のものが混在することになる。また、Ⅳ層の掘削を進めると、掘り込みプランを認識できない人骨が多く見つかった。後代の激しい攪乱を受けていることもあり詳細は不明とせざるを得ないが、同層上面から掘り込まれて埋葬されたものと思われる。同層上位レベルにおいては、グスク～貝塚時代後期の遺物も多く得られている。

各面遺構の呼称・取扱いについて

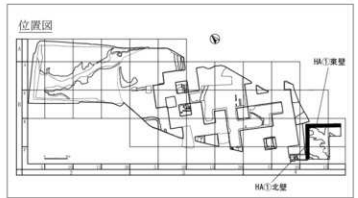
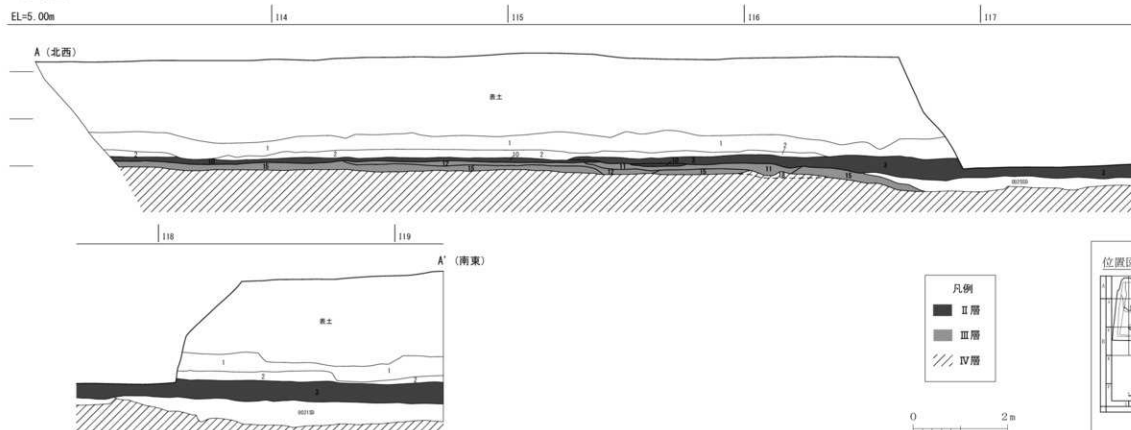
上記のように、遺構検出調査面としては2面であるにも関わらず、遺構の帰属時期は少なくとも3時期以上となっている。また、自然流路等については、その形成と埋没にかなりの時期差が生じる場合が普通であり、例えばグスク期に形成された流路からの出土遺物が近代のものだった、というのはこのことによる。遺物出土状況をより効果的に把握するために、以下のように整理し、数量表等に反映した。

- Ⅱ層遺構 : 第1面（Ⅱ層上面）で検出した遺構。近代に帰属する。
- Ⅲ層遺構 : 第2面（Ⅳ層上面）で検出した遺構の中でも新しいもの。概ね近世後半に帰属する。
- Ⅲ層下遺構 : 第2面（Ⅳ層上面）で検出した遺構の中でも古手のもの。グスク時代～近世前半に帰属する。

<HA① 北壁>



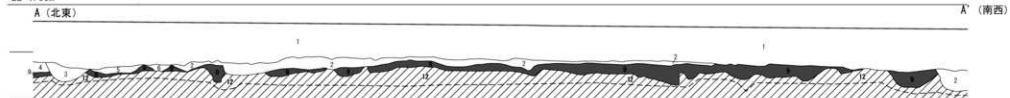
<HA① 東壁>



第7図 層序1 (HA①地区)

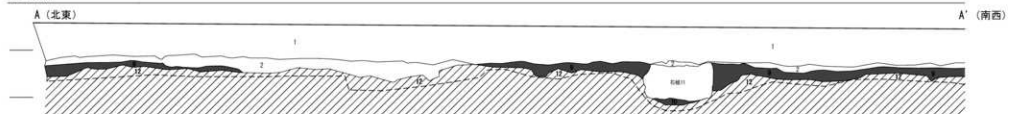
<HA② 南壁 1>

EL=4.00m



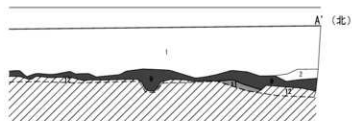
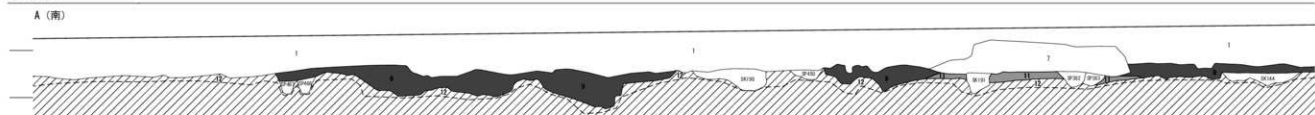
<HA② 南壁 2>

EL=4.00m



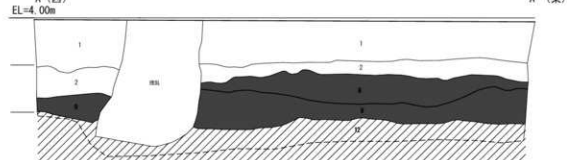
<HA② 西壁>

EL=4.00m



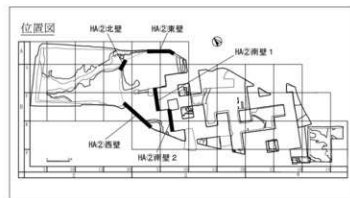
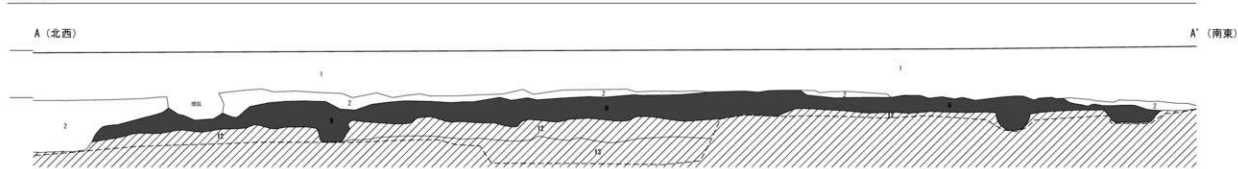
<HA② 北壁>

A (西)



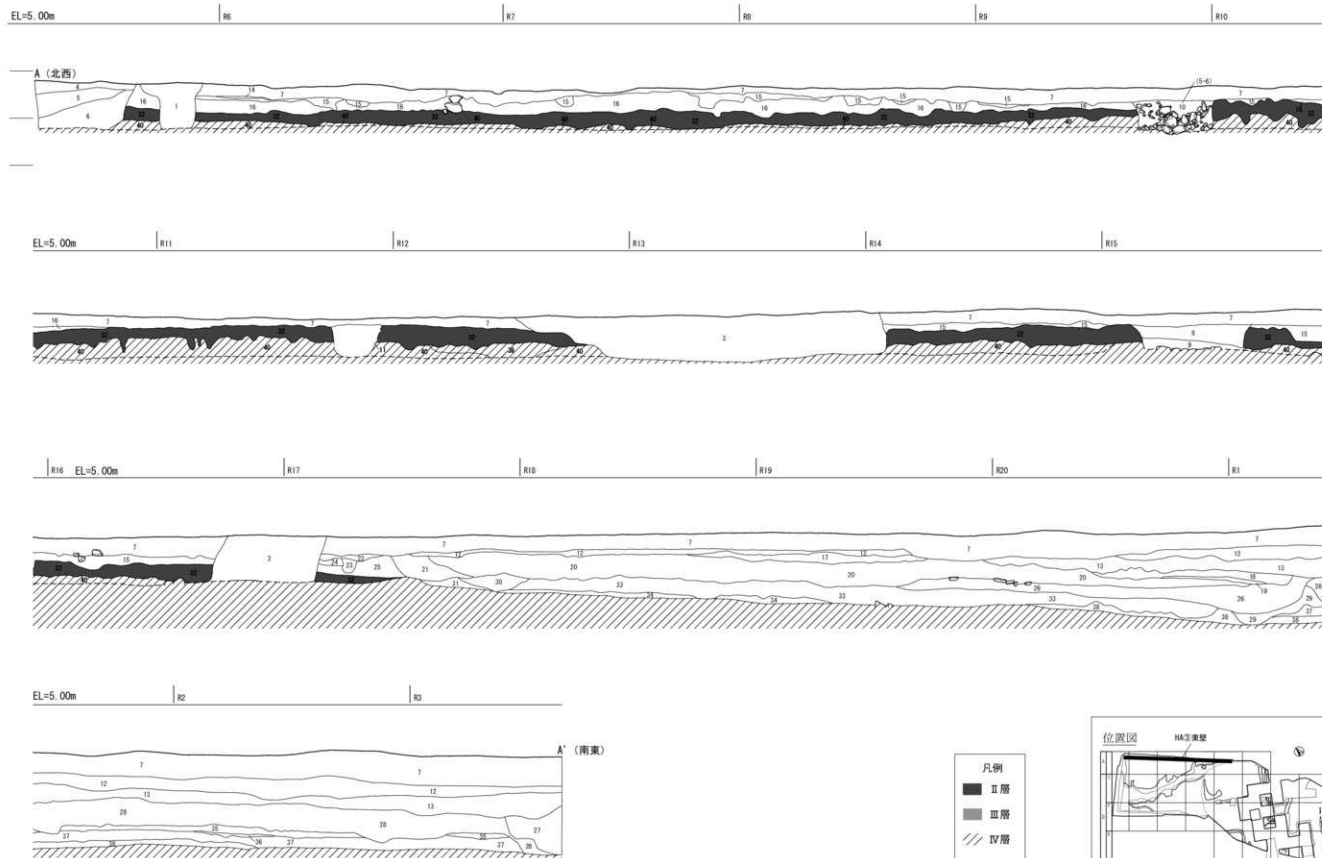
<HA② 東壁>

EL=5.00m



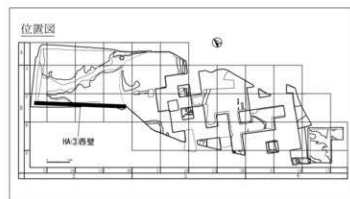
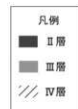
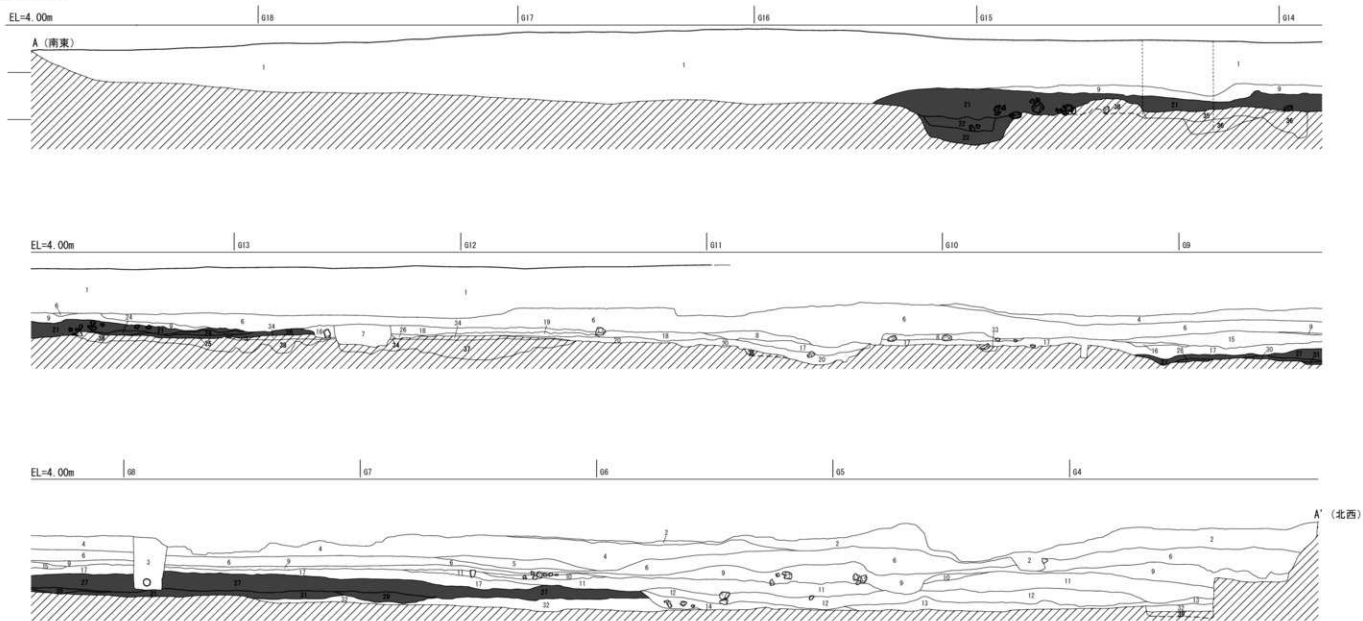
第 8 図 層序 2 (HA②地区)

〈HA③ 東壁〉



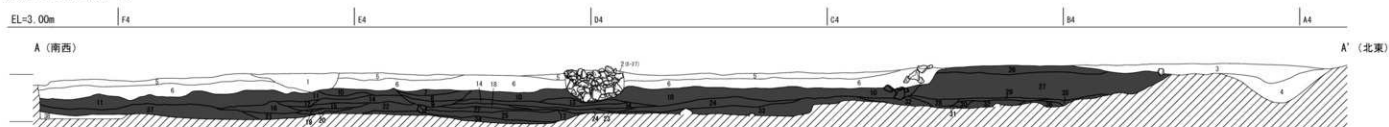
第9图 层序3 (HA③地区)

<HA③ 西壁>

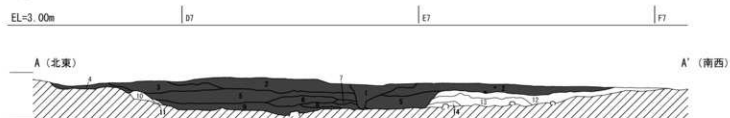


第10图 层序4 (HA③地区)

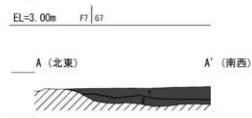
<HA③ S-640ベルト1>



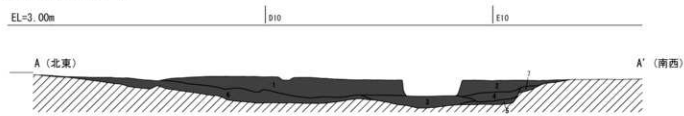
<HA③ S-640ベルト2>



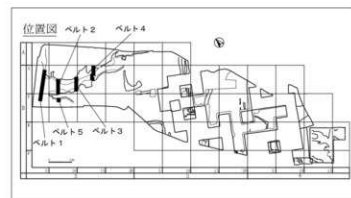
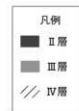
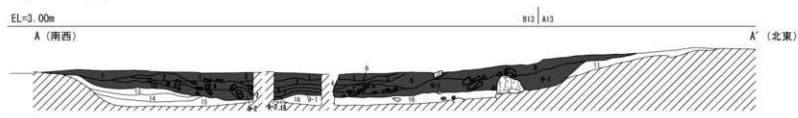
<HA③ S-640ベルト5>



<HA③ S-640ベルト3>



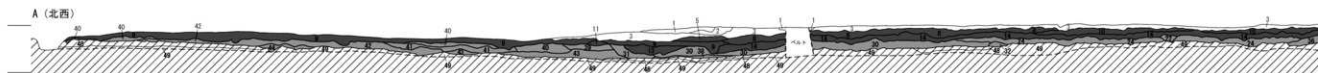
<HA③ S-640ベルト4>



第11図 層序5 (HA③地区)

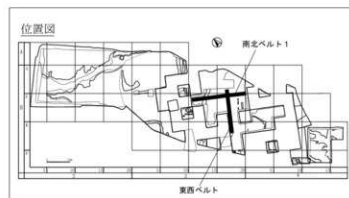
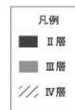
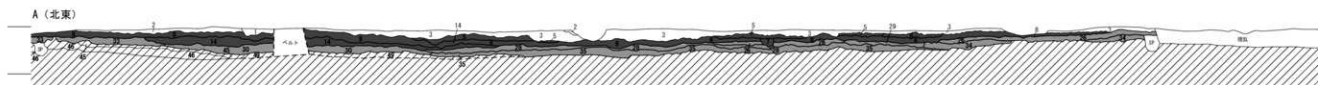
<HA④ 南北ベルト1>

EL=4.00m



<HA④ 東西ベルト>

EL=4.00m

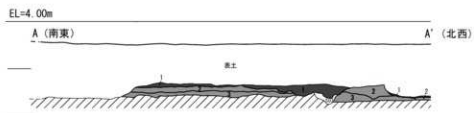


第12図 層序6 (HA④地区)

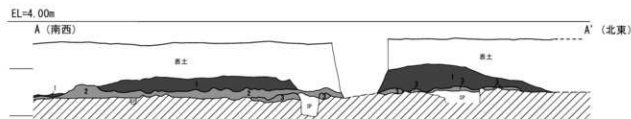
<HA④ 南北ベルト 2>



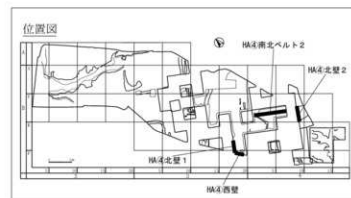
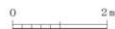
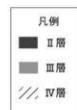
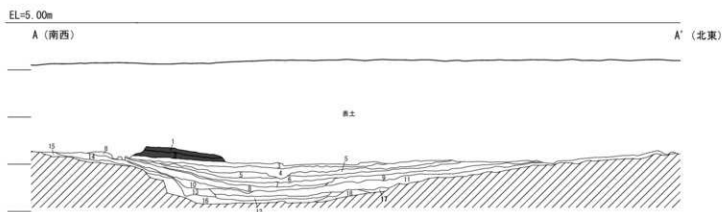
<HA④ 西壁>



<HA④ 北壁 1>



<HA④ 北壁 2>



第 13 図 層序 7 (HA④地区)



第3表 検出された平安山の屋敷

建物 番号	屋号	屋号 (旧名)	名称	戦中の 築造数	戦時の 存在	日本法の 発掘	調査記録
24	祝女殿内	マンドゥルチ	島屋	10	2		埋没は広く瓦物が露出していた。
26	祝女殿内小	マンドゥルチタワー	島屋	5	2	○	
25	浦伊礼小	ターニーローグラー	島屋	4	0		
37	大屋	ウフア	島屋	5	0		祝女殿内から掘いで来た人がノロであった。
38	道端大屋小	モチバタウフアーグラー	島屋	2	1		
28	小舎小	ウードウグラー	小屋	4	2		
27	瓦屋又吉小	ウーラーマーマレンジグラー	又吉	5	5	?	瓦葺の上りな家だった。 家屋1棟目の遺構で家が壊れ崩れた。
26	石庫	ラカサ	石庫	3	0		家屋1棟目の遺構で家が壊れた。
19	東大屋小	アガリウフアーグラー	島屋	1	0		家屋1棟目の遺構で家が壊れた。
18	西大屋小	イロウフアーグラー	島屋	5	0		掘削した後に家を建てて住んでいた。
17	黒屋先生	ターニーランジー	黒屋	8	1	○	家屋1棟目の遺構で家が壊れた。
30	三良又吉小	ウジバウフアーグラー	又吉	5	1		
39	神村屋	ナカンダリ	神村屋	-	-		既に人跡に移転していた。
40	熊茅比嘉小	クシヌビヤグラー	比嘉	3	0		

※参考資料: 『北谷町史 第五巻 (上) (下) 資料編4・北谷の戦時体験記録』(1992北谷町役場)



平安山 屋号地図『北谷町の地名』(2006北谷町教委)より ※道幅図との方位は異なる



第14図 1面 戦前平安山集落 検出遺構配置 (S=1/500)



アサギ・母屋の両端 (南東より)



井戸・洗い場 (南東より)



上水路・風呂場付近 (北西より)



葺除去後の上水路 (北西より)



排水路 01・貯水池 01 (北西より)



ウワーフル (北東より)



畜舎床面付近 (北東より)



畜舎基礎部分 (北東より)



畜舎裏の貯水池 02 (北より)



風呂場 (北東より)



不明建物 (南より)



貯水池 03 (西より)



豚骨廃棄土坑 (東より)

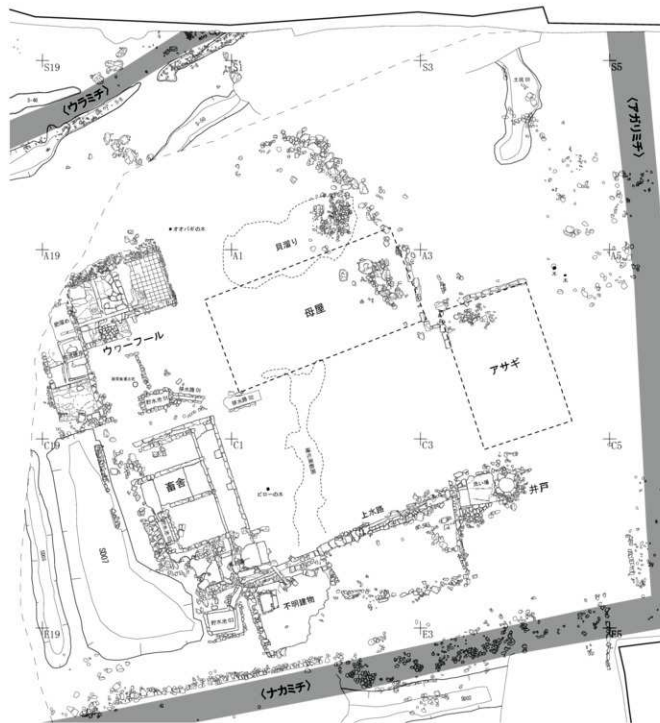


貝溜り範囲 (北西より)



SD07 下位石列検出 (北西より)

図版 4 祝女殿内屋敷



第 15 図 1 面目 祝女殿内屋敷 平面図 (S=1/200)

第3節 近現代の遺構と出土遺物

本節では、第1面で検出された集落遺構群及びそれに付帯する遺物を取り扱う。遺構は埋立・盛土層であるⅡ層上面に構築され、概念上は近代以降に限られる。しかし大型溝の一部(SD42)については、それ以前から継続使用されていた可能性もある。遺物はガラス瓶やプラスチック製品等、考古学的には非常に新しいものが多く含まれるが、いずれも戦前集落における生活状況を如実に物語る貴重な資料と考え、紙数を割いた。1945(昭和20)年4月の米軍上陸侵攻と同時に、米軍によるモノの流入も始まるが、原則としてこれらは、検出された集落とは無縁のものとして除外している。

当該期の成果を整理するにあたっては、米軍によって撮影された空中写真や、当時実際に暮らしていた方々の証言等の記録類が豊富にあり、大いに参考になった。また、ガラス瓶等の当時の販売商品についても、現存する企業等が各々開示している情報の中に、当時の社会背景を知る手がかりが残されていたため、時間の限りその収集に努めた。

1. 戦前の字平安山集落跡

Ⅰ層直下において、米軍による接収まで存続していた平安山集落の明瞭な痕跡が検出された。当時の空中写真や諸記録を加味して調査・整理作業を進めた結果、生活道路の配置や屋敷区割がおおよそ判明し、その形成開始にあたって以下のような規制や計画性を読み取ることができた。A.「祝女殿内(ヌンドウツル)」屋敷を中心にして主要道路が交差している、B.「サカイミチ」以北にのみ屋敷区割が認められる、C. 自然流路を平坦化して「ウラムチ」を構築している。それまで近世的村落として存在していた平安山集落は、近代に入るとこのような都市計画に則って再構成されたものと考えられる。1889(明治22)年に敷地・家屋制限令が撤廃されたこと、或いは1899(明治32)年から土地整理事業が実施されたこと、が大きな契機となったとすることが妥当であろう。

(1) 道路跡(第14図)

生活道路の位置を推定するにあたっては、a. 排水や区画のための溝、b. 各敷地外縁に伴う石列・石塀などの痕跡、c. 踏み固めに伴う硬化面範囲、をその根拠とした。諸記録によると、「ナカミチ」と呼ばれる集落の幹線をなした道路があったことが分かっており、この「ナカミチ」と直交・平行する道路も数箇所確認された。以下に各道路を報告するが、「ナカミチ」以外には伝わる名称がなかったため、便宜上仮称する。

【**ナカミチ**】:北西-南東に走り、後述する「アガリミチ」「イリミチ」がこれに直交する。この交差部分に「祝女殿内」屋敷が構築されており、戦前平安山集落の中心がこの交差部分部であったと考えられる。「祝女殿内」前の石列や、「名嘉座」前のSD02、「蒲伊礼小」前のS-62、「島01」前の土坑02をもって認識され、所々に硬化面が残存する。【**アガリミチ・イリミチ**】:「ナカミチ」に直交する道路で、「ナカミチ」を境に北東側を「アガリミチ」、南西側を「イリミチ」と仮称する。これらの道路を境にして、「メーバー」「クシパー」といった集落の組分けがなされたという。「アガリミチ」は、「祝女殿内」横の石列や硬化面範囲によって位置が推定された。現場では側溝の痕跡と思われるもの(SD03)も認識されたが、図化不能なほど不明瞭であった。「イリミチ」は「三良又吉小」沿いの石列(石塀の破却痕か)によって推定された。【**ウラムチ**】:丘陵側で「ナカミチ」に並走しており、これは近世以前に存在した自然流路(S-640)の流筋にはほぼ一致した。この自然流路の平坦化完了は近代に入ってからと考えられるが、整地前の段階から「道」のような機能をもっていたことは予想される。今回報告する道路跡の中では最も検出部分が広く、隣接する平安山原B遺跡(2015北谷町教委)では「サーターヤー」付近まで残存していることが報告されている。方向や道幅は、HA③S-8・20・28によって認識される。【**サカイミチ**】:平安山集落の屋敷群は、この道を境にして北西に広がる。HA④SD11・12・41・42によって認識される。SD41は「サカイミチ」から離れたところで不整な「コ」の字形を呈するが、これも戦中の空中写真に写っている島(?)の平面形と合致することが判明した。SD42は幅・深さともに規模大であり、包含される遺物も年代幅が広い。この溝は近世から存在していた可能性があり、戦前集落形成の基点となったとも考えられる。米軍上陸の段階でも、溝は開口・機能しており、埋土の大半が新しい。その他の道路や区画溝:屋敷間を走る道路はさらに2条想定され(「ワキミチ1」・「ワキミチ2」)、いずれも諸記録と合致した。「ワキミチ2」には明瞭な硬化面範囲が検出されている。また各屋敷外縁には、素掘りの幅広な溝(HA②SD01・02・05、HA③S-12・16、HA④SD51)が認められる。これらの溝の検出状況や埋土の様相からすると、一部の溝については、多少窪んでいたにしても、積極的に排水機能を果たしていたとは考えにくい。新しい集落を造るにあたって、屋敷割りを行うために粗掘りした溝を含んでいる可能性も提起しておく。

(2) 「祝女殿内」屋敷 (第15図、図版4)

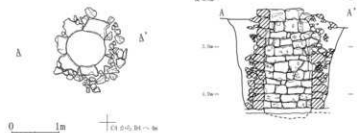
「祝女殿内(ヌンドゥルチ)」は「平安山ノロ」を輩出する家であり、このノロは平安山・浜川・砂辺・桑江・伊礼の5集落の祭祀を管轄していたという。この屋敷が集落形成にあたって核的存在であったことは想像に難しくなく、主要道路の交差点に立地する。旧暦6月24日のカシチーには「祝女殿内」の家の前で、メーバー・クシペーに分かれた綱引きが競われたという。1944(昭和19)年、沖繩守備軍が設立され、それに伴って北谷村にも日本軍が駐留することとなった。その際、村内の大きな民家には上等兵が寄宿したとのことである。この「祝女殿内」屋敷に関わる直接の証言記録はないが、当屋敷への日本軍兵の寄宿があった可能性は十分ある。配給食糧に乏しい日本兵が、当屋敷の広い庭に突っついていり果物を食べ尽くしてしまったという話も残っている。

屋敷入口:入口は集落の主要道路である「ナカミチ」に面している。通常、沖繩における家の正面は南向きとされるが、伊平ではヒツジ(西南)・サル(西南西)・トウイヌファ(西)の向きが、風水上良しとされていたとのことで、当屋敷の入り口も南西を向いている。前庭部には住人の日常通用痕跡と思われる硬化範囲や、ビローの樹根もそのまま見つかっている。**居住施設:**右側に「アサギ」、正面に「母屋」が配置されるが、残念ながら本屋敷を構成する建物の中では最も残存状態が悪く、それぞれ両端の痕跡が局所的に残る程度である。母屋左方には貯排水施設が認められるため、この付近が台所であったことが想像できる。母屋裏には貝溜り範囲が認められ、多くの人工遺物がともに廃棄されていた。古い段階ではクムイ状になっていたようである。**井戸:**入口右手に石組の井戸(井戸01)が検出された。屋敷外で見つかった他の井戸に比べると、造りの良さに格段の感がある。洗い場・溜枥・上水路・貯水池が連結した大掛かりな仕組みとなっており、これら全ての内底面に漆喰が施される。上水路は屋敷入口通路を横断するように13m以上伸びており、パショウ葉脈痕のあるコンクリート材で蓋をしている。**ウーフル(豚小屋兼便所):**母屋左横に4基のフルがし字連結されていた。構造上の違いから増築(即ち豚の増頭)があったと思われる。各フルには飼餌が設けられており、うち2ヵ所が陶器鉢(第22図2・3)、1ヵ所は木製であった。一部には、和式便所の体をなしている箇所も認められた。コンクリート製の方形板に楕円形の穴が割り貫かれた格好で、直接肥溜めにつながっている。方形板の四隅には柱痕があり、屋根痕があったヤーフルであったことが予想される。1943(昭和18)年の新聞記事に、平安山集落は改良便所の推進に筋目成功した、との内容が載せられており、この推進運動の一端を示しているものと思われる。また、フル前には「豚骨廃棄土坑」が検出されている。**畜舎:**ウーフルの手前には3部屋に分かれる建物があり、床面は漆喰貼りされていた。庭側に礎石列、間仕切り部分には礎敷きの基礎が残っている。部屋によって床面下の構造が異なっているため、こちらも増改築があった可能性が考えられる。配置や構造から、豚以外の家畜小屋や倉庫の用途が考えられ、建物裏には石組の貯水遺構(貯水池02)も備えられている。**不明建物・風呂場:**入口左手には大きな方形建物が出された。床をなす漆喰面には「十二月廿七日」の線刻がある。外周には6本の石製柱の残骸が、床面隅にはパショウ葉脈痕のあるコンクリート製の箱のようなものが残っていた。丁度この付近で上水路蓋が途切れ、汲水が可能となりとなっている。上水路を挟んだ向こう側にもステップや溜枥があり、焼炭痕跡も認められたため、「風呂場」を想定している。各家庭における風呂入浴は、昭和に入ると全く珍しいということではなかったようであるが、水汲み自体は難作業であった。井戸から上水路を連結させることで、容易な汲水が可能となったことが予想される。排水先には貯水池03が構築されている。**排水溝:**隣家「誦伊礼小」との境界には深い素掘り溝(SD07)が検出された。貯水池等からの最終排水先であると考えられる。当初検出した部分を完掘し、完全に砂層が露出したところからも石列(石垣?)が検出されたことから、この溝は前代に既に存在していた可能性もある。

(3) 井戸 (第16~18図、第4表)

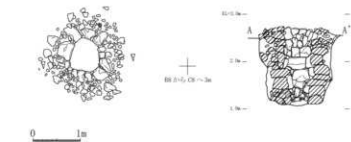
10基の井戸を検出した。埋没状況や出土遺物から、「ナカミチ」沿いの敷地に構築される5基(井戸01~03、S-2・4)及び最北で検出されたS-9については、米軍上陸時まで開口・機能していた。井戸01(祝女殿内)は最も精緻な造りであり、砂層下のビーチロックを少しだけ掘り込んで底面としている。隣接する「大屋」のS-2と「誦伊礼小」のS-4は、使用サイズ・組み方・断面形状・付属施設に至るまで酷似している上、「ナカミチ」に対しての位置関係にも何らかの規則性が感じられる。「名嘉座」では、井戸03から2m強離れた場所、上部の礎が意図的に抜かれた井戸04が検出されている。何らかの理由で井戸04を廃止し、井戸03を新設したものと考えられる。「ウラムチ」以北では4基の井戸(S-6・9・40・65)が見つかっており、前述S-9を除いた3基については、米軍上陸時には既に廃止されていたと考えられる。「ウラムチ」東沿いにあった「仲村渠」は、戦前時には既に大阪へ移転していたという。

井戸 01 (祝女殿内)



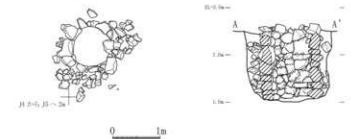
井戸 01 (南東より)

井戸 02 (畠 01 内)



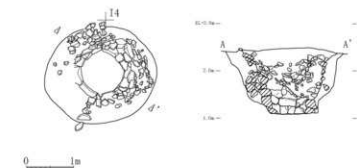
井戸 02 (西より)

井戸 03 (名嘉座内)



井戸 03 (南東より)

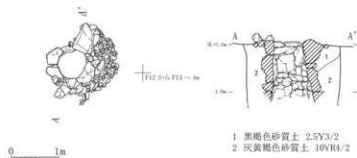
井戸 04 (名嘉座内)



井戸 04 (北より)

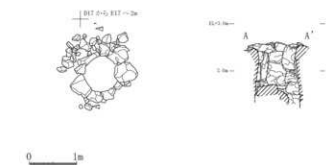
第 16 図 1 面目 井戸 (1) (S=1/80)

S-2 井戸 (大屋内)



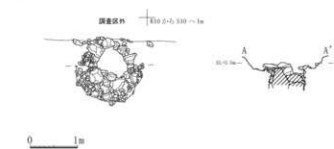
S-2 井戸 (南より)

S-4 井戸 (蒲伊礼小内)



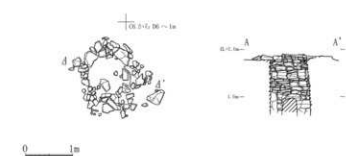
S-4 井戸 02 (東より)

S-6 (ウラムチ以東)



S-6 (南より)

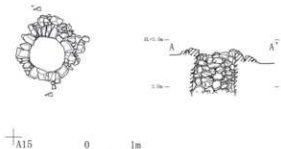
S-9 (ウラムチ以東)



S-9 (南より)

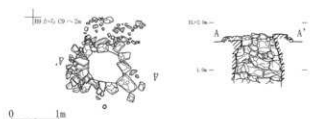
第 17 図 1 面目 井戸 (2) (S=1/80)

S-40 (ウラムチ以東)



S-40 (北西より)

S-65 (仲村集内)



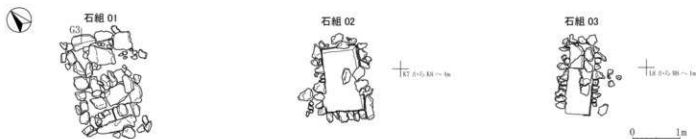
第4表 1面目 井戸一覧

遺構名	原敷名	断面形状	廃絶理由	備考
井戸 01	祝女殿内	土位がやや窄まる	米軍接收	洗い場等あり
井戸 02		隅かに土位が隅く	米軍接收	石組が破壊
井戸 03	名倉庫	ほぼ筒状	米軍接收	
井戸 04	名倉庫	不明(土位が隅く?)	不明	通り替え?
S-2 (井戸)	大塚	土位がやや窄まる	米軍接收	粘土による目詰め
S-4 (井戸)	藤伊礼小	土位がやや窄まる	米軍接收	洗い場等あり
S-6		不明(土位が窄まる?)	不明	
S-9		ほぼ筒状	米軍接收	飯炊機使用
S-40		土位がやや窄まる	不明	
S-65	仲村集	土位が窄まる	居住停止?	写真なし

第18図 1面目 井戸(3) (S=1/80)

(4) 石組遺構 (第19～21図、第5表)

ここでは、石組を内壁に巡らせる遺構のうち、屋敷内の他施設(上水路・排水路等)との関係が明瞭でないもの31基を一括し、うち残存状態の良い21基の実測図・写真を掲載した。「底」があるものとないものに大別されるが、換言すればこれは遮水性の有無とも言える。平面形は、長方形・円形・楕円形に分かれる。長方形で内底面の目詰めが丁寧なものほど、米軍上陸時まで開口していたものが多い。円形のものには井戸を転用したようなものが見られる。楕円形のものには例外なく「底」がなく、屋敷の配置にもうまく嵌らないため、前代の構造物である可能性が高い。このような石組遺構の用途として、これまでは肥溜め(シーリ)を想定することが多かった。しかし、北谷の諸記録によると、戦前に各屋敷で雨水を溜めたものを「クムイ」と呼んでおり、同様の機能を持たせたものである可能性もある。ここで根菜等の下洗いだけでなく農具や足も洗ったそうで、年に一回、日照りを見計らって底の泥を浚って清掃したという。



石組 01 (南西より)



石組 02 (南西より)



石組 03 (北東より)

第19図 1面目 石組遺構(1) (S=1/80)

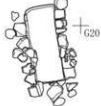


石組 04

+
E10 0-0.18 ~ 2m

石組 04 (西より)

石組 05

+
G20

石組 05 (北東より)

石組 06



0 1m



石組 06 (南東より)



石組 07

+
E10 0-0.18 ~ 2m

石組 07 (南西より)

石組 08

+
E10 0-0.17 ~ 2m

石組 08 (南西より)

石組 12

+
E10 0-0.186 ~ 2m

0 1m



石組 12 (北西より)



石組 13



0 1m

+
E11

石組 13 (北より)

石組 14



P6

E11



石組 14 (東より)

石組 15

+
E10 0-0.18 ~ 2m

石組 15 (東より)

第20図 1面目 石組遺構(2) (S=1/80)



石組 16



+F11



石組 16 (北東より)

石組 18



+J3 0+5.80~2m



石組 18 (東より)

石組 19



+G1 0+5.007~3m

0 1m



石組 19 (南東より)



石組 23



+H6 0+5.82~3m

0 1m



石組 23 (南西より)

石組 24



+K3 0+5.83~2m



石組 24 (南東より)

石組 26



+F12 0+5.013~3m



石組 26 (南東より)



石組 27



+M2 0+5.41~2m

0 1m



石組 27 (南より)

+J3

石組 29



石組 29 (南東より)

石組 30



+G1



石組 30 (東より)

第 21 図 1 面目 石組遺構 (3) (S=1/80)

第5表 1面目石組遺構一覧

型式番号	平面形	遺構	構造・材料	備考	記録番号
石組 01	長方	○	石材は全面平らな砂岩。セメント・漆喰で目詰め。	底面にバケツあり。ステップあり。	アタッカー 01
石組 02	長方	○	石材は石灰岩・サンゴ。粘土で目詰め。漆喰を貼る。		アタッカー 02
石組 03	長方	○	石材は石灰岩・砂岩・サンゴ。全面にセメントを貼る。	セメント製蓋板あり。	アタッカー 03
石組 04	長方	○	石材は石灰岩・板状砂岩。セメントを貼る。	不発弾発見。導水層あり？	アタッカー 04
石組 05	長方	○	石材は石灰岩。粘土で型を作り全面に漆喰を貼る。		アタッカー 05
石組 06	長方	○	壁石材は石灰岩・砂岩。漆喰が残る。底石材は平らな砂岩。粘土で目詰め。	上半に濃い朝平を受ける。	アタッカー 07
石組 07	長方	○	石材は石灰岩。粘土で目詰め。全面にセメントを貼る。		アタッカー 09
石組 08	長方	○	壁面は砂岩と石灰岩の自然石を使用。粘土を全面に塗り、薄く漆喰を貼る。		アタッカー 11
石組 09	長方	○	壁石材は石灰岩・サンゴ。粘土で目詰め。底石材は平らな砂岩。漆喰を貼る。		アタッカー 12
石組 10	長方	○	壁石材は石灰岩・砂岩。粘土で目詰め。漆喰を貼る。		アタッカー 14
石組 11	長方?	○	石材は石灰岩。粘土で目詰め。漆喰を貼る。	溝内4面壁での出土。	アタッカー 17
石組 12	長方	○	—	鳥居跡多数出土。	S5
石組 13	長方	○	—		S21
石組 14	長方	○	—	ステップあり。	S25
石組 15	長方	○	—		S26
石組 16	長方	○	—		S38
石組 17	長方?	○	—	崩壊著しい。	S47
石組 18	長方	○	—		S49
石組 19	長方	○	—		S692
石組 20	長方?	?	石材は石灰岩・砂岩。粘土で目詰め。漆喰を貼る。	崩壊著しい。	アタッカー 08
石組 21	長方	?	—		S53
石組 22	円	○	石材は石灰岩。一部粘土を確認。	戸口の配用か。	アタッカー 06
石組 23	円	○	壁石材は石灰岩・砂岩。底石材は平らな砂岩。粘土で目詰め。	戸口の配用か。	アタッカー 10
石組 24	長方	×	壁石材は石灰岩・サンゴ・砂岩。		アタッカー 15
石組 25	長方?	×	壁石材は石灰岩・サンゴ・砂岩。	崩壊著しい。前代のものか。	アタッカー 16
石組 26	長方	×	—		S18
石組 27	円	×	壁石材は石灰岩・サンゴ・アワ石・砂岩。	SD04と関連した戸口か。	アタッカー 13
石組 28	円?	×	—	崩壊した戸口か。	S30
石組 29	楕円	×	壁石材は石灰岩・砂岩。		SX01
石組 30	楕円	×	壁石材は石灰岩・砂岩。		SX02
石組 31	楕円	×	壁石材は砂岩。		SX03

(5) 収納坑 (図版 5)

「照屋先生」敷地内から、壁を木板・鉄製部材で補強した土坑が検出された。土砂によって押し潰されていたため、収納物それぞれの正確な配置は定かではないが、木桶や柳行李の中から様々なものが見つかった。油壺：木製栓で封をされた甕（有頸甕）内部には、その半ばまで白い物質が固結した状態で残存していた。正月などに豚を漬した際に得られた豚脂（ラード）ではないかと思われる。木製栓及び甕については実測図を掲載した（第22図4・5）。重箱（漆器）：赤色の2段重と思われる。蓋には説文解字で書かれた「中頭郡教育功労者表彰記念 中頭郡教育会」の金文字が確認でき、屋号の通り居住者が教育者であったことが分かる。『町史4』にも明治後期のものとして、北谷小学校第6代校長・長峰朝栄氏とともに撮影された照屋直助氏の写真が掲載されており、直助氏は1943（昭和18）年までの10年間平安山区長も務めていた。また底面には「六十周年記念」「北谷校」という黒文字と、「琉球浅田製」との金文字が確認された。北谷小学校設置60周年が1942（昭和17）年であり、その時に記念表彰されたものと推察する。また「琉球浅田製」の文字については、戦前沖縄の有力な漆器製造販売業者である浅田漆器店によるものであろう。重箱内からは猪口が1点出土している（第22図6）。椀（漆器）：かなり脆弱な状態ではあるが、赤椀が数点重ねられたものが2組、木箱に収められていた。椀と蓋のセットかもしれない。丸盆（漆器）：黒塗りの丸盆で、これもまた脆弱な状態であった。「税納」の文字がみられるため、これも何かの記念品と考えられる。小碗（磁器）：桶の中から9点見つかっており（第22図7～11）、数点ずつ重なっていた。このうち3点は口縁部に緑色の2本線が入った国民食器である。ピーズ：黄色の大玉（径10mm弱）3点と赤色の小玉（径約5mm）6点以上が見つかった。材質は判然としないが、セルロイド製であるうか。黄色玉は穿孔部分が中心からかなりずれているが、赤色玉は中心を通っており、例外なく割れている。衣類：柳行李の中に、衣類と思われる布が収められていた。劣化が著しい。薄い布を重ねた中に綿状の層があるため、防寒着のようなものかと思われる。緑青の吹いた銅製のボタンや、飾緒のような太糸も認められた。地下足袋：親指とそれ以外で二股に分かれており、ゴム底に波形の滑り止めがある。劣化が著しい。当時の照屋家では年長の男子3名は徴兵され、ご当主及び年少男子2名は福岡に疎開していた。残された母娘2名でこの土坑を掘ったとは考えにくく、父の疎開前に構築され、思い出の品等を埋置したことが予想される。戦時の供出命令は厳しく、食糧はおろか衣類やカンザシまでがその対象となったというが、この土坑に収められた物品は供出を免れた結果となった。



油壺検出（北より）



重箱内猪口検出（北より）



重箱検出（北より）



漆器椀検出（西より）



箱内小碗検出（西より）



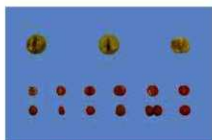
ビーズ検出（北西より）



重箱の文字①(画像処理)



重箱の文字②(画像処理)



黄色・赤色ビーズ



柳行李の蓋の一部



衣類の一部



地下足袋裏側

図版 5 収納坑内遺物

(6) 食料残滓の廃棄痕跡 (図版 6・7)

各屋敷から食料残滓の廃棄痕跡が検出されており、いずれもこの箇所が建物の外側であることの傍証である。埋裏に残滓廃棄したものも 2 基見つかっており、うち 1 基からは炭化したトーマミ (ソラマメ) も見つかった。終戦の年はトーマミが豊作であったという。いずれの裏も歪んでいることから、焼成過程での失敗品を利用した可能性が指摘できる。「浦伊礼小」屋敷で検出されたものを実測・図示した (第 22 図 1、図版 7)。



図版 6 HA② 埋裏内食料残滓 検出 (東より)



図版 7 HA③ 埋裏内食料残滓 検出 (南西より)



第22図 図版8 1面目 遺構共存遺物 (S=1/5、2/5)

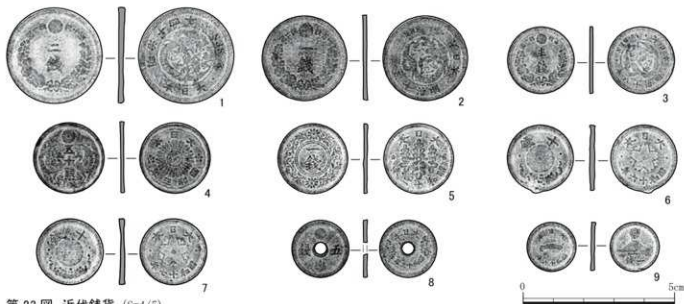
第6表 1面目 遺構共存遺物 観察一覧

図版・図号	図番号	類別	器種	口径・底径・器高	観察事項・備考等	出土層数・地点名称
第22図 図版8	1	沖繩産無釉陶器	甕	口: $25.8 \times (30.2)$	胴: 張り出し筒。平底。立ち上がりがやや直線的。内: 7700a、石灰付着。赤み錆着。灰化物遺存。	遺伊凡小・S-14
	2	沖繩産無釉陶器	鉢	$26.2 \times 9.8 \times 12.3$	口: 外反L1.5。底: 盤目。唇: 7911。白化痕あり。外黒輪。内側内縁の痕跡残る。	祝女殿内・フル2(副塚)
	3	沖繩産無釉陶器	鉢	$27.6 \times 12.1 \times 13.4$	口の中内側・L19種舌状。胴: 空々張る。上付底。外: 圈線・波状文・唐草。	祝女殿内・フル4(副塚)
	4	木製品	粒	$(8.2 \times 6.6 \times 3.5)$	跡の遺。	照原先生・収納品(編1)
	5	沖繩産無釉陶器	有部器	$11.4 \times 14.6 \times 34.3$	口: 外反・空々・口筒舌状。胴: 張り出す。底: 立ち上がり削り。外: 胴部に隈線・細波線(弧状)。胴底遺存。	照原先生・収納品(編1)
	6	本土産磁器	小皿	$6.3 \times 2.5 \times 2.7$	製作中。底半付付(舌・3単位)。瀬戸美濃。	照原先生・収納品(編1)
	7	本土産磁器	小碗	$8.1 \times 3.0 \times 4.7$	ゴッホ。吉澤文(松竹梅・松杏仁鶴、赤青緑黒)。瀬戸美濃。同型が3点出土。	照原先生・収納品(編2)
	8	本土産磁器	小碗	$8.0 \times 3.2 \times 4.6$	手鑑寺。梅花文(赤青緑)。瀬戸美濃。	照原先生・収納品(編2)
	9	本土産磁器	小碗	$8.0 \times 3.0 \times 4.6$	ゴッホ。菊文(青・3単位)。瀬戸美濃。	照原先生・収納品(編2)
	10	本土産磁器	小碗	$7.9 \times 3.0 \times 4.7$	ゴッホ。菊文(青・4単位)。瀬戸美濃。	照原先生・収納品(編2)
	11	本土産磁器	小碗	$7.8 \times 3.0 \times 4.4$	L線部に2葉團扇(緑)。同底白磁。瀬戸美濃。同型3点出土。	照原先生・収納品(編2)

2. 出土遺物

(1) 近代銭貨 (第23図、第7表)

明治期以降に铸造・使用された銭貨は15点確認されており、いずれも集落の居住域から出土している。銭貨製造年代の社会背景から、概ね3時期に分類された。1期：1871(明治4)年の新貨幣条例に基づいて発行された初期貨幣、2期：1897(明治30)年の貨幣法制定により、同一貨幣単位あたりの価値が半減した時期の貨幣、3期：1938(昭和13)年公布の臨時通貨法により発行された臨時補助貨幣。1期貨幣には半銭・1銭・2銭(計4点、いずれも銅貨)があり、半銭貨幣は2期1銭貨幣とほぼ同じ規格となっている。2期貨幣には、1銭青銅貨3点と50銭銀貨1点がある。3期貨幣には、アルミ貨(1銭2点と10銭4点)とアルミ青銅貨(5銭1点)があり、軍事物資における銅の需要の高まりが見て取れる。



第23図 近代銭貨 (S=4/5)

第7表 近代銭貨一覧

図号	同番号	貨幣名称	製造期間	製造年	出土層数・遺構	径 (cm)	重量 (g)	備考	時期
第23図	1	2銭銅貨物 (産)	1873～1884	1881 (明治14)	大塚	3.2	13.7		1期
第23図	2	1銭銅貨物 (産)	1873～1888	1882 (明治15)	祝女殿内	2.7	6.8		
第23図	3	半銭銅貨物 (産)	1873～1888	1885 (明治18)	SD41	2.2	3.4		
		半銭銅貨物 (産)	1873～1888	明治10年代	大塚	2.2	3.1		
第23図	4	50銭銀貨物 (産)	1922～1938	1928 (昭和3)	祝女殿内	2.3	4.9		2期
		1両青銅貨物 (産)	1916～1938	1924 (大正13)	藤伊孔小	2.3	3.3		
第23図	5	1両青銅貨物 (産)	1916～1938	1937 (昭和12)	大塚	2.3	3.6		
		1両青銅貨物 (産)	1916～1938	?	大塚	2.3	3.5		
		10銭アルミニウム貨物 (産, 1.5g)	1940～1941	1941 (昭和16)	祝女殿内	2.1	1.4		3期
第23図	6	10銭アルミニウム貨物 (産, 1.5g)	1940～1941	1941 (昭和16)	藤伊孔小	2.3	1.5		
第23図	7	10銭アルミニウム貨物 (産, 量計変更1.2g)	1941～1943	1942 (昭和17)	藤伊孔小	2.2	1.2	両面	
		10銭アルミニウム貨物 (産, 量計変更1.2g)	1941～1943	1942 (昭和17)	藤伊孔小	2.2	1.2	両面	
第23図	8	5両アルミニウム貨物 (産)	1938～1940	1938 (昭和13)	祝女殿内	1.8	2.8	円孔	
第23図	9	1両アルミニウム貨物 (産上)	1941～1943	1941 (昭和16)	大塚	1.6	0.7		
		1両アルミニウム貨物 (産下)	1941～1943	1941 (昭和16)	藤伊孔小	1.6	0.6		

(2) 近代金属製品 (第24図、図版9、第8表)

銭貨以外の金属製品を一括した。一覧表の材質については、あまり厳密ではない。磁力をもち赤錆がないものを「ステンレス」とした。「銅」としたものには真鍮等の合金も含んでいる。

○農具・馬具 鎌：幅の広いものと狭いものがあり、いずれも平鎌である。刃幅いっぱいには厚い耳がついており、近代沖繩通有の形と言える。幅広のものは多少損耗の程度差があるものの、同じ規格品と思われる。ヘラ：刃部が長くて長方形なものと比較的短くて先細りするものがある。両者の基部の作りには明瞭な差はないが、柄の形状には違いがあった可能性は残る。3の基部には僅か木質の柄が残存している。 斧：刃(ハ)・刃を差し込む木台(カブ)・木台に差す柄(ウィー)からなる、沖繩で古くから使われてきたタイプのもの、山仕事の代表的な道具である。刃は短く厚手で、木台に差す部分は片側のみが凹型になっている。 押切：木台と2枚の刃からなる、藁や干草を押し切る道



第24図・図版9-1 近代金属製品 (S=1/4)



図版 9-2 近代金属製品 (個別写真)



図版 9-3 近代金属製品 (農具)



図版 9-4 近代金属製品 (工具・部材)



図版 9-5 近代金属製品 (日用品)



図版 9-6 近代金属製品 (小型製品)

具である。木台に固定する方の刃が確認された。刃渡り 27cm を測る。蹄鉄: 22 点出土している。先端が上方に折れ、両側に鉄穴が穿たれる。鉄が残っているものもある。サイズには大小が認められた。

○工具 鷹口・手鉤・ペンチ・レンチ・差し金・鑿・鉋: といった、多種多様な道具が確認できた。

○部材 レール: 県営軽便鉄道のものであると思われる平底レールが出土した。高さ 45mm、頭部幅 20mm、底部幅 43mm、残存長 270mm である。端部側面に連結用の 2 穴があり、反対側底面にある互い違い 3 穴部分から先は欠失する。意図的に分割したものであろうか。

犬釘 (レール釘): 頭の形は楕円形のものが多く、長さは 8 ~ 11cm とバラつく。

○調理・食膳具 菜切り包丁 (図版 9-2): ステンレス製で全く錆びておらず、木製の柄も含めて残存状態は非常に良好である。刃は非常に薄い。かなり使い込んでいたようで、刃部には研ぎによる損耗が認められ、柄には補強のための針金が巻かれている。刃の平 (ひら) には、「日満 神徳 登録 STAINLESS STEEL」「切レヤミシ節ハ両方ヨリ少シ立テテ御トギ下サイ」との線刻が施される。銀メキシクスプーン (図版 9-2): ロゴマークとデザインから、【Wm.Rogers】製

「COTILION (1937年モデル)」のアイスティー／パフェスプーンである。祝女殿内屋敷から出土した。

○日用品その他 鉄：指掛けがある理容鉄2点、U字型の握り鉄(和鉄)1点を含む。 折疊式ナイフ(図版9-2)：縦折真鍮柄の折り畳み式のもの2点認められた。それぞれに線刻で「登録商標 肥後守」「登録 加東守」とあり、いずれもこの線刻内容から、1910(明治43)年以降の製造であることが分かる。 飾り金具(図版9-2)：彫金した薄い銅板を組み合わせたものが、木板に打ち付けられた状態で出土した。主釘を板の裏側で開き折りし、その部分に釘隠しの花紋があしらわれる。革筒の帯金具と思われる。 花瓶：銅製耳付で、胴部に横位に展開する細かな陰刻文様を施す。高級品と思われるが拉げており、詳細不明である。 徽章(図版9-2)：帝国在郷軍人会(1910年発足、1914年に海軍が加わる)のもので、43×28mmを測る。銅製で、剣と錠があしらわれるので海軍のものであろうか。中央に取り付けられるはずの星形部(別部品)は欠失し、径2mmの孔の中に銅製針片が残存していた。裏面には文字がなく、中央上下にバネピンの金具痕が残る。

第8表 近代金属製品一覽

大別	種類	細別	材質	点数	備考	図版	図版	整理番号
器具	鏡(くわ)	平、細広	鉄	5		第24図1	図版9-1-1	1-5
		平、細狭	鉄	1		第24図2	図版9-1-2	6
	ヘラ	長	鉄	1	本柄の一部が残存	第24図3	図版9-1-3	7
		短	鉄	3		第24図4	図版9-1-4	8-10
	鎌(かま)	草刈鎌	鉄	14	基部形状2種あり	第24図7	図版9-1-7	11-24
		稲刈鎌	鉄	1				25
	斧(おの)	刃	鉄	1		第24図5	図版9-1-5	26
	鉈(なた)		鉄	1	口輪あり		図版9-3-1	27
	山刀?		鉄	1	小型、長い中子に穿孔あり		図版9-3-2	28
	鉄(はさみ)	明込鉄	鉄	1	刃の片方のみ		図版9-3-3	29
組木鉄		鉄	1			図版9-3-4	30	
押切(おしきり)	固定刃	鉄	1	可動金具付		図版9-3-5	31	
鋸		鉄	22	サイズ・形状が多様	第24図8・9	図版9-1-8・9	32-53	
工具	歯口(とびぐち)		鉄	1	本柄の一部が残存		図版9-4-1	54
	手鉋(てかき)		鉄	2				55-56
	ペンチ		鉄	1			図版9-4-2	57
	レンチ		鉄	1			図版9-4-3	58
	第1金		ステンレス	1	目盛あり		図版9-4-4	59
	鋳(のみ)		鉄	1			図版9-4-6	60
	鋸(かんな)	刃	鉄	1			図版9-4-5	61
不明工具		鉄	1	端部リング状・実状			62	
部材	シール	平鉄シール	鉄	多数	鉄面にも穿孔し分別したか	第24図10	図版9-1-10	63
	釘(くぎ)	丸釘	鉄	多数				
組釘		鉄	5				64-68	
大釘		鉄	7			図版9-4-7・8	69-75	
鋸(かすがい)		鉄	6	断面円形と方形あり			76-81	
調理器具	包丁	菜切(薄刃)	ステンレス	1	完品、彫刻あり		図版9-2	82
			鉄	4	中子付を一括			83-86
	栓抜き	王道抜き	鉄	4	全て同型		図版9-6-1	87-90
	お玉杓子	陶部	アルミ	1	柄部を欠損			128
		シンメータービー	鉄	1	口輪厚銅片(内径約60cm)	第24図6	図版9-1-6	91
	鍋(なべ)	蓋	鉄	1	青色に塗装			92
		蓋つまみ	銅	1				93
	取っ手	鉄	2			図版9-5-1	94-95	
	スプーン	アイスティー／パフェ用	銀メッキ	1	柄に乳輪・ロゴマークあり、アメリカ製		図版9-2	96
	日用品その他	鏡(はさみ)	理容鏡	鉄	2			図版9-5-2
鏡り鉄(和鉄)			鉄	1			図版9-5-3	99
その他			鉄	5			図版9-5-4	100-104
指輪(ゆびめき)		銅	1			図版9-6-2	105	
ピンセット		先丸	銅	1		図版9-6-6	106	
毛抜き		銅	1			図版9-6-5	107	
ナイフ		折畳式	鉄・銅	2	縦折柄、彫刻あり		図版9-2	108-109
		小型	鉄・銅	1			図版9-5-5	110
ボタン		シャンクボタン	鉄	2	純銅	図版9-6-3・4	111-112	
ベルト		バックル	銅	1	朱色の革部分が僅かに残る			113
			銅	1			図版9-6-7	114
がま口		銅	1				115	
カンテラ		銅	鉄	1			116	
取っ手		鉄	1				117	
宇秤		鉄・銅	2	大小あり		図版9-5-6	118-119	
鏡筒		各部位	銅	3		図版9-6-8・9	120-122	
喫煙フック		鉄?	1	新欠あり		図版9-6-10	123	
飾り金具		革筒部金具	銅	1	板材に打ち付けた状態		図版9-2	124
花籠		耳付	銅	1	陰刻模様あり、拉げている			125
ボマード籠		非鉄	1	打刻文字あり			126	
瓶蓋	不明	非鉄	1	「HaKutaka」			127	
徽章	帝国在郷軍人会	銅	1	「◎」欠損、裏面文字なし		図版9-2	129	

(3) ガラス瓶 (第25図、図版10、第9表)

市販商品容器としての「ガラス瓶」を一括した。以下に、エンボス等から来歴が判明した主要な物品を報告する。

○飲料・調味料 **ビール**：【大日本麦酒】(1906～1945) 製品が数点確認された。大正初め頃まで製造されていたコルク栓型でキックをもつものも1点含まれるが、それ以外は全て王冠栓と思われる。 **サイダー**：「金線サイダー【金線飲料→日本麦酒醸造】」(1899～1933)・「ダイヤモンド印サイダー【布引醸造所】」(1899～)・「三ツ矢サイダー【日本麦酒醸造】」(1921～1933)。その他、珍しいものとして「別府醸造サイダー」の破片が1点認められた。 **牛乳**：容量が5勺・1合(18 匁)のものがあり、口部が確認できるものは全てスクリュウ口である。1合のものには「上原牛乳」のエンボスが確認できる。飲料としては他に**ウィン・ラムネ**が数点認められた。 **化学調味料**：「味の素【鈴木商店】」が4点あり、瓶の形状から1928～1940年頃の製造品である。全て祝女殿内屋敷からの出土であった。同じ形状で底面に右書き「味の鑑」と彫刻される瓶もあり、当時多く流通した類似品と考えられる。 **醤油**：「亀甲萬醤油【野田醤油醸造】」(1931～)は、ロゴ部分の破片資料である。

○化粧品・薬品等 **化粧水**：「ホーカー液【堀越嘉太郎商店】」(1909～)、「白色美顔水【桃谷順天館】」(1914～)。この他に来歴不明のものも数点認められた。 **クリーム・髪油類**：「パニシングクリーム【久保政吉商店(現ウテナ)】」(1928～)が最も多く得られており、所謂統制陶器瓶も1点含まれる。次いで多いのが、底面に「平尾分店」のエンボスがある十角形白色瓶とその類似品である。その他、【平尾賛平商店】の「レートフード(1915～)」、「レートメリー(1918～)」、「ヘチマクリーム【天野源七商店(現ヘチマコロソ)】」(1915～)、「メヌマボマード【井田京栄堂】」(1918～)、「鈴虫香油【島村商店(現シマムラ)】」(1912～)。また、これらに類似した瓶が数多く得られている。 **白髪染め**：「わかきみ」。裏面に「定量線」のエンボスあり。 **目薬**：1931年に発明された両口点眼瓶が3点あり、うち2点は【信天堂山田安民薬房(現ロート製薬)】製。 **除虫剤**：「キンチョール【大日本除虫菊】」(1934～)。 **常備薬**：「神薬(製造元不明)」(1877～)。 **その他薬品瓶**：瓶色・形状が多様で小型のもの、中型で目盛りが彫刻されるもの等、数多く認められた。

○文具 **インク瓶**：【セーラー】(1911～)、被熱による変形が著しい。【丸善】(1898～)、底面に「登録M」のエンボスあり。その他来歴不明のものも数点あり、靴型瓶のものは「チャンピオンインキ【藤崎インキ】」か。 **糊**：「フエキ糊」(1898～)の他に、所謂「アラビア糊」の瓶が1点得られている。 **接着剤**：「IMPROVED AKAO CEMENT」のエンボスあり。



第25図 ガラス瓶 拓本 (S=2/5)



①(飲料・調味料)



②(化粧品-透明系の瓶)



③(化粧品-白色系の瓶)



④(詳細不明薬品瓶)



⑤(医療用・目薬等)



⑥(日用品その他)

図版 10 ガラス瓶

(4) 近代円盤状製品 (図版 11、第 10 表)

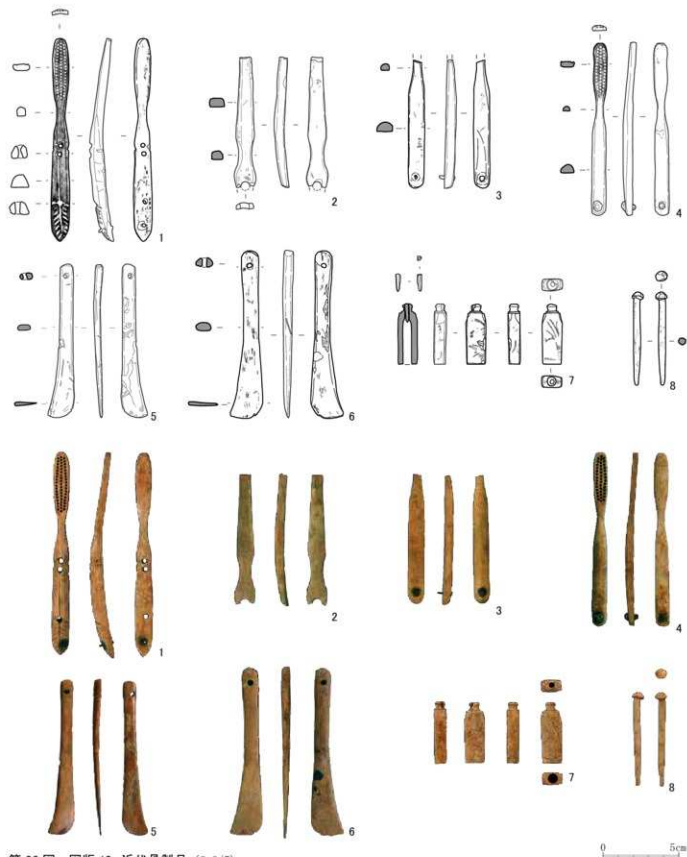
縁辺を打ち欠き、或いは研磨して円盤状にしたもののうち、近現代の産物と判断したもの及び石製のものを一括した。陶磁器片を加工した同様の製品については次章にて報告するが、これらの用途は石蔵りやおはじきといった遊びに関するものとされる。戦前の記録でも、「裏(カーミ)の破片を丸くして遊んだキルトウングァシェー(石けり)」をして遊んだ、という証言が『上勢誌』に残っている。

第 10 表 近代円盤状製品 観察一覧

図版	図番号	素材	縦	横	厚	重さ	観察事項	出土層数・地点
図版 11	1	ガラス	4.8	4.6	0.9	25.0	緑色瓶底部を転用。片面は平坦、もう片面は凸面を呈す。縦縁は細かく打ち削り、部分的に研磨あり。	大塚
	2	ガラス	2.4	2.3	0.2	2.0	薄緑色の瓶ガラスを転用。	長女院内
	3	タイル	4.3	4.2	1.1	22.2	白色タイルを転用。裏面には規則的な凹凸あり。縦縁は丸く打ち削る。一部欠損。	大塚
	4	コンクリート	5.6	5.2	1.6	82.2	表面は灰色のセメント質で、平行する凸縁あり。	磯伊乳小
	5	石	5.0	4.8	1.4	54.7	表裏面に凸縁あり。縦縁は打ち削りと研磨あり。	品 01
	6	石	7.0	4.2	1.1	53.0	石灰質を含む石灰質。平突。	大塚



図版 11 近代円盤状製品



第26図・図版12 近代骨製品 (S=2/5)

第11表 近代骨製品 観察一覧

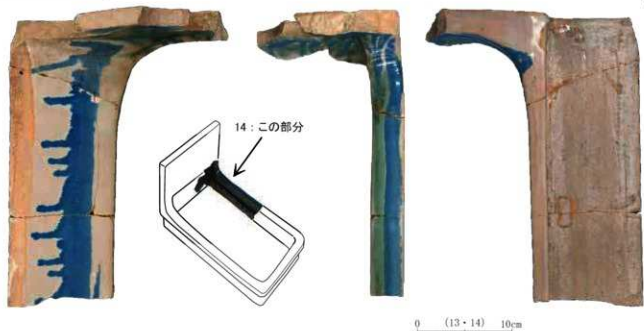
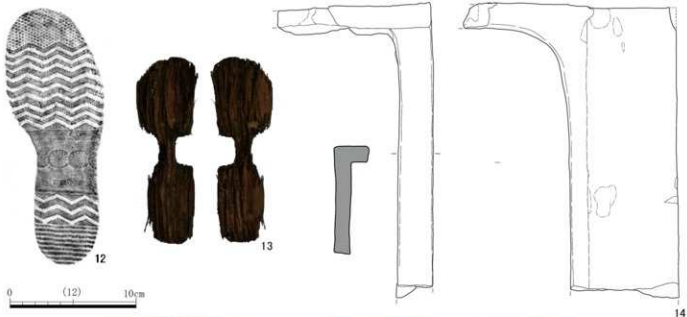
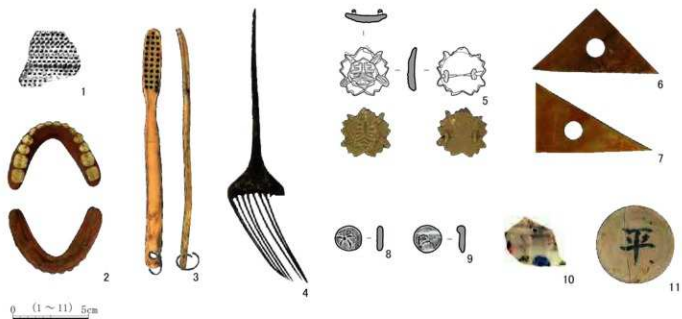
図版 図版12	図番号	器種	長	幅	厚	観察事項	出土層・地点
第26図 図版12	1	歯ブラシ	13.4	0.6~1.3	0.4~0.8	両方に大きく反る。先端に3孔あり。袖毛部の下に括弧。納断面は溝状孔。柄部に3孔。柄に3孔。袖毛3孔。	最大層小
	2	歯ブラシ	8.6	0.8~1.4	0.4~0.6	後方に反る。袖毛部欠失。柄下方に括弧。納断面は溝状孔。柄部に3孔。柄に3孔。	ウラミチ (S.20)
	3	歯ブラシ	8.5	0.5~1.1	0.4~0.6	袖毛部欠失。袖毛部の下に括弧。納断面は溝状孔。柄部に3孔。	ウラミチ (S.3)
	4	歯ブラシ	11.4	0.5~0.9	0.3~0.7	先端に3孔あり。袖毛部の下に括弧。納断面は溝状孔。柄部に3孔。	最大層小
	5	歯縫ヘラ	10.2	0.9~1.8	~0.5	全面に貫孔。基部に径3mm孔。	溝伊礼小 (S.4)
	6	歯縫ヘラ	11.1	1.0~2.2	~0.6	基部に径3mm孔。	大層
	7	笄	4.0	1.3	0.8	体部は立方体でソケット状貫通孔あり。棒状品刺さったまま残存。右側面に草文(?)の彫刻。	坂女室内
	8	不明	6.2	-	0.5~0.8	削り出しによって丸面の釘状を呈する。	名品庫

(5) 近代骨製品 (第26図、図版12、第11表)

歯ブラシ (第26図1~4): 9点の資料が得られており、4点を図示した。破損品が多いが、共通した特徴として、①植毛列が3列である、②植毛列に対応する3孔がブラシ部先端に穿たれている、③1点を除いて柄尻付近には柄厚より長い金属製両頭鉋が通されている、ということが挙げられる。1は柄が後方に強く反り、出土資料中最も厚い作りになっている。素材がかなり限定されるが、詳細は不明である。穿孔や線刻による羽状文の描出により、非常に装飾的な感を受ける。2も柄が後方への反りが強い資料である。柄部の両側面に挟りがあり、握った時の指への引っ掛かりが良い。柄尻孔は径約5mmと大きい。3は比較的小ぶりで柄があまり反らない。9点中7点がほぼ同型であり、通有の規格だったのかもしれない。**縫縫ヘラ (第26図5-6)**: 4点の資料が得られており、完形の2点を図示した。下方の縁辺は片側に尖った弧を描き、この弧の部分が薄くなって刃部を形成している。軸頂部は幅1cm弱でやや厚みをもち、円孔が穿たれる。**筭 (第26図7)**: 左右分割型の片方と思われる、括れた基部には軸棒が刺さったまま残存していた。穿孔は貫通する。非常に不明瞭であるが、体部側面に草花文及び文字のような黒色の細描きが残される。**その他 (第26図8)**: 削り出しによって頭部が半球形の長釘状を呈する製品である。筭の軸であろうか。

(6) 近代日用品等 (第27図、図版13)

おろし器 (図版13-1): 磁器製の小片が1点確認されたが、おろし目がある平板状部分のみのため、全体形状は不明である。「町史3」には、戦前の北谷村で日常使われる調理器具の1つとして、「ソーガスリ」が挙げられている。**入れ歯 (図版13-2)**: 下顎用で、やや右側に偏った咬耗が認められる。歯肉部はオレンジ色を呈するが、切歯直下の見え易い部分には肌色の塗色がなされている。日本歯科医学会によると、恐らくゴム床義歯(1880~1945)であり、人工歯は陶材であるとのこと。当時は健康保険がなく、全て自費診療だったので、かなり高額の診療代であったとされる。**歯ブラシ (図版13-3)**: セルロイド製と思われるものが4点得られた。体部はほぼ扁平であり、植毛列が4列認められるものもある。いずれも柄尻に円孔があり、完品のものには金属リングが通されている。**櫛 (図版13-4)**: セルロイド製が3点得られた。1点は完形に近い縦長黒色のもので、櫛歯数は10本、櫛歯の長さは65mmである。串状の持ち手は約100mmを測る。他の2点は非常に薄い作りの破片資料で、櫛歯の長さは14~16mmである。**徽章 (第27図5)**: 枯草色を呈する陶製章が1点得られた。桜花の形をしており、「北谷」の文字に「剣」と「ペン」が斜めに交差する。村内の国民学校のものであるのか。**三角定規 (図版13-6・7)**: セルロイド製のものが4点見つかっており、現在通常使用されているもの比べてだいぶ小さい。直角二等辺三角形と半正三角形がそれぞれ2点ずつで、目盛がないものもある。**ビー玉**: ビー玉8点のうち、ラムネ玉栓であった可能性が薄い薄緑色無文のものが2点あり、その他は全てマール模様をもつ。また、7点が径約1.5cmを測り、1点のみ径約1cmであった。**おはじき (第27図8・9)**: 2点のおはじきには同じ花文が隔刻されており、形状が歪でも雑である。**瓶蓋**: プラスチック製の完形品が2点得られた。径はそれぞれ35mm・45mmを測り、いずれも内側にスクリューを持つ。白色ガラス瓶に取り付けられていたものと思われる。**磁器製クリーム瓶? (図版13-10・11)**: 10は色絵の施された破片資料である。多角円柱形を呈し、横位に凹縁が巡る。草花文(赤・青・緑)とともに、「止」字の一部が認められるが、「止」を部首に含む別の漢字かも知れない。確認はないが、復元径5.6cmであることから、化粧クリーム瓶の類ではないかという印象を受ける。瀬戸美濃系と思われる。11は、内面のみ施軸された短円柱形のクリーム瓶である。口唇から7mm下に僅かな段を有していることから、蓋が伴うものと思われる。底外面には「平」字が墨書されている。「祝女殿内」不明建物からの出土である。**服飾ボタン**: 非金属製が5点得られた。4穴と2穴がある。白色の3点と乳緑色の1点はガラス製であろうか。こげ茶色の1点は有機質のもの(皮革?)を素材にしているようである。**靴ゴム底 (第27図12)**: 右4点、左3点が見つかっており、裏面の模様は全て同一である。学校の制靴であろうか。残りの良いものには、【日本ゴム(現アサヒコーポレーション)】の「波に朝日」のロゴマークの他、「4500」「公」といった文字も認められる。「公」の文字は統制下の公定価格を意味するという。サイズは20~23cmであるが、劣化や被熱による縮みも考えられる。**不明木製品 (図版13-13)**: 約20×6×1.5cmの扁平材で、胴部中央を側面から挟入させている。用途不明。「照屋先生」屋敷内の石組遺構からの出土である。**和式便器 (第27図14)**: 信楽焼大便器の破片が確認された。灰白色地に瑠璃色・薄青色の色軸が施される。出土地点から「祝女殿内小」の屋敷に設置されていたものである可能性が高い。平面形は方形を呈し、楕円形のものより先出とされる。**磚子**: 磁器製の破片資料が集落内に多く散乱していた。絶縁部の傘が二重となる「二重通信用磚子」で、電信用とされる。北谷村では、1929(昭和4)年頃から北谷郵便局にて電信業務が始まっている。



第 27 図・図版 13 近代日用品 (S=2/5・1/3・1/4)

(7) 石臼 (図版 14、第 12 表)

石臼は 9 点出土している。本来は上下一対で 1 点とすべきであるが、対で一組の資料を特定できなかったため、上下いずれか単体をもって 1 点とカウントしている。地区別の出土は HA ② 6 点・HA ③ 3 点で、グリッドは HA ② 14・J6・C2・A9・F1・T9、HA ③ A10・F10・G7 である。遺構では「祝女殿内小」・「瓦屋又吉小」・「名嘉座」井戸 3 及び S-2、層序はⅡ層・Ⅱ層上部・遺構一括・Ⅰ層一括である。上臼 5 点・下臼 4 点が出土し、全て破損資料である。そのうち残存部が多く状態の良い資料と特徴的なものを抜き出し、上臼 3 点・下臼 1 点を図に示した (図版 14-1~4)。

一般的な碾臼には、茶臼・薬研・挽き臼・磨臼など、使われる地域や用途に応じ多様な種類がある。通常の径は、製作最盛期の尺貫法で一尺六寸 (約 48.3cm)、一尺八寸 (約 54.3cm)、二尺 (約 60.6cm) の 3 タイプがあり、高さは対で 2 尺 2 寸 (約 67cm) とされる。民俗事例では、小型の石臼は一人でも使用可能だという¹¹。

形態は、上臼・下臼の接触面の中心に、上下を固定するための丸い芯棒孔が掘られる。供給口は中心より偏心位置にあり、材料を投入すると外方向へ広げる作用をする。下臼を固定して上臼を回転させるが、手回しの場合は反時計方向に回す。材料は次第に細くなり、円周方向へ排出される。側面には遣り木 (やりぎ) を埋める四角形の横打込穴が掘られる。上臼・下臼それぞれの接触面は主溝で区画され、副溝が刻まれる。上下を噛み合わせる白面の刻みには地域によって違いがあり、近畿やその周辺は 8 区画、関東・九州は 6 区画が多い。石臼職人 (白師) が臼の噛み合わせを実際に挽きながら調整を行う¹²。石臼の石材は、全国的に地元産の石を使うことが多い。

主な用途は豆類・雑穀類の脱穀・製粉である。石臼の出自年代や開始時期は、種類により古くは平安時代に始まり、江戸時代初期には一般に広まる¹³。

本調査の資料は、かなり破損が激しいうえ使用頻度が高く、図版掲載のない資料には区画の判別不能なものが多い。形態は一般的な石臼との差異はあまりなく、接触面の中心に掘られた丸い芯棒孔は、直径 2.5cm 程度である。しかしサイズについては、復元径が最大でも 32.8cm と小型を呈しており、沖繩独自の大きさと思われる。高さに関しても本土でみられる石臼と比較し、残存資料は単体で 6.5~13.5cm と厚みがない。同じ上臼でも個体別で高さが 2cm 程度変わる。また、円周沿いに一周する上臼の縁部幅も、同様に幅が若干異なる。供給口が残存する資料ではその径 3.4~4cm、側面の横打込穴は対極に 2 箇所確認される。さらに、歪みがある、下臼の下面が荒削りであるなど、白面の噛み合わせ区画の彫り込みが雑な資料が認められた。石質の面では、既に報告されている石臼には砂岩製のものが多いが、それ以外に今回は沖繩本島外産と推測される火山岩性の凝灰岩・火山礫凝灰岩・巨晶花崗岩のものが確認されたことが特筆する点である。上下接触面の溝についても、小堀原遺跡の資料を参考に 6 区画と仮定したものの、そうとは考えにくい資料が認められる。読谷村歴史民俗資料館所蔵の資料も検討したが判然としない。接触面の噛み合わせ区画にも、沖繩独特の規格性があった可能性も推測される。前述した他県での事例では、職人が臼の噛み合わせを挽きながら調整を行うとしたが、今資料は作りが雑なものが多い。用途は自給作物として作られた小豆・大豆・粟・麦などの脱穀・製粉で、豆腐作りの際にも使用された。上勢頭字史の聞き取り事例から、大正時代には農作業用に普及している。1 は上面中央窪み部分に雙使用痕があり、両側面の横打込穴の彫り込みが対極に 2 箇所、裏面には研磨面がみられる。2 は凝灰岩特有の縦縞模様を有し、裏面の区画溝は認められず、使用時の研磨痕が残るのみである。3 は、素材に含まれる鉱物の結晶が大きく、特徴的な巨晶花崗岩を用いている。4 は側面に凹凸があり正円でない。上臼の縁部幅は、3 は幅が 3.5cm と幅広に対し、1 は幅 2.5cm と細い。全出土資料の計測値を第 12 表に示した。

註 1・2 日本民具学会 (編) 1997 『日本民具事典』(株)ぎょうせい

註 3 江戸遺跡研究会 (編) 2001 図説 江戸考古学事典 柏書房

第 12 表 石臼 観察一覧

質量単位 (cm/kg)

図版 番号	番号	上/下 部	完/破	残存	計測値				上臼 /下臼	石質	地区・グリッド・層・遺構 付録 (表) 番号			
					復元径 (直径)	高さ (残存)	縁部 幅	上臼 縁部幅				上臼供給口 /直径	上臼側面/遣り木穴 幅×横×奥行	
図版 14	1	欠損	4/5	28.5	7.2	6.8	2.5	有り/3.6	有り	2.5×3.5×2.8	有り	砂岩	HA ② G7 B 台 3420	
	2	上臼	破損	1/5	32.8	8.5	2.6	3.0	有り/3.4	無し	破損/不明	不明	凝灰岩	HA ③ F10 B 5 2 台 3314-1
	3	上臼	破損	1/5	29.0	8.0	2.8	3.5	有り/3.5~4.0	無し	破損/不明	不明	巨晶花崗岩	HA ② T9 B 高台 4249
	4	下臼	欠損	4/5	28.0	8.0	9.5	-	-	-	-	不明	砂岩	HA ② C2 1 脱穀台 4236
図版 なし	—	上臼	破損	1/8	31.5	10.2	3.5	3.0	破損/不明	有り	2.5×4.5×3.5	有り	砂岩	HA ② J6 B 取 96
	—	上臼	破損	1/4	27.8	8.8	3.0	3.0	有り/4.0	有り	2.8×3.5×3.0	有り	砂岩	HA ② A10 B 台 3416
	—	上臼	破損	1/8	26.5	13.5	2.4	-	-	-	-	不明	丸山凝灰岩	HA ③ H 名嘉座 井戸 ② 2621
	—	下臼	破損	1/2	29.5	8.0	4.5	-	-	-	-	不明	凝灰岩? 人工?	HA ② A9 B 脱穀小 SD09 台 4237-1
—	下臼	破損	1/10	28.0	6.5	0.9	-	-	-	-	不明	砂岩	HA ② F1 B 瓦屋台 4201	

(8) 軽石製品 (第 28 図、図版 14)

自然の水磨とは考えられない痕跡が認められるものを軽石製品として抽出し、1 点を掲載した。図 5 は、上部が破損しているため全体形状は不明であるが、やや方形を呈し扁平な資料である。表面中央は平坦に面を成し、両端下部に小さく角度の違う異なる面も認められる。また、右側面・裏面にも同様の面が形成され、下端部にも面が確認できる。色調は全体に黒褐色を呈す。HA ㊸ E17 II 層からの出土で、計測値は縦 7.5cm、横 6.6cm、厚さ 2.6cm、重さ 49.1g。軽石製品は、伊礼原 D 遺跡でも 1 点出土している。

県内では煮炊きに薪を使用していた頃、頻繁に海岸に軽石を取りに行ったという証言が民俗事例としてある。軽石の硬さが鉄鍋等のスス落としに最適であったという。軽石は火山の噴火による噴出物で、含まれる鉱物の種類と成分の比較で判別する。厳密にはスコリアとバミスと呼ばれる 2 種類に分類される。海に流出後、波や海流の影響で沖縄各地の海岸に流れ着くことが多く、波打ち際に留まり汀線を示す。このため北谷町での過去の発掘調査においては、製品ではない軽石についても汀線推定を示す自然遺物として取り扱っている。



第 28 図・図版 14 石臼・軽石製品

(9) 瓦 (第29・30図、図版15、第13表)

本遺跡出土の瓦は、HA③3601点、HA②2622点、HA④2416点、HA①1点の計8640点の出土である(第13表)。隣接する平安山B遺跡では216点とその出土量は約40倍に上るため、瓦葺の建物が想定される。第29図に瓦の出土地の平面分布を示した。これによるとHA③のF・G15～18を中心にHA③・HA②・HA④に分布する。特に集中する場所について第29図を参考にすると、「小渡小」が最も多く、次いで「祝女殿内」、他の屋敷もほぼ全般にわたって出土する。また、HA③F11は「大屋小」の石が集中していた場所と重なり、小規模の建物が想定される。HA②からの近代遺構の延長部分に相当するHA⑦では、E10・F10・G14・H14に集中する。また、瓦の特に集中する「小渡小」・「祝女殿内」・「三良又吉小」の3カ所を中心に、沖縄産無釉陶器(10数点)・沖縄産施釉陶器(数点)・近世の本土産陶磁器(10数点)に接合されるものがあるため、戦後の米軍基地建設時の整地により、「小渡小」付近にかき集められた可能性も否定できない。出土した瓦のほとんどは明式瓦の赤瓦である。しかしこの他に、灰色瓦・高麗系瓦・近世大和系瓦が各々1点確認された。いずれも小破片ではあるが、キャンプ桑江北側地区では初見である。完形に近い近代の丸瓦・平瓦と併せて図示した。以下、各々について略述する。

図1は高麗系瓦の小破片である。5cm大で、表面に有軸羽状の敲きを施すが摩耗し、裏面には布目痕を残す。すり切り痕を残す本来の高麗瓦からは外れるものと思われる。厚さ1.5cm。器色は内外面とも暗茶褐色。内部が灰色のサンドイッチ状をなすもので、HA③G9Ⅱ層の出土である。図2は近世大和系瓦の縁部分で、表面に幅1.0cmの柳掻を左右斜めに施すものである。厚さ1.55cm。内外面は黒褐色を呈し、本体は近代灰色を呈することから燻したものである。混和材に石英・ガラス質の鉱物が含まれる。HA④E10 SD51Ⅱ層の出土。同類の瓦は、那覇市御園工所跡(1991)で大量に出土している。

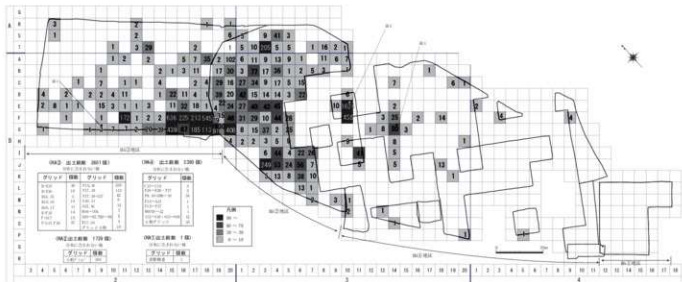
図3は明灰色の平瓦で、厚さ1.6cm。砂質を呈する。裏面に縄目が見られることから上縁部分と考えられる。HA④G14Ⅱ層の出土である。図2と3は後述の近代瓦よりは古くなるもので、出土地の周辺からは染付や青磁なども出土しており、時代的にも符合する。主体となる赤瓦の丸(図4)と平(図5)も、各々1例を示した。図4は瓦の縁に接着のための漆喰を厚さ8mm塗る。色調は暗褐色を呈し、赤瓦の中でも焼成が良い。模骨の大きさは10.8cmが想定される。

図5は平瓦で、明赤褐色を呈する。表面のヘラナゲや裏面の縄目痕は明瞭に残る。

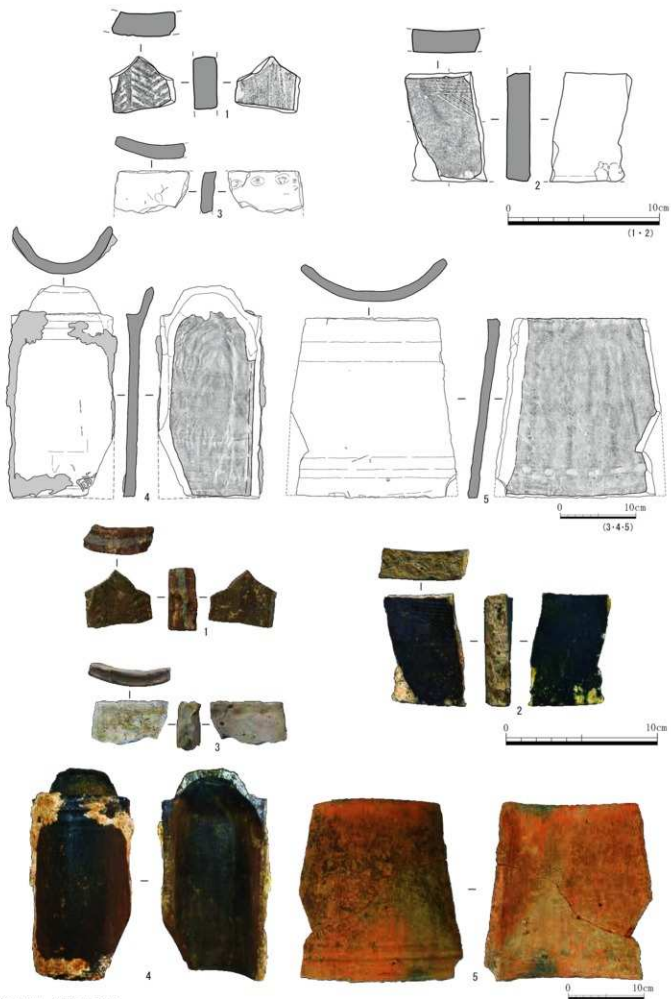
第13表 瓦出土量

地区	層	遺構	分類										不明	合計			
			丸	赤	平	高麗瓦	平	赤	茶	白	茶	白					
HA③	I			80	14				341	2					437		
	II	遺構	3	461	22	4		2009	2	3				2505			
	III		1	107	9		1	409	2	5				534			
	IV	遺構								1				1			
	V	遺構								23				30			
HA②	I		1	12	2				79					94			
	II	遺構	4	2	667	47	4	1	2862	4	10			3601			
	III								286	1	1	3		364			
	IV	遺構							165	6	2	4		231			
	V	遺構							5					5			
HA④	I			209	44	8	156		877	9	7	597		2007			
	II	遺構							2	1				3			
	III	遺構							4	3				10			
	IV	不明							2	1				3			
	V	小計			329	56	10	156		1337	16	14	704		2622		
HA⑤	I						6							47			
	II	遺構							16		11			177			
	III	遺構							42	1	9			315			
	IV	遺構							196	2	121	7		328			
	V	遺構									2			2			
HA⑥	I													3			
	II	遺構									1			3			
	III	遺構									5	4		10			
	IV	遺構												2			
	V	小計							255	6	147	7		411			
HA⑦	北岸路													1			
	北岸路													1			
合計			4	2	1251	109	161	163	1	5841	25	212	716	7	10	138	8640
分類別計			4	2													

(図2大和瓦・図3灰色瓦は集計に含まず)



第29図 瓦平面分布



第30图·图版15 瓦

(10) 瓦二次製品 (第31図、図版16、第14・15表)

破損品を利用した二次製品が18点出土している。円盤状製品にみられる打ち割りで形を成すものでなく、擦りの痕跡のみが確認される資料については、別用途として選別した。遊具として中央に孔を穿つ独楽製品以外の資料も出土している。

大きく分類すると、1. 中央に穿孔するもの、2. 穿孔のないものに分けられ、穿孔のないものは円形以外に四角形・三角形の形状のものが確認された。以下、全体の出土量を第14表に、資料の観察一覧を第15表に示した。

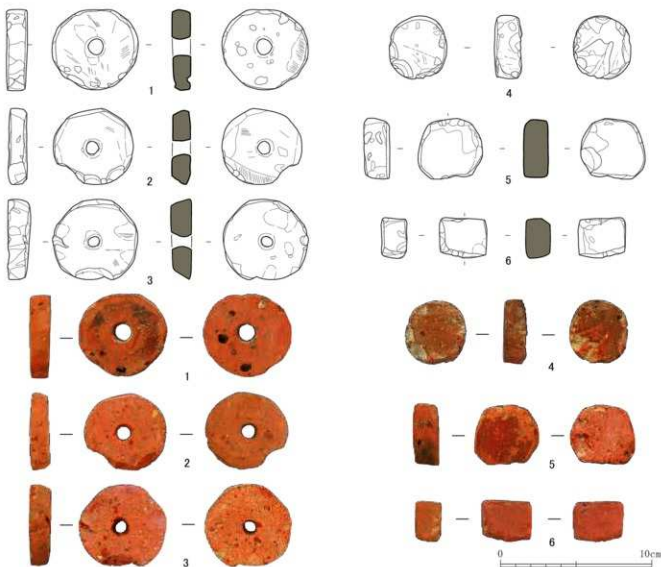
第14表 瓦二次製品出土量

地区	層	遺物	孔状		円形		円四角		三角形		合計
			有孔	有無不明	有孔	孔無し	有孔	孔無し	有孔	孔無し	
HA③	遺	1	3				1	1	1	7	
		S3.4.16	1	1			1			3	
HA②	遺	1	3	1	2	1				7	
		小計	5	0	2	1	2	1	1	18	
合計						14		3	1		

第15表 瓦二次製品観察一覧

質量単位 (cm/g)

第31図	図番号	形状	突/破	縦	横	孔の有無	有孔の径	厚さ	長さ	観察事項	地区・グリッド・層	
第31図	1	円形	突	5.6	5.2	有孔	1.0	1.0	1.3	45.0	表裏の両面研磨あり/やや多孔隙/四縁を複数回に分けて磨り整える	HA② C1 II 台 4108
	2	円形	突	5.3	4.9	有孔	0.8	0.8	1.2	35.7	表裏面研磨あり/両面部分的に擦痕あり/一部破損し正行でない	HA② C20 II 台 565
	3	円形	突	5.4	5.3	有孔	0.8	0.6	1.4	50.1	表裏面研磨/裏面に一部布目擦痕認められる/四縁欠けを生じる	HA③ F15 S-3 II 台 536
	4	円形	突	4.2	3.8	孔無し	-	-	1.7	29.1	表裏面研磨あり/裏面は一部削り残し/四縁にも欠けが認められる	HA③ C1 II 台 566
	5	円形	突	2.3	4.3	孔無し	-	-	1.6	33.1	表面は灰の気味の色が残る/裏面裡かたが布目粗あり/形状は平	HA③ B2 II 台 4107
	6	四角形	突	2.5	3.2	孔無し	-	-	1.7	19.7	四角形で六面研磨あり/破損後ならに擦痕から判断すると両面研磨し	HA③ D15 S.4 II 台 876
図版16	1	円形	突	4.2	4.7	有孔	1.0	1.0	1.1	25.9	表裏面研磨/やや薄手/孔は両面から穿つが表面からの穿孔大きい	HA③ K6 II 取 55
	2	円形	突	4.5	5.0	有孔	1.0	1.0	1.1	32.2	表裏面研磨/磨り痕跡明瞭/裏面に有孔分岐/左右厚み違いあり	HA③ B8 II 台 2523
	3	円形	突	7.0	4.0	有孔	-	-	1.3	44.7	平欠するが、中央に穿孔あり/表裏面研磨あり/裏面に明瞭な布目痕	HA③ J5 I 覆土 265
	4	円形	突	6.2	4.2	有孔	-	-	1.2	41.5	形状は円より角を挟す/両面研磨/中央に穿孔あり/四縁の擦痕が薄	HA③ E16 II 台 1755
	5	円形	突	6.0	3.2	有孔	-	-	1.5	38.7	表裏面研磨/厚手/平欠するが中央に穿孔あり/四縁は複数回の磨り	HA③ D15 S.16 II 台 514
	6	円形	突	5.6	2.3	有孔	-	-	1	26.3	表裏研磨/平欠するが中央に穿孔あり/四縁の磨りの面が細かい	HA③ A18 II 台 2880
	7	円形	突	2.6	3.9	有孔	-	-	1.3	12.8	破片だが、中央に穿孔の痕跡あり/表裏面研磨/四縁を磨り四縁跡	HA③ E20 II 台 708
	8	円形	破	3.8	2.5	孔無し	-	-	1	16.7	破片/孔なし/表裏面研磨/薄手/四縁も磨りの痕跡/形状は平	HA③ F20 II (オカミチ) 台 694
	9	円形	破	4.0	2.5	有孔	-	-	1.4	18.8	残存部分は全体の四分の一/中央に穿孔あり/表裏面に磨り痕跡	HA③ F11 II 台 1359
	10	四角形	突	3.4	3.5	孔無し	-	-	1.4	26.0	形状は変形四角/六面研磨あり/四縁の擦痕は明瞭で滑沢	HA③ F12 II 台 1892
	11	四角形	突	5.0	5.3	孔無し	-	-	1.5	54.4	形状は変形四角/表裏研磨/一部破損あり/四縁磨りなし/手摺れが廣化	HA③ F12 II 台 1483
	12	三角形	突	2.5	3.0	孔無し	-	-	1.7	13.5	残存形状・角部/表裏面・側面に研磨あり/破損後さらに再削り	HA③ A10 II 台 2515



第31図・図版16 瓦二次製品

第4節 近世以前の遺構

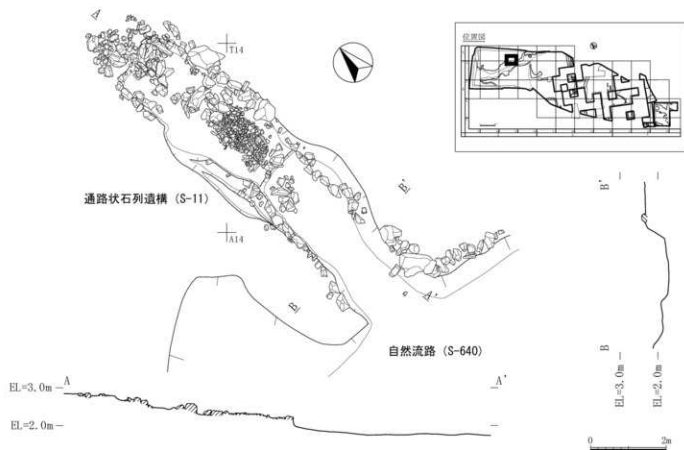
IV層上面にて2面目の遺構群を検出した。Ⅲ層中・下から掘り込まれるもの（グスク～近世前半）と、Ⅱ層下から掘り込まれるもの（近世後半以降）とが存在するが、全ての遺構に対するの厳密な識別は困難であった。また、IV層中からも埋葬遺構と思われる人骨・犬骨を検出しているが、時期決定の根拠に欠けるため、これらの遺構は本節でまとめて報告する。

(1) 石列遺構・自然流路

大小様々な自然流路が見つかっており、原地形復原を目指す上で重要な成果である。これらの流路に対して、人的働きかけを示すような遺構も散見された。

・通路状石列遺構 (S-11)・自然流路 (S-640) (第32図、図版17・18)

HA③において、大型自然流路 (S-640) とそれに直交する石列遺構 (S-11) を検出した。S-640 はHA③調査区を東西に横断するように走っている。『平安山原B遺跡』(2015 北谷町教委)でIV層(貝塚後期)とした自然流路に連なるものと



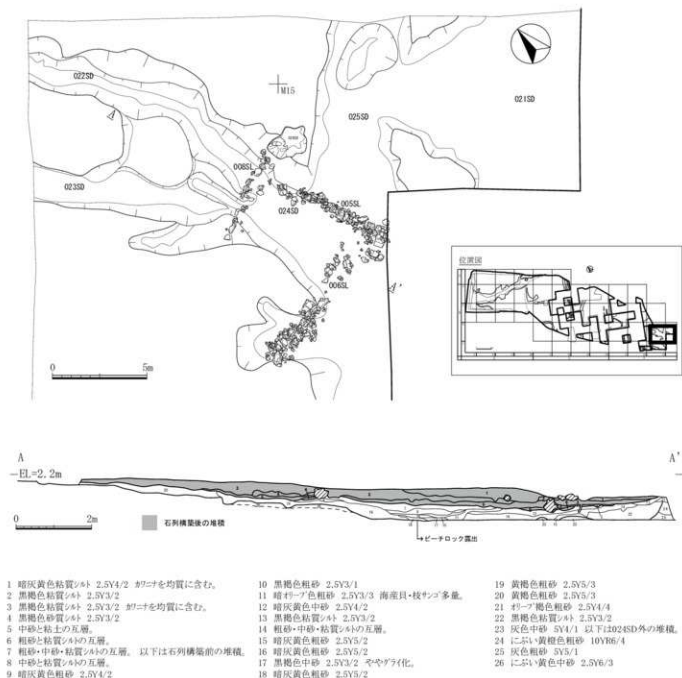
第32図 S-11・640 (S=1/100)



図版 17 S-11 検出状況 (北東より)



図版 18 S-11 と S-640 立地状況 (南西より)



第34図 005・006・008SL、021～025SD (平面S=1/200、断面S=1/100)



図版 19 石列・自然流路検出状況 (南西より)



図版 20 024SD 土層断面 (南西より)

思われるが、ある段階において舌状に飛び出した岩盤丘陵付近で分断された可能性もある。完全埋没は近代に入ってからであり、それ以前の遺構配置に影響を与えていることから、流水の有無に関わらず、近世段階では河川状の窪地を呈していたことは確実である。埋め立て後にはこの流路上に平安山集落の東西道路（「ウラムチ」）が構築され、「祝女殿内」屋敷より北側の屋敷割がなされたものと考えられる。

S-11は溝状に掘り窪めた側縁に礫を並べており、中途には小礫が敷かれている。流路中～下位まで降りるような階段状を呈しているため、汲水等を目的とした通路ではないかと考えられる。

・土留状石列遺構（005・006・008SL）・自然流路021～025SD）（第34図、図版19・20）

HA①において、3条の石列遺構とそれらを基にして区画された棚田状の空間を検出した。これらは旧ナガサ川北岸に注ぎ込む自然流路を堰き止めることで、人為的に耕作域を形成したものと思われ、以後の近世平安山集落における居住・耕作の空間設定に影響を与えている。層序の概念上、石列構築後に堆積した土壌をⅡ層として取り扱っている。石列の長さはそれぞれ、005SLが約510cm、006SLが約540cm、008SLが370cmであり、これらの石列によって区画された面の標高差は約30cmである。遺物は多くはないが、近世陶磁器片や簀が出土している。

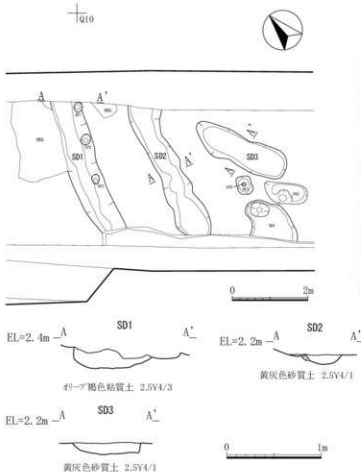
これらの石列は、数流検出された自然流路のうち、024SDとした部分に構築されている。小流路022・023SDが合流することで本流路は形成されており、流水方向は概ね北西→南東である。更に北東からのSD25と合流して旧ナガサ川に流れ込んでいたものと思われるが、ほどなく流路底面が広大な広がりを見せる「ビーチロック」となる。024SD底面からは青磁碗破片（第106図49）が出土した。よって、流路として機能していたのもこの頃とみて大過ないものと思われる。

（2）溝状遺構

HA④の各所にて、区画・排水を目的としたと考えられる溝状遺構が検出された。2条が対になるものがあり、周辺で検出されたピットには、これら溝の走行方向と対応するように配置されるものも多く看取される。

・SD1～3（第35図、図版21）

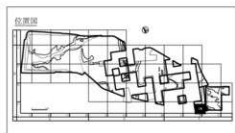
SD1・2は2条1対であるような印象を受ける。また、SD1プラン内にて溝走行方向に沿うように配置されたピットが3基検出されている。遺物は、SD1から褐釉陶器・沖繩産施釉陶器が出土した。

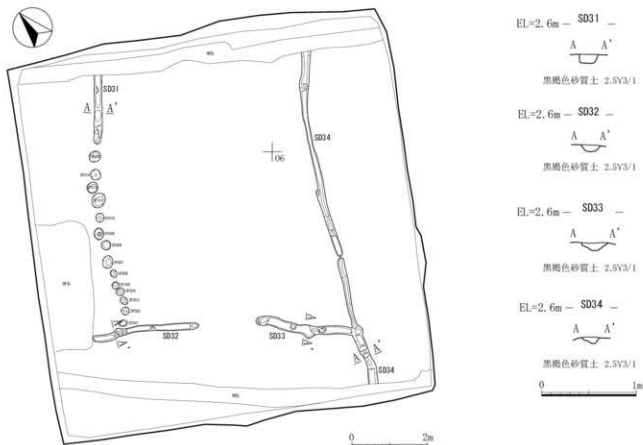


第35図 SD1～3（平面S=1/100、断面S=1/40）



図版21 SD1・2完掘状況（南西より）





第 36 図 SD31 ～ 34 (平面 S=1/100、断面 S=1/40)



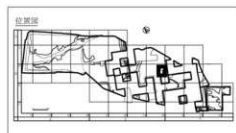
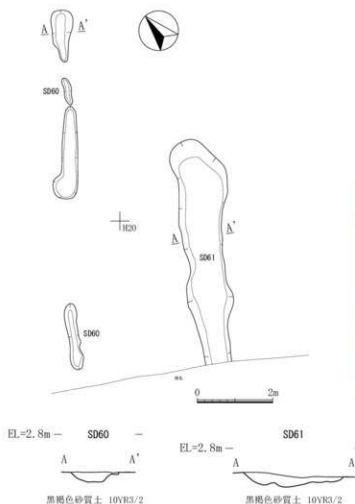
図版 22 SD31 ～ 34 発掘状況 (南東より)

・SD31 ～ 34 (第 36 図、図版 22)

いずれも細い溝で、溝幅は 30cm を超えない。SD31 と SD34 は約 5.2 m の間隔をもって並走しており、SD32・33 がそれらに直交して、方形の空間を形成している。北西辺の SD31 は途切れるが、その先を埋めるように径 20～40cm のピット 15 基 (SP301～311、313～315) が列をなして配置されている。垣根や柵の類であろうか。また、同軸上を走る SD32・33 の間にも約 150cm の空白地があり、この溝で囲まれるスペースへと続く通路のようにもみえる。溝の狭小さから考えて、排水というよりは区画を目的とした溝群であると考えたい。列状ピット以外のピットが全く見つからないことも、空間利用を考える一材となろう。遺物は出土していない。

・SD60・61 (第 37 図、図版 23)

両者は北東-南西に並走し、2 条 1 対になるとと思われる。SD60 は途切れ途切れとなっているが、これは上位削平による可能性がある。溝の幅・形状は異なるものの、前述 SD31 ～ 34 の走行方向とはほぼ一致している。また、この溝付近にピット・土坑が少ないことも留意しておく必要があるであろう。遺物は出土していない。



図版 23 SD60・61 検出状況（北東より）

第 37 図 SD60・61（平面 S=1/100、断面 S=1/40）

(3) ピット・土坑等

規模の大小や平面形状を問わず、素掘りで土坑状のものを一括した。本項で扱うべきものとして、各調査区合計 3,041 基を数える。掘り込み面や出土遺物等の検討から、遺構の帰属時期と平面分布との関係に一定の傾向があることが分かっており、最も遺構密度の高い HA ④の中央エリア、及び HA ③自然流路 S-640 以北エリアにおいては、相対的に古い時期の遺構分布が認められた。現場調査中及び整理作業段階において、配置や形状・規模から掘立柱建物の可能性を想定できたものが相当数あったものの、同時にその殆どは建物としての決定的根拠を欠いていることも事実であり、建物案の提示は行っていない。

(4) 食料残滓の廃棄痕跡

・005SL 上貝集中部（図版 24）

前述 005SL（石列遺構）の北側において、食料残滓と考えられる海産貝の集中範囲を検出した。貝は石列を構成する礎の直上にて見つかった。前述の通り、石列は構築後に埋没が進んだと考えられるので、貝が廃棄されたのは石列構築時期とはそれほど間が空かなかったと思われる。貝種が極めて限定されており、オニノツノガイ・マガキガイがその殆どを占める。



図版 24 005SL 上 貝集中部 検出状況（西より）

(5) 人骨

・人骨 11 (第 38 図)

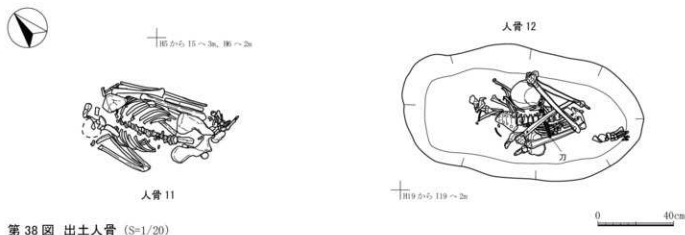
B3H5 の IV 層から全身骨格を検出した。埋葬遺構と思われるが、掘り込みは判別できなかった。正座のまま上半身を前に倒したような伏臥の状態を呈し、体幹は北西を向く。両足が揃っているようにも見えるため、緊縛状態にあった可能性も考えられる。残存状態は非常に良好であるが、頭部上半が欠失している（下顎骨は残存）。

未刊であるが、旧ナガサ川を挟んで所在する伊礼原 D 遺跡において、酷似した埋葬姿勢の全身骨格を検出している。この埋葬遺構にはグスク時代の土器を伴っていたため、本遺構も近い時期のものとして考えたい。骨格の観察から、被葬者は成人の女性である。

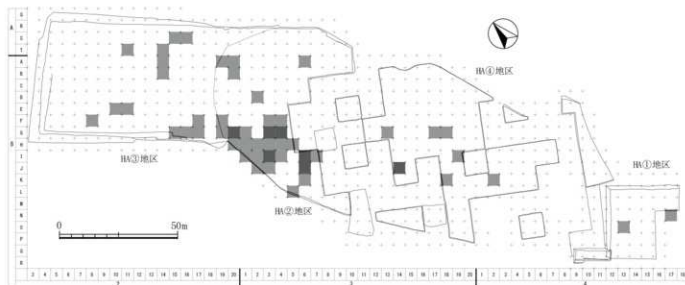
・人骨 12 (第 38 図)

B3H19 において、掘り込みを伴う人骨が発見された。全体検出の結果、局所的な骨の連結は認められるものの、通常埋葬ではあり得ない人骨配置であった。このため、ある程度腐敗の進んだ死体を土坑内に埋納処理したものと思われるが、葬送儀礼を伴ったかどうかは確実でない。本遺構付近には、ピット等の遺構が殆ど検出されていないことも、埋納場所の選定にあたって無縁ではないように思われる。

被埋納者の左脇腹部からは長さ約 23cm の刀子が見つかっており、埋納時には背骨に深く食い込んで抜けなかったことが予想される。この被埋納者は 20 代前半の女性であり、死に至った状況には非常に特異な事情を孕んでいたことを窺わせる。



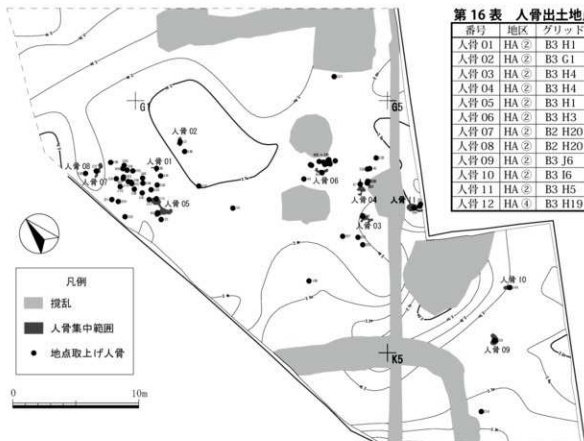
第 38 図 出土人骨 (S=1/20)



第 39 図 人骨出土グリッド平面分布 (S=1/1600)

第16表 人骨出土地点

番号	地区	グリッド	層位
人骨01	HA②	B3 H1	IV層中
人骨02	HA②	B3 G1	IV層中
人骨03	HA②	B3 H4	IV層中
人骨04	HA②	B3 H4	IV層中
人骨05	HA②	B3 H1	IV層中
人骨06	HA②	B3 H3	IV層中
人骨07	HA②	B2 H20	IV層中
人骨08	HA②	B2 H20	IV層中
人骨09	HA②	B3 J6	IV層中
人骨10	HA②	B3 I6	IV層中
人骨11	HA②	B3 H5	IV層中
人骨12	HA④	B3 H19	IV層上



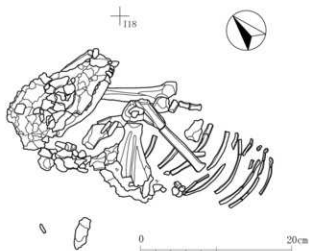
第40図 人骨密集範囲詳細図 (S=1/300)

・その他の人骨 (第39・40図、第16表)

特に HA②地区のIV層中から、グスク〜貝塚時代後期のものと考えられる人骨が多く検出された。砂丘上の墓域を形成していたものと思われるが、掘り込みや墓標の可能性を示唆するようなものは全く認められなかった。後代の盛んな土地利用により大いに攪乱されており、埋葬姿勢を想像できるものはないが、人骨07・08については、頭骨同士が近く、顔面の向きからどちらも体幹が北東を（足先が海側を）向いていた可能性がある。共存遺物と言えるものも殆どないため帰属時期は不明とするしかないが、短頭を呈するものや抜歯するものが認められるため、貝塚時代後期に属する個体が含まれているものと思われる。

(6) 犬骨 (第41図・図版25)

B3117・18にて、イヌの上半骨格が原位置を保った状態で検出された。下半の骨格は欠失しているが、埋葬されたものと考えられる。帰属時期は不明であるが、IV層中からの検出であったので、人骨同様、近世以前のものとして取り扱った。



第41図 埋葬犬骨 (S=1/5)



図版25 埋葬犬骨検出状況 (南より)

第17表-1 土坑・ビット一覧

HA②地区

遺構番号	グリッド	平面形
SK001	B3	A・B1 柳門形
SK002	B3	A・B1 門形
SK003	B3	A1 柳門形
SK004	B3	A1 隅丸方形
SK005	B3	A・B1 隅丸長方形
SK006	B3	A1 不整長門形
SK007	B3	A1 不整柳門形
SK008	B3	A1 柳門形
SK009	B3	A・B1・2 柳門形
SK010	B3	A1・2 柳門形
SK011	B3	A2 柳門形
SK012	B3	A2 不整柳門形
SK013	B3	A2 不整長門形
SK014	B3	A2 隅丸台形
SK015	B3	A2・3 不整柳門形
SK016	B3	A3・4 柳門形
SK017	B3	A3 門形
SK018	B3	A3 柳門形
SK019	B3	A3 柳門形
SK020	B3	A4 不整柳門形
SK021	A・B3	T・A5 門形
SK022	B3	A5 長柳門形
SK023	B3	A5 門形
SK024	B3	A5 長柳門形
SK025	B3	A6 不整柳門形
SK026	B3	A6 不整柳門形
SK027	B3	A6 隅丸長方形
SK028	B3	A6・7 隅丸長方形
SK029	B3	A7 門形
SK030	B3	A7 柳門形
SK031	B3	A7・8 長柳門形
SK032	B3	A7 柳門形
SK033	B3	A7 柳門形
SK034	B3	A7 門形
SK035	A・B3	T・A7 不整柳門形
SK036	B3	A7 柳門形
SK037	B3	A7 不整柳門形
SK038	B3	A7 柳門形
SK039	B3	A6・7 門形
SK040	B3	A7 門形
SK041	B3	A8・9 柳門形
SK042	B3	A8 不整形
SK043	B3	A8 柳門形
SK044	B3	A8 不整形
SK045	B3	A・B8 不整柳門形
SK046	B3	A8 隅丸長方形
SK047	B3	A8 柳門形
SK048	B3	A8 柳門形
SK049	B2	B19・20 門形
SK050	B3	B1 隅丸長方形
SK051	B3	B1 柳門形
SK052	B3	B1 柳門形
SK053	B3	B1 柳門形
SK054	B3	B2 柳門形
SK055	B3	B2 柳門形
SK056	B3	B3 門形
SK057	B3	B2・3 不整柳門形
SK058	B3	B3 長柳門形
SK059	B3	B3 隅丸長方形
SK060	B3	B3 隅丸長方形
SK061	B3	B3 隅丸長方形
SK062	B3	B3 隅丸長方形
SK063	B3	B3・4 不整形
SK064	B3	B3・4 隅丸長方形
SK065	B3	B3・4 不整形
SK066	B3	B3 柳門形
SK067	B3	B・C3 隅丸長方形
SK068	B3	B4 隅丸長方形
SK069	B3	B4 不整柳門形
SK070	B3	B4 不整柳門形
SK071	B3	B4 門形
SK072	B3	B4 門形
SK073	B3	B3・4 柳門形
SK074	B3	B6 長方形
SK075	B3	A・B6 柳門形
SK076	B3	A・B7 柳門形
SK077	B3	B7 門形
SK078	B3	B7 長方形
SK079	B3	A・B8 柳門形
SK080	B3	B8 柳門形
SK081	B3	B8 柳門形
SK082	B3	B7・8 柳門形
SK083	B3	B7・8 長柳門形
SK084	B3	C1 柳門形
SK085	B3	C1 柳門形
SK086	B3	C3 門形

遺構番号	グリッド	平面形
SK087	B3	C3 不整柳門形
SK088	B3	C3・4 不整柳門形
SK089	B3	B・C3・4 不整柳門形
SK090	B3	C4 柳門形
SK091	B3	C4 柳門形
SK092	B3	D3 不整柳門形
SK093	B3	D3 不整柳門形
SK094	B3	DD 柳門形
SK095	B3	D5 不整形
SK096	B3	D5 柳門形
SK097	B3	D5 柳門形
SK098	B3	D5 不整形
SK099	B3	D5 不整柳門形
SK100	B3	DD 不整柳門形
SK101	B3	D5・6 隅丸三角形
SK102	B3	E・F2 不整柳門形
SK103	B3	E2 不整形
SK104	B3	DE・5 門形
SK105	B3	E・F2 不整柳門形
SK106	B3	F・G2 門形
SK107	B3	F・G3 不整形
SK108	B3	F・G3 不整柳門形
SK109	B3	F・G3 門形
SK110	B2	G19 不整柳門形
SK111	B3	G1・2 門形
SK112	B3	G1・2 門形
SK113	B3	G1 門形
SK114	B3	G1 隅丸長方形
SK115	B3	G1 門形
SK116	B3	G2 門形
SK117	B3	G2 隅丸長方形
SK118	B3	G2 隅丸長方形
SK119	B3	G1・2 柳門形
SK120	B3	G2 柳門形
SK121	B3	G3 不整形
SK122	B3	G3 柳門形
SK123	B3	G2・3 柳門形
SK124	B3	G4 柳門形
SK125	B3	G4 隅丸長方形
SK126	B3	G4 柳門形
SK127	B3	G4 柳門形
SK128	B3	G4 不整形
SK129	B3	G4 隅丸長方形
SK130	B3	G4 不整柳門形
SK131	B3	G4 柳門形
SK132	B3	G3・4 門形
SK133	B2・3	H20・1 柳門形
SK134	B2	H20 門形
SK135	B2	H20 柳門形
SK136	B3	H1 隅丸長方形
SK137	B3	H1 隅丸長方形
SK138	B3	H1 門形
SK139	B3	H1 柳門形
SK140	B3	H1 隅丸長方形
SK141	B3	H1 柳門形
SK142	B3	H1 門形
SK143	B3	H2 長柳門形
SK144	B3	H2 柳門形
SK145	B3	H2 門形
SK146	B3	H2 不整形
SK147	B3	H1・2 門形
SK148	B3	H2 長柳門形
SK149	B3	H2 柳門形
SK150	B3	H2 不整柳門形
SK151	B3	H2・3 柳門形
SK152	B3	H2 門形
SK153	B3	H2 門形
SK154	B3	H2 隅丸長方形
SK155	B3	H1・H2 柳門形
SK156	B3	H2 隅丸長方形
SK157	B3	H2 門形
SK158	B3	H2 隅丸長方形
SK159	B3	H1・2 柳門形
SK160	B3	H2 門形
SK161	B3	H1・2 不整形
SK162	B3	G・H2・3 不整柳門形
SK163	B3	H3 長柳門形
SK164	B3	H3 隅丸長方形
SK165	B3	H2・3 柳門形
SK166	B3	H3 柳門形
SK167	B3	H2・3 門形
SK168	B3	H3 門形
SK169	B3	C・H3 不整柳門形
SK170	B3	H3 柳門形
SK171	B3	H3 門形
SK172	B3	H3 門形

遺構番号	グリッド	平面形
SK173	B3	H4 柳門形
SK174	B3	H4 柳門形
SK175	B3	H4 柳門形
SK176	B3	H4 柳門形
SK177	B3	H4 門形
SK178	B3	H4 門形
SK179	B3	H4 門形
SK180	B3	H4 門形
SK181	B3	H4 柳門形
SK182	B3	H4 門形
SK183	B3	H4 柳門形
SK184	B3	H4 柳門形
SK185	B3	H4 不整柳門形
SK186	B3	H4 不整形
SK187	B3	H5 隅丸長方形
SK188	B3	H5 隅丸長方形
SK189	B3	H5 隅丸長方形
SK190	B3	H5 柳門形
SK191	B3	H1 柳門形
SK192	B3	H1 柳門形
SK193	B3	H1 隅丸長方形
SK194	B3	H1 不整柳門形
SK195	B3	H1 門形
SK196	B3	H1 柳門形
SK197	B3	H1・2 門形
SK198	B3	H2 門形
SK199	B3	H2 柳門形
SK200	B3	H2 柳門形
SK201	B3	H2 柳門形
SK202	B3	H2 不整柳門形
SK203	B3	H2 柳門形
SK204	B3	H2 柳門形
SK205	B3	H2 柳門形
SK206	B3	H1・H2 不整形
SK207	B3	H2 隅丸長方形
SK208	B3	H2 柳門形
SK209	B3	H2 柳門形
SK210	B3	H2 長柳門形
SK211	B3	H2 柳門形
SK212	B3	H2 柳門形
SK213	B3	H1・H2 隅丸長方形
SK214	B3	H2 柳門形
SK215	B3	H2 柳門形
SK216	B3	H2 門形
SK217	B3	H2 隅丸長方形
SK218	B3	H2 隅丸長方形
SK219	B3	H2・3 柳門形
SK220	B3	H2 柳門形
SK221	B3	H4 門形
SK222	B3	H4 門形
SK223	B3	H4 門形
SK224	B3	H4・5 門形
SK225	B3	H4・5 門形
SK226	B3	H4 門形
SK227	B3	H4 隅丸長方形
SK228	B3	H1・H4 門形
SK229	B3	H1・H4 柳門形
SK230	B3	H4 長柳門形
SK231	B3	H4 柳門形
SK232	B3	H1・5 不整柳門形
SK233	B3	H1・5 門形
SK234	B3	H7 門形
SK235	B3	H7 柳門形
SK236	B3	H7 柳門形
SK237	B3	H2 門形
SK238	B3	H2 隅丸長方形
SK239	B3	H1・H2 柳門形
SK240	B3	H6 門形
SK241	B3	H6 門形
SK242	B3	K3・4 柳門形
SK243	B3	K5 門形
SK244	B3	K5 門形
SK245	B3	K5 門形
SK246	B3	L4・5 柳門形
SK247	B3	K・L5 門形
SK248	B3	L7 柳門形
SK249	B3	L7 柳門形
SK250	B3	L8 柳門形
SK251	B3	M7・8 不整柳門形
SK252	B3	L・M7 門形
SK253	B3	L・M7 門形
SK254	B3	L・M9 門形
SK255	B3	M9 門形
SK256	B3	M9 柳門形
SK257	B3	M8・9 門形
SK258	B3	M9 門形

第 17 表 - 2

道幅番号	グリッド	平面形	
SK259	B3	M9	楕円形
SK260	A3	S6	長楕円形
SK261	A3	S7	円形
SK262	A3	S7	円形
SK263	A3	S7	楕円形
SK264	A3	R・S7	円形
SK265	A3	T5	円形
SK266	A・B3	T・A6	楕円形
SK267	A3	T6	不整形円形
SK268	A3	T6	円形
SK269	A3	T6	不整形
SK270	A3	T6	楕円形
SK271	A3	T6	円形
SK272	A3	T・7	円形
SK273	A・B3	T・A7	楕円形
SK274	A3	T7	楕丸方形
SK275	A3	T7・8	楕円形
SK276	A3	T7	楕円形
SK277	A3	T7	楕丸方形
SK278	A3	T6・7	楕円形
SK279	A3	T7	不整形
SK280	A・B3	T・A7	不整形方形
SK281	A3	T6・7	楕円形
SK282	A3	T7	不整形方形
SK283	A3	T8	楕円形
SK284	A・B3	T・A8	不整形方形
SK285	A・B3	T・A8	—
SP001	B3	A1	楕円形
SP002	B3	A1	楕円形
SP003	B3	A1・2	楕円形
SP004	B3	A2	楕円形
SP005	B3	A2	楕円形
SP006	B3	A2	楕円形
SP007	B3	A2	—
SP008	B3	A2	円形
SP009	B3	A2	不整形円形
SP010	B3	A2	—
SP011	B3	A2	円形
SP012	B3	A2	円形
SP013	B3	A2・3	—
SP014	B3	A2	円形
SP015	B3	A2	楕円形
SP017	B3	A3	—
SP018	B3	A4	楕円形
SP019	B3	A4	—
SP020	B3	A4	楕丸方形
SP021	B3	A4	不整形円形
SP022	B3	A5	楕円形
SP023	B3	A6	楕円形
SP024	B3	A6	楕円形
SP025	B3	A6	楕円形
SP026	B3	A6・7	—
SP027	B3	A7	円形
SP028	B3	A7	楕円形
SP029	B3	A7	楕円形
SP030	B3	A8	楕円形
SP031	B3	A7・8	円形
SP032	B3	A8	長方形
SP033	B3	A8	—
SP034	B3	A8	—
SP035	B2	B19	円形
SP036	B2	B19	円形
SP037	B3	B1	円形
SP038	B3	B1	楕円形
SP039	B3	B2	円形
SP040	B3	B2・3	楕円形
SP041	B3	B3	不整形
SP042	B3	B3	円形
SP043	B3	B3	楕丸長方形
SP044	B3	B3	楕円形
SP045	B3	B3	楕円形
SP046	B3	B3	楕円形
SP047	B3	B4	円形
SP048	B3	B4	円形
SP049	B3	B5	楕円形
SP050	B3	B5	楕円形
SP051	B3	B6	楕円形
SP052	B3	B6	楕円形
SP053	B3	B6	楕円形
SP054	B3	A・群	円形
SP055	B3	B8	楕円形
SP056	B3	B8	楕丸方形
SP057	B3	B8	楕円形
SP058	B3	C1	楕円形
SP059	B3	C1	不整形楕円形
SP060	B3	C1	楕円形
SP061	B3	C1	楕円形
SP062	B3	C1	円形

道幅番号	グリッド	平面形	
SP063	B3	C1	楕円形
SP064	B3	C1	楕円形
SP065	B3	C・D3	楕円形
SP066	B3	C4	楕円形
SP067	B3	C5	楕円形
SP068	B3	C5	円形
SP069	B3	D2	円形
SP070	B3	D2	楕丸・角形
SP071	B3	D3	楕円形
SP072	B3	D3	楕円形
SP073	B3	D3	円形
SP074	B3	D3	円形
SP075	B3	D3	不整形円形
SP076	B3	D3	楕円形
SP077	B3	D3	円形
SP078	B3	D4	楕円形
SP079	B3	D4・5	楕円形
SP080	B3	D・E5	円形
SP081	B3	D5	—
SP082	B3	D5	円形
SP083	B3	D5	不整形楕円形
SP084	B3	D6	円形
SP085	B3	D6	楕円形
SP086	B3	D6	円形
SP087	B3	D6	不整形楕円形
SP088	B3	D6	不整形楕円形
SP089	B3	D6	楕円形
SP090	B3	D6	円形
SP091	B3	D6	円形
SP092	B3	E2	楕円形
SP093	B3	E2	不整形
SP094	B3	E2	楕円形
SP095	B3	E3	不整形楕円形
SP096	B2	G19	円形
SP097	B2	F・G19	円形
SP098	B2	F19・20	円形
SP099	B2	F19	円形
SP101	B2	F20	円形
SP102	B2	F20	円形
SP103	B2	F20	楕円形
SP104	B2	F20	円形
SP105	B3	F1	円形
SP106	B3	F1	円形
SP107	B3	F1	円形
SP108	B3	F1	円形
SP109	B3	F1	楕円形
SP110	B3	F1	楕円形
SP111	B3	F1	楕円形
SP112	B3	F1	円形
SP113	B3	F1	楕円形
SP114	B3	F1	円形
SP115	B3	F1	円形
SP116	B3	F2	円形
SP117	B3	F2	円形
SP118	B3	F2	円形
SP119	B3	F2	円形
SP120	B3	F2	円形
SP121	B3	F2	円形
SP122	B3	F2	円形
SP123	B3	F2	円形
SP124	B3	F2	円形
SP125	B3	F2	楕円形
SP126	B3	F2	楕円形
SP127	B3	F2	楕円形
SP128	B3	F2	楕円形
SP129	B3	F2	円形
SP130	B3	F2	円形
SP131	B3	F2	円形
SP132	B3	F2	円形
SP133	B3	F2	円形
SP134	B3	F2	楕円形
SP135	B3	F2	楕円形
SP136	B3	F2	楕円形
SP137	B3	F・G2	円形
SP138	B3	F3	楕円形
SP139	B3	F3	楕円形
SP140	B3	F3	円形
SP141	B3	F3	円形
SP142	B3	F3	円形
SP143	B3	F3	円形
SP144	B3	F3	不整形円形
SP145	B3	F3	不整形楕円形
SP146	B3	F3	不整形円形
SP147	B3	F3	円形
SP148	B3	F3	楕円形
SP149	B3	F3	楕円形
SP150	B3	F4	楕円形
SP151	B3	F4	円形

道幅番号	グリッド	平面形	
SP152	B3	F4	楕円形
SP153	B3	F4	楕円形
SP154	B3	F4	楕円形
SP155	B3	F4	不整形
SP156	B3	F4	円形
SP157	B3	F4	楕円形
SP158	B3	F4	円形
SP159	B3	F4	円形
SP160	B3	F3・4	円形
SP162	B3	F・G4	楕円形
SP163	B3	F・G4	楕円形
SP164	B3	F3・4	不整形楕円形
SP165	B3	F4	不整形
SP166	B3	F4	楕円形
SP167	B3	F4	楕円形
SP168	B2	G19	円形
SP169	B2	G19	円形
SP170	B2	G19	円形
SP171	B3	G1	楕円形
SP172	B3	G1	円形
SP173	B3	G1	楕円形
SP174	B3	G1	楕円形
SP175	B3	G・H1	楕円形
SP176	B3	G2	円形
SP177	B3	G2	円形
SP178	B3	G2	楕円形
SP179	B3	G2	楕円形
SP180	B3	G2	円形
SP181	B3	G2	円形
SP182	B3	G2	円形
SP183	B3	G2	楕円形
SP184	B3	G・H2	円形
SP185	B3	G2	円形
SP186	B3	G2	円形
SP187	B3	G2	楕丸長方形
SP188	B3	G2	—
SP189	B3	G2	楕円形
SP190	B3	G2	楕円形
SP191	B3	G2	円形
SP192	B3	G2	楕円形
SP193	B3	G2	—
SP194	B3	G2	円形
SP195	B3	G2	円形
SP196	B3	G2	楕円形
SP197	B3	G2	不整形楕円形
SP198	B3	G2	楕円形
SP199	B3	G・H2	楕円形
SP200	B3	G2	楕円形
SP201	B3	G2	楕円形
SP202	B3	G2	楕円形
SP204	B3	G2	楕円形
SP206	B3	F・G3	楕円形
SP207	B3	F・G3	—
SP208	B3	F・G3	楕円形
SP209	B3	G3	楕円形
SP210	B3	G3	楕丸方形
SP211	B3	G3	楕円形
SP212	B3	G3	円形
SP213	B3	G3	楕円形
SP214	B3	G・H3	楕円形
SP215	B3	G3	円形
SP216	B3	G3	円形
SP217	B3	G3	楕円形
SP218	B3	G3	楕円形
SP219	B3	G3	楕円形
SP220	B3	G3	楕円形
SP221	B3	G3	楕円形
SP222	B3	G3	—
SP223	B3	G3	楕円形
SP224	B3	G4	楕円形
SP225	B3	G4	円形
SP226	B3	G4	楕円形
SP227	B3	G4	円形
SP228	B3	G4	円形
SP229	B3	G4	円形
SP230	B3	G4	楕円形
SP231	B3	G4	円形
SP232	B3	G4	楕円形
SP233	B3	G4	円形
SP234	B3	G4	円形
SP235	B3	G4	楕円形
SP238	B3	G4	円形
SP237	B3	G4	円形
SP238	B3	G4	円形
SP239	B3	G4	円形
SP240	B3	G4	円形
SP241	B3	G4	円形
SP242	B3	G4	円形

第17表-3

道幅番号	グリッド	平面形
SP243	B3 G4	円形
SP244	B3 G4	—
SP245	B3 G4	円形
SP246	B3 G4	—
SP247	B3 G4・5	円形
SP248	B3 G4	円形
SP249	B3 G4	楕円形
SP250	B3 G4	円形
SP251	B3 G4	円形
SP252	B3 G4	円形
SP253	B3 G4	円形
SP254	B3 G4	円形
SP255	B3 G4	楕丸方形
SP256	B3 G4	円形
SP257	B3 G・H4	楕円形
SP258	B3 G4	円形
SP259	B3 G4	円形
SP260	B3 G4	円形
SP261	B3 G4	楕円形
SP262	B3 G4	円形
SP263	B3 G4・5	円形
SP264	B3 F・G5	円形
SP265	B3 G・H4	円形
SP266	B3 G・H5	楕円形
SP267	B2・3 H20・1	円形
SP268	B2 H20	円形
SP269	B3 H1	円形
SP270	B3 H1	円形
SP271	B3 H1	円形
SP272	B3 H1	円形
SP273	B3 H1	円形
SP274	B3 H1	楕円形
SP275	B3 H1	円形
SP276	B3 H1	円形
SP277	B3 H1	楕円形
SP278	B3 H1	楕円形
SP279	B3 H1・2	円形
SP280	B3 H2	楕円形
SP281	B3 H2	楕円形
SP282	B3 H2	円形
SP283	B3 H2	円形
SP284	B3 H2	円形
SP285	B3 H2	楕円形
SP286	B3 H2	円形
SP287	B3 H2	楕円形
SP288	B3 H2	—
SP289	B3 H2	—
SP290	B3 H2	円形
SP291	B3 H2	円形
SP292	B3 H2	円形
SP293	B3 H2	楕円形
SP294	B3 H2	円形
SP295	B3 H2	楕円形
SP296	B3 H2	円形
SP297	B3 H2	円形
SP298	B3 H2	円形
SP299	B3 H2	—
SP300	B3 H2	楕円形
SP301	B3 H2	円形
SP302	B3 H2	円形
SP303	B3 H2	楕円形
SP304	B3 H2	円形
SP305	B3 H2・3	円形
SP306	B3 H2	楕円形
SP307	B3 H2	円形
SP308	B3 H・H2	楕円形
SP309	B3 H2	楕円形
SP310	B3 H2	円形
SP311	B3 H2	円形
SP312	B3 H2	—
SP313	B3 H2	—
SP314	B3 H2	円形
SP315	B3 H2	円形
SP316	B3 H・H2	円形
SP318	B3 G・H2	—
SP319	B3 H2	円形
SP320	B3 H2	円形
SP321	B3 H2	円形
SP322	B3 H2	—
SP323	B3 H2	不整形
SP324	B3 H2	不整形
SP325	B3 H2	円形
SP326	B3 H3	円形
SP327	B3 G・H3	楕円形
SP328	B3 H3	円形
SP329	B3 H3	円形
SP330	B3 H3	—

道幅番号	グリッド	平面形
SP331	B3 H3	—
SP332	B3 H3	円形
SP333	B3 H3	円形
SP334	B3 H3	円形
SP335	B3 H3	円形
SP336	B3 H3	円形
SP337	B3 H3	円形
SP338	B3 H3・4	楕円形
SP339	B3 H3	楕円形
SP340	B3 H3	不整形
SP341	B3 H3・4	楕円形
SP342	B3 H3	楕円形
SP343	B3 H3	不整形円形
SP344	B3 G・H4	楕円形
SP345	B3 H4	円形
SP346	B3 H4	円形
SP347	B3 H4	楕丸方形
SP348	B3 H4	円形
SP349	B3 H4	円形
SP350	B3 H4	円形
SP351	B3 H4	円形
SP352	B3 H4	—
SP353	B3 H4	—
SP354	B3 H4	—
SP356	B3 H4	円形
SP357	B3 H4	不整形円形
SP358	B3 H・H4	楕円形
SP359	B3 H4	—
SP360	B3 H4	楕円形
SP361	B3 H4	円形
SP362	B3 H4	円形
SP363	B3 H4	円形
SP364	B3 G・H5	楕円形
SP365	B3 H5	不整形
SP366	B3 H5	円形
SP367	B3 H5	楕丸方形
SP368	B3 H5	—
SP369	B3 H5	不整形
SP371	B3 H1	円形
SP372	B3 H1	円形
SP373	B3 H2	円形
SP374	B3 H2	楕円形
SP375	B3 H2	円形
SP376	B3 H2	円形
SP382	B3 H2	—
SP383	B3 H2	—
SP384	B3 H2	円形
SP385	B3 H2	楕円形
SP386	B3 H1・2	円形
SP387	B3 H2	楕円形
SP388	B3 H2	円形
SP389	B3 H2	楕円形
SP390	B3 H2	不整形円形
SP391	B3 H2	楕円形
SP392	B3 H2	楕円形
SP393	B3 H2	円形
SP394	B3 H2	円形
SP395	B3 H2	楕円形
SP396	B3 H2	楕円形
SP397	B3 H2	円形
SP398	B3 H2	円形
SP399	B3 H2	円形
SP400	B3 H2	—
SP401	B3 H2	楕丸長方形
SP402	B3 H2	円形
SP404	B3 H2	—
SP405	B3 H2	—
SP406	B3 H2	円形
SP407	B3 H2	—
SP408	B3 H2	長楕円形
SP409	B3 H2	—
SP410	B3 H2	—
SP411	B3 H・H3	円形
SP412	B3 H3	楕円形
SP413	B3 H3	—
SP414	B3 H3	長楕円形
SP415	B3 H3	円形
SP416	B3 H3	楕円形
SP417	B3 H3	円形
SP418	B3 H3	円形
SP419	B3 H3	円形
SP420	B3 H3	楕円形
SP421	B3 H4・5	円形
SP422	B3 H4	円形
SP423	B3 H4	円形
SP424	B3 H4	円形
SP425	B3 H4	楕円形

道幅番号	グリッド	平面形
SP426	B3 H4	楕円形
SP427	B3 H4	円形
SP428	B3 H4	円形
SP429	B3 H4	円形
SP430	B3 H4	楕円形
SP431	B3 H4	—
SP432	B3 H4	楕円形
SP433	B3 H・H4	円形
SP434	B3 H5	楕円形
SP435	B3 H5	楕円形
SP436	B3 H7	円形
SP437	B3 H7	円形
SP438	B3 H7	楕円形
SP439	B3 H7	楕円形
SP440	B3 H7	楕円形
SP441	B3 H7	楕円形
SP442	B3 H・H7	楕円形
SP443	B3 H7	楕円形
SP444	B3 H2	楕円形
SP445	B3 H2	円形
SP446	B3 H2	円形
SP447	B3 H2	円形
SP448	B3 H2	円形
SP449	B3 H2	円形
SP450	B3 H2	円形
SP451	B3 H3	円形
SP452	B3 H3	円形
SP453	B3 H3	楕円形
SP454	B3 H3	円形
SP455	B3 H3	楕円形
SP456	B3 H3	楕円形
SP457	B3 H3	楕円形
SP458	B3 H3	楕円形
SP459	B3 H3	楕円形
SP460	B3 J・K6	楕円形
SP461	B3 H3	楕円形
SP462	B3 H3	円形
SP463	B3 H3	楕円形
SP464	B3 H7	円形
SP465	B3 J・K7	楕円形
SP466	B3 K3	円形
SP467	B3 K3	—
SP468	B3 K3	円形
SP469	B3 K3	楕円形
SP470	B3 K4	円形
SP471	B3 K・5	—
SP472	B3 K4	円形
SP473	B3 K4	楕円形
SP474	B3 K5	楕円形
SP475	B3 K5	円形
SP476	B3 K5	楕円形
SP477	B3 K5	円形
SP478	B3 K5	楕円形
SP479	B3 K5	円形
SP480	B3 K6	円形
SP481	B3 K7	楕円形
SP482	B3 K7	楕円形
SP484	B3 L5	円形
SP485	B3 L5	円形
SP486	B3 L・M7	円形
SP487	B3 L7	円形
SP488	B3 L7	円形
SP489	B3 L7	円形
SP490	B3 L7	円形
SP491	B3 L7	円形
SP492	B3 L8	楕円形
SP493	B3 L8	円形
SP494	B3 M7	円形
SP495	B3 M7	円形
SP496	B3 M8	円形
SP497	B3 M8	円形
SP498	B3 M9	円形
SP499	B3 M9	円形
SP500	B3 M9	円形
SP501	A3 S7	円形
SP502	A3 T5	円形
SP503	A3 T5	円形
SP504	A3 T6	楕円形
SP505	A3 T6	円形
SP506	A3 T6	楕円形
SP507	A3 T7	円形
SP508	A3 T7・8	不整形円形

第17表-4

HA③地区

遺積番号	グリッド		平面形
S-52SK	B2	B10・11	楕円形
S-54P	B2	D18	楕円方形
S-56P	B2	E18	楕円長方形
S-57P	B2	E18	楕円形
S-70P	B2	F11	円形
S-71P	B2	F11	楕円形
S-72P	B2	F11	円形
S-73P	B2	F11	楕円形
S-74P	B2	F11	楕円形
S-75P	B2	F11・12	楕円形
S-76P	B2	F12	楕円形
S-77P	B2	F11	楕円形
S-78P	B2	F11・12	楕円形
S-81P	B2	F10	楕円長方形
S-82P	B2	F10	円形
S-83P	B2	F10	楕円長方形
S-84P	B2	C17	楕円長方形
S-85P	B2	C18	円形
S-89SK	A・B2	T・A8	不整形
S-101P	A2	R5	不整形長方形
S-102P	A2	R5	不整形
S-105P	A2	S5	楕円長方形
S-106P	A2	S5	楕円長方形
S-107P1			楕円形
S-107P2			円形
S-107P3			楕円形
S-107P4	A2	S・T5・6	楕円形
S-107P5			楕円形
S-107P6			楕円形
S-107P7			楕円形
S-108P	A2	T5	楕円形
S-109P	A2	T5	楕円形
S-112P	A・B2	T・A5	円形
S-114P	B2	A5・6	円形
S-115P	B2	A5	楕円方形
S-116P	B2	A5	楕円方形
S-117P	B2	A5	楕円方形
S-118P	B2	B6	円形
S-119P	B2	B5	円形
S-120P	B2	B5	楕円形
S-122P	B2	B5・6	不整形楕円形
S-123P	B2	B6	楕円形
S-124P	B2	B5	不整形長方形
S-126P	A2	R5	円形
S-127P	A2	R5	円形
S-128P	A2	S5	楕円長方形
S-129P	A2	S5・6	楕円形
S-130P	A2	S5	楕円形
S-131P	A2	S5	楕円形
S-133SK	A2	S5	不整形円形
S-134P	A2	S5	楕円形
S-135P	A2	S5	楕円形
S-136P	A2	S5	円形
S-137P	A2	S5	円形
S-138P	A2	S5	楕円形
S-139P	A2	S5	不整形楕円形
S-140P	A2	S5	不整形楕円形
S-142P	B2	A5	楕円形
S-143P	B2	A・B5	円形
S-144P	B2	B5	不整形楕円形
S-145P	B2	B5	楕円形
S-146P	B2	B5・6	楕円形
S-147P	B2	B5・6	円形
S-148P	A2	R5	楕円形
S-150P	A2	R6	楕円形
S-152P	A2	R6	不整形楕円形
S-153P	A2	R6	不整形
S-154P	A2	R6	不整形
S-155P	A2	R6	楕円形
S-156P	A2	R6・7	円形
S-157P	A2	R6	楕円形
S-159P	A2	S6	円形
S-160P	A2	S6	楕円形
S-161P	A2	S6	楕円形
S-162P	A2	S6	楕円形
S-163P	A2	S6	楕円形
S-165P	A2	S6	楕円形
S-166P	A2	S6	楕円形
S-167P	A2	S6	楕円形
S-168P	A2	S6	楕円形
S-169P	A2	S6	楕円形
S-170P	A2	S6	楕円形
S-181P	A2	S6	楕円形
S-182P	A2	S6	楕円形
S-183SK	A2	S6	不整形楕円形
S-184P	A2	S6	楕円形

遺積番号	グリッド		平面形
S-185P	A2	S6	円形
S-186P	A2	S6	円形
S-187P	A2	S6	楕円形
S-188P	A2	T6	円形
S-189P	A2	T6	円形
S-190P	A2	T6	円形
S-191SK	A2	T5・6	楕円形
S-192P	A2	T6	円形
S-193P	A2	T6	円形
S-194P	A2	T6	楕円形
S-195P	A2	T6	楕円形
S-196P	A2	T6	楕円形
S-197P	A2	T6	不整形楕円形
S-198P	A2	T6	楕円形
S-199P	A2	T6	不整形
S-200P	A2	T6	楕円形
S-201SK	A2	T6	楕円形
S-202P	A2	T6	楕円形
S-203SK	A2	T6	長楕円形
S-204P	B2	A6	円形
S-205P1			楕円形
S-205P2			楕円形
S-205P3			楕円形
S-205P4	A・B2	T・A6・7	楕円形
S-205P5			円形
S-205P6			楕円形
S-205P7			楕円形
S-206SK	A2	T6	不整形楕円形
S-207P	A・B2	T6・7	円形
S-208P	A・B2	T・A7	楕円形
S-209P	A2	T7	楕円形
S-210P	B2	A6	円形
S-211P	B2	A6	楕円形
S-212P	B2	A6	楕円形
S-213P	B2	A6	楕円形
S-214P	B2	A6	楕円形
S-215P1			楕円形
S-215P2			楕円形
S-215P3			楕円形
S-215P4	A・B2	T・A6・7	楕円形
S-215P5			楕円形
S-215P6			楕円形
S-216P	B2	A6	楕円形
S-217P	B2	A6	楕円形
S-218P	B2	A6	楕円形
S-219P	B2	A6	楕円形
S-220P	B2	A6	楕円形
S-221P	B2	A6	楕円形
S-222P	B2	A6	楕円形
S-223P	A2	R6	楕円形
S-224P	A2	R6	楕円形
S-225P	A2	R6	楕円形
S-226P	A2	R6	楕円形
S-227P	A2	R6	不整形
S-228P	A2	R6	楕円形
S-230P	A2	R・S6	楕円形
S-231P	A2	S6	楕円形
S-232P	A2	S6	楕円形
S-233P	A2	S6	楕円形
S-234P	A2	S6	楕円形
S-235P	A2	S6	楕円形
S-236P	A2	S6	楕円形
S-237P	A2	S6	楕円長方形
S-238P	A2	S6	楕円形
S-239P	A2	S・T6	楕円形
S-240P	A2	T6	楕円形
S-242P	A2	T6	楕円形
S-243P	A2	T6	楕円形
S-244P	A2	T6	楕円形
S-245P	A2	T6	楕円形
S-246P	A2	T6	楕円形
S-247P	A2	T6・7	楕円形
S-248P	A2	T6	楕円形
S-249P	A2	T6	楕円形
S-250SK	A・B2	T・A6	楕円形
S-251P	A2	T6	楕円形
S-252P	B2	A6	楕円形
S-253P	B2	A6	楕円形
S-254P	B2	A6	楕円形
S-255P	B2	A6	楕円長方形
S-256P	A2	A6	楕円形
S-257P	A2	R6	楕円形
S-258P	A2	T6	楕円形
S-259P	B2	A6	楕円形
S-260SK	B2	A6	不整形
S-262P	A2	R7	楕円形
S-263P	A2	R7	楕円形

遺積番号	グリッド		平面形
S-264P	A2	R7	楕円形
S-266P	A2	S7	楕円形
S-267P	A2	S7	楕円形
S-268P	A2	S7	楕円形
S-269P	A2	S7	楕円形
S-270P	A2	S7	楕円形
S-271P	A2	S7・8	楕円形
S-272P1			楕円形
S-272P2			楕円形
S-272P3	A2	S・T6・7	楕円形
S-272P4			楕円形
S-272P5			楕円形
S-273P1			楕円形
S-273P2			楕円形
S-273P3			楕円形
S-273P4	A・B2	T・A7・8	楕円形
S-273P5			楕円形
S-273P6			楕円形
S-273P7			楕円形
S-274P1			楕円形
S-274P2			楕円形
S-274P3	A・B2	T・A7・8	楕円形
S-274P4			楕円形
S-274P5			楕円形
S-275P	A2	T7	楕円形
S-276P	A2	T7	楕円形
S-277P	A2	T7	楕円形
S-278P	A2	T7	楕円形
S-279P	A2	T7	楕円形
S-280P	A2	T7	楕円形
S-281P	A2	T7	楕円形
S-282P	A2	T7	楕円形
S-283P	A2	T7	楕円形
S-284P	A2	T7	楕円形
S-285P	A2	T7	楕円形
S-286P	A2	T7・8	楕円形
S-287P	B2	A7	楕円形
S-288P	B2	A7	楕円形
S-289P	B2	A7	楕円形
S-290P	B2	A7	楕円形
S-291P	B2	A7	楕円形
S-292P	B2	A7	楕円形
S-293P	B2	A7・8	楕円形
S-294P	B2	A7・8	楕円形
S-296P	A2	R7	楕円形
S-298P	A2	R7・8	楕円形
S-299P	A2	R7	楕円形
S-300P	A2	R・S7	楕円形
S-301P	A2	S7	楕円形
S-303P	A2	S7	楕円形
S-304P	A2	S7	楕円形
S-306P1			楕円形
S-306P2			楕円形
S-306P3	A2	S7・8	楕円形
S-306P4			楕円形
S-306P5			楕円形
S-307P	A2	S8	楕円形
S-308P	A2	S7・8	楕円形
S-309P	A2	S・T7	楕円形
S-310P	A2	S・T7	不整形楕円形
S-312P	A2	T7	楕円形
S-313P	A2	T7	不整形楕円形
S-314P	A2	T7	楕円形
S-315P	A2	T7	楕円形
S-316P	A2	T7	楕円形
S-317P	A2	T7	楕円形
S-318P	A2	T7	楕円形
S-319P	A2	T7	楕円形
S-320P	A2	T7	楕円形
S-321P	A2	T7	楕円形
S-322P	A・B2	T・A7・8	楕円形
S-323P	B2	A8	楕円形
S-324P	B2	A7・8	楕円形
S-325P	B2	A8	楕円形
S-326P	B2	A8	楕円形
S-327P	B2	A7・8	楕円形
S-328SK	B2	A7	不整形
S-329P	B2	A7	楕円形
S-330P	A2	S7	楕円形
S-331P	A2	S8	楕円形
S-332P	A2	S8	楕円形
S-333P	A2	S8	楕円形
S-334P	A2	T7	楕円形
S-335P	A2	T7・8	楕円形
S-336P	A2	T8	楕円形
S-337P	A2	T8	楕円形

第17表-5

道幅番号	グリッド	平面形
S-338 SK	A2 T8	楕円形
S-339 P	A2 T8	円形
S-340 P	A2 T8	円形
S-341 P	A2 T8	楕円形
S-342 P	A2 T8	楕円形
S-343 P	A2 T8	楕円形
S-344 P	A2 T8	円形
S-345 P	A2 T8	楕円形
S-346 P	A2 T8	楕円形
S-347 P	A2 T7	円形
S-349 P	A2 T8	円形
S-351 P	A2 T8	円形
S-352 P	A・B2 T・A8	不整形円形
S-353 P	A・B2 T・A8	楕円形
S-354 P	B2 A8	円形
S-355 P	B2 A8	円形
S-356 P	B2 A8	円形
S-357 P	B2 A8	扇丸方形
S-358 P	B2 A8	円形
S-359 P	B2 A8	楕円形
S-360 P	B2 A8	不整形楕円形
S-361 P	B2 A8	楕円形
S-362 P	A2 S8	楕円形
S-363 P	A2 R・S8	楕円形
S-364 P	A2 S8	楕円形
S-365 P	A2 S8	円形
S-367 P	A2 T8	楕円形
S-368 P	A2 T8	楕円形
S-369 P	A2 T8	楕円形
S-370 P	A2 T8	不整形円形
S-371 P	A2 T8	—
S-372 P	A2 T8	円形
S-373 P	A・B2 T・A8	楕円形
S-374 P	B2 A8	楕円形
S-375 P	B2 A8	楕円形
S-376 P	B2 A8	楕円形
S-377 P	B2 A8	楕円形
S-378 P	B2 A8	不整形円形
S-379 P	B2 A8	円形
S-380 P	B2 A8	円形
S-381 P	B2 A7	円形
S-382 P	B2 A8	円形
S-383 P	B2 B8	楕円形
S-385 P	B2 A8	楕円形
S-386 P	B2 A・B8	楕円形
S-387 P	B2 A・B8	円形
S-388 P	B2 A8	不整形円形
S-389 P	B2 A8	楕円形
S-390 P	B2 A8	楕円形
S-391 P	B2 A8	楕円形
S-392 P	B2 A8	楕円形
S-393 P	B2 A8	円形
S-394 P	B2 A8	円形
S-395 P1		楕円形
S-395 P2		不整形円形
S-395 P3	B2 A8	楕円形
S-395 P4		円形
S-395 P5		楕円形
S-395 P6		楕円形
S-396 P	B2 A8	円形
S-397 P	A2 R8	不整形楕円形
S-399 P	A2 S6	円形
S-401 P1		円形
S-401 P2		楕円形
S-401 P3		楕円形
S-401 P4		楕円形
S-401 P5	A・B6・7	楕円形
S-401 P6		楕円形
S-402 P	B2 B6	円形
S-403 P	B2 B6	円形
S-405 P	B2 B6	楕円形
S-406 P	B2 B6	円形
S-407 P	B2 A・B6・7	楕円形
S-408 P	B2 B6	楕円形
S-409 P	B2 B6	楕円形
S-411 P	B2 B6	円形
S-412 P	B2 B6	楕円形
S-413 P	B2 B6・7	楕円形
S-414 P	B2 B6・7	楕円形
S-415 P	B2 B7	楕円形
S-416 P	B2 B7	円形
S-417 P	B2 B7	不整形楕円形
S-418 P	B2 B7	楕円形
S-419 P	B2 B7	楕円形
S-420 P	B2 B6・7	円形
S-421 P	B2 B6	楕円形
S-422 P	B2 B6	円形

道幅番号	グリッド	平面形
S-423 P	B2 B6・7	円形
S-424 P	B2 B・C・7	円形
S-425 P	B2 B7	楕円形
S-426 P	B2 B7	楕円形
S-427 P	B2 A7	楕円形
S-428 P	B2 A6・7	楕円形
S-429 P	B2 B6	円形
S-430 P	B2 A6	円形
S-431 P	B2 B6	円形
S-432 P	B2 A・B5・6	円形
S-433 P	B2 B5・6	楕円形
S-434 P	B2 A7	楕円形
S-435 P	B2 A8	円形
S-436 P	A2 S・T6	楕円形
S-437 P	A2 T6	楕円形
S-439 P	A2 T7	楕円形
S-440 P	A2 T7・8	楕円形
S-441 P	A2 S6	円形
S-443 P	A2 S7	円形
S-444 P	A2 S7	楕円形
S-445 P1		楕円形
S-445 P2		楕円形
S-445 P3	A2 S・T7・8	楕円形
S-445 P4		楕円形
S-445 P5		楕円形
S-446 P	A2 S7	楕円形
S-447 P	A2 S7	楕円形
S-448 SK	B2 B8	不整形
S-449 P	B2 A7	—
S-451 P	A2 T6	円形
S-452 P	B2 A7	楕円形
S-500 SK	A2 S10	円形
S-501 P	A2 S・T9	円形
S-502 P	A2 S9	円形
S-503 P	A2 S9	円形
S-504 SK	A2 S9・10	不整形楕円形
S-505 SK	A2 S・T10	楕円形
S-506 SK	A2 S・T9・10	楕円形
S-507 SK	A2 T9	楕円形
S-508 P	A2 T9	円形
S-509 P	A2 T9	円形
S-510 P	A2 T9	円形
S-511 P	A2 T10	円形
S-512 P	A2 T10	円形
S-513 P	B2 C10	楕円形
S-514 P	A2 T10	不整形楕円形
S-515 P	A2 T10	楕円形
S-516 P	A2 T10	楕円形
S-517 P	A2 T10	円形
S-518 SK	B2 A9	—
S-519 P	B2 A9	扇丸方形
S-520 P	B2 A9	円形
S-521 SK	B2 A9	不整形楕円形
S-522 P	B2 A9	円形
S-523 P	B2 A9	円形
S-524 P	B2 A9	楕円形
S-526 P	B2 A・B9	楕円形
S-527 SK	B2 B9	扇丸方形
S-528 P	B2 B9	楕円形
S-529 SK	B2 B9	扇丸方形
S-530 P	B2 B9	楕円形
S-531 P	B2 B9	円形
S-532 P	B2 B9	楕円形
S-533 P	B2 B9	楕円形
S-534 P	B2 B9	楕円形
S-535 P	B2 B9	不整形
S-536 P	B2 B10	楕円形
S-537 P	A2 S・T9・10	楕円形
S-538 P	B2 B10	楕円形
S-539 P	B2 B・C10	楕円形
S-540 P	B2 C9	楕円形
S-541 P	B2 C9	楕円形
S-542 P	B2 B・C10	楕円形
S-544 P	B2 C9	円形
S-545 P	B2 C9	不整形楕円形
S-546 SD	B2 B・C9	楕円形
S-547 P	A2 S・T10	円形
S-548 P	B2 A11	楕円形
S-549 SK	B2 A11	楕円形
S-550 P1		円形
S-550 P2		円形
S-550 P3	A2 S・T10・11	不整形楕円形
S-550 P4		楕円形
S-550 P5		円形
S-551 P	A・B2 T・A9	楕円形
S-552 P	B2 B9	不整形楕円形
S-553 P	B2 B9	楕円形

道幅番号	グリッド	平面形
S-554 P	B2 B9	円形
S-555 P1		円形
S-555 P2	A2 T9	楕円形
S-555 P3		楕円形
S-555 P4		楕円形
S-556 P	A2 T10	楕円形
S-558 P	A2 T9	楕円形
S-560 P1		—
S-560 P2		楕円形
S-560 P3	A・B2 T・A9・10	円形
S-560 P4		楕円形
S-560 P5		円形
S-561 P	A2 S9・10	—
S-562 SK	A2 T10	扇丸方形
S-563 P	A2 T9	—
S-565 P	B2 A10	—
S-565 SD	A・B2 T・A9	—
S-566 P	A2 T9	楕円形
S-567 P	A2 T9	楕円形
S-568 P	B2 B・C10	円形
S-569 P	B2 B10	楕円形
S-570 P	B2 B11	楕円形
S-571 P	B2 B11	円形
S-572 P	B2 A・B11	円形
S-573 P	B2 A・B11	円形
S-574 SK	B2 B11	不整形
S-575 P	B2 B11	楕円形
S-576 P	B2 A11	—
S-577 P	B2 A11	不整形楕円形
S-578 P	B2 A10・11	不整形楕円形
S-579 SK	B2 A10・11	不整形楕円形
S-580 P	B2 A11	楕円形
S-581 SK	A2 T9	円形
S-582 SK	A2 T10	不整形楕円形
S-583 P	A2 T10	楕円形
S-584 SK	A2 T10	楕円形
S-585 P	A2 T11	楕円形
S-586 P	A2 T11	楕円形
S-587 P	A2 T11	楕円形
S-588 P	A2 T11	楕円形
S-589 P	A2 T11・12	円形
S-590 P	A2 T12	—
S-591 P	A2 T12	楕円形
S-592 P	A2 T12	円形
S-593 P	A2 T12	楕円形
S-595 P	B2 A10・10	楕円形
S-596 P	A2 T12	楕円形
S-597 P	A2 T12	楕円形
S-598 P	A2 T12	楕円形
S-599 SK	A2 S12	長楕円形
S-600 P	A2 T11	楕円形
S-602 P	A2 T12	扇丸方形
S-603 P	A2 T10	—
S-604 SK	B2 A9	不整形
S-605 SK	B2 A11	楕円形
S-606 P	A2 T12	楕円形
S-607 P	A2 T12	円形
S-608 P	B2 B11	楕円形
S-609 P	B2 C10	不整形
S-610 P	B2 C10	楕円形
S-611 P	A2 T12	—
S-613 P	A2 T9	楕円形
S-614 P	A2 T9	楕円形
S-615 P	A2 T10	楕円形
S-616 P	A2 S13	円形
S-617 P	A2 T12	楕円形
S-618 P	A2 T13	楕円形
S-619 P	A・B2 T・A12	円形
S-620 P	B2 A12・13	楕円形
S-621 P	B2 A13	楕円形
S-622 P	A・B2 T・A13	円形
S-623 P	A2 T13	円形
S-624 P	A・B2 T・A13	楕円形
S-625 SK	B2 A・B10	楕円形
S-626 P	A2 S13	楕円形
S-627 P	A・B2 T・A11	楕円形
S-628 P	A2 T13	楕円形
S-629 P	A2 S15	楕円形
S-630 P1		楕円形
S-630 P2		楕円形
S-630 P3	B2 B9・10	不整形楕円形
S-630 P4		楕円形
S-631 P	A2 S15・16	円形
S-632 P	A2 R16	円形
S-633 P	A2 T15	楕円形
S-634 P	A2 T15	楕円形
S-635 P	A2 T16	楕円形

第17表-6

遺構番号	グリッド	平面形
S-636 P	B2	B11 柳門形
S-637 P	B2	B11 門形
S-638 P	B2	A13 柳門形
S-639 P	B2	A13 柳門形
S-641 SK	B2	A13 門形
S-642 P	B2	E13 門形
S-643 P	B2	E13 門形
S-644 P	B2	D12 門形
S-645 P	B2	D11 柳門形
S-646 P	B2	D11 門形
S-647 P	B2	D12 柳門形
S-648 P	B2	D11 門形
S-649 P	B2	D11 門形
S-650 P	B2	D13・14 門形
S-651 P	B2	D13 竪丸長方形
S-652 P	B2	D13 門形
S-653 P	B2	D・E13 不整形
S-654 P	B2	F8・9 柳門形
S-655 P	B2	F8 柳門形
S-656 P	B2	F8 門形
S-657 P	B2	E・F7・8 竪丸長方形
S-658 P	B2	F8 門形
S-659 P	B2	F8 柳門形
S-660 P	B2	F8 不整形門形
S-661 P	B2	F8 門形
S-662 P	B2	F7 柳門形
S-663 P	B2	F7 柳門形
S-664 P	B2	F7 柳門形
S-665 SK	B2	F6・7 門形
S-666 P	B2	F6 門形
S-667 P	B2	F6 門形
S-668 P	A2	T13 門形
S-669 P	A2	T13 柳門形
S-670 P	A2	T13 柳門形
S-671 P	B2	A13・14 柳門形
S-672 P	B2	F7 柳門形
S-673 P	B2	F7 門形
S-674 P	B2	B11 門形
S-675 P	B2	B11 門形
S-676 P	B2	B11・12 門形
S-677 P	B2	B11・12 門形
S-678 P	B2	C7 柳門形
S-679 P	A2	S14 門形
S-685 SK	A2	S・T14 柳門形
S-686 P	B2	C9 門形
S-687 P	B2	C9 柳門形
S-689 P	B2	C16 門形
S-690 P	B2	C16 柳門形
S-694 P	B2	B10 柳門形
S-695 P	B2	B10 竪丸長方形
S-696 SK	A2	S9 柳門形

BA(地区)

遺構番号	グリッド	平面形
SK2	B4	Q・R10・11 不整形門形
SK3	B4	Q10 竪丸長方形
SK4	B4	Q・R10・11 —
SK9	B3	O・P19・20 —
SK10	B3	P18・19 不整形
SK11	B3	O18・19 門形
SK12	B3	N19・20 不整形
SK13	B3	N20 —
SK15	B3	M・N19 不整形柳門形
SK16	B3	M19 柳門形
SK21	B3	N16 不整形門形
SK22	B3	N15 不整形柳門形
SK23	B3	M15 —
SK24	B3	N15 不整形門形
SK25	B3	N15 柳門形
SK26	B3	N16 —
SK27	B3	N16 —
SK28	B3	N14 柳門形
SK29	B3	O15 柳門形
SK30	B3	O15 —
SK31	B3	O15 —
SK32	B3	O16 —
SK33	B3	N16 柳門形
SK34	B3	O15 柳門形
SK35	B3	N15 柳門形
SK36	B3	N15 門形
SK37	B3	O16 柳門形
SK38	B3	N15・16 不整形柳門形
SK39	B3	O14 —
SK40	B3	N14 柳門形
SK41	B3	N14 柳門形
SK42	B3	O15 —
SK43	B3	N14・15 不整形柳門形
SK62	B3	F9 門形
SK65	B3	G11 不整形
SK66	B3	F12 竪丸長方形
SK71	B3	E18 不整形柳門形
SK73	B3	H14 門形
SK80	B3	J・K18 不整形
SK81	B4	K3 —
SK82	B4	K・L3 門形
SK83	B4	L1 —
SK84	B3	L20 不整形柳門形
SK85	B4	K・L1 不整形柳門形
SK86	B4	K1 不整形
SK87	B4	K1 不整形
SK88	B4	K1 不整形柳門形
SK89	B3・4	K20・1 門形
SK90	B3	K20 門形
SK91	B3	K20 柳門形
SK92	B3	I19 柳門形
SK93	B3	K18 柳門形
SK100	B4	K1 不整形柳門形
SK101	B3・4	K20・1 柳門形
SP1	B4	Q9・10 柳門形
SP2	B4	Q10 柳門形
SP3	B4	Q10 柳門形
SP5	B4	Q10 竪丸長方形
SP6	B3	P19 柳門形
SP7	B3	O18 門形
SP9	B3	O19 門形
SP10	B3	O18 —
SP12	B3	N18 柳門形
SP14	B3	N18 門形
SP15	B3	N18・19 門形
SP16	B3	N18 不整形門形
SP18	B3	N19 門形
SP19	B3	N19 柳門形
SP20	B3	N19 柳門形
SP21	B3	N19 門形
SP22	B3	N19 門形
SP23	B3	N20 門形
SP24	B3	N20 門形
SP25	B3	N20 門形
SP26	B3	N19・20 門形
SP27	B3	N19 門形
SP28	B3	N19 不整形門形
SP29	B3	N19 門形
SP30	B3	N19 柳門形
SP31	B3	N19 柳門形
SP32	B3	N19 柳門形
SP33	B3	N19 門形
SP34	B3	N19 門形
SP35	B3	N19 柳門形
SP36	B3	N19 門形
SP37	B3	N19 柳門形

遺構番号	グリッド	平面形
SP38	B3	N19 門形
SP39	B3	N19 門形
SP40	B3	N19 門形
SP41	B3	N19 柳門形
SP42	B3	N19 門形
SP43	B3	N18・19 門形
SP44	B3	N18 柳門形
SP45	B3	N18 門形
SP46	B3	N18 —
SP48	B3	N19 柳門形
SP49	B3	N19 門形
SP50	B3	N19 門形
SP51	B3	N18 柳門形
SP52	B3	N18 門形
SP53	B3	N18 柳門形
SP55	B3	M・N18 門形
SP56	B3	M18 —
SP57	B3	M18・19 柳門形
SP58	B3	M18 不整形柳門形
SP59	B3	M18 門形
SP60	B3	M18 —
SP61	B3	M18 門形
SP62	B3	M18 門形
SP65	B3	M18 門形
SP64	B3	M18 柳門形
SP65	B3	M18 柳門形
SP66	B3	M18 門形
SP67	B3	M18 門形
SP68	B3	M18 門形
SP69	B3	M18 —
SP71	B3	N19・20 門形
SP72	B3	M・N19・20 柳門形
SP73	B3	M19・20 柳門形
SP74	B3	N19 柳門形
SP75	B3	M19 門形
SP76	B3	M・N19 柳門形
SP77	B3	M19 柳門形
SP78	B3	M19 柳門形
SP80	B3	M19 柳門形
SP81	B3	M19 柳門形
SP82	B3	M19 —
SP84	B3	M19 門形
SP85	B3	N19 柳門形
SP86	B3	M19 門形
SP87	B3	M19 門形
SP88	B3	M19 不整形柳門形
SP89	B3	M19 門形
SP90	B3	M・N20 門形
SP91	B3	M20 不整形柳門形
SP92	B3	M20 —
SP94	B3	M20 —
SP95	B3	M20 —
SP96	B3	M20 —
SP97	B3	M19・20 柳門形
SP98	B3	M19 門形
SP99	B3	M19 門形
SP100	B3	M19 門形
SP101	B3	M19 門形
SP102	B3	M19 柳門形
SP103	B3	M19 門形
SP104	B3	M19 柳門形
SP105	B3	M19 門形
SP106	B3	M19 柳門形
SP107	B3	M19 門形
SP108	B3	M19 柳門形
SP110	B3	M19 門形
SP111	B3	M19 門形
SP112	B3	M19・20 —
SP113	B3	M20 —
SP117	B3	M19・20 不整形柳門形
SP118	B3	M19 柳門形
SP119	B3	M19 柳門形
SP120	B3	M19 柳門形
SP121	B3	M19 門形
SP122	B3	M19 門形
SP123	B3	M19 柳門形
SP124	B3	M19 不整形柳門形
SP125	B3	M19 柳門形
SP126	B3	M19 柳門形
SP127	B3	M18 門形
SP129	B3	M18 門形
SP130	B3	M18 門形
SP132	B3	M19 —
SP133	B3	M19 柳門形
SP134	B3	L19 不整形柳門形
SP135	B3	L19 門形

第17表-7

道幅番号	グリッド	平面形
SP136	B3 L19	円形
SP137	B3 L19	楕円形
SP138	B3 L19	円形
SP139	B3 L19	楕円形
SP140	B3 L19	楕円形
SP142	B3 L19	不整形円形
SP143	B3 L20	円形
SP145	B3 N18・19	楕円形
SP146	B3 N18	円形
SP147	B3 N18	円形
SP148	B3 N18	円形
SP150	B3 N18	円形
SP151	B3 N18	円形
SP152	B3 N・O18	円形
SP153	B3 N18	—
SP154	B3 N19	楕円形
SP155	B3 N20	円形
SP156	B3 N19・20	円形
SP157	B3 O18	—
SP158	B3 N20	楕円形
SP159	B3 N20	楕円形
SP160	B3 M20	—
SP161	B3 M20	—
SP162	B3 N19	円形
SP163	B3 N19	円形
SP164	B3 M19	楕円形
SP165	B3 M19	楕円形
SP166	B3 L19	楕円形
SP167	B3 M19	楕円形
SP168	B3 N20	楕円形
SP169	B3 N20	楕円形
SP170	B3 N20	楕円形
SP171	B3 N20	—
SP172	B3 M・N20	楕円形
SP173	B3 N20	楕円形
SP174	B3 N20	楕円形
SP175	B3 N20	円形
SP177	B3 M20	楕円形
SP178	B3 M19	楕円形
SP180	B3 M・N20	—
SP181	B3 M19	楕円形
SP182	B3 M18	楕円形
SP183	B3 M18	—
SP184	B3 M19	楕円形
SP185	B3 N19	不整形円形
SP187	B3 M・N14	—
SP202	B3 M15	—
SP203	B3 N15	円形
SP204	B3 N15	円形
SP205	B3 M16	楕円形
SP206	B3 M16	楕円形
SP207	B3 M15	円形
SP208	B3 M15	楕円形
SP209	B3 N15	楕円形
SP210	B3 N15・16	楕円形
SP211	B3 N15・16	楕円形
SP212	B3 N15	円形
SP213	B3 N15	円形
SP214	B3 N15	—
SP215	B3 N15	楕円形
SP216	B3 N15	扇丸・角形
SP217	B3 N15	楕円形
SP218	B3 N15	円形
SP219	B3 N15	円形
SP220	B3 N15	円形
SP221	B3 O16	—
SP222	B3 O16	—
SP223	B3 N16	円形
SP224	B3 O16	—
SP225	B3 O15	円形
SP226	B3 O16	円形
SP227	B3 N15・16	—
SP228	B3 N16	円形
SP229	B3 N16	円形
SP230	B3 O15	円形
SP231	B3 O14	楕円形
SP232	B3 O14	楕円形
SP233	B3 O14	円形
SP234	B3 M15・16	楕円形
SP235	B3 M15・16	—
SP236	B3 M・N15	楕円形
SP237	B3 N15・16	円形
SP238	B3 N15	楕円形
SP239	B3 M・N15	円形
SP240	B3 O15	—
SP241	B3 O15	—
SP242	B3 O14	円形

道幅番号	グリッド	平面形
SP243	B3 N14・15	楕円形
SP244	B3 N14	楕円形
SP245	B3 N14	楕円形
SP246	B3 O15	—
SP247	B3 O15	円形
SP248	B3 O14・15	楕円形
SP249	B3 N14・15	楕円形
SP250	B3 N14	円形
SP251	B3 N14	楕円形
SP252	B3 N14	円形
SP253	B3 N14	楕円形
SP254	B3 N14	円形
SP255	B3 N14	楕円形
SP256	B3 N14	楕円形
SP257	B3 M15	円形
SP258	B3 N・O13	楕円形
SP259	B3 N13	不整形円形
SP260	B3 N14	円形
SP261	B3 N14	円形
SP262	B3 N14	円形
SP263	B3 N15	円形
SP264	B3 N15	—
SP265	B3 N14・15	円形
SP266	B3 N15	円形
SP267	B3 N16	楕円形
SP268	B3 M・N14・15	—
SP269	B3 M・N14・15	不整形円形
SP270	B3 M・N14・15	楕円形
SP271	B3 O14	不整形円形
SP272	B3 N14	円形
SP273	B3 N16	円形
SP274	B3 N16	—
SP275	B3 N16	—
SP276	B3 N16	楕円形
SP277	B3 N16	不整形円形
SP278	B3 N16	円形
SP279	B3 N16	—
SP280	B3 N16	—
SP281	B3 O15	円形
SP282	B3 N16	—
SP283	B3 N14	楕円形
SP284	B3 O15	円形
SP301	B4 O5	楕円形
SP302	B4 O5	円形
SP303	B4 O5	円形
SP304	B4 O5	円形
SP305	B4 O5	円形
SP306	B4 O5	円形
SP307	B4 O5	楕円形
SP308	B4 O5	円形
SP309	B4 O5	楕円形
SP310	B4 O5	円形
SP311	B4 O5	楕円形
SP313	B4 O5	円形
SP314	B4 O5	円形
SP315	B4 N・O5	円形
SP401	B3 L18	円形
SP402	B3 L19	楕円形
SP403	B3 L19	円形
SP406	B3 L19	円形
SP407	B3 L19	楕円形
SP408	B3 L19	円形
SP409	B3 L19	楕円形
SP410	B3 L19	円形
SP411	B3 L19	楕円形
SP412	B3 L19	楕円形
SP415	B3 L20	楕円形
SP416	B3 L20	不整形円形
SP421	B3 L20	楕円形
SP425	B3 L20	円形
SP426	B3 L18	—
SP427	B3 L20	円形
SP428	B3 L20	楕円形
SP429	B3 L20	円形
SP430	B3 L20	楕円形
SP431	B3 L20	楕円形
SP432	B3 L20	楕円形
SP433	B3 L20	楕円形
SP434	B3 L20	楕円形
SP435	B3 L20	円形
SP438	B3 L19・20	不整形円形
SP439	B3 L19	円形
SP440	B3 L19	不整形
SP441	B3 L19	楕円形
SP442	B3 L19	円形
SP443	B3 L19	円形
SP444	B3 L19	円形

道幅番号	グリッド	平面形
SP445	B3 L19	円形
SP446	B3 L19	円形
SP447	B3 L19	円形
SP448	B3 L19	円形
SP449	B3 L19	円形
SP450	B3 L19	円形
SP451	B3 L19	円形
SP452	B3 L19	円形
SP454	B3 L19	楕円形
SP455	B3 L19	楕円形
SP456	B3 L19	—
SP457	B3 L19	楕円形
SP458	B3 L19	楕円形
SP459	B3 L19	—
SP460	B3 L19	扇丸・角形
SP461	B3 L19	—
SP462	B3 L19	楕円形
SP463	B3 L19	円形
SP464	B3 L19	—
SP465	B3 L19	—
SP466	B3 L19・20	楕円形
SP467	B3 K18	円形
SP468	B3 L20	楕円形
SP471	B3 L20	円形
SP472	B3 L20	円形
SP473	B3 K・L20	楕円形
SP474	B3 K・L20	—
SP475	B3 L20	楕円形
SP476	B3 L20	楕円形
SP478	B3 L19	楕円形
SP479	B3 L19	円形
SP480	B3 L19	楕円形
SP481	B3 L19	円形
SP482	B3 L19	楕円形
SP483	B3 L19	楕円形
SP485	B3 L19	楕円形
SP486	B3 L19	円形
SP487	B3 L19	円形
SP488	B3 L19	楕円形
SP489	B3 L18	円形
SP490	B3 L18	円形
SP491	B3 L18・19	円形
SP492	B3 L19	楕円形
SP493	B3 L18	円形
SP494	B3 L18・19	円形
SP495	B3 L18	楕円形
SP496	B3 L19	—
SP497	B3 L19	楕円形
SP498	B3 L19	円形
SP499	B3 L19	円形
SP500	B3 L19	楕円形
SP501	B3 L19	円形
SP502	B3 L19	楕円形
SP503	B3 L19	円形
SP505	B3 L19	楕円形
SP506	B3 L19	円形
SP507	B3 L19・20	円形
SP508	B3 L19・20	円形
SP509	B3 L20	楕円形
SP511	B3 K・L20	不整形円形
SP512	B3 K・L20	不整形円形
SP513	B3 K20	円形
SP514	B3 K20	楕円形
SP515	B3 K20	不整形楕円形
SP516	B3 K20	楕円形
SP517	B3 K20	楕円形
SP518	B3 K20	円形
SP519	B3 K・L20	楕円形
SP520	B3 K20	楕円形
SP521	B3 K・L19・20	円形
SP522	B3 K・L19	不整形楕円形
SP523	B3 K・L19	楕円形
SP524	B3 K19	円形
SP528	B3 K18	円形
SP529	B3 K18	楕円形
SP530	B3 K18	楕円形
SP531	B3 K18	円形
SP532	B3 K18・19	円形
SP534	B3 K・L19	円形
SP535	B3 K・L19	楕円形
SP536	B3 K19	楕円形
SP537	B3 K・L19	—
SP538	B3 K19	円形
SP539	B3 K19	楕円形
SP540	B3 K19	円形
SP541	B3 K19	円形
SP542	B3 K19	円形

第17表-8

道積番号	グリッド	平面形
SP543	B3	K19 不整櫛形
SP545	B3	K・L19 不整形
SP546	B3	K・L19 円形
SP547	B3	K・L19 円形
SP548	B3	K19 円形
SP549	B3	K19 櫛形
SP551	B3	K19 櫛形
SP552	B3	K19 円形
SP553	B3	K19・20 櫛形
SP554	B3	K19・20 櫛形
SP555	B3	K20 円形
SP556	B3	K18 円形
SP557	B3	K20 円形
SP558	B3	K20 扇丸形
SP559	B3	K20 円形
SP560	B3	K20 櫛形
SP561	B3	K20 円形
SP563	B3	K20 円形
SP565	B3	K20 円形
SP567	B3	K20 円形
SP568	B3	K20 櫛形
SP569	B3	K19・20 櫛形
SP571	B3	K19 円形
SP572	B3	K19 円形
SP576	B3	K19 円形
SP579	B3	K19 櫛形
SP580	B3	K19 櫛形
SP581	B3	K19 櫛形
SP583	B3	K19 不整櫛形
SP585	B3	K19 円形
SP586	B3	K19 円形
SP587	B3	K19 不整円形
SP588	B3	K19 円形
SP589	B3	K19 円形
SP590	B3	K19 櫛形
SP591	B3	K19 櫛形
SP592	B3	K19 櫛形
SP593	B3	K19 円形
SP596	B3	K19 円形
SP597	B3	K19 円形
SP598	B3	K19 不整櫛形
SP599	B3	K19 円形
SP600	B3	K19 櫛形
SP601	B3	K18・19 櫛形
SP602	B3	K18・19 円形
SP603	B3	K18 櫛形
SP604	B3	K18・19 円形
SP605	B3	K18・19 円形
SP606	B3	K18 不整形
SP607	B3	K18 櫛形
SP608	B3	K18 円形
SP609	B3	K18 円形
SP610	B3	K18 櫛形
SP613	B3	K18 円形
SP614	B3	K18 櫛形
SP615	B3	K18 櫛形
SP616	B3	K18 円形
SP617	B3	K18 円形
SP618	B3	K18 不整円形
SP619	B3	K18 櫛形
SP623	B3	K18・19 不整櫛形
SP624	B3	K19 円形
SP625	B3	K19 櫛形
SP626	B3	K19 円形
SP627	B3	K19 円形
SP628	B3	K19 不整円形
SP629	B3	K19 円形
SP631	B3	K19 不整形
SP632	B3	K19 櫛形
SP636	B3	K19・20 円形
SP637	B3	K19 円形
SP638	B3	K19 円形
SP639	B3	K19 櫛形
SP641	B3	K19 円形
SP643	B3	K19 不整櫛形
SP644	B3	K19 円形
SP645	B3	K19 円形
SP646	B3	K19 円形
SP647	B3	K19 櫛形
SP648	B3	K19 櫛形
SP649	B3	K19 長櫛形
SP651	B3	K19 櫛形
SP652	B3	K19 円形
SP653	B3	K19 円形
SP654	B3	K18・19 櫛形
SP655	B3	K18 円形
SP656	B3	K18 櫛形

道積番号	グリッド	平面形
SP657	B3	K18 櫛形
SP658	B3	K18 櫛形
SP659	B3	K18 円形
SP660	B3	K18 櫛形
SP661	B3	J・K18 櫛形
SP662	B3	I18 円形
SP664	B3	K18 円形
SP665	B3	K19 櫛形
SP666	B3	K19 櫛形
SP667	B3	J19 円形
SP668	B3	K19 円形
SP669	B3	K19 不整形
SP675	B3	J19 不整形
SP701	B3	I11 櫛形
SP702	B3	I11 櫛形
SP704	B3	I11 円形
SP705	B3	I11 円形
SP706	B3	I11 円形
SP707	B3	I11 円形
SP708	B3	I11 櫛形
SP709	B3	I10・11 櫛形
SP710	B3	I10・11 櫛形
SP711	B3	I10 円形
SP712	B3	I10 円形
SP713	B3	I10 円形
SP714	B3	I・111 櫛形
SP715	B3	I11 櫛形
SP716	B3	I・J11 円形
SP717	B3	I11 円形
SP719	B3	I10 円形
SP720	B3	I10 円形
SP721	B3	I10 円形
SP723	B3	I・J10 円形
SP724	B3	I・J10 円形
SP725	B3	I10 円形
SP726	B3	I10 円形
SP727	B3	I10 円形
SP731	B3	E9 円形
SP733	B3	F9 円形
SP734	B3	E・F9 円形
SP735	B3	E9 円形
SP736	B3	E9 不整形
SP737	B3	E9 櫛形
SP739	B3	E9 円形
SP740	B3	E9 不整形
SP743	B3	E9 円形
SP744	B3	E9 櫛形
SP745	B3	E9 櫛形
SP746	B3	E9 円形
SP747	B3	E9 円形
SP748	B3	E9 円形
SP749	B3	E9 櫛形
SP750	B3	E9 円形
SP751	B3	E9 円形
SP752	B3	E9 円形
SP753	B3	E9 櫛形
SP754	B3	E9 円形
SP755	B3	E9 円形
SP756	B3	E9 円形
SP757	B3	E9 円形
SP758	B3	E9 円形
SP759	B3	E9 円形
SP760	B3	E10 円形
SP761	B3	E10 円形
SP762	B3	E9 円形
SP763	B3	F9 櫛形
SP764	B3	E9 櫛形
SP765	B3	E9 円形
SP766	B3	E9 円形
SP767	B3	E9 円形
SP768	B3	E9 円形
SP769	B3	E9 円形
SP770	B3	F9 円形
SP771	B3	F11 櫛形
SP772	B3	F11 円形
SP773	B3	F・G11 櫛形
SP774	B3	G11 櫛形
SP775	B3	G11 櫛形
SP776	B3	G11 円形
SP777	B3	G11 櫛形
SP778	B3	G12 円形
SP779	B3	G12 円形
SP780	B3	G12 円形
SP782	B3	G12 円形
SP783	B3	G12 円形
SP785	B3	G12 円形
SP786	B3	G12 円形

道積番号	グリッド	平面形
SP787	B3	G12 円形
SP788	B3	G12 円形
SP789	B3	G11・12 櫛形
SP790	B3	G12 櫛形
SP791	B3	G11 不整形
SP792	B3	F・G11 円形
SP793	B3	F11 櫛形
SP794	B3	F11 円形
SP795	B3	F11 円形
SP796	B3	F11 円形
SP797	B3	G11・12 円形
SP798	B3	F・G12 櫛形
SP799	B3	F11・12 櫛形
SP800	B3	F12 櫛形
SP801	B3	F12 櫛形
SP802	B3	G12 円形
SP803	B3	F・G12 円形
SP804	B3	F12 櫛形
SP805	B3	F12 不整櫛形
SP806	B3	F12 櫛形
SP807	B3	F12 櫛形
SP808	B3	F12 円形
SP809	B3	F12 円形
SP810	B3	F12 円形
SP811	B3	F・G12 櫛形
SP812	B3	F・G12 櫛形
SP813	B3	G12 櫛形
SP814	B3	G12 櫛形
SP815	B3	G12 円形
SP816	B3	G12 櫛形
SP818	B3	G12 櫛形
SP819	B3	G12 櫛形
SP820	B3	G12 櫛形
SP821	B3	G12 円形
SP822	B3	G12 円形
SP823	B3	G12 円形
SP824	B3	G12 櫛形
SP825	B3	G12 円形
SP826	B3	G12 櫛形
SP827	B3	G12 不整櫛形
SP828	B3	G12 円形
SP829	B3	G12 円形
SP830	B3	G12 円形
SP832	B3	G12 円形
SP833	B3	G12 円形
SP834	B3	G12 円形
SP836	B3	G12 円形
SP837	B3	G12 円形
SP838	B3	G12 櫛形
SP839	B3	G12 円形
SP841	B3	G12 円形
SP842	B3	G12 不整円形
SP843	B3	G12 円形
SP846	B3	G12 櫛形
SP847	B3	F・G12 円形
SP848	B3	F12 不整櫛形
SP850	B3	F12 円形
SP851	B3	F12 不整櫛形
SP852	B3	F12 円形
SP853	B3	F12 櫛形
SP854	B3	F12 櫛形
SP855	B3	F12 円形
SP856	B3	F12 櫛形
SP857	B3	F12 円形
SP858	B3	F12 不整櫛形
SP859	B3	F12 不整櫛形
SP861	B3	F12 櫛形
SP862	B3	F12・13 櫛形
SP863	B3	F12・13 円形
SP864	B3	F12・13 不整櫛形
SP865	B3	F12 櫛形
SP866	B3	F12 円形
SP867	B3	F12 円形
SP868	B3	F12 不整櫛形
SP869	B3	F12 円形
SP870	B3	F12 櫛形
SP871	B3	F12・13 円形
SP872	B3	F13 円形
SP873	B3	F12 櫛形
SP874	B3	F12 円形
SP875	B3	F12・13 円形
SP877	B3	F12 円形
SP878	B3	F12 櫛形
SP880	B3	G12・13 不整櫛形
SP881	B3	G12 円形
SP882	B3	G12 櫛形
SP883	B3	G12・13 櫛形

第17表-9

道幅番号	グリッド	平面形
SP885	B3 G12・13	楕円形
SP886	B3 G12・13	円形
SP887	B3 G13	円形
SP888	B3 G13	円形
SP889	B3 G13	円形
SP890	B3 G13	円形
SP891	B3 G13	楕円形
SP892	B3 G13	不整形円形
SP893	B3 G13	楕円形
SP894	B3 G13	楕円形
SP895	B3 G13	不整形円形
SP897	B3 G13	円形
SP898	B3 G13	円形
SP899	B3 G13	楕円形
SP900	B3 G13	円形
SP902	B3 G13	楕円形
SP903	B3 G13	不整形円形
SP904	B3 G13	円形
SP905	B3 G13	円形
SP906	B3 F13	円形
SP907	B3 F13	不整形円形
SP909	B3 F13	楕円形
SP910	B3 F13	不整形円形
SP912	B3 F13	不整形円形
SP913	B3 F13	楕円形
SP914	B3 F13	円形
SP915	B3 F13	円形
SP916	B3 F13	円形
SP917	B3 F13	楕円形
SP919	B3 F13	楕円形
SP920	B3 F13	円形
SP921	B3 F12	円形
SP922	B3 F13	円形
SP925	B3 F13	円形
SP927	B3 F13	不整形円形
SP928	B3 F・G13	不整形円形
SP929	B3 G13	円形
SP931	B3 G13	円形
SP932	B3 G13	円形
SP933	B3 G13	円形
SP934	B3 F13	円形
SP938	B3 F13	楕円形
SP939	B3 F13	円形
SP940	B3 F13・14	円形
SP941	B3 F14	円形
SP942	B3 F14	円形
SP943	B3 F14	不整形円形
SP944	B3 F13	円形
SP945	B3 F11	長楕円形
SP946	B3 F11	円形
SP947	B3 G11	円形
SP948	B3 F12	円形
SP949	B3 F13	円形
SP950	B3 E14	円形
SP951	B3 E14	楕円形
SP952	B3 E14	楕円形
SP953	B3 E14	楕円形
SP954	B3 E14	不整形円形
SP955	B3 E14	円形
SP956	B3 E13	楕円形
SP957	B3 E13	楕円形
SP958	B3 E13	楕円形
SP959	B3 E13・14	円形
SP960	B3 F13	楕円形
SP961	B3 G13	円形
SP962	B3 G13	円形
SP963	B3 F12	楕円形
SP964	B3 F13	楕円形
SP965	B3 G11	円形
SP967	B3 F11	楕円形
SP968	B3 F11	楕円形
SP969	B3 F12	円形
SP970	B3 F13	楕円形
SP971	B3 F13	円形
SP972	B3 F13	円形
SP974	B3 F13	円形
SP975	B3 F13	楕円形
SP976	B3 G12	不整形円形
SP977	B3 G12	楕円形
SP978	B3 G12	楕円形
SP979	B3 G12	円形
SP980	B3 G12	楕円形
SP984	B4 J3	円形
SP985	B4 J2	円形
SP986	B4 J2	円形
SP988	B4 J2	円形
SP989	B4 J2	楕円形

道幅番号	グリッド	平面形
SP990	B4 J2	楕円形
SP991	B4 J2	円形
SP992	B4 J2	楕円形
SP993	B4 J2	円形
SP994	B4 J2	円形
SP995	B4 J2	円形
SP996	B4 J3	円形
SP997	B4 K3	円形
SP998	B4 K3	円形
SP999	B4 K3	円形
SP1000	B4 K3	円形
SP1001	B4 K3	不整形円形
SP1002	B4 K3	楕円形
SP1003	B4 K3	楕円形
SP1004	B4 K3・4	楕円形
SP1005	B4 K4	楕円形
SP1006	B4 K4	円形
SP1007	B4 K4	円形
SP1008	B4 K4	不整形円形
SP1009	B4 K3	楕円形
SP1010	B4 K3	円形
SP1011	B4 K3	円形
SP1012	B4 K3	円形
SP1013	B4 K3	円形
SP1014	B4 K3	円形
SP1015	B4 K3	楕円形
SP1016	B4 K3	楕円形
SP1017	B4 K3	円形
SP1019	B4 K3	円形
SP1020	B4 K4	楕円形
SP1021	B4 L4	円形
SP1022	B4 L3	楕円形
SP1023	B4 L3	楕円形
SP1024	B4 L3	楕円形
SP1025	B4 L3	楕円形
SP1027	B4 K3	円形
SP1028	B4 K3	円形
SP1029	B4 K2・3	楕円形
SP1031	B4 K2	不整形円形
SP1032	B4 K2	不整形円形
SP1034	B4 K3	円形
SP1035	B4 K・L3	楕円形
SP1036	B4 L3	円形
SP1037	B4 J2	円形
SP1038	B4 J3	楕円形
SP1039	B4 J4	楕円形
SP1040	B4 J4	円形
SP1041	B4 K・L3	楕円形
SP1042	B4 K3	円形
SP1043	B4 K3	円形
SP1044	B4 K3	円形
SP1045	B4 K・L2	楕円形
SP1046	B4 K・L2	楕円形
SP1047	B4 K・L2	円形
SP1048	B4 K2	楕円形
SP1049	B4 K2	楕円形
SP1050	B4 K2	円形
SP1051	B4 K2	円形
SP1052	B4 K2	楕円形
SP1053	B4 K2	楕円形
SP1054	B4 K2	円形
SP1055	B4 K2	楕円形
SP1056	B4 K2	円形
SP1057	B4 K3	楕円形
SP1058	B4 L2	楕円形
SP1059	B4 K2	不整形円形
SP1060	B4 K2	楕円形
SP1061	B4 L2	楕円形
SP1062	B4 L2	円形
SP1063	B4 L2	楕円形
SP1065	B4 L2	楕円形
SP1066	B4 L2	楕円形
SP1067	B4 L2	円形
SP1068	B4 L2	円形
SP1069	B4 K2	楕円形
SP1070	B4 K2	楕円形
SP1072	B4 K2	楕円形
SP1073	B4 K2	楕円形
SP1074	B4 K2	円形
SP1075	B4 K2	円形
SP1078	B4 L2	不整形円形
SP1079	B4 K2	不整形円形
SP1080	B4 K2	楕円形
SP1081	B4 K2	円形
SP1082	B4 K2	円形
SP1083	B4 K・L2	不整形円形
SP1085	B4 L2	円形

道幅番号	グリッド	平面形
SP1086	B4 L2	円形
SP1087	B4 L2	円形
SP1089	B4 L1	円形
SP1090	B4 L1	楕円形
SP1091	B4 L1	不整形円形
SP1092	B4 L1	楕円形
SP1093	B4 L1	円形
SP1094	B4 L1	円形
SP1095	B4 L1	楕円形
SP1096	B4 L2	円形
SP1097	B4 L2	円形
SP1098	B4 L2	円形
SP1099	B4 L2	円形
SP1100	B4 L2	円形
SP1101	B4 L2	円形
SP1102	B4 L1	楕円形
SP1103	B4 L1	円形
SP1104	B4 L1	円形
SP1105	B4 L1	円形
SP1106	B4 L1	円形
SP1107	B4 K2	円形
SP1108	B4 K・L2	円形
SP1109	B4 L2	楕円形
SP1110	B4 L2	円形
SP1111	B4 K2	楕円形
SP1112	B4 K2	楕円形
SP1113	B4 K2	円形
SP1114	B4 K2	楕円形
SP1115	B4 K2	楕円形
SP1116	B4 K2	楕円形
SP1117	B4 K2	楕円形
SP1118	B4 K2	円形
SP1119	B4 K1・2	円形
SP1120	B4 K1	円形
SP1121	B4 K1	楕円形
SP1122	B4 K・L2	楕円形
SP1123	B4 K・L2	円形
SP1124	B4 K2	円形
SP1125	B4 K1	円形
SP1126	B4 K1	楕円形
SP1127	B4 K1	楕円形
SP1128	B4 L1	円形
SP1129	B4 L1	楕円形
SP1130	B4 L1	円形
SP1131	B4 L1	不整形円形
SP1132	B4 L1	楕円形
SP1133	B4 K・L1	楕円形
SP1134	B4 K・L1	不整形円形
SP1135	B4 K1	円形
SP1136	B4 K1	円形
SP1137	B4 K1	円形
SP1138	B4 K・L1	円形
SP1139	B4 L1	楕円形
SP1140	B4 K・L1	不整形円形
SP1141	B4 K1	円形
SP1142	B4 K1	不整形円形
SP1143	B4 K1	楕円形
SP1144	B4 L2	円形
SP1145	B4 L1・2	円形
SP1146	B4 L1・2	不整形円形
SP1147	B4 K1	不整形円形
SP1148	B4 K1	楕円形
SP1149	B4 K1	不整形円形
SP1150	B4 K1	円形
SP1151	B4 K1	円形
SP1152	B4 L1	楕円形
SP1153	B4 L1	楕円形
SP1154	B4 L1	円形
SP1155	B4 L1	円形
SP1156	B4 L1	楕円形
SP1157	B4 L1	円形
SP1158	B4 L1	楕円形
SP1159	B4 L1	円形
SP1160	B4 L1	楕円形
SP1161	B4 L1	円形
SP1162	B4 L1	楕円形
SP1163	B4 L1	楕円形
SP1164	B4 L1	円形
SP1165	B4 L1	楕円形
SP1166	B4 K1	円形
SP1167	B4 K1	楕円形
SP1168	B4 K1	円形
SP1169	B4 K・L1	楕円形
SP1170	B4 K1	円形
SP1171	B4 K1	不整形円形
SP1172	B4 L1	円形
SP1173	B4 L1	楕円形

第17表-10

道幅番号	グリッド	平面形
SP1174	B4 K1	—
SP1175	B4 K1・2	不整楕円形
SP1176	B4 K2	楕円形
SP1177	B4 K2	楕円形
SP1178	B4 K2	楕円形
SP1179	B4 K2	円形
SP1180	B4 K2	円形
SP1181	B4 K2	楕円形
SP1182	B4 K2	不整楕円形
SP1183	B4 K2	円形
SP1184	B4 K1	円形
SP1185	B4 K1	円形
SP1186	B4 K1	楕円形
SP1187	B4 K1	円形
SP1188	B4 K2	円形
SP1189	B4 K1・2	楕円形
SP1190	B4 K1	円形
SP1191	B4 K1	円形
SP1192	B4 K1	円形
SP1193	B3 L20	不整円形
SP1194	B3 L20	円形
SP1195	B3 L20	楕円形
SP1196	B3 L20	不整楕円形
SP1197	B3 L20	楕円形
SP1198	B3 L20	楕円形
SP1199	B3 L20	楕円形
SP1200	B3 L20	円形
SP1201	B3 L20	楕円形
SP1202	B3 L20	楕円形
SP1203	B3 L20	円形
SP1204	B3 L20	楕円形
SP1205	B3 L20	円形
SP1206	B3 K20	円形
SP1207	B3 L20	円形
SP1208	B3 K20	不整形
SP1209	B4 K1	不整楕円形
SP1210	B4 K1	不整楕円形
SP1211	B4 L1	楕円形
SP1212	B4 K1	円形
SP1213	B4 K1	不整円形
SP1214	B3 L20	—
SP1215	B3 L20	—
SP1216	B4 L1	楕円形
SP1217	B4 L1	不整円形
SP1218	B4 K・L1	—
SP1219	B4 K・L1	楕円形
SP1220	B4 K1	円形
SP1221	B3・4 K20・1	楕円形
SP1222	B3 K・L20	—
SP1223	B3 K・L20	円形
SP1224	B3 L20	楕丸三角形
SP1225	B3 L20	—
SP1226	B3 L20	円形
SP1227	B3 L20	—
SP1228	B3 L20	—
SP1229	B3 L20	円形
SP1230	B3 L20	楕円形
SP1231	B3 L20	円形
SP1232	B3 L20	円形
SP1233	B3 L20	楕円形
SP1234	B3 K20	円形
SP1235	B3 K20	楕円形
SP1236	B3 K20	楕円形
SP1237	B4 K・L1	円形
SP1238	B4 K・L1	—
SP1239	B4 K・L1	円形
SP1240	B4 K・L1	—
SP1241	B4 K1	楕円形
SP1242	B4 K1	—
SP1243	B4 K1	円形
SP1244	B4 L1	円形
SP1245	B4 L1	楕円形
SP1246	B4 K・L1	楕円形
SP1247	B4 L2	不整楕円形
SP1248	B4 L2	—
SP1249	B4 L2	円形
SP1250	B4 L2	楕円形
SP1251	B4 L2	円形
SP1252	B4 K・L2	楕円形
SP1253	B4 K2	円形
SP1254	B4 K2	円形
SP1255	B4 K2	不整円形
SP1256	B4 K2	不整円形
SP1257	B4 K1	楕円形
SP1258	B4 K1	円形
SP1259	B4 K1	—
SP1260	B4 K1	円形

道幅番号	グリッド	平面形
SP1261	B4 K1	円形
SP1262	B4 K1	円形
SP1263	B4 K1	円形
SP1264	B4 K1	不整楕円形
SP1265	B4 K1	円形
SP1266	B4 K1	楕円形
SP1267	B4 K1	不整楕円形
SP1268	B4 K1	楕円形
SP1269	B4 K1	楕円形
SP1270	B4 K1	円形
SP1271	B4 K1	—
SP1272	B4 K1	—
SP1273	B3 K20	楕円形
SP1274	B3 K20	円形
SP1275	B3 K20	円形
SP1276	B3・4 K20・1	円形
SP1277	B3・4 K20・1	—
SP1278	B4 K1	円形
SP1279	B4 K1	円形
SP1280	B4 K1	楕円形
SP1281	B3・4 K20・1	楕円形
SP1282	B3 K20	楕円形
SP1283	B3 K20	円形
SP1284	B3 K20	楕円形
SP1285	B3 K20	円形
SP1286	B3 K20	—
SP1287	B3 K20	—
SP1288	B3 K20	不整楕円形
SP1289	B3 K20	円形
SP1290	B3 K20	不整円形
SP1291	B3 K20	—
SP1292	B3 K20	円形
SP1293	B3 K20	不整楕円形
SP1294	B3 K20	—
SP1295	B3 K20	—
SP1296	B3 K20	—
SP1297	B3 K20	円形
SP1298	B3 K20	楕円形
SP1299	B3 K20	円形
SP1300	B3 K20	—
SP1301	B3 K20	—
SP1302	B3 K20	円形
SP1303	B3 K20	円形
SP1304	B3 K20	不整楕円形
SP1305	B3 K19	楕円形
SP1306	B3 K19	楕円形
SP1307	B3 K・L19	不整楕円形
SP1308	B3 K18	不整楕円形
SP1309	B3 K18	楕円形
SP1310	B3 K18	楕円形
SP1311	B4 K1	円形
SP1312	B3 K19	円形
SP1313	B3 K19	—
SP1314	B3 K19	—
SP1315	B3 K19	円形
SP1316	B3 K19	円形
SP1317	B3 K18	楕円形
SP1318	B3 K18	円形
SP1319	B3 K19	—
SP1320	B3 K19	楕円形
SP1321	B3 K19	円形
SP1322	B3 L20	円形
SP1323	B3 L20	楕円形
SP1324	B3 K20	—
SP1325	B3 K・L19	—
SP1326	B3 K20	楕円形
SP1327	B3 K・L19	—
SP1328	B3 K20	楕円形
SP1329	B3 K19	—
SP1330	B3 K19	—
SP1331	B3 K19	楕円形
SP1332	B3 K19	楕円形
SP1333	B3 K19	円形
SP1335	B3 K18	不整楕円形
SP1336	B3 K18	円形
SP1338	B3 K18	楕円形
SP1339	B3 K18	楕円形
SP1340	B3 K18	—
SP1341	B3 K18・19	楕円形
SP1342	B3 K18・19	—
SP1343	B3 K19	円形
SP1344	B4 K3	楕円形
SP1345	B4 K3	円形
SP1346	B4 L1	円形
SP1347	B4 K・L1	楕円形
SP1348	B4 K・L1	円形
SP1349	B4 K1・2	—

道幅番号	グリッド	平面形
SP1350	B4 K・L1・2	円形
SP1351	B4 K2	不整楕円形
SP1352	B4 K2	—
SP1353	B4 K2	円形
SP1354	B3・4 L20・1	—
SP1355	B3・4 L20・1	—
SP1356	B4 L1	円形
SP1357	B3 K18	楕円形
SP1358	B3 K18	円形
SP1359	B3 K18	円形
SP1401	B3 F・G13	楕円形
SP1402	B3 F13	—
SP1403	B3 G13	—
SP1404	B3 F・G13	不整円形
SP1405	B3 G13	円形
SP1406	B3 F・G13	楕円形
SP1407	B3 F・G12・13	円形
SP1408	B3 F・G12	円形
SP1409	B3 G12	円形
SP1410	B3 G12	円形
SP1411	B3 G12	楕円形
SP1412	B3 G12	円形
SP1413	B3 G12	円形
SP1414	B3 F15	楕円形
SP1415	B3 F15	楕円形
SP1416	B3 F14・15	楕円形
SP1417	B3 F・G12・13	楕円形
SP1418	B3 H4	円形
SP1419	B3 H4・15	円形
SP1420	B3 H5	—
SP1421	B3 H5	円形
SP1422	B3 F・G12	楕円形
SP1423	B3 F15	円形
SP1424	B3 F14	不整楕円形
SP1425	B3 F13	円形
SP1426	B3 F13	円形
SP1427	B3 F13	円形
SP1428	B3 G12	楕円形
SP1429	B3 F14	円形
SP1430	B3 E17	円形
SP1501	B3 E20	円形
SP1502	B3 E20	円形
SP1503	B3 E20	円形
SP1504	B3 E19・20	円形
SP1505	B3 E20	円形
SP1506	B3 E19	円形
SP1507	B3 E19	楕円形
SP1508	B3 E19	円形
SP1509	B3 E19	楕円形
SP1510	B3 E19	楕円形
SP1511	B3 E19	円形
SP1512	B3 E18	円形
SP1513	B3 E19	円形
SP1514	B3 E19	円形
SP1515	B3 E17	不整円形
SP1516	B3 E17	不整円形
SP1517	B3 E17	円形
SP1518	B3 E17	楕円形
SP1519	B3 E17	円形
SP1520	B3 E19	円形
SP1521	B3 E19	円形
SP1522	B3 E17	楕円形
SP1523	B3 F16	円形
SP1525	B3 E16	円形
SP1526	B3 E16	円形
SP1527	B3 E16	円形
SP1528	B3 E16	楕円形
SP1529	B3 E16	—
SP1530	B3 E16	円形
SP1531	B3 E16	楕円形
SP1532	B3 E16	円形
SP1533	B3 E15	楕円形
SP1534	B3 E15	楕円形
SP1535	B3 E15・16	円形
SP1536	B3 E15・16	円形
SP1537	B3 F16	円形
SP1538	B3 E15・16	楕円形
SP1539	B3 F16	不整楕円形
SP1540	B3 F15	円形
SP1541	B3 F15	円形
SP1542	B3 F15	円形
SP1543	B3 F15	円形
SP1544	B3 F15	楕円形
SP1545	B3 F15	円形
SP1546	B3 E15	楕円形
SP1547	B3 E15	楕丸三角形
SP1548	B3 E15	不整楕円形

第17表-11

道幅番号	グリッド	平面形
SP1549	B3 E15	円形
SP1550	B3 E15	円形
SP1551	B3 E15	楕円形
SP1552	B3 E15	円形
SP1553	B3 E15	円形
SP1554	B3 E15	不整形円形
SP1555	B3 E15	円形
SP1556	B3 F15	円形
SP1557	B3 F15	円形
SP1558	B3 F15	楕円形
SP1559	B3 F15	円形
SP1560	B3 E15	円形
SP1561	B3 E15	楕円形
SP1562	B3 E14	楕円形
SP1563	B3 F14	円形
SP1564	B3 F14	楕円形
SP1565	B3 F14	—
SP1566	B3 F14	楕円形
SP1567	B3 F14	楕円形
SP1568	B3 E14	円形
SP1569	B3 E15	円形
SP1570	B3 F15・16	円形
SP1571	B3 E17	円形
SP1572	B3 F14	不整形円形
SP1573	B3 G17	不整形円形
SP1574	B3 G17	円形
SP1575	B3 G17	不整形円形
SP1576	B3 H17	円形
SP1577	B3 H17	不整形円形
SP1578	B3 H17	楕円形
SP1579	B3 H17	円形
SP1580	B3 H17	円形
SP1581	B3 H17	不整形円形
SP1582	B3 H17	円形
SP1583	B3 H17	楕円形
SP1584	B3 H17	不整形円形
SP1585	B3 H17	不整形円形
SP1586	B3 H17	楕円形
SP1587	B3 H17	楕円形
SP1588	B3 H17	楕円形
SP1589	B3 G17	円形
SP1590	B3 G17	円形
SP1592	B3 G17	楕丸方形
SP1593	B3 G17	円形
SP1594	B3 G16・17	円形
SP1595	B3 G16・17	円形
SP1596	B3 G16	円形
SP1597	B3 G16	楕円形
SP1598	B3 G16	不整形円形
SP1599	B3 G・H16	楕円形
SP1600	B3 H16	円形
SP1602	B3 H17	円形
SP1603	B3 H17	円形
SP1604	B3 H16・17	円形
SP1605	B3 H16・17	円形
SP1606	B3 H17	楕円形
SP1607	B3 H17	円形
SP1608	B3 H16	楕円形
SP1609	B3 H・H16	不整形円形
SP1610	B3 H16	円形
SP1611	B3 H16	楕円形
SP1612	B3 H16	円形
SP1613	B3 H16	円形
SP1614	B3 H16	円形
SP1615	B3 H16	円形
SP1616	B3 H16	円形
SP1617	B3 H16	円形
SP1618	B3 H16	円形
SP1619	B3 H16	円形
SP1620	B3 H16	楕円形
SP1621	B3 G・H16	円形
SP1622	B3 G16	円形
SP1623	B3 G16	不整形円形
SP1624	B3 G16	不整形円形
SP1625	B3 G16	円形
SP1626	B3 G・H16	円形
SP1627	B3 H16	円形
SP1628	B3 H16	円形
SP1629	B3 H16	円形
SP1630	B3 H16	楕円形
SP1631	B3 H16	不整形円形
SP1632	B3 H16	楕円形
SP1633	B3 H16	楕円形
SP1634	B3 H16	楕円形
SP1635	B3 H16	円形
SP1636	B3 H16	楕円形
SP1637	B3 H16	円形

道幅番号	グリッド	平面形
SP1638	B3 H16	円形
SP1639	B3 H16	円形
SP1640	B3 H16	楕円形
SP1641	B3 H16	不整形円形
SP1642	B3 H16	楕円形
SP1643	B3 H16	楕円形
SP1644	B3 H16	円形
SP1645	B3 H16	楕円形
SP1646	B3 H16	円形
SP1647	B3 H16	円形
SP1649	B3 F16	円形
SP1650	B3 H16	円形
SP1651	B3 H16	不整形円形
SP1652	B3 H16	円形
SP1653	B3 H16	円形
SP1654	B3 H17	楕円形
SP1655	B3 G18	円形
SP1656	B3 H16	円形
SP1657	B3 H16	円形
SP1658	B3 E20	円形
SP1659	B3 D20	円形
SP1660	B3 D・E20	円形
SP1661	B3 D20	楕円形
SP1662	B3 D・E19	楕円形
SP1667	B3 E15	楕円形
SP1668	B3 E15	円形
SP1669	B3 E・F15	円形
SP1670	B3 F14	円形
SP1671	B3 E20	円形
SP1673	B3 H16	楕円形
SP1674	B3 H16	楕円形
SP1675	B3 H15・16	楕円形
SP1676	B3 G15	不整形円形
SP1677	B3 G15	円形
SP1678	B3 G15	円形
SP1679	B3 G15	円形
SP1680	B3 G15	楕円形
SP1681	B3 G15	不整形円形
SP1682	B3 G15	円形
SP1683	B3 F・G15	不整形円形
SP1684	B3 F15	円形
SP1685	B3 H15	楕円形
SP1686	B3 H15	円形
SP1687	B3 H15	円形
SP1688	B3 H15	円形
SP1689	B3 H15	楕円形
SP1690	B3 H15	楕円形
SP1691	B3 H15	円形
SP1692	B3 H15	円形
SP1693	B3 H15	不整形円形
SP1694	B3 H15	楕円形
SP1695	B3 H15	円形
SP1696	B3 H15	不整形円形
SP1697	B3 H15	円形
SP1698	B3 H15	円形
SP1699	B3 H15	楕円形
SP1700	B3 H15	不整形円形
SP1701	B3 H15	楕円形
SP1702	B3 E19	楕円形
SP1703	B3 E・F14	不整形円形
SP1704	B3 H15	—
SP1705	B3 H15	円形
SP1706	B3 H15	円形
SP1707	B3 E15	楕円形
SP1708	B3 F16	円形
SP1709	B3 H15	楕円形
SP1710	B3 G15	楕円形
SP1711	B3 G15	円形
SP1712	B3 G15	円形
SP1713	B3 G15	不整形円形
SP1714	B3 F15	円形
SP1718	B3 F15	楕円形
SP1719	B3 G15	円形
SP1720	B3 G15	楕円形
SP1721	B3 G15	円形
SP1722	B3 F15	楕円形
SP1723	B3 F14	不整形円形
SP1724	B3 G14	不整形円形
SP1725	B3 F15	円形
SP1726	B3 F14・15	円形
SP1727	B3 G15	円形
SP1728	B3 G15	円形
SP1729	B3 G14	円形
SP1730	B3 G14・15	楕円形
SP1731	B3 H17	円形
SP1732	B3 H15・16	円形
SP1733	B3 F14	楕円形

道幅番号	グリッド	平面形
SP1734	B3 F・G14	不整形円形
SP1735	B3 G14	円形
SP1736	B3 G14	円形
SP1737	B3 G14	円形
SP1738	B3 G14	楕丸長方形
SP1739	B3 G14	不整形円形
SP1740	B3 H16	不整形円形
SP1741	B3 G15	—
SP1742	B3 G14	円形
SP1743	B3 G14	円形
SP1744	B3 G14	円形
SP1745	B3 G14	円形
SP1746	B3 G14	円形
SP1747	B3 G14	円形
SP1748	B3 H14	円形
SP1749	B3 H14	不整形円形
SP1750	B3 H14	円形
SP1751	B3 H14	楕円形
SP1752	B3 H14	円形
SP1753	B3 H14	円形
SP1754	B3 H15	円形
SP1755	B3 H14・15	—
SP1756	B3 H15	円形
SP1757	B3 H15	楕円形
SP1758	B3 H15	楕円形
SP1760	B3 H15	楕円形
SP1761	B3 H15	楕円形
SP1762	B3 H14・15	不整形円形
SP1763	B3 H14	円形
SP1764	B3 H14	楕円形
SP1765	B3 H14	円形
SP1766	B3 H14	円形
SP1767	B3 H14	円形
SP1768	B3 H15	円形
SP1769	B3 H14	円形
SP1770	B3 H14	円形
SP1771	B3 H15	円形
SP1772	B3 H15	楕円形
SP1773	B3 H・H15	円形
SP1774	B3 H15	楕円形
SP1775	B3 H15	円形
SP1776	B3 H15	円形
SP1777	B3 H15	円形
SP1778	B3 H15	円形
SP1779	B3 H15	円形
SP1780	B3 H14	円形
SP1781	B3 H14	円形
SP1782	B3 H14	楕円形
SP1783	B3 H・H14	円形
SP1784	B3 H14	円形
SP1785	B3 H14	円形
SP1786	B3 H14	円形
SP1787	B3 H14	円形
SP1788	B3 H14	不整形円形
SP1789	B3 H14	円形
SP1791	B3 H14	円形
SP1792	B3 H14	円形
SP1793	B3 H14	—
SP1794	B3 H14	楕円形
SP1795	B3 H14	円形
SP1796	B3 H14・15	楕円形
SP1797	B3 H14・15	楕円形
SP1798	B3 H14	円形
SP1799	B3 H15	円形
SP1800	B3 H15	円形
SP1801	B3 H15	円形
SP1802	B3 H15	楕円形
SP1803	B3 H15	—
SP1804	B3 H15	楕円形
SP1805	B3 H15	不整形円形
SP1806	B3 H15	—
SP1807	B3 H15	不整形円形
SP1808	B3 H15	円形
SP1809	B3 H15	不整形円形
SP1810	B3 H15	円形
SP1811	B3 H15	楕円形
SP1812	B3 H15	不整形円形
SP1813	B3 H15	楕円形
SP1814	B3 H15	楕円形
SP1815	B3 H15	円形
SP1816	B3 H15	楕円形
SP1817	B3 H14・15	楕円形
SP1818	B3 H14	円形
SP1819	B3 H14	円形
SP1820	B3 H14	楕円形
SP1821	B3 H14	—

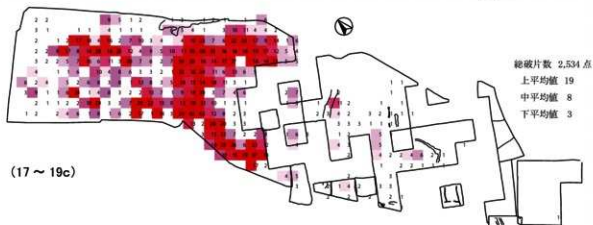
第17表-12

道線番号	グリッド	平面形
SP1822	B3 114	楕円形
SP1823	B3 1・114	円形
SP1824	B3 114	円形
SP1825	B3 114	—
SP1826	B3 114	楕円形
SP1827	B3 114・15	円形
SP1828	B3 1・114・15	—
SP1829	B3 1・114	—
SP1830	B3 114・15	円形
SP1831	B3 114	円形
SP1832	B3 114	円形
SP1833	B3 114	円形
SP1834	B3 1・114	楕円形
SP1835	B3 114	円形
SP1836	B3 114	楕円形
SP1837	B3 114	円形
SP1838	B3 114	楕円形
SP1839	B3 114	円形
SP1840	B3 1・K14	円形
SP1841	B3 114	楕円形
SP1842	B3 115	円形
SP1843	B3 115	円形
SP1844	B3 115	楕円形
SP1845	B3 115	円形
SP1846	B3 115	—
SP1847	B3 115	楕円形
SP1848	B3 115	—
SP1849	B3 115	円形
SP1850	B3 115	円形
SP1851	B3 G14	楕円形
SP1852	B3 114	—
SP1853	B3 114・15	楕円形
SP1854	B3 114・15	円形
SP1855	B3 H14	円形
SP1856	B3 114・15	楕円形
SP1857	B3 G14	—
SP1858	B3 D19	円形
SP1859	B3 D19	楕円形
SP1860	B3 F15	円形
SP1901	B3 K19	—
SP1902	B4 K1	楕円形
SP1903	B3 L20	楕円形
SP1904	B3 L18	楕円形
SP1906	B4 L1	円形
SP1907	B3 L20	円形
SP1908	B3 L20	楕円形
SP1909	B3 L20	円形
SP1910	B4 K2	楕円形
SP1911	B4 K1・2	円形
SP1912	B4 K1	円形
SP1913	B4 K1	不整形円形
SP1914	B4 L1	円形
SP1915	B4 L1	—
SP1916	B4 K1	不整形円形
SP1917	B4 K1	—
SP1919	B4 K1	円形
SP1920	B4 K2	—
SP1921	B4 K2	不整形円形
SP1922	B4 L2	—
SP1923	B4 K1	—
SP1924	B4 K1	—
SP1925	B4 K1	—
SP1926	B4 K1	—
SP1927	B4 L1	—
SP1928	B4 K1	不整形円形
SP1929	B3 L20	—
SP1930	B3 L20	—
SP1931	B3 L20	楕円形
SP1932	B3 L20	円形
SP1933	B3 K18	円形
SP1934	B3 K18	楕円形
SP1935	B3 K18	楕円形
SP1936	B3 L18	不整形円形
SP1937	B3 K18	—
SP1938	B3 K18	—
SP1939	B3 K18	—
SP1940	B3 K18	楕円形
SP1941	B3 K18・19	楕円形
SP1942	B3 K18・19	楕円形
SP1943	B3 K20	—
SP1944	B3・4 K20・1	—
SP1945	B3・4 L20・1	楕円形
SP1946	B3 K18	円形
SP1947	B3 L18	円形
SP1948	B3 K18	円形
SP1949	B3 J18	円形

HA(4地区(油分箇所))

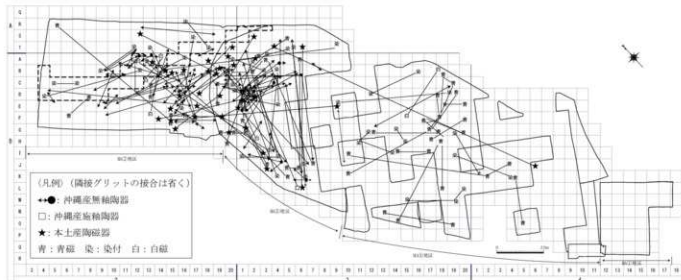
道線番号	グリッド	平面形
SK1	B3 G・H8	楕円長方形
SK2	B3 G8	楕円形
SK3	B3 H8	不整形楕円形
SK4	B3 G7・8	楕円形
SK5	B3 G7・8	—
SK6	B3 G8	—
SK7	B3 G8	—
SK8	B3 H8	円形
SK11	B3 N・O17	楕円形
SK12	B3 N17	楕円形
SK13	B3 O17	楕円形
SK14	B3 N17	不整形楕円形
P1	B3 G・H8	楕円形
P2	B3 H8	—
P3	B3 G8	—
P4	B3 G8	楕円形
P5	B3 G8	楕円形
P6	B3 G8	楕円形
P7	B3 G8	楕円形
P8	B3 G8	楕円形
P9	B3 G8	楕円形
P10	B3 G8	楕円形
P11	B3 G8	楕円形
P12	B3 G8	楕円形
P13	B3 G・H8	円形
P14	B3 G8	楕円形
P15	B3 G8	楕円形
P16	B3 G8	楕円形
P21	B3 N18	楕円形
P22	B3 N18	楕円形
P23	B3 N18	楕円形
P24	B3 N18	—
P25	B3 N18	楕円形
P26	B3 N18	楕円形
P27	B3 N18	不整形楕円形
P28	B3 N18	楕円形
P29	B3 N18	楕円形
P30	B3 N18	楕円形
P31	B3 N17・18	楕円形
P32	B3 N18	楕円形
P33	B3 N17	円形
P34	B3 N18	楕円形
P35	B3 N18	楕円形
P36	B3 N・O18	円形
P37	B3 O18	楕円形
P38	B3 N17	円形
P39	B3 N17	—
P40	B3 N17	楕円形
P41	B3 O17	楕円形
P42	B3 O17	円形
P43	B3 O17	楕円形
P44	B3 N17・18	—
P45	B3 O17・18	円形
P46	B3 O17	—
P47	B3 O17	楕円形
P48	B3 O17	—
P49	B3 O17	楕円形
P50	B3 O17	円形
P51	B3 O17	楕円形
P52	B3 O17	楕円形
P53	B3 O17	円形
P54	B3 O17	—
P55	B3 O17	楕円形
P56	B3 O16	—
P57	B3 O16	円形
P58	B3 O16	円形
P59	B3 O16	—
P60	B3 N16	円形
P61	B3 N16	楕円長方形
P62	B3 N16	—
P63	B3 N16	円形
P64	B3 N17	楕円形
P65	B3 N17	楕円形
P66	B3 N17	楕円形
P67	B3 N17	楕円形
P68	B3 N17	楕円形
P69	B3 N17	—
P70	B3 N17	不整形
P71	B3 N17・18	楕円形
P72	B3 N17・18	長楕円形
P73	B3 N17・18	楕円形
P74	B3 N17	円形
P75	B3 N17・18	—
P76	B3 N17	楕円形
P77	B3 N・O16・17	不整形楕円形
P78	B3 N・O17	—

道線番号	グリッド	平面形
P79	B3 O17	—
P80	B3 O17	—
P81	B3 N・O17	円形
P82	B3 N・O17・18	楕円形
P83	B3 N17	楕円形
P84	B3 N・O17	円形
P85	B3 O17	円形
P86	B3 O17	楕円形
P87	B3 N17	—
P88	B3 N・O17	円形
P89	B3 N・O17	円形
P90	B3 N17	円形
P91	B3 N17	—
P92	B3 N17	楕円形
P93	B3 N・O17	楕円形
P94	B3 N17	—
P95	B3 O17	—
P96	B3 O16・17	—
P97	B3 O16	—
P98	B3 O16	—
P99	B3 O16	—
P100	B3 O17	楕円形
P101	B3 O17	楕円形
P102	B3 O17	楕円形
P103	B3 O16	楕円形
P104	B3 O17	円形
P105	B3 O17	円形
P106	B3 N・O17	楕円形
P107	B3 N17	楕円形
P108	B3 N17	円形
P109	B3 O17	楕円形
P110	B3 O17	楕円形
P111	B3 N17	—
P112	B3 N17	—
P113	B3 N17	—
P114	B3 N17	円形
P115	B3 N16	楕円形
P116	B3 N16	円形
P117	B3 N17	楕円形
P118	B3 N17	円形
P119	B3 N17	円形
P120	B3 N16・17	円形
P131	B3 M11	楕円形
P132	B3 N・O11	楕円形



※色凡例：下平均値→上平均値：淡→濃

第 42 図 遺物分布変遷



第43図 遺物接合状況 平面分布

(1) 本土産磁器 (近代)

明治時代以降西洋技術を取り入れた製陶技術の近代化による製品である。総数7,104点の出土があり、地区別ではHA③ 2,815点・HA② 4,042点・HA④ 247点で、HA①での出土はなかった。器種別では小碗が最も多く2,967点(42%)、次いで中碗1,772点(25%)、皿933(13%) (底部数と同一部位での文様の重なりのあるものを最少個体数とすると、小碗1,278個体、中碗415個体、皿434個体)、他に杯・鉢・急須・蓋物・香炉・火入れ・洋食器・玩具等が出土した(第22表)。

器種ごとの特徴として、小碗は器形から用途(茶飲み、湯飲み)の判別が可能なものもあり、茶飲み碗128点中1例ではあるが同じ文様が手描きからゴム判、呉須からコバルト、瀬戸・美濃から砥部への変遷が確認できた。中碗は外反碗が72%を占めた。皿では口径が11cm前後のものより13cm前後のものがやや多く得られた。皿は本土産近代磁器では13%の出土率だが沖縄産施釉陶器では2%の出土率しかなく、また、本土産近代陶磁器・沖縄産施釉陶器とも鉢は非常に少なかった。当時の食文化を窺う上で興味深い例であると思われる。急須(身)は大中小があり各12・39・22個体であった。いずれの底部にも加熱の痕跡は見られなかったので、茶葉を煮出す行為はしていないようである。なお、沖縄産施釉陶器の急須の底部には加熱の痕が確認されている。蓋はほとんどが小型で急須の蓋か壺の蓋か判然としなかった。握みの有(Ⅰ)無(Ⅱ)、脚の有(A)無(B)として分類し、ⅠBについては緑の広い方をaとした。少数ではあるがⅠA:6個体、ⅠB:8個体、ⅠBa:4個体、ⅡA:3個体、ⅡB:1個体が確認できた。香炉は16個体が確認できた。

施文技法としては銅版転写(28%)がやや多く、型紙刷り(25%)クロム青磁(10%)手描き(8%)ゴム判(8%)色絵(4%)・国民食器(3%)吹き絵(3%)盛り絵(1%)が確認できた^{註1}(第23表)。型紙刷りの中碗、銅版転写・ゴム判・クロム青磁・国民食器では小碗が多かった。砥部産の中碗は「伊予ボール」と呼ばれ南方向け大量に輸出された^{註2}。そのため生産量も高く沖縄でも流通した事が窺えるが、反面、小碗の沖縄への流通は少なかったため、瀬戸・美濃産の小碗が普及したのだろうか。皿は型紙刷りや銅版転写が多く、口径11~13cm前後は型紙刷り多く、口径11~15cm前後では銅版転写が大半を占めた(第23表)。成形には轆轤(動力含む)や石膏を使った型作り(押し型・鋳込等)が用いられており、いずれの施文技法でも確認できた。また、ほとんどの碗類の皿付けは軸葉が抜き落とされ、釉が残るのは蛇の目凹形高台皿のみであった。(肥前では碗の高台外側を釉と一緒に削り込む事はあまり行わない^{註3}。そうである。)

生産地としては全体の約65%を瀬戸・美濃が占め、34.6%が肥前系(砥部産の21%を含む)で関西系は1%にも満たなかった(近代陶器では関西系が75%を占める)(第19表)。

出土量としては各地区ともⅡ層が最多であったが、HA③・②では屋敷跡に集中しており、特に蒲伊礼小と祝女殿内から多く出土した(第44図)。屋敷跡に見ると大屋、蒲伊礼小、祝女殿内小では肥前系と瀬戸・美濃産の割合に大きな差は見られず、他の屋敷では肥前系の2~3倍近く瀬戸・美濃産が多く出土している(第24表)。なお、同一物が複数個得られることも多かったが、同じ場所からの出土であることは少なく、纏まって利用されたかは不明である。以下、技法ごとに概略し、主な遺物については第25表に詳細と第45~51図、図版26~32に示す。

註1: 技法の併用も多く確認できたが、出現時期の新しい技法に古い技法が併用されると想定し、新しい技法側で割合を算出した。
 註2: 伊予陶磁器協同組合『砥部』1977 註3: 大橋康二先生、堀内秀樹先生よりご教示頂いた。

第19表 産地別出土量

産地 地区	肥前系 肥前系	肥前系 or 砥部	砥部	瀬戸・美濃・ 瀬戸・美濃系	関西系
HA③	500	6	538	1648	17
HA②	348	11	906	2683	16
HA④	14	0	61	166	1
合計(個)	862	17	1505	4497	34
割合(%)	12.8	0.2	21.7	64.9	0.4

A. 手描き・色絵・盛り絵 (図1～24・図25～32・図33)

呉須・コバルト等の青色顔料により手描きされたものである。小碗 237 点、中碗 27 点、杯 46 点、皿 19 点、急須 (身) 141 点等計 523 点で、肥前系 167 点、砥部・砥部系 101 点、瀬戸・美濃産 265 点が確認できた。小碗が多く中でも茶飲み碗が 51 点を占め、筒型と腰折れ型が得られた。後者には 4 種の文様が見られた。図 5～7 は外面に同種の文様を持つが、5 は砥部産でコバルト使用、6 は瀬戸・美濃産で呉須使用、7 は同じく瀬戸・美濃産だがコバルト使用で 5・7 よりも 6 が古手である。この後、砥部では型紙刷りへと遷移する (図 38)。なお、5 の見込みの結び雁金には図柄違いが見られた (5a)。中碗は飯桶の可能性が高く図 11 には蓋が付いたと思われる。小杯や皿は瀬戸・美濃産や関西系が多かった。急須は手描き製品が最も多く、文様に紅葉・桜・巴文・菊文・梅花 (図 18) 等が見られた。中でも鳳凰 (図 19) や雲龍文が多く大小合わせて 13 個体が確認できた。また、HA ③・④地区を跨いで接合できたものが 3 点あった。蓋は 1 Ba 型が多く、うち 3 点を図示 (図 20～23) した。いずれも肥前系である。図 24 は 1A 型で蓋裏に銘が見えるが詳細不明。

図 25～32 は色絵の碗・杯・皿・蓋である。色絵は小碗 105 点、中碗 15 点、皿 15 点、杯 102 点等計 282 点で、肥前系 38 点、瀬戸・美濃産 213 点であった。文様のデザインは花鳥風月に依るものもあったが、小碗や小杯では戦時色の強いものが多く、赤や金色による旭章旗や日章旗、金文字で凱旋記念や紀元節や孝行など、中には「〇記念座喜味」等も確認できたが、大半で色が剥落していた。盛り絵は総計 75 点で中碗が多く他に杯・皿・急須があり、瀬戸・美濃産が 75% を占めた。図 33 は急須で二羽の鶴を描く、2 個体が得られた。

B. 型紙刷り (図 34～67)

小碗 119 点、中碗 1,253 点、皿 230 点等計 1,641 点で、肥前系 146 点 (8%)、砥部産 1,417 点 (83%)、瀬戸・美濃産 95 点 (5%) が確認できた。小碗では筒型 (図 34) と腰折れ型 (茶飲み) が得られた。腰折れ型の見込みには動物や雁金や結び雁金が描かれていたが手描き同様様々であった (図 36～38)。中碗は蛇の目軸刺ぎの直口碗 (図 39・40) から、いわゆるスンカンマカイとして認識されている外反碗まで数多く出土した。外面 (腰部文含む) と見込みの文様の組み合わせについて分類したところ、外面の地文や腰部に描かれる文様について変遷が窺えた。見込みの文様はある程度決まっているようであるが、直口碗

第 20 表 型紙文様別出土個体数

器形	外面の文様	見込み文様										動物 結び雁金	動物 雁金	器 合計	器 番号		
		五足のハマコ		五弁花		松竹梅		*(枝有り)		昆虫						ザクロ	
直口碗	地文	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
直口碗	亀甲に菊花等	無	無													13	39・40
	桜花等	青海波														1	41
直口碗	扇花	船唐草	37産作													3	4
	管輪窓に菊花	四方陣	三角		1	1										2	2
直口碗	竹笹	鹿の子	無		1	3										4	45
	鶴丸・松竹	蘭代	竹の子状	3	1	3										7	46
直口碗	木仙?	点編	竹の子状			4										4	—
	鶴丸・松竹	点編	三角	12	20	8										40	47
直口碗	六弁花	唐草	八卦	14	3											4	48
	五弁花	唐草	柳	7	4					1	1	2	2			17	49
直口碗	五弁花	唐草	八卦													2	—
	結核	無	柳			3	1									4	50
直口碗	菱形窓・菊花	点編	三角	12	5	3	16	1								37	51・52
	管輪窓に木仙・松・梅	点編(大)	蘭先			7										7	53
直口碗	管輪窓に木仙・松	点編(大)	三角			5	17									22	54

は蛸唐草に福寿を描く直口碗で蛇の目軸刺ぎ碗と統制番号 (②) 碗も確認した。文様に比べて津守淳二 (1995)²⁴ は明治初～中期はだまかだが丁寧、中～末期は繊細な小紋が多く精巧、大正～昭和は粗く型紙の影り方も粗雑で貿易品は特に乱雑と述べている。これらを踏まえて型紙を新旧に並べたのが第 20 表である。福寿文様の直口碗は蛇の目軸刺ぎから統制番号が賦される時期まで作り続けられたようであるが、外反碗の文様は多種で簡略化も見られる事から一つの文様が長く用いられるのではないと推察する。皿では口径 11cm 前後で点描を地文に大きく桜や梅の花弁を描くもの (図 56～59) が肥前系でも瀬戸・美濃産でも見られ、口径 13cm 前後では、蛇の目凹形高台の形状の違いから、肥前系と砥部産に分類できた。肥前系は器壁全体が薄めで高台も浅いが削りを入れて蛇の目凹形高台にしている (図 60) それに対して砥部産の器壁は厚く高台も高めである (図 61)。高台内を削らず総輪後アルミナを塗るもの (図 62) もあった。図 63・64 は同一型紙だが一方の文様が裏返しであった。また、64 の腰部には削りで圏線が入る。図 66 は下地 (1994)²⁵ に同タイプの写真掲載があり大皿とした。

註 4：津守淳二『古砥部陶片文様集』砥部焼文化研究会

註 5：下地安広「沖繩の遺跡から出土する近代磁器—浦添の遺跡を中心に—」『南島考古』第 14 号

C. 銅版転写 (図 68～96)

小碗 1,206 点、中碗 62 点、皿 498 点等計 1,820 点で、肥前系 262 点 (17%)、砥部 5 点、瀬戸・美濃産 1,226 点 (80%)。肥前系にはイゲ皿や段重・蓋物があった。文様のデザインは多種に亘るが、花鳥風月及び吉祥を主題としたものが多く、

花(梅・桜・牡丹・菊・朝顔・鉄線等)、鳥(鶴・鶯・雀等)、山水、吉祥(小槌・亀甲等)、人物(唐子・君子・恵比須等)、樹木(松・竹・銀杏・芭蕉等)、古典柄(分銅繫ぎ・菊水・鹿の子・扇・古銭等)、時世を表現(君が代・帝國万歳等)等が確認できた(第21表)。銘は小碗34個体、中碗5個体に見られ「○ノ山〇製」「○山」「香山」「古〇専製」「沢田精製」「沢田製」「雲葉」「竹泉」「香山」「舟山」(図70)等の文字や花か星?と思われる図柄(図69)が確認できた。中碗では「TRADE MARK MADE IN JAPAN」と賦されるものがあり輸出品である事を窺わせた。また、皿では1個体のみ「城宮」の印刻が見られた。有田の城岩太郎氏作とのことであった²¹⁾。着色には酸化コバルト(青)・酸化クロム(緑)・酸化マンガン(黒)・酸化ウランニウム(黄)・正円子(赤)等の顔料が使用される。

註6:大橋康二先生のご教示

D. 吹き絵(図97~107)

小碗64点、碗63点、皿11点、杯40点等計207点で、肥前系は8点、瀬戸・美濃産は202点(94%)であった。他技法との併用も多く、特に銅版転写との併用は小碗が多かった。底部を桜花などに型抜きした小杯は口縁部を着色するものが多く見られた。文様のデザインとしては草花を始め富士山を望む松原や田子の浦を描いたものが多く確認できた。

E. ゴム判(図108~114)

小碗440点、中碗38点、皿24点等計531点で、肥前系102点、瀬戸・美濃452点(81%)が出土した。ゴム判も銅版転写同様、花鳥風月及び吉祥を主題としたものが多く、文様のデザインとしては鶴に蓮華や梅に鶯等、2つのモチーフを組み合わせたものや2色を使ったものが多かった。着色顔料も銅版転写と同じ物が使用されたと思われる。図114は色絵や盛り絵との技法併用が為されている。

F. クロム青磁(図115~133)

小碗550点、中碗2点、杯21点、皿40点等計955点で、瀬戸・美濃産が667点で98%を占めた。特に多く得られた外面に飛びガンナを施す小碗について口径・底径の組み合わせからグループ分けを行った。口径を7.0cm台(A)、8.0cm台(B)に分け、それぞれ直口(a)、外反(b)で分類し、底径も3.0cm前後(X)、3.7cm前後(Y)に分け、蛇の目高台の有(x)、無(y)で分類した。Ab-Xy(図115):21個体、Ba-Xx(図116):8個体、Bb-Xy(図117):13個体、Bb-Xx:2個体、Bb-Yy(図118):2個体で、口径7.0cm台・底径3.0cm前後で蛇の目高台でない直口タイプが46%を占めた。また、底部のみではXx:22個体、Xy:20個体、Yx:2個体、Yy:4個体で、底径3.0cm前後で蛇の目高台でないものが88%を占めた。飛びガンナの間隔は6mmを中心に2~10mmまで幅があり5~7mmが全体の57%を占めた。器形との関係を見ても、直口タイプでは6mm以上が多く46個体、5mm以下は4個体、外反タイプでは6mm以上は3個体、5mm以下は5個体であった。飛びガンナ以外では手描きやゴム判が多く、小杯は10個体、小皿は7個体が得られ口径11cm前後が多かった。

G. 国民食器・洋食器(図134~144・図145)

小碗115点、中碗97点等計257点が確認でき、HA③から13個体、HA②から53個体が確認できた。祝女殿からの出土が55点で碗11個体、皿2個体を数える。型や鋳込みによる成形が多く、統制番号や窯跡も見られた。小碗の外面口縁部下に引かれる二重の圈線について口唇部からの距離を計測してみたところ、2.0~2.5mm:4点、3.0mm:27点、4.0mm:20点、4.5~5.0mm:8点であった。二重圈線のある小碗の個体数は13。掲載はしていないが全面茶(正円子?)の碗も2種出土した。洋食器はカップやスープ皿、洋皿、鉢等34点が出土。図145の底面には○許番号と統制番号有り。

H. 統制番号について(図146)

今回の調査でも統制番号の賦された碗・小碗・皿が確認できた。「①2」型紙刷り(コバルト・押印)、「岐1056」吹き絵(コバルト・クロム押印)・国民食器(クロム押印)、「岐58」ゴム判(陽刻)、「岐241」国民食器(クロム押印)、「岐280」国民食器(クロム押印)、「ヤマカ陶器」国民食器(クロム押印)、洋食器には「①20285」(赤絵押印)・「岐1〇4〇」(印刻)。「岐」が賦されるのは「岐阜県輸出陶磁器工業組合連合会」に属する生産者による製品である。

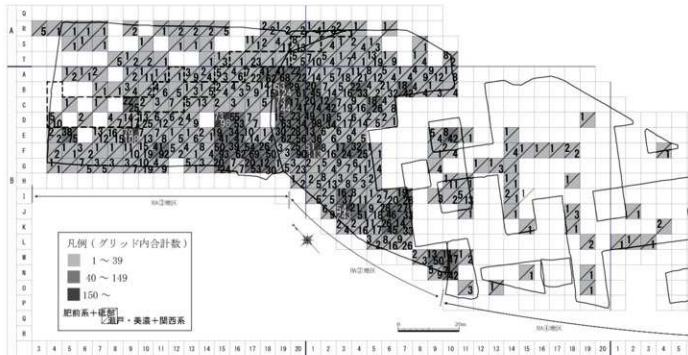
I. 玩具・貯金箱・水滴(図147~153)

玩具はさまざま道具と思われるミニチュアの道具類や型抜き人形が出土した。図147の急須はラスタースタイルが施され大正~昭和初期のオールドノリタケのラスタースタイル製品と類似している。図149の馬に乗る軍人は日露戦争後の時世を反

第21表 銅版転写文様別 出土個体数

文様	器種								合計	
	碗	小	中	小1	小2	小3	中1	中2		イデ
花	178	9			1	26	21	13	1	249
古典	28				4	8	6			65
樹木	29	4			1	2				36
文字	18				4	9	3			34
花と文字	29				1					30
鳥	13				6	11				30
山水	28				2					30
草木	22					2		1		25
樹木と文字	17									17
花鳥	13									13
人物	13						1			14
器代	9									9
花鳥と文字	7									7
吉祥	3		2			2				7
古典と文字	6									6
窓絵	1	2			1	2				6
扇絵		2						4		6
鳥と文字	6									6
手まり唐草	5									5
菊と雀	5									5
山水と文字	4									4
古典	2				2					4
麒麟	3									3
草と文字	3									3
うさぎ					3					3
松と文字						2				2
鷹										2
日本帝國	2									2
	2					2				4

中国のサイズについては第22表を参照



第 44 図 本土産陶器（近代）平面分布

第 24 表 屋敷別主要器種出土量

産地	肥前・肥前系										肥前・肥前 or 伊豆						瀬戸・美濃						割合 (100%)																											
	碗	杯	皿	盃	急須	香炉	碗	皿	手型	手型	碗	皿	手型	茶	碗	皿	盃	急須	香炉	合計																														
屋敷名	小	中	小	中	大	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	小	中	大	中	大	合計																														
後ノ比呂小	17	8																		4																														
大屋			1	14	2	9	1			49	1	3	1	1	2	98	24		1	5	2	5	1	4																										
小磯小		3		1	1					10	1				3	37	4		3	1	1	1		8																										
浦戸小	23	3								77	3	8			156	39		2	110	12	3	2	18	13	2	7	7	2	453	41	59																			
仲屋										2					1	3	1													8	37	63																		
道端大屋小										3																				3	100	—																		
後ノ内小										13	2				1	16	4		2											1	43	47	53																	
後ノ内大	63	5	2	2	1	1	3	3	36	6	20	32	2	32	11	8	6	4	6													15	657	111	6	23	40	49	11	60	58	19	2	17	32	9	10	1666	34	66
三良又吉小		5	3			2	2			55					2	119	28		4	5	1													22	13	2	6	11	4	304	25	75								
三良又吉小	6	1	1	1	1	1	5			53	1	3	1	1		84	15	1	1	5	3	2	8	4	2	2	4	2	207	36	64																			
黒屋先生	8	1		3			7	2		47	1	3	2		114	16		3	9	7	2	16	10	1	6	3	1	262	28	72																				
東大屋小										3	14				1	16	3		1	2	5	1											4	6	39	61														
名倉座	10	2	1				3	11	10	2	1	104	2	12	10																		5	228	17	2	5	10	4	2	17	28	3	4	15	4	3	529	35	65

各皿のサイズについて江戸考古学研究会を参考に、小1: 8.5～9.4cm、小2: 10.5～11.6cm、小3: 12.5～13.6cm、中1: 14～15.4cm、中2: 21cmとした。下: 手掻き、型: 型焼

第 25 表-1 本土産磁器（近代）観察一覧

調査年度	発掘方法	サイズ	重量 単位(g)	形目 名称	口径・底径・器高 (cm)	観察事項 (器形/文様/高台/出土個体総数等)	文様色	成形技法	産地	地区小グリッド層 遺構番号
1	手 掘	小	—	舌・直	8.0 4.6 5.8	筒型(茶飲み)/よろひ桶のくすね	コバルト	紙部	肥前系	HA③ C-D9 ~ 11 皿台 1560
2				舌・外	8.9 3.0 3.7	腰折れ(茶飲み)/外面:丸文・寿文、見込:千鳥、口跡/6個体				※ HA② A20 皿祝殿台 1285
3				舌・端	8.9 3.0 3.8	腰折れ(茶飲み)/内外面:口縁下に開線、見込:開線、口跡/6個体				HA② D1 不建 皿台 338
4				舌・端	8.9 3.0 3.9	腰折れ(茶飲み)/外面:二重開線・桜?、見込:花卉、口跡/5個体				HA③ A-11・12 皿神楽台 1293
5				底	8.9 3.0 3.10	腰折れ(茶飲み)/外面:染色体文(明治)、見込:葛ひ雁金/4個体(5の含む)				HA② C19D05 皿台 1492
6				口~底	8.9 3.0 3.11	腰折れ(茶飲み)/外面:染色体文(幕末)、見込:雁金、口跡、/4個体				HA③ D15 皿台 2590
7				口	8.9 3.0 3.12	腰折れ(茶飲み)/外面:染色体文(明治)、口跡/5個体				HA③ A13 皿台 2489
8				底	8.9 3.0 3.13	外面:不明、跡:角福				HA③ S19 皿台 3152
9				底	8.9 3.0 3.14	見込:不明、跡:角福				HA③ E9 皿大屋台 2477
10				直・舌	8.9 3.0 3.15	逆「ハ」字状に開く外面:草花				HA③ C15 皿薩礼台 986
11				舌・外	14.0 5.4 5.4	広東碗に似る/外面:唐草、内面:水面に岩・ハマ根/置付台の目状				HA③ S19 皿暗褐色台 3152
12				小口~底	14.0 5.4 5.5	外面:蓮弁、跡:/可/2個体				HA③ S・T16 ~ 20 皿 S13台 2220
13				舌・端	5.4 2.6 3.2	外面:開線(青・緑)/2個体				HA② B1 皿R02台 1923
14				中口~底	6.5 2.6 3.0	内外面:口唇から3ヶ所鉄輪を流す、外面:2ヶ所手描「六兵衛」				HA③ S19 皿R02台 594
						青茶	型	京	HA③ D15 1台 1191	

産地凡例: ※肥前系 or 肥前 肥: 肥前系 紙: 紙部 瀬: 瀬戸・美濃 京: 京都

第25表-3 本土産磁器(近代) 観察一覧

第四図表	施文技法	サズキ	項部単位(回)	口縁部形状	口径・底径・器高(1) : 推定 (cm)	観察事項 (器形/文様/高台/出土個体総数)	文様色	成形技法	産地	地区グリッド層 遺構台帳番号
61					13.0 8.8 3.3	外面:花唐草・内面:松竹梅・輪花/蛇の目四角・費付けに輪有り/2個体				HA③ T~C15 ~ 19 II 甞礼台 975
62					13.6 8.0 6.6	八角皿・内面:牡丹・五足のハマ唄/蛇の目四角高台にアルミ手裏布・費付けに輪有り				HA③ E5 I 台 1282
63					13.6 8.0 6.7	外面:花唐草・内面:窓窓:松竹梅・見込:松竹梅・輪花・五足のハマ唄/蛇の目四角・費付けに輪有り/8個体	コバルト	型	瀬部	HA② T20 II 甞礼台 556
64					13.6 8.0 6.8	外面:花唐草・内面:窓窓・割りで2条の窓窓・内面:窓窓:松竹梅・見込:松竹梅・輪花・五足のハマ唄/蛇の目四角・費付けに輪有り				HA② C5 II 7# 9台 868
65					13.9 6.9 3.2	外面:宝文・内面:点描地に桜花・見込:松竹梅・輪花/蛇の目四角	コバルト	型	瀬部	HA② D1 II 甞礼台 261
66					(24.0) —	外面:花唐草/内面:花吉?	コバルト	口	瀬部	HA④ 不明 I 台 4603
67					10.7 10.4 8.7	外面:牡丹・梅木・鶯・四方罽・ラマ蓮弁	コバルト	口	瀬部	HA② II 台 913
68					7.0 3.2 4.2	外面:古戔・福寿祿等/4個体	青黒	鑄	瀬部	HA③ E ~ G10 ~ 12 II 大層台 957
69					8.0 4.0 4.3	腰折れ/外面:手鞠・唐草・路:花か星?/5個体	青	口	瀬部	HA② A4 II 甞礼台 1641
70					— 3.0 —	外面:鶴丸(左向き)・蓮弁?/路:舟山/2個体	青	型	瀬部	HA② C19 II 甞礼台 568
71					6.8 3.4 4.6	腰折れ/外面:菊水/4個体	青緑	型	瀬部	HA② C19 II SD05 甞礼台 1492
72					8.0 3.6 4.8	外面:草花	青桃	型	瀬部	HA③ F10 II 台 2993
73					8.0 3.6 4.9	外面:小豆・君が代他/5個体 平安山原B遺跡でも出土	緑茶	型	瀬部	HA② B1 II 甞礼台 1920
74					8.0 3.6 4.1	外面:菊・柴垣(四葉輪)/路:紫雲/4個体	横青	口	瀬部	HA② H3 II 名高瀬台 1691
75					7.9 3.9 4.6	外面:桜花・高台に銘面状の圓縁/路:波田精製	青緑赤茶	口	瀬部	HA③ DC ~ E15 ~ 18 II 甞礼台 491
76					7.9 3.9 4.7	外面:唐子・瓔珞文・口罽/路:竹泉/4個体	青茶	型	瀬部	HA② D1 II 甞礼台 1371
77					7.9 3.9 4.8	腰折れ/山水	茶緑	型	瀬部	HA② N10 I 表層台 668
78					8.8 3.0 3.9	腰折れ/内外面:蝶に龍・龍部:瓔珞文・口青/蛇の目	青	型	瀬部	HA② F3 II 名高瀬台 1662
79					8.8 3.0 3.1	腰折れ/外面:菊・桜・鉄線/2個体	緑茶	型	瀬部	HA② D1 II 甞礼台 1468
80					8.8 3.0 3.1	花吉	正円緑	鑄	瀬部	HA④ H10 II SD54 台 3218-9
81					12.0 4.2 4.9	外面:窓窓に風景・桜花等	青緑	一	瀬部	HA③ E ~ G9 ~ 12 II 大層台 1983
82					12.0 4.2 4.1	外面:色違いの花唐草	青緑赤	一	瀬部	HA③ C 18-9 II 台 1662
83					12.0 4.2 4.1	路:不明	青	鑄	瀬部	HA③ DC ~ E15 ~ 17 II 甞礼台 1495
84					5.0 2.0 2.8	外面:鶴	青	型	瀬部	HA③ A17 II 台 3114
85					5.0 2.0 2.9	外面:鶴	青	型	瀬部	HA③ A17 II 甞礼台 543
86					6.4 2.5 2.5	見込:金魚	青	型	瀬部	HA③ E5 I 台 1282
87					8.9 5.0 1.8	内面:瓔珞・鳳凰・唐草・桐・菊/削り出し	コバルト	口	瀬部	HA④ E9 II SK64 台 3345
88					11.2 6.4 2.1	内面:鳥島・青海波・見込:巴文に鹿の子・見込:巴文・鹿の子	青	鑄	瀬部	HA② B19 II 701 甞礼台 7621
89					11.2 6.6 2.4	内面:朝顔・見込:朝顔の葉	緑	型	瀬部	HA④ J3 II 台 2417
90					11.0 7.4 2.6	外面:花唐草/内面:捻り文他・見込:松竹梅	青	鑄	瀬部	HA② T3 II 甞礼台 389
91					12.6 7.4 2.8	内面:花・葉・見込:四葉・口罽/4個体	紺	鑄	瀬部	HA② B19 II 甞礼台 837
92					12.6 8.0 2.3	内面:帝國萬歳・旭章旗・八重桜木・口罽	青	型	瀬部	HA③ E8 II 台 1390
93					21.1 12.4 2.7	内面:水仙・見込:雲に水仙・輪花/路:威岩(印刻)	青	口	有	HA③ E4 II 台 1611
94					22.0 13.6 2.5	内面:区画文(松竹梅他)・見込:蓮花?・口罽	青茶	型	瀬部	HA② C20 II 上 甞礼台 564
95					10.8 9.8 2.7	外面:紅葉?	青	型	瀬部	HA② J6 II 三良台 1705
96					— — 3.4	外面:4種の花文(四葉・七宝等)に六弁花・松木・鶯/合わせ口無縁	青	型	瀬部	蓋: HA② A3 II 上 甞礼台 1789 身: HA② T1 II 甞礼台 523
97					7.8 3.2 5.0	腰折れ/外面:富士山・松葉・波濤/2個体	青緑	鑄	瀬部	HA③ D10 II 台 595
98					10.8 4.9 5.4	外面:草花/2個体	青緑	鑄	瀬部	HA② M9 I 甞礼台 270
99					11.1 4.4 6.1	外面:カモメ・山水/4個体/HA③ R2 II 層から7も同一種出土	青緑	鑄	瀬部	HA② B20 II 甞礼台 835
100					11.2 — —	外面:ブドウの葉・統制番号:岐 1056 (コバルト印) 3個体・(クローズ印) 2個体・(印無し) 2個体	青緑	型	瀬部	HA② L7 II 上 瀬部台 645
101					11.6 4.2 5.3	外面:富士山と波濤	青緑	鑄	瀬部	HA④ E10 II SD51 台 3211
102					11.4 4.6 5.6	腰折れ/外面:富士山と帆掛け船・松原/2個体/HA③ A大層 II や甞礼小皿からも同種	青緑桃	鑄	瀬部	HA② C19 II 甞礼台 1659
103					7.4 — —	菊花(盛り絵)	青白土	一	瀬部	HA② A4 II 上 甞礼台 1793
104					5.8 2.0 2.7	底部は板を模す/口縁部2カ所に青と緑の吹付け	青緑	型	瀬部	HA② C2 II 甞礼台 183
105					5.7 2.4 2.9	底部は板を模す/口縁部に桃の吹付け	桃	型	瀬部	HA② M10 I 表層台 664
106					5.0 2.0 2.8	外面:雲のかかる富士山/統制番号:岐 223 (團縁) 團縁あり	青	型	瀬部	HA④ J18 II 台 2565
107					6.0 2.2 2.3	内面:桜花を青で吹き絵	青桃	型	瀬部	HA③ E9 II 台 1313
108					8.0 3.0 4.6	外面:宝船・松/色違いで2個体・円盤状製品あり	青桃	型	瀬部	HA② I 表層台 657
109					8.8 3.5 4.8	花唐草と團縁/統制番号:岐 325 (コバルト印)	青(濃淡)	鑄	瀬部	HA④ E10 II SD51 台 3212-5

※不完形及び完形に近い器物のみ重量を掲載した

産地凡例:※肥:肥前産 有:有田 紙:紙部 瀬:瀬部 瀬戸:瀬戸・美濃 不:不明

(法量単位: cm, g)

第25表-4 本土産磁器(近代) 観察一覧

第何図表	施文技法	番号	サズメ	重部単位	口徑・底径・高さ	口徑・底径・高さ	観察事項	文様色	成形技法	産地	地区グリッド層	調査台帳番号	
					口徑・底径・高さ		(器形/文様/高台/個体数等)						
110				完122.3	舌・直	8.4 3.4 4.8	外面:菊花・風草	青緑	型	瀬戸・美濃	HA② D1 Ⅱ上 祝殿台 727		
111				口~底	舌・直	8.6 3.2 4.7	外面:鶯・梅花(色絵・盛り絵) 3個体 平安山原B遺跡でも出土	青緑黒白	口	瀬戸・美濃	HA② I 表榎台 660		
112				ほぼ完62.2	舌・外	7.2 3.2 4.5	腰折れ/外面:龍、見込:龍/2個体	青	型	瀬戸・美濃	HA② D1 Ⅱ祝殿台 261		
113				口~底	丸・直	11.3 4.1 6.2	外面:菊菊草(ゴム判)の二色重ね/路:岐 58 (陽刻)/4個体	青桃	型	瀬戸	HA② A19 Ⅱ上 祝殿台 1530		
114				ほぼ完163.2	舌・直	11.4 4.0 6.1	外面:八卦文・紅葉他 平安山原B遺跡でも出土	青	鑄	瀬戸	HA② C6 I 祝殿台 1965		
115						6.8 3.2 3.8	外面:飛び字? (Ab-Xy) /21個体	—			HA③ D~G15~5 Ⅲ台 1414		
116						8.8 3.0 3.8	外面:飛び字? (Ba-Xx)・蛇の目高台/8個体	—			HA③ D12台 Ⅱ 3192		
117						8.8 3.0 3.9	外面:飛び字? (Bb-Yy) /13個体	—			HA③ B9 I 台 1188		
118						8.8 3.0 3.1	外面:飛び字? (Bb-Yy) /2個体	—			HA③ E5 Ⅱ台 1298		
119						8.2 3.6 4.6	腰折れ/外面:善哉(銅版) /3個体	青緑			HA② D1 Ⅱ祝殿台 360		
120						8.1 3.5 4.7	外面:四雲(手摺) /2個体	—			HA② B19 Ⅱ 01台 864		
121				完形89.3		8.3 3.1 4.9	外面:青海波の鰐略? (ゴム判) /2個体	青	鑄	瀬戸・美濃	HA③ S20 I 台 1218		
122						8.2 3.0 4.8	外面:鶴丸(左向き) (ゴム判) /7個体	—			HA② B19 Ⅱ 01台 864		
123						6.4 3.0 4.5	外面:鶯/無文	—	型		HA③ D~G15~5 Ⅲ台 573		
124				ほぼ完112.4	舌・外	8.9 4.0 4.6	若干腫丸/外面:花苧(手摺) /削り出し	青緑	口	瀬戸・美濃	HA③ H10 Ⅱ Ⅱ SD51 台 3214.2		
125						11.0 4.0 5.75	外面:南天(ゴム判・手摺)	緑茶	鑄	瀬戸	HA② H5 Ⅱ 名座南台 969		
126						8.2 3.3 4.7	外面:善哉(ゴム判)・鶴(吹き絵) /5個体	青	鑄	瀬戸	HA② D19 Ⅱ上 祝殿台 803		
127						5.2 3.2 2.9	腰折れ:鉄泥塗布	—	鑄	瀬戸	HA④ E10 Ⅱ SD51 台 3211		
128						5.5 (2.0) -	内面:花(手摺)と路(鳥)	金	型	瀬戸	HA③ G17 Ⅱ小渡台 2051		
129						10.8 6.2 1.9	内面:梅花(盛り絵)・菊花・壺(型紙) /2個体	—	型	瀬戸	HA② C2 Ⅱ祝殿台 512		
130						10.7 6.3 1.9	内面:梅花(盛り絵)・箱・壺(型紙) /2個体	緑	型	瀬戸	HA③ I19 Ⅱ 01台 864		
131						11.0 6.6 1.9	内面:梅花(盛り絵)・カゴ(型紙)	—	口	瀬戸	HA② C19 Ⅱ SD05 台 1492		
132						13.0 7.6 2.1	外面:二重圓線、内面:菊花に雁菊(型)	—	型	瀬戸・美濃	HA③ F16 Ⅱ S3 台 1435		
133				ほぼ完592.5	舌	24.9 13.8 2.4	内面:梅花、口背/底部:こま文様	赤青緑茶	鑄	瀬戸・美濃	HA② C6 I 祝殿台 1965		
134						丸・直	8.1 3.1 4.5	外面:二重圓線/統制番号:岐 280? (陽刻)	クロム	鑄	瀬戸	HA③ A18 Ⅱ 僅孔台 556-HA③ I17・18? Ⅱ 2220	
135						丸・直	8.4 3.2 4.7	口背下部に二重圓線	緑	鑄	瀬戸・美濃	HA④ F10 Ⅱ 台 2086	
136						丸・直	8.0 - -	口背下部に二重圓線	—		HA② A2 Ⅱ上 祝殿台 1790		
137						丸・直	8.0 - -	口背下部に二重圓線/完成ではないが円錐状を意識している	クロム	口	瀬戸	HA③ F15 Ⅱ 台 1438	
138						丸・直	11.8 4.0 5.4	無文	型	瀬戸	HA② F3 Ⅱ 名座南台 1687		
139						丸・直	11.6 4.2 5.1	外面:二重圓線/統制番号:岐 1056 (クロム印)	クロム	型	瀬戸	HA③ D9 Ⅱ 大塚台 1914	
140						丸・直	11.0 3.8 5.2	外面:口背下部に二重圓線・路:ヤマカ陶器 (クロム印) /6個体	—	口	瀬戸	HA② B4 Ⅱ祝殿台 1216	
141						口	角・直	7.4 - -	二重圓線	瀬戸	HA② D1 Ⅱ上 祝殿台 723		
142						口	舌・外	7.5 - -	六面体、外面のみクロム	瀬戸	HA② J5 Ⅱ 三直台 1711		
143						ほぼ完250.0	—	15.8 9.2 3.1	内面:二重圓線/路:ヤマカ陶器 (クロム印)	瀬戸	HA② B20 Ⅱ祝殿上 台 2556		
144						ほぼ完250.0	—	15.8 9.2 3.2	内面:二重圓線/統制番号:TOKI KOSHITSU 岐 241(クロム印)	瀬戸	HA② G10.11 Ⅱ 台 1686		
145						口~底	外・丸	15.8 9.2 3.3	内面:口背・ラスタースター彩/底面:詩印 (詩 20285 (赤絵印)・岐 1〇4〇 (陰刻))	瀬戸	HA③ D16 Ⅱ 僅孔台 1526		
146						不	底	—	4.3 -	—	瀬戸	HA③ F15 I 台 879	
147						ほぼ完44.2	—	幅 3.8 器高 3.5 奥行 3.9	—	瀬戸	HA④ E10 Ⅱ 台 2038		
148						ほぼ完48.4	—	1.2 2.6 2.9	—	瀬戸	HA② C1 Ⅱ祝殿台 2428		
149						軍人	—	—	—	瀬戸	HA② N10 I 表榎台 668		
150						カウボーイ	—	—	—	瀬戸	HA④ E10 Ⅱ SD51 台 3207		
151						山羊?	—	—	—	瀬戸	HA③ CE15~18 Ⅱ S16 台 500		
152						貯金箱	—	—	—	瀬戸	HA④ E9 Ⅱ SK04 台 3345		
153						水滴	唐子	—	—	瀬戸	HA② N10 I 表榎台 668		

産地凡例:肥:肥前系 砥:砥部 瀬:瀬戸・美濃 関:関西系 不:不明

第26表 血技法別出土量

産地	肥前系				瀬戸・美濃				砥部				合計	
	HA③	HA②	HA③	HA②	HA③	HA②	HA③	HA②	HA③	HA②	HA③	HA②	型	刷版
小1													1	2
小2	8	8	1	12	17	6	32	3						27
小3	14	25	2	3	14	32	1	13	3					36
中1	13	1	2	2	9	2	10	1	2					7
中2	1						1							2

凡例:小1:8.5~9.4cm, 小2:10.5~11.6cm, 小3:12.5~13.6cm, 中1:14~15.4cm, 中2:21cm



第45図・図版26 本土産磁器(近代) 1



第46图·图版27 本土産磁器(近代) 2



第 47 図・図版 28 本土産磁器 (近代) 3



第48図・図版29 本土産磁器(近代)4



第49図・図版30 本土産磁器（近代）5



第50図・図版31 本土産磁器 (近代) 6



第 51 図・図版 32 本土産磁器 (近代) 7

153 参考資料 伊万里市所蔵
徳永水漬コレクション
「なすび形童子水漬」

(2) 本土産陶器 (近代)

明治時代以降に生産された陶器で HA ㉓ 180 (うち焜炉片が 92) 点、HA ㉔ 53 点、HA ㉕ 10 点の計 243 点が出土した。HA ㉓ では特に蒲伊礼小・小渡小周辺に集中する (第 52 図)。II 層出土が多数を占めるが、I 層や III 下層との接合も多かったため、層ごとには分けずに報告する。関西系が多く 75% を占め、瀬戸・美濃系は 9% であった。土瓶の出土が多く 16 個体、碗は 9 個体であった。大正時代以降生産される硬質陶器^{註1}は碗・皿・蓋の 3 器種確認できた (第 27 表)。主な遺物については第 28 表に詳細を記載し、第 53 図、図版 33 に示す。

図 1 は美濃産の織部風小碗で外面 3ヶ所に椿の花を描くようである。高台脇に統制番号が押印される。図 2 は硬質陶器の洋皿で裏には日本硬質陶器株式会社の商標が押印される。当社は明治 41 年金沢に設立され、大正 6 年からは釜山にも工場が設立され海外輸出が行われたが、当遺物の商標には『CO.』や『KANAZAWA』の文字があり大正 9 年以降に金沢工場で生産されたと思われる^{註2}。図 3 は関西系の播鉢を真似て島根県で生産された播鉢で同タイプが 4 個出土した。図 4・5 は関西系の土瓶の蓋と身でセット関係にある。緑色顔料の上に白土を使ったイッチン技法で唐草を描く。図 6 は宜興窯 (中国) の影響を受けた土瓶で暗い紫色を呈する。煎茶用の湯沸鉄瓶を模したような造作で八角形、地紋、貼付けが見られた。図 7 は銅物焜炉で関西系の軟質陶器である。明治維新後、肉食が始まった事により涼炉の形状を真似て生産された^{註3}。その他の特徴的な遺物としては柿軸掛け煎茶用炉 (軟質陶器) や漆で接着された痕跡の残る土瓶も出土したが、小片のため掲載は見送った。

註 1: 1200 ~ 1300 度の高温で焼いた陶器。陶器と磁器との中間的な品質をもつ。洋食器の需要に応じ大正時代以降生産される。
 註 2: <http://nekonote.jp/korea/old/fukei/ynd/ymsn/tok1.html> 註 3: 『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 2001

第 27 表 産地別器種出土量

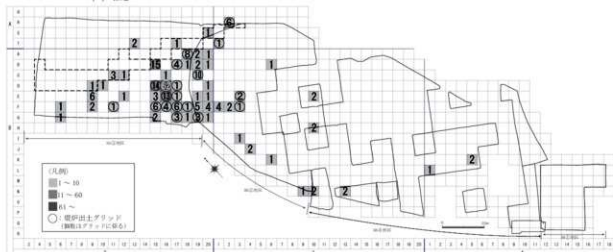
産地	器種										合計						
	高台	小	中	皿	洋皿	鉢	鉢	上皿	合	合		合					
関西系	2	2	2					23	1	6	1	1	2	98	1	13	153
関西系	京焼			3				3	5								11
	京焼系									1							1
関西系	高野																10
	高野																1
瀬戸系																	2
瀬戸系																	2
瀬戸系																	1
瀬戸系																	1
瀬戸系																	9
瀬戸系																	1
瀬戸系																	9
瀬戸系																	1
瀬戸系																	6
瀬戸系																	6
瀬戸系																	11
不明																	7
不明																	22
合計	2	9	4	13	9	1	10	50	4	14	1	1	1	2	98	1	243

註: 照査用

第 28 表 本土産陶器 (近代) 観察一覧

図版 図号	産地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	観察事項		生産 年代	地区 グランド 層遺構 (版上)台帳番号
							(形状/施文方法/底形/素地等/接合)	(裏面)		
第 53 図 ・ 図版 33	1	美濃 小 碗	8.2	3.8	5.7	3	織部風小碗/白土で花弁、鉄輪で花芯を描いた後、透明釉を掛け、緑地で陶面を埋める。統制番号の押印部と高台側面は無釉。押印: 前 200/070 成形/素地は黄白色で細かい。大きめの貫入が入る。 (接合: HA ㉓ D10 B・D9 B)	戦前	HA ㉓ D10 B 大層 S30 台 1978 他	
	2	京焼 洋皿	20.2	5.5	2.1	3~4	硬質陶器/表: 暗紅色の線取りにラスター彩・裏: クロムによる日本硬質陶器株式会社商標 (上段: IMPERIAL IRONSTONE CHINA 中央: 二羽のフェニックスと KANAZAWA 下段: NK PORCELAIN CO.)	大正	HA ㉓ A17 B 蒲伊礼小 S12 台 540	
	3	播鉢	25.4	14.2	11.3	6	口内面は折り返して玉縁状。器口 32 本/底部から 2cm 程度まで鉄輪のふせ掛け/輪軸跡で緑褐色い高台を削り出し/灰地で細かい (黒色粘粉)	19c 以降	HA ㉓ B1・20 祝壇台 590 HA ㉓ D15 蒲伊礼小 台 867	
	4	土瓶 蓋	8.6	-	-	3~6	緑色顔料染め輪軸白土でイッチン/丹/消し/灰地で彫製。(接合: HA ㉓ D15 B・E15 B・E16 B)	明治	HA ㉓ G19 B 台 2536	
	5	土瓶 身	10.7	8.5	14.2	3~5	緑色顔料染め輪軸白土でイッチン/丹/消し/灰地で彫製。(接合: HA ㉓ D15 B・E15 B・E16 B)	明治	HA ㉓ D15 B 蒲伊礼小 S4 台 1602 他	
	6	土瓶	10.8	11	11.5	4	中国江蘇省宜興窯の影響を受ける/紫泥・無釉・八角形たたら作り (裏面口・口部は別作り)/器面: 丸顔を模したと思われる地紋に梅花が隔別された器口取り付けを 3ヶ所/暗い紫色で白色顔料をわずかに含む。(接合: HA ㉓ C19 B・B19 B)	明治	HA ㉓ C19 B 祝壇台 1658	
	7	焜炉	(24.9)	(24.9)	(21.5)	7	銅物製 (碗の形状を真似る)/立方体を基調とし、体部が垂になる。通風調節口の扉。器理は削られる/褐色で装母を多く含む。(接合: HA ㉓ DE15 ~ 17 B)	明治	HA ㉓ DE16 B 蒲伊礼小 S4 台 1494 他	

(): 測定



第 52 図 本土産陶器 (近代) 平面分布

(3) 沖繩産施釉陶器

いわゆる「上焼」(ジョウヤチ)とされるものであるが、中には素地から陶質土器、沖繩産無釉陶器、本土産陶器、中国産陶器に類似するものも含まれる。地区別にHA③4179点・HA②5949点・HA④362点・HA①1点の計10491点で、出土する器の中では最も多い。層別にはI層800点、II層9466点(II層上含む)、III層で150点、IV層58点、不明17点の出土で、そのほとんどはII層で得られている。器種別には碗5572点・小碗425点・皿247点・鉢653点・急須866点・酒器177点・鍋492点・蓋175点・火取197点・香炉47点・火炉170点・壺498点・瓶536点・杯8点、灯明具17点、不明411点である(第29表)。なお2cm以下は集計に含めなかった。これはキャンプ桑江北側地区の中では最も多く、平安山原B遺跡(2014)のほぼ10倍である。平安山集落跡(「北谷町」地名)2004)の生活の様子が遺物で具体化される。

<分類>

沖繩産施釉陶器(上焼)の技法の変遷を検討するため、施釉の方法を軸に分類する。

I類・白化粧無しで透明釉を施すもの。**II類**・白化粧無しで胎釉¹⁾・鉄釉を施すもの。**III類**・外面に胎釉・鉄釉、内面に透明釉を掛けるもので、さらに内面の白化粧の無し(イ)、有り(ロ)に細分。**IV類**・白化粧を施し、透明釉を掛けるもの。なお、各々に無文(a)と有文(b)があり、IV類はさらに加飾(①線彫・②二彩・③淡彩・④イチッ(花文))によって細分した。

<観察の方法>

器種ごとに、①口・底の形状、文様、②施釉(白化粧の有無、露胎)、③素地色について観察し、碗・小碗・皿・鉢については前述の技法で分類し、急須・香炉・壺・瓶は大きさ、酒器・鍋・蓋・火炉・灯明具については形状で細分した。第29表に地区別の集計、出土平面分布を第56図に示した。また、戦前の平安山集落で使用されたと想定されるため、屋敷ごとの集計を第30表に示した。これによると祝女殿内が2944点(28.1%)と最も多く、次いで道端大屋小嘉座が各々660点(6.3%)と続く。

以下、主なものを第57～64図、その観察一覧を第32表に示した。以下、器種ごとに記述する。

<碗>(図1～44)

碗は全体の53.1%の出土で、前記の技法によりI～IV類に分け、さらにIV類は文様の有無、種類によって細分した(第31表)。

I類：浸し掛け²⁾でいわゆる灰釉碗と称されるもので無文(a)・有文(b)に分けられる。また、高台や腰部の形状も異なるが、今回は細分せず、観察一覧に示した。出土数は1520点(碗の27.3%)でそのうち、有文(b)は69点(4.5%)に留まる。

無文は図1～12に図示した。図1～3は底部からの立ち上がりか直状で、図1は素地が粗く畳付けは太い。図2は素地も密、畳付けの周縁に砂が付着し、見込みに軸垂れがある。図3は底部に窯出し時の焼きふくれがあり、畳付けは細い。図4～6は腰部が丸みを帯びるもので、図4は器高も前3者より低く、図5は他の碗より釉に透明感があり、図6～8は腰部の形状がより屈曲し、胎土などから広東碗に類似する。図9は口縁部が焙着するもので、窯道具(第80図17)も出土することから消費地での製品入手を示唆するものである。図10は腰部が丸みを帯び、高台は細く貼り付けられた可能性が高い。図11は見込みに砂目、図12は見込みに総釉である。

I類の加飾は外面に鉄釉で草花文(図16)、見込みに丸文(図15)するのが一般的であるが、内面の見込みと腰部に刷毛で鉄釉を塗る(図13)、見込みに白土をドーナツ状に塗る(図14)ものが出土した。そのうち、図13はII・III類と施文も同じで、器形も腰部が丸みを帯び類似する。

II類：I類と同じく浸し掛けだが、内外面に濃胎や鉄釉を施すもので、315点(碗の5.7%)出土した。そのうち有文は97点(30.8%)と前者より割合が高い。施釉の範囲は腰部までが一般的で、見込みの文様はIII類・IV類の蛇の目軸刺ぎを想起させる。図17は口縁部がわずかに外反し、腰部は丸みを帯びる。2度の釉がけで見込みに刷毛で丸文を施し、底部は高台～底にかけて露胎するが畳付けは白化粧後、釉刺ぎする。

III類：外面に鉄釉か濃い胎釉、内面に透明釉を施すもので白化粧無し(イ)と有(ロ)がある。形状は口縁がやや外反し、腰部は丸みを帯びる。見込みに蛇目軸刺ぎが施され、畳付けは白化粧を施し釉刺ぎする。329点(碗の5.9%)と少なく、イが163点、ロが162点とほぼ同じ割合で出土する。イ：形状をみると図19は直口、図18・21・22は外反口縁で、図19は内面の口縁と腰部に刷毛で白土の團線を施す。図21は内面の口縁と腰部、見込みに刷毛で鉄釉と白土を塗る。図22はやや大ぶり外反口縁で外面に鉄釉、内面に鉄釉で花文(イチッ)を施すもので、他に比べて胎土もよく上質の感を受ける。本品の出土は県内では初めてである。ロ：図23・24は白化粧を施すもので前者が無文、後者が有文である。図24も図22と同様、

内面と見込みに胎釉で花文（イッチン）を施すもので、前者より小ぶりである。技法をみると見込みは蛇の目釉割ぎされ、外底は高台～内底が露胎し畳付けに白土が残り、研磨は認められないことから、施釉の過渡期な技法と思われる。

IV類：器全体に白化粧を施し透明釉を掛け、見込みを蛇の目釉割ぎ、外底も畳付けを釉割ぎするもので、無文（a）、有文（b）がある。3408点（碗の61.2%）の出土で、そのうち有文は837点（IV類の24.6%）の出土である。有文（加飾）は技法によって①～④に細分類した。**IV類 a**：図25は白化粧無しだが、碗の形状からここに含めた。内外面に黄釉を掛けるもので、口縁部は外し、高台断面は方形を呈する。瓦屋又吉小からの出土で、数点得られている。図44は白化粧後、内外面に透明釉を施したもので、口縁は玉縁を呈し高台断面は三角形、底面がやや凹むもので、前者とは形状が異なる。2571点（46.1%）の出土で最も多い。**IV類 b**：文様を線彫りのみ＝①、線彫り＋単彩＝①イ、線彫り＋複彩＝①ロ、二彩のみ＝②、青釉＝③、呉須＝③イ、コバルト釉＝③ロ、イッチン（花文）＝④に細分類できる。**IV類 b ①**（線彫り）：図26は白化粧後、トビガンナと沈線文を施す、図27は線彫りで、丸文の中に竹葉を描く。図28は花卉を彫った後、淡い胎釉を塗布する。図29は線彫りで細かい葉の上に呉須を塗布するものである。図30・31は線彫りで草花文を施した後、黄釉と緑釉を塗布するもので、図32は丸文となる。**IV類 b ②**（二彩）：図33はコバルト釉と黄釉で草花文を施すもので、素地は暗灰色を呈し白化粧は厚い。素地の影響か、呉須の発色は悪い。5点と少なく、瓦屋又吉小と名嘉座の出土に限られる。**IV類 b ③**（呉須）：図34・35は素地が濃茶褐色を呈するため呉須の発色が悪く、図37・38は草花文、図36はコバルト釉を外面と内面に施すもので文様は3カ所の可能性あり。図39は丸文で内面に重ね焼きによる文様の青が残り。**IV類 ④**（花分-イッチン）：図40・41は鉄釉と青釉で施文、図42・43はコバルト釉と黄釉で、斜め下に軸垂れる。図42は花文を見込みと外面に4カ所、図43は外面に3カ所施すもので、後者は碗の文様では一般的だが、前者の見込みに文様のあるものは県内では初めての出土である。形状をみると図42は器高が低く、図43は底が厚く、高台断面は畳付け幅が細くて丸い。

<筒碗>（図45～47）

筒状で腰部は「く」字状に屈曲し、口唇及びその内面は蓋を被せるため露胎する。16点出土した。施釉はI類（図45）、II類（図46）とIV類の線彫りを施した（図47）がある。他に三島手（I類）も得られている。口径は8.6～10.4cmと前述の碗より小ぶりで、後述する蓋の脚径9.6～11.8cmとほぼ同じ大きさである。

<天目型碗>（図48～51）

形状および釉色から天目茶碗を模倣³³したと考えられるものである。図48は腰部からの立ち上がりが逆「ハ」字状、図49は「く」字状にくびれる口縁で、図50は胴～底部で直状に立ち上がり、図51は切り高台である。胎土は図48・49は灰褐色、図50・51は乳褐色を呈する。図51は底部の立ち上がりがやや丸味を帯び、見込みも無釉で別の器種の可能性も考えられる。また、図50は茶と黒の釉の窯変が顕著である。18世紀代に作られた沖縄産施釉器の天目模倣は底部が高台タイプ³⁴であることから、本遺跡出土のものは異なる。

<小碗>（図52～70）

碗と同じく技法で分類した。425点（全体の4.1%）の出土で、IV類が247点、III類141点、II類12点、I類25点の出土である。IV類の有文は面取りも含まれる。以下、図示したものを略述する。**I類 a**：図52は腰部が逆「ハ」字状を呈するもので、釉は透明釉で、胎土は淡灰色で気泡もなく内面は総釉で、小碗ではあまりない形状である。**I類 b**：図53は腰部が丸く、外面に呉須で薄く文様を描き、見込みは蛇の目釉割ぎを施す。図54はやや大ぶり以外面には鉄釉で明瞭な草花文を描く、口径が10.0cmと筒碗の大きさに近いが、口唇が舌状のためここに含めた。**II類**：図55は内外面に濃い胎釉を施すもので、他の小碗に比べて大きく、内底は蛇の目釉割ぎ、高台～外底は露胎する。**III類**：図56は白化粧-無（イ）、図58～61は白化粧有（ロ）である。図60・61は見込みが総釉、それ以外は見込みが蛇の目釉割ぎする。外面は鉄釉か胎釉が一般的であるが、図61は外面に透明釉のみで灰色を呈し、掛け分けに見える。いずれも高台は「ハ」字状、断面は三角形を呈する。**IV類**：小碗の58.1%と最も多い。直口（図62）、外反（図63）で底部も9mmと厚手である。図64は総釉で、口唇が薄く、高台の形状は前出図60・61と似る。図65は外面を面取りするものでHA^③で20点出土した。図66は呉須で山水文、図67・68はイッチンによる花文を施すが、前者が淡く（呉須）、後者が濃い（コバルト釉）。イッチンの釉は前者が口縁側、後者が底部側へと逆にたれる。形状をみると前者が直口で椎茸高台、後者は外反口縁、高台がやや内彎の方形を呈する。図69は青と茶で松葉を描き、高台は細く、畳付け～内底は無釉で、他の小碗とは形状が異なる。鋳込み成形³⁵の可能性が高い。図70は筒状で口径6.2cmと小さく、ぐい呑みの類ともとれるが、トビガンナと呉須を施すことからここで扱った。1点の出土。

<皿>（図71～95）

247点（2.4%）の出土で、ここでも技法による分類を行った。I類26.3%、II類28.3%、III類15.0%、IV類30.4%を占め、白化粧を施さないI＋II類が54.6%を占める。皿の大きさは、小：口径が10.0cm前後、底径が5.0cm前後、中：

口径 15.0cm 前後、底径 6.0cm 前後、大：口径 20.0cm 前後、底径 9.0cm に分けられるが、破片が多くサイズの種類は図示したものに留めた。

小：Ⅰ類 a (図 71) は見込みが総軸で高台が低いことから簡碗の可能性も考えられる。Ⅳ類 b (図 72・73) 前者は外反口縁で、内面に呉須で圏線、畳付けに鉄軸を塗る。後者は直口口縁で全体に光沢があり、内面は赤と銅緑釉で花文を描くが禿げる。いずれも上質である。

中：Ⅰ類 a (図 74) は浸し掛けの底部で腰部にロク口痕が明瞭に残る。Ⅰ類 b (図 75～83)：図 75 は内轡、図 78～80 は口縁が受け口状に内湾するもので、図 78・79 は内面に鉄軸で加飾する。類例は『湧田古窯跡Ⅳ』(1999) があり、同様の器形は『平安山原 B 遺跡』(2015, 第 119 図) の有田産皿に見られる。Ⅱ類 b (図 76) は見込みに墨書(?) と圏線(鉄軸)を施す。Ⅲ類 a (図 82) は内面が白化粧のみ、外底は畳付け軸刺ぎのみである。Ⅲ類 b (図 83) は輪花で内面を縦位に幅広沈線文で連弁状に加飾するもので、高台は内縁を削る。Ⅳ類 b (図 84) は呉須で文様を四区画して山水文と草花文を描く、底部は中央に厚くなる。

大：Ⅱ類 a (図 85～88) 図 87 は内湾で薄手、図 88 は厚手で口縁部は方形に肥厚するもので沖繩産施釉陶器にはみられない形状である。図 85 と 86 は同じような軸を施すが、高台の形状が若干異なる。Ⅱ類 b：(図 89) は見込みに刷毛で丸文を描く。Ⅲ類 a (図 90) は外反、Ⅲ類 b (図 91) 刷毛で圏線、Ⅲ類 c (図 92) 内面に花文(イッチン)を施すもので、文様は碗に比べて大きく軸色も胎釉を用いる。いずれも焼きが良い。Ⅳ類 a (図 93)、Ⅳ類 b は呉須(図 94) と二彩(図 95) がある。

<鉢> (図 96～115)

小 1 点、中 1 点、大 651 点の出土である。

小：図 96 は上面から八角形に面取りされ、口唇に薄い胎釉で緑取りするもので、口径 10.2cm・底径 5.0cm 前後と碗に近い。

中：図 97 はアサガオ状に外反し、口縁断面は三角形を呈する。内面に呉須で草花文を施す。

大：651 点 (6.2%) 技法からⅠ類とⅢ類があるが、前者(図 98・99) は口縁部が破損し詳細は不明。Ⅲ類は内湾(図 105・107) と逆「L」字状(図 108～110) がある。技法で見るとⅠ類は外面をトビガンナ(図 98) と柳目状(図 99) に施文、さらに白土を埋めるいわゆる三島手で、素地は灰色で、内面と外面の高台～底が露胎する。鉢に類例がなく、内面が露胎することから、別の器種の可能性も考えられる。Ⅲ類は出土量が多く、白化粧無(イ)と白化粧有(ロ)がある。(イ) は図 100～104 で、図 100 は口縁部が舌状に外面に張り出し、図 102 は直口で口縁を縄目凸帯文で加飾、図 103 は内面に白土で花文(イッチン)を 2 か所に施す。図 104 は輪花でアサガオ状に外反、外面にヒスイ釉、内面に刷毛目で文様を描く。(ロ) は図 105～115 で、口縁が内湾するもの(図 105～107)、逆「L」字状を呈するもの(図 108～113・115) がある。図 109 は「L」字の口縁部分に胎釉で加飾し、外面にはヘラ調整が残る。図 110 は外面をトビガンナで加飾、図 111 は口唇に抉りがある。図 112・113 は内面に花文(イッチン)文様、図 114 は輪花状、図 115 は鉢の中でもっともの大きく、内面を白化粧後、胎釉を施すもので、類例は少ない。

<急須> (図 116～134)

口縁が直口に窄まって胴部が張り、底部が三脚で外底面と内面は露胎をなす。サイズは小が口径 5.0cm 前後、中が口径 8.0 前後、大が口径 10.0cm 前後に分けられる。形状は丸タイプが主体であるが、筒型(図 128) もある。施釉によりⅠ類(白化粧無)、Ⅱ類(胎釉)、Ⅳ類(白化粧有)に分けられる。866 点 (8.3%) の出土で、Ⅰ類 29 点、Ⅱ類 158 点、Ⅲ類 6 点、Ⅳ類 383 点でⅣ類が 66.5% (不明を除く) と最も多い。以下、大きさ別に略述する。

小(図 116～126)：文様を施すもので図 116 はトビガンナ、図 117 は圏線の間に花型のスタンプを施す。図 116 は全体に翡翠釉を掛け、釉の濃淡が加飾と思われる。胎土もよく、上等品であるが、白化粧が無いことからⅠ類とした。図 119・120 はⅡ類で前者は内面も透明釉を施し、後者は薄い胎釉にトビガンナで加飾する。注口は 1 孔である。Ⅳ類は図 121～126 で、図 121 は白化粧のみ、図 122・123 は呉須で山水文を施すもので、後者は沈線が加わる。図 124 は線彫り、図 125 はコバルト釉で亀甲模様をラフに施す。図 126・127 は全面にコバルト釉を塗る。後者は肩部が角をなす形状から酒器に使われた可能性もある。5 点と出土数は少ない。図 128 は筒型で把手を有し、「水注」の形状に似るもので、後述の泥釉に類似する。

中(図 129～131)：図 129 はトビガンナを白土で埋めるいわゆる三島手(Ⅰ類 b)、図 130・131 は線彫り後、前者は呉須、後者は黄とコバルト釉を掛けるものである(Ⅳ類 b)。

大(図 132～134)：「アンピン」と呼ばれる大型の急須である。出土数は 13 点と少ない。

<酒器> (図 135～149)

177 点 (1.7%) の出土である。技法よりⅠ類(白化粧無)、Ⅱ類(胎釉か鉄釉)、Ⅳ類(白化粧有)があり、Ⅰ類は小

さく、Ⅱ・Ⅳ類は大きい。出土量をみるとⅠ・Ⅱ類が33.5%、Ⅳ類が65.3%と後者の方が多い。形状をみると筒型・丸型・ソロバン玉型・丸肩がある。

筒型 (図135～139) : 45点出土。薄手でⅠ類(図135～137)とⅡ類(図138・139)があり、図139は縦位に深い線彫りを施す。図140は筒型の若干変形したもので、加飾は図139に似るが底部は他と異なり、高台である。**丸型**(図141～146) : 44点出土。図141はⅠ類でトビガンナを施し、図142はⅡ類で胴部にヘラ彫り、図143は底部が厚く碁筒底をなす。図144は線彫りで丸文を配し、呉須を塗布したⅣ類をなすもので、呉須は淡く意匠は図39の碗に似る。図146は呉須、図145は線彫り後、黄と青釉を施す。ソロバン玉型(図147・148) : 26点の出土。図147はやや丸みがあり、縦と横の沈線に鉛釉で塗布、図148は細沈線を葉状に4分割し、注口部は略し3カ所に施す。黄と青の釉を塗布する。類似の文様は急須(図124)に見られる。**高筒型**(図149) : 胴の高いタイプで、1点の出土である。底部でやや張るものでⅣ類の線彫りである。

<鍋> (図150～156)

492点(4.7%)の出土で羽釜と茶釜もあるが、記述上ここにまとめ、A～C類に分類した。

A類 : 口縁部が「く」字状に湾曲、その幅は1.0～1.7cmまでの幅があり、鍋の大きさに関連すると思われる。底部は三脚を呈し、外面は胴部まで施釉し胴下～底部は露胎、内面には鉛釉か鉄釉を薄く塗布するものである。図150～152は蓋受けが無釉(a)、図153は口唇が厚く施釉(b)。(a)が最も出土量が多く平面分布でみるとD1(祝女殿内)に集中、また、中には素地が赤褐色・粗粒で陶質土器に近いものも含まれている。(b)は上質で出土も少ない。図152は厚手で、白化粧のみで墨がみられるが文様かは不明。ロクロ痕が明瞭、胎土も淡灰～乳褐色、器形も張り強いことから違和感があり本土産の可能性もある。

B類 : 胴部に鐔を圍繞する、いわゆる羽釜である。施釉の範囲は外面が鐔、内面は下～底部まで見られ、焼成もかなり良い。類例は陶質土器にも見られる。

C類 : 図155・156は鐔を持ち、施釉の範囲もB類に類似するが、口縁が内湾する点で異なる。『湧田古窯跡Ⅳ』(1999)の瓦質土器の茶釜に似る。

<蓋> (図157～177)

175点(1.7%)の出土で4種類得られた。急須の蓋は74点、筒碗の蓋6点、油壺(マンダガーミ)の蓋67点、鍋の蓋23点、不明5点の出土で急須の蓋が最も多い。以下、各種ごとに記述する。急須 : 口径7.0cm～10.2cmで、中央に撮みと脚を有するもの(図157～165)である。図157は撮みの中央に径1.5mmの孔、図159はトビガンナ、図162は葉を線彫りで青(コバルト)と黄釉で3カ所、図161は楕円の濃淡の淡彩、図163は黄と青釉で全面に亀甲模様、図169は二彩、図160は呉須を全面に施すものである。図164はやや大きめの蓋で脚を欠損する。**筒碗** : 脚が短く甲がドーム状に膨らむもので径9.6～11.8cmの範囲に収まる。図9は三島手、図10は呉須、図11は線彫りに二彩、図12は緑釉を全面に施す。図167は図47の筒碗と同じ文様を施す。**油壺** : 直径12.0cm前後で白化粧は無く、甲に烹詰めのための蛇の目軸刺ぎがある。撮は断面が丸いもの(図170)と高台に近いもの(図171)があるが、口径がほぼ同じであることから蓋の大きさとは関係ないようである。**鍋** : 口径が11.4～18.2cmがあり、身と重なる口唇部は露胎である。撮みは高台タイプで、基本的に鉛釉が施すが、中には濁白釉を施すものがある。口唇の形状は外反(図174)と直口(図173・176)があり、圏線(図173)、鉄釉で丸文を配する(図176)などの加飾がみられる。中には撮みに砂が付着するものもある。**不明** : 図177は脚有タイプで、縁に段を有するもので、器種不明。胎土・混和材から褐釉陶器に近い。

<火取> (図178～188)

197点(1.9%)の出土である。口縁部の形状から内湾は19点、筒型173点があり後者が多い。加飾をみると三島手3点、呉須5点、線彫り3点がある。内湾型(図178)と筒型(図179～188)に分けられ、筒型はさらに口縁部が逆「L」字状(図179・180)と直状(図181～188)がある。施釉の範囲は内面の口縁部から外面の腰部までが一般的である。加飾についてみると内湾型は外面にトビガンナを施し、部分的に鉛釉を施すもの。筒型は鉛釉を施すものは横位の細い沈線文(図180)、深い沈線文を格子状・斜位に組み合わせたもの(図181～183)、竹節状を呈するものがある。三島手(図184)、黒釉と緑釉で掛け分けたもの(図185)がある。白化粧後、口唇に呉須を掛けるもの(図186)、銅緑釉をかけた後、銀化現象により光沢のある上質な作りのもの(図187・188)があり、そのうち図188はHA④Ⅲ層の出土で使用時期を示唆する。また、図182・188は高台が胴部からまっすぐ伸びる。口唇の内側が剥離しているもの(図186)は使用によるものであろう。

<香炉> (図189～194)

口縁から頸部まではすばみ、胴部で大きく膨らみ、三脚を有するもので、施釉の範囲は内面の頸部から外面の腰部ま

である。口縁の形状は逆「L」字状（A類）と直状（B類）があり、ほとんどがA類である。HA③で34点、HA②で13点の計47点（0.5%）の出土で、他の遺物と異なりHA③に多い。A類：図189は逆「L」字状の口縁でやや内傾し、濃い胎釉を施す。図190は前者に比べて大きい、薄作りで胴が張り外面に貼り付け文（？）を施す。図192は白化粧後緑釉を施すもので、口縁は釉が厚く丸みをなす。釉が厚いため、底部に径8.0cmの着痕が残る。B類：図193は径19.8cmと大ぶりの香炉で、他の香炉より一回り大きい。ほぼ全面に炭が付着し、建物の破棄直前まで使用したと思われる。HA②祝女殿内で最も遺物の集中するD1で出土。図194は素地が濃褐色、脚は湾曲が強く、底厚9mm、底面が角を持つことから、香炉以外の可能性も考えられる。

<火炉>（図195～202）

170点（1.6%）得られ、筒型（A類）と湾曲型（B類）に分けられる。火取と同様に外面に胎釉を施すものがほとんどで、大小のサイズが認められる。A類（図195～198）：口径が13.0cm前後の小さいものである。内面突起の形状をみると図195は斜め上方向、図197は口縁に対して水平で平面は三角形である。また、図196・197は口縁部に「U」字状の挟りが認められる。これらはほぼ同じ大きさで口唇に白化粧を施し、外面に火取と同様、圏線を加飾するものである。図198は前3者に比べてわずかに開くもので、底部は逆「U」字状の浅い挟りで脚となし、淡い胎釉を施すのが前者と比べると胎土が密で沖繩産施釉陶器としては上質である。B類（図199～202）：口径20.0cm前後でA類より一回り大きく、胴部が膨らむものである。図199は薄手で、口縁と胴部が2段に膨らみ瓢箪型をなす。突起の断面は三角形で厚みがある。外面に横耳を持ち、頸部にトビガンナで格子状の文様を施す。図200は横耳を持ち、格子状の模様を胴部の張ったところに施す。図201・202も図200を一回り大きくしたもので、図201は口縁部が方形に肥厚し、突起部も大きい。図202は径4.3cmの脚を有するもので、胴上部に格子状の模様を施す。素地をみると図200以外は淡灰色で密であることから上質である。B類は加飾も凝り素地も上質のものが多く、茶器（風炉）として用いた可能性もある。

<壺>（図203～211）

主に外面に濃い胎釉か鉄釉、内面に防水のために薄い釉を施し、口唇に白化粧を施し、釉剥ぎするものが一般的で、498点（4.7%）出土した。大きさ・形状からA～C類に分類した。A類（図203・204）：図203は口縁が丸く、口径が6.1cmを測るもので、口唇～内面の頸部まで露胎、図204は胴上部に縦耳を、胴部に圏線を施すもので、傾きからA類に含めた。B類（図205～209）：図205は口唇が平らで釉剥ぎにより白化粧を残すもので、内面に薄い釉を施すいわゆる「アングダーミ」と称されるものである。図205～209で口径6.5～8.1cmの小（図205・206）、口径10.8cm前後の中（図207）、12.6cm前後の大（図208・209）がある。C類：図210は高台から腰部にかけて湾曲が強く腰部は薄くなり、胴上部に厚くなる傾向が見られ、内面のロクロ痕が明瞭で外底は無釉、高台を貼り付けた可能性もあり、アングダーミとは若干異なるようである。祝女殿内・名嘉座・三良又吉小などから出土。

<瓶>（図212～229）

536点（5.1%）の出土である。瓶は基本的に内面に釉は施されてなく、6種に分けられたが破片のため、遺物の集計は大・中・小でまとめた。ここでは図示したものを中心に、形状ごとに略述する。瓶①（図212～215）：口径が2.0cm前後の有頸で胴部の張る萐筥底の瓶である。前2者は口縁が玉縁で素地が赤～茶褐色を呈し胎土もやや粗く、後2者は灰褐色を呈する。図212は透明釉のみ、図213は胴部に白化粧を施し、透明釉を掛け、掛け分け様に仕上げて胴部にイッチン文様が残る。図214・215は頸部が欠損するもので、図214は素地が灰色で白粒を混入し、図215は白化粧後に透明釉をかける。他より胴の張りが弱い。瓶②（図216～218）：器高6.5cm前後の小瓶で、口縁部がアサガオ状、胴部の張るものである。施釉は黒釉（図216）、透明釉（図217）の高台タイプと黒釉で萐筥底タイプ（図218）がある。図218は内面に施釉され、厚手であることから前2者とは用途が異なる可能性もある。前者はフチュルビンか。瓶③（図219）：破片のため全形は窺えないが、胎土や高台の作りから分類した。瓶④（図220～222）：墓前や仏前に酒を備える渡名喜瓶と呼ばれるもので、数種の形がある。図220は頸部が筒状を呈し胴下部に広がる形で、寛で草花文を2カ所に施す。図221は胴部が瓢箪状に膨らむもので、嘉瓶の可能性もある。図222は底部で前者と異なりくびれない高台で砂が付着する。瓶⑤（図223・224）：図224は双耳の花瓶である。瓶⑥：大・中型（図225～229）：図225・226は胴で丸くなり、図227・228は胴長で腰部が「く」字状に屈曲するものである。いずれも胎釉を施し、胎土も上質である。図229は大型の無頸瓶で底径11.0cmと大きく、加飾のため胎釉を円形に施す。祝女殿内と照屋先生という広い範囲で接合がされた。焼きも良く、他のものより新しい時期に属すると思われる。

<灯明具>（図230～235）

17点出土した。皿と器台タイプがある。

皿：径10cm前後の直口の皿で、前述の皿の小とも重なるが、内面に施釉し、外面は口唇近くの施釉のみで、小皿と区別した。図230は完形で口縁に4mmの突起がある。図化した3点は高台の形状が異なるもので、施釉も図232がⅠ類、図231がⅡ類、

図230がⅢ類である。器台(図233～235):図233は最大胴径5.5cmを測り、火皿部分が黒釉、器台部分が黄釉を塗る。図234は器台部分が破損するもので、火皿部は前者よりはやや大きめである。図235は中の芯の部分と思われる。

<杯>(図236・237)

8点出土した。口径が3～5cmの外反口縁で、腰は丸みを帯び、高台は細く、胎土は密である。底部の形状から型成形の可能性も想定される。

<泥釉・マンガン釉>(図238～250)

素地に洗練された土を用いる薄手のもの(a)、素地が「荒焼」でマンガン釉のもの(b)をここにまとめた。

(a)(図238～245):泥釉を掛けたものと無釉のものがあり、器種は水注と瓶がある。水注は筒状(図238・239)で、注口(図240)、把手(図241)から中国の宜興窯の器種と酷似する。図238以外は泥釉を施す。花瓶は残りの良い脚台タイプの瓶(図243)、口縁(図244)、脚台(図245)がある。図243は上絵に五弁花を主文、竹葉を副文にあしらう。図244は白釉を施し、図245は脚台で径5mmの孔を有する。

(b)(図246～250):素地はいわゆる荒焼にマンガン釉を施すもので全て瓶である。図246～247はやや小ぶり、図249・250は大きめで、後者は底径6.3cmの鉢筒底となる。

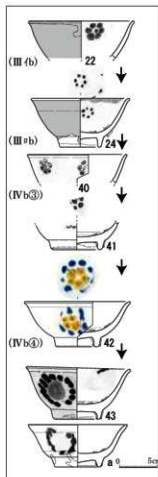
<古典焼>(図251・252)

図251・252は古典焼あるいは大正焼³⁰ともいわれるものである。図251は六角形の瓶の胴部で、最大胴径9.0cm、HA②B7Ⅱ層の出土。図252は筒状の火炉の胴部で胴径16.4cm、三角形の中を格子で埋める。HA④Ⅰ層の出土。

<小結>

沖縄産施釉陶器は10491点と出土遺物の中でも多く、中でも碗は5572点と全体の53.1%を占めた。本遺跡からは近代の平安山集落の屋敷跡が明瞭に検出されており第55図に屋敷ごとの碗の分類を示した。これによると17C後半～18C後半とされるⅠ類の灰釉碗が約55%を占める仲村渠・大屋、18C中～19C後半とされる³⁰Ⅳ類が70%を超える小渡小・蒲伊礼小・名嘉座・瓦屋又吉小と屋敷で違いがみられる。最も出土の多い祝女殿内はⅠ・Ⅱ類が36.9%、Ⅳ類が56.4%でその中間の値を示す。総じてⅠ・Ⅱ類の割合の多い屋敷は内陸側に位置し、Ⅳ類が主体をなす屋敷は海側に位置する。

さらにⅣ類の文様をみるとⅣb④がⅣbの(有文)66.3%で最も多くを占める。文様は花文(イチチン)で、コバルト釉で花卉を施しと黄釉(薄い鉛釉)で花芯を作り、器全体に3組を施すのが一般に見られる形である。本遺跡からイチチンの技法による加飾がⅢ類からも見られることから、第54図に変遷を示した。これによるとⅢ類の掛け分けに白化粧なしに鉄釉を施文したもの(図22)から、白化粧を施した後に鉛釉で施文(図24)、Ⅳ類の白化粧を施し、鉛釉で施文したもの(図40・41)、コバルト釉で施文したものは見込みと4個を配するもの(図42)、外面のみに文様を3個配するもの(図43)、他に花卉のみで花芯の欠落するもの(図a)がある。沖縄産施釉陶器の製作年代から少なくともⅢ類はⅣ類より古いと考えられ、図22・24→図40・41の文様の変遷が想定される。図22・24は鉄釉や鉛釉を用い、図42・43・aはコバルト釉を用いていることから19世紀後半以降と考えられる。図22・24が出土した仲村渠はⅠ・Ⅱ類の出土が約60%を占めることから屋敷の中では最も古いとされる。図40・41はコバルト釉が導入される以前のイチチン(花文)で祝女殿内の出土である。祝女殿内は前述したようにⅠ類～Ⅳ類の出土割合も中間を示し、出土量も全体の3割を占めることから、平安山集落の古い時期から最も新しい時期まで存続し、集落の中心的存在であったことが窺える。今後、碗以外の器種構成を明らかにするとより詳細になるとと思われる。



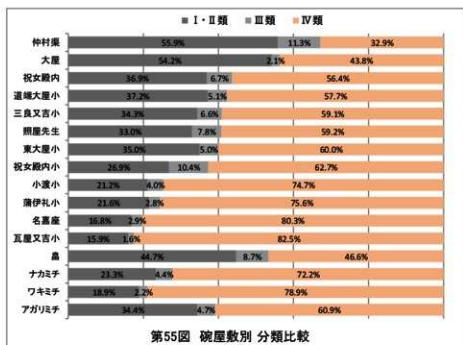
第54図 イチチン文様の変遷

第29表 沖繩産施釉陶器 出土量

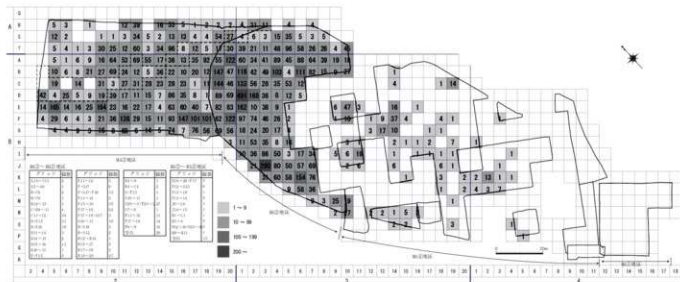
地区	層	高橋												小崎				眞				鉢				急須							
		I				II				III				IV				I				II				III				IV			
		a	b	a	b	イ	ロ	不明	不明	a	b	イ	ロ	イ	ロ	a	b	イ	ロ	a	b	イ	ロ	a	b	イ	ロ	a	b	小	中	大	不明
HA③	I	56	2	18	4	12	3		110	24			7	8	1	2	3	2	4	3	3	2	14			13	23	4	1				
	II	493	16	109	33	44	54		867	245	6	4	8	67	70	26	20	17	5	2	14	19	9	13	11	206	1	1	86	149	59	8	
	III	14		2		1	2						4	1				1	1										1	1			
	IV	9		1	1	1			16	3	1				1														4	3			
	不明					0	1			5	2																						
小計	572	18	130	39	58	59	0	1008	276	7	4	8	78	81	27	22	20	9	4	18	22	9	16	13	231	1	1	114	176	63	9		
HA②	I	35	3	2	4	2	3		93	27	2		4	2	5	4	2	3	2	1	8	2	25			12	7	2	11				
	II	129	14	9	13	11	8		227	142	2	1	5	10	2	3	5	1	1	3	3	2	6	47	1		29	14			27		
	III	651	34	69	39	87	65	3	1156	371	15	5	15	32	86	33	33	38	10	9	13	10	7	18	20	209	5	7	134	59	21	125	
	IV	18		1		1			14	3	1	2		1	1	2	1	1	2	1													
	小計	833	51	81	56	100	79	4	1490	543	18	8	18	37	101	38	43	49	11	12	17	15	11	28	28	281	6	7	175	81	23	163	
HA①	I																				1	1	2	1	4	2	14			43	1	7	
	II	46		7	2	5	23		73	18																				1	5		
	III																																
	不明																																
小計	46	0	7	2	5	24	0	73	18	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	1	0	4	2	15	0	0	1	52	1	7		
HA①	I																																1
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
合計		1451	69	2181	97	163	162	4	2571	837	25	12	26	115	182	65	70	20	17	37	38	20	48	43	527	7	8	290	310	87	179		
高橋県合計							5572							423						247				653						866			

第30表 屋敷別 出土量

屋敷(ミヅ)名	高橋				小崎	眞	鉢	急須	酒器	皿	蓋	火取	香炉	火炉	壺	瓶	灯明皿	器種不明	合計
	I・II	III	IV	不明															
仲村集	119	24	70	39	14	15	35	5	15	1	10	6	9	17	44			23	448
大層	26	1	21	6	1	11	6	2	9	5	4	2	1	5	16			8	124
祝女殿内	560	101	855	123	77	197	245	52	189	45	78	9	73	133	155	3	4	45	2944
三良又吉小	123	17	191	24	12	36	84	18	24	10	3	4	18	27	28	1	2	38	660
三良又吉小	68	13	117	28	17	31	51	11	40	12	12	1	11	46	25	1	1	16	500
照屋先生	34	8	61	9	10	18	22	10	25	8	4		8	24	22	1	2	266	
龍太郎小	7	1	12	6	1	9	1		1			3	1	1	1			34	
祝女殿内小	18	7	42	6	1	6	9	2	2	1								99	
小瀧小	21	4	74	7	1	31	7	1	2	5	2	1	19	6				9	190
藤伊礼小	69	9	242	31	6	98	52	13	23	10	9	7	10	16	22	1	1	37	625
名嘉座	64	11	306	21	13	37	52	11	22	17	3	2	5	54	30	1	1	11	660
祝女殿内小	50	5	259	13	7	27	31	6	18	10	6	4	2	31	29	2	1	11	511
眞	160	31	167	17	13	35	46	9	43	10	11	2	15	36	43	2	1	11	651
ナカミチ	74	14	229	29	12	51	49	6	19	13	7	4	8	59	28			46	648
ワキミチ	17	2	71	3	4	5	10	2	12	7	2		1	6	1	4	1	148	
アガリミチ	22	3	39	2	3	10	9	3	4	1		1	3	5	5	1		111	
眞	2																	2	
合計	1434	251	2756	358	192	587	709	151	447	155	152	45	163	481	455	7	16	260	8621



西脇		新		若		大取		西伊		大伊		池		鹿		灯明石		源種不明		合計																
白	丸	不明	A	B・C	急須	陶碗	油桶	煎	不	内陶	白	不明	大	中	小	不明	白聖	油壺	不明	小	中	大	不明	大	中	小	不明	林	皿	燗台	不明	合計				
1	3	1	5	8	1	1				7		2		3	3	11	6	1		15	10	2									24	428				
6	23	13	24	94	23	4	25	2		3	40	1	3	13	7	8	41	3	25	22	80	57	15	13	69	54	25	2	2	1	254	3624				
					1					2						1															1	53				
					5	1				4	1	1																			2	58				
										1																					2	14				
7	26	14	29	108	0	25	4	26	2	0	3	34	2	4	15	7	8	44	3	28	25	93	64	16	13	86	64	28	2	2	1	0	283	4179		
7	2		2	9		4		2	1											1	1	1	1									1	10	308		
9	2		3	42		7		4	1											1	1	3	8	1	2	27	11	4	4	9			13	945		
21	5	10	26	312	2	35	2	35	16	4	13	77	1	1	2	6	25	2	48	8	2			181	3	25	25	191	4	10	1	2	78	454		
1	1					14																											81			
38	10	12	33	377	3	46	2	41	20	5	16	103	0	1	2	2	8	30	3	62	8	3	4	278	6	34	36	239	5	11	1	2	101	5949		
																																	2			
	8			4		3																												25	343	
																																		2	14	
	0	8	0	0	4	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27	362
																																			1	
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
15	44	26	62	489	3	74	6	67	23	5	19	173	5	5	17	9	16	74	6	90	33	102	69	294	19	143	104	270	8	13	2	2	411	10491		
	177			492							197										170		498													



第56図 沖縄産施釉陶器 平面分布

第31表 碗IV類（厚敷別）出土量

分類	IVa	IVb				不明	小計	IV類合計
		①	②	③	④			
施釉土器								
仲村集	54	1		5	10		16	70
大屋	19				2		2	21
祝女館内	611	10	2	62	156	14	244	855
道端大屋小	150	1		13	26	1	41	191
三良又吉小	104	4	2	7			13	117
熊川先生	45			4	11	1	16	61
東大屋小	6	1		3	2		6	12
祝女館内小	34	3		3	2		8	42
小磯小	67			2	5		7	74
蒲伊礼小	157			14	68	3	85	242
名嘉座	248	5	3	9	40	1	58	306
瓦屋又吉小	159	5	5	21	68	1	100	259
島	110	1	1	19	35	1	57	167
ナカミチ	167			25	37	62	229	
ツキミチ	58	2		2	9		13	71
アガリミチ	22			1	16		17	39
合計	2011	33	11	185	494	22	745	2756

註1：中には黒軸も含まれるが、施釉の濃淡により、発色が異なるため、ここでは船軸で統一し、黒軸、あるいは船軸の濃いもの（濃）、船軸（淡）とした。

註2：浸し掛け：従来の研究や報告では、灰釉碗によくみられるこの施釉法を、「フィガキー（振り掛け）」技法としているものが多い。・・・内底を最初から施釉しない技法。容器をためた軸葉に口縁部から浸す、いわゆる「浸し掛け」の技法を用いたと考えるのが妥当であろう。（木村 謙介 2010 沖縄産施釉陶器に関する基礎研究（1）、壺屋焼物博物館紀要第11号 P.1-20）

註3：大橋康二氏の同定

註4：沖縄県立博物館・美術館×那覇市壺屋博物館合同企画展 2011『琉球陶器の来た道』（株）沖縄文化の杜

註5：1928-32年ごろ、奈良県出身の黒田里庵が海外やヤマトに輸出するため、南洋風なデザインの焼かせたものをさす。最近では琉球古典焼と呼称する。

註6：灰釉碗の存続年代について池田は灰釉碗と黒軸碗の細分から17C後半～18C中頃、家田は肥前系皿の写しの存在から17C後半～18C後半、化粧掛け土焼を池田は18世紀中葉、家田は18世紀後半とする（池田2011）。

第32表-1 沖縄産施釉陶器 観察一覧

定例 調査	調査 番号	器形	分類/器種	部位	口径・高さ 底径 (cm)	形状 (口縁部) 文様: 外/内	器面調整 (cm)	釉 (白化程度/外/内面) 釉色: 外/内面 目入	素地	地区・クワッド・器 遺跡・台帳 (器) 番号
	1			口~底	13.2/6/6.6	口: 直口一丸, 底: 方形一内縁一厚0.6, 高1.1, 器底: 直丸。	輪: 無/透/透。	釉: 無/透/透。	乳~灰/麻	HA3 D11 台 1165
	2			口~底	13.4/6/7	口: 直口一丸, 底: 台形, 厚0.5, 高1.1, 器底: 直丸, 文様: -/見込み一見込。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/砂/見込み。	淡灰色	HA3 D1 台 361
	3			底	-/-/6.4	底: 三角, 厚0.6, 高1.5, 器底: 直丸, 燒き跡。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/見込み。	灰色	HA3 S12 B 5 台 714
	4			口~底	13.2/5/6.8	口: 直口一丸, 底: 台形, 厚0.6, 高0.9, 器底: 丸味, 器蓋: 970/7。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/見込み。	淡灰色	HA3 Ⅱ 台 923
	5			口~底	13/6/7	口: 直口一丸, 底: 台形一中央丸, 底: 三角一丸, 厚0.8, 高1.2, 器底: 直丸に直線が凸出。	輪: 有/透/透。	釉: 有/透/透。	灰~乳色	HA3 D1 台 355
	6			口~底	13.2/5/9.7.4	口: 直口一丸, 底: 方形, 厚0.8, 高1.2, 器底: 丸味, 器蓋: 970/7。	輪: 無/透/透。	釉: 無~高~底 (器蓋)/見込み。	淡灰~乳色	HA3 B19 台 3600 70 台 864
	7			口	13.6/-/-	口: 外反, 口唇下0.8よりくびれ一丸, 器蓋: 970/7。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/見込み。	乳色	HA3 T6 Ⅱ 台 2258
	8			口	14/-/-	口: 直口, 口唇下1.0よりくびれ一丸, 本土 or 中国の粘土上作。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/見込み。	淡灰色	HA3 A12 Ⅱ 台 2819
	9			口	12.2/-/-	口: 直口一丸, 厚0.3, 重ね焼き。	輪: 無/透/透。	釉: 無/透/透。	灰色	HA3 K6 Ⅱ 三台 1828
				底	-/-/6.6	底: 方形, 高台部分か, 厚0.9, 高0.8, 器底: 丸味。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/見込み。	乳色, 麻	HA3 K6 Ⅱ 三台 1567
				底	-/-/6.2	底: 丸味, 厚0.6, 高0.8, 器底: 中央丸。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/見込み。	淡灰/細粒	HA3 D1 台 1371
				底	-/-/5.4	底: 方形, 厚0.8, 高1.1, 器底: 中央丸。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/見込み。	淡灰色	HA3 S20 - O3T20 - 02 Ⅱ 台 1016
				口~底	12.6/5/6/4	口: 直口一丸, 底: 台形, 厚0.4, 高0.8, 器底: 丸味, 文様: -/見込み (丸文と直線)。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/見込み。	灰色	HA3 B9 Ⅱ S 65 台 1090
				底	-/-/6.4	底: 台形, 厚0.8一中央丸, 高1.4, 器底: 丸味, 文様: -/見込み (丸文と直線)。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/見込み。	乳~灰色	HA3 A11 Ⅱ 台 2952
				口~底	13.4/6/17	口: 直口, 口唇部, 底: 台形, 厚0.7, 高1.3, 文様: 見込み (丸文と直線)。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/見込み。	淡灰色/麻	HA3 K6 Ⅱ 三台 1782
				口	14.3/-/-	口: 直口一丸, 文様: 直線と草花一。	輪: 無/透/透。	釉: 無~底/見込み。	灰色	HA3 E20 Ⅱ 台 702
				口~底	13.4/6/5/6.6	口: 中央外反一丸, 底: 台形, 厚0.7, 高1.4, 文様: -/見込み一丸文, 2 回線取り。	輪: 無/透/透。	釉: 無~高~底一丸, 器蓋/見込み。	乳色	HA3 B11 Ⅱ 台 2800
				口~底	13.4/6/5/6.2	口: 中央外反一丸, 底: 台形, 厚0.8, 高1.1, 文様: -/見込み (丸文と直線) (器蓋 71, 口)。	輪: 無/透/透。	釉: 無~高~底一丸, 器蓋/見込み。	淡~乳	HA3 S12 B 5 台 714
				口	12.4/-/-	口: 直口一丸, 文様: -/口~口間, 3本 (直線・直丸)。	輪: 有/透/透。	釉: 淡乳色/麻	HA3 D1 台 1468	
				底	-/-/6.1	底: 台形, 厚0.8, 高1.3, 文様: -/2本直線 (白丸・見込み一丸文と直線)。	輪: 無/透/透。	釉: 無~高~底 (部分), 器蓋/見込み (器)。	明灰色/麻	HA3 D1 台 3600不建 829
				口~底	12.7/5/8/6	口: 外反一丸味, 底: 台形, 厚0.4, 高1.2, 文様: -/直線一口唇一丸味一丸文と直線。	輪: 無/透/透。	釉: 無~高~底/見込み。	明灰色/麻	HA3 D1 台 3600不建 338
				口	14.1/-/-	口: 外反一丸, 文様: 3回直線/斜一丸味とイッタン (器蓋)。	輪: 有/丸, 口唇一透/透。	釉: 灰色	HA3 A10 Ⅱ 台 2820	
				底	-/-/6.8	底: 方形丸味, 厚0.9, 高0.9, 器蓋: 970 (器)。	輪: 有/丸/透/透。	釉: 白粉, 7/丸, 器蓋/見込み。	乳色	HA3 B9 Ⅱ S 546 台 3041
				口~底	13/6/4/5.4	口: 外反一丸, 底: 台形, 厚1.0, 中央丸, 高1.3, 文様: -/口唇一丸味, イッタン (斜見込み)。	輪: 有/透/透。	釉: 無~高~底, 7/丸, 器蓋/見込み。	乳色	HA3 A12 Ⅱ 台 1148
				口~底	12.8/6/1/6	口: 外反一丸, 底: 四角一丸, 厚0.6。	輪: 無/透/透。	釉: 淡乳色	HA3 T4-F20 Ⅱ 瓦形 台 1507	
				底	-/-/7	底: 四角, 内面, 厚0.5, 文様: 細線 (器蓋) トビガナ, 脚一丸味 (器蓋) 淡乳色。	輪: 有/透/透。	釉: 無~高~底/見込み。	淡灰色	HA3 A1 Ⅱ 上 台 1785
				底	-/-/6.5	文様: 細線 (丸の中に竹葉?)。	輪: 有/透/透。	釉: 乳色	HA3 D2 Ⅱ 器台 1368	
				口	12.1/-/-	口: 外反一舌一丸, 文様: 細線 (花文) 淡乳色。	輪: 有/透/透。	釉: 淡灰色	HA3 L5 B Ⅱ 三台 1270	
				口	10.8/-/-	口: 外反一舌, 文様: 細線 (草花文) + 直線一丸, 文様の幅が広い。	輪: 有 (器) /透/透。	釉: 灰色	HA3 G11 Ⅱ 台 1868	
				口	14.2/-/-	口: 外反一舌, 文様: 細線 (草花) + 直線一丸。	輪: 有/透/透。	釉: 淡乳~灰色	HA3 I3 Ⅱ 器面台 2352	
				脚	-/-/脚 7.1	文様: 細線 (葉文) + 直線一丸。	輪: 有/透/透。	釉: 乳色	HA3 A10 Ⅱ 器蓋 SD08 台 1955	
				口~底	13/6/2/6.2	口: 外反一丸, 底: 台形, 厚0.8, 高1.0, 文様: 細線 (丸の中に竹葉?)。	輪: 有/透/透。	釉: 淡乳色	HA3 H3 Ⅱ 器面台 1166	
				口~底	12.6/6/6	口: 外反一丸, 底: 台形, 厚0.7, 高1.1, 文様: -/直線一口唇一丸味一丸文と直線。	輪: 有/透/透。	釉: 無~高~底, 器蓋/見込み。	淡茶~灰色	HA3 F19 Ⅱ 上 瓦形 台 1538
				口	11.9/-/-	口: 外反一丸, 文様: 直線一丸 (草花文) / 口唇一丸味一丸 (草花文), 器蓋 35と7回直線。	輪: 有/透/透。	釉: 淡茶色	HA3 G15 Ⅱ 台 1760	
				底	-/-/6	底: 台形, 厚1.0, 高1.1, 文様: 直線一丸味/見込み (丸文と直線) / 口唇一丸味一丸 (草花文)。	輪: 有 (器) /透/透。	釉: 淡茶~淡灰色	HA3 F15 Ⅱ S 3 台 534	
				口~底	13.8/6/6/8	口: 外反一丸, 底: 台形, 厚1.1, 高1.1, 文様: 直線一口唇一丸味一丸 (草花文)。	輪: 有/透/透。	釉: 淡乳色	HA3 A18 Ⅱ S 12 台 532	
				口	15.2/7.4/7.3	口: 外反一丸, 文様: コバルト (草花) / コバルト (草花文)。	輪: 有/透/透。	釉: 淡乳色	HA3 D1 Ⅱ 器台 1468	
				底	-/-/5.8	底: 厚1.1, 文様: 直線 (草花) 言一丸味一丸。	輪: 有/透/透。	釉: 淡乳	HA3 E19 Ⅱ 上 台 705	
				口~底	13.4/6/9/6/8	口: 中央外反一丸, 底: 台形, 厚0.7, 文様: コバルト (丸文と直線?) / 直線一丸。	輪: 有/透/透。	釉: 淡乳色	HA3 B2 Ⅱ S 3 台 685	
				口	13.2/-/-	口: 外反一舌, 文様: 斜一丸味一丸 (イッタン) 一丸。	輪: 有/透/透。	釉: 淡乳色	HA3 F15 Ⅱ 器台 2357	
				底	-/-/7	底: 方形, 器蓋, 厚0.7, 高1.2, 文様: イッタン / 見込み一丸 (花文, 丁) 直線。	輪: 有 (外反一丸) /透/透。	釉: 淡乳色	HA3 B19 Ⅱ 器蓋 701 台 865	

(丸) ○: 直, □: 有, △: 少, △: 僅少, 費用一貫付録付き, 器目一能目録付き, 全一全面, 7/丸+アルミナ (白化剤)

第32表-3 沖縄産施釉陶器観察一覧

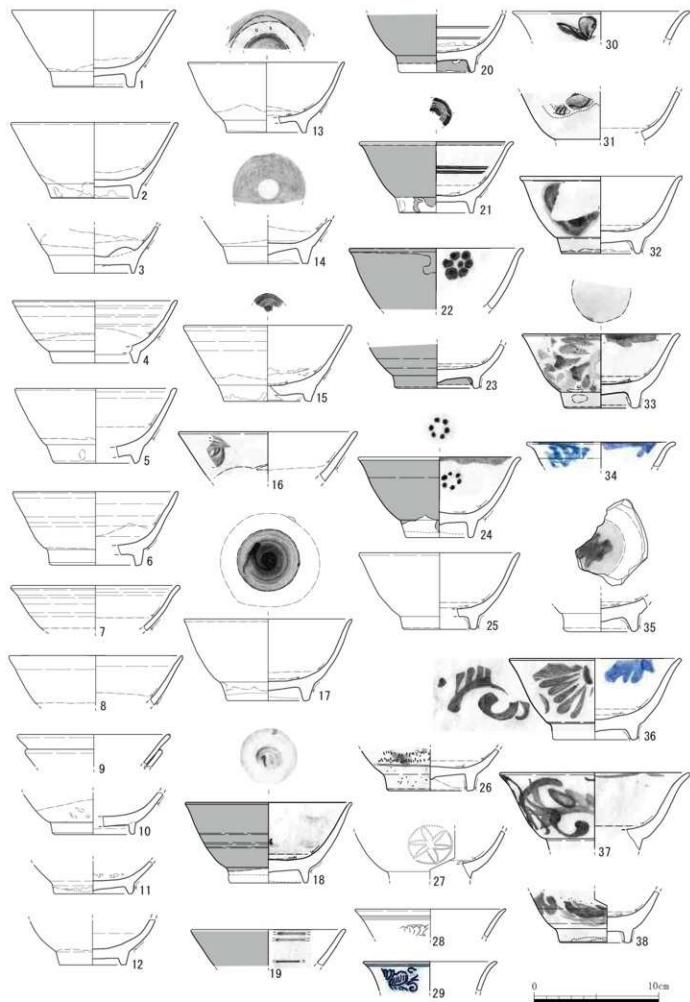
調査 年次	調査 月	器形	分類/器種	部位	口径・高さ 底径 (cm)	(正確) 文様: 外/内	形状 器高調整 (cm)	釉 (白化程度無/外面/内面) 高熱/外/内面 投入	素地	地区・クワッド・器 遺構・台高 (現) 番号
85			II a	底	— / — 底	底: 円形	底: 丸文	釉: 無/黒/黒	淡灰色	HA 26 B 6 名高所台 2014
86		底		— / — 底	底: 方形, 厚 0.9, 見込みは焼色, 焼成良好, 素地は赤変色。	底: 丸文	底: 丸文	釉: 無/黒/黒	淡灰色	HA 22 II 2 祝殿台 392
87		口		19.8 / — / —	口: 内丸	文様: ロウケロ	口: 内丸	釉: 無/黒/黒	淡灰色/黒	HA 2 E1 II 上 台 1518
88		口		21.7 / — / —	口: 直口	有段 1.0, 方形。	口: 直口	釉: 無/黒/黒	淡灰色	HA 2 E3 II 名高所台 1098
89			II b	底	— / — 底	底: 方形/焼色あり, 文様: — / 鉄輪一丸文 (7.7cm) 網目。	底: 丸文	釉: 無/黒/黒	乳色	HA 2 F9 II 台 550
90		III a		口~底	20.9/6/2.9	口: 中~外反一丸, 底: 方形, 厚 0.9, 文様: — / 口内一筋。	口: 中~外反一丸	釉: 無/黒/黒	乳色	HA 2 B10 I 5.37 台 2004
91			III b	底	— / — 底	底: 内面 (内側) / 見込みは焼色, 文様: 白土一筋 (網目) (焼色) 焼成良好。	底: 丸文	釉: 無/黒/黒	淡灰色	HA 2 H4 III 名高所 SK14 台 2175
92		III b		口	20 / — / —	口: 外反一丸, 字に近い, 文様: — / 鉄輪 (中)	口: 外反一丸	釉: 有/黒/黒	乳色	HA 2 B6 II 高台 1750
93			IV a	口~底	18.8/6/3.9	口: 外反丸, 底: 内丸, 厚 0.6, 中央凹。	口: 外反丸	釉: 有/透/透	淡灰色	HA 2 K6 II 三台 1572
94		IV b		口	22 / — / —	口: 外反一丸, 文様: — / コバルト (草花文)。	口: 外反一丸	釉: 有/透/透	淡灰色	HA 2 C1 II 祝殿台 2529
95			IV b	口	28 / — / —	口: 直口丸, 文様: — / 扇形・二形 (雲・扇)。	口: 直口丸	釉: 有/透/透	濃灰色	HA 2 E20 II 上 台 702
96		小鉢		IV	口	10.2/6/5.1	口: 直口一丸, 八角形, 文様: 洪動輪 (口内および面取縁縁) (口内)。	口: 直口一丸	釉: 有/透/透	淡灰色
97			IV	口	18.1 / — / —	口: 外反三角, 文様: コバルト, 口内/草花文, 焼: 網目。	口: 外反三角	釉: 有/透/透	乳色	HA 2 B7 II 高台 1177
98		I ?		底	— / — / 10.6	底: 方形, 厚 0.9, 文様: 三鳥手 (ヒギ) / 扇形 / 一丸。	底: 方形	釉: 無/透/透	淡灰色	HA 2 D3 II 祝殿台 1074
99		I * ?	底	— / — / 10.4	底: 方形/網目焼成, 厚: 1.0, 付口高台か, 文様: 三鳥手 (高さ本一筋) (約 2/3)。	底: 方形	釉: 無/透/透	淡灰色	HA 2 E20 II 祝殿台 1532	
100			IV b	口~底	18.2 / — / —	口: 直口一丸, 文様: — / 網 (網目) 鉄輪。	口: 直口一丸	釉: 無/透/透	明灰色	HA 2 T5 II 高台 2580
101				口	— / — / —	口: 外反一丸形, 文様: — / 扇に曲文・白土。	口: 外反一丸形	釉: 無/濃色/透明	乳色	HA 2 S5 III 5-105 台 807
102			IV b	口	20.8 / — / —	口: 直口, 文様: 網目/扇形・白土。	口: 直口	釉: 無/黒/黒	明灰色	HA 2 D2 II 祝殿台 1374
103				側	— / — / —	文様: — / イッチン (花文) 白土。	側: 文様	釉: 無/黒/黒	淡灰色	HA 2 A15 I 5.29 台 1981
104			IV b	口	— / — / —	口: 外反一丸, 梅花, 文様: — / 網・他 (鉄輪と白土)。	口: 外反一丸	釉: 無/濃色 (網目) / 透。	明灰色/黒	HA 2 S8 II 上 台 636
105				口	20.6 / — / —	口: 内筒一丸。	口: 内筒一丸	釉: 有/内/黒/透	乳色	HA 2 E09 II 台 2019
106		鉢	III a	底	— / — 底	底: 方形。	底: 方形	釉: 有/内/黒/透	淡灰色	HA 4 L01 II 台 2693
107				口~底	26.6/12.7/12	口: 内筒一丸, 底: 方形一丸, 厚 1.9。	口: 内筒一丸	釉: 有/内/黒/透	淡灰色	HA 2 B10 II 祝殿 SK08 台 1956
108			III a	口	22.8 / — / —	口: 直口 1.5, 丸。	口: 直口	釉: 有/黒/透	淡灰色	HA 2 J3 II 三台 24 台 768
109				口	26.2 / — / —	口: 上 1.7, 丸, 文様: ヘラで調整, 網 1.2/鉄輪と網 3.5 の混合。	口: 上 1.7	釉: 有/黒/透	淡灰色	HA 2 C19 II 祝殿台 1303
110			IV	口	24.8 / — / —	口: 中~浅底, 口上 1.3, 丸, 文様: トビガンナ? / ロウケロ。	口: 中~浅底	釉: 有/黒/透	明灰色	HA 2 A19 II 上 台 1530
111				口	— / — / —	口: 外反一丸 1.5, 丸, 文様: 口内鉄輪一輪花? 鉄輪。	口: 外反一丸	釉: 有/黒/透	明灰色	HA 2 G2 II 土高所台 311
112			III b	側	— / — / —	文様: — / 竹 (丸文) 鉄輪。	側: 文様	釉: 有/黒/透	乳色	HA 2 C1 II 祝殿台 2517
113				底	— / — 底	底: 有段, 厚 1.2, 文様: — / 見込み, 竹 (丸文・丸 or 星, 点 0.8)。	底: 有段	釉: 有/黒/透	淡灰色	HA 2 I7 II 東大台 1850
114			III b	口	— / — / —	口: 丸, 底状 (梅花), 文様: — / 鉄輪一筋 2 本の網目, 網目。	口: 丸	釉: 有/黒/透	明灰色	HA 2 L5 II 三台 1268
115				口	32.4 / — / —	口: 直口 1.8, —。	口: 直口	釉: 有/黒/白・茶色。	濃灰色	HA 2 G17 II 5-10 台 1253
116			小/I	側	13.8 / — / —	側: 鉄輪・網目・口内。側の膨らみが強く, 扁平, 厚 0.4。	側: 鉄輪・網目	釉: 無/透/透	淡灰色	HA 2 A3 II 祝殿台 1621
117				側	12.1 / — / —	側: 鉄輪・網目・口内。口の膨らみが強く, 扁平, 厚 0.4。	側: 鉄輪・網目	釉: 無/透/透	淡灰色	HA 2 D1 II 祝殿台 338
118			小/II c	口	4.8 / — / —	口: 直口, 文様: 一筋鉄輪一丸。扇大網目 10.4。	口: 直口	釉: 無/濃色/内面一筋鉄輪。	淡灰色	HA 2 E1 II 祝殿台 1283
119				口	5.9 / — / —	口: 直口一筋, 網目一筋を焼き取る。	口: 直口	釉: 有/内/黒/透	淡灰色	HA 2 A4 II 祝殿台 1626
120			小/II b	口~底	5.4 / — / —	口: 直口一筋, 底: 厚付有, 網目, 文様: 網目 (トビガンナ・鉄輪) / 口: 直口 1.2cm の網目, 口内: 口内 1.2cm の網目, 口上: 1.2cm の網目。	口: 直口一筋	釉: 無/濃色/鉄輪, 網目: 網目 / 口内一筋鉄輪。	淡灰色	HA 2 C14 II 台 1974
121		茶碗		口~底	5.4 / 8 / —	口: 直口, 文様: — / ロウケロ。	口: 直口	釉: 有/透/透	淡灰色	HA 2 D15 II 5-16 台 508
122			小/IV b	口	5.8 / — / —	口: 直口, 文様: 洪動輪 (山水画, 鳥) / —, 扇大網目 11.5。	口: 直口	釉: 有/透/透	淡灰色	HA 2 B10 I 5.37 台 2004
123				口	— / — / —	口: 直口一筋, 文様: 網目 (山水画, 鳥) 洪動輪 / —。	口: 直口	釉: 有/透/白化鉄輪, 網目: 網目 / —。	淡灰色	HA 2 B8 II 5-12 台 975
124			小/IV b	口~底	5.4/7.9/6.8	口: 直口一筋, 底: 厚付有, 網目, 文様: 網目 (トビガンナ・鉄輪) / 口: 直口 1.2cm の網目, 口内: 口内 1.2cm の網目。	口: 直口一筋	釉: 有/透/透	淡灰色	HA 2 A20 II 取 82
125				口~底	6.6/9.2/8.3	口: 直口一筋, 底: 厚付有, 網目, 文様: コバルト (鳥甲文中に透い) ラウ, / —, 網目: 網目, 網目 1.5。	口: 直口一筋	釉: 有/透/透	淡灰色	HA 2 G5 II 台 1635
126			口~底	4.8 / — / —	口: 直口一筋, 文様: — / ロウケロ, 口上 1.4 (網目) 網目 12.0。	口: 直口一筋	釉: 有/コバルト/透明, 網目: 網目 / 口内一筋鉄輪。	乳色	HA 2 E09 II 台 2017	

(丸) 網目・点・○: 有; △: 少; □: 僅少, 費用一貫付輪割り, 網目一貫付輪割り, 全一全面, 70~90ミナ (白化程度)

第32表-5 沖縄産施釉陶器観察一覧

調査年度	調査月	器形	分類/発掘	部位	口径・高 底径 (cm)	(左欄記) 文様: 器/内 器面施装 (cm)	形状 文様: 器/内 器面施装 (cm)	釉 (白化層有無/外内/内面) 施装: 外内/内面 目入	素地	地区・クワッド・遺 跡群・台帳 (現) 番号
道台群・ 同敷38	160	油壺/V b	口~底	10.2/2.6/7.6	黒い口直上・髷高0.9. 文様: 二彩 (高輪)	黒: 有/透/黒/白化. 高輪: 一/一/。	灰色	HA 3 F16 B S 3 台 682		
	170	油壺/II	口~底	12/4/7.1	黒一平. 径2.1. 口一高. 文様: 黒線(外縁. 黒線. 本輪黒線)・長成良好. 髷: 黒口1.	黒: 無/黒/黒. 高輪: 黒/全.	暗茶~灰色	HA 3 A5 B 高台 1893		
	171	油壺/II	口~底	11.4/3.4/6.6	黒一高付. 口直上丸. 文様: 黒一2本/一. 抜きよ丸. 髷高0.7.	黒: 無/黒/黒. 高輪: 黒/全.	乳色	HA 3 E17 B 台 1804		
	172	甌/II	口	12.4/-/-	口直上一段0.8. 赤. 髷部に輪状まる. 同78の油に似る.	黒: 無/黒/黒. 高輪: 黒一/見込丸.	黒茶~灰色	HA 3 A1 B 祝殿台 495		
	173	甌/II	口	14.6/-/-	高付. 口内丸. 文様: 黒線-3条/一.	黒: 無/黒/黒. 高輪: 黒口/全.	乳色	HA 3 L6 B 三台台 1432		
	174	甌/II	口	18.2/-/-	高付. 口内丸一高. 1.0. 髷: 赤屋1.	黒: 無/黒/黒. 高輪: 一/全.	茶色	HA 3 N10 I 黒屋台 668		
	175	甌/II	底or髷	-/-/7.4	高付: 径6.4.	黒: 無/黒/黒. 高輪: 併行/全.	赤色	HA 3 F11-14 B 台 1504		
	176	甌/IV b	口~底	11.4/4.2/2.8	高付. 口内丸. 文様: 若 (丸文一高-3個か). 髷成良好. 黒い?	黒: 無/透一黒/黒. 高輪: 口閉/全.	淡灰色	HA 3 B20 B 黒陶台 834		
	177	甌/II	口	13/-/-	口直上. 髷高0.4.	黒: 無/失一髷輪一貫入/黒. 高輪: /一.	濃灰色	HA 3 F5 B 口右 1960		
	178	内甌/II b	口	11.4/-/-	口内丸. 文様: 1.5寸分/一0%.	黒: 無/黒/透/一. 高輪: 部分/口閉一.	灰色	HA 3 B14 B 台 2823		
	179	甌/II	口	11.8/-/-	口直上一逆字1.1.	黒: 無/黒/黒. 高輪: 一/髷一底.	乳色	HA 3 A12 B S 7 台 991		
	180	甌/II b	口	11.2/8.5/-	口直上内丸. 1.1. 文様: 黒線(黒一密(13条)/一. 輪廻り. 髷高.	黒: 無/黒/黒. 高輪: 髷一底/髷一.	淡灰色	HA 3 D1 B 祝殿台 1467		
	181	甌/II b	口	10/-/-	口直上1.1. 文様: 黒線(黒一逆)一/一.	黒: 無/髷/黒. 高輪: 髷一底/髷一.	乳色	HA 3 G13 B 台 2224		
	182	甌/II b	底	-/-/7.9	底: 厚2.0. 髷部から直状高付. 髷付外縁に中平輪り. 文様: 黒線(髷部). 左右に赤り?	黒: 無/髷/黒. 高輪: 髷(逆)底/全.	淡灰~乳色	HA 3 B1 埋土黒陶SK01台2216		
	183	甌/II b	口~底	10.6/8.5/6.6	口直上丸輪0.3. 底: 厚0.2. 高付輪0.4. 文様: 黒線(19.8条. 赤口直上1.7に6条を1丸. 4寸分/一).	黒: 無/黒/黒. 高輪: 髷一底/一.	淡褐色	HA 3 D1 B 甌台 361		
	184	甌/II b	底	-/-/7.4	底: 高付? 一. 文様: 二鳥字(口直上)一輪廻り/一.	黒: 無/透/黒. 高輪: 髷一底/一底.	褐色	HA 3 A20 B 台 1614		
	185	甌/II	口	10.8/5/-	口直上丸. 文様: 逆字(口直上)一輪廻り. 黒一髷	黒: 無/黒/黒/口閉まで. 高輪一/一.	濃乳色	HA 3 D1 B 甌台 356		
186	甌/IV b	口~底	10.5/8.4/7.2	口直上丸. 底: 高付一方形. 文様: 黒線に華形(9.0寸). 髷高0.4.	黒: 有/透/白化(外のみ). 高輪: 髷付/口閉. 髷付/有.	灰色	HA 3 F18 B 台 2180			
187	甌/IV	口~底	10.3/8.3/10.4	口直上口閉部丸. 底: 上付底.	黒: 有/黒輪黒系/輪(口). 高輪: 一/髷一底.	乳色	E10 B 台 2034			
188	甌/IV	口~底	10.1/7.2/9.9	口直上一方形. 底: 方形. 黒線輪が厚. 突起あり(髷化突起). 黄面に輪状.	黒: 有/黒輪黒系/輪(口). 高輪: 髷/内髷一底.	乳色	HA 3 E10 B 台 2034			
189	A/I	口	13.4/7/7	口直上輪(1.6) 方形. 底: 厚6.5.	黒: 無/黒/黒. 高輪: 髷一底・髷/髷一底.	淡褐色	HA 3 A9 B 甌SK00台1954			
190	A/IV	口	18.5/-/-	口直上(1.4) 中平方形. 文様: 髷付付け文様? 一. 髷輪18.1. 髷径16.1.	黒: 有/透/黒. 高輪: 髷一髷一.	淡灰色	HA 3 D11 B 台 1173			
191	A/II	底	面径14.8/-/10.1	底: 厚一油壺. 文様: 黒線一縦に黒輪部(髷部)に髷文? 一. 髷大輪径16.5cm. 髷輪全径に髷. 髷輪を持ち付けた.	黒: 無/黒/透(底)/黒. 高輪: 底/髷一底.	灰色	HA 3 T12 B S 7 台 715-814 B 台 2216			
192	A/IV	口~底	14.8/7.6/7.3	口直上輪1.5. 文様: 黒線(黒一逆)口直上付. 髷大輪径13.8. 髷径12.6. 髷付外縁. 髷部に内面輪が厚. 髷部(口直上)髷高0.8/内面に5.5条を2.	黒: 有/髷/白化(髷). 高輪: 髷付/髷一底.	乳色	HA 3 E8 B 台 1390			
193	B/II	口	10.8/13.3/13.3	口直上一方形(中). 髷部一油壺. 底: 厚1.5. 文様: 輪廻り(4条). 一は全輪に黒の帯. 使用痕あり.	黒: 無/髷/黒. 高輪: 髷/髷一底.	淡灰色	HA 3 D1 B 甌取 64			
194	-/II?	底	-/-/7.6	底: 厚9mm. 髷「く」字状に油壺.	黒: 無/髷/黒/黒. 高輪: 髷/一底.	濃褐色	HA 3 A7 B 台 2858			
195		口	13/-/-	小. 口直上一角(1.1). 文様: 黒一(黒一3) /突起一輪. 髷輪.	黒: 無/髷(口一)/黒(上縁). 高輪: 髷一底. 髷一輪輪/髷一底.	淡乳色	HA 3 D1 B 甌不建行829			
196	A/III	口~底	13.6/-/8.6	小. 口直上一髷部. 底: 厚1/1. 中央部. 内縁側(髷部)に髷(髷部)2条. 髷部(4条) 髷不輪? 一. 大1.1) 字状.	黒: 無/髷/輪(口). 高輪: 口閉/髷一底.	乳色	HA 3 D19 B 祝殿台 263			
197		口	14.8/-/-	小. 口直上四内. 文様: 輪廻り(黒)一/一. 突起一水平.	黒: 有/髷/黒(口). 高輪: 口閉(口)/髷一底.	乳色	HA 3 R2 B 台 1538			
198	大甌	底	-/-/13	大. 底: 厚(1.1). 高付(字)状に拵る. 髷入?	黒: 無/髷/黒. 高輪: 髷一底/全.	淡灰色	HA 3 G20 B I 祝殿台 315			
199		口	20.2/-/-	大. 口内丸一. 髷付. 髷付. 文様: 格子状ト(髷部)に髷字? 一.	黒: 無/髷/輪(口). 高輪: 髷一髷一/口閉.	淡灰色	HA 3 E16 B S 4 台 1052			
200		口	17/-/-	大. 口直上. 髷: 輪(13 x 40). 中平輪. 髷丸. 髷部: 大平字(髷)付. 口直上.	黒: 無/髷/輪(口). 高輪: 一/髷一底.	乳色	HA 3 T3 B 甌台 389			
201	B/油壺	口	23/-/-	大. 口直上一方形に髷部(1.5). 突起: 4.0 x 4.0. 突起と髷付. 髷付. 大付. 内面に髷に切込.	黒: 無/髷(髷輪あり)/髷. 高輪: /一.	淡灰色	HA 3 K6 B 三台台 1564			
202		底	-/-/14.2	大. 底: 厚1.6. 髷部3.0. 文様: 黒一格子状. 輪廻り(5条). 髷部一髷下部(3条) /0% 髷部.	黒: 無/髷/一. 高輪: 髷一底. 髷/全.	淡灰色	HA 3 C1 B 上 台 567			
203	A	口	6.1/-/-	小. 口直上丸輪0.6. 文様: 髷部3条 輪0.4 髷部: 大平字(髷)付. 口直上.	黒: 無/髷/黒. 高輪: 口閉/口閉.	濃乳色	HA 3 C2 B 甌台 519			
204		髷+口	-/-/7.9	小. 文様: 髷部4条髷下/一. 髷耳2.8 x 1.8. 耳孔0.8 x 0.7.	黒: 無/髷/髷. 高輪: 一/髷一.	褐色	HA 3 K6 B 三台台 1567			
205		口	6.5/-/-	口直上1.0-6.3. 文様: 髷部に髷0.2cmの髷部/一. 髷1.1輪髷部. 使用痕あり.	黒: 無/髷/黒. 高輪: 口閉/口閉.	淡灰色	HA 3 L6-K6 B 三台台 1264,1265			
206	甌	口	8.1/-/-	口直上四内. 口閉一付. 耳4個付(耳3.0 x 1.5) /一.	黒: 無/髷/髷. 高輪: 口閉/口閉.	淡灰色	HA 3 G18 B S 10 台 1255			
207		口~底	10.8/15.9/1	中. 口直上三角. 輪1.0. 底: 方形. 輪1.1. 髷部: 一0%.	有一白髷/髷/黒. 高輪: 髷一髷/髷付.	淡灰~灰色	HA 3 C19 B 祝殿SK05台279			
208		口~底	12.6/22.1/11.3	中. 口内輪三角. 輪1.25. 中. 底: 内丸. 髷部: 2.3. 髷部に切込み1.2. 髷部4個. 5.3 x 2.9.	黒: 無/髷/黒/黒. 高輪: 髷/見込無輪. 髷4.0.	乳色	HA 3 D3 B 上. 髷7.01 取195. 台 732,865			
209		底	-/-/8.8	中. 底: 輪に立ち上がる. 髷0.9. 髷部: 一0%.	黒: 無/髷/一. 高輪: 髷一底/全.	濃褐色	HA 3 T12 B S 7 台 1289			

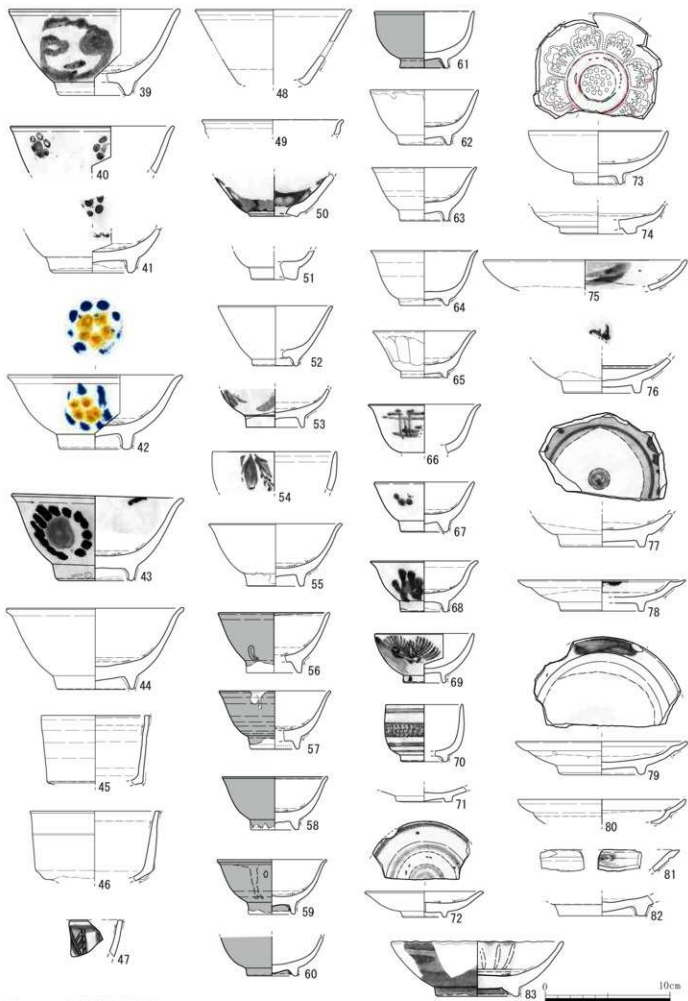
(丸輪) ○: 黒, ○: 有, △: 少, 乙: 僅少. 髷付一髷付輪部. 髷付一能付輪部. 全一全輪. 7A~7Fメナ (白化層)



第 57 図 沖縄産施釉陶器 1



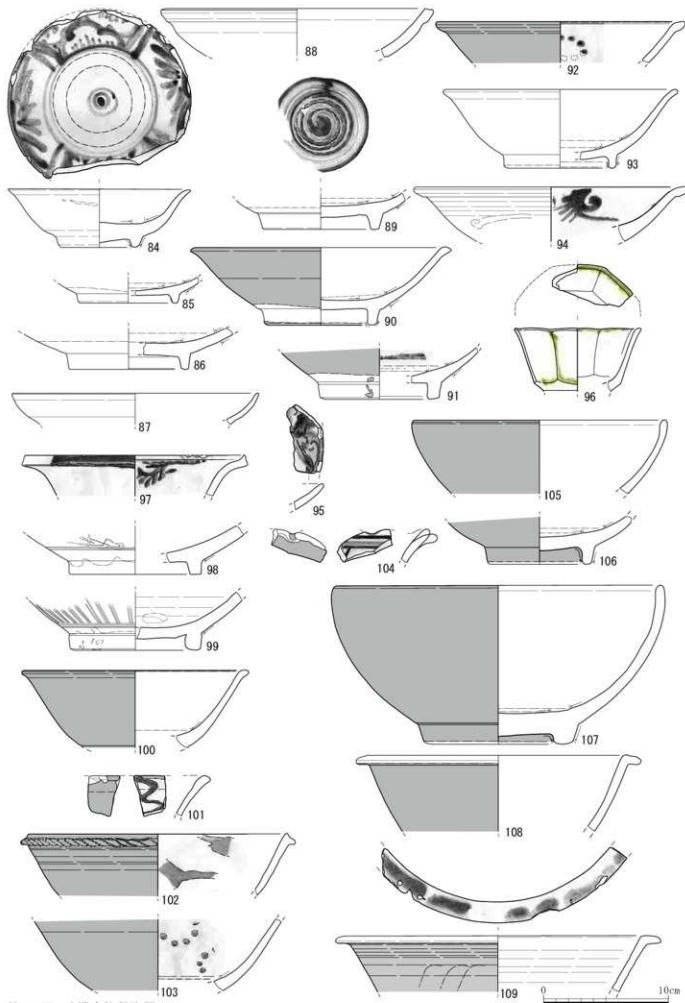
図版 34 沖繩産施釉陶器 1



第58図 沖縄産施釉陶器2



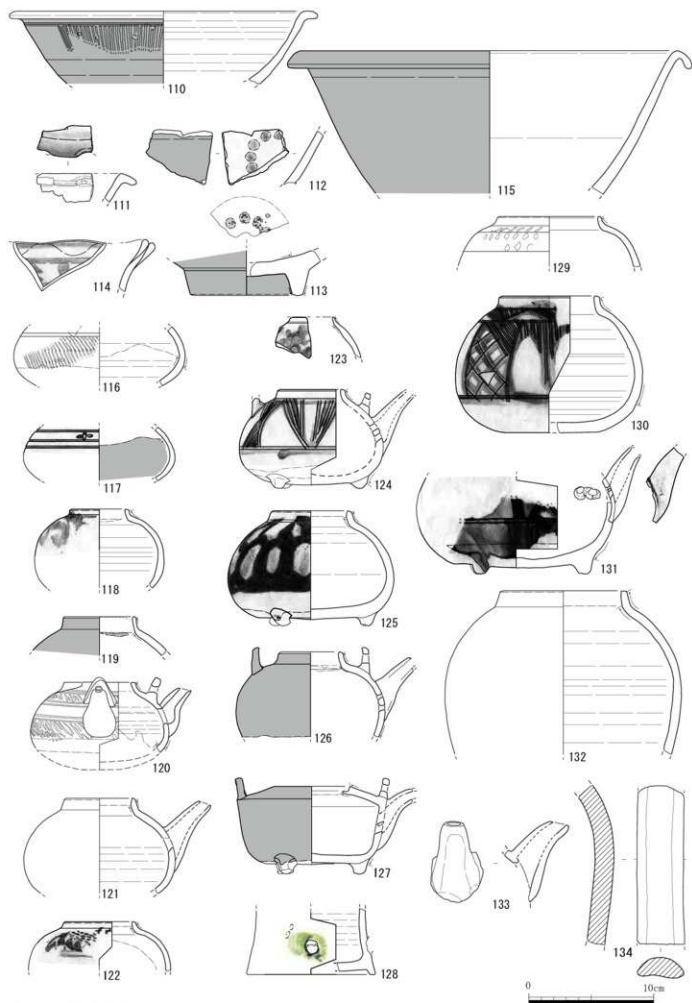
図版 35 沖縄産施釉陶器 2



第 59 図 沖繩産施釉陶器 3



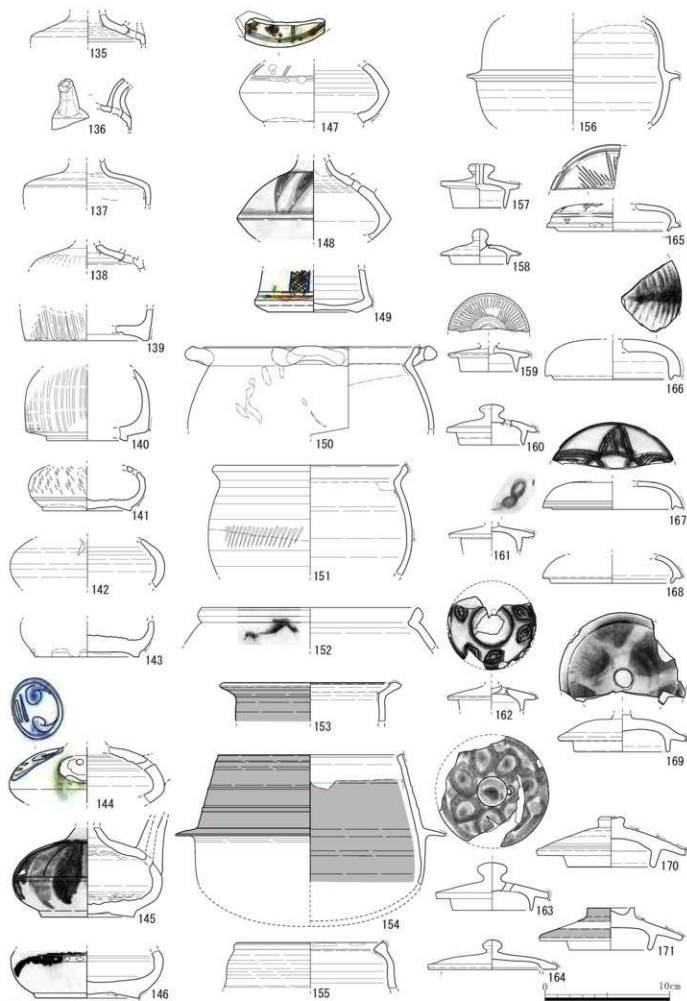
図版 36 沖縄産施釉陶器 3



第 60 図 沖繩産施釉陶器 4



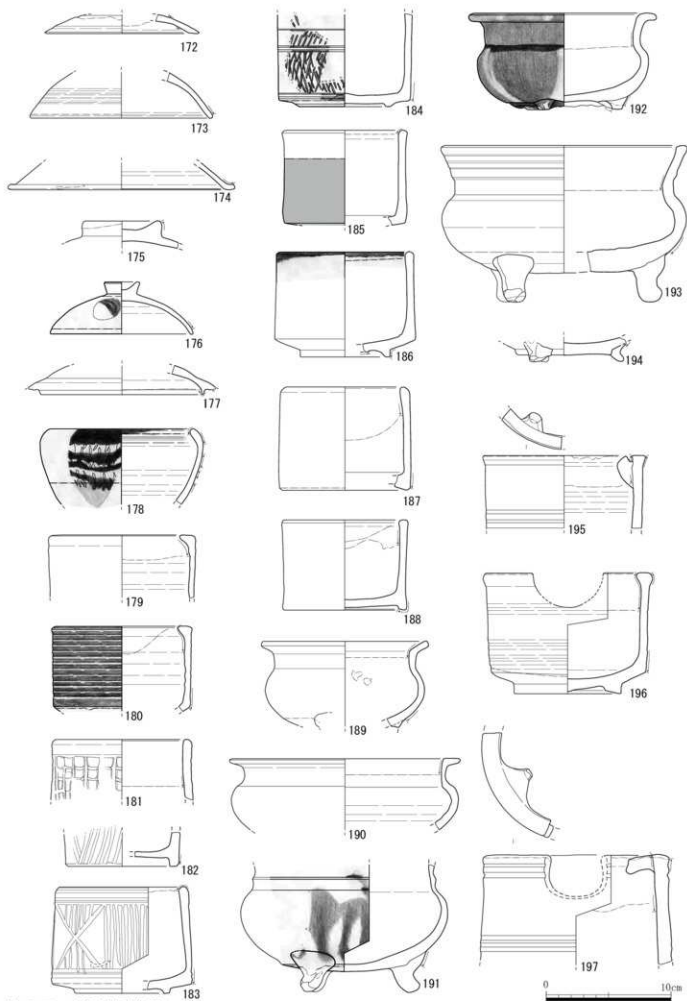
図版 37 沖縄産施釉陶器 4



第61図 沖繩産施釉陶器 5



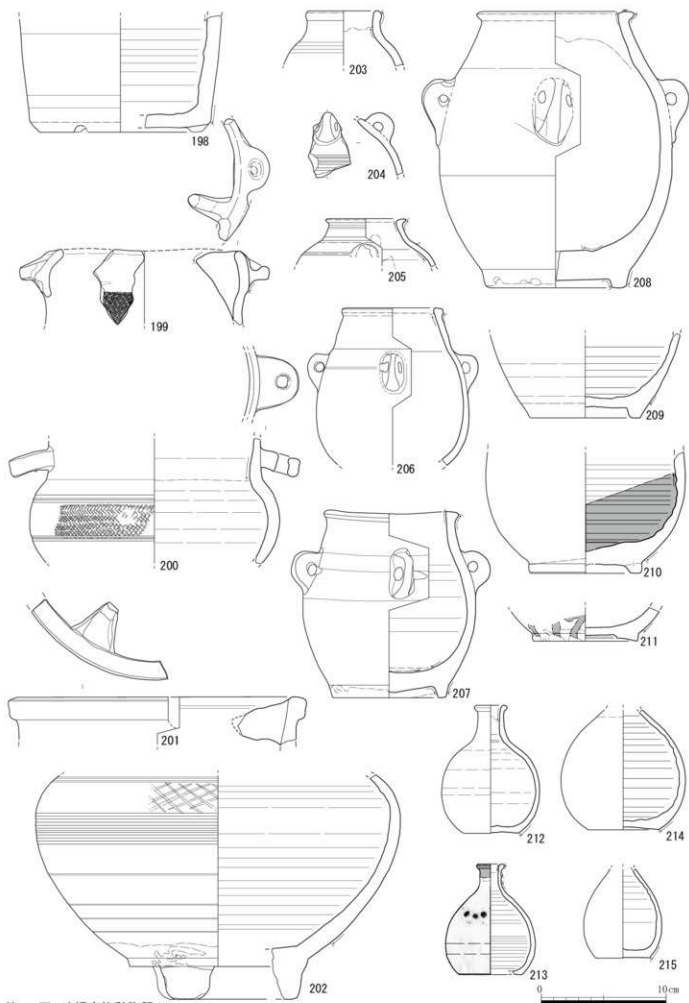
図版 38 沖縄産施釉陶器 5



第 62 図 沖縄産施釉陶器 6



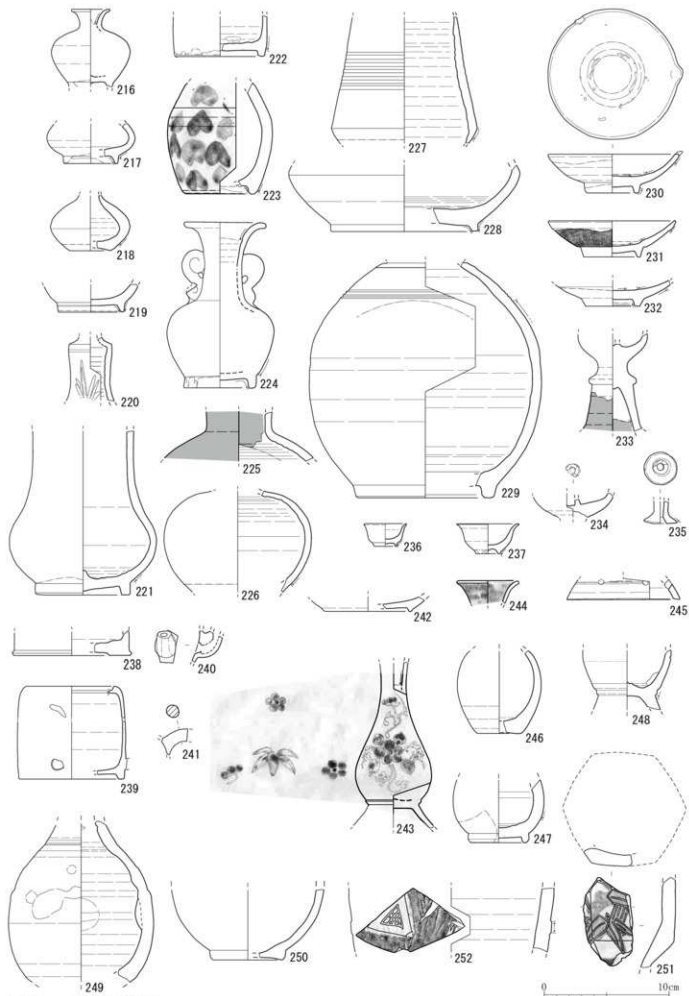
図版 39 沖繩産施釉陶器 6



第 63 図 沖縄産施釉陶器 7



図版 40 沖縄産施釉陶器 7



第64図 沖繩産施釉陶器8



図版 41 沖縄産施釉陶器 8

(4) 沖縄産無釉陶器

荒焼（アラヤチ）と称される沖縄産の無釉の焼き締め陶器を扱い、中にはマンガン釉や泥釉等が施されるものも含まれる。また、胎土が砂質、或いは軟質（陶質にやや近い）のものも沖縄産無釉陶器で扱った。総数 13640 点と大量に出土し、その出土量を第 36 表、平面分布を第 66 図、接合関係を第 43 図、第 37 表に屋敷別の出土量、第 35 表に観察一覽を示した。なお、5cm 以下は分類・報告から除外している。最も多く出土した遺物は貯蔵容器の壺や甕で、調理容器である鉢も次いで多い。沖縄産施釉陶器で多く見られる食膳容器の碗、皿、急須は僅か 0.9% の出土量で、中でも小皿は殆どが灯明皿に使用され、本遺跡では食膳容器としての用途は少ないようである。地区別では HA ②・HA ③での出土が多く、両地区で全出土量の 93% を占める。

HA ②では祝女殿内から多量に出土し、その中でも不明建物（D1）出土が最も多い。次に三良又吉小（K6）とその周辺から出土する。第 37 表の屋敷別出土量から見ても祝女殿内出土が特に多いことが窺える。元集落のナガミチ出土も割と多い。HA ③は A12・13（仲村渠）を中心とした周辺と S-7（溝）、S-640（自然流路）を挟んで F15（蒲伊礼小）を中心に G17（小渡小）や S-3・S-10（道路）等の二箇所で多く出土する。両地区は戦前の平安山集落で当時の屋敷跡が検出されており、他の遺物と兼ね合わせて当時の生活の一端を窺うことが出来る。旧平安山集落からはずれる HA ④・①は両地区合わせても 28 点と僅かの出土である。主な遺構出土の沖縄産無釉陶器は第 3 節 1 の遺構の項にて報告を行った。殆どはⅡ層出土で、接合関係を示した第 43 図から見るとかなり離れた場所の遺物も接合されることから、戦後の米軍基地接收時に攪乱を受けていることが明らかである。Ⅲ・Ⅳ層から出土する遺物もあり、かなり深く掘削されたと思われる。

以下、器種別に記述するが、それぞれ個々の遺物の詳細は第 35 表の観察一覽に記した。

1. 碗

碗は 68 点が出土したが、壺等の出土量と比べると僅か 0.5% である。第 66 図の平面分布を見ると HA ③が 40 点と最も多く、屋敷別（蒲伊礼小、仲村渠等）にまとまりが見られる。次に HA ④が 18 点と続く。HA ②は沖縄産無釉陶器が最も多く出土するが、碗は 10 点と少ない。特に祝女殿内からは 5 割近くも沖縄産無釉陶器が得られるが、碗は僅か 2 点である。その次に多いのは瓦屋又吉小の 6 点である。以下、形状により二つに分類した。

Ⅰ類：逆「ハ」字状に外反し、口径は大きい。胴部は直線的で、底部からの立ち上がりは緩やかなもの

Ⅱ類：Ⅰ類より外反が弱く、口径は小さくなる。腰が折れて胴部は膨らむもの

Ⅰ類は図 1～8、Ⅱ類は図 9～11 に図示した。全体的には若干Ⅰ類が多い。Ⅰ・Ⅱ類とも形状はやや異なるが、胎土や器色等はほぼ同じである。高台は 0.3～0.6cm と低めが殆どで、畳付の幅は 0.4～0.7cm 間に収まる。マンガン釉を施すものが多く見られることから全般的にやや古手と思われる。澁谷村喜名古窯出土の遺物と比較させてもらったところ⁴¹⁾、焼成、胎土、マンガン釉等から喜名焼の可能性が高いもの（図 1）も得られた。図 8 は断面の器色が暗紫色で層状を呈し、備前焼にも類似する。ただ、同様な胎土を持つものが沖縄産無釉陶器にも見られ、今回はここで扱った。

2. 皿

皿は 38 点（全体の 0.3%）が出土し、図 12～18 に図示した。出土量が多い地区は HA ②が 21 点、HA ③が 14 点である。前者では祝女殿内出土が 14 点と目立ち、後者は A9～11 で 7 点と最も多く得られた。小皿が多く、口唇部に見られる煤付着の皿は灯明皿と思われる。大きさの違いにより二つに分類した。

Ⅰ類は小皿で、図 12～17 に図示した。口縁が逆「ハ」字状に外反し、削りによって胴部に稜を持つが、不明瞭なものもある。底部はベタ底が多いが、若干上げ底を呈するものもある。図 16 は外面にも煤が明瞭に残る。

Ⅱ類は大皿で図 18 の 1 点である。口縁が逆「ハ」字状に外反し、畳付の幅は 0.6、高台が 0.4cm と碗同様に低い。

3. 急須

急須は 23 点（0.2%）の出土で、図 19～23 に 5 点を図示した。図 19・20 は本体部分、図 21 は把手部分のみ、図 22・23 は蓋である。図 19 には受け口が見られ、器色は青灰褐色を呈する。図 20 の注ぎ口は先端部が破損しており、全体的に赤褐色を呈し、やや薄手である。図 21 の把手は全体的に気泡が見られ、古手の可能性がある。図 22・23 の蓋径の大きさがそれぞれ異なり、前者は 9.0、後者は 12.4cm である。

4. 鍋

鍋は図 27 の 1 点のみの出土である。腰部のみだが、外面には煤が付着している。やや軟質で陶質土器にも近いが、器厚が 0.9～1.1cm と厚く、ニービを混和しないことからここに含めた。

5. 播鉢

播鉢は 1648 点 (12.1%) が得られ、図 28～82 に 55 点を図示した。HA ②・③での出土が多く、次に HA ④と続く。播鉢が多数出土していることから、調理容器としての必要頻度や具材の検討等、今後の課題である。安里・他 (1987) の播鉢分類を参考に、器形や櫛目を組み合わせて以下のように分類した。同類の中で同じ形状を持つが、粘土や焼成、器厚等が明らかに違うものも見られる。産地の違いであろうか。始めに口縁部、次に底部を略述する。

(口縁部)

口～底部まで復元可能な個体を参考に主なものをⅠ～Ⅳ類に分け、第 33 表に形状の分かる口縁・頸部のみ分類別の出土量を示した。平安山原 B 遺跡 (2015) の播鉢分類とほぼ同じであるが、本遺跡では稜等の形状を重視したためにⅠ類の中に平安山原 B 遺跡で分類したⅡ類の一部が含まれる。

Ⅰ類：口縁部の稜は 2 条でその直下は直線的な形状・内面に稜を持つ・櫛目の方向は直線的で間隔が有るもの

Ⅱ類：口縁部の稜は 1 条でその直下は直線的な形状・内面に稜を持つものと持たないものがある・櫛目の方向は直線的 or やや弧状で間隔が有るもの

Ⅲ類：逆「L」字状の外反を呈し、口～胴部は直線的な形状・櫛目の方向は直線的 or 弧状で間隔が有るもの

Ⅳ類：逆「L」字状の外反 (幅で 2.1cm 以上) を呈し、口～胴部は丸みを呈する形状・櫛目の方向は直線的 or 弧状で、間隔は無いもの

Ⅰ類は 44 点 (図 28～40) が得られ、稜の間が幅広いものを A (図 28～34)、稜の間が幅狭いものを B (図 35～40) に細分した。

器厚は両者とも薄手と厚手が見られ、前者は口唇の端部が舌状を呈し、幅が狭い。厚手は口唇の端部が角か丸で、幅がやや広くなる傾向が見られた。櫛目の方向はいずれも直線的で、櫛目間は間隔が開く。

A は自然軸が多く見られ、器色も暗茶褐色等が殆どで古手の可能性が考えられる。

Ⅱ類は 139 点と最も多く、図 41～56 に図示した。口縁部の稜と櫛目の方向の違いによって A：稜が明瞭・櫛目方向が直線的 (図 41～51)、B：稜がやや明瞭・櫛目方向がやや弧状 (図 52～56) に細分した。胴部はいずれも直線的で、浅い不明瞭なロクロ痕が同間隔で見られる。図 50・54 は櫛目の間隔が無く、口縁部の稜などの形状からⅡ類とした。図 55・56 は器色が明橙色を呈し質的に新しい感を受けるが、明瞭な稜などの特徴からⅡ類に含めた。

Ⅲ類は 73 点の出土で図 57 に 1 点を図示した。口唇上面の幅が 2.0cm と広く圏線も見られ、Ⅳ類とも捉えられるが、胴部が直線的であるなど全体的な特徴からⅢ類とした。尚、Ⅱ or Ⅲ類も 73 点が見られた。

Ⅳ類は 136 点の出土で、Ⅱ類とほぼ同数である。図 58～62 に図示し、いずれも口唇の上面幅が 2.1cm 以上と広く、圏線も見られる。図 58 の胴部はやや直線的であるが、口唇部の上面幅が 2.5cm と広いことからⅣ類に含めた。

(底部)

底部は 258 点が見られ、口縁部の分類に準じた。図 63～71 はⅠ or Ⅱ類、図 72～76 はⅢ類に分けられる。図 66 の外面は重ね焼き痕が明瞭、図 69 は砂質で焼成が甘く、混和材等から備前の影響を受けたと思われる³²⁾。図 70 は櫛目の間隔が無く、胴部が直線的等の特徴からⅡ類と思われる。

また、図 77～81 は脚付きの底部で復元個体が無く、口縁部が不明なためにⅤ類とした。形状から A：脚部・胴部とも直線的なもの (図 77～79)、B：脚部が膨らみ、胴部は直線的なもの (図 80・81) に分けられる。中には胴部が直線的である等、Ⅲ類に近いものもある。A・B と脚部には孔が見られ、図 77 にはいずれも貫通した 3 個の孔、図 80 は貫通した 1 個の孔、図 81 は未貫通の孔である。図 80 の脚部の外面に波状文、内面に複数の圏線が施される。尚、図 82 は僅かにニービを含み軟質ではあるが、今回はここで扱った。

6. 水鉢

水鉢は「ミジクブサー」と呼称されているものである。本遺跡では様々な大きさのものが見られ、口径が 12.4～25.2cm と幅広い。285 点 (2.1%) が出土し、図 83～110 に図示した。以下のようにⅠ～Ⅲ類に分類され、いずれにも有文、無文が見られる。水鉢の中ではⅠ類が最も多い。

Ⅰ類：口縁部は内彎し、直下はくびれ、口唇部が三角や玉縁状を呈するもの (図 83～98)

Ⅱ類：口縁部は内彎し、口唇部が丸・舌状を呈するもの (図 99～104)

Ⅲ類：小型でⅠ類から外れる薄手のもの (図 105～110)

Ⅰ類の中でマンガン軸が施されるものは薄手でやや小振りである。図 83・89 の口唇部には波状文が施される。

第 33 表 播鉢 (口縁・頸部) 分類

分類 地区	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ or Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	計	
HA ③	21	69		34	34	52	210
HA ②	15	68		30	42	83	247
HA ④	8	2		2	1	1	13
計	44	139	73	78	136	470	

Ⅱ類の中で無文は小振り、有文は大振りなものに多く見られる。図 104 は他と異なり胎土が軟質でやや砂質に近いが、形状からここで扱った。

Ⅲ類はⅠ類に類似するが、若干形状や特徴が異なる。図 105・107 はⅠ類と形状が似るが、頸部には横位の圏線が施される。後者は外面に茶褐色の釉薬が施され、沖繩産施釉陶器の可能性もある。図 106～110 は口唇・口縁部の形状が異なり、図 106・108 は口唇部が角で直状、図 109 は舌状で直状、図 110 は舌状で外反する。

7. 鉢

鉢は花鉢も含めて 628 点 (4.6%) が出土し、図 111～123 に図示した。以下、三つのタイプに分類される。

Ⅰ類：口縁部は逆「L」字状に外反し、胴部がやや丸みを持ちながら立ち上がる (図 111～114・120・121)

Ⅱ類：口縁部は逆「L」字状に外反し、胴部が直線的に立ち上がる (図 115～117・122・123)

Ⅲ類：口縁上部がやや内彎する (図 118・119)

Ⅰ類は鉢の中で最も多く得られ、大半が明るい赤褐色を呈する。図 120 は胴部で、外面に弧状の凸帯文と葉文を貼付していることから花鉢と思われる。図 121 の底部も形状からⅠ類とした。

Ⅱ類は外面が全体的に朱色の釉薬を施し、Ⅰ類などに比べて深みのある赤褐色を呈する。図 122・123 の底部には、外面の立ち上がり部に圏線と袂りが見られる。

Ⅲ類は 2 点を図示した。図 118 は胴部が丸みを呈し、図 119 は直線的である。いずれも口縁上端は平らで幅広い。

8. 香炉

香炉は 41 点 (0.3%) が出土し、図 124～127 に図示した。底部は脚付きが若干多いが、脚が無いものも見られる。火取と香炉は口縁部の形状が類似し、区別が困難なことから今回は両者をまとめて集計した。図 124～126 はいずれも径 2.0cm 前後、高さ 0.5cm 前後の円形の脚が 3 個貼付され、筒型を呈する。殆どが小型で、図 124 の外面には圏線が施されている。香炉は HA ㊟の祝女殿内で多く出土する。

9. 火炉

火炉は 260 点 (1.9%) が出土し、図 128～137 に図示した。いずれも「く」字状に屈曲させる形状で、口縁部が窓を持つもの (図 128～133) を A、口縁部が平坦なもの (図 134・135) を B とし、前者が多く出土する。A とした図 131 は薄手で、他はやや厚手の火炉である。B の図 134 は屈曲部に穿孔がある。図 136・137 の 2 点は火炉の底部と思われ、円形の脚が 3 個貼付されている。後者は外面の立ち上がり部に圏線が施される。

10. 瓶

瓶は 963 点 (7.1%) が出土し、図 138～152 に図示した。形状の違いによりⅠ～Ⅳ類に分類した。

Ⅰ類：最大径は底部近くにあり、ナデ肩を呈するほぼナス形タイプ (図 138～141)

Ⅱ類：最大径は胴部にあり、胴長でやや張るタイプ (図 142・144～146)

Ⅲ類：最大径は胴部にあり、ほぼ砲弾形を呈するタイプ (図 143)

Ⅳ類：最大径は胴部にあり、胴部が丸形を呈するタイプ (図 147～152)

Ⅰ類は沖繩で「1 合マス」、「2 合マス」等と通称されているもので、形状により A・B に分類した。A は胴下半部まで直線的なタイプで、図 138 に図示した。B は胴部がやや丸みを帯びるもので、図 139～141 に図示した。

Ⅱ類は 4 点を図示し、口縁部が図 142 の 1 点、底部は図 144～146 の 3 点である。図 142 は肩部に複数の圏線を施し、底部 3 点は内面のロクロ痕が顕著である。図 144・145 はやや丸みを帯び、図 146 はやや直に立ち上がる。

Ⅲ類は図 143 の 1 点を図示した。本資料は胴部の張りがⅡ類より弱いことからⅢ類とした。沖繩では「ターワカサー」もしくは「鬼の手」と称される。那覇市の壺屋古墓群 I (1992) では徳利のⅣ型に分類されている。

Ⅳ類は沖繩で「チュワカサー」もしくは「ヒラチビ」と呼ばれているものである。サイズが大小あり、図 147～152 に図示した。図 150 の外底は他と異なり、高台を持つ。図 152 は胎土が軟質だが、形状からここに含めた。瓶はⅡ類、Ⅳ類が多く出土する。

11. 壺

壺は 5397 点 (39.6%) と最も多く得られ、図 24・25、153～185 に特徴的なものを図示した。口縁・頸部は様々な形状や大小のサイズが見られ、以下のようにⅠ～Ⅳ類に分類した。

Ⅰ類：口縁部は直状を呈し、肩部から胴部にかけて張り出すタイプで、サイズは大小あり (図 153～167)

Ⅱ類：口縁部は外反し、肩部から胴部にかけて張り出すタイプで、サイズは大小あり (図 168～177)

Ⅲ類：無頸の口縁部で、肩部から胴部にかけて張り出しが大きいタイプ (図 178)

Ⅳ類：無頸の口縁部で、内彎するタイプ（図 179）

Ⅰ類は口唇部の形状により A・B に分類した。A は口唇部の断面形が玉縁状を呈するもので、図 153～161 に図示した。サイズは小型が大半である。図 160 は口唇部全体が丸みを呈し、数条の圏線が施される。外面にも菊花文・三重の円形文が見られる。焼成が良く堅致である。B は口唇部の断面形が四角で逆「L」字状を呈するもので、図 162～167 に図示した。サイズは大小あり、大（図 166・167）は口唇部の側面に圏線が施される。図 166 は壺屋焼で、肩部には窯印が見られる。本資料の窯印は「壺屋の判と屋号・家名一覧表」（内間・2002）によれば「新屋敷」の屋号である。

Ⅱ類も口唇部の形状により A～C に分類した。A は口唇部の断面形が蒲鉾状を呈し、図 168～172 に図示した。図 168 は小型で、口唇部が余り張り出さない。17C 後半頃であろうか³⁷。図 169 は間延びしたような大きな肥厚部が見られる。図 172 は頸胴部であるが、全体的な特徴からⅡ類とした。B は口唇部の断面形が四角で、図 173 に図示した 1 点である。短頸で、肩部からの張り出しが強い。C は口唇部の断面形が三角や舌状を呈するもので、図 174～177 に図示した。図 174・175 は肩部に圏線が施され、前者には窯印が施される。図 176 は外面と内面上部にマンガン釉が施され、器色は茶褐色となる。図 177 は前二者より胴部の張りが弱である。

Ⅲ類は図 178 の 1 点を図示した。口唇部はやや玉縁状を呈し、肩部から胴部にかけての張り出しが大きい。

Ⅳ類は図 179 の 1 点を図示した。口縁部はやや内彎し、胴部の張りは弱い。壺で最も多いものはⅡ類で、次いでⅠ類と続き、Ⅲ・Ⅳ類は僅か数点の出土である。

蓋は 4 点が得られ、図 24・25 に 2 点を図示した。前者は円形の蓋上にリボン状の撮みを貼付し、やや小型の壺の蓋と思われ、後者は撮みが無く、大型の壺の蓋が想定される。

図 180～185 の 6 点は壺の胴部、底部である。図 180 は胴部で、内面に粘土の積み痕が明瞭に残る。灰褐色を呈しており、焼成が甘いのであろうか³⁸。図 181～185 は壺の底部で、図 184 は砂質で内面にロクロ痕が明瞭に残る。他の底部と胎土や混和材が異なるが、今回はここに含めた。このような軟質系の土器は壺以外にも得られ、本来、「荒焼（アラヤチ）」と称される無釉の焼き締め陶器を基準とした沖縄産無釉陶器の範疇からは外れる。これも沖縄産無釉陶器の中で扱うのか、今後の課題としたい。

12. 壺

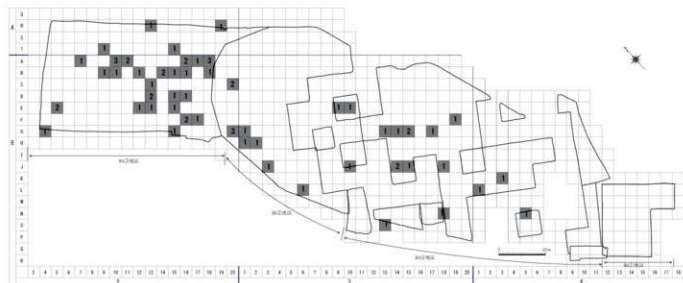
壺は 752 点（5.5%）が得られ、同様な器種が多く見られることから代表的な 3 点を図示した。図 186 は逆「L」字状に張り出した口縁部を持ち、肩部から胴部にかけて丸みを呈する。頸部には圏線と円形の浮き文が見られる。図 187 は口縁部の内側に「く」字状に屈曲し、明瞭な稜を持つ。図 26 は厨子壺の蓋で、二段目の平らな部分に獅子顔の加飾が見られる。周囲が打割され、二次加工の可能性も考えられる。

また、壺・甕のいずれかの器種と思われるものが 2806 点出土した。全体の出土量の 20.6% も占め、貯蔵用である壺、甕の出土量と合わせると 65.7% の割合となり、沖縄産無釉陶器の主体であることがわかる。

〈註文〉

註 1：読谷村立歴史民俗資料館館長 仲宗根求氏のご厚意による

註 2：大橋先生のご教示



第 65 図 沖縄産無釉陶器（碗）平面分布

第36表-1 沖縄産無釉陶器 観察一覧

(法量単位: cm)

調査年度	図号	器種	分類	部位	口径 高径	底径 底厚	形状・特徴 (口・胴・底・高台・蓋部・文様)	胎色 (釉)	素地・焼成・混和料	期区・年代・器 遺跡・台帳(取)番号	
2007年度・調査区42	1	2	I	口	17.0	6.4	逆「h」字状外反・脚・底面高の・立ち上がり緩やか 高台0.0分・信付幅0.7	内外-明茶褐色 (内-7.2)輪	茶褐色・中々差 (内-5.0) 石炭 (細・少)	HA③ B14 II S - 20台 1017	
					14.2	—	逆「h」字状外反・口内舌 脚・底面高の・高台 (0.2-0.6)	内外-暗茶褐色 (内-7.2)輪	茶褐色・良 石炭・赤鉄 (粗・多)	HA③ D13 II 台 3247	
				—	8.0	0.7	立ち上がり緩やか・高台 (0.6)・信付幅 (0.5)	内外-暗茶褐色 (内-7.2)輪	竹ノ灰・良 (陶土・泥・暗茶)	HA④ E9 III SP749台 3773 HA④ J10 I 台 2532	
				—	6.2	0.5	立ち上がり緩やか・高台 (0.5)・信付幅 (0.6)	内外-暗茶褐色 (内-7.2)輪	暗茶・暗茶褐色・良 石炭 (細・中)	HA④ B15 I S - 43台 2648	
				—	7.0	0.6	立ち上がり緩やか・高台 (0.3)・信付幅 (0.4) 脚・脚縁2条 (幅0.1)・薄手0.3-0.4	外-暗茶褐色 内-灰褐色	楕状 (白・茶褐色)・良 赤・黒鉄 (粗・多)	HA④ F19 II 台 2886	
				—	6.8	0.4	立ち上がり緩やか・高台 (0.5)・信付幅 (0.4)	内外-茶褐色 内-茶褐色	茶褐色・良 赤鉄 (粗・中)	HA② J 3 II 名器庫 台 1230	
				—	6.8	0.7	立ち上がり緩やか・高台 (0.5)・信付幅 (0.6)	内外-暗茶褐色	暗茶褐色・良 石炭 (細・少)	HA② C20 II 上 台 573	
				—	7.2	0.6	立ち上がり緩やか・高台 (0.6)・信付幅 (0.6)	内外-暗茶褐色	楕状 (白・暗茶褐色)・良 赤・黒鉄 (粗・多)	HA③ F16 II 台 1892	
				—	12.2	5.2	逆「h」字状外反 (体より前)・脚折れ (脚縁らむ) 高台0.5分・信付幅0.7分・内底盛り上がる	外-灰褐色 内-赤褐色	茶褐色	HA③ A16 II 台 533 HA③ A18 II S - 12台 559	
				—	7.8	0.7	脚折れ (脚縁らむ)・高台 (0.7)・信付幅 (0.4)	外-黒茶褐色 内-暗茶褐色	茶褐色・空開有り 焼成中々差 (気泡)	HA③ A16 II 台 2879	
				—	5.8	1.0	脚折れ (脚縁らむ)・高台 (0.6)・信付幅 (0.7)	内外-暗茶褐色 (内-7.2)輪	灰褐色・良・石炭 (粗・中)	HA③ E5 I 台 1322	
				—	10.4	4.4	小皿・逆「h」字状・口内舌 脚下面縁高 (例分)・底一平	外-明茶褐色 内-黄茶褐色	赤褐色・良	HA② T4 II 脚取台 362	
				—	10.6	4.4	小皿 (灯明・内脚縁)・逆「h」字状 口内舌中舌・底一平・上付底	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA② E1 II 脚取台 1024	
				—	10.4	6.2	1.1	小皿 (灯明・内外脚)・逆「h」字状・口内舌 脚下面縁高 (例分)・底一平	内外-暗褐色 (口内舌・灰輪)	褐色 (中々砂)・良	HA③ T14 II S - 11台 976
				—	10.5	5.4	0.6	小皿 (灯明・内底脚)・逆「h」字状・口内舌 脚下面縁高 (例分)・底一平・上付底	外-茶褐色 内-暗茶褐色	茶褐色・良 赤鉄・石炭 (粗・多)	HA③ E9 II S - 39台 1075 HA③ E9 II 台 1371
				—	9.8	6.8	0.3	小皿 (灯明・内外脚)・逆「h」字状・口内舌 脚下面縁高 (例分)・底一平・脚	内外-灰褐色	竹ノ灰 (灰・茶・灰)・良 赤鉄 (中・中)	HA④ G13 II SD42台 3182 HA④ F13-14 II SD42台 3194
				—	—	4.4	0.6	小皿 (脚縁らむ)・底一平・立ち上がり前 一部湾曲	外-暗褐色 内-褐色	褐色 (中々砂質)・良 赤鉄 (中・中)	HA② E3 II 上 台 1500
				—	21.2	14.4	0.5	大皿・逆「h」字状・口内舌・中々差 高台0.8分・信付幅0.6	外-黒茶 (7.2)輪 内-赤褐色	茶褐色・良 赤鉄・石炭 (粗・中)	HA② E1 II 脚取台 1283
2007年度・調査区43	19	—	口	7.9	—	口縁高 (脚取らむ)・口内丸・脚縁らみ差 脚縁 (高0.7・幅0.2)	外-黄褐色 内-灰褐色	灰褐色・良・竹ノ灰 (灰 灰・黄鉄)	HA② T1 II 台 637		
				8.9	—	口内丸・口縁高・脚縁らむ・注口有 (半欠損) 受け無し	外-赤褐色 内-赤褐色	茶褐色 (砂)・良 赤鉄・石炭 (粗・中)	HA② A2 II 脚取台 446		
				—	—	把手のみ・内凹・外-気泡	内外-暗茶褐色	茶褐色・良	HA④ G13 III SP890台 3862		
				—	—	脚平・上付底・幅み中々差 脚縁 (高0.7・幅0.2)	外-茶褐色 内-赤褐色	赤褐色 (中々砂)・良 石炭・赤鉄 (粗・多)	HA② S4 II 脚取台 960		
				—	—	脚平・幅み脚縁・脚平 (幅0.3・高0.7) 上付底に脚縁3条 (幅0.1)	外-暗茶褐色 (7.2)輪 内-灰褐色	茶褐色・良 石炭・赤鉄 (粗・中)	HA③ D10 I 台 1308		
				—	—	内凹状・中央にリボン状の幅み・両脚中々差 小脚の差7・無文	外-黄茶褐色 内-茶褐色	暗茶褐色・硬 石炭・赤鉄 (粗・多)	HA③ A15 II 台 3108		
2007年度・調査区44	24	—	蓋	8.0	—	—	—	—	—		
				1.8	—	—	—	—	—		
2007年度・調査区45	26	—	蓋	13.2	7.0	脚平・脚平 (幅0.7・高3.4)・幅み無し 大脚縁 (高0.7・幅0.2)	内外-赤褐色 内-赤褐色	赤褐色 (外面平分之 脚縁高・底)	HA② B20 II 脚取台 837		
				—	—	—	—	—	—		
2017年度・調査区46	83	—	I	口	—	14.0	—	—	—	—	
					12.4	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅0.8)・直下くびれ 脚縁中心・文様・外面に波状文 (瓦)	外-暗茶褐色 (7.2)輪 内-暗茶褐色 (7.2)輪	楕状 (白・灰褐色)・良	HA③ B14 II S.20 台 847	
				14.6	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅1.1)・直下くびれ 脚縁中心・文様・外面に波状文 (瓦)	外-暗茶褐色 (7.2)輪 内-茶褐色	茶褐色・中々差 (気泡)	HA③ B15 I S - 43台 2648		
				13.2	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅0.8)・直下くびれ 脚縁中心・無文	外-暗茶褐色 (7.2)輪 内-茶褐色	茶褐色・良	HA③ C13 II 台 3211		
				17.4	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅1.1)・直下くびれ 脚縁中心・無文	内外-茶褐色	茶褐色・良	HA② B3 III SK058台 2262		
				16.0	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅1.3)・直下くびれ 脚縁中心・文様・外面に波状文 (瓦)	外-明茶褐色 内-明茶褐色	暗茶褐色・良	HA② B4 II 三益台 2805		
				16.9	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅0.8)・直下くびれ 脚縁中心・無文	外-暗茶・黄褐色 (泥輪) 内-茶褐色	茶褐色・良	HA③ C14 II 台 2416		
				19.2	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅0.8)・直下くびれ 脚縁中心・文様・外面に波状文 (瓦)	外-暗茶褐色 (7.2)輪 内-暗茶褐色 (7.2)輪	楕状 (白・黄褐色)・良 赤・白鉄 (粗・中)	HA③ J18 II 台 2572		
				18.0	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅1.7)・直下くびれ 脚縁中心・文様・外面に波状文 (瓦)	外-暗茶褐色 内-茶褐色	茶褐色・良	HA② B1 II 脚取台 1927		
				23.0	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅1.7)・直下くびれ 脚縁中心・文様・外面に波状文 (瓦)	内外-明茶褐色	暗茶褐色・良	HA③ G15 II S - 3台 1465		
				17.4	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅1.5)・直下くびれ 脚縁中心・文様・外面に波状文 (瓦)	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA② B19 II 脚取台 847		
				14.1	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅1.1) 脚縁中心・文様・外面に波状文 (瓦)	外-暗茶褐色 内-灰褐色	茶褐色・良	HA③ B19 I 台 2251		
				16.6	—	内溝・口内三角 (上面平ら・幅1.2)・直下くびれ 脚縁中心・文様・外面に波状文 (瓦)	内外-暗褐色	暗褐色・良	HA② G2 I 台 1971		

第III章
5

第36表-2 沖繩産無釉陶器 観察一覧

(法量単位: cm)

年代別	調査号	器種	分類	部位	口径 高さ	底径 高さ	形状・特徴 (口・底・高台・取手・文様)	器色 (釉)	素地・焼成・裝飾材	地区・年代・番 遺跡・発掘(取)番号		
第71期 縄文後編	95	I	口	—	22.4	—	内筒・口唇上縁(上面平ら・幅1.7)・直下くびれ 縁から右・文様-外面に流状文(輪で不明)	外-比色褐色(泥輪) 内-赤褐色	紫褐色・良	HA≒B10 B 祝殿台 1951		
	96			—	23.6	—	内筒・口唇上縁(上面平ら・幅1.9)・直下くびれ 口縁上部から右・文様-外面に流状文(泥)	外-暗赤褐色 内-赤褐色	紫褐色・良	HA≒A6 B 高台 1909		
	97			口-底	18.0 7.4	8.6 0.8	内筒・口唇上縁(上面平ら・幅1.3)・直下くびれ 口縁上部から右・斜下流筒状・文様-外面に 流状文(泥)・外-一色(赤褐色)	外-赤褐色 内-赤褐色	赤褐色・良	HA≒C4 B 祝殿 戸1 1台 627		
	98			—	24.6	—	内筒・口唇上縁(上面平ら・幅1.7)・直下くびれ 口縁上部から右・文様-外面に流状文(泥)	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA≒A6 B 石23 台 1379		
	99			II	口	—	15.2	—	内筒・口唇丸・縁部から右・無文	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA≒K6 B 三貝台 1833
	100					—	17.0	—	内筒・口唇丸・縁部から右・無文	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA≒A8 Ⅱ 5-361 台 2762
	101					—	15.6	—	内筒・口唇丸・口縁上部に最大径・無文	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA≒A5 1 5-113 台 838
	102					—	22.0	—	内筒・口唇丸・口縁上部に最大径・文様-外面に 縞線2条(その内側2文・縦中か浪状1条)	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA≒D1 B 祝殿 台 1135
	103					口-底	25.2 14.9	—	内筒・口唇丸・口縁上部に最大径 文様-外面に縞線・流状	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA≒D1 B 不埒 台 830 HA≒E1 B 祝殿 台 1837
	104			—	14.0	—	中や内筒(径5.5)・口唇丸・文様-外面に0.5幅の 縞線2条・口縁上部に縞線1条	外-縞線縞色(黄7黒輪) 内-赤褐色	褐色(砂)・中や良 石赤(黒・多)	HA≒F4 B 台 1266		
	105			—	13.4	—	小型・内筒・口唇三角(上面平ら・幅0.6)・直下くびれ 縁部から右・文様-外面に縞線1条	外-縞線縞色(黄7黒輪) 内-赤褐色	紫褐色・良	HA≒T6 Ⅱ 5-206 台 2258		
106	—	12.0	—	小型・口唇直(上面平ら・幅0.5)・直下くびれ 縁部から右・無文	外-内上暗赤褐色 内-赤褐色	紫褐色・良	HA≒J14 Ⅱ 台 2153					
107	III	口	—	14.2	—	小型・内筒・口唇三角(上面平ら・幅1.1)・直下くびれ 縁部から右・文様-外面に縞線3条	外-赤褐色(茶輪) 内-赤褐色	層状(白・茶褐色)・良 赤・白粉・石黒(粗・少)	HA≒B14 B Ⅱ 5-20 台 847 HA≒B14 B 台 2823			
108			—	10.4	—	小型・口唇中や直(上面平ら・幅0.4)・直下くびれ 縁部から右・無文	内外-暗赤褐色	紫褐色・良	HA≒F19 B 141 台 699			
109			—	10.6	—	小型・口唇外反・口唇中や直・直下くびれ 縁部から右・無文	内外-暗赤褐色	暗赤褐色・良	HA≒K6 B 三貝台 1567			
110			—	12.6	—	小型・口唇外反・口唇中や直・直下くびれ 縁部から右・無文	外-赤褐色 内-暗赤褐色	暗赤褐色・良	HA≒A20 B 祝殿 台 1300			
111			—	34.0	—	器 Ⅱ) 字状外反・角(2.4×0.8)・胴中や丸み 文様-縞線(口唇上縁)	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA≒D1 B 祝殿 不埒 台 262, 1134			
第72期 縄文後編	112	I	口	—	24.0	—	器Ⅱ) 字状外反・角(1.2×0.7)・胴部中や丸み 文様-縞線(口唇上縁)・中筋縞	内外-赤褐色	紫褐色・良	HA≒D1 B 祝殿 台 355		
	113			—	30.6	—	器Ⅱ) 字状外反・丸(3.0×0.9)・胴部中や丸み 文様-縞線(口唇上縁)	内外-赤褐色	褐色・中や良 赤(粗・多)	HA≒F15 Ⅱ 3-B 台 534,630,1463 HA≒F17-10 B 台 1444		
	114			—	26.8	—	器Ⅱ) 字状外反・角(2.4×0.9)・胴部中や丸み 文様-縞線(口唇上縁)	内外-褐色	褐色(黄鉄・二十七)・黒 赤鉄(中・多)	HA≒T14 B Ⅱ 5-40 台 2500 HA≒T15 B Ⅱ 5-40 台 2480,2501		
	115			—	26.2	—	器Ⅱ) 字状外反・角(1.9×1.3)・胴部直筒的 文様-縞線(口唇上縁)	内外-赤褐色	紫褐色・良	HA≒S3 B 祝殿 台 959,938		
	116			II	口	—	21.2	—	器Ⅱ) 字状外反・角(1.9×0.7)・胴部直筒的 文様-縞線(口唇上縁)	外-暗赤褐色 内-赤褐色	紫褐色・良	HA≒B2 1 台 2548
	117					—	—	—	器Ⅱ) 字状外反・胴部直筒的 最大径径(22.4)・内-赤褐色(判定不明)	内外-赤褐色 (外・内上赤輪)	赤褐色・良	HA≒G14 B 台 1316 HA≒F14 IV 台 3216
	118			III	口	—	20.0	—	中や内筒・口唇平ら(幅2.2) 口唇・口縁外反(高台付)	内外-赤褐色	褐色(砂・中)・良 赤鉄(粗・少)	HA≒C9 B 台 1773
	119					—	43.0	—	口唇内筒内筒・口唇平ら(幅2.1) 文様-外面に縞線・縞線2文	内外-褐色	褐色・良	HA≒B4 B 祝殿 台 1340
	120					—	—	—	器Ⅱ) 外反・最大径径(24.6)・文様-外面に幅0.7の 縞線2文・外反・最大径径	外-赤褐色 内-暗赤褐色	紫褐色・良	HA≒D4 B 祝殿 不埒 台 831 HA≒E2 1 祝殿 台 1622
	121			II	底	—	25.2	—	平底・立ち上がり直・縁部丸み 器Ⅱ) 一併・1.5	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA≒G19 B 石 10 台 3073
	122					—	18.0	—	外底上縁反・胴部直筒的 0.9・文様-外面に縞線(器Ⅱ)・泡押さえ部同	外-赤褐色(輪) 内-明赤褐色	暗褐色・良	HA≒D15+16 B Ⅱ 5-4 台 1570,1603
123	—	14.4	—			外底上縁反・胴部直筒的 0.8・文様-外面に縞線(器Ⅱ)・泡押さえ部同	外-赤褐色(輪) 内-明赤褐色	明赤褐色・良	HA≒G13 B 台 1550			
124	IV	口-底	—			8.6 6.2	7.4 0.7	器Ⅱ) 内筒内筒・中や内筒・口唇平ら 底一線(内径・径2.1・高0.7)	内外-赤褐色	紫褐色・良 赤鉄(粗・多)	HA≒B9 B Ⅱ 5-65 台 1060 HA≒T12 B Ⅱ 5-7 台 1328	
125			—	9.2 7.1	7.2 0.4	器Ⅱ) 口唇平ら・底一線(内径・径1.7・高0.6)	内外-赤褐色	紫褐色・良 赤鉄(粗・多)	HA≒C20・B20 B 上祝殿 台 571,2555 HA≒C2 1 祝殿 台 2362			
126			—	10.4 8.4	10.0 0.8	器Ⅱ) 口唇平ら・底一線(内径・径1.7・高0.5)	外-赤褐色 内-灰褐色	砂状(青灰・茶・青灰) 良	HA≒C4 B 祝殿 台 2455 HA≒S4 B 祝殿 台 941			
127			—	6.8 1.0	0.6 0.0	器Ⅱ) 平底・中や上縁反・器Ⅱ) 立ち上がりは削り	内外-赤褐色	赤褐色・良	HA≒E9 B 台 1313			
第73期 縄文後編	128	A	口-底	—	12.5	0.9	器Ⅱ) 「 \subset 」字状曲・口唇平ら(三意・尖)・外形把手 の孔(上・下)・底一線(内径)・文様-上下に縞線	内外-紫褐色	砂状(青灰・暗紫・青灰) 良	HA≒D1 B 祝殿 不埒 台 1914		
	129			—	—	—	器Ⅱ) 「 \subset 」字状曲・口唇平ら(三意・尖) 外形把手の孔(上・下)・小孔(外-内径0.9)	外-暗赤褐色(7.5輪) 内-茶褐色(上7.5輪)	暗褐色・良	HA≒C13 B 台 3211		
	130			—	—	—	器Ⅱ) 「 \subset 」字状曲・口唇平ら(三意・尖)・外形把手 (穿孔・縁部で全部不明)・文様-器Ⅱ) 上に縞線	内外-赤褐色	紫褐色・良	HA≒B19 B 祝殿 台 2427		
	131			—	—	—	器Ⅱ) 「 \subset 」字状曲・口唇平ら(三意・尖)	内外-赤褐色	紫褐色・良	HA≒A17 B Ⅱ 5-12 台 434		
	132			—	—	—	器Ⅱ) 「 \subset 」字状曲・口唇丸(三意・幅有り) 文様-縞線1条	内外-赤褐色	紫褐色・良 赤鉄(粗・多)	HA≒T20 B 祝殿 台 558		

第36表-3 沖繩産無釉陶器 観察一覧

(法量単位: cm)

2020年度	調査号	器種	分類	部位	口径 高さ	底径 底厚	形状・特徴 (口・胴・底・高・蓋厚・文様)	器色 (釉)	素地・焼成・混和材	地区・年代・層 遺跡・台帳(表)番号		
第74年度 調査49	133	大鉢	A	口	15.2	—	肩帯「く」字状縁部・口唇丸(三股・船形有) 文様-側縁(1線・高曲部)・外面の斜線帯印?	内外-暗茶褐色	茶褐色・白	HA③ A9 Ⅱ S-521 台3058		
	口			12.2	—	肩帯「く」字状縁部・口唇平・変無し・台形把手の孔(上・下)・(1)孔(外・内)・文様-側縁	内外-茶褐色	茶褐色・白	HA② B19 Ⅱ R08 台2425			
	口			14.3	—	肩帯「く」字状縁部・口唇平・変無し・台形把手の孔(上・下)・文様-側縁	内外-茶褐色 内-赤褐色	茶褐色・白 赤紅(粗・多)	HA③ E9 Ⅱ S-39 台2476			
	136		—	底	—	12.4	—	立ち上がり直で外・底-二足(内角・径2.8・高0.9)	内外-暗褐色 (内-0.7・2輪)	赭状(白・暗褐色)・白	HA③ B15 Ⅱ 台2521	
	137		—	底	—	13.4 0.8	—	立ち上がり直で外・底-二足(内角・径2.0・高0.0)・外・内面下部に側縁4条(幅0.15)	内外-茶褐色	茶褐色(細輪)・白	HA② C19 Ⅱ 上面台台575	
	138		I A	底-皿	口	3.3 (側径)	8.5 1.0	口唇縁部・外唇・底迄まで直線の文様-側部に1条の側縁	外-黄褐色(黄輪) 内-褐色	褐色・白	HA② D6 Ⅱ 高台2315	
	口				4.0	—	外反・長唇・外唇・側部らむ	内外-暗茶褐色	茶褐色・白	HA② G1 Ⅱ 皿形台1057		
	140		I B	皿-製	口	4.0 (側径)	—	長唇・外唇・側部らむ	外-茶褐色(茶輪) 内-明茶褐色	茶褐色・白	HA② D1 Ⅱ R08 台355 HA② E1 Ⅱ R08 台1294	
	141				口	5.0 (側径)	—	長唇・外唇・側部らむ 腹内縁部に側縁2条	外-暗茶褐色 内-茶褐色	赭状(白・茶褐色) 白	HA③ R12 Ⅱ S-7 台979	
	142		II	口-製	口	6.2	—	外反・頭窄まる・側部(寸製) 文様-側部に側縁4条	外-茶褐色 内-暗褐色	茶褐色・白	HA③ E9 Ⅱ 台1302 HA③ F9 Ⅱ 台1313	
	143				口	5.0	—	「外側」・外反・頭窄まる・側部(寸製) 文様-側部に側縁3条	内外-暗茶褐色	暗茶褐色・白	HA② F3 Ⅱ 高底座台1674	
	144		II	底	口	—	8.4	1.0	外底や上付底・立ち上がり直・側部の張り方(最大側径15.0)・内-0.75幅側唇	内-暗茶褐色 内-暗褐色	茶褐色・白	HA③ A12 Ⅱ S-7 台990
	145				口	—	6.4 0.5	—	外底や上付底・蓋・立ち上がり直・側部の張り方(最大側径11.0)	外-黄褐色(黄輪) 内-黄褐色	茶褐色・黒(気泡)	HA③ E9 Ⅱ S-39 台1057 HA③ F9 Ⅱ 台1313
146	口	—			7.3	1.0	外底や上付底・立ち上がり直・側部の張り方(最大側径12.0)・内-0.75幅側唇	内-暗茶褐色 内-暗褐色	茶褐色・白	HA② E20 Ⅱ R08 台598		
147	III	皿-底	口	3.6 (側径)	1.2	外反・頭窄まる・側部らむ(最大側径16.0) 内-0.7幅側唇	外-黄褐色(黄輪) 内-茶褐色	茶褐色・白	HA② C2 Ⅱ 台1962 B Ⅱ 台2363 HA② D7 Ⅱ 井戸2 台626			
148			口	—	—	頭窄まる・側部らむ(最大側径16.0) 内-0.7幅側唇	内外-黄褐色 内-暗茶褐色	白・赭(青灰・茶・青灰) 白	HA③ B16 Ⅱ 台2994			
149	IV	底	口	—	11.2 0.9	—	中央や上付底・立ち上がり直・側部らむ(最大側径15.0)・内-0.75幅側唇	外-黄褐色(黄輪) 内-暗褐色	茶褐色・白	HA③ E5 Ⅱ 台2085		
150			口	—	8.2 0.9	—	高台(内角・高0.3・底面有り)・側部らむ(最大側径15.0)・文様-外面の底迄側縁1条・0.75幅側唇	内外-茶褐色	茶褐色・白	HA② 台E1 Ⅱ 視鏡 台1283		
151	V	底	口	—	5.8 0.5	—	小型・外底・立ち上がり直・側部らむ(最大側径9.0)	外-暗茶褐色 内-黄褐色	茶褐色・白	HA④ Ⅰ 台4603 HA④ Ⅱ 18 Ⅱ 台2499		
152			口	—	10.4 1.4	—	小型・平底(上付底)・側部強張る・0.75幅	内外-褐色	黄褐色(砂・2・7・2)・中	HA② D1 Ⅱ 平底台1136		
153	VI	底	口	—	8.5	—	小型・直状・口唇玉縁・側部強張る	内外-明茶褐色	白・赭(青灰・茶・青灰) 中央部(気泡)	HA③ B16 Ⅱ 台2995		
154			口	—	10.2	—	小型・直状・口唇玉縁・側部強張る	内外-茶褐色	茶褐色・中央部(気泡)	HA③ T5 Ⅱ 台1767		
155			口	—	9.2	—	小型・直状・口唇玉縁・側部強張る	外-黄褐色(白輪7.7寸有り) 内-暗褐色	灰褐色・中央部(気泡)	HA② T7 Ⅱ 高台4254		
156			口	—	11.6	—	中型・直状・口唇玉縁・側部強張る	内外-暗茶褐色 口唇玉縁7寸有り	白・赭(青灰・茶・青灰) 中央部(気泡)	HA② E4 Ⅱ 7寸台1457		
157			I A	口	口	—	8.6	—	小型・直状・口唇玉縁・側部強張る	内外-明茶褐色	白・赭(青灰・茶・青灰) 中央部(気泡)	HA② T5 Ⅱ 高台2591 HA② S5 Ⅱ 7寸台1555
158					口	—	10.3	—	小型・直状・口唇玉縁(前)・側部強張る 文様-外面に波状文	内外-暗茶褐色	暗茶褐色・白 赤紅(粗・多)	HA③ B16 Ⅱ 台2995
159			I B	口	口	—	—	小型・直状・口唇玉縁(前)・側部強張る・薄手	外-暗褐色(0.7寸輪) 内-暗茶褐色	茶褐色・白	HA③ A13 Ⅱ 台2705	
160					口	—	—	小型・直状・口唇丸(大)・側部強張る 文様-外面に内文・花文・側縁4条	内外-暗茶褐色 白輪(7寸有り)	赭状(白・暗褐色)・白 石灰(粗・多)	HA③ A13 Ⅱ 台2489 HA③ T14 Ⅱ 台2582	
161			VII	底	口	—	13.4	—	小型・頭窄まる・側部張り出す	外-暗茶褐色(茶輪) 内-灰茶褐色	赭状(白・青灰色)・白 石灰(中)	HA② B3 Ⅱ SK039 台2265
162					口	—	9.4	—	小型・直状・口唇直「L」字(内角)・側部不明	内外-茶褐色	茶褐色・白	HA② ② Ⅱ 75 Ⅱ 台2503
163	口	—			10.4	—	中型・直状・口唇直「L」字(内角)・側部不明	外-明茶褐色 内-暗茶褐色	茶褐色・白	HA② J3 Ⅱ 7寸台2416		
164	口	—			10.4	—	中型・直状・口唇直「L」字(内角)・側部不明	外-明茶褐色 内-暗茶褐色	茶褐色・白	HA② J3 Ⅱ 7寸台2416		
165	口	—			16.4	—	大型・直状・口唇直「L」字(内角)・側部不明	内外-赤褐色	赤褐色・白	HA② E1 Ⅱ 視鏡 台1837		
166	口	—			17.7	—	口唇直・口唇(端部有・側縁1)・側部強張る 斜部-側縁3・深印(心)・大型	外-淡赤褐色 内-赤褐色	赤茶褐色・白	HA③ C7 Ⅱ Ⅱ S-678 台719		
167	口	—			17.2	—	大型・直状・口唇直「L」字(内角)・側部強張る 文様-口唇部に側縁・斜部に2	外-暗茶褐色 内-赤褐色	茶褐色・白	HA② E10 Ⅱ R08 台611		
168	II A	口			口	—	13.0	—	中型・外反・口唇玉縁・口唇内面らみ 腹中央窄まる・側部強張る	内外-明褐色	灰褐色・白	HA③ C19 Ⅱ 台432
169			口	—	15.8	—	大型・外反・口唇玉縁(長)・側部強張る 腹中央窄まる・薄手(0.7)	外-茶褐色 内-赤褐色	茶褐色・白	HA② B6 Ⅱ 高台1751		
170			口	—	15.6	—	大型・外反・口唇玉縁(大)・側部強張る 腹中央窄まる・薄手(1.2)	内外-茶褐色	茶褐色・白	HA④ E14 Ⅱ 台3188 HA④ F14 Ⅱ SK42 台3186		
171	口	—	25.0	—	大型・外反・口唇玉縁(大)・側部強張る 薄手(1.7)	内外-灰茶褐色	茶褐色・白	HA③ A15 Ⅱ S-29 台1981				

第III章
5

第 36 表-4 沖繩産無釉陶器 觀察一覽

(質量單位: cm)

調査年度	調査号	器種	分類	部位	口徑 器高	底径 底厚	形状・特徴 (口・胴・底・高台・器厚・文様)	器色 (釉)	素地・施彩・図柄材	器名・年代・層位 遺跡・台帳(表)番号	
第74回・ 調査90	172	甕	II A	胴	—	—	大型・外反、口唇凸出・胴張り・胴張り 内・粘土粒のみ・甲斐編	内外一帯茶褐色	麻状(白・茶褐色色)・良	HA ㉔ I18 Ⅱ 台 2499 HA ㉔ I18 Ⅱ 台 2573	
	173			II B	口	19.0	—	大型・外反、口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出	外一帯茶褐色 内一帯褐色	茶褐色・良	HA ㉔ E4 Ⅱ 台 2473
	174			II C	口・底	13.1 82.5	18.6 1.7	大型・外反、口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出	内外一帯茶褐色	茶褐色・良	HA ㉔ S4 Ⅱ 台帳 91
	175				口・胴	8.8	—	中型・外反、口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出	外一帯茶褐色 内一帯褐色	茶褐色・良	HA ㉔ D1 Ⅱ 表帳 台 1468
	176			II C	口・胴	12.6	—	大型・外反、口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出	外一帯茶褐色(ツヤノ輪) 内一帯褐色	赤褐色・良	HA ㉔ D1、D2、I18 Ⅱ 台帳 351、355、391、1374、1025、D1 Ⅱ 台帳 830
	177				口	10.6	—	中型・外反、口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出	外一帯茶褐色(ツヤノ輪) 内一帯褐色(上ツヤノ輪)	赤褐色・良	HA ㉔ B19、D1、C19 Ⅱ 表帳 台 845 HA ㉔ B6 Ⅱ 高台 1195 HA ㉔ B6 Ⅱ 台帳 904
	178			IV	口	15.6	—	大型・無面、内唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出	内外一帯褐色	赤褐色・良	HA ㉔ A18 Ⅱ S—12 台 435 HA ㉔ A17 Ⅱ 台 3114
	179				口	—	—	中型・無面、内唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出・口唇凸出	外一帯褐色(丸輪) 内一帯褐色	茶褐色・良 赤粒(粗・多)	HA ㉔ B15 Ⅱ S—43 台 2603
	180			—	胴	—	—	内・粘土層付面卵形	内外一帯褐色 内一帯褐色	茶褐色・良	HA ㉔ B4 P15 Ⅱ 0013S2 台 137
	181				底	—	10.4 1.0	平底・胴部直線的に開く・軟質・970度	外一帯褐色 内一帯褐色	灰紫褐色・中	HA ㉔ E18 Ⅱ 台 1888
	182			—	底	—	16.4 1.0	平底・立ち上がり直・胴部直線的(中空開く)	外一帯褐色(丸輪) 内一帯褐色(丸輪)	暗茶褐色・良	HA ㉔ B4015 Ⅱ 0006SL 取 6
	183				底	—	14.0 1.3	平底・立ち上がり直・胴部直線的	外一帯褐色 内一帯褐色	暗灰褐色・良	HA ㉔ A15 Ⅱ S—29 台 1981
	184			—	底	—	11.0 1.3	平(上ツヤ)・立ち上がり直・軟質・970度	内外一帯褐色	赤褐色(砂)・中 灰黄(中・多)	HA ㉔ D4 Ⅱ 不建台 1917
	185				底	—	6.0 0.8	立ち上がり直・高台(三角・高0.7)・上ツヤ・胴張り	内外一帯茶褐色	芍薬[茶系・茶・茶系]	HA ㉔ A13 Ⅱ 台 2717
	186			—	口	31.8	—	逆「J」字状反(幅2.5-3.0)・胴張り・胴張り・文様(口唇に 開く1・胴部に開く2・胴部凸出・凸出)	外一帯茶褐色 内一帯褐色	茶褐色・良	HA ㉔ E10 Ⅱ S02 台 3218 HA ㉔ E10 Ⅱ S01 台 3210-1
	187				口	40.0	—	逆「J」字状反(幅2.5-3.0)・内側縁有り・胴張り・胴張り 文様(口唇部に開く2・胴部凸出・凸出)	外一帯茶褐色(丸輪) 内一帯褐色(上ツヤ輪)	茶褐色・良	HA ㉔ D4 Ⅱ 不建台 1917

第 37 表-1 沖繩産無釉陶器(鉢鉢) 観察一覽

(質量單位: cm)

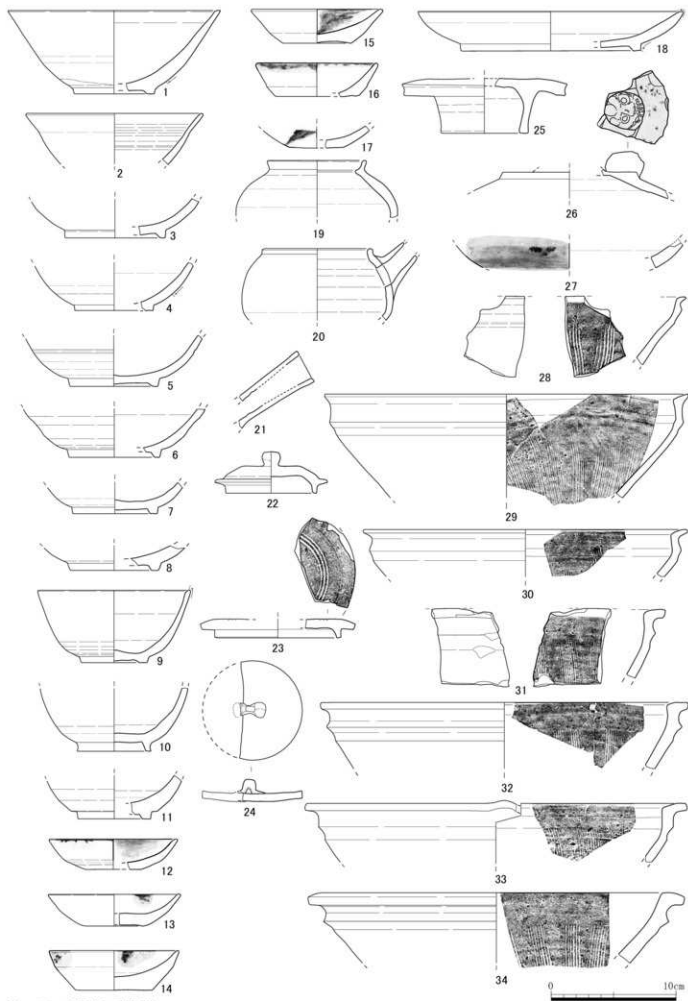
調査年度	調査号	部位	法製	口縁部				胴口				器色	器名・年代・層位 遺跡・台帳(表)番号		
				上面・ 外面	口 縁部	口 縁部	口 縁部	開閉	方向	本 数	器 目			調幅	
第74回・ 調査90	28	I A、I	—	内・内折右面	否	0.7	無	右(2) 下は幅広・薄	有(1.5)	縦(直線)	6	1.4	太(0.15-0.2)	外一帯茶褐色 内一帯茶褐色	HA ㉔ C1 Ⅱ 層 Ⅱ 台 1735
	29		29.2	内・内折右 外一気泡	否	1.2	無	右(2) 下は幅広・薄	有(狭 筋)	縦(直線)	9	1.1	太(0.15-0.2)	外一帯茶褐色 内一帯茶褐色	HA ㉔ B14 Ⅱ S20 台 847 D11-14 Ⅱ 台 1540
	30		26.0	内・内折右 敷土・筋(白)	否	1.2	無	右(2) 下は幅広・薄	有(2.2)	左・右 (直線)	7	1	中(0.1-0.15)	外一帯褐色(ツヤノ輪) 内一帯褐色	HA ㉔ F4 Ⅱ 800 台 362
	31		—	内・内折右面 外一気泡	角	1.7	無	右(2) 下は幅広・薄	有(狭 筋)	縦(直線)	12	1.1	狭(0.1)	外一帯褐色 内一帯褐色	HA ㉔ B14 Ⅱ S20 台 846
	32		29.6	内・内折右面 赤粒(粗・多)・堅致	丸	1.7	無	右(2) 下は幅広・薄	有(0.6-1.0)	縦(直線)	9	1.5	中(0.1-0.15)	外一帯褐色 内一帯褐色	HA ㉔ T14 Ⅱ 台 377 T14 Ⅱ 表帳 台 362
	33		30.6	内・内折右 敷土・注口有り	丸	1.9	無	右(2) 下は幅広・薄	有(1.4)	縦(直線)	9	1.7	中(0.1-0.15)	外一帯褐色(ツヤノ輪) 内一帯褐色	HA ㉔ J4 Ⅱ 両洋 台 2367
	34		30.2	内・内折右面 堅致	丸	1.7	無	右(2) 下は幅広・薄	有(1.0-1.5)	縦(直線)	7	1.4	狭(0.1-0.15)	外一帯褐色(丸輪) 内一帯褐色	HA ㉔ F19 Ⅱ 狭口 台 698
	35		24.0	内・内折右	丸	1.2	無	右(2) 下は幅広・薄	有(0.8-1.2)	左・右 (直線)	12	1.8	狭(0.1)	内外一帯茶褐色	HA ㉔ B14 Ⅱ S20 台 846
	36		21.0	外反・内折右 敷土・筋(白)	角	1.2	無	右(2) 下は幅広・薄	有(1.5)	左・右 (直線)	7	1.2	太(0.15-0.2)	外一帯茶褐色 内一帯褐色	HA ㉔ A16 Ⅱ 台 2926
	37		—	内・内折右	否	1.1	無	右(2) 下は幅広・薄	有(1.5)	縦(直線)	8	1.4	中(0.1-0.15)	外一帯茶褐色 内一帯茶褐色	HA ㉔ H3 Ⅱ 高直座 台 1166
第80回・ 調査93	38	II B、I	29.4	内・内折右面・短	否	1.7	無	右(2) 下は幅広・薄	有(狭 筋)	縦(直線)	8	1.7	太(0.15-0.2)	外一帯褐色(ツヤノ輪) 内一帯褐色	HA ㉔ N12 Ⅱ 台 2766
	39		31.8	外反・内折右面・短	角	1.4	無	右(2) 下は幅広・薄	有(0.8-1.8)	縦(直線)	11	1.8	中(0.15)	内外一帯褐色	HA ㉔ A13 Ⅱ 台 2489
	40		30.6	内・内折右面・短	丸	1.8	無	右(2) 下は幅広・薄	有(1.1)	縦(直線)	8	1.4	狭(0.1)	外一帯褐色(ツヤノ輪) 内一帯褐色	HA ㉔ B6 Ⅱ 台 2816
	41		24.2	内・中空内折右・胴一帯直線的 ツヤノ筋有り	丸	1.3	無	有(1) 明眼	右(1.0-1.3)	縦(直線)	9	1.5	中(0.1-0.15)	外一帯褐色 (自然輪)	HA ㉔ D13 Ⅱ 台 3247
	42		29.0	逆「J」字状外反・胴一帯直線的	丸	1.5	無	有(1) 明眼	右(0.7-1.7)	縦(直線)	12	1.5	狭(0.1)	内外一帯褐色	HA ㉔ I19-Ⅱ Ⅱ 台 2500 I18 Ⅱ 台 2571
第80回・ 調査93	43	II A、I	26.0	内・中空内折右・胴一帯直線的	丸	1.5	無	有(1) 明眼	右(0.9-1.3)	左・右 (直線)	9	1.5	狭(0.1)	外一帯茶褐色 内一帯茶褐色	HA ㉔ N14 Ⅱ 台 2790 N13 Ⅱ 台 2783
	44		—	内・中空内折右・胴一帯直線的 注口有り	角	1.7	無	有(1) 明眼	有(1.6)	縦(直線)	8	1.7	中(0.15)	内外一帯褐色	HA ㉔ A12 Ⅱ S-7 台 1990
	45		32.2	逆「J」字状外反・胴一帯直線的	角	1.4	無	有(1) 明眼	有(1.1)	縦(直線)	8	1.5	太(0.15-0.2)	内外一帯褐色	HA ㉔ R12 Ⅱ S—7 台 978

第 37 表-2 沖繩産無釉陶器(指針) 観察一覧

(質量単位: cm)

道南院	調査年	位置	器種	法量		口縁形態		口縁		欄目		着色	遺(・)号 ¹⁾ ・層遺構・台(取)番号		
				口径	底径	形状・胎土・泥和材・他	断面・断面	上面	縁(有・無)	期間	方向			表数	欄目数
道南院・観覧43	46	I A	鉢	34.8	22	「上」字状外反・胴一直線の外口夕口縁有	角 1.4	有(口)明確	有(0.8-1.2)	縦(直線)	7	1.6	赤(0.1)	内外-茶褐色色 HA②C2 1台 1962	
	47			34.4	22	「上」字状外反・胴一直線の外口夕口縁・注口有	角 1.4	有(口)明確	有(不)	左-右(今平置状)	8	1.7	赤(0.2)	内外-茶褐色色 HA③D10 B 5-30台 1978	
	48			36.6	22	「上」字状外反・胴一直線の	角 1.7	有(口)明確	右横(0.6)	縦(直線)	8	1.7	赤(0.1-0.05)	外-茶褐色色 HA③A15 B 5-29台 1981	
	49			—	—	「上」字状外反・胴一直線の	角 1.6	有(口)不明	右横(0.6)	左-右(今平置状)	9	1.4	中(0.1-0.15)	内外-茶褐色色 HA②E19 B 上 観測台 718	
	50			34.4	22	「上」字状外反・胴一直線の	角 1.7	有(口)不明	無	縦(直線)	6	1.4	赤(0.2)	内外-茶褐色色 HA③B14 B (観覧?) S-28台 2332	
	51			32.6	22	「上」字状外反・胴一直線の外口夕口縁縁有	角 1.3	有(口)不明	有(1.3)	左-右(直線)	7	1.2	中(0.15)	外-茶褐色色 HA②T5 B 高台 2599	
	52			27.2	22	「上」字状外反・胴一直線の外口夕口縁縁有	角 1.8	有(口)不明	右横(0.5)	左-右(弧状)	12	1.9	横溝(0.05-0.1)	内外-茶褐色色 HA③R18-20 B 台 1605	
	53			27.0	22	「上」字状外反・胴一直線の	角 1.5	有(口)不明	右横(0.8)	左-右(今平置状)	5	1.6	赤(0.15-0.2)	内外-明茶褐色色 HA②J6 B 二台 1692	
	54			32.6	22	「上」字状外反・胴一直線の外口夕口縁縁有	角 1.6	有(口)不明	無	左-右(直線)	8	1.7	中(0.15)	内外-茶褐色色 HA②C2 B 観測 台 502	
	55			30.0	22	「上」字状外反・胴一直線の	角 1.8	有(口)面	右(1.4)	左-右(直線)	12	2.4	赤(0.15-0.2)	内外-褐色色 HA②A4 B 観測 台 1626	
道南院・観覧44	36	III	鉢	30.4 (観)	22	「上」字状外反・胴一直線の	不	無(口)面	右(0.8-1.0)	左-右(弧状)	5	1.5	横太(0.2-0.25)	内外-褐色色 HA③台 1344 19台 1041 D18 S 4 B 器	
	57			22.0	「上」字状外反(今平置状)胴一直線の・注口有	角 2	有(口)面	無	左-右(直線)	多	不	中(0.1-0.15)	内外-茶褐色色 HA③F16 B 台 1962		
	58			26.9	「上」字状外反・胴一直線の・注口有	角 2.5	有(口)面	無	左-右(弧状)	不	不	横溝(0.05)	外-茶褐色・赤褐色 HA②C3 B 観測 台 501		
	59			24.6	「上」字状外反・胴一直線の・丸み・注口有	角 2.4	有(口)面	無	左-右(弧状)	5	0.8	中(0.1-0.15)	内外-茶褐色色 HA②D2 B 観測台 1374・2577 C1 B 台 2453		
	60			26.6 15.0 (観)	12	「上」字状外反・胴一直線の	角 2.1	有(口)面	無	左-右(直線)	7	1.2	中(0.1-0.15)	外-茶褐色色 HA②J6 1台 476 J6 B 上 二台 297	
	61			28.8 10.8 (観)	13.9 1.4	「上」字状外反・胴一直線の注口有	角 2.6	有(口)面	無	縦(直線)	14	2.5	中(0.1-0.15)	内外-茶褐色・赤褐色 HA②C19 S2台 279・台 1492	
	62			29.5 13.3 (観)	11.8 1.3	「上」字状外反・胴一直線の	角 3.0	有(口)面	無	右-左(弧状)	20	2.5	横溝(0.05-0.1)	内外-赤褐色色 HA②D1-2 台 366,989 R09台 366-C5 B 79 1台	
	63			—	10.8 1.4 (観)	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	有(1.2)	縦(直線)	7	1.2	中(0.1-0.15)	外-茶褐色色 HA③C11-12 B 台 1607	
	64			—	10.6 1.4 (観)	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	有(1.2)	縦(直線)	11	1.5	横(0.1)	外-茶褐色色 HA③D4 1 S-27台 1980	
	65			—	15.0 0.7 (観)	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	有(2.5)	縦(直線)	6	1.6	赤(0.2)	外-茶褐色色 HA②C3 B 上 建機 台 582	
道南院・観覧45	66	I 中平	鉢	9.8 0.9 (観)	—	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	有(0.5)横	左-右(直線)	8	1.6	中(0.1-0.15)	外-茶褐色(茶輪)内-茶褐色色 HA②E9 B 台 1358	
	67			7.8 0.5 (観)	—	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	有(0.1-1.5)	縦(直線)	6	1.1	中(0.1-0.15)	内外-明茶褐色色 HA②C19 B 台 1393 B1 B 観測 台 1925	
	68			6.6 1.5 (観)	—	立ち上がり直・胴一直線の砂質・泥和材多(石灰・茶粉)	—	—	有(0.7)横	縦(直線)	4	0.9	横溝(0.05-0.1)	内外-褐色色 HA③D4 B 台 3406	
	69			10.6 1.0 (観)	—	立ち上がり直・上口径胴一直線の	—	—	有(1.0)	縦(直線)	7	1.1	横(0.1)	内外-明茶褐色色 HA③F11 B 5-2台 955	
	70			8.0 0.8 (観)	—	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	無	縦(直線)	11	2.2	中(0.1-0.15)	内外-茶褐色色 HA②D19 B 上 赤青台 802	
	71			13.5 0.7 (観)	—	立ち上がり直・胴一直線の縁有	—	—	有(0.8-1.2)	左-右(直線)	8	1.8	赤(0.2)	外-茶褐色(茶輪)内-赤褐色色 HA②C2 1台 1967	
	72			11.4 0.7 (観)	—	立ち上がり直・胴一直線の一段削り有	—	—	無	左-右(直線)	12	2.4	中(0.1-0.15)	外-茶褐色色(茶輪)内-赤褐色色 HA③A12 B 5-7台 990	
	73			8.0 0.7 (観)	—	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	無	縦(直線)	11	1.8	中(0.15)	外-茶褐色色 HA② 1台 655	
	74			8.0 0.3 (観)	—	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	無	左-右(今平置状)	9	2.2	赤(0.15-0.2)	内外-茶褐色色 HA②C3 B 観測 台 517	
	75			9.8 1.1 (観)	—	立ち上がり直・胴一直線の	—	—	無	左-右(直線)	4	1.2	横太(0.2-0.3)	外-茶褐色・赤褐色内-赤褐色色 HA②E1 B 観測 台 1837	
道南院・観覧45	76	V B	鉢	10.4 1.0 (観)	—	立ち上がり直・胴一直線の地成今平置	—	—	無	縦(直線)	9	2	中(0.1-0.15)	内外-茶褐色色 HA③C14 B 台 1974	
	77			12.8 1.0 (観)	—	「く」の字(直線の)胴一直線の	—	—	有(不)	縦(直線)	7	1.7	赤(0.2)	外-茶褐色色 HA②D1 台 355-014 D2 B 観測 台 1368	
	78			12.0 0.3 (観)	—	「く」の字(直線の)胴一直線の	—	—	無	不	多	不	中(0.15)	外-茶褐色色 HA②J6 B 二台 1704	
	79			8.6 1.2 (観)	—	「く」の字(直線の)胴一直線の	—	—	無	不	多	3	横(0.1)	内外-褐色色 HA②F1 B 地台 606	
	80			15.8 0.9 (観)	—	「く」の字(丸・脚有孔(3脚・直線)・文様・外・開縁・2・流紋・内・脚目(横))	—	—	—	—	—	—	—	—	外-褐色色 HA②R8 B 台 1198 HA②A7 B 台 1800
	81			12.0 0.9 (観)	—	「く」の字(丸・脚不明・脚部有孔(長溝せり))	—	—	—	—	不	多	不	中(0.15)	内外-赤褐色色 HA③S19 B 5-8台 773
	82			10.6 0.7 (観)	—	平縁・脚部今平置	—	—	無	左-右(今平置状)	8	1.6	中(0.1-0.15)	内外-褐色色 HA②E19 B 観測 台 596	

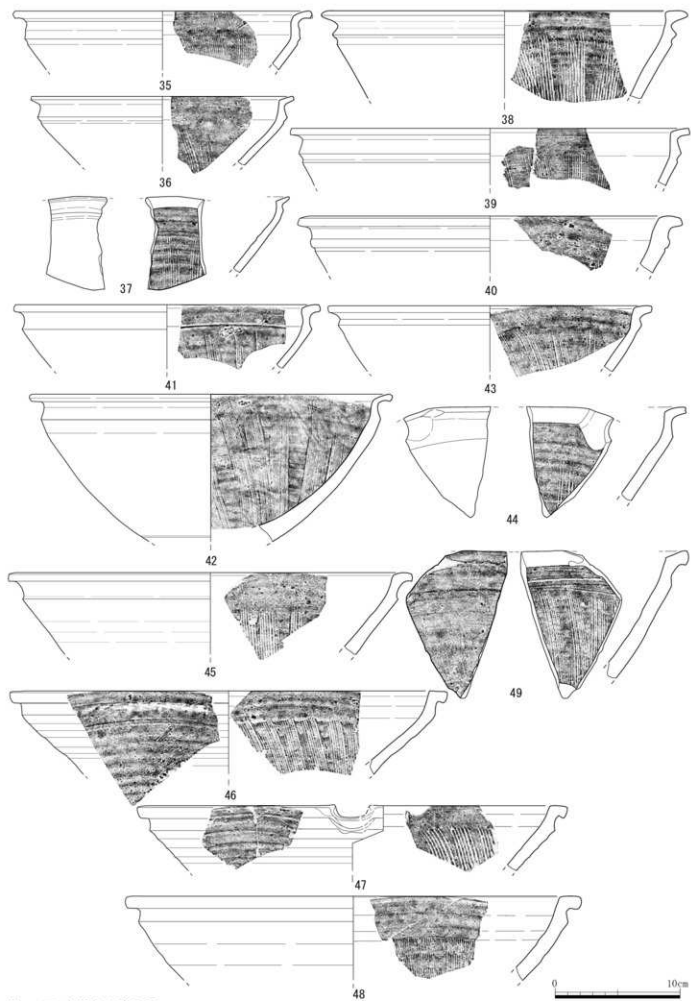
第 III 章
5



第 67 図 沖繩産無釉陶器 1



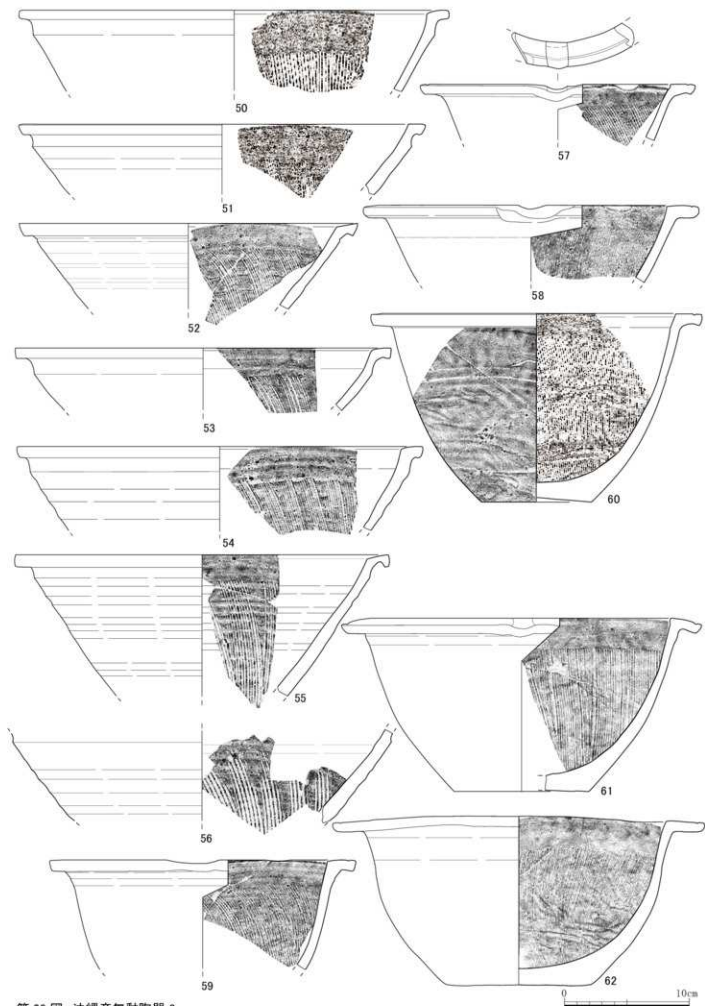
図版 42 沖縄産無釉陶器 1



第68図 沖縄産無釉陶器 2



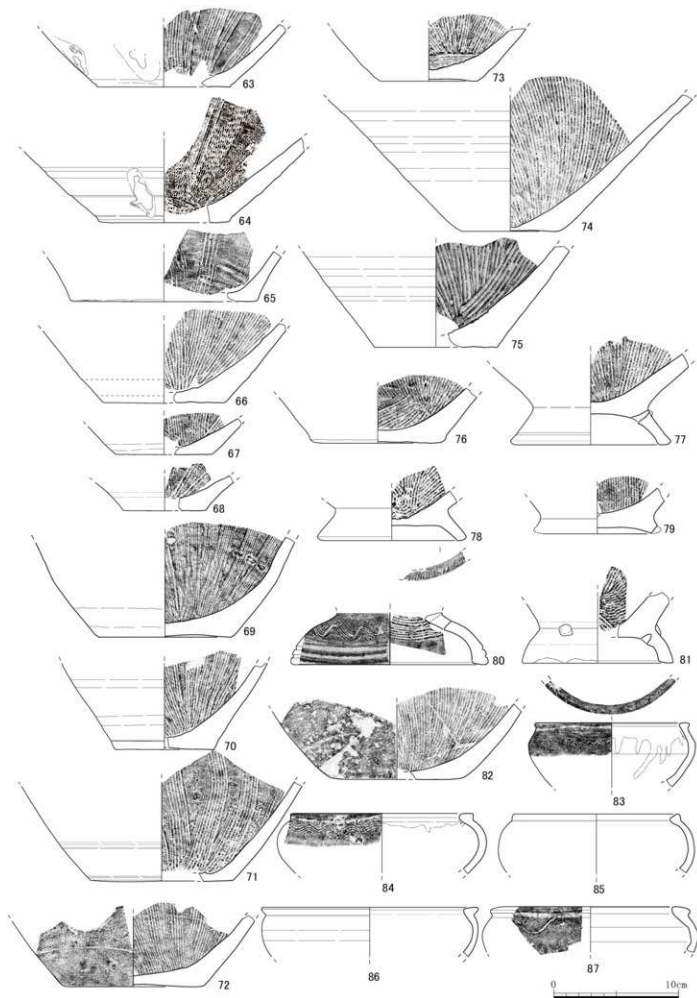
図版 43 沖縄産無釉陶器 2 (上: 外面 下: 内面)



第 69 図 沖縄産無釉陶器 3



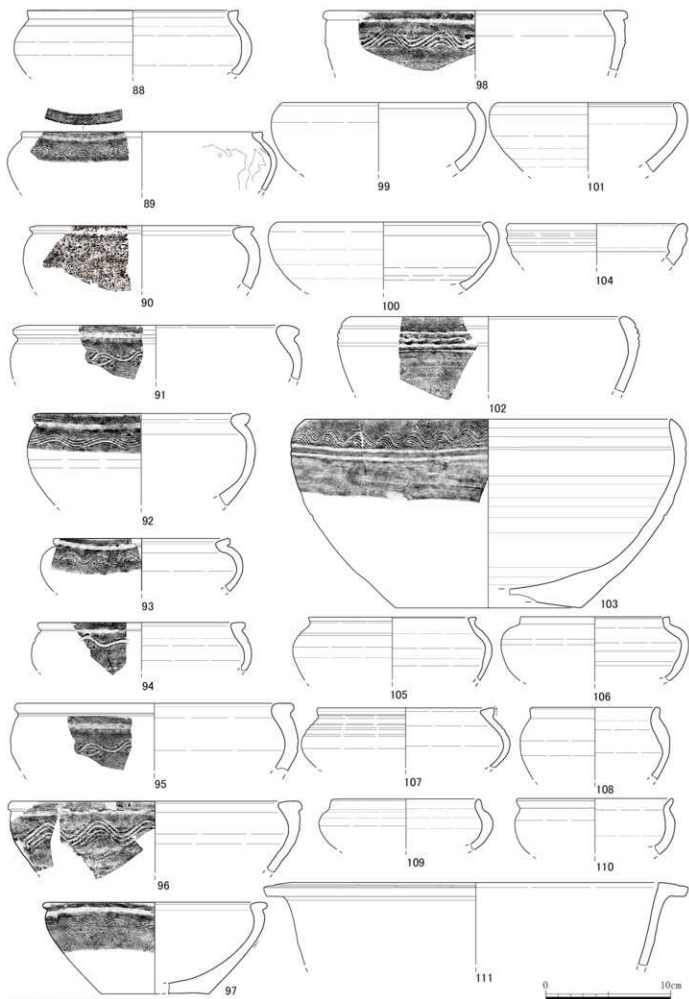
圖版 44 沖繩産無釉陶器 3



第70図 沖縄産無釉陶器 4



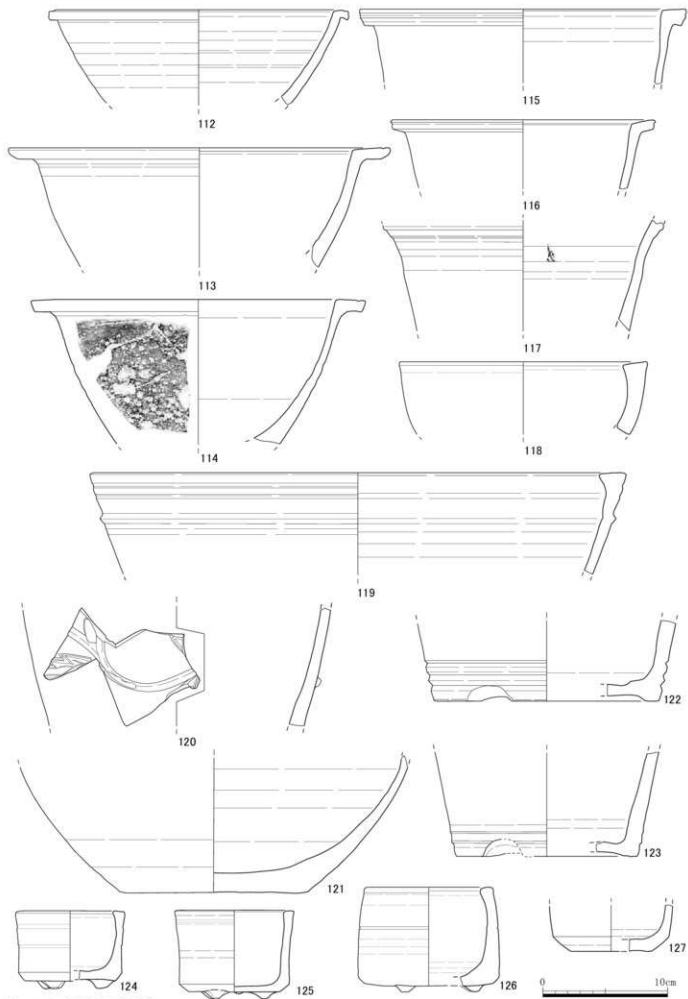
図版 45 沖縄産無釉陶器 4



第71図 沖縄産無釉陶器5



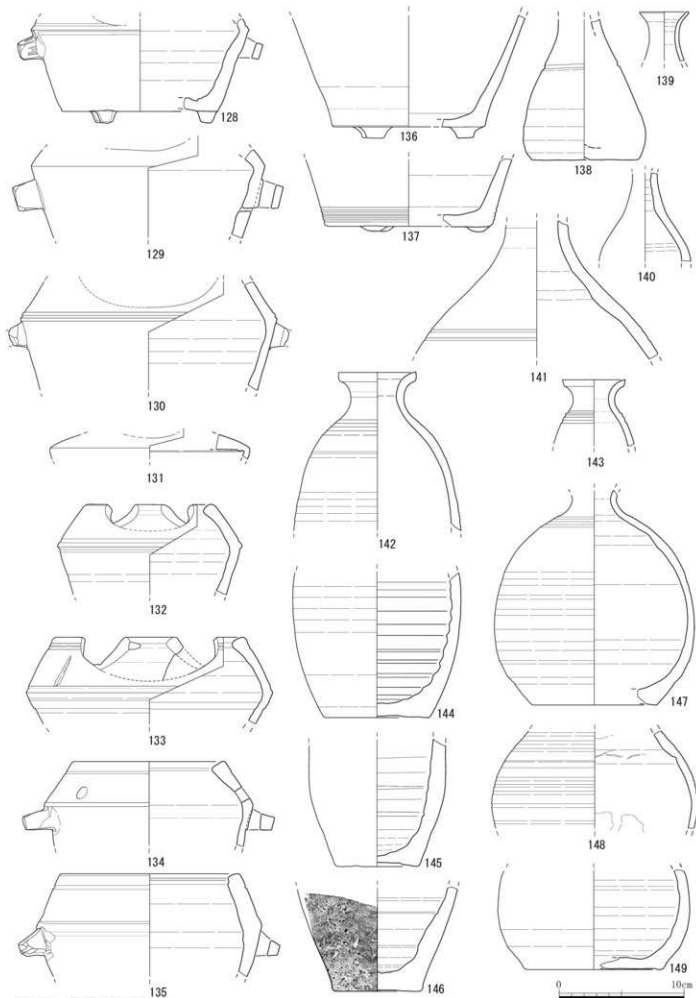
圖版 46 沖縄産無釉陶器 5



第72図 沖縄産無釉陶器6



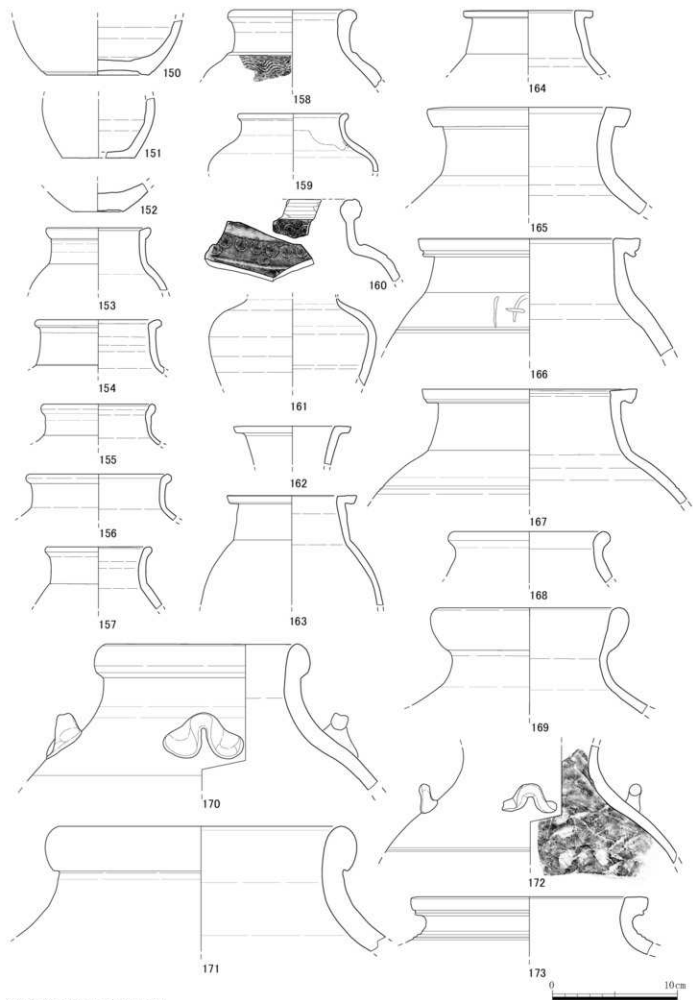
圖版 47 沖繩産無釉陶器 6



第 73 図 沖縄産無釉陶器 7



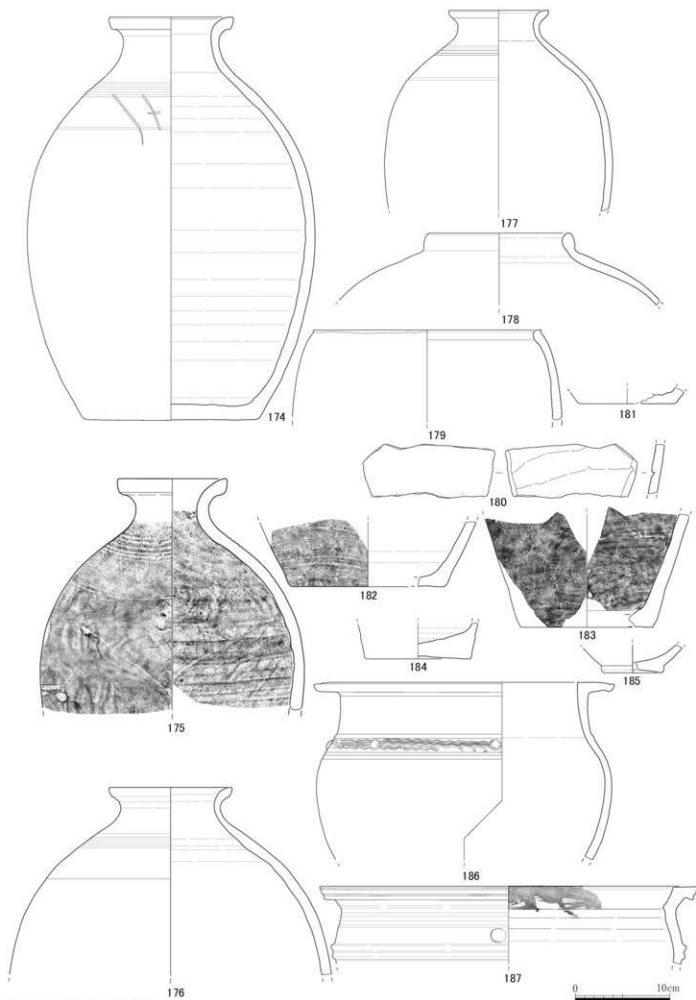
圖版 48 沖繩産無釉陶器 7



第74図 沖縄産無釉陶器 8



圖版 49 沖繩產無釉陶器 8



第75図 沖縄産無釉陶器 9



圖版 50 沖繩產無釉陶器 9

(5) 陶質土器

陶質土器が9器種3,724点出土した(第39表)。軟質なものや硬質なものも混在するが雲母の混入が見られ、厚みに関わらず触れると素地の粒子が付着し、水分を含むと色落ちする物を陶質土器と捉えた。いずれも素地に混和材(雲母・白色粒・赤色粒・黒色粒等)を含み、轆轤成形後ナデ消しを行うものが多数であるが、混和材のサイズに極微細から砂粒ほどの大きさまで幅があった。HA③・②・④いずれの地区でも鍋・急須・火炉が多く出土し、特にHA③・②では屋敷跡の範囲に集中していた(第76図)。屋敷別に出土状況を見てみると、どの器種も祝女殿内が非常に多く、中でも不明建物から248点が出土している(第40表)。なおHA③・④のIV層より出土の陶質土器は混ざり込みだと考えられる。以下、主な遺物について第38表に詳細を記載し、第77～79図、図版51～53に示す。

1. 鍋 (図1～9)

方言で「サーケー」と呼ばれる把手付きの土鍋である。蓋195点、口縁部244点、胴部229点、底部341点が確認できた。蓋は掴み部分を高台状に作り全体に皿を伏せた器形で舌状の縁部を持つ。掴み部は三日月高台を呈するものが多かった。身は口縁部を「く」字状に折り曲げ蓋受けを作り、胴部は緩やかに膨らみながら丸底に成形する。また蓋受け下には紐状の把手を貼り付けている。内面には焦げ付き痕、外面には煤が付着するものが多かった。図1～3は鍋の蓋で、かかり無し(図1・2)かかり有り(図3)が見られ、かかりの無いものがほとんどであった。図4～9は鍋の口縁部で蓋受けの幅に大きな違いは無いが、把手のサイズに大(図5)中(図6・7)小(図8)があり、鍋の直径に比例するようであった。図9は蓋受けに窪みがあり、硬質で沖繩産無軸陶器に近いが、混和材に雲母を含むので陶質土器とした。

2. 鉢 (図10～14)

方言で「ワンパー」と呼ばれる鉢34点、「ミジクプサー」と呼ばれる水鉢6点、播鉢10点が確認できた。いずれも沖繩産無軸陶器と重複する器形であり、使用対象による使い分けが考えられる。図10は口縁部が内湾し小振りて無文である事から鉢としたが水鉢の可能性も否めない。図11・12は水鉢で口縁部が内湾し、胴部上端に櫛描きによる5本の波状沈線が施される。特に図11は底面以外に顔料が塗られ外面上半分は茶褐色、内面と外面下半分は赤色を呈する。顔料塗布は急須・鍋・羽釜・風炉で見られる事から水漏れ防止と考えていたが、火炉に塗布されていた例¹⁾もあり、今回の風炉と併せて、顔料の用法について今後の資料増加を待ちたい。図13・14は播鉢で、図13は口縁部で逆「L」字状に外側に折り曲げ水平にした罎状の口縁を持つ。図14は胴～底部で内面に隙間無く櫛目が入る。

3. 火炉 (図15～40)

方言で「ヒールー」と呼ばれる。口縁部114点、把手50点、胴部332点、底部171点が確認できた。今回は破片数が多かったため、器形・底部・把手・突起部の形状に着目して下記のとおりに分類した(()内は割合を示す。)

〈器形〉I(図15～19):口縁部を内湾状に立ち上げ緩やかにカーブを描きながら底部に至り高台を持つ。口唇部は舌状に成形し半月状の火窓を設け、口唇内側に器物を乗せる突起を水平に3ヶ所貼り付ける(82%)。II:肩部を「く」字状に折り曲げ、底部へ直に伸びる(15%)。口唇部は幅広平坦に成形し縁部に階段状の沈線を巡らせる(図23・24)と、沈線無し(図20)が得られた。III(図21・22):筒型で腰折れ後、高台を持つ。口唇部は扁平に成形し、内面口縁部下に3ヶ所突起を貼り付ける(2%)。(突起部)突起先端の角度についてイ(図19):0°～45°(20%)。ロ(図17・18):45°～90°(78%)。ハ(図15・16):90°(3%)。(把手) a(図23・24):方形を呈する(29%)。b(図26):隅丸方形を呈する(63%)。c(図27):楕円形を呈する(8%)。(底部) A1(図28・29):高台脇まで白化粘土による横線を巡らせる。高台幅が広い(53%)。A2(図30):A1と同様だが高台幅が狭い(7%)。B1(図31):高台脇から1.5cmほど空けて白化粘土による横線を巡らせる。高台幅は広い(21%)。B2(図32・33):B1と同様だが高台幅が狭い(10%)。C(図34):高台脇から3cmほど空けて白化粘土による横線を巡らせる。高台脇には沈線を巡らせる(3%)。D(図35):高台脇に飛びガンナを巡らし、その上に白化粘土による横線(1%)。E(図36):器厚が1cm以上で無文(3%)。F(図37・38):腰折れ(2%)。

これらの割合から火炉の形状としては1+A1が最も多かった。また、突起先端の角度はロが、把手の形状についてはbが多くなった。胴部に巡る白化粘土による横線はHA③では77%、HA②では90%、HA④では47%で確認できた。雲母が含まれるので陶質土器に含めた硬質の風炉(図39・40)も出土した。39は顔料により全面茶褐色を呈する。

4. 火取 (図41)

火取は1点のみの出土である。口唇部は丸く筒型(口径8.6cm)を呈する。

5. 急須 (図42～50)

急須(土瓶を含む)は、蓋30点、頸部63点、耳部58点、胴部469点、注口68点が確認できた。器壁はいずれも3～4mmである。蓋は直径1cmほどの握みを持つもので笠型(図42)と甕型(図43)が見られ、握みの形状は宝珠・

そろばん珠・上端扁平が確認できた。身は胴部が屈曲するもの(図44・45)と球状のもの(図46)に分類できた。前者については19点を数えたが、後者は鍋との分類が難しく確実な個数は3点のみとなった。内面には厚く石灰分が付着中には3mm近く溜まったものも確認できた。頸部についてはかり無し(図47)が大半を占めるが、かり有り(図48)も得られた。また、計測可能な頸部の高さは3~9mmまで様々であったが、3mmのものが一番多かった。耳部も多く得られたが、今回は耳部外面に粘土粒をいくつか貼り付けたもの(図49・50)が確認できた。明確な模様を作っているのでは無いようである。今後の類似資料の増加を待ちたい。注口についてはほぼ完形に近い状態のものがHA②では23点確認でき、その内訳は祝女殿内で12点(うち不明建物で8点)、名嘉座で2点、照屋先生1点であった。他地区では屋敷跡でまとまる様子は見られなかった。

6. 羽釜(図51)

6点のみ羽釜が出土した。外面は茶褐色と赤色を呈し、顔料が塗布されているが焼成により発色に違いがでたようである。赤色は前述の水鉢(図11)と茶褐色は黒戸(図39)と酷似している。

7. フライパン状製品(図52・53)

浅鉢状を呈するが口唇部は平坦で鉢よりも径が大きいことから、破片ではあるがフライパン状製品と判断した。

8. 皿

土鍋の蓋と似るが皿と確定できた遺物が3点出土した。いずれも小片のため今回は報告をひかえた。

9. 壺(図54)

小壺になる可能性のある口縁部が出土した。口唇部を扁平にし口縁部を「く」字状に折り曲げ胴部は膨らむ。

10. 器種不明(図55~63)

図55は急須の頸部とも思われるが確証が無いため器種不明とする。図56は口縁部に向かって内彎する胴部でヘラ削り痕が顕著である。図57~59は平底の底部で条切り痕の有無がある。「壺屋古窯群Ⅰ」(1992)掲載の肩が「く」字状に折れる火炉は平底であるので、その可能性もあると思われるが確証が得られず器種不明の底部とする。図60は脚台を持つ底部で内面に軸の落ちが見られる。報告書^{註1}に類似資料が見られる。図61は碁筒底の底部である。いずれも火炉の可能性は高いと思われるが資料の増加を待ちたい。図62・63は平底の底部である。図57~59と違い厚手で胴部への傾きが急であるので、壺もしくは甕の可能性があると思われる。

註1:北谷町教育委員会 平安山原B遺跡 2015

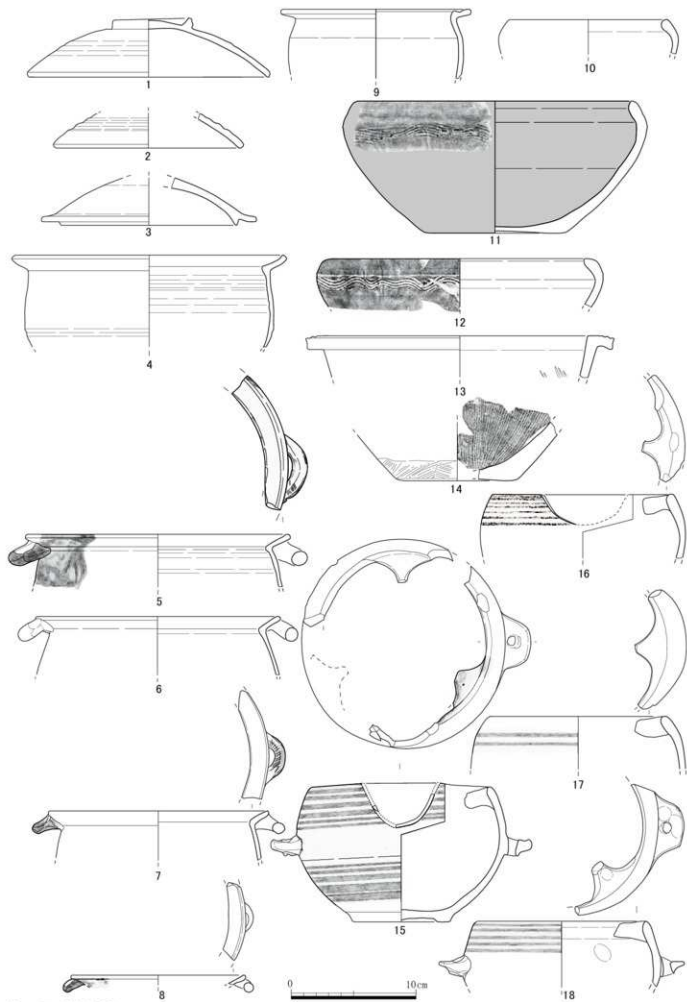
註2:北谷町教育委員会 伊礼原D遺跡 2013・那覇市教育委員会 壺屋古窯群Ⅱ 1995

第3表-1 陶質土器 観察一覧

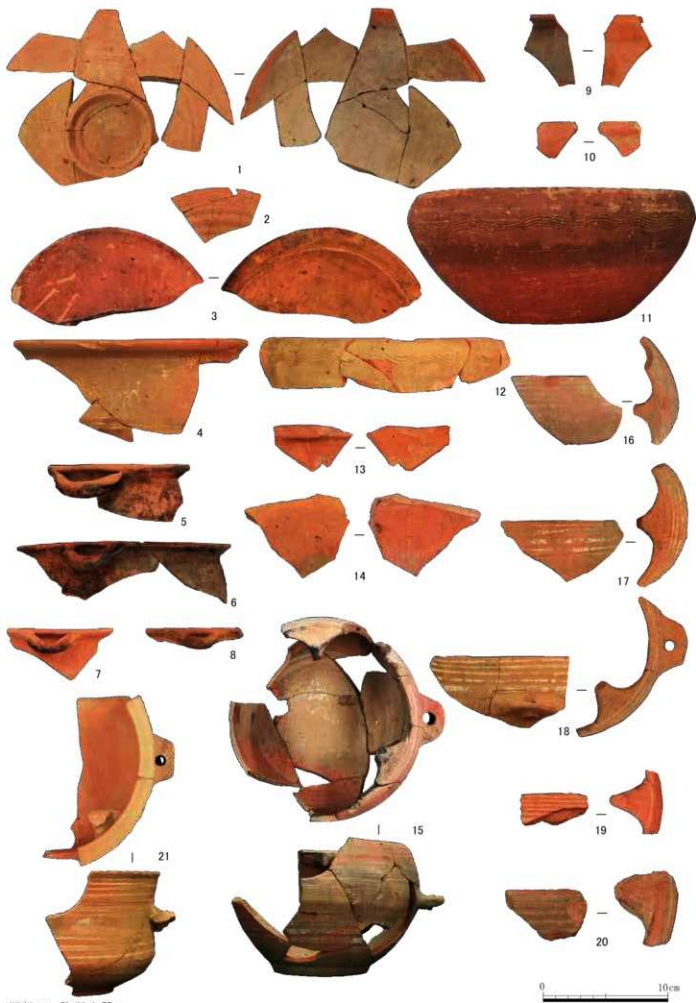
図号	器種	部位	口径(鉢)径・高 ・底(鉢)径(cm)	器厚 (mm)	分類・形状	所見	器色	質	混和材	地区 遺跡 台帳番号
1			19.1 5.8 4.7	4		三日月高台・かり有り	内面:明灰/外面:明焼	軟	赤色粒・大・少, 雲母・小・少	HA② D1 Ⅱ 祝女台 361
2		蓋	14.8 - - -	7	皿を伏せた形状	かり有り	内外面:明茶	硬	雲母・小・砂粒・小・多	HA② B1 Ⅱ 祝女台 1938
3			17.2 - - -	5	かり有り	内外面:暗茶	HA② E20 Ⅱ 上祝女台 2556	軟	赤色粒・大・白黒粒・小・少 雲母・小・少	HA② E20 Ⅱ 上祝女台 2556
4			21.4 - - -	4~2		外面:口縁下部に把手付の痕	内面:楳 内面:明茶(煤付)	硬	赤色粒・大・白黒粒・小・少 雲母・小・少	HA② C18 Ⅱ S12 台 993
5		口縁	20.8 - - -	3~2	折り曲げ受け皿状に成形	把手幅:5.8・把手厚:1.3	内面:楳/外面:明茶(煤)	硬	砂粒・雲母・少	HA③ B10 Ⅰ 台 2004
6			19.3 - - -	4~2		把手幅:3.9 把手厚:1.1	内外面:楳(外面煤)	硬	雲母・赤色粒・白色粒・微塵・少	HA② D1 Ⅱ 祝女台 356
7			17.6 - - -	4~3		把手幅:4.2 把手厚:0.9	内外面:楳(外面煤)	硬	雲母・赤色粒・黒色粒・白色粒・微塵	HA③ A12 Ⅱ S7 台 990
8			13.8 - - -	3		把手幅:2.5・把手厚:0.7	内外面:明楳(外面煤)	硬	砂粒・雲母・多	HA③ F5 Ⅱ 台 1206
9			14.8 - - -	4	折り曲げ受け皿状に成形。窪みあり	沖線産無釉胴部に近似	内面:赤 外面:暗楳	硬	雲母・白色粒・黒色粒・少	HA② C2 Ⅱ 祝女台 563
10		口縁	22.5 - - -	8~4		浅く小振り	内外面:赤	硬	赤色粒・黒色粒・大・多 雲母・小・少	HA② F9 Ⅱ 薩良 SD05 台 1489
11		水鉢	12.2 11.2 10.6	7	口縁部:内湾	口縁部下に5本の波状紋線	内面:赤・外面:茶焼	硬	白黒粒・黒色粒・雲母・大	HA③ F9 Ⅱ S32 台 716・1989
12		口縁	20.0 - - -	6			内面:明楳/外面:明茶	硬	赤色粒・大 黒色粒・白色粒・雲母・小	HA③ R14 Ⅰ 祝女台 1056
13		楕鉢	23.4 - - -	7	逆「L」字状 口唇部に一重剛線	楕目は5本まで確認	内面:楳/外面:暗楳	硬	砂粒・雲母・小・少	HA③ A18 Ⅱ S12 台 1065
14		底	- 9.8 - -	9~11	平底。底部より2cmまで片、台の向き異なる	楕面は全面に施される	内面:楳/外面:茶	硬	赤色粒・黒色粒・大・多 雲母・小・少	HA② J6 Ⅲ 三貝台 1694
15		ほぼ完	14.2 8.0 10.8	5	分類:ⅠA・ⅠB1ハ 縁部は丸	のび痕・調整痕:明楳	内外面:茶(煤付)	硬	黒色粒・雲母	HA② C9 Ⅱ 台 2344
16			14.4 - - -	5	分類:Ⅰハ・縁部は丸 口唇に平直段の痕	内面:付消し 白化釉上による剛線	内面:明茶/外面:楳	硬	赤色粒・多 黒色粒・雲母	HA② T5 Ⅱ 祝女台 2585
17			14.2 - - -	6	分類:Ⅰ口・縁部は丸	内面:付消し 白化釉上による剛線	内面:茶(突起部に煤) 外面:楳	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② L6 Ⅱ 祝女台 1280
18		火炉	13.4 - - -	6	分類:Ⅰa口・縁部は丸	のび痕・調整痕:明楳 白化釉上による剛線	内面:茶(煤付) 外面:楳(煤付)	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② C1 Ⅱ 祝女台 1466
19			16.4 - - -	7	分類:Ⅰイ・縁部は丸	内面:暗赤 外面:暗赤	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② C1 Ⅱ 上 2401	
20			17.8 - - -	11	分類:Ⅱ(側面無し)	白化釉上による剛線	内外面:茶(煤付)	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② J4 Ⅱ 祝女台 2367
21		ほぼ完	16.4 8.0 9.9	6	分類:Ⅱa 縁部は平 口唇に平直段の痕	白化釉上による剛線	内面:楳/外面:明茶	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA③ B9 Ⅲ 5546 台 3041
22		口へ突	15.3 - - -	9~4	分類:Ⅲ・縁部は平	内面:暗楳(突起部に煤) 外面:茶	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② E1 Ⅱ 祝女台 1024	

第38表-2 陶質土器 観察一覧

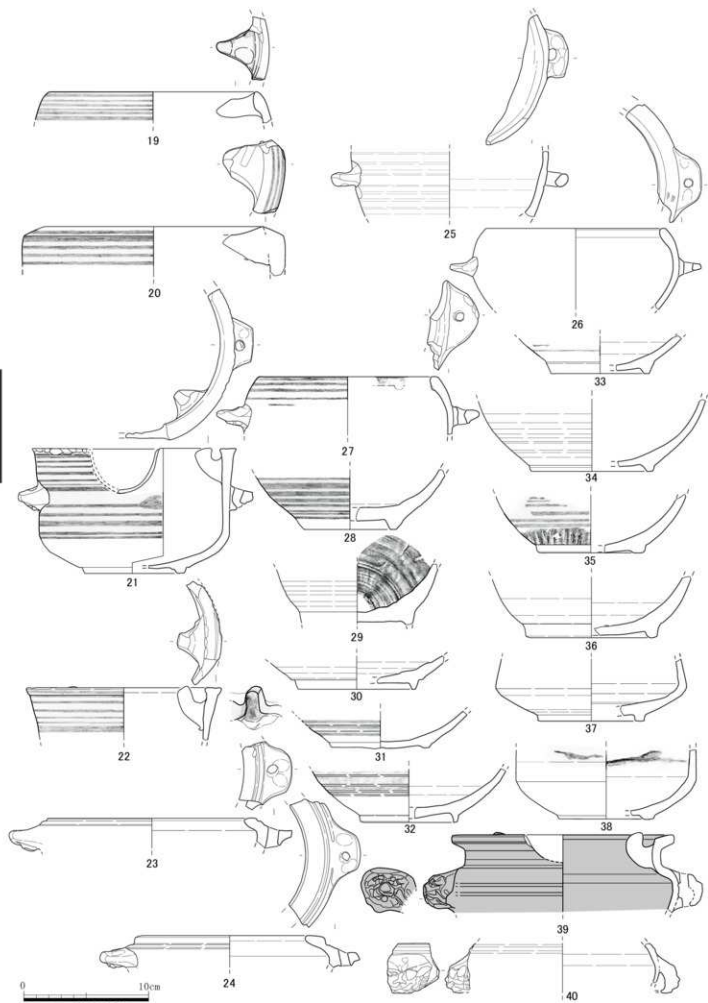
第78回・図版52	器種	部位	口(縁)径・高さ・底(脚)径(mm)	器厚(mm)	分類・形状	所見	器色	質	混和料	地区・ワッド層・遺構・台帳番号			
23	大炊	把手	16.6	—	6	分類: II (二重脚) a	把手裏側に指痕	内外面: 赤茶(煤付)	硬	黒色粒・小・少	HA② C1 II 祝殿台 2430		
24			15.6	—	—	分類: II (二重脚) a	穿孔: 中心よりずれる	内外面: 内面: 茶(煤付)	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② D1 II 不建台 830		
25		胴	—	—	7~4	分類: Ia	白化焼土による開裂	内面: 暗橙/外面: 茶	軟	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② C3 II 祝殿台 582		
26			把手	14.4	—	5	分類: 1b・縁部は丸	外面は摩耗し白色開裂は消える	内外面: 茶	軟	赤色粒・黒色粒	HA② A4 II 祝殿台 1411	
27		14.1		—	—	—	白化焼土による開裂	赤色粒・黒色粒・雲母				HA② F20 II 上瓦層台 805	
28		大炊	底	—	7.4	—	9~6	分類: A1	凹凹面著	内外面: 赤/外面: 暗茶	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② II H2 瓦層台 1168・13名高座台 2339
29				—	9.5	—	10	分類: A1の傾き	高台: 非常に浅い	内面: 赤(すす)	硬	黒色粒・雲母	HA② B2 II 祝殿台 2356
30				—	9.2	—	9~6	分類: A2	凹凹面著	内外面: 暗赤	軟	赤色粒・雲母	HA② D5 II 東大台 2623
31				—	7.7	—	4	分類: B1	高台: 非常に浅い	内外面: 暗茶/外面: 明茶	硬	黒色粒・雲母	HA② D2 I 祝殿台 2584
32				—	7.4	—	4	分類: B2	凹凹面著	内面: 暗橙/外面: 橙	雲母	HA② A19 II 祝殿台 1325	
33				—	7.8	—	5	分類: B2(貼り付け高台)	白化焼土による開裂	内面: 明赤/外面: 橙	雲母	HA② B3 II 名高座台 1577	
34				—	9.5	—	—	分類: C	—	内面: 暗橙/外面: 橙	雲母	HA② N10 I 台 668	
35	—			8.2	—	6	分類: D	高台: 非常に浅い	内外面: 暗赤	軟	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② D1 II 祝殿台 356・K3 II 又古小台 326	
36	—			9.8	—	9	分類: E	高台: 浅い	内面: 暗赤/外面: 暗橙	雲母	HA② D1 II 不建台 831・1台 1915		
37	—			8.2	—	5	分類: F	内面: 凹凹面	内外面: 明橙/外面: 明茶	軟	砂粒・雲母	HA③ E10 I 台 1380	
38	—			7.4	—	5	分類: F	高台: 浅い	内外面: 橙/外面: 明橙	硬	赤色粒・雲母	HA② L6 III 良台 1404	
39	風切			口	17.8	—	5	風切? 凹凹面: 逆L字状・砂粒	胴部: 獅子の貼り付け	内外面: 暗赤	硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② D1 II 不建台 1915
40		胴部: 獅子の貼り付け	内外面: 暗赤		硬	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② D2 II 祝殿台 2580						
41	大炊	口縁	8.6	—	6	筒	外面: 凹凹面	内面: 明茶/外面: 橙	軟	赤色粒・雲母	HA② E16 II 台 1756・F16 II 台 1962		
42	蓋	2.0	9.0	3.2	6	笠	幅み: 扁平かかり有	内面: 明橙/外面: 茶	軟	赤色粒・黒色粒・雲母	HA② B3 II 名高座台 1102		
43		1.6	9.0	2.8	5~3	腕型	幅み: 扁平かかり有	内面: 橙/外面: 茶	軟	赤色粒・黒色粒・白色粒・雲母	HA② B14 II S20 台 847・B10 I 台 2004・B10 N 台 2321		
44	急須	胴	最大胴径: 16.2	—	3	腕部: 「く」字状に傾面	内面: 凹凹面	内面: 橙	硬	黒色粒・雲母	HA② D1 II 祝殿台 1468		
45			最大胴径: 19.0	3~2	—	—	内面: 明橙(石灰付)	外面: 明橙(煤付)	軟	赤色粒・黒色粒・白色粒・雲母	HA③ E17 II 台 1864・F11 II 台 1965・F16 II 台 1962		
46	急須	身	胴径: 7.6	—	3	胴部: 球状	頸高: 5mm	内外面: 明橙	硬	白色粒・黒色粒・雲母	HA② D1 II 祝殿台 1468		
47			最大胴径: 16.6	3~2	—	—	頸部はや立ち上がる	頸高: 8mm	内面: 茶/外面: 明茶	軟	茶色粒・黒色粒・雲母	HA③ A17 II S12 台 540	
48	急須	頸	8.0	—	3~2	頸部はゆるやかに立ち上がり、かかりを付す	頸高: 5mm	内面: 明茶/外面: 橙	硬	赤色粒・黒色粒・白色粒・雲母	HA② A20 II 祝殿台 2392		
49			8.8	—	3	頸部はゆるやかに立ち上がり、かかりを付す	頸高: 8mm	内面: 赤/外面: 赤	硬	赤色粒・黒色粒・白色粒・雲母	HA② A1 II 祝殿台 483		
50	急須	耳	長: 3.2	短: 2.1	7	外面: 粘土粒の貼り付け	6粒	内面: 明茶/外面: 橙	硬	赤色粒・黒色粒・白色粒・雲母	HA② B1 II 祝殿台 1166		
51			欠眼	7	—	—	3粒	内面: 赤/外面: 赤	硬	赤色粒・黒色粒・白色粒・雲母	HA② B1 II 祝殿台 1166		
52	急須	口縁	8.8	—	6	円筒形	内外面: 行消し	内面: 茶	硬	赤色粒・大・黒色粒・白色粒・雲母: 少	HA② B1 II 祝殿台 1166		
53			18.6	—	4	浅鉢形・口唇部: 丸	関西系の可能性あり	内外面: 淡橙	硬	黒色粒・雲母: 極少	HA② A1 II 祝殿台 1320		
54	急須	口縁	17.4	—	5	丸	内面: 行消し	内外面: 暗茶(外面煤)	硬	黒色粒・雲母: 極少	HA② H3 II 名高座台 1166		
55			9.0	—	4	碗型	口唇部: 扁平	内外面: 橙	軟	赤色粒・大・多・黒色粒・白色粒・雲母: 極少	HA② B19 II 祝殿台 2427		
56	急須	頸	7.4	—	3	急須?	口唇部: 扁平	内外面: 橙/外面: 赤	硬	白色粒・多・黒色粒・雲母: 極少	HA② T1 II 祝殿台 1837		
57			丸みを帯びる	—	6	急須?	瓦質上部に頸部や割れ筋が顕著	内外面: 暗茶	硬	赤色粒・白色粒・雲母: 極少・茶色粒: 大	HA② E1 II 祝殿台 1837		
58	急須	底	—	9.2	—	6	底面: 糸切り痕	内面: 暗橙/外面: 暗橙	硬	赤色粒・雲母	HA② F1 II 瓦層台 808・F5 東大台 987・C3 台 1390・F2 台 2414		
59			—	6.4	—	10	平底	内面: 凹凹面	内面: 橙/外面: 茶	硬	赤色粒: 大・黒色粒・雲母: 極少	HA③ D16 II 台 3203	
60	急須	底	—	11.4	—	9	底面: 糸切り痕	内面: 茶/外面: 明茶	硬	赤色粒・黒色粒・雲母: 極少	HA③ F17 II S10 台 1244		
61			—	11.2	—	8	大炊? 「く」字状の脚台	内面: 輪装の落ちあり	内外面: 橙	硬	赤色粒: 大・黒色粒・雲母: 極少	HA③ B18 II 台 1837	
62	急須	底	—	10.4	—	6	大炊?	内面: 凹凹面著	内外面: 赤	硬	赤色粒・大・黒色粒・雲母: 小・白色粒	HA③ A13 II 台 2489	
63			—	10.5	—	10	大炊?	外面: 丸形	内面: 凹凹面	硬	赤色粒・黒色粒・白色粒・雲母: 極少	HA② A1 II 祝殿台 1785	
64	急須	底	—	10.5	—	6	前? 或平底	底面: 糸切り痕無し	内面: 茶/外面: 橙	硬	赤色粒・黒色粒・白色粒・雲母	HA② E1 II 祝殿台 1283・1284	
65			—	9.8	—	6	前? 或平底	底面: 糸切り痕	内外面: 暗橙	硬	赤色粒・黒色粒・白色粒・雲母	HA② E1 II 祝殿台 1283・1284	



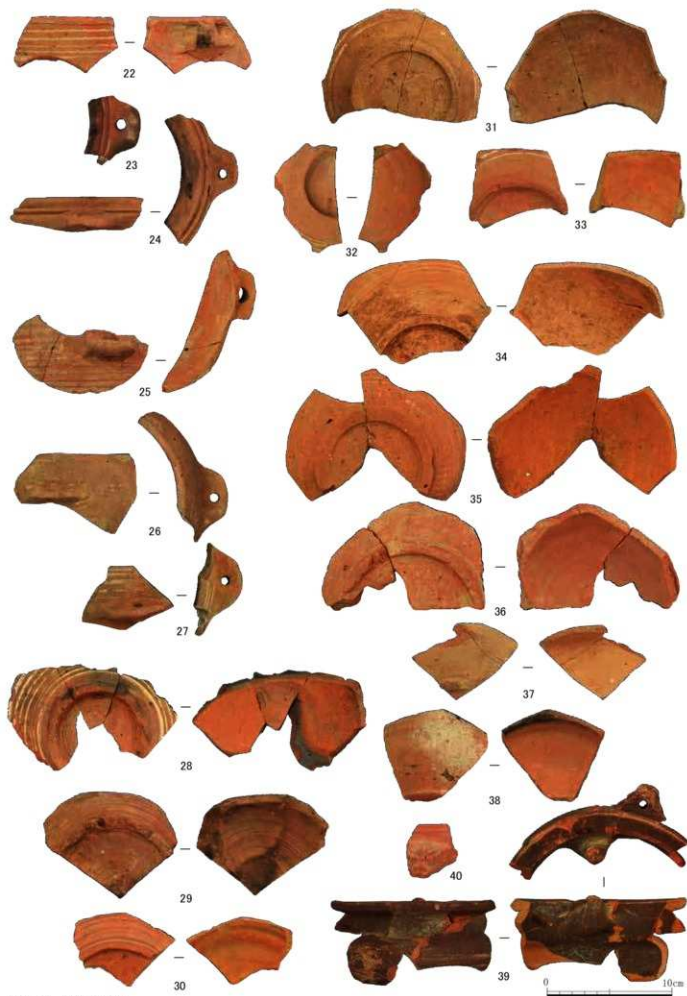
第 77 図 陶質土器 1



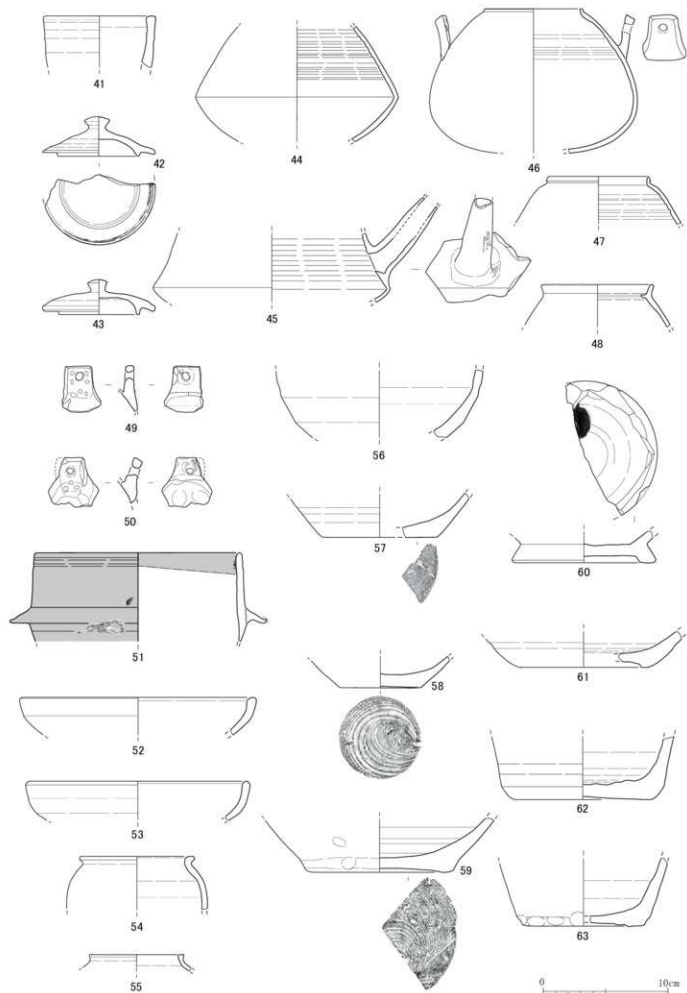
圖版 51 陶質土器 1



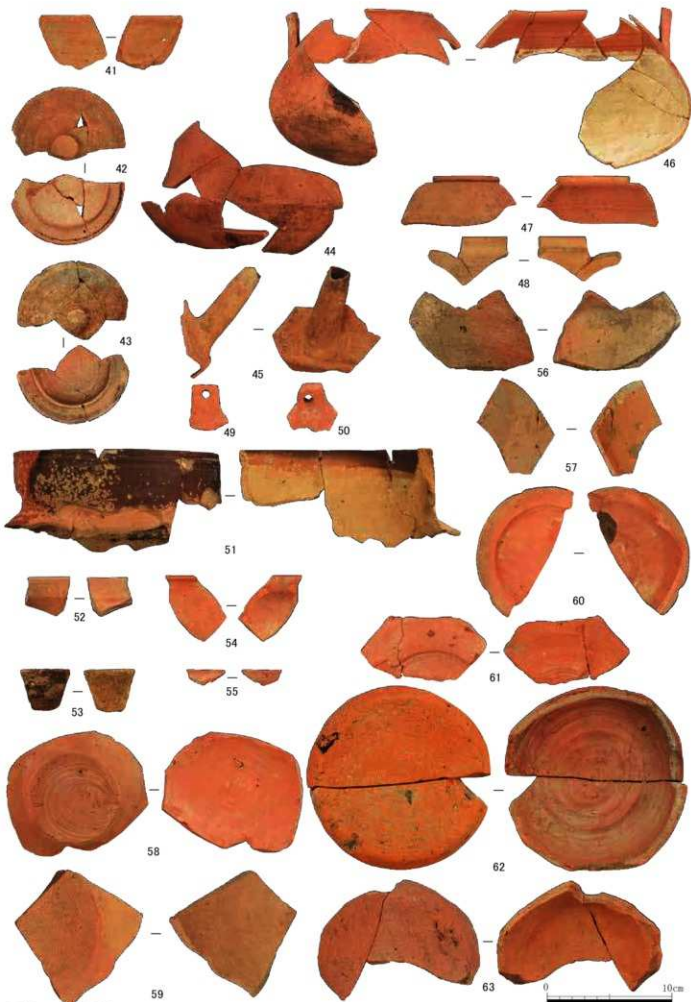
第 78 図 陶質土器 2



圖版 52 陶質土器 2



第 79 図 陶質土器 3

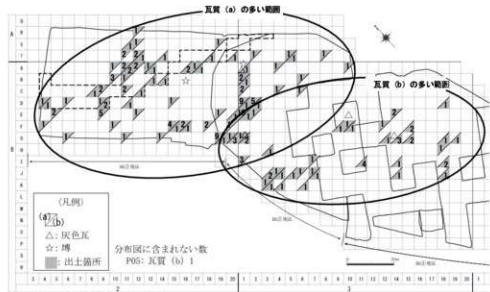


图版 53 陶质土器 3

にもある。図19の形状はグスク土器に近い丸底。図20は焼しにより黒い光沢があり、底面で僅かにくびれ、高台の可能性もある。鉢：図21は内湾で内側に肥厚、図22・23は外面に口縁で草花文のたぐいがあり、同一個体の可能性がある。図24は直状の底部で薄手の淡茶色で他とは異なる。図25は器面が禿げ櫛目は確認できなかつたが後述の編鉢に酷似。編鉢：図26と27は「く」字状に湾曲し、口縁部断面は角をなすもので、図27は注口である。図28は内唇が肥厚し、口唇には2本の圈線を施す。渡地村跡に類似あり。図29は厚手、櫛目細かく、櫛と櫛の間隔は2.4cmで両者は図26と27より大ぶりである。火鉢：図30・31は口縁が肥厚し胴部が張り内部の突起は鉤状をなす。図33・34はやや薄手であるが、前者と同タイプ。図31と33は赤色顔料が塗布される。図32は厚手の高状タイプで、外面に化粧土で圈線を施す。この技法は陶質土器と同じである。壺か甕：図35は口唇に特徴があり、本土産の可能性あり。図37は小ぶりで図24と同じ胎土。図38は硬質で、外面に自然釉？がある。土鍾：図40・41は管状の土鍾で前者は太めは瓦質、後者は細手で土器質である。前者は後兼久原遺跡(2003)と酷似する。第80図に分布を示した。主に瓦質(a)はHA③②の近代集落跡から出土し、瓦質(b)はHA②④の近世期より出土している。遺物の新旧が遺跡内の時期差と矛盾無く示されている。

註1：沖縄県教育委員会「湧田古窯群Ⅱ」沖縄県文化財調査報告書第121集 1995

註2：丸形は火鉢との区別が難しいが馬蹄形は炊事用と推測できるため促伊の名称を用いた。



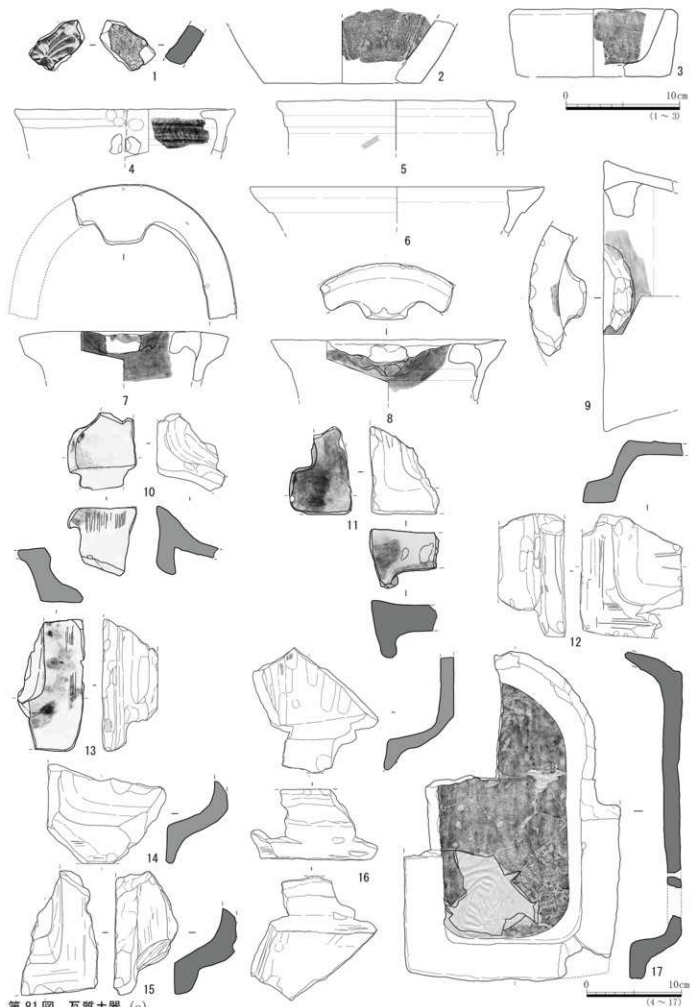
第80図 瓦質土器 平面分布

第44表 瓦質土器 (b) 観察一覧

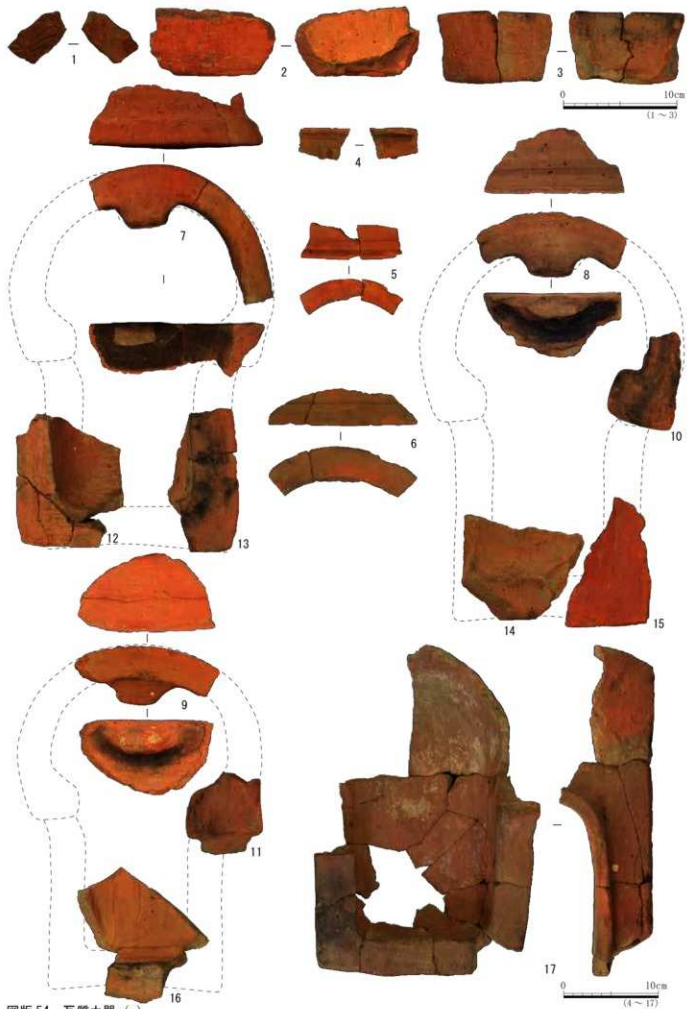
(単位: cm)

図録 No.	品名	部位	口径/胴径/底径	器厚	観察事項	器色	装飾材				器面調整 (外/内)	質	地区グリッド (東上) 台帳番号
							黒鉛	朱	赤	白			
18	鉢	胴	18/5.5/—	0.6	胴と思われ。湧田IV-28	茶・サンド：灰	黒	○	○	○	○	○	HA③ G14 B SD41 台 3010
19	底	底	—/—/17.2	0.8	底面に僅、筒一良好 跡の跡か	灰	○	○	○	○	○	○	HA③ C12 B 台 3215
20	底付造	口縁	—/—/—	0.4	外面：焼しにより黒化。光沢あり	灰・暗灰	○	○	○	○	○	○	HA② E1 B 殿付 1024
21	口縁	口縁	—/—/—	0.7	口内湾・玉縁状。外面：亀背	茶・サンド：灰	○	○	○	○	○	○	HA④ G14 B 台 2236
22	鉢	胴	—/—/—	0.8	外面に文様(草花文?)あり。図5と同一か	暗灰・淡灰	○	○	○	○	○	○	HA③ A11 B 台 1740
23	鉢	胴	—/—/—	1.1	外面に文様(草花文?)あり。図5と同一か	暗灰・淡灰	○	○	○	○	○	○	HA③ S—A13—13 冊下 511 台 2022
24	底	底	—/—/10.9	0.8	直状。筒一良好。厚手	淡茶	○	○	○	○	○	○	HA③ D9 B 台 748
25	口縁	口縁	28.4/16.8/12.0	1.6	口縁「く」字状に湾曲・断面一角。器跡か?	淡灰	○	○	○	○	○	○	HA③ D11 B 台 3248
26	口縁	口縁	26.4/15.8/9.2	1.5	小型の編鉢。口縁「く」字状に湾曲・断面一角	淡灰	○	○	○	○	○	○	HA③ R—G4—3 冊下 5640 台 1125
27	口縁	口縁	26.6/—/—	1.3	口縁「く」字状に湾曲・断面一角。器跡19本、口縁25	淡灰	○	○	○	○	○	○	HA③ B13・14 B S20 台 847
28	口縁	口縁	—/—/—	1.6	口内湾・逆「L」状。口縁に2本の圈線が、器跡4本	暗灰・淡灰	○	○	○	○	○	○	HA④ E118 B 台 2498
29	底	底	—/—/13.0	1.8	厚手。直状。器跡10本(編鉢)。器跡—2.4cm	灰	○	○	○	○	○	○	HA④ G14 冊下 2247
30	口縁	口縁	17.2/—/—	0.6	口内湾。胴一。突起：幅1.3×奥行2.5×厚1.2	暗灰	○	○	○	○	○	○	HA③ A13 B 台 2708
31	口縁	口縁	—/—/—	0.7	口内湾。胴一。突起：幅1.1×奥行1.7×厚1.1	暗茶・サンド淡灰	○	○	○	○	○	○	HA② J5 B 名品庫付 2623
32	口縁	口縁	—/—/—	1.4	筒状。外面：白化粧土による模造	黒	○	○	○	○	○	○	HA② A1 B 殿付 495
33	鉢	胴	—/—/—	0.5	筒一くびれ。胴一。器跡1。外内外一赤色顔料	赤・サンド灰	○	○	○	○	○	○	HA③ F11 B 台 1484
34	底	底	—/—/8.2	0.6	外面：砂面磨削	淡灰	○	○	○	○	○	○	HA② D2 B 殿付 989
35	口縁	口縁	11.2/—/—	0.8	口縁：文様・有段。外面：縦筋に櫛目状。大楕中間(瓦質)	黒	○	○	○	○	○	○	HA② H4 冊下 2475
36	底	底	—/—/—	0.8	内—ユビ底。大ぶり	灰	○	○	○	○	○	○	HA② E20 B 1 殿付 708
37	底	底	—/—/—	0.6	図19と同一か?	淡灰	○	○	○	○	○	○	HA② G20 B 瓦屋付 935
38	底	底	—/—/6.0	0.4	直状。筒一良好。赤色塗布?	茶	○	○	○	○	○	○	HA② D1 B 殿付 354
39	不明	底	—/—/15.2	1.1	外面：ほぼ全面磨削気泡(自然釉?)瓦質?	茶・灰	○	○	○	○	○	○	HA② J4 B 名品庫付 1235
40	口縁	口縁	長5.9/幅3.0	1.4	口径6mm。残存33g。筒状。器跡一丸	暗灰	○	○	○	○	○	○	HA③ D9 B 台 744
41	口縁	口縁	長1.9/幅1.1	0.2	口径6×5mm。残存1.8g。中央突起。器跡一部	暗	○	○	○	○	○	○	HA② T20 B 800台 556

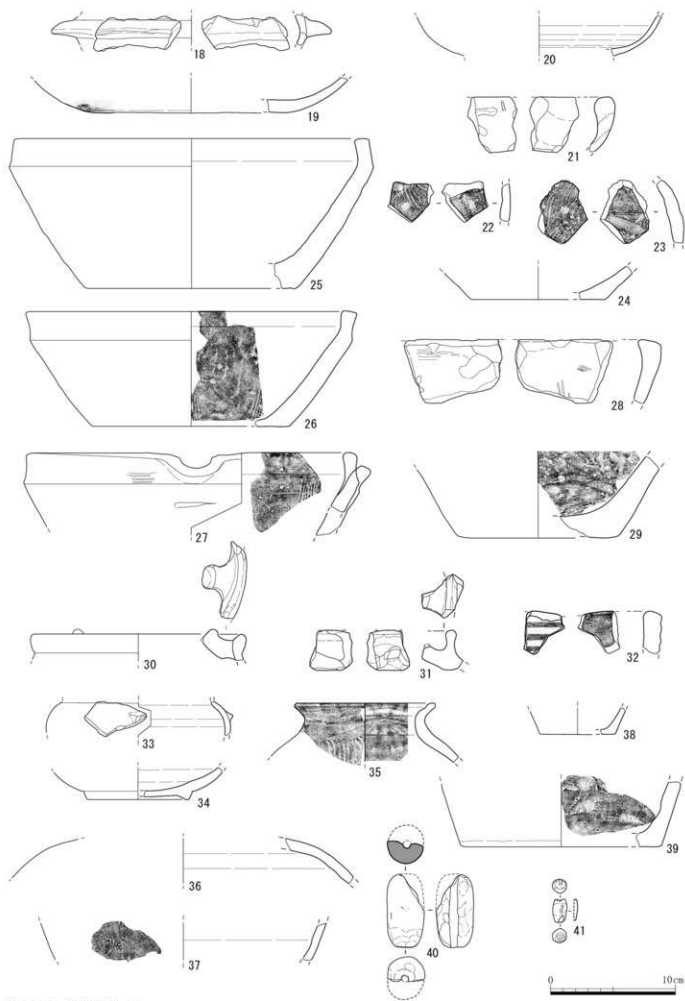
装飾材凡例 ○：非常に多い ○：多い △：少ない △：僅少



第81圖 瓦質土器 (a)



圖版 54 瓦質土器 (a)



第 82 図 瓦質土器 (b)



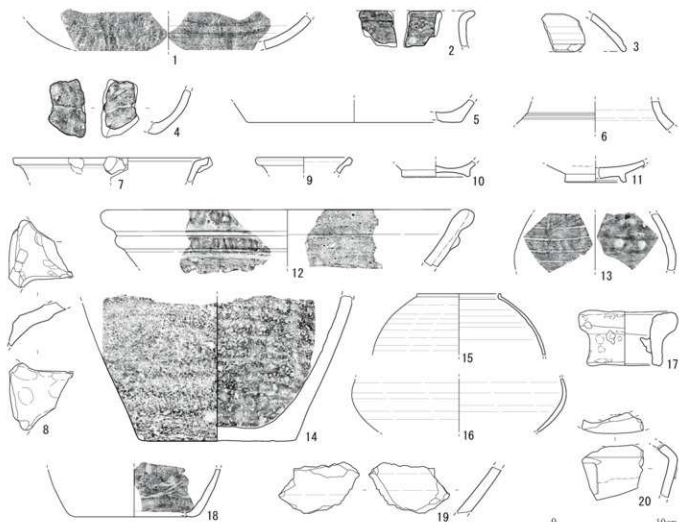
圖版 55 瓦質土器 (b)

(7) その他の不明陶器

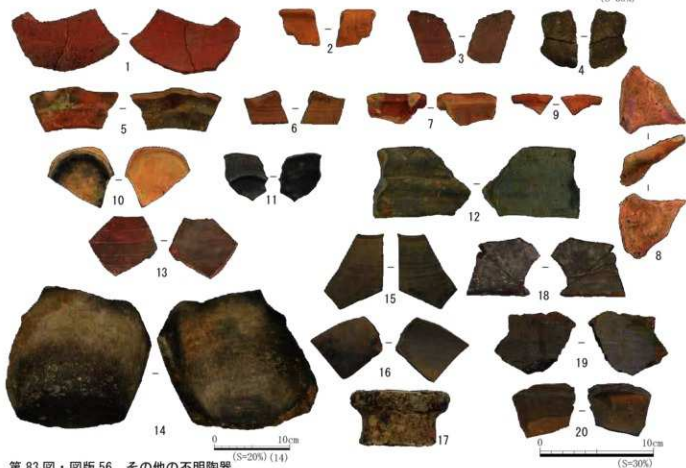
器形や胎土から検討を重ねたが、土器、瓦質、陶質、陶器等に分類できないものをまとめた。類似した器質ごとに分類したところ、土器系9点、土師質13点、瓦質土器系11点、陶質土器系16点、沖繩産施・無釉陶器系32点、タイ産半釉土器系4点、褐釉陶器系18点、本土産陶器系3点等が得られた。今回はHA③②④II層からの出土が多く、屋敷跡から確認できたのはHA②のみで、祝文殿内29点(窯道具・袋物以外全器種)、瓦屋又吉小12点、名嘉座・三良又吉小7点、他屋敷からは数点ずつの出土だった。屋敷跡から出土した不明陶器は沖繩産施・無釉陶器系・褐釉陶器系・陶質土器系が多かった。今後の資料増加を待って分類したい。なお、窯道具が1点得られた。施釉陶器の焼成に使用される物であるが、現在のところ当遺跡周辺に陶器を生産する窯は確認されておらず、今後の資料増加が待たれる。以下、特徴のある器物について第46表に記載し、第83図・図版56に示す。

第45表 その他の不明陶器出土量

地区	種別	陶器	土器	瓦質	陶質	陶器	施釉	無釉	半釉	不明	合計
I A 3	土師質	1									1
	土師質		1								1
	瓦質系			2							2
	陶質系				1						1
	沖施・無系					2	4				6
	半釉系								1		1
	施釉系									3	3
	不明									1	1
	合計	1	1	2	1	2	4		1	3	17
	II A 3	土師質									
土師質			1	1							2
瓦質系											
陶質系					1						1
沖施・無系						2	9				11
半釉系									1		1
施釉系										3	3
不明										1	1
合計			1	1	1	2	9		1	3	17
III A 3		土師質									
	土師質										
	瓦質系										
	陶質系										
	沖施・無系										
	半釉系										
	施釉系										
	不明										
	合計										
	III A 3	陶質系									
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										
III A 3	合計										
III A 3	陶質系										
III A 3	沖施・無系										
III A 3	半釉系										
III A 3	施釉系										
III A 3	不明										



0 10cm
(S=30%)



0 10cm
(S=30%)

第 83 図・図版 56 その他の不明陶器

小碗が中心となる(第85図)。18C後半に国内産の磁器小碗が飲料器(湯や酒)として使用・流通し始め、淹茶(沸かした湯で急須に入れた茶葉を浸してお茶を作る)の広がりと共に茶飲み碗として流通したようである。沖繩にも喫茶の習慣は入ったのではないだろうか。以下、産地ごとに概略し、主なものを第88～90図、第48表に観察一覧を示す。

(肥前・肥前系) (第88図1～33)

肥前及び肥前系の碗が175点、皿16点、小皿(手塩皿含む)16点、瓶77点、油壺2点等が得られた。図1は上質の鉄釉染付碗で高台脇を削っている事から、天目型と考えられる。図2は唯一出土の青磁碗口縁部である。図3～10は染付碗で3は高台内に「大明」と想定される銘。4は見込みに花卉文を描く。5は網目文碗で魚は掛からないタイプ。6は量産される以前の荒磁碗で文様が丁寧に描かれる。7は量産タイプの荒磁碗で宝珠の一部が残る。8は山水文碗で焼成より呉須の発色に違いが見られる。9は文様が不明瞭な碗底部で3と同様に高台が打ち欠かれる。10は荒磁碗で内面に金絵を描くようであるが小片のため詳細不明。図11は小碗外面に赤絵が残る。図12～15は茶飲み碗で12は京焼系の小碗に類似した形状。13～15は腰折れ筒型碗の胴・底部。同タイプだが別個体である。図16は染付鉢だが珍しい器形¹⁾で平安山原B遺跡²⁾からも出土があった。図17・18は白磁と思われる小杯だが17は小片のため詳細は不明、18は鳥用の水入れに使用されたようである。図19～21は見込みに山水文を描く皿で、19は高台内に多数の砂粒が付着する。焼成不良。20は口折れの小皿と思われる。21は手塩皿で同タイプが4枚出土した。セットで販売された可能性がある。図22～32は染付瓶である。23は一对で使用されたと考えられる祭祀用の瓶。24～27は網目文で26以外は鋸歯状に描かれる。24・26がやや早い時期に生産されている。28は肥前オリジナルの人物画が描かれるもので高級品³⁾である。図29～31は底部で高台の形状に違いが見られる。29は古手のタイプで31は一对で使用された祭祀用である。図32は白磁の瓶か壺の底部で焼成温度が低く貫入が多い。図33は東南アジア輸出用小瓶の肩部で国内流通用の油壺が変形したものである。今回これとは別に国内流通用の油壺の肩部も出土したが小片のため報告は割愛した。

(薩摩・薩摩もしくは肥前系) (第88図34・第89図35～38)

薩摩産の小碗8点、茶飲み用小碗2点、薩摩もしくは肥前系と考えられる碗類が3点確認できた。いずれも肥前産に比べると呉須の発色は鈍い。図34・35は碗で34は腰部に刷れた梵字文が描かれ、35は見込みに花卉文が描かれる。当遺跡では草花文・花卉文碗の高台が打ち欠かれていることが多い。図36～38は小碗で37は良品、38は焼成不良のため貫入が粗い。

(低部・低部もしくは肥前系) (第86図39～43)

低部産の茶飲み用小碗が1点、低部もしくは肥前系と考えられる碗1点、茶飲み用小碗1点、皿3点が出土した。図43は低部産の茶飲み用小碗である。図39～42は低部もしくは肥前系と考えられる碗・皿・小碗で、39は碗の底部で見込みに文様が見られる。40は皿で見込みに牡丹を描くが筆遣いが肥前のものとは違う⁴⁾。41は皿か鉢と考えられる口縁部で筆遣いが独特であり質の落ちた呉須が使用される。42は43とほぼ同種と考えられる茶飲み用の小碗で施釉が均一でなく所々に軸溜まりや無釉箇所が見られる。

(有田) (第89図44～61・第90図62)

有田産の碗、小碗(湯飲み・茶飲み用含む)、小杯、皿類、段重ね、そば猪口、瓶等29点が得られた。図44・46は見込み荒磁碗で46は高台が打ち欠かれる。図45は外面に土坡と牡丹のつばみが描かれる碗で東南アジア輸出用⁵⁾である。図47は湯飲み用小碗で呉須の発色も良く高級品である。図48は器面に僅かにピンホールが見られる小碗。図49は色絵の湯飲み用小碗であるが色絵部分は剥落している。図50は小型の広底碗を呈するが高台内に兜巾状の高まりが見られる。図51は茶飲み用小碗で釉薬が熔けていないため呉須以外は桃色に発色している。図52は湯飲み用小碗で外面には回転擦痕が顕著に残る。図53は景徳鎮模倣の小杯である。図54～56は良品である。54はヨーロッパ輸出品、55は八角鉢が登場する直前に生産されたタイプ、56は手塩皿である。図57は鉢、図58は高台の削りが非常に浅い蕎麦猪口である。図59は鉢か段重の蓋と考えられる。図60は図55と筆跡の似る段重でそのサイズから化粧道具入れの可能性が高い⁶⁾。図61は色絵の瓶で若松のに入った吉祥文が描かれる。2個体確認できた。若松は17C後半より描かれる。同タイプが鹿児島県瀬戸内町加計呂麻島在西家に伝承されている⁷⁾。図62は高台の高い瓶である。

(波佐見・波佐見もしくは有田) (第90図63～66)

波佐見産の碗類15点、小皿7点、瓶6点が得られた。図63は波佐見か有田と考えられる中皿で三力所に脚が付いていたようであるが、破損し付け根のごく一部のみに残る。龍泉窯風にするため蛇の目凹高台に鉄泥を塗布するが一部にチャツ(窯詰めに用いる小皿状の焼台)の熔着痕が残る。図64はいわゆる「くらわんか碗」で見込みに重ね焼きによる熔着痕が見られる。図65はやや大振りの碗で外面に器面調整痕が残る。図66は二重格子文の皿で呉須の鉄分が多いタイプも確認できた。

(瀬野) (第90図67)

瀬野産は1点のみの出土である。図67は瓶で質はあまりよくない。

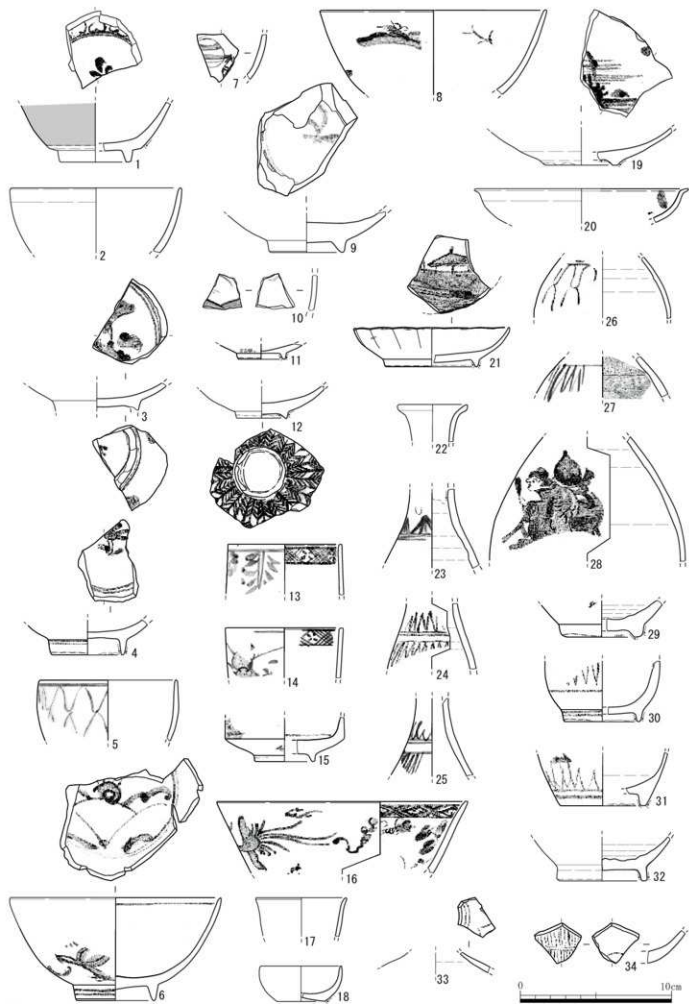
註1:大橋先生よりご教示頂いた 註2:北谷町教育委員会2015 P264 第119図-I 註3:波辺芳郎他『近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究』2015 図版57-33 参考資料:『世界に輸出された肥前磁器』九州近世陶磁学会 2010

第48表-1 本土産磁器(近世) 観察一覧

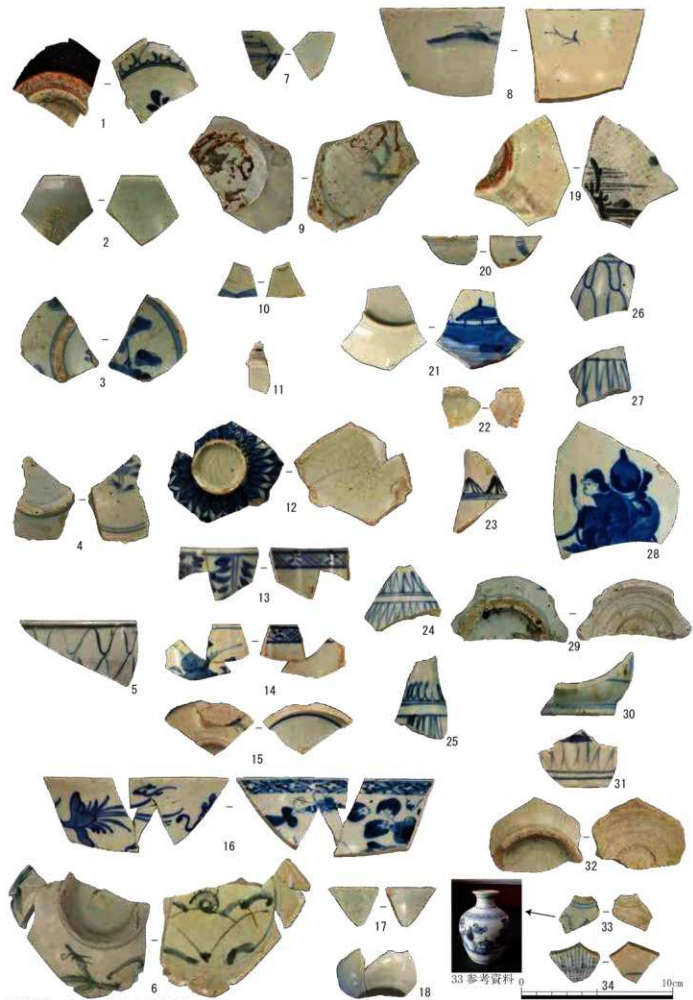
製陶 年代	番号	産地	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	器形 (用途等)	文様	軸色(範明)/須須発色	器面	成形	表地・軸	生産 年代	地区 (市町村 番番号)					
第80図・ 図版57	1	肥前	窯付	鉄輪付	底	4.8	—	天目型	内面:ハート型如意頭文・見込:草花文	外面:鉄軸(口=高台脇)内面:淡青白/青	内外面:ナシ	白	—	1630~40	HB ③ C13 II 台 3211					
	2			青磁	口	11.4	—	—	不明	内外面:淡緑色・貫入一部輪が附けず白く残る	外面:ハゲリ面内面:ナシ			外面:ハゲリ面内面:ナシ	1650~60	HB ③ R18-20 II 台 1632				
	3			—	—	—	—	高台が打ち欠かれる	内面:花文・團扇線?明?(大)	黄味がかった淡青白/青	外面:ビシキ			外面:ビシキ	1650~70	HB ② M9 III 台 910				
	4			底	4.8	—	—	脇より高台内が深く高台高い	高台脇:團扇線見込:花卉文	淡青灰(置付け部無輪)/青	淡青灰/青黒			内外面:ビシキ	内外面:ナシ	1650~70	HB ③ A12 II 台 2873			
	5			口	9.2	—	—	—	直口(口唇:舌状)肥前系	外面:欄目文網に魚は掛からない	淡青灰/青黒			淡青灰/青黒	内外面:ナシ	内外面:ナシ	1655~70	HB ② H4 II 台 1144		
	6			底	14.0	5.4	6.8	—	—	高台巾:狭口唇:舌状	外面:宝珠(荒磁文)			黄味を帯びる(総輪)/青黒	外面:淡黄灰/青内面:淡青白	内外面:ナシ	内外面:ナシ	17c後	HB ② G1 II 台 1047	
	7			胴	—	—	—	—	—	—	外面:淡黄灰/青内面:淡青白			外面:淡黄灰/青内面:淡青白	内外面:ナシ	内外面:ナシ	17c頃	HB ② E5 SK1 III 台 2302		
	8			口	15.0	—	—	—	—	直口(口唇:舌状)	内面:魚文内面:山水文			淡青灰/濃灰のある青(発色に違い)	淡青灰/濃灰のある青(発色に違い)	内外面:若干のビシキ	内外面:若干のビシキ	17c頃	HB ② G1 II 台 1732	
	9			底	5.0	—	—	—	—	高台が打ち欠かれる	見込み:草花文足掛けのためうろ			淡灰(総輪)/青黒	淡灰(総輪)/青黒	内外面:ナシ	内外面:ナシ	17c頃	HB ③ R18-20 II 台 1605	
	10			胴	—	—	—	—	—	荒磁文網肥前系	外面:荒磁文(須須)内面:草花?(金蛇丸)			淡黄灰/青	淡黄灰/青	内外面:ナシ	内外面:ナシ	17c頃	HB ④ O5 II 台 2818	
	11			底	3.2	—	—	—	—	赤絵	詳細不明			詳細不明	内外面:ナシ	内外面:ナシ	18c頃	HB ③ A11 II 台 2305		
	12			底	3.4	—	—	—	—	京焼系小碗に似せる(茶飲み)肥前系	矢羽根			淡青白(置付け無輪)/濃青	淡青白(置付け無輪)/濃青	内外面:貫入	内外面:貫入	18c後	HB ② E20 II 台 709	
	13			口	7.5	—	—	—	—	筒型(茶飲み)3点別個体	内面:四瓣帯外面:草花			淡青白/青	淡青白/青	内外面:ナシ	内外面:ナシ	170~180	HB ② II 台 1026	
	14			口	7.8	—	—	—	—	筒型(茶飲み)3点別個体	内面:四瓣帯外面:草花(梅花)			淡青白/青	淡青白/青	内外面:ナシ	内外面:ナシ	170~180	HB ② II 台 1026	
	15			底	4.0	—	—	—	—	筒型(茶飲み)3点別個体	内面:四瓣帯外面:宝文			淡青白(総輪)/青帯着物付着	淡青白(総輪)/青帯着物付着	内外面:ナシ	内外面:ナシ	170~180	HB ② II 台 1026	
	16			口	17	—	—	—	—	直口(口唇:舌状)	外面:鳳凰・宝文内面:蔓草			淡青白/青	淡青白/青	内外面:ナシ	内外面:ナシ	18c前	HB ② A2 II 台 1790	
	17			口	5.0	—	—	—	—	端反(口唇:舌状)	文様のある可能性あり			淡青白	淡青白	内外面:ナシ	内外面:ナシ	17c後~18c前	HB ④ F14 II SD42 台 3137	
	18			口	5.4	3.2	2.3	—	—	内面(島用の水入れ)肥前系	見込みに須須の飛びが見られる			透明輪/底部無輪	透明輪/底部無輪	外面:縦状痕	外面:縦状痕	18c後~19c前	HB ② D1 II 台 340	
	19			底	4.5	—	—	—	—	小皿	内面:山水			焼成不良、置付け無輪(高台内に砂粒の付着)	淡青白/青	淡青白/青	内外面:ナシ	内外面:ナシ	1630~50	HB ③ A13 II 台 2489
	20			口	14.2	—	—	—	—	口折れ(口唇:舌状)	内面:山水?			淡青白/青	淡青白/青	外面:貫入	内外面:ナシ	内外面:ナシ	1650~60	HB ② J6 II 台 1694
	21			口	10.4	6.2	2.6	—	—	輪花(手取皿)口唇:内角状肥前系	内面:山水			淡青白(置付け無輪)/青	淡青白(置付け無輪)/青	内外面:ナシ	内外面:ナシ	18c後~19c前	HB ② A1 II 上 台 1795	
	22			口	4.6	—	—	—	—	外反	小片のため詳細不明			淡薄緑	淡薄緑	内外面:ナシ	内外面:ナシ	17c後	HB ④ NO13 II 台 2775	
	23			—	—	—	—	—	—	平底(対て祭記用)	外面:吊り松葉			淡青白(内面無輪)/青黒	淡青白(内面無輪)/青	外面:ナシ	外面:ナシ	1650~70	HB ② S5 II 台 1554	
	24			—	—	—	—	—	—	高台有り	外面:銀歯状の欄目文			淡青白(内面無輪)/青	淡青白(内面無輪)/青	外面:ナシ	外面:ナシ	1650~70	HB ③ C9 II 台 1770	
	25			—	—	—	—	—	—	高台有り	外面:銀歯状の欄目文(須須は簡略化)			淡灰白/青黒	淡灰白/青黒	外面:ナシ	外面:ナシ	1660~80	HB ② T20 II 台 550	
	26			—	—	—	—	—	—	高台有り	外面:銀歯状の欄目文			淡灰白(内面無輪)/青	淡灰白(内面無輪)/青	外面:ナシ	外面:ナシ	1650~70	HB ③ F12 II 台 1398	
	27			—	—	—	—	—	—	高台有り	外面:銀歯状の欄目文			淡灰白(内面無輪)/青	淡灰白(内面無輪)/青	外面:ナシ	外面:ナシ	1660~80	HB ② T20 II 台 550	
	28			—	—	—	—	—	—	高台有り	外面:銀歯状の欄目文			淡青白(内面無輪)/明磁	淡青白(内面無輪)/明磁	外面:ナシ	外面:ナシ	1660~80	HB ③ A12 II 台 2335	
	29			—	—	—	—	—	—	高台有り(古いタイプ)	不明			淡青白(置付け無輪)/不透明	淡青白(置付け無輪)/不透明	外面:ナシ	外面:ナシ	1650~70	HB ③ A13 II 台 2489	
	30			—	—	—	—	—	—	高台有り	外面:銀歯状の欄目文			淡青白(内面・置付け無輪)/青	淡青白(内面・置付け無輪)/青	外面:ナシ	外面:ナシ	1660~80	HB ③ R19 II 台 1588	
	31			—	—	—	—	—	—	高台有り/対て祭記用	製部:草花肥前系			淡灰白(内面・置付け無輪)/青	淡灰白(内面・置付け無輪)/青	外面:ナシ	外面:ナシ	18c後	HB ② B2 I 台 2536	
	32			—	—	—	—	—	—	高台有り	不明			淡薄緑(内面・置付け無輪)	淡薄緑(内面・置付け無輪)	外面:貫入	外面:貫入	1650~60	HB ③ D10 II 台 595	
	33			—	—	—	—	—	—	高台有り	外面:銀歯状の進弁文			淡灰白(内面無輪)/青	淡灰白(内面無輪)/青	外面:ナシ	外面:ナシ	17c後	HB ② I7 II 台 1850	
	34			—	—	—	—	—	—	高台有り	外面:小片のため詳細不明			淡青白/青黒	淡青白/青黒	内外面:ナシ	内外面:ナシ	18c後~19c前	HB ② C19 II 台 1644	
	35			—	—	—	—	—	—	高台が打ち欠かれる	見込み:花卉文?製部:進弁			淡青白(置付け無輪)/青	淡青白(置付け無輪)/青	内外面:ナシ	内外面:ナシ	19c	HB ② C6 II 台 2322	

第48表-2 本土産磁器(近世) 観察一覧

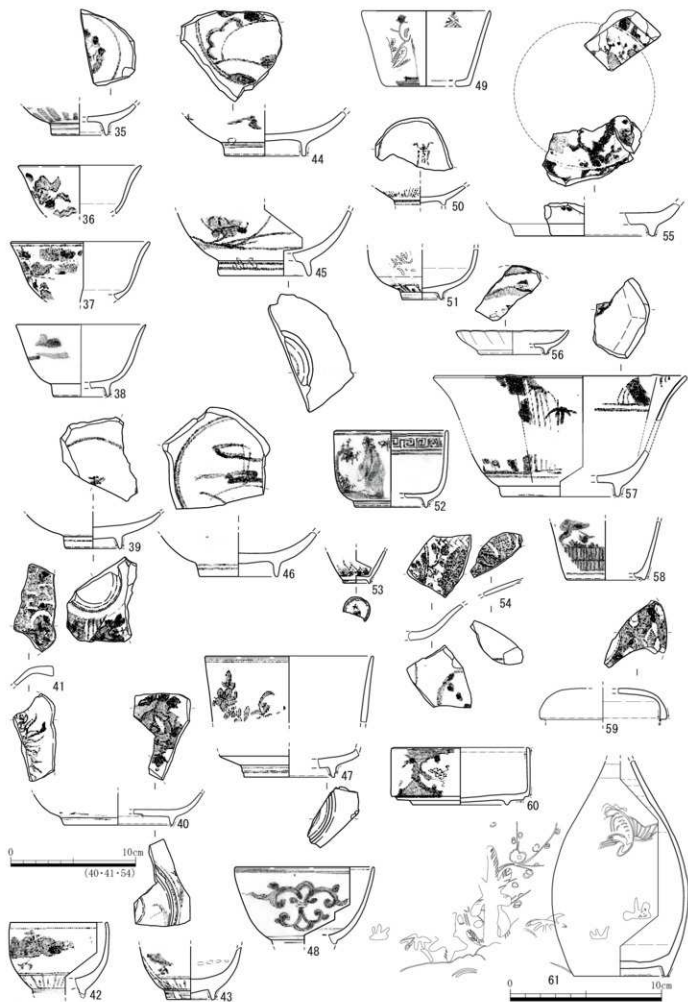
近現代版	番号	産地	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器形(用途等)	文様	釉色(範囲)/須焼色	器面	成形	表地	生産年代	地区(クリッド層番号)	調査機関(報告番号)
第89回・図版58	36	徳付	小碗	口	8.2	-	-	やや外反 口唇:舌状	外面:花唐草	淡青白/青 内外面:貫入	内外面:フ消し	白 縹密	縹密	1820 ~60	HB 2 T5 II 台 2591	
	37			口	9.2	-	-	やや外反 口唇:舌状	外面:花唐草	淡青白/青 内外面:貫入	内外面:フ消し			1820 ~60	HB 2 A8 II 台 1866	
	38			口 底	8.6	3.8	4.8	外反(口唇:舌状) 底厚?	不明	淡青白(覆付け無輪)/青 内外面:貫入	内外面:フ消し			1820 ~60	HB 3 T15 II 台 2479	
	39	肥前系 或底部	碗	底	-	3.8	-	底部のため詳細不明	植物・桜樹	淡青白(覆付け無輪)/青 内外面:貫入	外面:フ消し	型	縹密	1775 ~1800	HB 2 J6 II 台 1698	
	40			口	-	8.6	-	輪花 口唇:四角状	外面:不明・團線 内面:牡丹	淡青白(蛇の目四高台 無輪)/青黒・筆造いか 肥前の物とは違ふ	内外面:貫入			1775 ~1800	HB 2 K6 II 台 1569	
	41			口	-	-	-	方形(鉢の可能性も) 口唇:四角状	内面:亀甲文に花(唐 草)・外面:唐草	淡青白/青黒(貫の落ち た兵衛)・筆造いか肥前	内外面:フ消し			19C初 ~幕末	HB 2 B7 II 台 628	
	42			口 底	6.8	-	-	やや内湾 口唇:舌状 (茶飲み)	製部:松 體部:蓮弁	淡青白/青 無輪にムラ(輪面より やや無輪)	内外面にビシラ			19C初 ~幕末	HB 2 B4 II 台 1205	
	43	底部	小碗	底	-	3.2	-	饅丸 (茶飲み)	外面:松・蓮弁	淡青白(覆付け無輪)/青 無輪にムラ(輪面より やや無輪)・高台内に 筋あり	内外面にビシラ	型	縹密	1820 ~幕末	HB 3 E9 II S39 台 1057	
	44	徳付	碗	底	-	5.4	-	荒織文 有田?	外面:不明 見込み:荒織文	淡青白(覆付け無輪)/青 高台輪に一部無輪面	内外面:フ消し ビシラ			1650 ~70	HB 3 B13 II 台 2822	
	45	徳付	碗	底	-	6.2	-	東南アジア輸出用	外面:土城・ 牡丹(つばみ)	淡青灰/青/藍輪 覆付けに筋有	内外面:フ消し			1655 ~70	HB 3 T19 II 台 4296	
46	底			-	-	-	高台が打ち欠かれる	見込み:荒織文	淡青白/青/藍輪	内外面:フ消し	1660 ~80			HB 3 E16 II 台 1756		
47	徳付	碗	口 底	11.2	6.0	-	筒型 (湯飲み) 口唇:舌状 高級品	外面:草花(樹・楓草)	淡青白(覆付けのみ無 輪)/青	内外面:フ消し・ 若干のビシラ	型	縹密	1650 ~70	HB 3 S20 II 台 1030		
48	口 底	9.2	-	-	内湾 口唇:舌状	外面:唐草 内面:見込み・團線	淡青白(内外面:貫入) /青(團線は文様比 べて薄)	内外面:フ消し・ 僅かにビシラ	1650 ~80	HB 3 G184 II 台 2078						
49	底付色紙	小碗	口 底	-	-	-	筒型 (湯飲み) 口唇:舌状	口唇部:四方障 外面:色絵で草花	淡青白/呉須;青;色絵: 剥落	内外面:フ消し	型	縹密	18C後	HB 2 E20 II 上 台 708		
50	底付	底	-	-	-	小広東 今や兜巾	外面:梵字・高台輪に團線・ 見込:寿子・團線	淡青白/青	内外面:フ消し	1770 ~1810			HB 3 E11 II 台 3170			
51	色紙	底	-	2.6	-	-	饅丸 (茶飲み)	體部:蓮弁	色絵輪と透明釉が 落ちていない(覆付け無輪)/青	内外面:フ消し	型	縹密	19C 前半	HB 3 A11 台 1740		
52	口 底	7.6	4.8	5.1	筒型 (湯飲み) 口唇:舌状	外面:竹林・人物(上七人) /口唇部:帯の強い雷文	淡青白(覆付け無輪)/青	外面:回転擦痕	1840 ~1880	HB 3 E9 II 台 1358						
53	有田	小鉢	底	-	1.8	-	饅丸 (景徳鎮モデル)	外面:扇面状蓮文 高台内に「大明」	淡青白(覆付け無輪)/青	内外面:フ消し	型	縹密	1650 ~60	HB 2 G3 III SK3 台 2074		
54	胴	-	-	-	-	ヨーロッパ輸出用 /上質	内面:宝文・花卉文 外面:芙蓉手	淡青白/青	内外面:フ消し	1660 ~70			HB 3 T10 II 台 2508			
55	底	-	8.4	-	-	-	深淵	内面:梅木(鶯?)	淡青白(覆付け無輪)/青	八角鉢の直前	型	縹密	1775	HB 2 T4 II 台 3655・HB ④ J6-L6 I台 2528		
56	徳付	口 底	7.4	4.6	1.6	輪花(手取皿) 口唇:四角状	内面:山水 口唇:土城	淡青白(覆付け無輪)/青	内外面:フ消し	18C末 ~19C前			HB 2 B2 I 台 2536			
57	鉢	口 底	16.8	7.8	-	八角鉢 口唇:四角状	外面:竹林 内面:区画文	淡青白(覆付け無輪)/青	内外面:フ消し	型	縹密	19C前	HB 3 E9 II 台 1313			
58	口 底	-	5.6	-	-	高台:樹梨・割り (そば節)	製部:樹木(松竹梅?) 外面:柴垣	淡青白(覆付け無輪)/青	内外面:フ消し			18C後	HB 3 F11 II 台 959			
59	蓋	底	-	-	-	-	丸型(鉢か段重ね の蓋) 口唇:舌状	木製文・梅花	白(合わせせ)には泥墨 状のアルミシヤを塗布/ 青	外面:フ消し 内面:叩痕	型	縹密	19C前	HB 3 F8 II 台 926		
60	段重	身	9.2	6.4	3.8	丸型 口唇:四角状 高台:樹梨	外面:窓絵に梅木など	淡青白/青黒一焼成良好 重ね用の割りに砂糖付	内外面:フ消し・ 僅かにビシラ	19C初 ~幕末			HB 2 B19 II 台 2422			
61	色紙	瓶	口 底	-	6.2	-	玉壺春型の変形 (対て茶器用)	吉祥文(若松・竹・梅・ 瑞雲)	釉成良好だが色絵は 剥がれている/覆付け無 輪	外面:線状痕	型	縹密	18C後	HB 2 D2 II 台 1373		
62	底付	底	-	5.8	-	-	高台有り	外面:蓮弁・窓絵(色紙)	淡黄白(内面及び覆付 け無輪)/青黒	外面:フ消し・ ビシラ/内面:叩痕			18C末 ~19C前	HB 3 G11 II 台 2857		
63	有田 或波	中皿	底	-	-	-	三足 (龍泉堂風/高級 品)	内面:呉須にて團線が 添る	青緑・貫入/薄青 蛇の目四高台;鉄虎塗布 チャツの筋有	内外面:フ消し	型	縹密	1660 ~80	HB 2 B1 II 台 1925		
64	底付	口	10.8	-	-	-	くらわんか碗 直口(口唇:舌状)	外面:丸文(コシ印) 内面:帯と見込み:團線	淡青灰/青黒 重ね焼きによる焼痕	外面:叩痕			18C後	HB 2 D3 II 台 1082		
65	波文 底付	碗	口 底	-	-	-	やや人瓶形の碗	外面:土城・竹?	淡青白(蛇の目輪割) /青	外面:叩痕	型	縹密	18C後	HB 2 B20 II 台 839		
66	底付	小皿	口 底	12.0	-	-	小皿 口唇:舌状	外面:二重斜格子文	淡青灰/やや鈍	外面:叩痕 内面:フ消し			18C後	HB 3 DE15 II 台 875		
67	底付	瓶	胴	-	-	-	(質はあまりよく ない)	外面:團線・山水	淡灰(内面無輪)/青 黒	外面:フ消し 内面:叩痕	型	縹密	17C後	HB 2 G1 II 台 1041		



第 88 图 本土産磁器 (近世) I



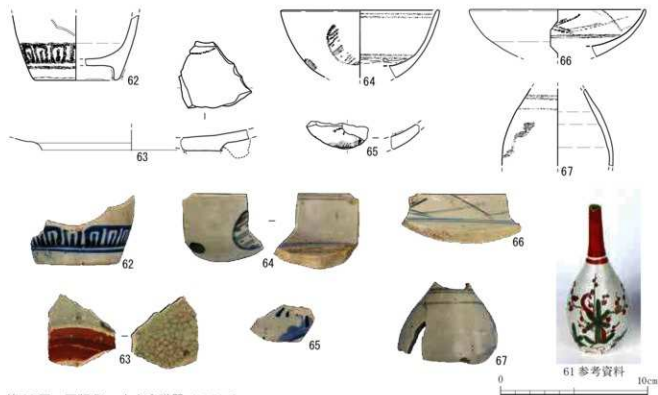
圖版 57 本土產磁器 (近世) 1



第 89 图 本土産磁器 (近世) 2



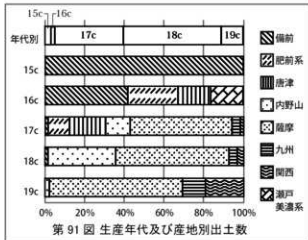
圖版 58 本土産磁器 (近世) 2



第90図・図版59 本土産磁器（近世）3

(9) 本土産陶器（近世）

HA ㉓ 229点、HA ㉔ 338点、HA ㉕ 53点の計620点が出土した（第50表）。11C頃に生産された須恵器の流れを汲む九州産陶器から15・16C代の備前産播鉢、16C末の肥前産陶器、武雄（佐賀県）周辺で生産された東南アジア向け輸出用の大皿、薩摩産の日用雑器や貯蔵容器、19C以降に信楽で生産された茶壺まで多種にわたって確認できた。建水・茶入・茶壺などの茶道具類や天目型碗及び沖繩産の風炉（第63図199・200）の出土から、当地に住む人々の中に茶道の嗜があった者が居たと想定される。大まかに日用雑器と貯蔵容器に分けると前者は333点、後者は288点と日用雑器が貯蔵容器の1.2倍程の出土量であった。器種別では碗138点、小碗11点、皿類70点、播鉢22点、土瓶44点、瓶14点、壺・甕類234点、小型の壺・甕類11点、その他鉢、鍋、茶入、火炉、急須、蓋、香炉等が数点ずつ確認できた。また、産地別では薩摩が314点で一番多く、内野山130点、唐津41点、九州（福岡含）37点、肥前・肥前系30点、備前系27点、関西系10点、信楽10点、瀬戸美濃系（志野含）6点で、九州とそれ以外に分けると、前者が96%を占めた。生産年代別に見ると15C:3%（備前100%）、16C:2%（備前42%・肥前42%）、17C:35%（肥前30%・内野山13%・薩摩53%）、18C:49%（肥前1%・内野山33%・薩摩55%）、19C:11%（薩摩66%・関西19%）と17C～18Cに生産された肥前・内野山の碗・皿や薩摩の壺・甕が多く得られた。分布図（第92図）から地区ごとに出土傾向を見てみると、HA ㉓では全域で17～18Cの遺物が数点ずつ得られるが、15Cの備前産は中央～西側で出土する。年代が新しい遺物ほど南側に多くなり、関西系は中央～南側の出土であった。HA ㉔でも全域に広がるが特に西側に多くG20・1（後の瓦屋又吉小）やJ3・4（後の坪子1）K6・7（後ののり子）でまとまった数が得られた。特に年代に偏りは無かったが、関西系は南側（後の照屋先生や三良又吉）からのみの出土であった。HA ㉕は備前産が一番多く出土した地区で、17Cまでの遺物と共に畠に關係する溝と考えられる遺構（SD41）周辺に広がっていた。また、白薩摩もHA ㉔から一番多く出土しているが、17Cに生産された2点が別々ではあるが溝と考えられる遺構から出土している事以外に關連性はつかめなかった。以下、産地ごとに概略し、主なものを第93～95図、第49表に観察一覧を示す。



〈備前産〉(第93図1～3)

15・16C代に生産された播鉢が19点出土。柳目が確認できたものは少なかった。HA④では15Cに生産された播鉢のみHA③②では15～16Cの播鉢が得られた。図1は図示した図2・3よりも若干古手で、唯一器高が窺える資料である。2は同時期に生産された播鉢片が3点確認できた。なお、今回茶入の頸部が出土しているが、小片のため図化は控えた。

〈肥前・肥前系〉(第93図4～14)

肥前・肥前系の碗11点、小碗1点、皿6点、壺5点の他に播鉢、小鉢、土瓶、瓶、火炉が1点ずつ得られた。全体的に数は少ない(肥前・肥前系磁器は336点)が、生産年代としては17C代が76%を占める。図4は茶道具として使用される建水の口縁部で口唇部に鉄釉を掛けて反酸している可能性がある。図5は鉄釉碗で高台脇の削り出しは緩やかである。図6～8は天目型の碗で、低い高台や二段作りの口縁部を持つが6と7では高台の形状に違いが見られる。今回は他に唐津産(1点)瀬戸美濃産(2点)、南九州産の完形品2点を含め計7点が確認できた。図9は鈔鉢皿で口唇部に熔着痕が残る。伏せ焼きにしたものと考えられる。図10は播鉢でほぼ隙間無く柳目が入る。図11は瓶でつけ掛けを行った様子のわかる資料である。未焼成分が多く、鉄釉の熔着もあり良品ではないが沖繩での肥前産瓶の出土は非常に珍しいとのことであった。図12は鉄釉と鉄泥の二彩手の壺である。鉄泥部に鉄釉の垂れが見られる。図13・14は内面轆轤痕が顕著な瓶と小碗である。14は器形からは瓶のようであるが高台の形状(兵器手)と内面に鉄釉が掛かる事から小碗とも考えられる。類似資料の増加を待ちたい。

〈唐津産〉(第93図15～27)

唐津産の碗が7点、皿(サイズ不明)17点、大皿10点、小碗、播鉢、土瓶、瓶が数点得られた。生産年代としては17C代が86%を占める。図15・16は碗で前者には鉄釉、後者には透明釉が掛けられる。図17は刷毛目の小碗で見込みは平坦である。図18～23は鉄銚皿である。18は高台の削りが整然とし、19は見込みに胎土積みの痕が残る。20は土見せ部の削りが顕著であるが一段のみで碗の可能性もある。21は砂目痕が顕著に残り、底面は三日月高台。22も砂目痕が顕著である。外面は施釉部と無釉部があり、鈔鉢裏には釉薬が白く熔け残る。23は見込みと畳付けに砂目痕、高台内には宛巾と縮輪織が見られる。図24・25は大皿で24は鉄銚後輪を掛けるが焼成不良で白い。25は刷毛目文と一部緑釉(銅緑釉)で絵付けされる。見込みに砂目痕が顕著である。図26・27は葉灰釉の瓶で平底面に糸切り痕と剝殻痕が残る。26は鉄絵が描かれたようである。底部脇にはつけ掛けの際付いたと考えられる指の痕が見え、その位置から左手を使用したようである。27の内部の器面調整は粗い。

〈内野山産・武雄周辺〉(第94図28～39)

内野山産の碗が102点、皿19点、小皿8点が得られた。生産年代は18Cが74%を占めるが、内外面に銅緑釉を掛け、畳付けを幅広く作る古手の碗も確認できた。図28～31は碗で銅緑釉と透明釉を掛け分けるが高台に違いが見られる。他にも銅緑釉・鉄釉・透明釉・灰釉・黄釉で掛け分けた碗が多数出土しており、外面に銅緑釉、内面に透明釉を掛けた碗が一番多かった(第51表)。中でも3点出土した鉄釉を両面掛けた碗は珍しい⁹⁾とのことであった。図32は端反りを強調した小碗である。図33～39は皿で34・35は見込みに蛇の目刺ぎと砂目痕が残る。36・37は小皿で胴下半部に削りが見られる。38・39は武雄周辺で生産された刷毛目文の中・大皿でいずれも東南アジア向け輸出品である。

〈薩摩産〉(第94図40～56・第95図57～66)

薩摩産は白土に透明釉を掛けた(白薩摩)小物類と黒釉・褐釉を掛けた(黒薩摩)貯蔵容器等とに分けられる。今回は白薩摩の小碗7点、皿、土瓶、瓶、袋物が1～2点ずつ、黒薩摩の土瓶39点、碗、播鉢、鉢、茶入、鍋、瓶等の袋物、香炉、蓋が数点ずつ得られた。図40～45は白薩摩と呼ばれる器物である。40・41は小碗で高台の形状に違いが見られる。42は鈔鉢の大皿である。43は袋物で桃形水注の蓋と考えられる。44は三足の土瓶で煤が付着する。45は堅冷水煎産の瓶でHA②D2からの出土であるがHA③F4からも同種の出土があった。図46～59・61～66はいわゆる黒薩摩で成形後、土灰釉を掛けるものである。焼成温度により発色は様々であった。また、胎土に粘土紐輪積みの痕が残る器物が多かった。生産年代は17C:33%、18C:53%、19C:14%で、壺・甕類のみでもほぼ同じ値である。46～48は龍門司系の窯で焼かれた器物で46は鮫肌釉の掛かる小壺。同種のものがHA②からも出土している。47・48は蓋付き小壺である。49は苗代川系の瓶で内面に器面調整時の指痕が顕著に残る。注口の付く可能性がある。50～52は土瓶である。50は全形の窺える資料で腰部から下には煤が付着。51は胴部に最大径を持つ器形で同年代に生産された土瓶の中では古手に該当する。52は注口で焼成温度が低く、釉化していない。53は茶入れてくびれの無い器形だと思われるが、小片のため詳細不明。天目様の発色を呈する。54は焼成温度が高すぎ釉色が飛んでしまった袋物である。器面が薄く器面調整痕が顕著であることから薩摩産ではない可能性もある。55～60は壺である。生産年代が新しくなると器壁が厚くなる様子が窺える。57・58は小壺で口唇部の形状にやや違いが見られる。59は高台を持つ底部で器壁は薄い。図60は無釉壺で内外面ともに叩き痕が顕著である。61・62は壺か甕か判然としないが、両

者とも口唇部は「T」字状に折り返し三角形の隙間を持つ。63・64は合わせ口のため口縁部がゆがむが全形の窺える資料である。軸の発色に違いが見られる。63は底部に耐火粘土（ヒラゴマ）が付着する。65・66は裏で両者とも土灰軸を掛けるが、口唇部に残る目痕の種類の違う。図版62の74～76はそれぞれに貼り付け文を持つ裏の肩部である。今回は図版のみの報告とする。

(九州産) (第95図67～70)

明確な産地は不明だが、九州で生産された陶器をまとめて報告する。九州産の碗が11点、小碗、皿、壺・甕・香炉等が各1～2点ずつ得られた。図67は二段の口造りの鉄軸小碗で天目型の可能性がある。図68は須恵器の流れを汲む壺である。内外面ともに叩きの痕が顕著に現れるが焼成はあまりよくない。唯一の出土である。図69は香炉で灰軸が掛かるが破熟がひどい。図70は福岡産の大型筒型鉢で火窓が開き内部に置き台を持つ。火炉か炬炬と考えられる。

(関西系(信楽産含む)) (第95図71～73)

明確な産地は不明であるが関西周辺で生産された器物で碗、筒型碗、皿、行平鍋、土瓶、蓋、小瓶、壺、袋物が数点ずつ得られた。また、信楽産の茶壺9点、袋物1点が得られた。生産年代としては17C:11%、18C:32%、19C:57%と19Cに生産された器物が多い。図71・72は信楽産の茶壺である。71は鉄軸掛け、72は腹白で腰部が露出する。この資料とは別に透明軸の掛かる腰部片も確認できたが、小片のため報告はひかえた。図73は破損した行平鍋の把子である。

(瀬戸美濃系(志野産含む))

数点ではあるが志野産の皿を含む瀬戸美濃系の碗、皿、瓶が確認できた。HB②では後の祝女殿内、瓦屋又吉小周辺より5点、HB④より1点出土している。資料は小片のため今回は報告をひかえた。

註：大橋先生のご教示による。

第49表-1 本土産陶器(近世)観察一覧

(注：単位はcm、g)

図版	番号	産地	器種	部位	口径	底径	器高	器重	器形	文様/施軸	素地/調整痕/他	成形	生産年代	地区(クワッド) 層位(取上) 行帳番号
第93図・ 図版60	1	播磨	襦袢	口 ↓ 底	—	15.6	10.6	0.7 51.2	外面口縁部下方 に盛り出した	脚目7本残存/無軸	赤褐色で細かい(大粒の白・赤 色粒) / 脚目による器面調整	粘土 積み 上げ	15C (古)	HA④117 II 台2494
	2			23.5	—	0.9 98.0	外面口縁部下方 にやや盛り出し	脚目4本残存/無軸	赤褐色で細かい(白・赤色粒) / 脚目による器面調整	15C	HA④G14 III 台2243			
	3			28.2	—	10.0 116.4	天目型	脚目8本/無軸	赤褐色でやや細かい(白色粒) / 脚目による器面調整	1590～ 1610	HA②G1 II 台1043			
	4	肥前	碗	口 ↓ 底	—	—	—	0.6 9.4	小鉢状の茶道用 (急須)	鉄軸を内側や突帯部に施軸後、長石軸 (発色の可能性)	灰色で細かい(砂粒) / 口縁 部をゆがめた可能性高い	口	1590～ 1630	HA③E5 I 1630
	5			4.6	—	64.7	三日月高台 やや兜山	鉄軸 内面と外面腰部	灰白色で細かい / 器面調整痕顕著	1590～ 1630	HA③T10 II 台2508			
	6			4.2	—	0.6 34.2	天目型 高台脇: 削り顕著	鉄軸 内面と外面腰部	淡茶色でやや細かい (砂粒と赤色粒)	1590～ 1630	HA③A13 II 台2489			
	7			11.0	5.2	5.4 38.8	天目型 高台: 削り出し	鉄軸 (内面: 総軸、外面: 二重口縁下 まで(他は乗れ?))	灰色で細かい (黒色粒)	1630～ 1640	HA③A2 II 台460			
	8			13.0	—	0.5 9.7	天目型	鉄軸掛け / 透明軸を総軸後、内面 (口唇部下より外面へ鉄軸) 焼成不良・ 焼成	灰白色で細かい	17C前半	HA③A14 II 台2802			
	9			22.6	—	0.5 20.6	円縁	透明に近い火軸 (口唇部に陥着痕)	暗褐色で細かい	17C前半	HA③G20 II 台1046			
	10			—	—	—	38.0	現存部は無軸 (口縁部に鉄軸が掛かるタイプ)	灰褐色でやや細かい(砂粒)	16C末～ 17C初	HA③C13 II 台3211			
	11	肥前	瓶	頸 ↓ 底	—	—	—	0.8 47.0	頸は短く、胴下 部に最大径	胴下部まで鉄軸のつけ掛け 内外面に残る白い部分は未焼成	暗赤褐色でやや細かい(砂粒と 赤色粒)	叩き	17C～ 18C	HA③D2 II 台1373・T1 II 上1788
	12			7.8	—	0.65 108.3	底部の詳細不明	外面: 鉄軸と鉄泥の二彩手。胴下部に 鉄泥が着られる。肩付けのみ無軸 (内面: 無軸(鉄軸の飛びあり))	赤褐色で細かい	—	HA③T4 II 台1556			
	13	肥前	瓶	底	—	—	—	0.5 47.7	高台脇: 削り顕著	高台脇より1.5cm程上方まで灰軸つけ 掛	灰色で細かい / 内面: 成形痕顕著	口	—	HA②B4 II 台1216
	14			5.1	—	0.3 69.1	鉄器手	内面: 鉄軸、外面: 灰軸	灰白色で細かい / 内面: 成形痕 顕著	1590～ 1630	HA②G20 II 台1042			
	15	唐津	碗	底	—	—	—	0.8 45.7	高台内: やや丸 山	鉄軸 内面と外面胴下平部	暗赤褐色でやや細かい(砂粒と黒 色粒(大)) / 器面調整痕顕著	口	17C 後半	HA②G20 II 台1061
	16			4.8	—	0.7 56.6	底部の詳細不明	肩付け以外透明軸を掛ける 外面: 一部輪がはじかれる	青白っぽく細かい(玉子手) / 外面: 器面調整痕顕著	1775～ 1800	HA②T1 II 台525			
	17	唐津	皿	口 ↓ 底	8.6	4.4	5.6	0.4 43.7	高台脇を削り出 し口縁部まで 直線に伸びる	内外面に白土で研毛目をつけた後、灰 黄褐色の軸を総軸(内外面: 貫入) 掛けは軸を省	灰褐色で細かい	叩き	1590～ 1610	HA②G20 II 台1036
	18			7.4	—	0.65 33.3	高台内: 兜山の 可能性	内面: 鉄軸後透明軸 器面: 貫入以上のひび	赤褐色でやや細かい	1590～ 1610	HA④P19 II 台2886			
	19	肥前	皿	底	—	—	—	0.6 67.3	内面: 鉄軸後透明軸(見込み: 胴上目痕) 灰黄褐色に発色。上見せ: 軸が掛かる	赤褐色でやや細かい(砂粒と黒 色粒) / 上見せに器面調整痕	口	1590～ 1620	HA③T9 II 台2806	
	20			5.4	—	0.8 40.0	小片の詳細不明	内面: 鉄軸後やや白濁した透明軸 外面: 高台脇	茶褐色でやや細かい(砂粒と黒 色粒) / 上見せに器面調整痕	1610～ 1630		HA③H3 II 台1157		
	21	唐津	皿	底	—	—	—	0.5 32.0	高台内: 兜山	薄く透明軸(内面: 全面外面: 高台脇) 見込み: 砂目痕。三日月高台	灰白色で細かい	叩き	1610～ 1630	HA③B16 II 台2995
	22			15.0	5.6	3.4 77.9	円縁・溝縁・高 台内外の高さ同 じ	鉄軸・溝縁・高 台内外の高さ同 じ	鉄軸(内面: 全面・外面: 平面に輪掛 け) / 見込み: 砂目痕	灰白色で細かい	1610～ 1630		HA③B16 II 台2995	

第49表-2 本土産陶器(近世) 観察一覧

(法量単位: cm, g)

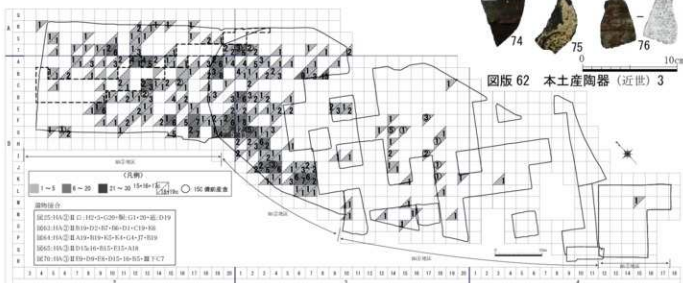
遺跡 図版	番号	産地	器種	部位	口径	底径	器厚 重量	器形	文様/施軸等	調整単位/素地/施	成形 器型	生産 年代	地区 クワッド 智通帳(取上) 台帳番号	
第93号・図版60	23	唐津	皿	底	-	4.8	0.48 46.2	高台内: 緋釉軸・ 内焼	透明軸(つけ付け) 見込み・髷付け: 砂目履	黄褐色でやや細かい		1610~ 1640	HA ㉔ B4 II 台 1340	
	24	大皿	口縁	24.8	-	0.6 37.9		白化前後、鉄銹を備す二彩手 焼成不良(輪化せず)		赤褐色でやや細かい (小色粒混)		17C後半 18C	HA ㉔ G20 II 台 935 HA ㉔ H3 台 1160 輪・底: HA ㉔ D19 台 263	
	25		唐津	口縁	24.8	10.4	0.9 89.9	鈔録	内面: 明目の流状文様、緑軸(緋輪軸) で髷付け後透明軸・見込み: 砂目履		赤褐色でやや細かい (小色粒混)		17C 後半	
	26		口縁	-	6.0	-	0.6 279.5	平底(底面に糸 切り痕)と粉痕	鉄銹後黄灰軸を施軸・底部との境に施 軸の指の痕残る。吻石可転		暗褐色で細かい(白色粒・ピン ホール多数)		16C末~ 17C	HA ㉔ C2 I 台 2362
	27		瓶	底	-	6.2	-	0.9 61.5	高台胎より施灰軸を掛ける				16C末~ 17C	HA ㉔ E3 II SD02 台 1487
内野山	28	口縁	12.2	5.2	7.3	0.4 67.3	呉器手	内面: 透明軸・外面: 緋緑軸 高台は上見せ		黄白色で細かい		1675~ 1750	HA ㉔ S18 II 台 2355	
	29	口縁	-	4.6	-	0.45 91.5	呉器手 高台内: 兜巾	外面: 緋緑軸(一部高台まで垂れる) 内面: 透明軸		灰白色で細かい		1675~ 1750	HA ㉔ D5 II 台 867	
	30	口縁	-	4.4	-	0.4 40.4	高台: 撥状・脇 の削りシヤープ	外面: 緋緑軸(高台まで垂れる)・内面: 透明軸。高台: 上見せ		黄白色で細かい		1675~ 1750	HA ㉔ F1 II 台 1581	
内野山	31	口縁	-	4.4	-	0.6 39.9	高台: 脇の削り シヤープ・打ち 欠	内面: 透明軸・外面: 緋緑軸 高台: 上見せ		黄白色で細かい		18C	HA ㉔ D13 II 台 3247	
	32	小瓶	口縁	9.4	-	0.25 5.8	端足の強調	内外面: 透明軸		灰白色で細かい		1610~ 1630	HA ㉔ R15 I 台 1279	
	33	小瓶	口縁	13.4	-	0.3 4.5	溝線	内面: 透明軸・外面: 透明軸が流れる		灰白色で細かい		1610~ 1630	HA ㉔ H14 SD41 台 3090	
	34	皿	底	-	7.0	-	0.55 190.9	緩やかに胴部へ 延びる	内面: 緋緑軸・外面: 透明軸(高台胎) 見込み: 髷/口縁割ぎ・砂目履		黄白色で細かい	17C 後半	HA ㉔ S12 II S7 台 714	
	35	口縁	-	6.0	-	0.5 36.0	腹部・角気味に 立ち上がる	内面: 緋緑軸・外面: 灰軸(髷付け無軸) 見込み: 髷/口縁割ぎ・砂目履		灰白色で細かい		17C後~ 18C始	HA ㉔ E9 II S39 台 1074	
	36	小瓶	口縁	10.4	-	0.4 11.9	胴下半部に削り (高台あり)	内外面: 透明軸に近い灰軸 見込み: 髷/口縁割ぎ		灰白色で細かい(黒色粒混)		17C末~ 18C半	HA ㉔ R12 II S7 台 979	
	37	口縁	11.2	4.2	3.5	0.4 65.9	口縁部に削ら れた	内面: 緋緑軸・外面: 透明軸(口~腰) 髷/口縁割ぎ・砂目履		黄白色で細かい		1675~ 1750	HA ㉔ J6 II 台 1698・1708	
	38	中皿	口縁	22.0	-	0.6 23.1	腰線	内面に白上で刷毛目後、灰黄褐色の軸 を内面と外面の胴上部に施軸		暗赤褐色で細かい(砂粒混)		17C 後半	HA ㉔ C11 II 台 1591	
	39	大皿	口縁	33.3	-	0.65 28.9	東洋アジア輸出 品	内面に白上での刷毛目後、灰黄褐色の 軸を掛ける		暗褐色で細かい		17C 後半	HA ㉔ T8-9 II 台 1662	
	第94号・図版61	40	小瓶	底	-	3.8	-	0.4 19.9	高台胎よりも高 台内が深い	白化前後透明 見込み: 髷/口縁割ぎ・髷付け: 輪軸 粗製		黄白色で細かい(ピンホール) 多数	18~ 19C	HA ㉔ D16・17 II S4 台 1530
41		口縁	8.0	4.0	4.4	0.3 61.4	高台高い	透明軸(貫入)・髷付け: 輪割ぎ 窯の中で染付と一緒に焼成されたた め、器面に灰濁の飛びあり		白色で細かい		19C	HA ㉔ E9 II 台 2020	
42		大皿	口縁	-	-	0.65 12.9	鈔録	内外面: 透明軸(貫入)		黄白色でやや粗い(僅かに黒色 微粒子混)		17C?	HA ㉔ G4 III P40 台 2110	
43		口縁	-	-	0.4 23.3	袋物 (桃形水注?)	透明軸(貫入) 内面: 輪軸、外面: 全面		黄白色でやや粗い(僅かに黒色 微粒子混)		19C?	HA ㉔ T4 II 台 1562		
44		土瓶	底	-	-	0.45 49.8	脚長の三足	外面: 脚の高さまで透明軸 髷付け		黄白色で細かい (ピンホール多数)		19~ 18C半	HA ㉔ E9 II 台 1369	
45		瓶	底	-	7.0	-	0.4 43.6	高台削出し	透明軸(緑色気味・貫入) 内面: 無軸、髷付け: 輪割ぎ		黄白色でやや粗い(内面/吻部) 肌着、丁傘/寒冷水漬		17C後~ 18C	HA ㉔ D2 II 台 1368・1374
46		小瓶	底	-	7.2	-	0.5 83.5	詳細不明	外面: 板肌軸。小さな灰色粒が高台胎 までを覆う		青灰色で緻密 陶器同系		江戸 末	HA ㉔ A13 IV 台 2147
47		蓋	完	9.4	6.6	2.9	0.7 91.0	傘型	白化前後内面: 黄軸、内面: 透明軸(か かわ先端は無軸)		赤褐色で細かい 陶器同系		18C後~ 19C	HA ㉔ D3 II 台 1082
48		口縁	9.0	8.1	11.0	0.5 273.5	胴に最大径を特 つ	全面: 白化前後内面: 透明軸、外面: 黄軸(内背式)後、肩部より灰軸を流 す。内背及び口縁は輪割ぎ。その後鉄 軸で脚線		赤褐色で細かい(若干の砂粒混) 内面: 粘土積上/背時の指痕 面/肌着		18C後~ 19C	HA ㉔ E20 II 台 1496	
49		瓶	口縁	6.2	-	0.6 32.7	最大径: 胴部。 (注1)の付く可 能性あり	上灰軸・内外面共にツヤあり 口縁部: 無軸(使用中に磨滅)		灰褐色で細かい(若干の砂粒混) 内面: 粘土積上/背時の指痕 面/肌着		明 き	18~ 19C	HA ㉔ G6 S640 台 2137・47 II 台 1306
50		土瓶	口縁	14.8	5.2	-	0.3 78.3	最大径: 腰部 口縁部に削ら れた	上灰軸? 口縁部・胴下半部及び底部: 無軸		赤褐色で細かい(白・黒色粒混) 外面: 溝線状の器面調整痕が顕 著		18C半~ 19C	HA ㉔ E1 台 +R37・D1 II +HA ㉔ S19 II 台 3204
51		土瓶	口縁	12.8	-	0.6 26.4	最大径: 胴部	上灰軸 [外面: ややツヤあり 内面: 砂粒状にざらつく]		赤褐色で細かい(砂粒混)/外 面: ツヤ消し		18C半~ 19C	HA ㉔ T12 II S7 台 1289	
52	注口	注口	-	-	0.5 16.8	注口は髷付け	上灰軸 焼成温度が低く、輪化していない		赤褐色で細かい (やや砂粒混)		明 き	18C後~ 19C前	HA ㉔ D10 II S39 台 1978	
53	茶入	肩	-	-	0.3 6.6	くびれ無し	外面: 黒筋軸(天目状に白い斑点が入る)		暗灰色で細かい(黒色粒混) 型野冷水漬?		17Cか?	HA ㉔ A3 II 台 419・F20 II 台 818		
54	袋物	底	-	10.0	-	0.5 33.8	平底(器型は 薄く胴部へ傾 延)	薄・灰軸(土灰) 焼き回りで白い・剥落		暗紫色で細かい(砂粒混)/ 器面調整痕顕著		17C	HA ㉔ H4 II 台 2977	
55	壺	口縁	11.6	-	0.4 33.9	口唇部を外側に 折り返す。最大 径は胴部に持つ	内外面: 薄・上灰軸 焼成温度が低く輪化せず。口唇部は拭 取り加したのが合わせ口でも剥落せず。		暗紫色で細かい(砂粒混)		明 き	17C	HA ㉔ F17 III 台 2166	
56	壺	口縁	17.7	-	0.4 7.8	小型	上灰軸(軸が流れる) (口唇部無軸)		暗紫色で細かい(砂粒混)		17C半~ 17C末	HA ㉔ I 台 4599		

第III章 5

第49表-3 本土産陶器(近世) 観察一覧

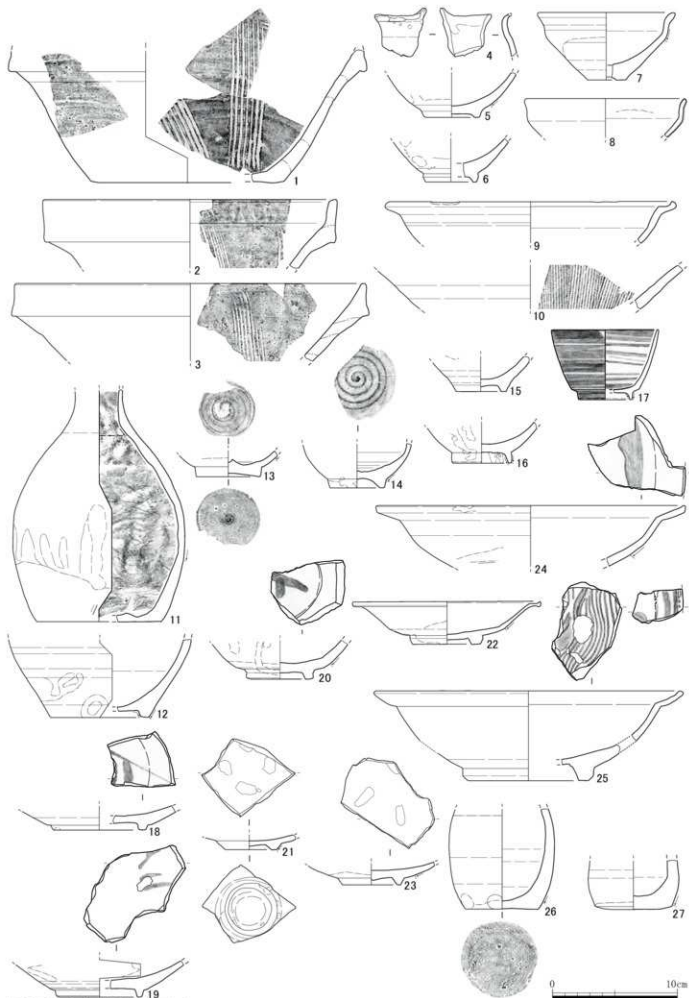
(法量単位: cm, g)

図版 図版	番号	産地	器種	部位	口径	底径	器高	器厚 重量	器形	文様/施軸	素地/調整痕/他	成形 形態	生産 年代	地区(グロッ ド) 台番号(取上) 台番号	
第95 図・ 図版 62	57	薩摩	小壺	口縁	11.2	-	-	0.45 49.4	口唇部は折り返し玉縁状に作る	黒釉(外面:ツナ・内面:砂粒状にさびつく)口唇部の釉は拭き取らず底面に右灰が付着(二枚貝殻縁部?)	暗赤褐色で細かい(砂粒混)/内外面共にナデ消し	叩き	17C平~ 18C	HA ㊟ D11 II 台 3190	
	58		小壺	口・底	9.0	6.2	-	0.8 83.9	胴部で最大径、底部に向かいすぼむ	土灰輪(内外面共にツナ)口唇部には合わせ口の痕跡	黒褐色で細かい(黒色粒混着)		18~ 19C	HA ㊟ F17・18 II S10 台 2098・2099	
	59		壺	底	-	9.8	-	0.5 206.5	削り出し高台	胴上半部:鉄軸・胴下半部:無軸 足みに鉄軸の飛び(施軸時?)	明茶褐色で細かい(砂粒混)/内外面:調整痕顕著		18C平~ 19C	HA ㊟ F1 II 台 1536	
	60		壺	頸	-	-	-	0.7 158.1	耳付き	無軸	明茶褐色で細かい(砂粒及び小石混)/外面:横線状の叩き痕		19C	HA ㊟ F9 II 台 1344	
	61		糞分壺	口縁	14.4	-	-	0.6 109.0	口唇部は折り返し「丁」字状・胴部に耳あり	内外面:土灰輪(口唇一部無軸)	紫褐色でやや粗い/外面:ナデ消し(砂粒多数混)		18~ 19C	HA ㊟ B8 II上 台 2406	
	62	薩摩	糞分壺	口縁	13.4	-	-	0.6 97.0	叩き/口唇部は折り返し「丁」字状	灰上半部:土灰輪(口唇一部無軸) 内外面共にツギあり	内面:横線状の表面調整痕が顕著・外面:ナデ消し黒褐色で細かい(黒色粒混着)		17~ 18C	HA ㊟ AT12 II S7 台 991・1293	
	63		壺	口縁	12.4	11.6	24.6	0.8 2.500	三耳壺(合わせ口でゆかむ)	黒褐色 底部に耐火粘土(ヒラゴマ) 焙着	黒褐色で細かい(砂粒顕著) 内部に右灰付着		18~ 19C	HA ㊟ B19 II 台 845 他	
	64		壺	口縁	13.4	14.0	24.0	0.8 1.835	三耳壺(合わせ口でゆかむ)	内外面:土灰輪が生地の鉄分と反応 口唇部は無軸。耐火粘土痕	黒褐色で細かい(砂粒顕著) 器蓋:灰中に含まれる白色粒多数付着		18~ 19C	HA ㊟ A19 II 台 1520 他	
	65		糞分壺	口縁	20.5	16.6	35.1	0.6 3.650	平口縁で「丁」字状	土灰輪 口唇部に耐火粘土痕	赤褐色でやや細かい(白色粒と黒色粒混)/横位の線状痕		18C	HA ㊟ D15 II S16 台 2216 他	
	66		糞分壺	口縁	17.2	-	-	0.3 46.6	口唇部:折り返し「丁」字状・胴部は約3cmの間隙を空けて貝目造成不良	内外面:土灰輪?(口唇一部無軸) 口唇部には約3cmの間隙を空けて貝目造成不良	暗赤褐色で細かい(白色粒混)		19C	HA ㊟ A20 II 台 1309	
	67	南九州	小壺	口縁	8.8	-	-	0.5 14.9	天目型?	鉄軸	灰白色で細かい/内外面:器面調整痕顕著		ロクロ	18~ 19C	HA ㊟ C4 II 台 2448
	68	九州	壺	胴	-	-	-	10.0 81.3	最大径は27cmを越す	無軸 外面には煤が付着	明灰色で細かい(茶・黒・白粒子) 内外面:成形痕顕著		叩き	11~ 13C	HA ㊟ F13 II S18 台 858
	69		香炉	口・脚	15.8	-	7.2	0.5 304.0	三足	灰輪 ひたい被熱	灰色で細かい(黒色粒混)		-	17Cか?	HA ㊟ C2 I 台 1961
	70	福岡	壺型鉢	口・底	23.6	22	16.3	0.6 1.098	円筒形大?か提付?	鉄軸に土灰を流し掛け	灰白色で細かい(黒色粒混)		ロクロ	19C	HA ㊟ E9 II 台 1057 他
	71	信楽	壺	底	-	-	-	0.5 22.6	茶壺	外面:鉄軸施軸後、灰輪掛け流し	灰白色で細かい(ピンホール多数)/内面:器面調整痕顕著		粘土積み上げ	近世	HA ㊟ T10 II上 台 635
	72	信楽?	壺	底	-	7.8	-	0.7 23.7	茶壺	腰部から無軸	黄白色で細かい		粘土積み上げ	19C 以降	HA ㊟ R18-20 II 台 1632
73	関西系	鍋	口・取	11.4	-	-	0.3 15.6	行平	透明輪・蓋受けは無軸	黄白色で細かい/器面調整痕顕著	ロクロ	19C	HA ㊟ B18 II S12 台 975		
図版 62	74		糞分壺	口縁	-	-	-	0.8 23.3	胴部:縄状突起	無軸	黒色で細かい(若干の白色粒)	-	-	HA ㊟ A20 II 台 1321	
	75	薩摩	糞分壺	口縁	-	-	-	0.8 23.9	胴部:縄状の花弁貼り付け	外面:土灰輪	褐色でやや粗い(砂粒多数混) 内外面共にナデ消し	-	17C	HA ㊟ E4 II 台 1457	
	76		糞分壺	口縁	-	-	-	0.6 25.2	胴部:2条の突起	無軸	灰褐色でやや粗い(砂粒多数混)	-	-	HA ㊟ F18 II S10 台 1573	



図版 62 本土産陶器(近世) 3

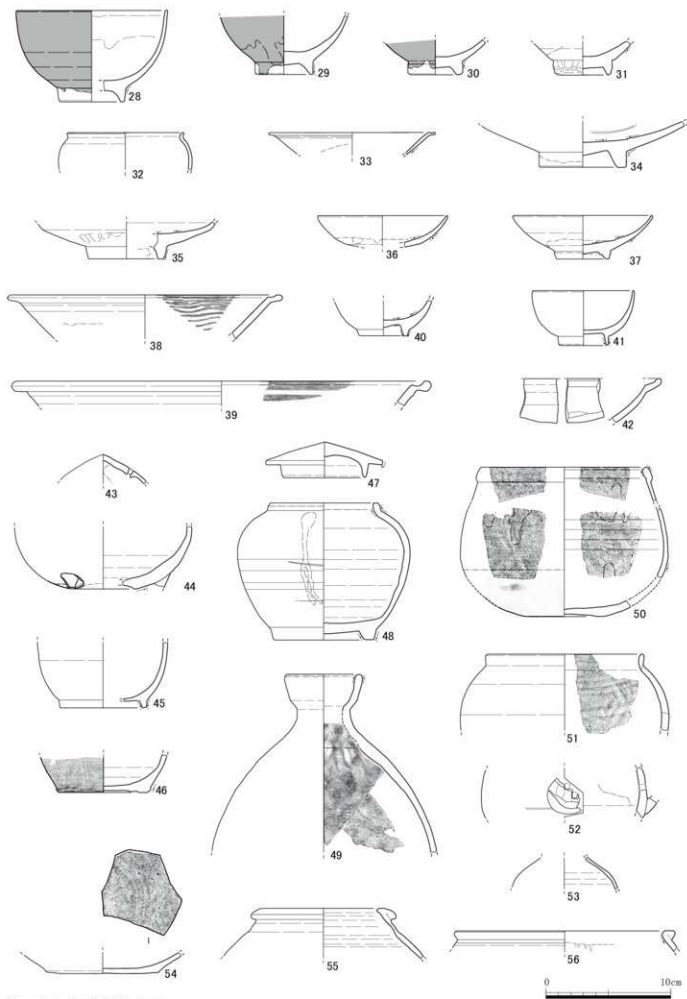
第92図 本土産陶器(近世) 平面分布



第93図 本土産陶器 (近世) 1



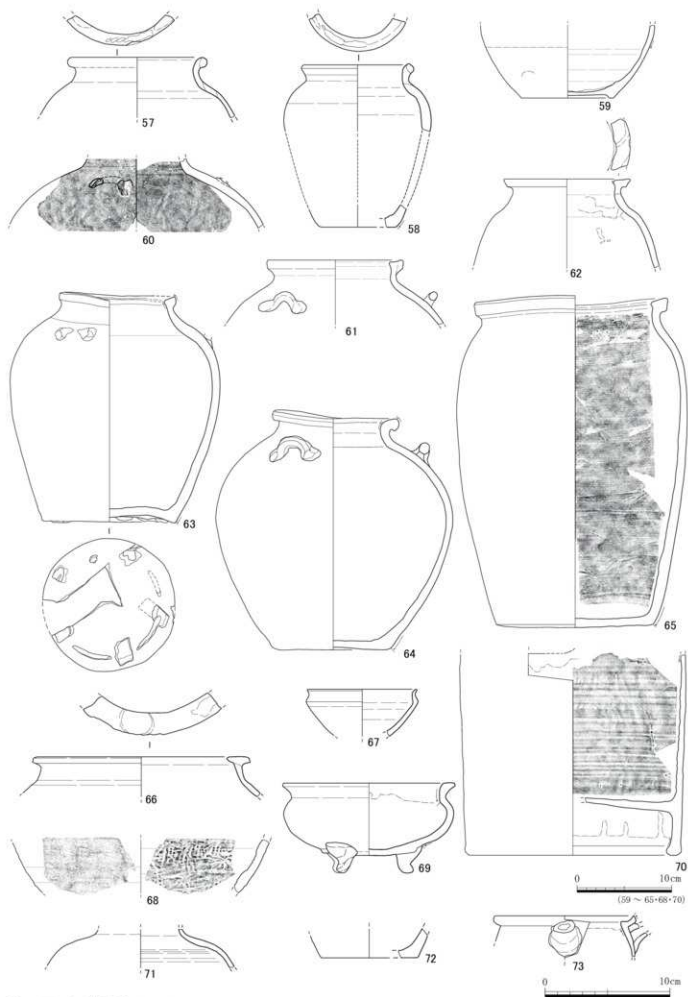
圖版 60 本土產陶器 (近世) 1



第94図 本土産陶器（近世）2



圖版 61 本土產陶器 (近世) 2



第95図 本土産陶器 (近世) 3



図版 62 本土産陶器 (近世) 3

(59 ~ 65-68-70)

(10) 染付

総数 2507 点 が得られ器種別に碗 1989 点・皿 268 点・杯 161 点・鉢 16 点・瓶 44 点・壺 13 点・レンゲ 2 点・深鉢 2 点・小碗 or 杯 4 点・碗 or 皿 2 点・蓋物碗・袋物・水注・合子・蓋・盤が各 1 点であった (第 54～56 表)。碗は全体の 79.3% と多数を占め、皿、杯、瓶とつづく。生産地は中国を中心にベトナム産が 2 点みられ、中国産は景德鎮窯、漳州窯、徳化窯、福建・広東系がある。生産年代は 15C から 17C の明代から 17C 後半から 19C の清代があり、清代が多い。分類は形態、成形方法、文様構成、施文範囲、軸調、素地により行い明代の編年は小野正敏 (1982) に準拠する。当該器の出土は II 層に多い。平面分布においては清代のものが HA ②では祝女殿内、瓦屋又吉小、三良又吉小の遺構に集中し、HA ③は仲村渠と大屋の遺構と重なる。明代は全体の 20% に止まり、特に分布に偏りはみられなかった (第 96 図)。

1. 碗: 20 類に分類でき、更に細分されるものは第 52 表に示した。生産年代は明代中期から後期と清代に位置付けられる。明代の生産地は景德鎮窯産が全体の 41%、福建・広東系産が 34% で漳州窯産が 2% であった。清代は景德鎮窯産が 2%、徳化窯産が 1% と少数で福建・広東系が 90% と圧倒的である (第 54 表)。

I 類: 口縁は強い外反を示す。腰が張り胴部は逆「八」の字状に外に開き立ち上がる。高台は細身で断面形態はやや方形に近い。内底は平坦である。

内外面の文様は口縁に雷文帯、文字文帯、四方禪、半花菱、亀甲繫文などの帯文と胴部に八宝唐草文、松竹梅、蕉葉文、唐草文などを組み合わせる複数の文様構成を持つものと、外面の口縁から胴部に圏線と唐草騎馬、唐草、梅月文などの単一文様を描くものとなる。図 14 は線刻の地文を施す。見込みは圏線に松竹梅、梅花、野菜文、樹木、草花文などが施文される。貫入が入るものがある。図 1～3・5～7・9・10・13・14・18・20・32～34・41。小野分類 B 群

II 類: 腰部に張りを持たずラップ状に外に開きながら立ち上がる。口縁は大きく外反する。口唇の形態は丸い。高台断面形態は三角状。外面に宝相華唐草文を描く。図 8・17。小野分類 B 群

III 類: 胴部は緩やかに外に開きながら立ち、口縁の外反は弱い。外面に単一文様の牡丹唐草文を描く。器壁が薄い。図 4。小野分類 B 群か?

IV 類: 内底が下がる蓮通心である。腰に張りがなく高台から開き立ち上がる。高台は低く断面形態が細身の三角状を呈する。外面に如意頭文、唐草文を描き、内底面に草花文を描く。図 12・16・19。口縁は内湾気味の直口になることが予想される。小野分類 C 群

V 類: 腰にやや丸味を持ち緩やかに立ち上がる。内底が下がる蓮通心である。口縁が直口外面の口縁に波涛文、唐草文を帯条に巡らす。中に二条圏線を配し、下に蕉葉文、唐草を施文している。内底見込みに法螺貝文、蓮華文、捻子花文がある。図 23・24・26～28・38・42。小野分類 C 群

VI 類: 腰が張り腰折れ様に屈曲させる。内底は平坦。高台は細身で断面形態は三角状。外面にアラバスク文や唐草を描き高台脇と高台に圏線を配する。内面は施文する例と無文とあり図 29 は窓絵 (如意頭形) に草花を描き、窓外に渦文を充満する。内底面は十字花文、草花文、団扇文を描いている。図 40・43。小野分類 D 群か?

VII 類: 腰が折れ、胴部は直線的に開き立ち上がる。口縁は直口を成す。外面の文様は口縁の帯文と胴部文に分かれ施文される。口縁は波涛文、帯条の唐草文を巡らし下位にアラバスク文を描く、内面は二条圏線を配し内底面に圏線が確認できる。内底見込みに十字花文、渦花文、花文があげられる。図 22・25・30・31・35・36・39。小野分類 D 群

VIII 類: 口縁は開いた直口やや内湾気味に立つ直口がある。腰にあまり張りはなく胴部に丸み持ちやや開きながら立つ。高台は細身で内底は饅頭心である。外面は松や仙人、豹皮文、唐草文、竹に鳥を描く。内底面に山水文、草花文を描く。高台内に「天下太平」等、銘款を付すものがある。図 44～46・49～51。小野分類 E 群

第 52 表 染付碗分類 (小分類があるもののみ)

分類	小分類	文様構成
I	1 外面 瓶敷文	口縁文様: 圏線、半花菱文、雷文 胴部文様: 八宝唐草文、不明
	1 内面 瓶敷文	口縁文様: 四方禪文、チベット文字文 胴部文様: 牡丹唐草文
	2 外面 瓶敷文	口縁文様: 亀甲繫文 胴部文様: 牡丹唐草文 (二友文)、蕉葉文
	3 外面 単一文	口縁文様: 圏線、竹梅文 内底文様: 唐草文
	3 内面 単一文	胴部文様: 騎馬唐草文、牡丹唐草文、牡丹唐草文
II	3 外面 単一文	口縁文様: 圏線、卓在文
	4 外面 単一文	胴部文様: 梅花文と松樹文 (梅花文)
	4 内面 単一文	内底文様: 梅花文
	5 内底 単一文	内底文様: 圏線、花文、野菜文、藤木文、梅月文
	III	1 外面 瓶敷文
1 内面 不明		内底文様: 卓在文
2 外面 不明		胴部文様: 唐草文
2 内面 不明		胴部文様: 無文 内底文様: 圏線、卓在文、梅月文
IV		1 外面 単一文
	1 内面 単一文	内底文様: 圏線、唐草文
	2 外面 単一文	胴部文様: 松や仙人、人物
	2 内面 単一文	内底文様: 圏線、山水文、草花文
	2 内面 単一文	天下太平
V	1 外面 単一文	胴部文様: 圏線、唐草文
	1 内面 単一文	内底文様: 花卉・蛇の目輪周ぎ
	2 外面 単一文	口縁文様: 圏線、唐草文、山水文
	2 内面 単一文	口縁文様: 圏線、如意文
	VI	1 外面 単一文
1 内面 単一文		内底文様: 圏線
2 外面 単一文		口縁文様: 圏線、団扇文、唐草文
2 内面 単一文		口縁文様: 圏線 内底文様: 圏線、花卉
VII		3 外面 単一文
	3 内面 単一文	内底文様: 不明
	4 外面 瓶敷文	口縁文様: 圏線、竹文 胴部文様: 方形扇周縁文
	4 内面 単一文	内底文様: 圏線、花卉
	4 外面 瓶敷文	口縁文様: 圏線、半輪、鹿文文区画区 胴部文様: 蓮弁文
VIII	1 外面 瓶敷文	口縁文様: 圏線 胴部文様: 圏線
	2 外面 瓶敷文	口縁文様: 圏線、半輪、存字区画文 胴部文様: 蓮弁文、蓮弁文
	2 内面 単一文	内底文様: 圏線、踏鼓
	3 外面 瓶敷文	口縁文様: 圏線、唐草文
	3 内面 単一文	口縁文様: 圏線 内底文様: 圏線、花卉、踏鼓
IX	4 外面 瓶敷文	口縁文様: 唐草文 胴部文様: 蓮弁文
	4 内面 単一文	内底文様: 圏線、花卉、踏鼓
	5 外面 瓶敷文	口縁文様: 帯文 胴部文様: 蓮弁文
	5 内面 単一文	内底文様: 圏線、雷文
	6 外面 瓶敷文	口縁文様: 圏線、半輪、卓在文区画区 胴部文様: 蓮弁文
6 内面 単一文	内底文様: 圏線	

IX類：輪花状外反口縁を呈する。口唇に刻みを入れ口唇の断面形態は角状。

外面に圏線と花鳥画を描き、内面は圏線を配する。図 47。

X類：腰は屈曲し外に開き立つ口縁は外反。外面に唐草文、山水文を描く。内面は芝蔓文を巡らしている。高台の断面形態は三角状。内底面は花卉を施し、見込みは蛇の目軸刺ぎをしている。図 48・52～54。

X I類：胴部は逆「八」の字状に大きく外に開き口縁は直口する撥形碗である。口唇の断面形態は丸状。外面は上段に半梅花文繫ぎを施し下段は唐草文を描く内面は圏線を口縁と見込みに配し蛇の目軸刺ぎしている。高台内は露胎している。図 55・64・67。

X II類：口縁は直口する。撥形碗である。腰部はやや丸み持ち大きく外に開き立つ。高台は外例りの断面形態は台形。内底は中心がやや盛り上がる。外面に一条圏線と帯条唐草文を描き高台脇に一条圏線を配する。内面見込みに一条圏線と草花文を配している。軸は見込みの際まで施軸。外底と内底は露胎している。図 56・57・69

X III類：腰部に丸み持ち逆「八」の字状に大きく外に開く直線的に立つ。口縁は直口し口唇の断面形態は丸状。高台は外例りの断面形態は四角形。内底は中心が盛り上がる。饅頭心で外面の口縁と腰部に一条圏線を、内面は口縁と見込みに圏線を配している。軸は見込みの際まで施軸。外底と内底は露胎している。X I、X II類が無文化したもの。図 70～74

X IV類：腰部から直線的に逆「八」の字状に大きく外に開き立つ。口縁は直口する撥形碗である。口唇の断面形態は丸状。高台の断面形態は台形と三角形があり。内底は中心が窪むものと盛り上がるものとある。外面に圏線と唐草文、字文を描く。見込みが蛇の目軸刺ぎされ物置付は露胎するものと軸を見込みの際まで施し、外底と内底は露胎している物とある。図 58～60・63・65・66・68。

X V類：腰部から直線的に逆「八」の字状に大きく外に開き立つ。口縁は直口する浅い撥形碗である。口唇の断面形態は丸状。高台の断面形態は四角。外面に唐草文を描き内面は一条圏線を配する。軸は見込みの際まで施軸。外底と内底は露胎している。図 61・62。

X VI類：腰部から直線的に逆「八」の字状に大きく外に開き立つ。口縁は直口する撥形碗である。口縁径と底径の差が小さい。口唇の断面形態は丸状。高台は外例りの断面形態は台形。内底は中心が窪む。外面に菊花の印花文と草花文を描く。内底は蛇の目軸刺ぎし、高台は露胎している。図 75～81。

X VII類：腰部は張りりと丸みを持つ、ほぼ直線的に立ち上がり口縁は直口する。口唇は丸い。高台の断面形態は細身の先端の丸い方形。外面に圏線と牡丹唐草文を描き腰下部に蓮弁文を巡らしている。高台脇と高台に圏線で閉じる。内面は口縁に圏線を配し見込みは圏線と牡丹唐草を施文している。図 82

X VIII類：腰部は張りりと丸みを持ち直線的に立ち上がる。口縁は直口し口唇は舌状。高台の断面形態は先端の丸い方形。外面口縁から胴部に圏線と菊花唐草文を描き高台脇と高台に圏線で閉じる。内面は口縁に圏線を配し見込みは圏線、草花文、花卉を施文、蛇の目状に軸刺ぎしている。外底に圏線と銘款「福、利」が認められる。図 83・84・101・102。

X IX類：胴部に僅かな丸みを持ち開きながら立ちあがるがやや腰高張で胴が直線的に開き立ち上がるものもある。口縁は端反である口唇は舌状と丸状とある。高台の断面形態はやや方形の先端が丸と尖るものがある。内底面はやや盛り上がるもの、下がるもの、平坦とある。外面に圏線を配し区画文などの複数の文様を横に縦割りで構成する物と口縁と胴部は一つの文様を描き腰部に簡略化された蓮弁文を描く物がある。縦割りの区画文は半牡丹唐草文などを組み合わせる。口縁と胴部に単一の文様を描くものに唐草文、龍文がある。内面は口縁に圏線を巡らし見込みに圏線を配し中に花卉、葉文や銘款「上、人、主、梵字」などを描く。外底の高台内に圏線を配し「和美、全美、金」などの銘款を付している。図 85～100・103・104・106・107。

X X類：腰が張り胴部は外にやや開きながら立つ、外面に圏線、牡丹唐草と腰部にラマ式蓮弁文を施文している。胴部片のため図化していない。生産地景德鎮窯 生産年代 18C～19C

2. 皿：9類に分類できる（第 53 表）。生産年代は 15C 後半～17C 前半の明代から 17C 後半～19C 代の清代に位置づけられた。生産地は明代で景德鎮窯産が全体の 73%、福建・広東系産 8%漳州窯産が 4%であった。清代では景德鎮窯産 4%、徳化窯産 3%、福建・広東系産が 84%で殆どを閉めている（第 55 表）。

I類：腰に僅かな丸みを持ち外に開く口縁は外反し、高台断面形態が三角状と方形状とある。外面は宝相花唐草文や渦巻唐草を描き、見込みに玉取獅子文、十字花文を施文する。小野分類 B 群に属すると考えられる。図 108～117。

II類：底部は錫筒底を成す。胴部は内湾気味に立ち口縁が直口を成すものが多い。外面に施文するものと無文がある。有文は波瀾文と蕉葉文帯を組み合わせたものや渦巻状の唐草を描くものがある。内底面に略化した唐草文を描き、見込みに圏線と蕉葉文、捻子花文、花唐草文、「寿」の字文を描いている。置付けは露胎している。図 125 は外面に渦巻唐草文

を施し内面に白抜きの十字花文をかたどり周囲を点描で充填する。見込みには圏線内に十字花文を施し、畳付けは露胎している。口縁を欠くが、同様な資料が那覇市天界寺2000で報告され、外反口縁であることがわかっている。小野分類C群Iに属する。図118～128。

III類：口縁は内湾気味の直口。高台の断面形態が三角状。口縁の外面に圏線を巡らし、内面に四方譚文を施している。見込みに「寿」の字文を描くものと圏線に兩龍文を描くものがある。薄手である。小野分類E群。

図131～133。

IV類：口縁は端反で身は深め。高台の断面形態は方形に近い三角状、畳付けは丸い。口縁外面に二条圏線に花枝文、内体面と見込みに圏線と花唐草を描いている。高台内に圏線に方形銘款を付す。図137～139。

V類：口縁は内湾気味の直口。口縁の内外面に圏線を巡らし、外面無文と草花文を描くものがある。高台の断面形態は三角状。高台脇と見込みに圏線を巡らす。内底を蛇の目軸割し外底は露胎させている。図129・130・135・136。

VI類：口縁は髑髏。図134は口縁が髑髏になると考えられる。口唇は丸い。口縁の内面に圏線と草花文を描く。

VII類：胴部が内湾気味に立ち口縁は端反、口唇が丸くなる。高台はやや幅広く断面形態は台形、先端は丸い。外面は口縁と高台脇に圏線を配し、変形した「王」の字文を描く。内面は口縁に圏線、見込みに圏線と「志在書中」の人物図を描く。高台内には圏線と銘款を付す。図145～153・156～158。

VIII類：口縁は内湾気味の直口、口唇が尖る。高台の断面形態は方形で先端は丸い。口縁の内面に一条圏線を巡らし見込みに圏線と山水文を描く。外面無文。図141～144・154・155。

IX類：型成形である。底面は偏平、高台は三角状を成す。内体面は無文と有文とある（広帯の帯状のダミ塗り）。見込みに圏線と雲龍文や山水文を描き、外底面に「合」の隔刻銘款がみられる。図140・159。

3. 杯：杯150点、小杯11点の総数161点、が得られている、生産地は景德鎮窯、徳化窯、福建・広東系がある。生産年代は明代と清代がある。清代の杯が小碗と区別がつきにくいことから杯に統一した。図160～163は胴から口縁まで直線的に立つ直口の杯である。図160は腰折れで口縁が有段になり、外面に折枝、昆虫を描く。腰には如意頭繫文を巡らし、高台内に方形銘款「福」を付す。15C後半から16C前半に位置づけられ生産地は景德鎮窯が考えられる。図164・165・175・176は胴部に丸みを持つやや内湾気味の直口の杯である。図166～170は腰にやや張りがあり口縁は外反している。図180は高杯である。胴は球状に丸く、内底が丸く窪む。脚部は中空で底面に向かい「八」の字状に広がる。見込みに二条圏線と「福」の字款を付している。図181～190は小杯である。図181～183・188は外反口縁の小杯。図184～186・189・190は直口口縁の小杯である。図187は八角杯である。図188～190は型押成形である。

4. 鉢：鉢が16点、うち大鉢が2点出土している。図192は高台の断面形態が台形状。外面の高台脇に圏線を施す。見込みに圏線と花文を描いている。図193・194は肉厚の大型鉢で図194は外面に「寿」の字文を施し見込みに圏線を巡らし露胎している。図193は高台の断面形態は台形状。外面の高台に圏線を施し見込みに蛇の目軸割し畳み付けは露胎する。

5. 深鉢：2点得られた。胴部資料である。口径に対して器高の低い器種が推測でき、香炉か植木鉢と考えられる。外面は如意頭雲文の帯文に牡丹唐草文を描いている。図210。

6. 瓶：総数43点出土し図195～205に示すものである。図195は口縁がラッパ状に外に開き外反する。口唇は舌状をなす。外面に蕉葉文を描くもので生産年代は16C～17C位置づけられ、生産地は景德鎮窯である。図199～202は胴の丸い頭の締まる瓶である。図200は胴の最大径が肩にあり頸部に向かい「八」の字状に窄む錐形状の肩を有するものである。外面に圏線と如意頭繫文を巡らし、果物文を描く。生産年代は16C～17Cに位置づけられ、生産地は景德鎮窯である。図196～198は長径瓶が考えられる。図198は胴部に偏平面を持つ角瓶で外面に梅と青海波の窓絵を描くものである。生産年代は15C後半～16C代に位置づけられ生産地は景德鎮窯である。図204・205は底部である。高台はいずれも外列りで断面形態は三角状。外面に花文を描き略化した蓮弁文や如意頭繫文を巡らす。図204高台内に四角款を付している。図205の生産年代は15C後半～16C代。図204は17C前半に位置づけられ生産地はいずれも景德鎮窯である。

7. その他：そのほかに蓋物碗・壺・水注・合子・蓋物・レンゲが得られている。図191は蓋の付く碗が考えられる。

第53表 染付皿分類 (小分類があるもののみ)

分類	小分類	文様構成	
I	1	外面 陶文文様：「山岳文様」・「宝相花唐草文」 製法文様：「宝相花唐草文」 彫文文様：「宝相花唐草文」	
		内底面 単文 内底文様：「十字花文」・「菊花文」	
	2	外面 陶文文様：「唐草文」 製法文様：「唐草文」 彫文文様：「唐草文」	
		内底面 陶文文様：「唐草文」 内底文様：「唐草文」	
	II	1	外面 陶文文様：「唐草文」 製法文様：「唐草文」 彫文文様：「唐草文」
			内底面 陶文文様：「唐草文」 内底文様：「唐草文」
2		外面 無文 内底面 陶文文様：「唐草文」 内底文様：「唐草文」	
3		外面 単文 内底文様：「唐草文」 単文文様：「唐草文」	
4		外面 単文 内底文様：「唐草文」 単文文様：「唐草文」	
V	1	外面 陶文文様：「唐草文」 製法文様：「唐草文」 彫文文様：「唐草文」	
	2	外面 単文 内底文様：「唐草文」 単文文様：「唐草文」	
	3	外面 単文 内底文様：「唐草文」 単文文様：「唐草文」	

第56表 染付(その他)出土量

地域	種別	年代	種														小林				高木		丸井		鉢					
			景徳窯				尾張 広東系		不明		徳化窯		津州窯		不明		景徳窯		徳化窯		景徳窯		不明							
			明	清	不明	不明	明	清	明	清	明	清	明	清	明	清	明	清	明	清	明	清	不明	清						
HA ①	I		1																											
	II 透漉		2	2		1				1	1													1	1					
	III 透漉		4	4		2	1	1																2	2					
	IV		1								2														1					
HA ②	I		1			1				1	1	1													1					
	II上		7	5	2	1	3	2	6	1	1	5	5	1	1										2					
	II下		1	3		1	1	1	1	1															1	1				
	不明		1																											
HA ③	II 透漉		1						2	1																				
	III 透漉		1																											
	III		1																											
HA ④	II		3																						1					
	III		1																							1				
合計			3	18	11	10	1	19	5	11	6	1	1	7	10	1	2	1	1	1	4	2	1	1	2	1	1	7	3	2
総数(個)			150														11				1		2		14					

地域	種別	年代	種														小林				高木		丸井		地区別計					
			景徳窯				尾張 広東系		不明		徳化窯		津州窯		不明		景徳窯		徳化窯		景徳窯		不明							
			明	清	不明	不明	明	清	明	清	明	清	明	清	明	清	明	清	明	清	不明	清								
HA ①	I																									1	7			
	II 透漉		1	1	2																						24			
	III 透漉		8	2		2	1	1																			47			
	IV				1																						5			
HA ②	I		1																								11			
	II上		6	3	2			1																			91			
	II下		1																								13			
	不明																										1			
HA ③	II 透漉		1			1																					5			
	III 透漉		3			1	3	1																			20			
	III		1																								7			
HA ④	II																										1			
	III																										1			
合計			1	20	5	3	2	5	1	1	1	6	3	2	1	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	250			
総数(個)			44														13				2		4		1		1		250	

(年代) 末(南宋): 12世紀~13世紀/元: 13世紀~14世紀/明: 14世紀~17世紀/清: 17世紀~20世紀

第57表-1 染付(碗・皿) 観察一覧

年代	種別	部位	口径 深さ (cm)	底径 (cm)	分類	器形・文様構成	軸・乳頭・貫入		表面 色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グリッド・番 遺跡・台(取)番号	
							軸・乳頭・貫入	軸・乳頭・貫入				
遺 97 期・ 調査 63	碗	1	口	15.2	—	1-3	口縁が外反し、口際は外反。外面は一条の圓縁と唐草文を施文、内面は口縁に二条圓縁を施している。小野分類B群		灰白色 乳頭の発色は濃い	灰白色 密	15C中~末 景徳窯	HA ① J15 III 台2560
		2	口	—	—	1-1	外反口縁、口際は角状、外面に二条の圓縁を上下に唐文を施文、口際はセパット文字を帯状に施し上下に二条圓縁を配する。小野分類B群		淡青白色 乳頭の発色は普通	白色 密	15C中~末 景徳窯	HA ① L1 II 台2701
		3	口	15.4	—	1-1	縁は大きく開き口縁は外反する。口際は丸状、外面に二条圓縁と唐草文を施文、内面は口縁に二条圓縁と四方唐文、牡丹唐草文を施文。小野分類B群		淡青白色 乳頭の発色は普通	白色 密	15C後~16C前 景徳窯	HA ② J12 II 瓦皿 台1174
		4	口	—	—	III	縁面にかやみを持ち開き立ち上がり口縁は外反、口際は丸状、外面に二条圓縁と牡丹唐草文を施文、内面は二条圓縁を施している。薄手の高級品である。小野分類B群		淡青白色 乳頭の発色は普通	白色 密	15C後~16C前 景徳窯	HA ③ A14 II 台2149
		5	口~底	15.4 6.7	6.0	1-2	縁が張り、口縁は外反、口際は角状、高台は扁身、断面形態は三角状、外面に圓縁と唐草文を施文、内面は口縁に二条圓縁を施し口縁を施す。小野分類B群		暗緑灰色 乳頭の発色は濃い	灰白色 密	15C後~16C前 景徳窯	HA ③ J12 II 5-640 HA ③ C12 II 5-640 台1122、1134 HA ③ S17 II 台3012
		6	口	15.4	—	1-3	縁面は外に開き口縁は外反する。口際は丸状、外面に圓縁と人物文を施文、内面は圓縁を施している。薄手であり高級品である。小野分類B群		淡青白色 乳頭の発色は普通	白色 密	15C後~16C前 景徳窯	HA ② T1 II 祝殿 台1086
		7	胴	—	—	1-3	縁面は口の外に開く形、外面に二条圓縁と騎馬を描く同色で同一個体の可能性が高い。		淡青白色 乳頭の発色は普通	白色 密	15C後~16C前 景徳窯	HA ② A2 II 祝殿 台493
		8	口~底	17.0 6.2	4.9	II	縁は外に開き立ち上がり口縁は外反、口際は丸状、高台は扁身、断面形態は三角状、外面に圓縁と唐草文を施文、内面は口縁に二条圓縁を施し口縁を施す。小野分類B群		暗緑灰色 乳頭の発色は普通	灰白色 密	15C後~16C前 景徳窯	HA ③ A15 II 台1425
		9	口	13.4	—	1-3	縁面は外に開き立ち上がり口縁は大きく外反する。口際は角状、外面は口縁に二条圓縁と唐草文を施文、内面は口縁に二条圓縁を施す。小野分類B群		淡青白色 乳頭の発色は普通	灰白色 密	15C末~16C中 景徳窯	HA ③ A14 II 5-11 台1258
		10	底	—	6.2	1-5	縁面にかやみ高台は扁身で断面形態は半円形に近い。外面に唐草文を描き高台縁と高台に圓縁、内面は口縁に二条圓縁と唐草文を施文。		淡青白色 乳頭の発色は濃い	灰白色 密	15C後~16C前 景徳窯	HA ③ T18 II 台1426
		11	胴	—	—	1-III	薄手の扁胴形である。表面に唐草を描いている。		暗緑灰色 乳頭の発色は普通	白色 密	15C~16C前 景徳窯	HA ① M14 002-6SD 台91

第57表-3 染付(碗・皿) 観察一覧

図録 掲載 頁	器 種	部位	口径 高(h) (cm)	底径 (cm)	分類	器形・文様構成	釉・色相・目入	表 地 色・質	生産年代 生産地・その他	地区・ブリード・研 究館・著/現) 番号
第 98 冊 ・ 図 録 64	42	底	—	5.5	V	腰が張り、高台は内割りで無い。断面形状は三角形。内底は蓮子心。外面の中心に二葉團扇。内面に内割りと草文を配す。高台筋と高台に内割り。見込みに扇と蓮華文を配す。空面を露出で飾る。	明灰白色 見込の発色は普通	灰白色 密	16C代 景徳鎮窯	HA 3 G12 Ⅱ 台 2217 HA 3 B411 Ⅱ S051 HA 3 B14 Ⅱ 台 2474 HA 3 114 Ⅱ 台 2001
	43	底	—	6.2	VI	丸みのある腰から外に開きながら立つ。高台の断面形状は三角形。外面に草文を配す高さ高台筋に二葉團扇を配す。内底面に二葉團扇を配し、高台文を配す。	明灰白色 見込の発色は普通	灰白色 密	16C代 景徳鎮窯	HA 3 D19 Ⅱ 台 9696 HA 3 112 Ⅱ 台 2474
	44	底	—	—	Ⅶ	腰が高く、高台は内割り。断面は四角形である。外面に花、仙人を描き、高台筋に扇と蓮華文を配す。内底面に二葉團扇と草文を配す。高台内に扇筋と扇文を配す。小割り文飾。	淡青白色 見込の発色は普通	灰白色 密	16C後 景徳鎮窯	HA 3 A16 Ⅱ S12 HA 3 T13 Ⅱ S11 HA 3 B14 Ⅱ 台 543 HA 3 S972・2823
	45	口	15.3	—	Ⅷ-1	空や内割文の外に外に開く口縁は直口。口縁は古瓦。外面に二葉團扇に唐草文を配す。内底は二葉團扇を配している。	淡青白色 見込の発色は普通	白色 密	16C前-中 景徳鎮窯	HA 3 L12 Ⅱ SP1945 台 4443
	46	口	12.2	—	Ⅷ-1	器「八」の字状に外割り直口縁である。口縁は無い。外面に二葉團扇に唐草文を配す。内底は二葉團扇を配している。	淡青白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	16C後-17C前 福建・広東系	HA 3 C12 Ⅱ 台 3182
	47	口	12.0	—	IX	外反口縁。口縁に組み入れた輪状口縁で1段断面形状は角状。外面に二葉の團扇と花鳥文を配す。内底は二葉團扇を配す。わずかに目入が見られる。	淡青白色 見込の発色は普通	灰白色 密	16C後-17C初 景徳鎮窯	HA 3 K10 Ⅱ 台 2607
	48	底	—	5.6	X	高台の断面形状は中空四角。見込みは輪の口縁筋が起している。内底は見込みに草文文を配す。(中割り製品)	明灰白色 見込の発色は普通	灰白色 密	16C後-17C初 福建・広東系	HA 3 E14 Ⅱ S042 台 3146
	49	底	—	4.8	Ⅱ-2	高台の断面形状は扇身の三角形。内底は中心が盛り上がる。外面に人物の頭部と草文を配す。内底に蓮と花鳥文を配す。高台内に扇筋と「天・下」の字の形認められる。(天下太平)が、模範不詳。	淡灰白色 見込の発色は不良 模範不詳	灰白色 密	16C末-17C初 景徳鎮窯	HA 3 P19 Ⅱ 台 2887
	50	底	—	5.2	Ⅱ-2	高台の断面形状は扇身の方形。内底は中心がやや盛り上がる。外面は高台筋と高台に二葉團扇を配す。内底面に二葉團扇を配し山來文を配す。	淡灰白色 見込の発色は普通	灰白色 密	16C末-17C初 景徳鎮窯	HA 3 D5 Ⅱ 台 1412
	51	口	12.8	—	Ⅷ-1	腰筋に丸みを付けた口縁筋の間に口縁は直口を成す。口縁は古瓦。外面に二葉團扇と花鳥文を配す。内底に蓮と花鳥文を配す。口縁内底と見込みに二葉團扇を配している。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	17C前 景徳鎮窯	HA 4 N12-N16・O13-O16 Ⅱ 台 2763
	52	口	15.8	—	X-2	口縁が反り、口縁の断面形状は丸い。外面は二葉の團扇と唐草を描き内底は蓮と二葉團扇を配している。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	16C後-17C代 福建・広東系	HA 3 G19 Ⅱ 台 2300 HA 3 K1 Ⅱ 台 2596
	53	底	—	6.4	X-1	丸みのある腰から外に開き立つ。高台の断面形状は三角形。外面に唐草文を配す。内底面に二葉團扇を見込みと内底の中心に輪状口縁と、見込みに蓮と蓮華文を配す。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	16C後-17C初 福建・広東系	HA 3 C12 Ⅱ S 8 台 919
	54	底	—	5.0	X-1	高台は外割りの断面形状は方形。外面に唐草文を配す。高台筋に扇筋と蓮華文を配す。内底に蓮と花鳥文を配す。見込みに蓮と蓮華文を配す。外底は扇筋している。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	16C初 景徳鎮窯	HA 3 J18 Ⅱ 台 2497 HA 3 E19 Ⅱ 台 2571
	55	口	14.4	—	XI	口縁が直口の唇形。口縁は古瓦。外面の口縁に半蓮花文を縦帯で積み並ぶ。口縁筋は直口縁と花鳥文を配す。内底は扇筋と口縁と見込みに蓮と蓮華文を配す。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	16C後-17C前 福建・広東系	HA 3 A12 Ⅱ 台 2873
	56	底	—	15.2	—	腰筋は器「八」の字状に大きく外に開き口縁は直口の唇形。口縁は古瓦。外面に草文と上への扇筋で仙人の頭部と花鳥文を配す。内底は扇筋を配している。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	16C後-17C代 福建・広東系	HA 3 F81 Ⅱ 瓦 研 1381
	57	口	12.4	—	Ⅷ	口縁は直口。唇形である。口縁の断面形状は丸い。外面は口縁に上への扇筋で蓮と花鳥の唐草文を配す。内底は二葉團扇を配している。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	17C前 福建・広東系	HA 3 A16 Ⅱ 台 2926
	58	口	14.0	—	XV	腰筋は器「八」の字状に大きく外に開き口縁は反り。口縁は古瓦。外面に草文と蓮華文を配す。内底に二葉團扇と口縁と見込みに蓮と蓮華文を配す。外底は扇筋している。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	17C後-18C前 福建・広東系	HA 3 T6 Ⅱ 高 台 1982
	59	口・底	13.0 5.7	6.9	XV	口縁が直口する唇形である。口縁は古瓦。高台は外割りの断面形状は三角形。内底は中心が窪む。外面に扇筋と唐草文を配す。唇付けを輪筋で口縁と内底の口縁筋を配す。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	17C後-18C前 福建・広東系	HA 3 A1 Ⅱ 祝 台 495・470
	60	口	11.4	—	XV	器「八」の字状に大きく外に開き口縁は直口する唇形である。口縁の断面形状は古瓦。外面に二葉團扇と唐草文を配す高さ内底は二葉團扇を配する。外底と内底は扇筋。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	17C後-18C前 福建・広東系	HA 3 B18-20 Ⅱ 台 1605
	61	口・底	15.0 3.3	6.8	XV	腰筋から小さく外に開き口縁は直口する唇形である。口縁は古瓦。外面は扇筋と高台筋に唐草文を配す。内底は二葉團扇を配する。外底と内底は扇筋。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	17C後-18C前 福建・広東系	HA 3 D13 Ⅱ 台 3247
	62	口・底	14.8 5.7	7.0	XV	高台径が大きく脚筋は内割りに開き口縁は直口。口縁は古瓦。高台は外割り。断面形状は三角形。内底は中心が盛り上がる。外面に扇筋と唐草文を配す。内底は扇筋を配し、外底と内底は扇筋。輪筋は扇筋。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	17C後-18C前 福建・広東系	HA 3 B14 Ⅱ S 20 台 1017・2115 HA 3 B14 Ⅱ 台 2423 HA 3 A13 Ⅱ 台 2708
	63	口・底	16.7 6.0	8.4	XIV	腰筋が、断面は直線である。口縁は直口。口縁は古瓦。高台の断面形状は三角形。高台と高台筋に扇筋と蓮華文を配す。口縁内底に扇筋。見込みに扇筋と蓮華文を配す。高台内の輪文を配す。	淡灰白色 見込の発色は普通	灰白色 密	17C後-18C前 福建・広東系	HA 3 J18 Ⅱ 台 2571
	64	底	—	6.8	XI	腰にやや丸みを持つ。高台の断面形状は四角状。外面に唐草文を描き高台筋に二葉團扇で飾る。見込みに二葉團扇を配する。外底と内底は扇筋。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	17C代 福建・広東系	HA 3 B2 Ⅱ 瓦 研 1153
	65	底	—	7.0	XIV	高の断面形状は二角。外面に唐草文を配す。内底見込みに二葉團扇を配し内底と外底は扇筋している。	淡灰白色 見込の発色は普通	灰白色 密	17C後-18C前 福建・広東系	HA 3 G17 Ⅱ S10 台 1306
	66	底	—	7.0	XV	高台は外割りの断面形状は四角。外面に唐草文を配す。内底見込みは輪の口縁筋と外底は扇筋している。	淡青白色 見込の発色は普通	灰白色 密	17C後-18C前 台 2217	
	67	底	—	6.0	XI	腰筋から直線的に外に開き立ち上がる。高台の断面形状は四角。外面に唐草文を配す。見込みに二葉團扇を配する。輪は見込みの胎まで扇筋。外底は扇筋している。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	17C末-18C前 福建・広東系	HA 3 B2 Ⅱ 瓦 研 1152・1168
	68	底	—	6.2	XIV	腰筋は扇筋と器「八」の字状に開く。高台は内割りの断面形状は方形。高台と高台筋に扇筋。見込みに二葉の口縁筋を描き口縁筋を積み並ぶ。外底は扇筋。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	16C後-17C前 福建・広東系	HA 3 I19 Ⅱ SP1333 台 4159
	69	底	—	7.2	XII	腰筋が高く、器「八」の字状に開き立つ。高台は外割りの断面形状は方形。外面は蓮と花鳥文を配す。内底に二葉の口縁筋と唐草文を配す。高台内底に扇筋。見込みに扇筋と蓮華文を配す。内底と外底は扇筋。輪筋は扇筋。	淡灰白色 見込の発色は悪い	灰白色 密	17C前 福建・広東系	HA 3 B14 Ⅱ S 20 台 847
	70	口	14.0	—	XIII	口縁は直口。口縁は角張り唇筋の輪筋を施している。	淡灰白色 密	灰白色 密	17C前 福建・広東系	HA 3 F16 Ⅱ S3 台 871

第57表-4 染付(碗・皿) 観察一覧

品目 類別	器 種	器 形	部位	口径 高 (cm)	底径 (cm)	分類	器形・文様構成	胎・呉須・貫入	施 色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グッド・研 遺構・作(収)番号
器 類 ・ 陶 器 ・ 陶 器	71	碗	口	15.4 6.0	7.6	XIII	胎部は丸く、器「八」の字状に立つ。口縁は直上、口内は丸い。高台は直上にて胎部の断面形は丸状、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線、見込み、内底、内外共に黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	16C後半-17C 福建・広東系	HA3 A6 II 台1681
	72	碗	口	16.8	-	XIII	胎部は丸み持ち器「八」の字状に大きく外に黒漆的立つ。口縁は直上、口内の断面形は丸状、外面は1線、胎部は直上に胎部の断面形を施している。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	16C後半-17C 福建・広東系	HA3 D16 II 台3203
	73	碗	口	14.8	-	XIII	胎部は丸み持ち器「八」の字状に大きく外に黒漆的立つ。口縁は直上、口内の断面形は丸状、外面は1線と胎部に1線、胎部は直上に胎部の断面形を施している。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	16C後半-17C 福建・広東系	HA3 H2 II 瓦M 台1152
	74	碗	底	-	6.4	XIII	高台は外側の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面の口縁と胎部に黒漆。内面は1線と見込みに黒漆。内底は胎部の自動巻き外縁は黒漆している。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	16C後半-17C 福建・広東系	HA3 A16 II 台2876
	75	碗	口	13.2 5.2	6.2	XVI	胎部から直線的に大きく外に開き上がり口縁は丸い。高台は直上にて胎部の断面形は丸状、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	17C後半-18C前 福建・広東系	HA3 A12 II 5.7 台991
	76	碗	口	14.1 6.4	8.2	XVI	胎部は丸く、胎部は器「上」字状に持ち、直線的に立つ。口縁は直上、口内は丸く、胎部の断面形は丸状、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	17C後半-18C前 福建・広東系	HA3 G20 II 瓦M 台991 HA3 M・N15 II 瓦M 台1042・1046・1033・1035 HA3 B4 非陶器 台1205
	77	碗	口	13.0 7.3	5.2	XVI	胎部から直線的に外に開き上がり、口縁は直上、口内は丸い。高台は外側の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	17C後半-18C前 福建・広東系	HA3 G1 瓦M II 台1727
	78	碗	口	13.0 5.4	7.4	XVI	胎部は丸く外に開き上がり、口縁は直上、口内は丸い。高台は外側の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	17C後半-18C前 福建・広東系	HA3 M15 II SP202 HA3 M・N19 II 58.15 HA4 L20 II 7 台3482・3247・2731
	79	碗	口	14.0	-	XVI	直上1線で右側の断面形は丸状、外面に黒漆、丸状の印花文を描く。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	17C後半-18C前 福建・広東系	HA3 A20 II 祝 台1523・1942
	80	碗	底	-	6.4	XVI	胎部から直線的に器「八」の字状に開く。高台は外側の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	17C後半-18C前 福建・広東系	HA3 A5 II アガリミナ 台2509
81	碗	底	-	8.8	XVI	高台は外側の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	17C後半-18C前 福建・広東系	HA3 B14 II 5.20 台1018	
82	碗	口	15.4 7.5	6.5	XVI	胎部は丸みを持ち、直上に立ち上がる。口縁は直上、口内は丸い。高台の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	白色 黒	17C後半-18C前 福建・広東系	HA3 A20 II 祝 台1304・1341	
83	碗	口	15.0 6.8	7.0	XVII-1	胎部は丸みを持ち、直線的に立つ。口縁は直上、口内は丸い。高台の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 I 台657	
84	碗	口	15.6	-	XVII-1	胎部は丸み持ちながら直線的に立ち上がる直上1線である。口内は丸みを持ち、胎部に2線、胎部は器「上」字状に黒漆文を施す。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 T5 II 高 HA3 C20 II 上・P00 HA3 A3 II 祝 台2389・571・1614	
85	碗	口	13.2	-	IX-1	胎部は丸く、器「上」字状に立つ。口縁は直上、口内は丸い。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 J6 II 名義作 台2634	
86	碗	口	15.8 6.6	6.8	IX-2	胎部は直線的に開き上がり、口縁は直上、口内は丸く。高台の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 J10 II 台2530	
87	碗	口	13.5 1.3	6.1	IX-2	胎部は直線的に開き上がり、口縁は直上、口内は丸い。高台の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 T15 II 台2064 HA3 A15 5.13 II 台2212	
88	碗	口	13.2 7.0	6.4	IX-2	胎部は丸く、胎部は直線的に開き上がり、口縁は直上、口内は丸い。高台の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 D1 II 祝 台1371・1466・1468	
89	碗	脚	-	-	IX-5	胎部は丸みを持ち直線的に開き上がり立ち上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 T9 I 台1184	
90	碗	口	14.2 6.3	6.8	IX-2	口縁は直上、口内は丸く、高台の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 D1 II 祝 HA3 K4 II 瓦M 台829・831・1129・1486	
91	碗	口	14.8	-	IX-4	口縁は口内を下折外反させる。口内は舌状、外面に黒漆文を施す。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 T2 II 祝 台382	
92	碗	口	12.6 5.2	6.0	IX-3	胎部は直線的に開き上がり立ち上がる。口縁は直上、口内は丸い。高台の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 B20 II 800 台850	
93	碗	口	15.2 6.5	7.4	IX-4	胎部は丸みを持ち、直線的に立ち上がる。口縁は直上、口内は丸い。高台は内側の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 F16 II 5.3 HA3 F16 II 5 台871・1758	
94	碗	口	12.6 5.9	6.8	IX-3	胎部は丸く、直線的に外に開き上がり立ち上がる。口縁は直上、口内は丸い。高台は内側の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 D2 II 祝 HA3 D1 II 祝 台1368・1917	
95	碗	口	14.0	-	IX-4	胎部は丸みを持ち直線的に開き上がり立ち上がる。口縁は直上、口内は丸い。高台は内側の断面形は先端の丸い方、内底は中心が盛り上がる。外面は1線、胎部、内面は1線と見込みに黒漆、黒文。	淡灰白色 呉須の発色は普通	灰白色 黒	18C 福建・広東系	HA3 I 台663 HA3 T6 II 祝 HA3 T5 II アガリミナ HA3 J6 II 名義作 台1829・2500・2626	

第57表-5 染付(碗・皿) 観察一覧

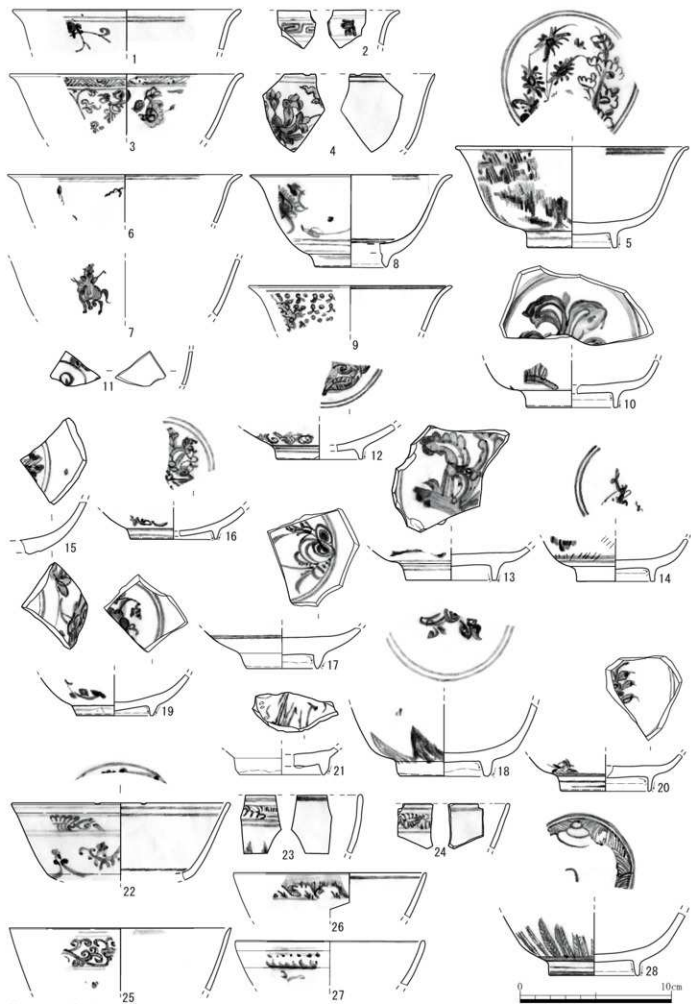
昭和 昭和 昭和	期 期 期	番号	品名	部位	口径 深高 (cm)	底径 (cm)	分類	図形・文様構成	軸・彩画・具人	表地 色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グッド・研 造場・有(無) 番号
		96	碗	底	—	7.6	XIV-4	腰は中や細る。高台の断面形態は先端が尖る方形。外面に唐草文を抜き彫る。外面の上下を横線と縁線の連行文を配している。内面は扇輪と縁上の字を記入している。	淡灰白色 彩画の発色は薄い	灰白色 縹	18C 福建・広東系	HA ㊦ T12 B 5.7 HA ㊦ D10 B 5.65 台 715・1050
		97	碗	底	—	6.6	XIX-3	内底は薄し上がる。高台の断面形態は先端の丸い方形。外面に唐草文。	淡灰白色 彩画の発色は薄い	灰白色 縹	18C 福建・広東系	HA ㊦ D17 B 600 台 1911
		98	碗	底	—	7.0	XIX-4	腰が急る。高台の断面形態は方形。外面に唐草文を抜き、下位に扇輪で飾る。外面の上下を横線と縁線の連行文を配する。内面は見込みに扇輪と縁線の上下を入れている。	淡灰白色 彩画の発色は薄い	灰白色 縹	18C 福建・広東系	HA ㊦ A2 B 600 HA ㊦ D12 B 600 台 472・989
		99	碗	底	—	7.6	XIX-4	高台の断面形態は先端が尖る方形。外面の腰部に上下を横線と縁線の連行文を抜き、高台内に紅文を配している。内面は見込みに「二葉扇輪と花文」の字を入れている。	淡灰白色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	18C 福建・広東系	HA ㊦ E1 B 600 台 1283
		100	碗	底	—	—	XIX-4	外面に唐草文を抜き上下の腰部に扇輪の連行文を帯びて描いている。内面は見込みに「二葉扇輪と花文」の字を帯びて描いている。	淡灰白色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	18C 福建・広東系	HA ㊦ S12 B 5.7 台 714
第 100 期 ・ 昭和 66		101	碗	口一底	12.1 5.4	6.7	XIV-2	腰部は丸く。高脚の口立。口縁は直口。口縁は直状。高台の断面形態は方形。外面に扇輪と紅文を抜き、高台に扇輪。口縁内と見込みに二葉扇輪と花文を配している。	淡灰白色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	18C 福建・広東系	HA ㊦ T5 B 600 台 364
		102	碗	口一底	12.3 5.6	6.5	XIV-2	腰部は丸く。高脚の口立。口縁は直口。口縁は直状。高台の断面形態は方形。外面に扇輪と紅文を抜き、見込みに花文を抜き、能の目輪を施している。	淡灰白色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	18C 福建・広東系	HA ㊦ D2 B 1.1 HA ㊦ D1 B 600 台 731・1024・1284
		103	碗	底	—	6.6	XIX-3	腰部は中や丸持ち高台の断面形態は先端の丸い方形。外面に唐草文を抜き、高台に二葉扇輪。高台に二葉扇輪。内面は見込みに二葉扇輪を配している。	淡灰白色 彩画の発色は薄い	白色 縹	17C末～18C前 景徳鎮窯系	HA ㊦ C2 I 600 HA ㊦ D12 B 600 台 1962・2363
		104	碗	底	—	6.6	XIX-3	高台の断面形態は先端が尖る方形。外面に唐草文を抜き高台内に二葉扇輪。高台に二葉扇輪で閉じる。内面は見込みに二葉扇輪と花文を抜き、	淡灰白色 彩画の発色は薄い	白色 縹	17C末～18C前 景徳鎮窯系	HA ㊦ D20 B 1.1 HA ㊦ D2 B 600 台 739・2584
		105	碗	底	—	—	—	内面見込みに二葉扇輪と梅花文を抜き、	淡灰白色 彩画の発色は普通	白色 縹	福建・広東系	HA ㊦ G5 B 名座 台 980
		106	碗	底	—	7.2	XIV-5	高台は外張り高台の断面形態は方形。外面は腰部に扇輪で上下を横線と縁線の連行文を抜き、高台に扇輪。見込みに扇輪と花文を抜き、高台内に「二葉扇輪と花文」の字を帯びて描いている。	淡灰白色 彩画の発色は普通	白色 縹	18C 福建・広東系	HA ㊦ B14 B 5.20 台 847
		107	碗	口一底	14.6 6.7	7.4	XIV-5	腰が外側に傾き立つ。口縁は直口。口縁は直状。高台の断面形態は方形。外面は扇輪と紅文を抜き、下位に扇輪の連行文を抜き、見込みに紅文を抜き、高台内に「紅文」の字を帯びて描いている。	淡灰白色 彩画の発色は普通	白色 縹	18C 福建・広東系	HA ㊦ T9 B 600 HA ㊦ D1 B 600 台 633・1521
		108	碗	口一底	11.8 2.8	7.0	I-1	口縁は外反し高台の断面形態が三角状。外面に宝相唐草文を抜き、見込みに五輪童子文を施文している。小野分組B群に属すると考えられる。	明緑灰色 彩画の発色は薄い	灰白色 縹	15C末～16C前 景徳鎮窯系	HA ㊦ K19 B 台 2679
		109	碗	口一底	11.4 2.9	6.4	I-1	口縁は外反し高台の断面形態が三角状。外面に宝相唐草文を抜き、見込みに五輪童子文を施文している。小野分組B群に属すると考えられる。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	15C末～16C前 景徳鎮窯系	HA ㊦ C5 B 台 1333 HA ㊦ C7 I 台 1384
		110	碗	口一底	—	—	I-1	口縁は外反し外面に宝相唐草文を抜き、小野分組B群に属すると考えられる。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	15C末～16C前 景徳鎮窯系	HA ㊦ F18 B 台 2178
	111	碗	口一底	—	—	I-1	口縁は外反し外面に宝相唐草文を抜き、小野分組B群に属すると考えられる。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	15C末～16C前 景徳鎮窯系	HA ㊦ G18 B 台 2322	
	112	碗	口一底	12.5 2.7	7.2	I-1	口縁は外反し高台の断面形態が三角状。外面に宝相唐草文を抜き、見込みに五輪童子文を施文している。小野分組B群に属すると考えられる。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	15C末～16C前 景徳鎮窯系	HA ㊦ H2 SK I 台 2146	
	113	碗	口一底	12.2 2.6	7.2	I-1	口縁は外反し高台の断面形態が三角状。外面に宝相唐草文を抜き、見込みに五輪童子文を施文している。小野分組B群に属すると考えられる。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	15C末～16C前 景徳鎮窯系	HA ㊦ E5 B 台 1299	
	114	碗	底	—	10.0	I-1	口縁は外反し高台の断面形態が三角状。外面に宝相唐草文を抜き、見込みに五輪童子文を施文している。小野分組B群に属すると考えられる。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	15C末～16C前 景徳鎮窯系	HA ㊦ G13 B 台 2227・2228	
	115	碗	底	—	7.0	I-1	高台は腰幅の断面形態が方形。外面に唐草文を抜き、見込みに十字花文を抜き高台内に扇輪と花文を配している。小野分組B群に属すると考えられる。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	15C末～16C前 景徳鎮窯系	HA ㊦ T14 B 5.11 台 977	
	116	碗	底	—	7.0	I-1	高台の断面形態が三角状。見込みに十字花文を施文している。小野分組B群に属すると考えられる。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	16C前～中 景徳鎮窯系	HA ㊦ I 台 4599 HA ㊦ F16 B 台 2145	
	117	碗	底	—	10.2	I-1	高台の断面形態が三角状。見込みに梅花文を施文している。小野分組B群に属すると考えられる。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	16C前～中 景徳鎮窯系	HA ㊦ D4 B 台 1207 HA ㊦ B12 B 台 2809	
	118	碗	口一底	10.2 2.7	2.8	II-1	口縁は直口。口縁は直状。外面に唐草文。腰に蓮葉文を施文。内面に扇輪と花文を抜き、見込みに扇輪と蓮葉文を施文。唇付口縁。小野分組C群1。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	16C前～中 景徳鎮窯系	HA ㊦ F12 B SP969 台 3508	
	119	碗	底	—	2.7	II-1	解は内湾の口立。底部は唇付。外面腰部に蓮葉文帯を施し見込みに扇輪内に蓮葉文を施している。唇付口縁。小野分組C群1。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	16C前～中 景徳鎮窯系	HA ㊦ E16 B 5.4 台 1493 HA ㊦ S17 B 5.35 台 1879	
	120	碗	底	—	3.2	II-1	唇付口縁を外面腰部に蓮葉文帯を施し見込みに二葉扇輪内に蓮葉文を施している。唇付口縁。小野分組C群1。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	16C前～中 景徳鎮窯系	HA ㊦ A16 B 台 2994	
	121	碗	底	—	3.0	II-1	口縁は内湾の口立。底部は唇付。外面腰部に蓮葉文帯を施し見込みに扇輪内に蓮葉文を施している。唇付口縁。小野分組C群1。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	16C前～中 景徳鎮窯系	HA ㊦ D10 B 台 2359	
	122	碗	底	—	3.2	II-1	唇付口縁を外面腰部に蓮葉文帯を施し見込みに二葉扇輪内に蓮葉文を施している。唇付口縁。小野分組C群1。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	16C前～中 景徳鎮窯系	HA ㊦ K19 B 305 台 2915	
	123	碗	底	—	2.8	II-1	解は内湾の口立。唇付。外面腰部に蓮葉文帯を施し見込みに扇輪内に蓮葉文を施文。唇付口縁。小野分組C群1。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	15C末～16C前 景徳鎮窯系	HA ㊦ A2 B 600 台 450・476	
	124	碗	底	—	3.7	II-2	解は内湾の口立。唇付。外面腰部に蓮葉文帯を施し見込みに扇輪内に花文を施している。唇付口縁。小野分組C群1。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	16C前～中 景徳鎮窯系	HA ㊦ J18 B 台 2571	
	125	碗	底	—	4.6	II-5	外面に蓮葉唐草文を施し、内面に十字花文を白抜きし「蓮理を会供で賞賜。見込みに扇輪と十字花文を施文。唇付口縁。小野分組C群1」が。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	16C前～中 景徳鎮窯系	HA ㊦ K2 B 台 2615	
	126	碗	底	—	3.2	II-3	底部は唇付口縁。唇付口縁は直状。外面腰部に蓮葉文帯を施し見込みに扇輪内に蓮葉文を施している。唇付口縁。小野分組C群1。	明緑灰色 彩画の発色は普通	灰白色 縹	16C前～中 景徳鎮窯系	HA ㊦ C5 B 台 1521	
	127	碗	底	—	4.4	II-3	底部は唇付口縁。唇付口縁は直状。外面腰部に蓮葉文帯を施し見込みに二葉扇輪内に「寿」字文を施している。唇付口縁。小野分組C群1。	明緑灰色 彩画の発色は薄い	灰白色 縹	16C末 福建・広東系	HA ㊦ H19 B 台 2404	

第57表-6 染付(碗・皿) 観察一覧

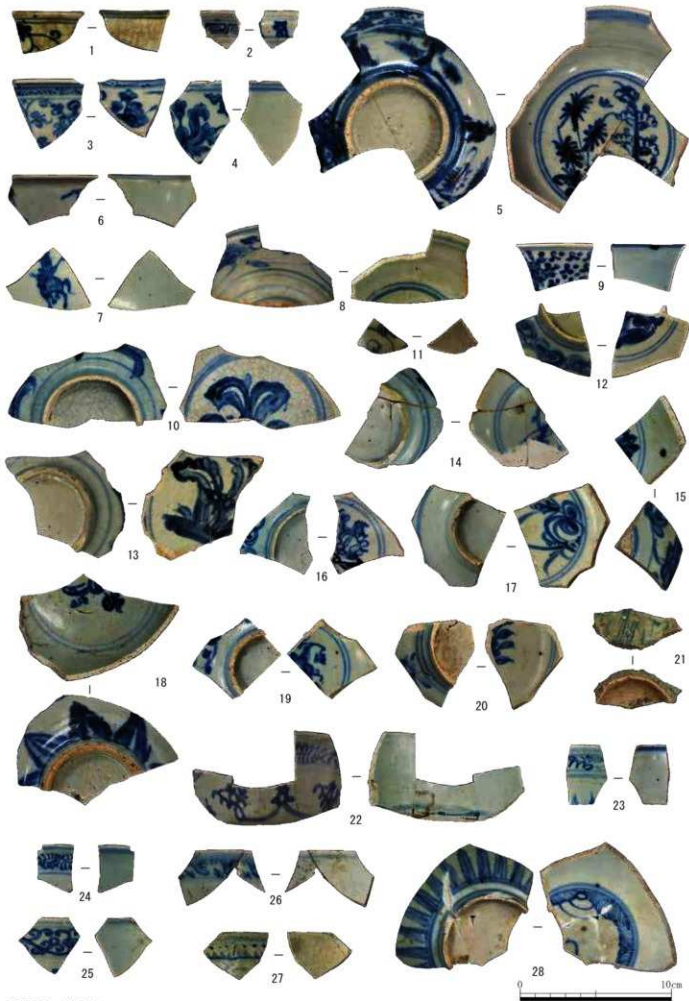
図録 図号	器 名	器 種	器 高 (cm)	口径 (cm)	器 径 (cm)	分類	図形・文様構成	輪・只須・口人	表 地 色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グッド・研 究者・所有者 (注) 番号
第101号・ 図形 87	128	口一底	8.2 2.3	3.2	II	4	口縁は内湾気味の直口。口縁外、外面は無文。口縁内面に線輪。見込みに 紅蓮文を配している。口縁のみが施されている。口縁部に小野分組を配す	明緑灰色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	16C後半～17C初 福建	HA 3 B14 II S20 台 846
	129	底	—	5.2	V-1	1	煎茶の底である。高台の断面形態は三角状。高台縁と見込みに線輪を 配す。内底を染付の輪帯とし外底を高直させている。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 やや緑	16C後半 海州宮	HA 3 O15 I 0010SD 台 140
	130	口	9.8	—	V-1	1	口縁は内湾気味の直口。口縁の内側に一染見込みに二条の線輪を施らす	淡青灰白色 口縁の発色は普通	灰白色 やや緑	16C後半 福建	HA 3 O15 I 0010SD 台 140
	131	底	—	6.0	III	3	高台の断面形態が三角状。見込みに有の字文を配く。小野分組を配す	明緑灰色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	16C後半 京都瀬	HA 3 B14 II S20 台 847
	132	口	12.5	—	III	3	口縁は内湾気味の直口。口縁の外面に一染見込みに二条の線輪を施らす。内面に四方 文を配している。高直である。小野分組を配す	明緑灰色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	16C後半～17C初 京都瀬	HA 3 H4 II 名道所 台 3003
	133	底	—	7.8	III	3	高台の断面形態が三角状。見込みに一染見込みに二条の線輪と散文を配く。132と同 一類体の可能性がある。小野分組を配す	明緑灰色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	16C後半～17C初 京都瀬	HA 3 G1 II 瓦屋 台 1043
	134	口	—	—	VI	6	口縁は唇状に外側に垂れ下りる直口。口縁は丸い。口縁の内面に 一染見込みに草花文を配く。(丸蓋)	明緑灰色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	16C後半～17C初 海州宮	HA 3 B19 III 2433
	135	口	10.0	—	V-2	2	口縁は内湾気味の直口。口縁の内外面に輪帯に飾る線輪を一染を施らす。	明緑灰色 口縁の発色は緑色	灰白色 緑茶	17C後半～18C初 福建・広東系	HA 3 G17 III 台 2284
	136	口	10.2	—	V-2	2	口縁は内湾気味の直口。口縁の内外面に一染見込みに二条の線輪を施らす。外面に草花 文を配く。	淡青灰白色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	17C後半～18C初 福建・広東系	HA 3 D19 II 既調 台 263
	137	口一底	8.4 3.4	4.2	IV	4	口縁は内湾気味の直口。口縁の外側に一染見込みに二条の線輪を施らす。内面に 花文。内底と見込みに線輪と花草文を配す。高台内に線輪に方形筋 を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	17C前半 京都瀬	HA 3 D1 II 祝院 台 1468 HA 3 D1 II 祝院 台 1915・1917
	138	底	—	—	IV	4	煎茶の丸味をもち身はやや深めである。内底面と見込みに一染の草花文 を配している。高台内に二染見込みに二条の線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	16C～17C前半 京都瀬	HA 3 D2 II 既調 台 2384
	139	底	—	6.6	IV	4	煎茶の丸味をもち身はやや深めである。内底面と見込みに一染の草花文 を配している。高台内に二染見込みに二条の線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	16C後半～17C初 京都瀬	HA 3 C11.2 II 台 1607
	140	底	—	8.7	IX	9	高台の断面形態が三角状。内底面と見込みに輪帯に飾る線輪を配す。見込みに一染見込 みに二条の線輪と山水文を配く。散文の可能性がある。彫形	淡青灰白色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	18C 福建	HA 3 C20 II 既調 台 1390
	141	口	17.0	—	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。口縁の内面に一染見込みに二条の線輪を施らす見 込みに一染見込みに二条の線輪と山水文を配く。139と同一体か	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 C19 II 既調 台 1658
142	口一底	15.3 3.1	8.7	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。高台の断面形態は方形で先染は淡 青。内底面と見込みに一染見込みに二条の線輪と山水文を配く。 外無文。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 T4 II 既調 台 1553	
143	口	14.2	—	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。口縁の内面に一染見込みに二条の線輪を施らす 山水文を配く。見込みに一染見込みに二条の線輪と花草文を配している。外無文。	淡青灰白色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 A11 II 台 2611	
144	底	—	12.3	Ⅷ	8	高台の断面形態は方形で先染は三角。見込みに花草文を配す。外無文。 高台内に一染見込みに二条の線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 D2 II 既調 台 980・2583	
145	底	—	8.8	Ⅷ	8	高台の断面形態は方形で先染は丸い。外面は高台縁に一染見込みに二条の線輪と 山水文を配く。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 J3 III 名道所 台 288	
146	口一底	15.4 3.5	8.7	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。口縁の外側に一染見込みに二条の線輪を施らす 山水文を配く。内底面と見込みに一染見込みに二条の線輪と山水文を配く。高台内に 線輪と山水文を配く。高台内に線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 E10 II SD52 台 3218・3	
147	口一底	15.2 2.8	8.4	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。高台は細口で断面形態は 唇状。口縁は丸い。外面に垂れ下りる直口。口縁の内面に一染見込みに二条の線輪と 山水文を配く。内底面と見込みに一染見込みに二条の線輪と山水文を配く。高台内に 線輪と山水文を配く。高台内に線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 D1 II 既調 台 301 HA 3 A2 II 既調 台 476 HA 3 B4 II 既調 台 1333 HA 3 J3 III 既調 台 1032 HA 3 J II 台 914	
148	口一底	15.6 2.9	8.3	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。高台の断面形態は唇状。 口縁は丸い。外面に垂れ下りる直口。口縁の内面に一染見込みに二条の線輪と山水文を 配く。内底面と見込みに一染見込みに二条の線輪と山水文を配く。高台内に線輪と 山水文を配く。高台内に線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 R15-17 IV 台 2144	
149	口一底	12.8 2.9	6.4	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。高台の断面形態は唇状。 口縁は丸い。外面に垂れ下りる直口。口縁の内面に一染見込みに二条の線輪と山水文を 配く。内底面と見込みに一染見込みに二条の線輪と山水文を配く。高台内に線輪と 山水文を配く。高台内に線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 G14 II 台 3113	
150	口一底	15.7 2.9	8.2	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。高台の断面形態は唇状。 口縁は丸い。外面に垂れ下りる直口。口縁の内面に一染見込みに二条の線輪と山水文を 配く。内底面と見込みに一染見込みに二条の線輪と山水文を配く。高台内に線輪と 山水文を配く。高台内に線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 D1 II 既調 台 1468	
151	底	—	8.6	Ⅷ	8	高台の断面形態は方形。見込みに散文を配している。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 E20 II 上。既調 台 1523	
152	口一底	15.9 3.3	9.5	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。高台の断面形態は唇状。 口縁は丸い。外面に垂れ下りる直口。口縁の内面に一染見込みに二条の線輪と山水文を 配く。内底面と見込みに一染見込みに二条の線輪と山水文を配く。高台内に線輪と 山水文を配く。高台内に線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 I4 I 名道所 台 264 HA 3 J1 II 瓦屋 台 2355 HA 3 C2 II 既調 台 2360	
153	底	—	10.0	Ⅷ	8	高台の断面形態は方形。見込みに二染見込みに二条の線輪と「志在書中」を配く。高台 内に一染見込みに二条の線輪と「和実」を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 E1 II 既調 台 1032・1284	
154	口	19.6	—	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口を成し。口縁は丸い。外面に散文を配す。内面に 散文を配く。	淡青灰白色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 A20 II 既調 台 1309・1522	
155	口	20.4	—	Ⅷ	8	口縁は直縁に外側に垂れ下りる直口。口縁は丸い。外面に散文を配す。内面に 散文を配く。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 T10 II 既調 (SD08) 台 1953	
156	口一底	18.2 4.0	10.0	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。高台の断面形態は唇状。 口縁は丸い。外面に垂れ下りる直口。口縁の内面に一染見込みに二条の線輪と山水文を 配く。内底面と見込みに一染見込みに二条の線輪と山水文を配く。高台内に線輪と 山水文を配く。高台内に線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	18C 徳島瀬 福建・広東系	HA 3 K7 II 照原先生 台 1774	
157	口	15.9	—	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。高台の断面形態は唇状。 口縁は丸い。外面に垂れ下りる直口。口縁の内面に一染見込みに二条の線輪と山水文を 配く。内底面と見込みに一染見込みに二条の線輪と山水文を配く。高台内に線輪と 山水文を配く。高台内に線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は普通	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 E3 II ナカミチ 台 1451	
158	口	17.5	—	Ⅷ	8	口縁は内湾気味の直口。口縁が丸い。高台の断面形態は唇状。 口縁は丸い。外面に垂れ下りる直口。口縁の内面に一染見込みに二条の線輪と山水文を 配く。内底面と見込みに一染見込みに二条の線輪と山水文を配く。高台内に線輪と 山水文を配く。高台内に線輪を配す。	淡青灰白色 口縁の発色は薄い	灰白色 緑茶	18C 福建・広東系	HA 3 H20 II 瓦屋 台 1021	
159	底	—	7.2	IX	9	底面は扁平高台に三角状の彫形・整形の底である。見込みに散文を配 いている。外底に「台」の字の彫形が施されている。	淡青灰白色 口縁の発色は普通	白色 緑茶	18C 徳島改	HA 3 C19 II 既調 台 1651	

第58表-2 染付(その他) 観察一覧

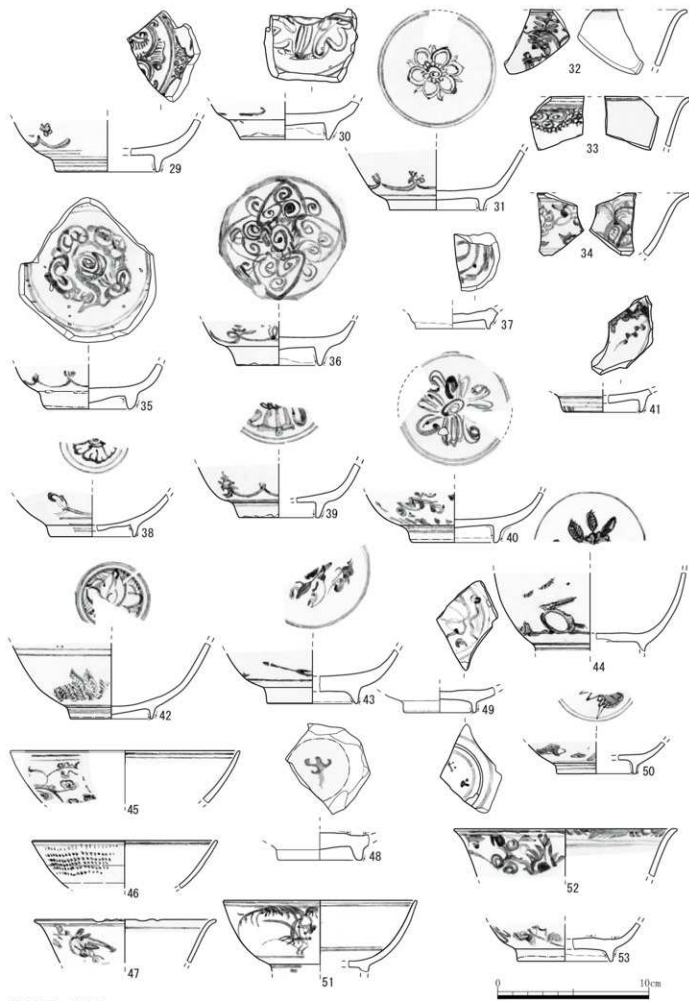
国産 陶磁	器 番号	器 種	部位	口径 深高 (cm)	口径 (cm)	器形・文様構成	釉・乳濁	施 色・質	生産年代 生産地・その他	地区・グッド・目 録簿・台(取)番号
第104 国産 70	186	小杯	口	5.5	—	上がった製を持ち直したつ。口縁は直口、口唇は舌状、外面に一条黒線を 描いている。人物文を配っている。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	17C前半 京焼窯元	HA ㉔ B4 1 既製 台 2363
	187		底	—	2.8	腰部から八面体の面取りをしている。外面に意匠の枠と考えられる意匠 の下部分の文様のみある。見込みに一条黒線と花文が施されている。 高台縁と高台に一条黒線を配し、高台内に「鳥」の字を添えている。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	17C前半 京焼窯元	HA ㉔ K19 II 台 2665
	188		口へ底	6.4 3.2	3.5	製型に丸みをつつ口唇は反し口唇はない、外面に唐草文を施す。高 台縁に一条黒線を配する。口先、型押し整形である。	灰白色 乳濁の発色は普通	白色 釉濁	18C 徳化窯	HA ㉔ D1 II 既製 台 1408
	189		口縁	5.2	—	直口口縁で口唇は舌状、外面に一条黒線を描き上略化した梵字を配して いる。口先、型押し整形である。	灰白色 乳濁の発色は普通	白色 釉濁	18C 徳化窯	HA ㉔ H20 II 既製 台 1021
	190		口	4.2	—	上がった製を持ち直したつ。口縁は直口、口唇は舌状、外面に芝草の帯 文を施している。口先、型押し整形である。	灰白色 乳濁の発色は普通	白色 釉濁	18C ~ 19C 徳化窯	HA ㉔ II 台 922
	191	器物 (蓋)	底部	—	6.6	腰部に丸みをもち高台は柱状の形。断面形は三角状、肩付けはない、 外面に水雲文を描き、高台内に一条黒線を配する。内面は薄く透明釉を 施している。蓋物と考えられる。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	18C 京焼窯元	HA ㉔ L6 II 二具 台 1296
	192	大鉢	底	—	7.6	高台は断面形は台形、外面の高台に二条黒線を施す。見込みに黒 線と花文を施している。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	17C末~18C中 京焼窯元 福屋・広東系	HA ㉔ D1 II 既製 台 830
	193		底部	—	12.7	高台は断面形は台形、内面、外面の高台に二条黒線を施す。見込 みは虎の口輪描き、肩み付けは流筋である。	黒褐色 乳濁の発色は薄い	灰白色 釉濁	18C ~ 19C 福屋・広東系	HA ㉔ K6 I II 二具 台 692
	194		鉢	製	—	—	内唇、外面「寿」の字を添す。見込みに一条黒線を施し流筋している。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	18C ~ 19C 福屋・広東系
	195	瓶	口	6.6	—	口縁はラッパ状に外に開き反する。口唇は舌状をなす。外面に蕉葉文 を描く。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	16C ~ 17C前 京焼窯元	HA ㉔ G8 Ⅲ SK5 台 37
	196		製(頸)	—	—	ラッコウの金で口の径がある。瓶が考えられる。外面はサベツ 文字文、唐草文、花鳥文を楕円の文様構成で描く。文様間に二条黒 線で区画している。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	15C ~ 16C 京焼窯元	HA ㉔ N14 II 台 2787
	197		製(頸)	—	—	長頸である。玉垂が瓶と考えられる。外面は蕉葉文を施している。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	15C ~ 16C 京焼窯元	HA ㉔ F13 II SD42 台 3189
	198		製	—	—	製型に扁平な面を持つ。外面に樹と若草の意匠を描く御室意匠。	黒褐色 乳濁の発色は濃い	灰白色 釉濁	15C末~16C代 京焼窯元	HA ㉔ H19 II 台 2401
	199		器物	製型	—	—	丸い製型を持つ器物外面に雲文を描く。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	16C ~ 17C 京焼窯元
	200	瓶	製	—	—	瓶の最大径が口にある頸部状の肩を有する。頸部に向かい「八」の字状 に草む、外面に黒線と如意雲文を添す。葉物文を描く。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	16C ~ 17C 京焼窯元	HA ㉔ B16 II 台 3068 HA ㉔ D12 II 台 3249
	201	瓶?	瓶	—	—	製が丸く頸部状の肩を有する。頸部に向かい一気に乗む瓶の外面に黒 線と宝珠文を添す一黒線と唐草文を描く。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	15C末~16C 京焼窯元	HA ㉔ H5 II 名座 台 988
	202	瓶	製	—	—	製の丸い瓶である。外面は意匠花鳥草文を施している。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	15C末~16C中 京焼窯元	HA ㉔ G2 II 上名座 台 311
	203	製	—	—	—	製の丸い袋物。外面は頸部の肩りに帯状突起と黒線文、唐草文を施して いる。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	16C代 京焼窯元	HA ㉔ G5 II 名座 台 980
	204	瓶	底	—	8.4	高台の断面形は三角状、外面に花文を描き二条黒線を描き出した意 匠文を添す。高台に一条黒線を配している。高台内に内面を添す。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	15C末~16C前 京焼窯元	HA ㉔ A2 II 既製 台 453
	205	瓶	底	—	7.6	高台は断面形は断面形は三角、肩付けはない、肩付けは丸い。外面 縁に如意雲文を配し高台に二条黒線を施す。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	17C前 京焼窯元	HA ㉔ E3 II 名座 台 1103
	206	水注	注口	—	—	注ぎ口の傾きは上向き、上面途中に肩部から伸びる支えの部分が認めら れる。外面は注口の輪部に細いタテリを施し、象徴的な文様を描く(花 文)。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	16C ~ 17C前 京焼窯元	HA ㉔ A4 II 既製 台 1617
	207	合子	蓋	—	—	楕形の合子で上面縁が分割の意である。内面から帯を当てて成形する ため内面に楕円形の溝がよこに基本帯に認められる。外面は楕圓 に帯の肩状に唐草文を施している。焼成不良のため文様の確認できない 部分が多い。型押し。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	16C ~ 17C前 京焼窯元	HA ㉔ M-N-O17-19 II 台 133
208	レンジ	底	—	—	蓮華の身部の意である。蓮華のみならず資料で表面縁は三角状に尖る。 高台縁と高台に二条黒線を描く。内面は唐草文を描き、見込みに二条 黒線を描く。型押し。	灰白色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	18C ~ 19C 徳化窯	HA ㉔ A1 II 既製 台 484	
209	瓶	製	—	—	なで口の長頸である。外面は蕉葉文、雲文、唐草を楕円の文様構成で描く。 文様間に二条黒線で区画している。	黒褐色 乳濁の発色は普通	灰白色 釉濁	15C ~ 16C 京焼窯元	HA ㉔ A15 晴砂 台 1425	
210	深鉢	製	—	—	口径に対して深口の瓶・鉢形を要請できる。香か輪木鉢と考えられる。 外面は如意雲文、牡丹文を添す。	灰白色 乳濁の発色は濃い	灰白色 釉濁	不明	HA ㉔ F14 晴砂 台 3216	
211	筒	製	—	—	腰部に丸みを持つ。外面は花文を描き頸部に一条黒線を添している。 内面は見込みに一条黒線を描く。	黒褐色 乳濁の発色は薄い	黄白色 釉濁	17C バトナメ	HA ㉔ F10 II 台 4020	
212	皿	底部	—	—	腰が張り製型は外にやや凹みながら立つ。外面にツマミ縁有文を描き、 高台縁と高台に二条黒線を描く。内面は唐草文を描き、見込みに二条 黒線を描き見込文を描く。	灰白色 乳濁の発色は黒色 濃い	黄白色 釉濁	15C前半 バトナメ	HA ㉔ E-F17 II 一 台 4574	



第97图 染付I



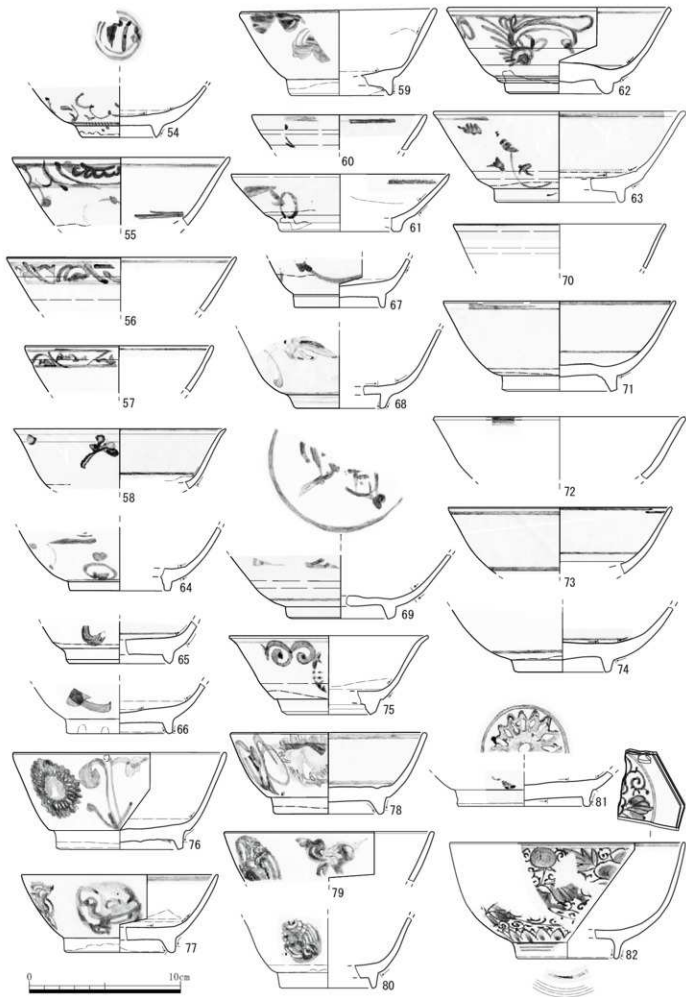
图版 63 染付 1



第98图 染付2



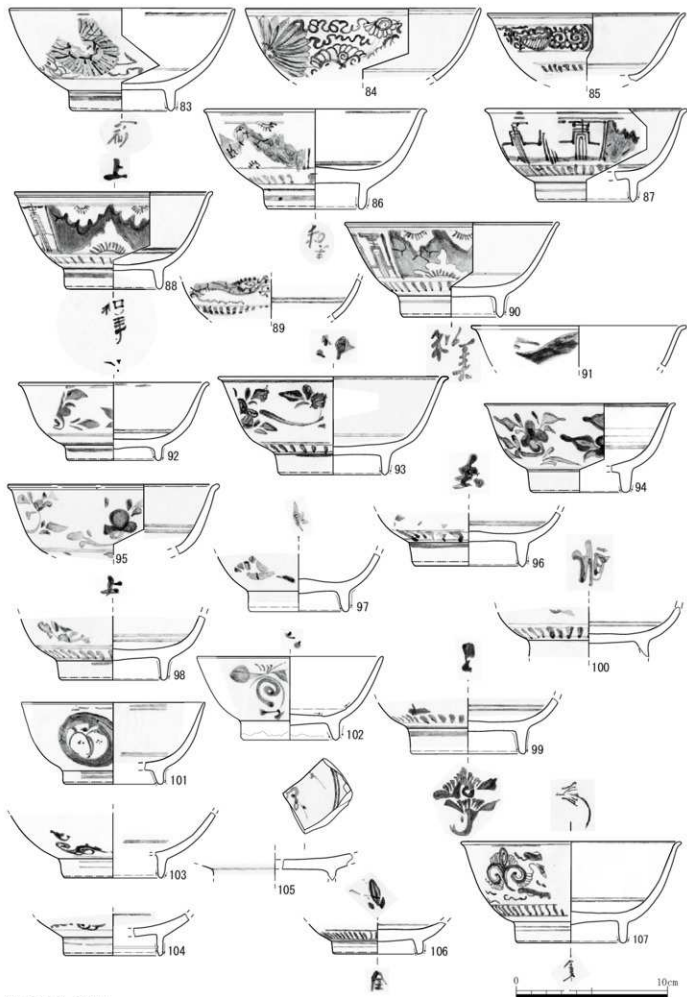
圖版 64 染付 2



第99图 染付3



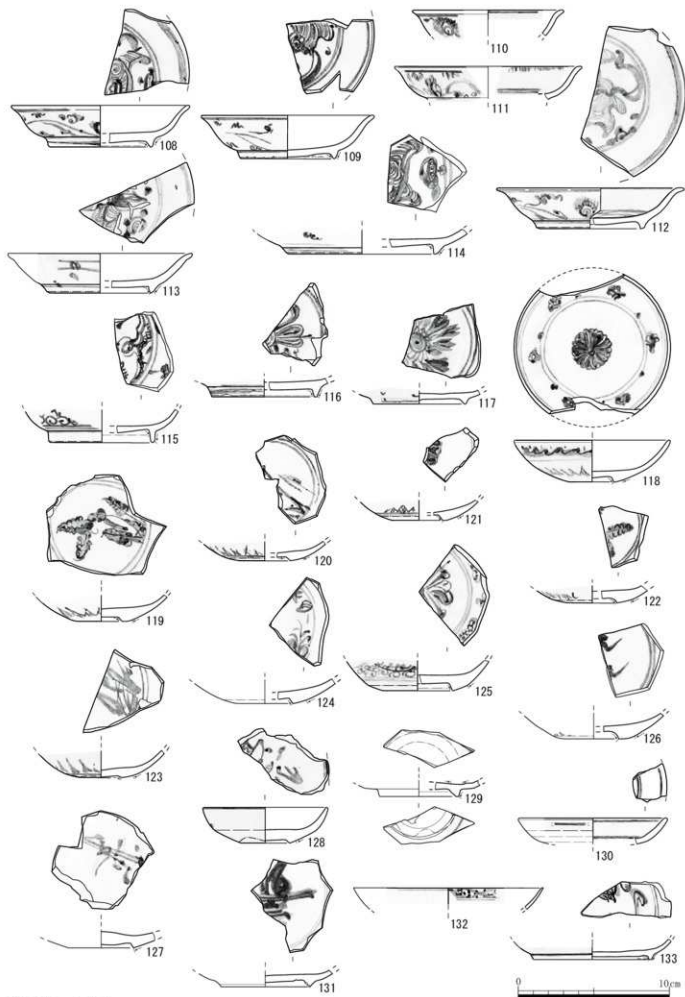
図版 65 集付 3



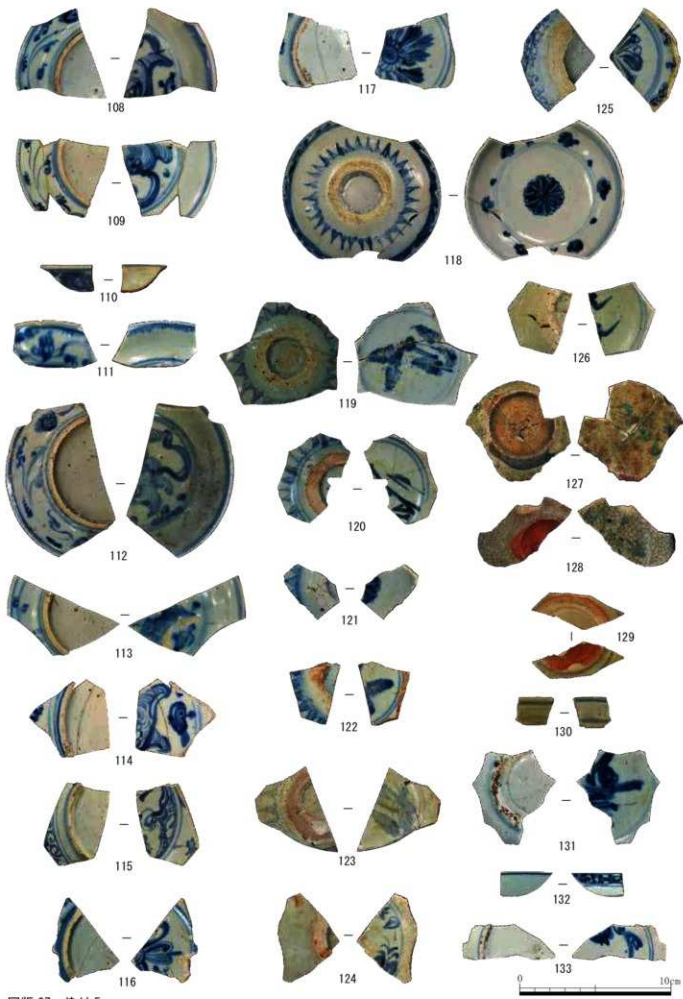
第 100 图 染付 4



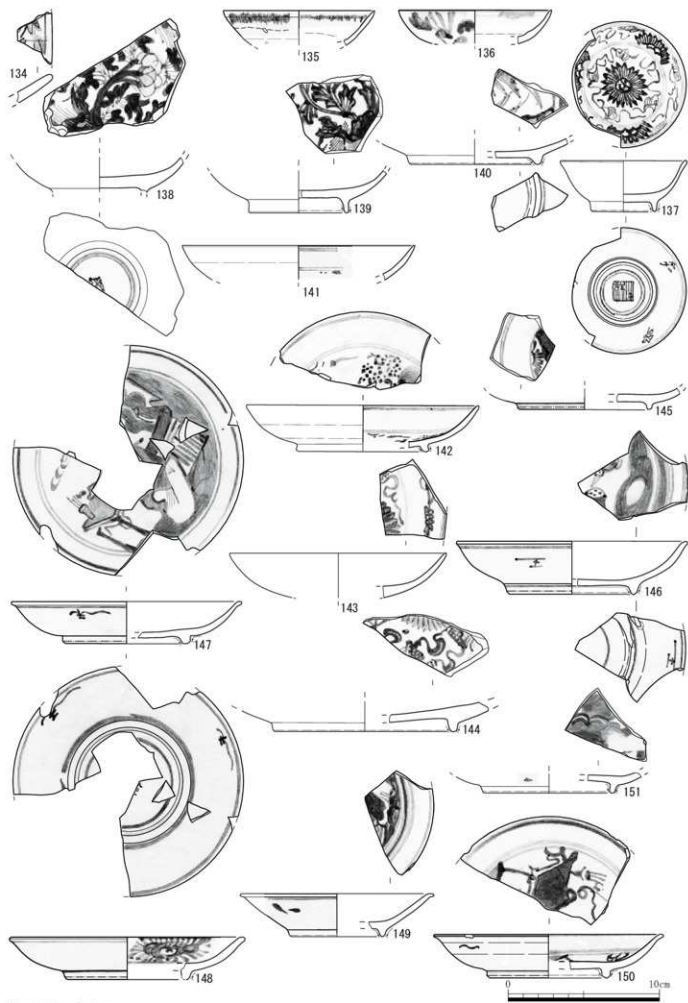
図版 66 染付 4



第101图 染付5



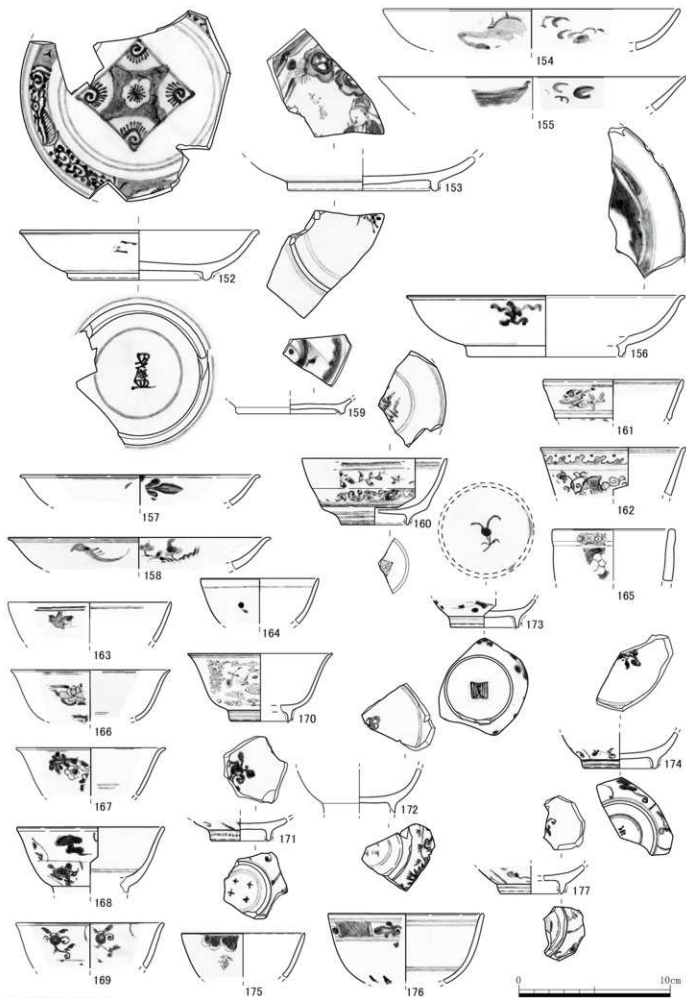
圖版 67 柴付 5



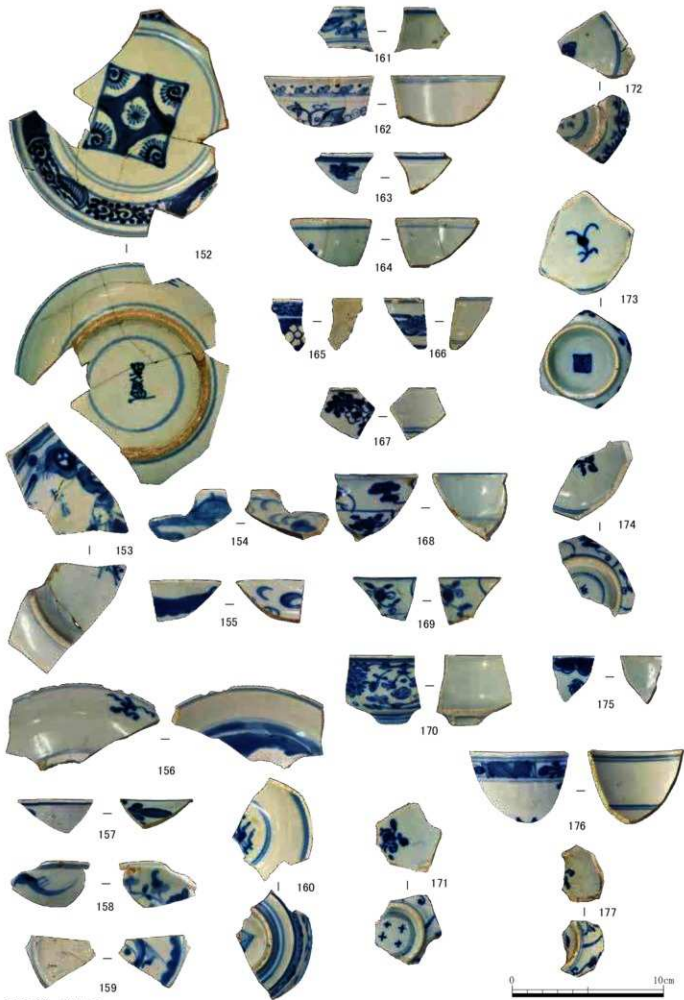
第 102 图 染付 6



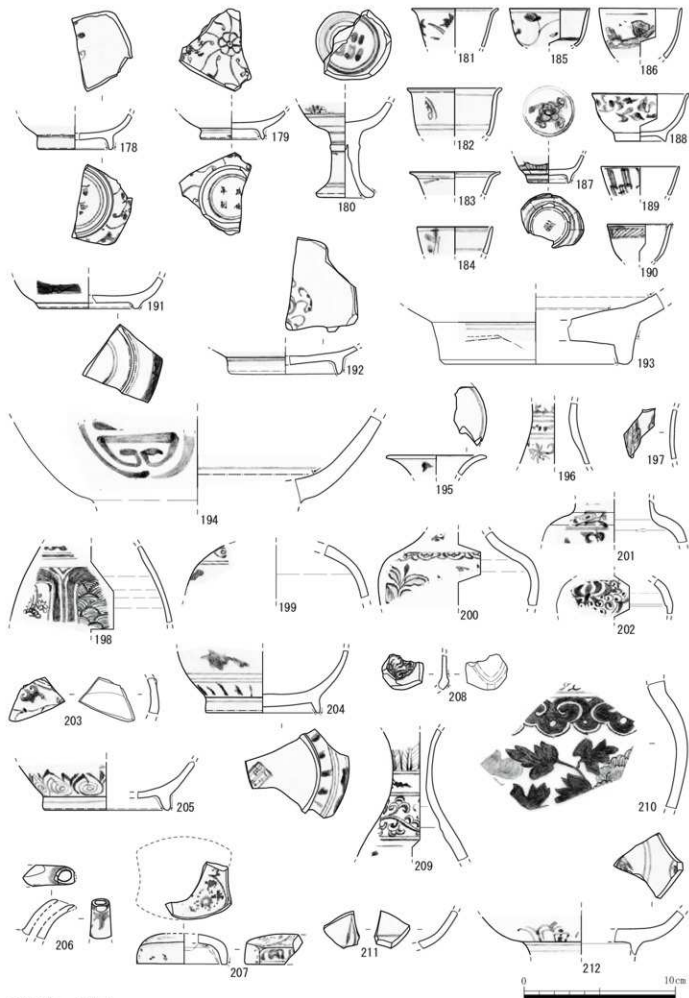
圖版 68 染付 6



第 103 图 染付 7



圖版 69 染付 7



第 104 图 染付 8



圖版 70 染付 8

(11) 青磁

総数 2807 点、殆どは中国産青磁である。主な生産地には龍泉窯、景德鎮窯、德化窯、福建・広東系があり、生産年代は 12C～13C の南宋が全体の 0.4%、13C～14C の元・明初が 6.2%程ある。更に 14C～17C 明代が 67.2%と多数を占め、清代は全体の 3.3%で 17C～18C 代の福建・広東系と 18C～19C 代の景德鎮窯産にほぼ二分される。器種の内訳は碗 2257 点・皿 280 点・大皿 8 点・盤 91 点・瓶 54 点・壺(蓋) 14 点・杯 9 点・鉢 18 点・香炉 7 点になり、碗と皿で全体の 90%を占める(第 61～63 表)。又、東南アジア産(タイ、中国南部)も少数得られ、碗 6 点・皿 2 点・瓶 1 点であった。出土分布にみる(第 105・106 図) 明代青磁は HA ④全体と HA ②西側と東側にグスク期の遺構と重なる。HA ③は全体に薄く分布するようである。清代は全体に出土が少ないこともあるが HA ③、HA ④、HA ②と少なくなる。HA ①には殆ど出土していない。分類と年代観は形態、成形方法、文様構成、釉調、胎土、により行い、特に元代から明代の碗、皿の分類は基本的に太宰府分類(森田勉・横田賢次郎 1978) 上田(1982)に準拠するものである。

1. 碗

全体の 80.4%で大多数をしめる。分類は 22 類に分けられた。生産地は龍泉窯、福建・広東系、東南アジア産(タイ、中国南部)がある。生産年代は宋末～元代、明代、清代に位置づけられる(第 63 表)。

I 類 a 龍泉窯系 劃花文

腹部で屈曲、口縁は直口し撥状に開く。口唇は舌状。外面無文、内面に片切彫りの二条圈線で弧状(輪花)に緑取り中に飛雲文を施文。図 1～4。底部は高台の断面形態が四角を成し高台の畳付け及び外底は露胎している。見込みに圈線と片切彫りの草花文(茸文)を施文する。図 5・6 生産年代 12C～13C、生産地 龍泉窯

I 類 b 龍泉窯系 無文

高台の断面形態は四角状を成し、高台の畳付け及び外底は露胎している。底部の器肉は特に厚い。図 7 生産年代 12C～13C、生産地 龍泉窯

II 類 a 同安窯系 櫛描文

内湾気味の平碗。外面に縦位の平行櫛目文を描き、内面は中位に圈線を巡らし、「乙」状の草花文と平行櫛目文を描く。透明感のあるオリーブ色釉を薄く施している。図 8 生産年代 12C～13C、生産地 同安窯

II 類 b 福建・広東系 櫛目文

内湾気味の直口碗。外面に縦位の平行櫛目を充填している。内面は無文で灰黄色釉を薄く施釉。図 9・10 生産年代 13C～14C、生産地 福建・広東系

III 類 a 龍泉窯系 鎊蓮弁文(貼花)

外面に肉厚の細鎊蓮弁文。内面は無文。高台は断面形態が三角状で先端は尖る。華奢な作り。釉は青灰色で貫入がある。全面釉で畳付けは露胎している。図 11 生産年代 13C～14C 前、生産地 龍泉窯

III 類 b 龍泉窯系 鎊蓮弁文

胴部は逆「八」の字状に広がりながら立つ。口縁は外反するものと直口するものとある。口唇は舌状に尖るものと丸く整えたものとある。外面にシャープな輪郭の花弁を片切彫りで描き幅の広い鎊蓮弁文を施す。弁と弁の間に花弁を有する。内底に凹圈線と印花文を有する。高台は断面形態四角状。釉色は青灰色とオリーブ灰色がある。図 12～21 生産年代 13C～14C 前、生産地 龍泉窯

IV 類 龍泉窯系 片切彫蓮弁文

外面に片切彫りの蓮弁文を施す。高台の断面形態は四角状と三角状とある。釉は青緑灰色で高台脇までし施釉し外底は蛇の目状又は無釉である。図 22～30

V 類 龍泉窯系 片切彫蓮弁文+唐草文

直口口縁、口唇は丸味を持つ。外面に片切彫りの蓮弁文を二条圈線下に施し内面は片切彫りの草花文や唐草を施文する。図 31 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

VI 類 龍泉窯系 片切彫ラマ式蓮弁文+唐草文

外面に片切彫りのラマ式蓮弁文、内面に唐草文及び草花文を施文。内底は圈線と片切彫の花文を描いている。図 32～34 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

VII 類 龍泉窯系 片切彫唐草文

外面と内面に片切彫の唐草文及び草花文を施文している。内底は圈線と片切彫の花文を描いている。図 35～38 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

Ⅷ類 龍泉窯系 片切彫草花文 外面は無文。内面に片切彫草花文。作図無し。

Ⅸ類 龍泉窯系 片切彫草花文 外面に片切彫の草花文か唐草文。内面は無文。作図無し。

X類 龍泉窯系 片切彫草花文 外面に片切彫の草花文か唐草文。内面は片切彫の雷文+草花文。作図無し。

XI類 龍泉窯系 雷文+唐草文

外面に片切彫の雷文と唐草文を施文。内面は片切彫の唐草文を施文。図 39～43 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

XII類 龍泉窯系 片切彫草花文 外面に片切彫の雷文+草花文。内面は無文。作図無し。

XIII類 龍泉窯系 雷文

外面に片切彫りや印花の雷文を施文している。内面は無文。図 44・45 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

XIV類 a 龍泉窯系 型押施文(人形手)器面の内外面に施文

内湾気味の直口碗で口唇が丸いものと玉縁にやや近いものとある。ア：外面は印花の雷文、内面に型押しした雷文と草花文を施文している。図 46・47。イ：外面に片切彫の草花文と内面に型押しした人物文(故事題材)を施文。図 48 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

XIV類 b 龍泉窯系 型押施文(人形手)内面のみ施文

内湾気味の直口碗で口唇が丸いものと玉縁にやや近いものとある。

ア：外面が無文で内面に型押しした人物文(故事題材)を施文。図 49～51 イ：外面無文内面に草花文や雷文と建物文を施文している。図 52・53 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

XV類 a 龍泉窯系 丸彫蓮弁文

外面に丸彫り蓮弁文を施文。内面無文。図 54～56 生産年代 15C～16C 生産地 龍泉窯

XV類 b 龍泉窯系 丸彫蓮弁 文外面に丸彫り蓮弁文を施文。内面は草花文。作図無し。

XVI類 a 龍泉窯系 線描き蓮弁文

外面に線描きの蓮弁文。内面無文。図 58～65 生産年代 15C～16C 生産地 龍泉窯

XVI類 b 福建・広東系 線描き蓮弁文

外面に線描きの蓮弁文。内面無文。図 57 生産年代 15C～16C 生産地 福建・広東系

XVII類 a 龍泉窯系 線描き波状雷文

外面に線描きの波状雷文と蓮弁文を施文。図 66 生産年代 15C～16C 生産地 龍泉窯

XVII類 b 福建・広東系 線描き波状雷文

外面に線描きの波状雷文と蓮弁文を施文。図 67・68 生産年代 15C～16C 生産地 福建・広東系

XVIII類 a 龍泉窯系 外反無文 図 69～73 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

XVIII類 b 福建・広東系 外反無文 図 74 生産年代 14C～15C 生産地 福建・広東系

XIX類 龍泉窯系 内彎無文作図無し。

XX類 龍泉窯系 玉縁無文作図無し。

XXI類 a 龍泉窯系 直口無文 図 75・76 生産年代 15C代 生産地 龍泉窯

XXI類 b 福建・広東系 直口無文 図 77～79 生産年代 15C～16C 生産地 福建・広東系

XXII類 福建・広東系 撥形碗 図 94・95 生産年代 17C～18C 生産地 福建・広東系

底部

1類 a 龍泉窯系(劃花文) 高台の断面形態が四角を成し高台の畳付け及び外底は露胎している。内底に圏線と片切彫りの草花文(茸文)を施文。図 5・6 生産年代 12C～13C、生産地 龍泉窯

1類 b 龍泉窯系(劃花文) 内底面無文。高台の断面形態は四角状を成し、高台の畳付け及び外底は露胎している。底部の器内は特に厚い。図 7 生産年代 12C～13C、生産地 龍泉窯

2類 a 龍泉窯系 高台の断面形態が三角状を成す。図 80・81・83・84・86～89・91・92。

2類 b 龍泉窯系 高台の断面形態が四角状を成す。図 82・85・90。

3類 a 福建・広東系 高台の断面形態が三角状を成す。図 93

3類 b 福建・広東系 高台の断面形態が四角状を成す。図無し

3類 c 福建・広東系 高台の断面形態が四角状を成す。図 94・95

2. 皿

総数 280 点、全体の 10.0%、碗に次ぐものである。生産地は龍泉窯、景德鎮窯、福建・広東系がある。生産年代は 14C～17C 中葉までの明代、17C 後半～18C 清代に位置づけられる（第 61 表）。9 類に分類した

I 類 福建・広東系 無文 外反

外面に轆轤痕を多く残す。胴部から逆「八」の字状に開き口縁は外反している。図 96 生産年代元代、生産地 泉州窯か

II 類 a 龍泉窯系 鑄蓮弁文 口折

腰に丸味を持ち、胴は直線的に開く。口縁は口折れである。高台は外削りが多く、断面形態は四角や台形がある。外面に鑄蓮弁文を巡らしている。図 98～100 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

II 類 b 龍泉窯系 片切彫蓮弁文 口折

腰は腰折れに近い屈曲を持ち、胴は直線的に開く。口縁は口折れ。高台の断面形態は四角状である。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。図 101～103 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

II 類 c 龍泉窯系 無文 口折

腰は腰折れに近い屈曲を持ち、胴は直線的に開く。口縁は口折れ。図 104 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

III 類 a 龍泉窯系 篋描唐草文 外反

腰が丸く、胴部は直線的に外に開く口縁は外反である。高台は畳付けの外側を斜めに削り出し、断面形態は三角形。両面に篋描きの唐草文を描いている。内底に草花印花文を施す。図 110 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

III 類 b 龍泉窯系 篋描唐草文 外反

腰が腰折れに近い丸味を持つ、口縁は外反である。外面は無文で内面に篋描きの唐草文を施す。図 111 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

III 類 c 龍泉窯系 無文 外反

腰が丸く、口縁に向かい開き外反する。高台は畳付けの両面削り出し、断面形態は三形状。無文である。図 112 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

III 類 d 龍泉窯系 篋描蓮弁文・唐草文 外反

腰の丸い外反口縁である。外面に篋描きの蓮弁文を巡らし内面は唐草文を施す。生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯 作図無し

IV 類 龍泉窯系 無文 腰折 円縁外反

腰折れで口縁は外反。高台は外削りで高台の断面形態は台形状、四角状。内底面は草花の印花文を施すものと無文があり、円形に露胎させている。図 114・115 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

V 類 a 龍泉窯系 腰折 稜花外反

腰折れの稜花である。口縁部は外に開き口唇部に抉りを入れ稜を作る。口唇は丸い。高台は畳付け外側から削り出し断面形態は三角状を成す。外体は無文、内面に篋描きの流水文を描き、内面の口唇と体部に櫛描き文を描く。内底中央は円状露胎している。図 116～119 生産年代 15C 代 生産地 龍泉窯

V 類 b 龍泉窯系 無文 腰折 稜花外反

腰折れで口縁は大きく外に開き口唇部に抉りを入れた無文の稜花である。図 120 生産年代 15C 代 生産地 龍泉窯

VI 類 龍泉窯系 輪花直口

腰部にやや丸味を持ち外に開き立ちあがる。口縁は直口し輪花状。高台の断面形態は先端丸い四角状。外体面に線彫に鑄式の稜を加えた菊花弁を描き内体面に丸彫りの花卉を描く。口唇に花卉の切り込みを入れ、上面観が菊花状の輪花を成す。図 122 生産年代 15C 代 生産地 龍泉窯

VII 類 龍泉窯系 直口

腰部に丸味を持ち口縁に向かいやや開き立つ。口縁は直口。高台断面形態は先端が尖る四角状である。外面に鑄蓮弁文を施す。内底面に陽刻圓線を巡らす。図 123 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

VIII 類 龍泉窯系 直口

腰部に丸味を持ち口縁に向かいやや直で立ち上がるものがある。口縁は直口。高台断面形態は四角状。外体面に片切り彫りの蓮弁文を施す。内底面に陽刻圓線に草花の印花文を施している。図 124 生産年代 15C 前～中 生産地 龍泉窯

IX 類 a 龍泉窯系 直口 胴部に陽刻圓線区画

腰部に丸味を持ち外面中段の隔圍線の区画線から口縁に向かい開き直線的に立つ。口縁は直口。高台は外列りの断面形態は四角状と三角状がある。有文と無文があり図 125 は下段に叉状蓮弁を 4 方に描く、内面は丸彫りの蓮弁文を巡らしている。内底面に隔圍線に印花文を施している。図 126 は無文。生産年代 15C 生産地 龍泉窯

IX 類 b 龍泉窯系 直口

腰部に丸味を持ち口縁に向かいやや開き立つ。口縁は直口。高台断面形態は三角状。外面は無文。内体面に二条から三条の縦位の飾描きを施す。内底面に隔圍線が認められる。図 127・128 生産年代 15C 生産地 龍泉窯

底部

1 類 1 龍泉窯系 帖花文(双魚文)

高台の断面形態は四角状。外面無文。内底に圈線と帖花の双魚文を施す。図 97 生産年代 14C 生産地 龍泉窯

1 類 2 龍泉窯系 印花文(草花文)

高台は畳付けの外側を斜めに削り出し外列りである。高台の断面形態は台形状。外面無文。内底面に草花の印花文を施している。図 113 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

2 類 1 龍泉窯系 片切彫蓮弁文 印花(双魚文)

高台は畳付けの両側を斜めに削り出し外列りで断面形態は三角状、台形状、四角状があり、外面に片切彫の蓮弁文や鎗蓮弁に線彫りを加えた蓮弁文を巡らしている。内底は陽刻と陰刻の圈線に印花の双魚を施文するものとする。図 105～107 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

2 類 2 龍泉窯系 片切彫蓮弁文 印花文(草花文)

高台は畳付けの外側から削り出し外列り断面形態は台形を成す。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。内底は圈線に草花の印花文を施している。図 108・109 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

3 類 龍泉窯系 腰に丸味を持ち、比較的底径が小さいが見込みは広い。内底は印花文を施し中央部は円状に露胎させている。図 129 生産年代 14C～15C 生産地 龍泉窯

4 類 a 龍泉窯系 腰折

腰折れである。高台の断面形態は四角状。外底畳付内に兜巾絞り切り痕が認められる内面に飾描の斜線文を描き、内底に篋描の流水文を描かしている。内底面に幅広圈線と印花の草花文がみられる。内底の釉を剥ぎとるものがある。図 121 生産年代 15C 代 生産地 龍泉窯

4 類 b 龍泉窯系 腰折 無文

腰折れである。高台の断面形態は三角状。内底の釉を蛇の目剥ぎする。図 130・131 生産年代 15C～ 生産地 龍泉窯

5 類 福建・広東系 無文。高台内の釉を蛇の目剥ぎする。図 132 生産年代 15C～16C 生産地 福建・広東系

6 類 龍泉窯系 無文碁筒底。図 133 生産年代 15C～16C 生産地 龍泉窯

3. 大皿

口径が 20cm 前後で盤に含まれない大ぶりの皿で、総数 8 点得られた。図 135 は腰折れの輪花の大皿である。外面に蓮弁文中に飾描を縦位に充填している。口唇は抉りで輪花を成す。内面は飾描きの流水文と青海波、波中に飾目を充填し、内底に圈線と印花文を施文している。図 136 は口折れの稜花大皿である。外面の鈎より下位に丸彫りの蓮弁文を巡らし、内面の鈎上面に篋と飾による流水文を描き、内体面に篋彫りの草花文を施している。図 134 は碁筒底の大皿である。内面は丸彫りの細蓮弁文を巡らし内底全面に印花文を施こしている。

4. 盤

総数 91 点が得られた。稜花縁と平縁がありいずれも鈎状を成す。鈎は断面形態で撥状、略「L」字状があり、図 138・140 は撥状、以外、略「L」字状であった。図 138 は口唇を切り込み稜を作る稜花縁である、鈎上面にヘラ彫りの弧状文を描き、内面に篋彫りの幅広蓮弁文を施文している。図 140 は内面に 6 本飾目の蓮弁文を描いている。図 144 は内面に 5 本飾組の細蓮弁文を描いている。図 145 は口縁が略「L」字状の鈎縁を成すもので、内体面に篋描きの幅広蓮弁文を描き内底面に印花の双魚文を施している。

5. 瓶

総数 54 点得られた。型押し of 扁瓶、玉壺春瓶、双耳瓶、小型瓶が得られている。図 147 は型押し成型の扁瓶である。外面の平坦部に陽刻の円弧鬚いた窓文、周辺に二条の界線とラマ蓮弁の枠に青海波を充填している。高級品である。図 150・154 は中型の玉壺春瓶で、図 150 は口縁部が大きく外に開く玉縁を持ち、外面に線刻の圈線を巡らしている。図 154 は外面に線刻の芭蕉文と篋描きの唐草と二条圈線を挟み線刻の蓮弁文を描く瓶底部である。図 151・157 は小型の

玉壺春瓶である。図 151 は口縁部が大きく外に開く玉緑の口縁で図 157 は底部資料である。図 148 は頸部が方形になる双耳瓶である。外面は動物形と思われる型押し成型の外耳が付く。

6. 蓋

総数 14 点で酒会壺の蓋が 1 点、壺などの被せ蓋 5 点が得られている。図 165 は罎部分のみの破片で甲上面に片切彫の草花文が見られる。図 168 は被せ蓋である。甲部がやや平坦で僅かに膨らむ、甲上面に貼付痕が見られる、縁部は単構造で、先端の断面形態は四角状である。

7. 鉢

総数 18 点小鉢 1 点、大鉢 17 点を得られている。図 169 は口縁部が「く」の字状に内側に内彎する小鉢である。外面に鈎蓮弁文を施文している。図 177 は腰部の張った大鉢である。外面に線刻の蓮弁文を巡らしている。

8. 杯

高杯 2 点、杯 7 点、総数 9 点を得られている。図 172・173 は高足杯の脚部である。図 172 は横位の線刻文が巡る、粗製品。図 174～176 は内面に白磁釉、外面に青磁釉を掛け分ける杯である。176 は高台内に染付による方形銘款を付す。

9. 香炉

7 点得られた。図 178 は罎縁香炉で釉は比較的薄い。図 179 は罎縁三足香炉である。外面は罎上面に線彫りの楡垣文を巡らし、頸部に波状文、下に蓮弁文を挟み窈窕形牡丹唐草を施文している。

10. 東南アジア産青磁

東南アジア産の青磁が 5 点得られている。タイ産の碗 4 点、瓶 1 点、タイか中国の南部が考えられる東南アジア産の青磁の碗が 1 点である。図 180～182・184 はタイ産の青磁碗である。180 は腰に張りを持つやや浅い碗で口縁は反折し、外面に轆轤痕が顕著である。図 184 はタイ産の双耳瓶である。図 183 は東南アジア産の青磁碗である。

第 59 表-1 青磁(碗・皿)観察一覧

(重量単位: gm)

図 107 図・図 108 図	種別	分類	部位	口縁底径 器高	器形・文様構成	釉色・胎質・貫入	表面色・温潤度・貝	生産年代 生産地	図(ク・グリッド・標 遺構・台・尺) 番号		
第 107 図・ 図 108 図	南	青磁	I 類 a	1	口	一直口、口唇状、外面無文内面にヘラウの三条線刻と草花文。	オリーブ色 釉薄い	灰白色 微粒子・磁素	12C ~ 13C 龍泉窯・同安窯?	HA ③ E9 II 539 台 1057	
				2	口	14.6 直口、腰は扁曲、指状に開く。口唇は舌状、外面無文、内面に片切彫の三条紋で蓮花(輪花)に縁取りし中に散雲文を施文、尾込は一条の扁曲。	灰色がかったオリーブ色	灰白色 微粒子・磁素	12C ~ 13C 龍泉窯	HA ③ D11 II 台 1165 HA ③ A14 II 5-11 台 4267	
				3	口	14.8 直口、口唇状、外面無文内面に片切彫の二条の紋脚で輪花状の縁刻を施す。	灰色がかったオリーブ色	灰白色 微粒子・磁素	12C ~ 13C 龍泉窯	HA ③ C13 II 台 1210	
				4	瓶	1 外面無文内面に片切彫の二条紋脚で図 3 と同様な文様を施す。	オリーブ色釉脚	灰白色 微粒子・磁素	12C ~ 13C 龍泉窯	HA ② T20 II 既図 台 522	
				5	底	7.6 見込に圓線と片切彫の草花文(唐文)を施している。	水色、浅青色 高台筋外縁無釉	灰白色 微粒子・磁素	12C ~ 13C 龍泉窯	HA ③ E5 I 523 台 1958	
				6	底	6.5 見込に圓線と片切彫の草花文(唐文)を施している。	オリーブ色 高台筋外縁無釉	灰白色 微粒子・磁素	12C ~ 13C 龍泉窯	HA ③ D9 I 台 1310	
				7	I 類 b	底	5.8 無文、内底に円線が見られる。器高は 18mm と特に厚い。高台は張り付くまで、断面形態は内凹状、窪み付けと外底に円形凹痕が認められる。	オリーブ色(失透釉 高台筋外縁無釉)	灰白色 微粒子・磁素	12C ~ 13C 龍泉窯	HA ② S4 II 既図 台 939
				8	II 類 a	口	13.0 内彎が強く立ち上がり口縁部は直口する。平面内面に 12 条の轆轤文を縦位に帯びている。内面は器内の程程に一条の圓線を巡らし半行唐文と之状の草花文を施す。	オリーブ色(釉脚)	灰白色 微粒子・磁素	12C ~ 13C 同安窯	HA ③ S18 II 台 1453
				9	II 類 b	口	14.0 口縁部は直口する。外面に荷の葉の轆轤文を縦位に帯びなく帯びている。内面は無文。	灰青色釉脚、	灰白色 微粒子・磁素	13C ~ 14C 龍泉窯・正東窯	HA ④ K2 III SP1352 台 4185
				10	II 類 c	口	12.0 口縁部は開き直口する。外面に約 8 条の轆轤文を縦位に帯びなく帯びている。内面は無文。	灰青色釉脚、	灰白色 微粒子・磁素	13C ~ 14C 龍泉窯・正東窯	HA ④ L20 II 台 2729
				11	III 類 a	底	5.4 外面内縁縁部内面無文高台形は丸型が尖る断面形は三角状、専奇。	青灰色片貝入り 引付磁素	灰白色 微粒子・磁素	13C 前 ~ 14C 前 龍泉窯	HA ③ D16 II 台 3203
				12	III 類 b	瓶	14.6 外反する口縁をもつと考えられる。外面に足弁の輪部を片切彫りて器高に花弁は扁曲した輪の広い縁文を施す。器弁を有する。内面無文。	青灰色透明釉	灰白色 微粒子・磁素	13C 前 ~ 14C 前 龍泉窯	HA ③ D06 I 台 1354
				13	III 類 c	口	15.2 轆轤部「八」の字状に立ち上がりながら直口である。口唇は舌状にやや平ら。外面にシヤな輪部の花弁を片切彫りて器高の広い縁文を施す。弁と弁の間に隙弁を有する。	青灰色透明釉	灰白色 微粒子・磁素	13C 前 ~ 14C 前 龍泉窯	HA ③ C7 II 台 1335
				14	III 類 d	口	16.9 轆轤部「八」の字状に立ち上がりながら直口である。口唇は舌状にやや平ら。外面にシヤな輪部の花弁を片切彫りて器高の広い縁文を施す。弁と弁の間に隙弁を有する。	青灰色透明釉	灰白色 微粒子・磁素	13C 前 ~ 14C 前 龍泉窯	HA ③ C6 II 台 1297
				15	III 類 e	口	18.0 轆轤部「八」の字状に立ち上がりながら直口である。口唇は舌状にやや平ら。外面にシヤな輪部の花弁を片切彫りて器高の広い縁文を施す。弁と弁の間に隙弁を有する。	青灰色透明釉	灰白色 微粒子・磁素	13C 前 ~ 14C 前 龍泉窯	HA ② M9 I 既図 台 268
				16	III 類 f	口	15.2 轆轤部「八」の字状に立ち上がりながら直口である。口唇は舌状にやや平ら。外面にシヤな輪部の花弁を片切彫りて器高の広い縁文を施す。弁と弁の間に隙弁を有する。	青緑灰色透明釉	灰白色 微粒子・磁素	13C 前 ~ 14C 前 龍泉窯	HA ② L5 II 三良 台 1269.1270
				17	III 類 g	口	16.4 轆轤部「八」の字状に立ち上がりながら直口である。口唇は舌状にやや平ら。外面にシヤな輪部の花弁を片切彫りて器高の広い縁文を施す。弁と弁の間に隙弁を有する。	青緑灰色透明釉	灰白色 微粒子・磁素	13C 前 ~ 14C 前 龍泉窯	HA ③ A18 II 台 1428

第59表-2 青磁(碗・皿) 観察一覧

(法量単位: cm)

調査年度	調査箇所	種別	部位	口径 底径 高さ	器形・文様構成	釉色・刺入	表地	生産年代 生産地	地区・クワッド・精選標・台(取)番号		
第107回・調査71	Ⅲ	Ⅲ類	18	口	16.6	胴にやや丸味をもち器「ハ」の字に閉き立ち上がる。口縁は口角が古長を成し僅かに外側に反る。外面に花竹の輪飾を片割りで描いた輪飾の輪飾文を施す。内と外に内面を有する。	青緑灰色透明釉	灰白色 顔料子・磁洲	130中～140前 産泉京	HA③ J3 II 91# 台2373	
			19	底	4.4	外面に花竹の輪飾を片割りで描いた輪飾文を施す。内底に凹形を有し花竹形は断続的内外。	青灰色透明釉 外底:無釉	灰白色 顔料子・磁洲	130中～140前 産泉京	HA③ B15 Ⅲ下 P001 台3900	
			20	底	5.5	外面は19と同様。内底に凹形と印花文を有する。高台形は断続的内外。	青灰色透明釉 外底:無釉	灰白色 顔料子・磁洲	130中～140前 産泉京	HA③ A14 II 台1460	
			21	底	—	外面に花竹の輪飾を片割りで描いた輪飾文を施す。内底に凹形を有する。	オリーブ色 外底:無釉	灰白色 顔料子・磁洲	130中～140前 産泉京	HA③ D05 Ⅲ 58001 高台2298	
			22	口	13.8	胴に丸味を持ち器底に閉き立つ口縁上縁まで11内にやや寄る直上。口縁は丸い。外面に片割りの輪飾文を施す。	青緑灰色透明釉	灰白色 顔料子・磁洲	14代 産泉京	HA④ F14 II SD42 台3115	
			23	底	4.4	高台形は断続的内外。外面に片割りの輪飾文。	青緑灰色透明釉 外底:無釉	灰白色 顔料子・磁洲	14代 産泉京	HA③ B18 II 台3144	
			24	口	15.6	胴に丸味のある内湾気味の底。口縁は古長を成す。外面に片割りの輪飾文を施しているが中央は「ヤ」字に反る。内面無文。	オリーブ色	灰白色 顔料子・磁洲	14C後～15C前 産泉京	HA④ K4 II 台2629 HA④ O5 II 台2825	
			25	口	17.2 7.6 7.7	口縁から口縁に向かい僅かに閉き立ち立つ。口縁は丸味を持つ。高台形は断続的内外。外面に片割りの輪飾文と印花文を施す。内面は無文である。	青緑色 全面輪飾 外底:輪を施す	灰白色 顔料子・磁洲	14C中～15C前 産泉京	HA④ E18-20・F17 I～Ⅲ 台4563 Ⅲ 台4577 HA④ F18 Ⅲ 台2185 HA④ H18 Ⅲ 台2396	
			26	Ⅳ類	底	5.8	口縁が器底。高台は器付けの外側から斜めに削り出し断面が三角形をなす。外面に片割りの輪飾文を施す。内底に「器」字の印花文を施す。内底に斜目線が認められる。	オリーブ色 器付跡跡	灰白色 顔料子・磁洲	14C後～15C前 産泉京	HA④ E15 Ⅲ 5872 台3361
			27	底	5.8	底面はやや形通しを成す。高台の外側面は高台の外側から斜めに削り出し断面が三角形をなす。外面に片割りの輪飾文。内底に一条線と印花文を施す。	オリーブ色 全面輪飾 外底:蛇の目状輪飾	灰白色 顔料子・磁洲	15C前～中 産泉京	HA④ F18 Ⅲ 台2182	
28	底	5.6	高台の形態は外側から斜めに削り出し断面が三角形。外面に片割りの輪飾文。内底に一条線と印花文を施す。	青緑色 器付け内側まで輪飾 外底:輪を施す	灰白色 顔料子・磁洲	15C前～中 産泉京	HA④ D19-20 II 石取り② 台4467				
29	底	5.4	高台の形態は断続的内外。外面に片割りの輪飾文。内底に一条線と「天」字の印花文を施す。	灰白色 外底:蛇の目状輪飾	灰白色 顔料子・磁洲	14C後～15C前 産泉京	HA④ D18 Ⅲ 台2324 HA④ F18 Ⅲ 台2173				
30	底	6.0	高台の形態は器付けの外側から斜めに削り出し断面が三角形。外面に片割りの輪飾文。内底に一条線と印花文を施す。	灰青緑色 全面輪飾 外底:輪を施す	灰白色 顔料子・磁洲	15C前～中 産泉京	HA④ J11 Ⅲ 台2463				
31	V類	口	14.4	直上。口縁は丸い。外面は一条線下に片割りの輪飾文を施す。内面は草花を施す。	オリーブ色	灰白色 顔料子・磁洲	14C中～15C前 産泉京	HA④ F20 II 台2199			
32	口	16.4	外反の玉縁。外面に片割りのラマ式器文。内面に草花を施す。	オリーブ色	灰白色 顔料子・磁洲	15C前～中 産泉京	HA④ K1 Ⅲ 5886 台3377				
33	Ⅵ類	口	13.5	胴部に丸味を持ち口縁部まで約的に立ちあがり口縁は外反する。口縁は丸い。外面に片割りのラマ式器文が、内面に草花を施す。	オリーブ色	灰白色 顔料子・磁洲	15C前～中 産泉京	HA③ F4 II 台1336			
34	底	8.0	丸面高台の形態は器付けの外側から削り出した断面が三角形。外と内面に片割りの輪飾文を施す。内底に一条線と印花文を描いている。	青緑色 全面輪飾 外底:輪を施す	灰白色 顔料子・磁洲	14C中～15C前 産泉京	HA③ M10 II Ⅲ 台666				
35	口	17.8	丸い器底から口縁は外反。玉縁を成す。外面に片割りの草草文。内面は草花を施す。	オリーブ色	灰白色 顔料子・磁洲	14C～15C 産泉京	HA④ D19-20 II 石取り② HA④ D19 II 台2001				
36	Ⅶ類	口	14.6	直上玉縁。外面はへらの二本取りで草草文を描いている。内面も同じ一本線の草草文を施す。	オリーブ色	灰白色 顔料子・磁洲	14C～15C 産泉京	HA③ T6 II 高台772			
37	底	7.6	高台の形態は器付けの外側から削り出した断面が三角形。外面に片割りの草草文。内底に一条線と片割りの草草文を描いている。	青緑色 全面輪飾 外底:輪を施す	灰白色 顔料子・磁洲	14C～15C中 産泉京	HA③ A20 II Ⅲ 台1887				
38	底	5.6	高台の形態は器付けの内側から削り出した断面が三角形。外と内面に片割りの草草文を施す。内底に一条線と片割りの草草文を描いている。	オリーブ色 全面輪飾 外底:輪を施す	灰白色 顔料子・磁洲	14C後～15C中 産泉京	HA③ S19 II 台1162				
39	口	15.2	外反口縁で口縁は丸味を持つ口縁に片割りの草草文。内面に雷文帯を施す。直下に草草文を施している。	青緑灰色	灰白色 顔料子・磁洲	15C前～中 産泉京	HA④ K20 Ⅲ SP1208 台4060				
40	口	14.6	丸味のある器底から内湾気味に立ち上がる直上玉縁。口縁は丸い。外面に片割りの草草文と下位に草草文を施す。	青緑灰色	灰白色 顔料子・磁洲	14C後～15C中 産泉京	HA③ T3 II Ⅲ 台394				
41	Ⅷ類	口	15.0	口縁は直線的に立ち上がり口縁は丸い。外面に片割りの雷文帯と下位に草草文を施す。内面は無文である。	オリーブ色	灰白色 顔料子・磁洲	14C後～15C中 産泉京	HA③ S20 II 台3175			
42	口	12.6	口縁は内湾気味に立ち上がる口縁は丸い。外面に片割りの雷文帯と下位に草草文を施す。内面は無文である。	オリーブ色	灰白色 顔料子・磁洲	14C後～15C中 産泉京	HA④ H18 Ⅲ 台2397				
43	口	15.0	丸味のある器底からやや内湾気味に立ち上がる直上玉縁である。口縁は丸い。外面に片割りの雷文帯と下位にラマ式器文。内面は無文である。	灰オリーブ色	灰白色 顔料子・磁洲	14C後～15C中 産泉京	HA④ F15 Ⅲ 台2130				
44	X類	口	14.0	やや内湾気味に立ち上がる直上玉縁である。口縁は先細で丸い。外面に片割りの雷文帯を施す。内面は無文である。	オリーブ色	灰白色 顔料子・磁洲	14C後～15C中 産泉京	HA④ E20 Ⅲ 台2080			
45	口	15.9	直線的に立ち上がり直上玉縁である。口縁は先太で丸い。外面に片割りの雷文帯を施す。内面は無文である。	青緑灰色	灰白色 顔料子・磁洲	14C後～15C中 産泉京	HA③ N13 II 台2773				
46	XⅨ類 47	口	16.4	やや内湾気味に立ち上がる直上玉縁である。口縁は丸い。外面に片割りの雷文帯を施す。内面は草草文を押し印している。	青緑灰色	灰白色 顔料子・磁洲	14C後～15C中 産泉京	HA④ D20 II 台2008			

第59表-3 青磁(陶・皿) 観察一覧

(数量単位: 個)

調査年度	調査箇所	種別	分期	部位	口径 底径 高さ	形状・文様構成	釉色・暇面・貫入	土色 ・底面・貫入	生産年代 生産地	地区・クワッド・層 通稱・台(高)番号				
第10層・調査区73	Ⅷ	XIVa a7	Ⅰ	口	16.0	直線的に広がり立つ口に1線である。口縁形状は先尖りかやや膨厚した丸。外面に黒文帯と段に黒文帯。内面は黒文帯と草花文を帯押しより施文している。	青緑灰色	灰白色 襷絵子・絞漆	14C後半～15C中 畿東京	HA③ H17 Ⅲ 台 2381.2383				
					6.8	高台の形態は貫けけの内側から削り出した断面が三角形。外面に写像的草花文を施す。内面は写像的人物文を施文している。内底に一葉扇輪が認められる。	青緑灰色	灰白色 襷絵子・絞漆	14C後半～15C中 畿東京	HA③ F15 Ⅱ S3 台 424				
					7.0	高台の形態は貫けけの内側から削り出した断面が三角形。外面は黒文。内面は黒文帯と草花文を帯押ししている。内底は黒文帯と一葉扇輪の写像が認められる。	灰オリーブ色 外底: 蛇の目輪削ぎ	灰白色 襷絵子・絞漆	14C後半～15C中 畿東京	HA① N14 Ⅱ Ⅱ 00245D 台 7				
					6.6	高台の形態は貫けけの内側から削り出した断面が三角形。外面は黒文。内面に黒文帯と草花文を帯押ししている。内底は印文(高)を施文している。	灰オリーブ色 外底: 蛇の目輪削ぎ	灰白色 襷絵子・絞漆	14C後半～15C中 畿東京	HA③ F6 Ⅱ 台 3187 HA③ D8 Ⅱ 台 754				
					—	内面に黒文帯を題材とした人物文を帯押ししている。外面は無文。	緑灰色	灰白色 襷絵子・絞漆	14C後半～15C中 畿東京	HA③ F15 Ⅱ S3 台 685 HA③ R5 Ⅱ 台 1222				
					—	内面に菊花文を帯押ししている。外面は無文。	灰オリーブ色	灰白色 襷絵子・絞漆	14C後半～15C中 畿東京	HA② A1 Ⅱ R02 台 2291				
					XIVb b1	Ⅰ	—	内面に黒文帯、流注文に白写像寺社の図像を帯押ししている。外面は無文。	—	オリーブ色	灰白色 襷絵子・絞漆	14C後半～15C中 畿東京	HA② A3 Ⅱ R02 台 1630	
									5.9	輪が垂らす高台から「八」の字に外に黒文帯は貫けけの内側から削り出す断面はほぼ四角形を成す。外面に丸形の黒文帯を施文している。	オリーブ色 外底: 無輪	灰白色 襷絵子・絞漆	14C中～15C中 畿東京	HA① N14 Ⅲ 0008SL 台 1
					XIVa a	Ⅰ	口	丸味のある輪から内径方向に立ち上がる直上口縁。口縁は丸い。外面に丸形の黒輪と黒文帯を施文している。	14.8	青緑灰色	灰白色 襷絵子・絞漆	15C 畿東京	HA② F3 Ⅱ 名器庫 台 1662	
									13.2	直線的に立ち、口縁は丸い。外面に丸の黒輪部分が二葉輪で表現される黒文帯を帯押ししている。	青緑灰色	灰白色 襷絵子・絞漆	15C 畿東京	HA② O5 Ⅱ 台 2818
					XIVb b	Ⅰ	口	内径方向の直上である。口縁は丸く外面に黒輪の黒文帯を帯くか黒輪と黒文帯を帯く一葉の黒輪を施文している。	14.2	青緑灰色	灰白色 襷絵子・絞漆	15C後半～16C 福尾・広東系	HA② T1 Ⅱ R02 台 1086	
									11.0 4.6 3.4	輪に丸味を持ち内径方向に立ち、口縁は丸い。高台は貫けけの内側から削り出した断面が三角形。外面に黒輪の黒文帯を帯くか黒輪と黒文帯は一葉の黒輪にのみ。内底面の下部に丸い黒文帯を施文する。内底に印文の写像は、中に字跡を伴う。文字は不明。	灰オリーブ色 外底: 輪目輪削ぎありは不明。	灰白色 襷絵子・絞漆	15C中～16C前 畿東京	HA② L18 Ⅱ 台 2720 HA④ H18 Ⅲ 台 2395
					XIVa a	Ⅰ	口	内径方向の直上である。口縁は丸く外面に黒輪の黒文帯を帯くか黒輪と黒文帯を帯く一葉の黒輪を施文している。	11.8	青緑灰色	灰白色 襷絵子・絞漆	15C中～16C前 畿東京	HA③ A14 Ⅱ S-11 台 1260	
									13.8	内径方向の直上である。口縁は丸く外面に黒輪の黒輪と黒文帯を帯くか黒輪を施文している。	オリーブ色	灰白色 襷絵子・絞漆	15C中～16C前 畿東京	HA④ M19 Ⅱ 台 2746
					Ⅷ	—	口	内径方向の直上である。口縁は丸く外面に黒輪の黒輪と黒文帯を帯くか黒輪を施文している。	13.0	—	オリーブ色	灰白色 襷絵子・絞漆	15C中～16C前 畿東京	HA④ F17 Ⅲ 台 2161
									—	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	オリーブ色 貫けけの内側まで	灰白色 襷絵子・絞漆	15C中～16C前 畿東京	HA④ E20 Ⅱ 台 2079
					XIVa a	Ⅰ	口	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に印文を施文している。	—	—	オリーブ色 貫けけの内側まで	灰白色 襷絵子・絞漆	15C中～16C前 畿東京	HA③ B15 Ⅱ 台 2521
									5.6	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	オリーブ色 貫けけの内側まで	灰白色 襷絵子・絞漆	15C中～16C前 畿東京	HA④ M-N-017-19 Ⅲ 台 132
					XIVb b	Ⅰ	口	丸味のある輪から内径方向に立ち上がる直上口縁。口縁は丸い。外面に丸形の黒輪と黒文帯を帯く一葉の黒輪を施文している。	—	—	オリーブ色 貫けけの内側まで	灰白色 襷絵子・絞漆	15C中～16C前 畿東京	HA④ R2 Ⅱ 台 2613.2615.2680
									12.5	内径方向の直上である。口縁は丸く外面に黒輪の黒輪の上下に黒輪を帯く流注文帯と黒輪を帯くした黒文帯を帯く。	青緑灰色	灰白色 襷絵子・絞漆	15C中～16C前 福尾・広東系	HA② J6 Ⅱ 照屋 台 1704
					XIVb b	Ⅰ	口	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	14.0	淡緑灰色	灰白色 襷絵子	16C代 福尾・広東系	HA④ K18 Ⅱ 台 2655	
									13.4	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	淡灰色	灰白色 襷絵子	16C代 福尾・広東系	HA④ N18 Ⅲ P67 台 95
					XIVa a	Ⅰ	口	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	17.8	青緑灰色 全周無輪 高内径の輪は不明	灰白色 襷絵子・絞漆	14C～15C 畿東京	HA② J3 Ⅱ 名器庫 台 1248 HA② J3 Ⅱ 台 2174. 2187 HA② F1 Ⅱ 台 2563	
									7.2	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	淡緑灰色	灰白色 襷絵子・絞漆	14C後半～15C中 畿東京系	HA④ G13 Ⅲ 台 2229
					XIVa a	Ⅰ	口	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	14.4	淡緑灰色 貫入あり。	灰白色 襷絵子	14C中～15C中 畿東京	HA④ H18 Ⅲ 台 2395 HA④ O14 Ⅱ 台 2842	
									14.9	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	青緑灰色	灰白色 襷絵子	14C後半～15C中 畿東京	HA④ E18 Ⅱ 台 2063
					XIVb b	Ⅰ	口	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	15.8	—	緑灰色 襷絵子	15C前半～中 畿東京	HA③ F19 Ⅲ 台 2195	
									15.8	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	淡緑灰色 高台輪まで黒輪	灰白色 黒色粉子混 襷絵子	14C中～15C中 福尾系	HA④ F17 Ⅲ 台 2157. 2158 HA④ F18 Ⅲ 台 2174. 2187 HA④ G17 Ⅲ 台 2280
					XV I a	Ⅰ	口	直上口縁口縁は丸い。外面に黒輪が認められる。無文。	—	青緑灰色	灰白色 襷絵子・絞漆	15後半～中 畿東京	HA③ G12 Ⅲ 台 3052 HA④ G12 Ⅲ 台 2220	
									12.8	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	オリーブ色	灰白色 襷絵子	15C中 畿東京	HA② J07 Ⅱ 7キ3台 2379 HA② A03 Ⅱ 台 1630(複台)
					XV I b	Ⅰ	口	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	13.6	—	灰白色 黒色粉子混 襷絵子	15C中 福尾・広東系	HA② A2 Ⅱ R02 台 490 HA② T1 Ⅱ R02 台 1086.1088	
									—	輪が垂らす高台の外に黒文帯は貫けけの内側から削り出した断面はほぼ四角形を成す。外面に黒輪の黒文帯を内底に「高」の黒入印文を施文している。	緑灰色	灰白色 黒色粉子混 襷絵子	15C中 福尾・広東系	

第三章
5

第10層・調査区74

第59表-4 青磁(陶・皿) 観察一覧

(度量単位: cm)

調査年度	図号	種類	分類	部位	上段・下段・底面	形制・文様構成	釉色・粒状・貫入	表地色・裏地材・貫	生産年代・生産地	地区・グリップ・胡蓮橋・台(図)番号
第10回 調査年度 74	X 1 類 b	前	I	口	12.7	腰にお味が残り、外面に開き口に立つ口縁は内腰気味の直口、口縁は丸い。外面に開き口に立つ口縁は丸い。無文。	青緑灰色	灰白色 襷格子	16C代 不明	HA③ F18 II SD41 台 2982
					14.4	腰に丸味が残り内腰気味に直口立つ口縁。口縁は丸九方形。無文。	靑灰色	灰白色 襷格子	15C ~ 16C頃 福尾・広島系	HA③ L20 III 台 2738
					5.2	高台は唇付けの外側から削り出し断面形は三角状を成す内底に唇付けの意に十字、分割、花? (写不明) を施す印文を施している。	青緑灰色 唇付けで施釉	灰白色 襷格子・襷面	14C ~ 15C 産泉宮	HA③ C12 II 台 749
					5.8	高台は唇付けの内側から削り出し断面形は三角状を成す。内底に印文・無文。	青緑灰色 唇付けで施釉	灰白色 襷格子・襷面	14C ~ 15C 産泉宮	HA③ A14 II 5.11 台 963
					6.3	高台は高台外縁と唇付けの外側を骨に削り出す。断面形は四角状である。見込に片切彫の胡蓮橋と此方に「上」の字が入る印文を施す。	青緑灰色 唇付け外側まで 外底・高台	灰白色 襷格子・細かい	14C ~ 15C 産泉宮	HA③ D11 II 台 1547
					6.6	腰に垂りを持つ。高台は唇付けの外側を削り出し断面形は三角状である。内底は襷格子の襷面である。見込には襷格子と八弁の意に胡蓮橋を施した印文を施している。写不明し文が。	青緑灰色 唇付け外側まで施釉 外底は高台	灰白色 襷格子・襷面	14C ~ 15C 産泉宮	HA③ I5 III 台 2424
					7.0	腰が削り出し唇付けの外側から削り出し断面形は外側に丸い。見込は丸い。襷格子の襷面を施し、内面見込は二外縁間に丸花の印文を施している。	オリーブ色 襷格子・襷面	灰白色 赤褐色・襷格子	14C末 ~ 15C中頃 産泉宮	HA③ E15 III 58.72 台 3361
					6.4	唇付けの外側を骨に削り出す高台の断面形は四角状である。内面見込には胡蓮橋と其下の印文を施す。	青緑灰色 唇付け外側まで施釉 外底は高台	灰白色 襷格子・細かい	15C頃 産泉宮	HA③ D7 I 台 603
					5.2	唇付けの外側を骨に削り出し高台の断面形は三角状である。内面見込に「ク」の字の花を施すアパレットの「の」の字の文様を施し中央に2の数字の印文を施している。	青緑灰色 唇付け外側まで 外底は高台	灰白色 襷格子・襷面	14C ~ 15C 産泉宮	HA③ A2 II 既図 台 474
					5.0	唇付けの外側を骨に削り出し高台の断面形は三角状。内面見込には「の」の花を施す「中」の字の文様を施している。高台は比較的高めである。内底は襷格子の襷面。	青緑灰色 唇付け外側まで施釉 外底・高台	灰白色 襷格子・細かい	14C ~ 15C 産泉宮	HA③ I 台 3364
第11回 調査年度 75	2 類 a	前	I	5.0	唇付けの外側を骨に削り出し高台の断面形は外側の三角状である。見込に丸花を施す六つに「只」字を配する印文を施している。高台はやや高い。	青緑灰色 唇付け外側まで施釉 外底は高台	灰白色 襷格子・細かい	14C ~ 15C 産泉宮	HA③ D06 I 台 1352	
				4.8	唇付けの外側を骨に削り出し高台の断面形は三角状である。内面見込には片切彫の胡蓮橋と中央に存を合した字を施した片切彫の印文を施している。	淡青緑色 唇付け外側まで施釉 外底・高台	灰白色 襷格子・襷面	15C 産泉宮	HA③ B14 II 5.28 台 2312	
				6.1	唇付けの外側を骨に削り出す高台の断面形は外側の略四角状である。内面見込に丸花と印文を施す。	青緑灰色 唇付け外側まで施釉 外底・高台	灰白色 襷格子・襷面	14C ~ 15C 産泉宮	HA③ F4 II 台 1263	
				7.0	高台は唇付けの外側を骨に削り出し断面形が外側の三角である。内面見込に丸花の印文を施す。襷格子。	青緑色 全面施釉 外底・腕の付根跡まで 内面・貫入あり	灰白色 襷格子・襷面	15C前半 ~ 中 産泉宮	HA③ N14 II 台 2792	
				6.2	唇付けの外側を骨に削り出し高台の断面形は外側の三角状である。内面見込は襷格子の襷面である。襷面を施す。外底に丸花の意を施している。	淡青緑灰色 唇付け外側まで施釉 外底・高台	灰白色 襷格子・細かい	14C ~ 15C 産泉宮	HA③ R19 II 台 1161	
				5.8	高台は唇付けの内側を外側に削り出し断面形が三角である。内面見込に丸花の意に唇付けの印文を施す。	淡青緑色 唇付け外側まで施釉 外底・高台	灰白色 襷格子・細かい	15C ~ 16C代 福尾・広島系	HA③ T17 II 台 1280	
				8.8	襷格子の直線の上に口縁は直口立つ四角状を成す丸花の襷面を施す。高台は唇付けの内側を外側に削り出し断面形が三角である。	淡青緑灰色 唇付け外側まで施釉 外底・腕の付根跡まで 高台は高台	灰白色 襷格子・襷面	17C頃 福尾・広島系	HA③ B14 II 台 2823 HA③ A13 II 台 2708	
				6.6	襷格子の直線の上に口縁は直口立つ四角状を成す丸花の襷面を施す。高台は唇付けの内側を外側に削り出し断面形が三角である。	オリーブ色 全面施釉 外底・腕の付根跡まで 外底・高台	襷格子 襷格子・細かい	17C ~ 18C 福尾・広島系	HA③ K-42 II SP1108 HA③ S02 II 台 2699	
				15.0	胴から腰「八」の字に開き口縁は外反する。口縁は丸い。泉相室の可能性が高い。	オリーブ色 襷格子・高台	靑灰色 襷格子・細かい	元 福尾・広島系 泉相室か	HA③ M7 III SK002 既図 台 2054	
				5.9	高台の断面形は四角の内底見込に胡蓮橋に丸花の意を施す。	淡青緑灰色 唇付け外側まで施釉 外底・高台	灰白色 襷格子・細かい	14C 産泉宮	HA③ E6 II 台 1368	
第12回 調査年度 76	I 類	前	口	12.4	口縁は外側に折れる。高台は唇付けの内側を骨に削り出し外側の断面形は丸い。内面・高台見込に「上」を施している。内面は無文。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色 襷格子・襷面	14C後 ~ 15C前 産泉宮	HA③ E14 II SD42 台 3124	
				12.0	唇付けの外側に丸味が折る。高台は唇付けの内側を骨に削り出し外側の断面形は丸い。内面見込に丸花の意に施す印文を施している。内面は無文。	淡緑灰色 全面施釉 外底・腕の付根跡まで 外底・高台	灰白色 襷格子・細かい	14C後 ~ 15C前 産泉宮	HA③ D19 II 台 2003, 2005 HA③ G17 III 台 2289	
				13.6	襷格子が丸く口縁は折れ。外面に片切彫の胡蓮橋印文を施している。内面は無文。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色 襷格子・襷面	14C後 ~ 15C前 産泉宮	HA③ A2 II 既図 台 493	
				13.4 5.0 4.0	襷格子が丸く口縁は折れ。高台の断面形は四角状。外面に片切彫の胡蓮橋印文を施している。内面は無文。	淡青緑灰色 唇付け外側まで施釉 外底・高台	灰白色 襷格子・襷面	14C末 ~ 15C中 産泉宮	HA③ F18 III 台 2177 HA③ B18 II 台 1971 HA③ C19 II 台 1984	
				11.0	唇付けで丸花の直線の上に口縁は直口立つ四角状である。高台は唇付けの内側を骨に削り出し外側の断面形は丸い。外面に片切彫の胡蓮橋印文を施している。内面見込は丸花の意を施している。	淡青緑灰色 全面施釉 外底・腕の付根跡まで 外底・高台	灰白色 襷格子・細かい	14C後 ~ 15C前 産泉宮	HA③ J04 II 台 2524 HA③ I10 II 台 2441	
				13.8	襷格子が丸く口縁は折れ。外面に片切彫の胡蓮橋印文を施している。	青緑灰色 全面施釉	灰白色 襷格子・襷面	14C後 ~ 15C前 産泉宮	HA③ S5 II 高 台 2464 HA③ A2 II 既図 台 474	
				12.4	襷格子が直線の上に丸く口縁は折れである。無文。	青緑灰色	灰白色 襷格子・細かい	14C後 ~ 15C前 産泉宮	HA③ K04 II 台 2629	
				5.6	高台は唇付けの外側を骨に削り出し断面形は三角状。外面に唇付けの意に丸花と襷格子の襷面を施し内面見込は印文の丸花を施している。	淡青緑灰色 唇付け外側まで施釉 外底は高台	灰白色 襷格子・細かい	14C末 ~ 15C中 産泉宮	HA③ A19 II 既図 P 02-04 台 1875	

第III章
5

第59表-5 青磁(陶・皿) 観察一覧

(注:単位はcm)

調査年度	発掘	種別	分類	部位	口径 底径 高さ	形状・文様構成	釉色・転写・貫入	表地 色・蒔絵・貫	生産年代 生産地	地区・グランド・積 通帳・台(取)番号
106		2類a	底	6.7	—	高台は唇付の両側を斜めに削り出し外側で断面形状は台形、内面は切刃の薄刃文を施している。内面は陶輪の回転に印花の痕を施している。	淡青緑灰色 全面施釉 外底・転写の目録跡	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C前 鹿泉宮	HA② A20 II 台 1316
107	底		6.0	—	高台は唇付の両側を削り出し断面形状は四角形、外周に切刃の薄刃文を施している。内面は陶輪に印花の痕を施している。	青緑灰色 全面施釉 外底・転写の目録跡	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C前 鹿泉宮	HA② A1 II 809 台 455	
108		2類b	底	6.2	—	高台は唇付の外側から削り出し断面形状は台形を成す。外周に切刃の薄刃文を施している。内面は陶輪に草花の印花文を施している。	青緑灰色 全面施釉 外底・転写の目録跡	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C前 鹿泉宮	HA④ G20 II 台 2318 HA④ F17 III 台 2169
109			底	4.6	—	高台は唇付の両側から削り出し外側断面形状は台形を成す。外周に切刃の薄刃文を施している。内面は陶輪に草花の印花文を施している。	青緑灰色 全面施釉 外底・転写の目録跡	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C前 鹿泉宮	HA④ H18 III 台 2397
110		3類a	口	11.8 5.8 3.1	—	胴部は直線的に外側に開く口縁は外反である。高台は唇付の外側を斜めに削り出し断面形状は三角形、内面に陶輪の草花文を施している。内底は印花の草花文を施している。	オリーブ色 全面施釉 外底・転写の目録跡	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C前 鹿泉宮	HA④ B18 II 台 1973, 1971
111			口	13.7	—	胴部は直線的に外側に開く口縁は外反である。内面に陶輪の草花文を施している。	オリーブ色 全面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C前 鹿泉宮	HA④ G18 III 台 2324
112		3類c	口	12.8 5.6 3.8	—	胴部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側を斜めに削り出し断面形状は三角形、無文。	オリーブ色 全面施釉 外底・転写の目録跡	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C前 鹿泉宮	HA④ H16 III 台 2370 HA④ F17 III 台 2385
113			口	6.9	—	高台は唇付の外側を斜めに削り出し外側断面形状は台形、内面は印花の草花の印花文を施している。	青緑灰色 全面施釉 外底・転写の目録跡	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C前 鹿泉宮	HA④ F17 III 台 2163
114		3類b	口	13.0 6.0 3.5	—	胴部は口縁は外側に集めに折る。高台は唇付の内側を斜めに削り出し外側断面形状は台形、内底は印花の草花の印花文を施している。	青緑灰色 唇付外側まで施釉 外底・転写	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C前 鹿泉宮	HA④ D19 II 台 2004
115			口	11.4 4.2 2.5	—	胴部は直線的に外側に開く口縁は外反である。高台は断面形状が小さい。唇付の内側は発色釉が施されている。内底に陶輪の草花文を施している。内底は印花の草花文を施している。	オリーブ色 内底・輪状輪跡 高台唇付内面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C中 鹿泉宮	HA④ S17 I or Ⅱ 台 1877 HA④ S17 II 5-35 台 1878
116		V類a	口	11.4	—	胴部は口縁部が花文の彫。口唇部は丸い。外側は無文。内面に陶輪の流水文を施している。	青緑灰色 全面施釉 内外・貫入	灰白色 顔料・藍がけ	15C前～中 鹿泉宮	HA④ H17 III 台 2381 HA④ H16 III 台 2368
117			口	13.8 6.9 3.2	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	釉色不明 内底・目録跡 高台唇付内面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	15C前～中 鹿泉宮	HA④ G17 III 台 458 HA④ F18 III 台 2177 HA④ K10 II 台 2041
118		V類a	口	13.8	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	淡青緑灰色 全面施釉 内外・貫入	灰白色 顔料・藍がけ	15C前～中 鹿泉宮	HA④ H14 III 台 2474 HA④ H16 III 台 2491
119			口	11.5 5.0 2.5	—	口唇部は持ちあがいた筒状の口縁部は丸い。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	淡青緑灰色 唇付の縁まで施釉 外底・無文	灰白色 顔料・藍がけ	15C前～中 鹿泉宮	HA④ G14 II SD41 台 3034
120		V類b	口	11.0	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	オリーブ色 全面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	15C前～中 鹿泉宮	HA④ H14 III 台 2476
121			口	5.8	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	青緑灰色 外底・唇付内面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	15C前～中 鹿泉宮	HA④ F18 III 台 2183
122		3類a	口	10.2 5.3 2.4	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	青緑灰色 唇付内面施釉 内底・貫入	灰白色 顔料・藍がけ	15C 鹿泉宮	HA④ K4 II 台 2625
123			口	9.6 5.4 3.5	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	青緑灰色 全面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C中 鹿泉宮	HA② A3 II 台 1639
124		3類a	口	9.4 5.9 3.8	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	青緑灰色 輪付内面施釉 高台内面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	15前～中 鹿泉宮	HA④ Q19 II 台 2858 HA④ N13 III 台 2784
125			口	12.4 6.1 3.6	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	青緑灰色 輪付内面施釉 高台内面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	15C 鹿泉宮	HA④ G17 III 台 2286 HA④ F18 III 台 2173
126		3類a	口	9.4 5.8 3.25	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	青緑灰色 輪付内面施釉 高台内面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	15C 鹿泉宮	HA④ F17 III 台 2166
127			口	8.4 5.0 3.2	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	青緑灰色 輪付内面施釉 高台内面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	15C 鹿泉宮	HA④ G15 III 台 2257
128		3類b	口	8.2	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	淡青緑灰色 外底・貫入	灰白色 顔料・藍がけ	15C 鹿泉宮	HA④ K20 II 台 2688
129			口	4.8	—	高台は外側から削り出し断面形状は三角形、無文。唇付の内側は発色釉が施されている。内底に陶輪の草花文を施している。内底は印花の草花文を施している。	淡青緑灰色 内底・目録跡	灰白色 顔料・藍がけ	14C後～15C中 鹿泉宮	HA④ A7 II 台 1068
130		4類b	底	5.2	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	オリーブ色 外底・唇付内面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	15C 鹿泉宮	HA④ Q15 II 台 208
131			底	6.0	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	淡青緑灰色 内底・目録跡 高台内面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	15C前～中 鹿泉宮	HA④ J4 II 台 2524
132		5類	底	5.6	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	オリーブ色 外底・唇付内面施釉	灰白色 顔料・藍がけ	15C～16C前半 福屋・伝馬系	HA④ H17 III 台 2379
133			底	3.8	—	胴部は口縁部は直線的に外側に開く口縁は外反は大きく外反する。高台は唇付の外側から削り出し断面形状は三角形、無文。	淡青緑灰色 高台内面施釉	朱藍色 黒色顔料 藍がけ	15C～16C前 鹿泉宮	HA④ T17 II S13 台 2246

第60表-1 青磁(その他) 観察一覧

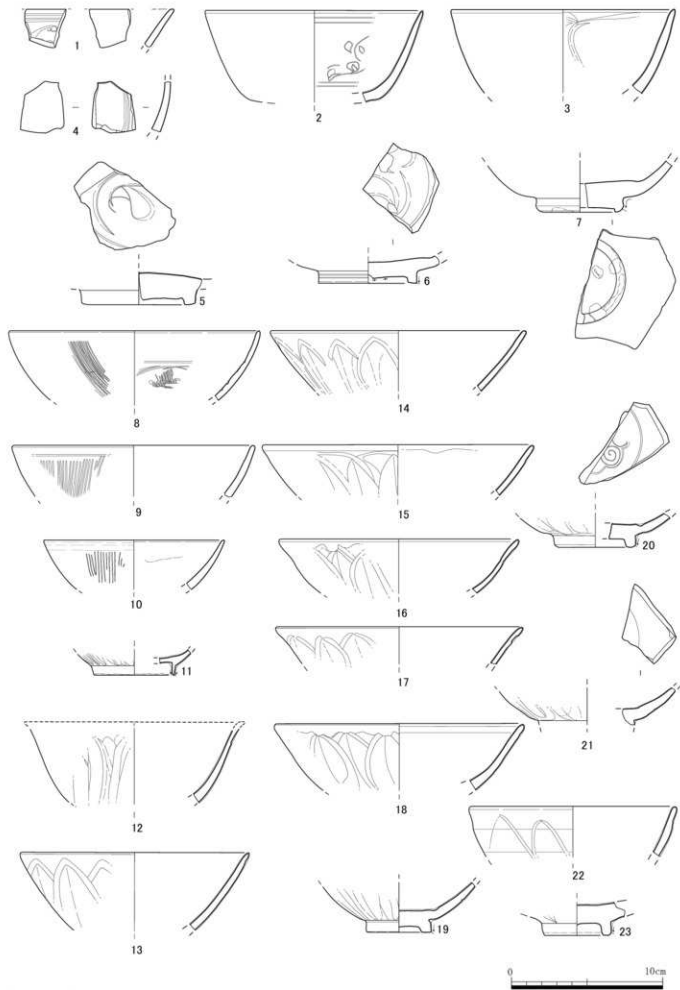
(注量単位: cm)

図録 図録 図録	種別	部位	口縁 底足 高台	胎形・文様構成	釉 色・顔料・鉄入	胎地 色・原料材・質	生産年代 生産地	地区・アット・期 遺跡・台(図)番号
第113図・ 図録77	134	口 底	8.8 —	群青色の大皿。内面は丸彫りの蓮文を施らし内底全面に印花を施す。	淡緑灰色 高台内輪磨ぎ	灰白色 微粒子・細かい	14C後～15C中 鹿泉産	HA③ A15 Ⅱ 台 1425
135	大皿	21.1 5.1 4.8	—	腰折れ輪花。高台は唇付けの両側より彫る。断面形は外側の付足状。高台内は右義の彫り状。外側は蓮文と輪飾を組合せに充ち、口縁に鉄入を内輪を施す。断面形は高台内面と胎地の両方に青濁文と青濁文。胎地に輪飾と印花文を施す。	青緑色 全面施釉 高台内面を彫り 目輪磨ぎ	灰白色 微粒子 気泡・筋	15C前～中 鹿泉産	HA② T20 Ⅱ 泉陽 台 408 HA③ T1 Ⅱ 泉陽 台 147.5.38.1096.1057 HA③ A20 Ⅱ 泉陽 台 1298
136	136	21.2 —	—	口折れの楕円大皿。口縁の断面形は楕円方角。外側の器より下位に丸彫りの蓮文を施すとしている。内面の器上面に蓮と輪による蓮文を施す内表面に施すの青濁文を施している。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・筋	14C後～15C中 鹿泉産	HA③ G17 Ⅲ 台 2282. 2285
137	137	18.0 —	—	口折れの太皿。口縁の断面形は内凹状。	緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 細かい	14C後～15C 鹿泉産	HA② D05 Ⅲ SK001 高 台 2298
138	138	11 —	—	群緑緑花の散花1対の断面形は楕円状を成す。内面器上面にへう彫りの散花状。内表面に散花の輪飾蓮文を施す。	緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・筋	14C～15C 鹿泉産	HA② C20 Ⅱ 上 泉陽 台 569
139	139	8.4 —	—	基筒状で高台断面形が方形。内面に輪飾の蓮文を描く。内底に輪飾が認められる。	オリーブ色 高台内面を 磨かい鉄入	灰白色微粒子 細かい	15C前～中 鹿泉産	HA③ D19 Ⅱ 台 2000 HA③ D19.20 Ⅱ 台 4465
140	140	24.0 —	—	口縁は群緑。口縁の断面形は楕円状を成す。内表面に6本輪目の蓮文を描く。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 細かい	15C前～中 鹿泉産	HA③ D19.20 Ⅱ 台 2002
141	141	7.2 —	—	群青色で高台断面形が方形。内面に丸彫りの蓮文を描く。内底に印花文を施す。輪飾が顕著である。	淡青緑灰色 高台内面輪 磨ぎ	灰白色微粒子 細かい	15C前～中 鹿泉産	HA③ E10 Ⅱ S052 台 3218.3
142	142	24.6 —	—	口縁は緑の光澤を上面に引き上げ断面形がし字状の群緑を成す。口縁は丸い。内面に輪飾の蓮文を描く。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 細かい	15C前～中 鹿泉産	HA③ G17 Ⅲ 台 2290
143	143	24.4 —	—	口縁は緑の光澤を上面に引き上げ断面形が略し字状の群緑を成す。口縁は丸い。内面に丸彫りの蓮文を描く。	オリーブ色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・細かい	14C後～15C中 鹿泉産	HA③ F15-17 Ⅲ 台 4567
144	144	11.9 —	—	口縁は緑の光澤を上面に引き上げ断面形が略し字状の群緑を成す。口縁は丸い。内面に5本輪目の蓮文を描く。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 細かい	14C～15C 鹿泉産	HA③ A20 Ⅱ 泉陽 台 1317
145	145	10.7 7.8 4.2	—	口縁は緑の光澤を上面に引き上げ断面形が略し字状の群緑を成す。口縁は丸い。高台の断面形は右義を成している。内表面磨ぎが施す蓮文と内底に印花の蓮文を施している。	淡青緑灰色 全面施釉 高台内面磨ぎ	灰白色微粒子 気泡・細かい 鉄入	14C後～15C中 鹿泉産	HA③ E18-20・F17 Ⅲ 台 4585 HA③ F15-17 Ⅲ 台 4567 HA③ F18 Ⅲ 台 2178
146	146	底	—	底面は群青色に近い青台。腰折れ有付になる。内面に蓮飾きの輪飾蓮文を施す。気泡が顕著である。	青緑灰色 高台内面磨ぎ	灰白色 微粒子 気泡・筋	15C前～中 鹿泉産	HA③ F・G・H17・I18 Ⅲ 台 4575
147	147	製 —	—	製部の楕円断面形が筒形を成す型押し成形の磁器である。輪飾が認められる。外側の器上面に輪飾の内凹した意匠。器底に蓮の群緑とラマ蓮文の両方に青濁文を充ち施している。高輪飾。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・筋	14C後～15C前 鹿泉産	HA③ F15-17 Ⅲ 台 4567
148	148	製 (口)	—	輪子二対耳である。耳は垂れ傘形に作る。	青緑灰色 全面施釉	灰白色 微粒子 気泡・筋	14C後～15C前 鹿泉産	HA③ O15 Ⅱ 台 2847
149	149	水注 注口	1.5 —	水注の注ぎ口である。	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・細かい	14C後～15C中 鹿泉産	HA③ J14 Ⅲ 台 2546
150	150	11.2 —	—	口縁部が大きく外に開く玉縁の中腰版外面に輪飾の輪飾を施す。玉垂春瓶。	淡緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・筋	14C後～15C中 鹿泉産	HA② F3 Ⅱ 春瓶 台 1674
151	151	5.0 —	—	口縁部が大きく外に開く玉縁の小瓶。玉垂春瓶。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・筋	14C後～15C中 鹿泉産	HA③ F13 Ⅲ 台 2106
152	152	4.8 —	—	口縁部が広から有付をなし口縁に施す断面形は筒形内凹になる。筒形になる。	淡緑灰色 全面施釉 器中に輪が厚い 鉄入あり	白色微粒子 気泡・筋	15C～16C前 鹿泉産	HA② G20 Ⅱ 高陽 台 935
153	153	底 6.0	—	玉垂春瓶高台唇付けに輪飾き筋と砂目を残している。外表面に輪飾きの蓮文。	オリーブ色 唇付輪磨ぎ	灰白色微粒子 気泡・筋	14C代? くは?	HA③ B11 Ⅱ 台 3295
154	154	7.2 —	—	外表面に輪飾きの色藍文と蓮飾きの唐草と二条線飾を積み輪飾の蓮文を描く。	オリーブ色 唇付輪磨ぎ	灰白色微粒子 気泡・筋	14C後～15C中 鹿泉産	HA③ C13 Ⅱ 台 1157 HA③ D13 Ⅱ 台 3282 HA③ B14 Ⅱ S-28 台 2312.2314
155	155	7.0 —	—	外表面に輪飾蓮文。	淡青緑色明るい 輪飾き 唇付輪磨ぎ	灰白色微粒子 気泡・筋	14C末～15C 鹿泉産	HA② C1 Ⅱ 台 2430
156	156	底 7.5	—	底は器高台外面に丸彫飾。やや短い。	外底:唇付けから内 面磨ぎ	淡青灰色微粒子 気泡・筋	14C～15C中 鹿泉産	HA② G02 Ⅲ SPO07 名磁 台 2080
157	157	5.0 —	—	玉垂春瓶断面形。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・筋	14C後～15C中 鹿泉産	HA③ H10 Ⅱ 台 2333
158	158	製 —	—	外表面に蓮飾きの唐草を描く。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・筋	14C後～15C中 鹿泉産	HA③ B14 Ⅱ S-28 台 2312
159	159	製 —	—	外表面に蓮飾きの蓮文と唐草文を描く。唐草の中に細かい輪飾きを文様としている。高122(台高 93)より新しい。	オリーブ色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・筋	14C後～15C中 鹿泉産	HA② K6 Ⅱ 照例 台 1778
160	160	製 —	—	外表面に蓮飾きの蓮文と唐草文を描く。唐草の中に細かい輪飾きを文様としている。高122(台高 93)より新しい。	オリーブ色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・筋	14C後～15C中 鹿泉産	HA② M7 Ⅲ SK002 照例 台 2054
161	161	製 —	—	外表面に輪飾の色藍文と二条線飾を積み蓮飾きの唐草を描く。	オリーブ色 全面施釉	灰白色微粒子 気泡・筋	14C後～15C中 鹿泉産	HA③ C13 Ⅱ 台 1225

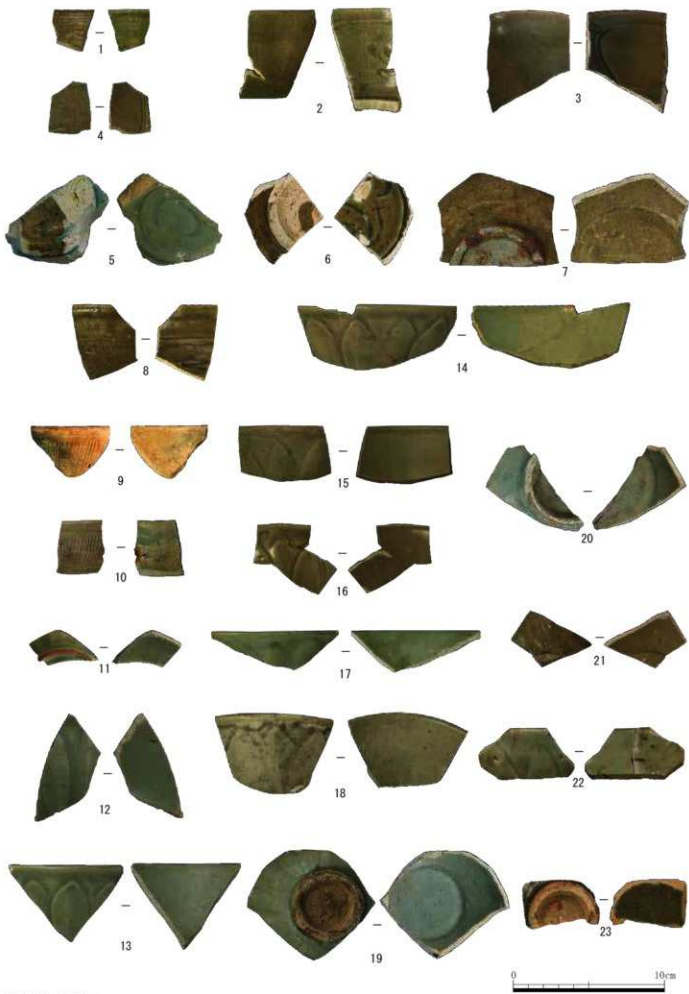
第60表-2 青磁(その他) 観察一覧

(法量単位: cm)

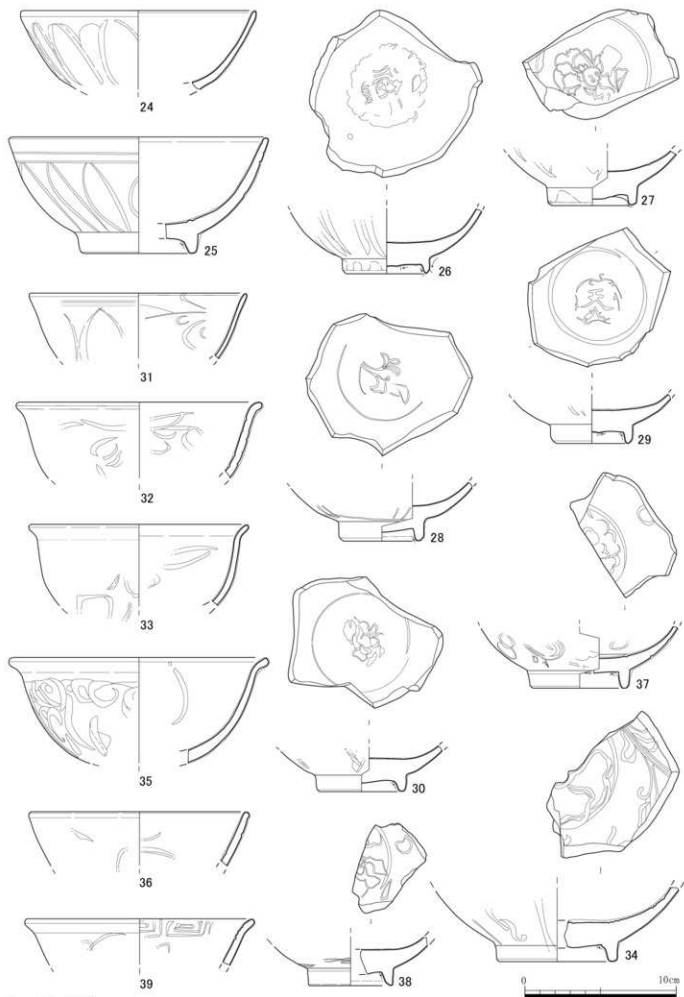
図録掲載	図録番号	種類	部位	口縁高	形状・文様構成	釉色・曜目・貫入	素地色・底材・貫	生産年代 生産地	地区・グラフィッド・製造場・台(RO)番号	
第115図・複製70	162	胴	—	—	外表面に黒い斑の施文あり。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 黒色微粒子 灰緑・青	14C後～15C中 鹿島京	HA② G13 II SD42 台3182	
	163	胴	胴	—	長筒の瓶。施文の遺存文を窺う。	緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 灰緑・青	15C 鹿島京	HA② A20 II 祝殿 7-02-04 台1885	
	164	胴	—	—	ナデ目のびのびの曲線である。目に黒斑の飾りを拵けている。黒斑飾りの上部に凹形彫刻が施され、彫刻彫付位置と考えられる。	青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 黒色微粒子 灰緑・青	14C後～15C中 鹿島京	HA③ A12 II 台1164	
	165	口	—	—	内面側の蓋が考えられる。胴部分のみの破片で甲上面に片割の草花文が見られる。	淡青緑灰色 内面施釉	灰白色微粒子 黒色微粒子 緑青	14C後～15C前 鹿島京	HA② J3 II 伊井 台2371	
蓋	166	—	148	—	蓋の裏面に出た草の文が考えられる。蓋はやや山向である先端の内面は凹内。前内に納まる突起部分は短角先端は凹内。	淡青緑灰色 内面施釉	淡青緑灰色 黒色微粒子 黒色微粒子 やや青	14C後～15C中 鹿島京	HA② E1 II 伊井 台1442 HA② H20 III SK001 JOM 台2096	
	167	胴	—	—	蓋の裏面に出た草の文が考えられる。前内に納まる突起部分と突起部分が併存される。蓋の先端の内面は三角状を成し、前内に納まる突起部分は短角先端の内側から具的に削り出した断面は三角である。	灰青色 全面施釉 貫入あり	白色 黒色微粒子 緑青	15C～16C前 鹿島京	HA② G19 II 尻尾 石10 台762 HA② G01 II 尻尾 台1033 HA② G20 II 尻尾 台1055 HA② K5 II 尻尾 台1820	
	168	口	238	9.4	—	甲部はやや平円で腹かに膨らむ。縁部は早織造で磨きである。縁断面は内角甲上面に取っ手か紐付跡のみ見られる。縦筋。	灰青色 全面施釉 緑に黒い 貫入あり	白色微粒子 黒色微粒子 緑青	14C～15C前 鹿島京	HA② J5 II 尻尾 台1711 HA② K6 II 尻尾 台1778 HA② J6 II 尻尾 台1705 HA② T3 II 伊井 台2500
	169	小鉢	口	8.6	—	「緑」の字に内側に施文する。口縁は尖る。外表面に施文を窺う。	淡青緑灰色 全面施釉	白色微粒子 黒色微粒子 灰緑・青	13C中～14C前 鹿島京	HA③ S17 II 台1582
高杯	170	杯	2.8	—	—	淡青緑灰色 全面施釉	白色微粒子 黒色微粒子 灰緑・青	14C～15C 鹿島京	HA④ F15 III 台2130	
	171	口	6.7	—	—	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 灰緑・青	14C～15C 鹿島京	HA④ N17 III P62 台90	
	172	高杯	—	—	—	淡青緑灰色 全面施釉	灰白色微粒子 灰緑・青	14C～15C 鹿島京	HA② A20 II 祝殿 台1312	
	173	脚部	—	—	—	脚内面施釉	灰褐色微粒子 緑	14C末～15C 鹿島京	HA③ 不明 台1060	
第116図・複製80	174	口	10.2	—	—	外面：淡青緑色 内面：白色	灰白色微粒子 灰緑・青	18C～19C 後継鹿島京	HA② C20 II 土 祝殿 台569	
	175	杯	口	—	—	外面：淡青緑色 内面：白色	灰白色微粒子 緑青	18C～19C 後継鹿島京	HA② I 台655	
	176	胴	3.6	—	—	外面：淡青緑色 内面：白色 貫付高脚	灰白色微粒子 緑青	18C～19C 後継鹿島京	HA② D02 II 祝殿 台1374	
	177	鉢	7.5	—	—	淡青緑灰色 高台内面施釉	灰白色微粒子 灰緑・青	17C代 福屋・広島系	HA③ E05 II 台1202 HA③ E05 I 台3368	
舟形	178	口	14.9	74.3	—	淡青緑色 全面施釉	灰白色微粒子 黒色微粒子 緑青	15C頃 鹿島京	HA② B7 II 高 伊井2 台626	
	179	舟形	23.8	9.4	13.4	—	外面：淡青緑色 内面：透明釉 貫付高脚	白色微粒子 緑青	18C～19C 後継鹿島京	HA② II 土 祝殿(A4-E02-R20-C19 C20-E19) 台568 II (A3) 台419 HA③ II 伊15-E16-F19) S-3 S-4 台685
	180	口	15.0	—	—	—	オリーブ色 外底：高脚	灰色 黒色微粒子・緑が	14C～17C タイ?	HA② I2 II 名産産 台2349
高	181	胴	—	—	—	オリーブ色 外底：高脚	灰色 黒色微粒子・緑が	14C～17C タイ?	HA② K6 II 煎屋 台1778	
	182	底	5.0	—	—	緑灰色(電色) 外底：高脚	灰色 黒色微粒子・緑が	14C～17C タイ?	HA② A2 II 祝殿 台487	
	183	口	15.1	—	—	—	オリーブ色 内底：外底高脚	灰色 黒色微粒子・緑が	14C～17C 東高アジヤ	HA② A1 II 祝殿 台1301
184	胴	胴	—	—	「ハ」の字状の肩から腹部に黒斑が付く。外面は施文面が顕著である。	薄緑灰色	灰白色 黒色微粒子・緑が	15C頃 タイ?	HA② A10 II 祝殿小 台902	



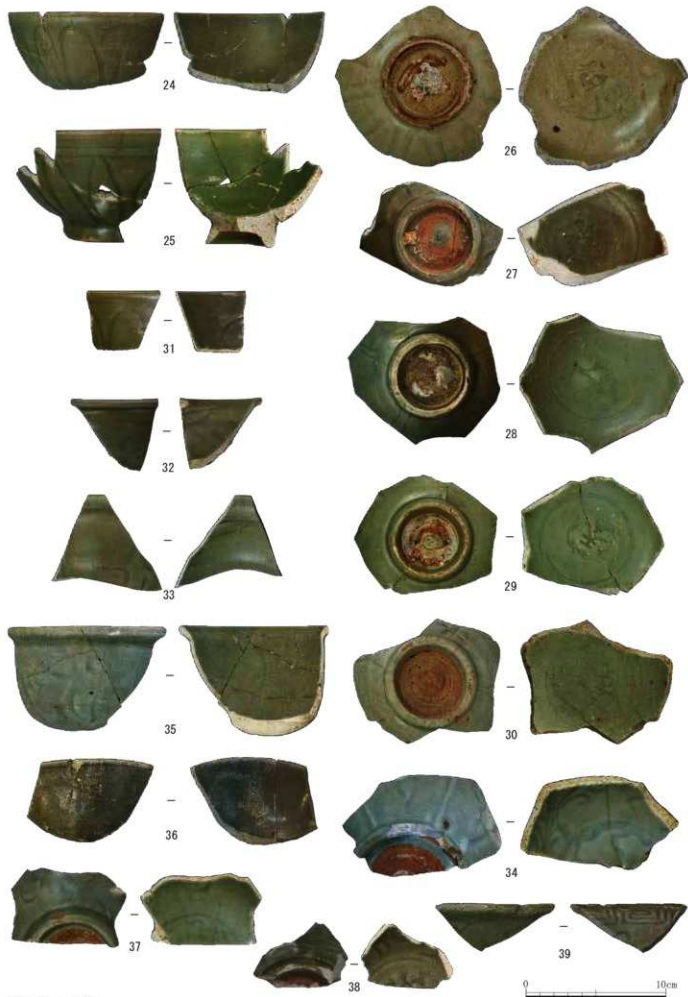
第 107 图 青磁 1



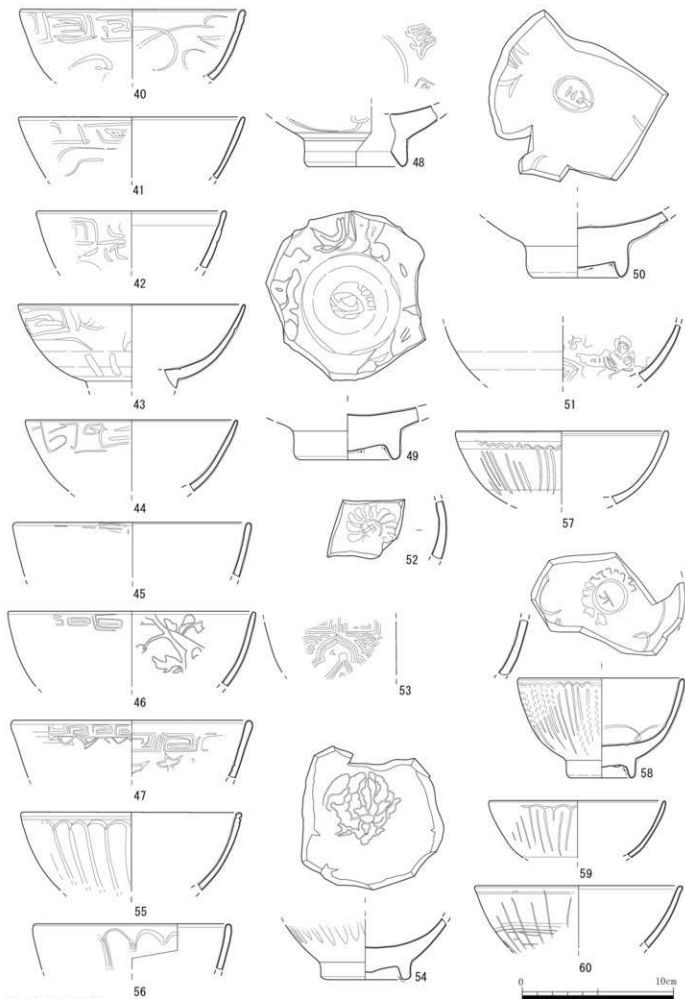
圖版 71 青磁 1



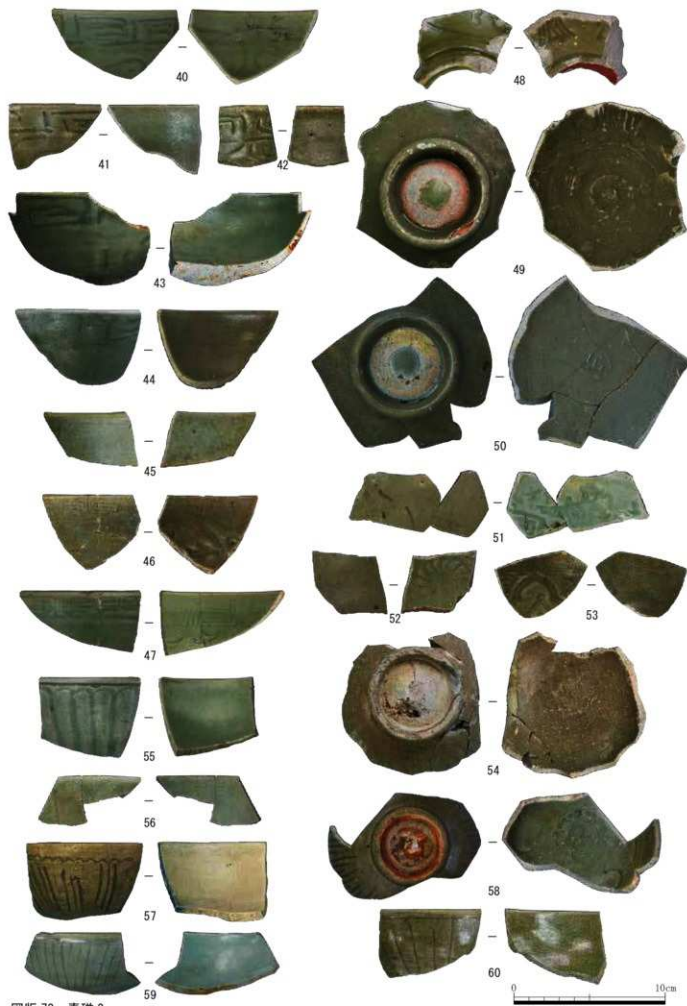
第 108 图 青磁 2



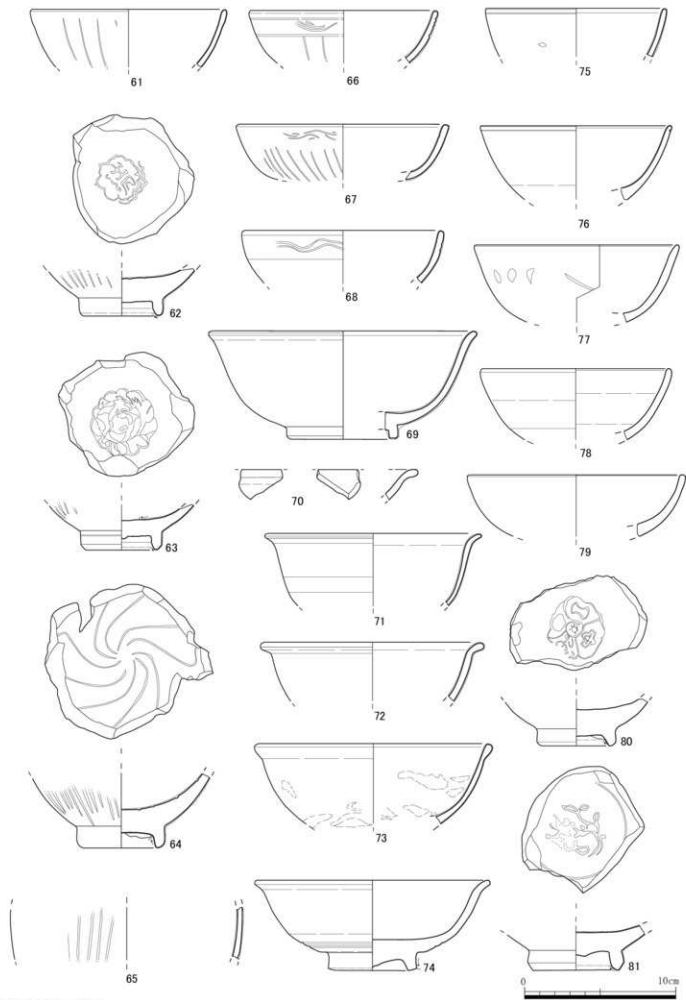
图版 72 青磁 2



第109图 青磁 3



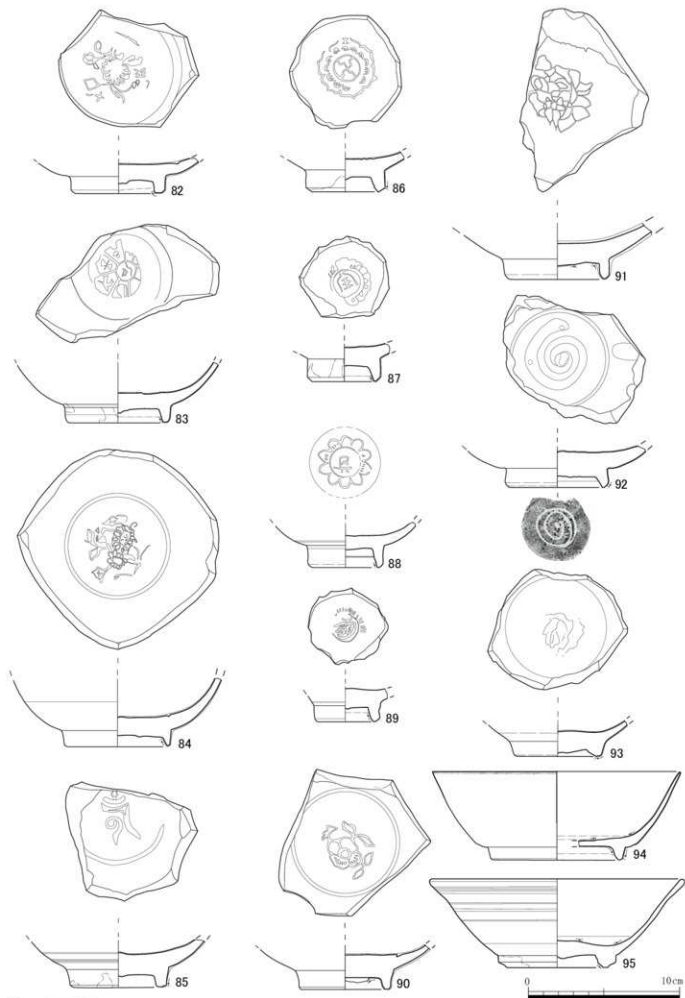
图版 73 青磁 3



第110图 青磁4



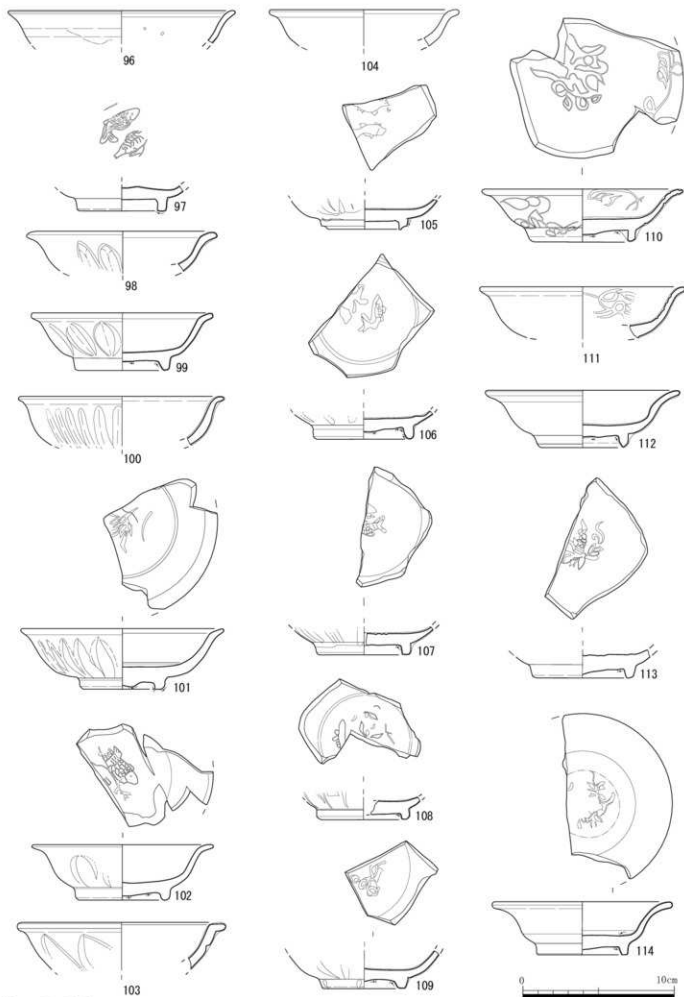
圖版 74 青磁 4



第 111 图 青磁 5



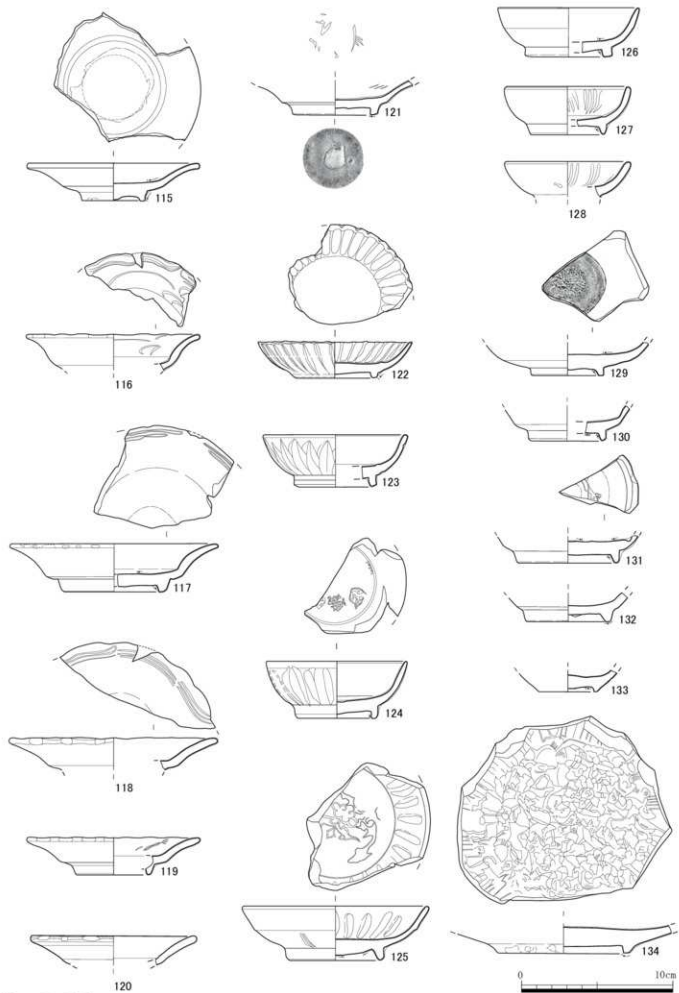
図版 75 青磁 5



第 112 图 青磁 6



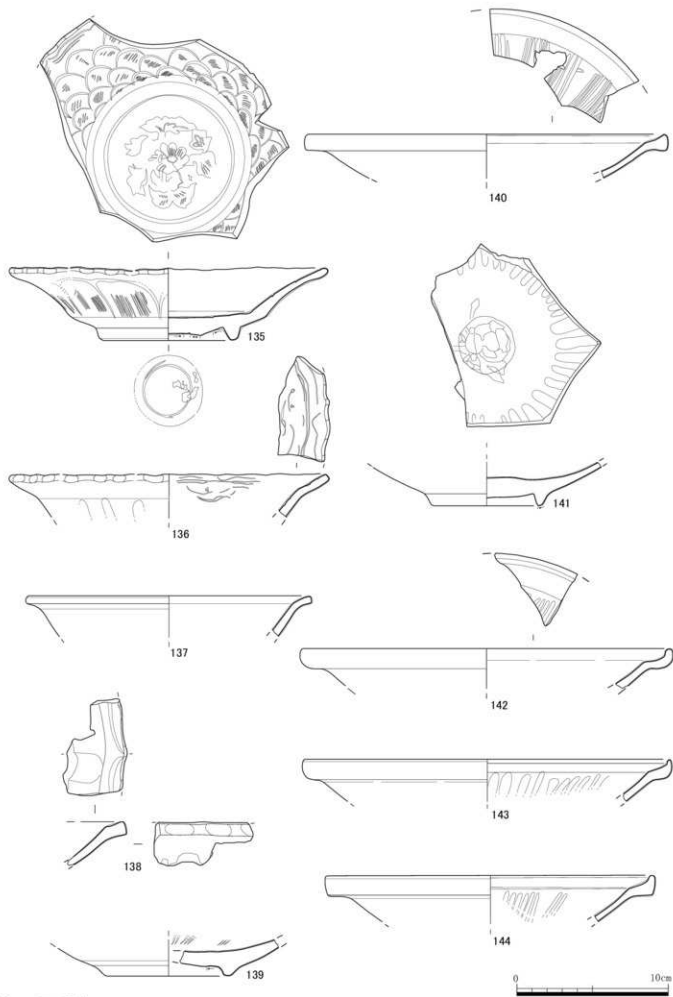
圖版 76 青磁 6



第 113 图 青磁 7

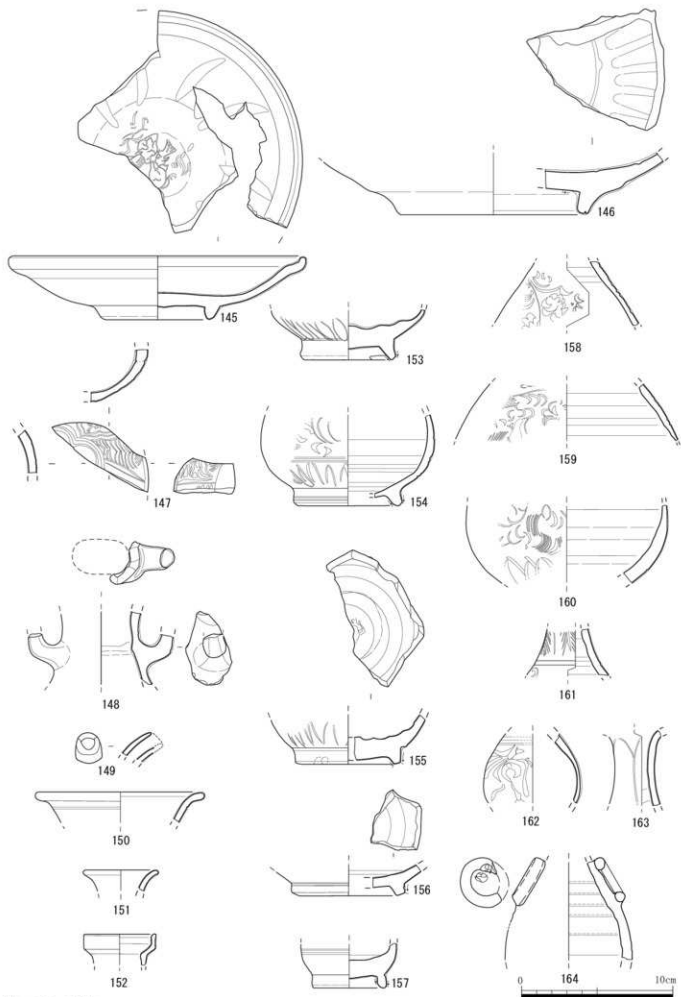


图版 77 青磁 7



第 114 图 青磁 8

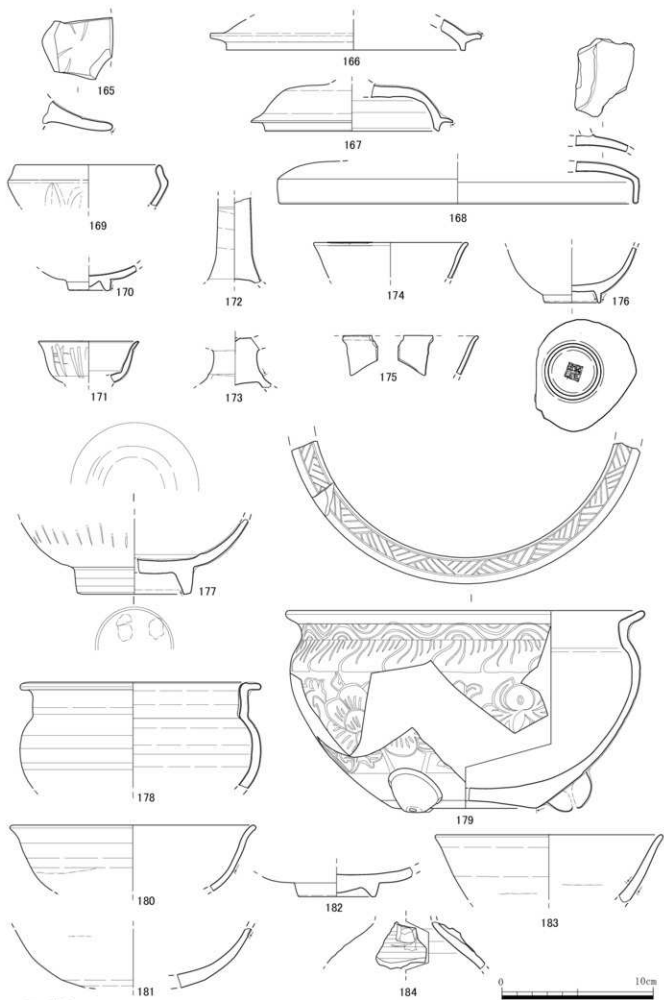




第 115 图 青磁 9



圖版 79 青磁 9



第116图 青磁10



图版 80 青磁 10

(12) 白磁

中国産白磁は総数 1062 点で碗、皿、鉢、杯、瓶、壺、壺蓋、急須の 8 種が得られた (第 64 表)。又、台湾産急須 1 点と、ベトナム産の碗 2 点を合せて報告する。全器種を含め図上復元が可能なのは 6 点あるが残りは全て破片資料である。分類は形態、成形方法、文様構成、施文範囲、釉調、素地により行い、元代から明代の分類や編年は太宰府分類 (森田勉・横田賢次郎 1978) 森田 (1982) に準拠するものである。

当該器の平面分布 (第 121・122 図) は HA ③においては元代、明代の資料が自然流路 (S-640) の周辺に分布し、自然流路 (S-640) 内にみられない。逆に清代の資料は S-640 に僅かに分布することから自然流路 (S-640) の埋まる時期が明代以降、終戦以前であることが予想できる。HA ②は元代、明代、清代共に全体的に分布するが、元代・明代は F ~ J19 ~ 4 のエリアに集中する傾向にあり、グスク期の遺構と重なる。HA ④は清代の資料は殆ど出土していない。

1. 碗 中国産 555 点である。中国産は福建・広東系のものが多数を占め景德鎮窯産は僅かである。生産年代は元代から清代まであり、生産年代に幅がある。I ~ VII 類に分けられる。

I 類：玉縁口縁 - 口縁を玉縁状に肥厚、底部は蛇の目高台、外底が露胎し高台は低い。器肉厚い。図 1 は内底が丸く窪む、高台内の削りは浅い玉縁口縁の底部が考えられる。

II 類：口壳端反口縁 - 上部で外反、内面に口壳。底部は高台が低く器肉が薄い。図 2 ~ 9 は高台径が小さく腰部から丸みを持ちながら外に開き立ち口縁は外反する。口唇の断面形態は四角状をなし口唇の上面と内側を露胎させる口壳口縁である。外体面に轆轤痕が顕著で内底見込みに一条圏線を施している。

III 類：口壳内湾口縁 - 上部で内湾、内面に口壳。図 44 は胴部に丸みを持ち口縁が内湾する口壳の蓋付碗である。

IV 類：内湾口縁

A- 丸碗形：全体的に器肉が厚く、胴部に丸味を持つ。口唇は比較的角張るものと丸いものとある。底部は内底全面釉、外底は腰下部まで露胎。釉は厚め。高台の削りは浅く器肉が厚い。内底面有文 (印花) と無文がある。ピロースク II。(図 12・18・19)

B- 浅碗形：胴に丸みを持ち浅い。口縁は内湾する。図 20 は胴部が浅く、丸みを持つ口縁は内湾し口唇は丸い。

V 類：外反口縁

A- 外反の弱い口縁 図 11 は胴部にやや丸みを持ち外側に開き口縁は端反り。外体面に轆轤痕が顕著である。

B- 外反が強い口縁 胴上位まで丸味を持ち口縁は外反させる。口唇は丸いものとやや細くなるものとある。図 22 は高台径が比較的小さく高台の削りも浅い。図 29 はピロースク III に属するもので、胴部が直線的に開き立ち上がり、口縁は外反し、外体面に轆轤痕が認められる。

VI 類：直口縁碗

A- 口縁は外に開きながら直線的に立つ。口唇は三角状に肥厚、上面を水平に切っている、平碗である。(図 10)

B- 逆「八」の字状に開き立ちあがる直口の碗である。(図 24)

C- 腰部から直線的に開き立ちあがる直口の碗である。口唇の断面形態は撥状をなし先端は平坦になる。器面に轆轤痕が顕著である。(図 41)

VII 類：型成形・型押し成形の碗である。図 38 は腰部外面に型押し成形のための皺が認められる。

・**底部**：高台付き。I ~ 5 類に分けられ、内底文様は A 有文 B 無文に細分される。

1 類 - 玉縁口縁の底部。内底が丸く窪む、高台内の削りは浅い。(図 1)

2 類 - 口壳碗の底部。高台は小さく低めの外削り、断面形は逆台形を呈す。見込みは高台の中に下がる。畳付けを含め外底は露胎。(図 8、9)

3 類 - 高台低め。幅広。高台は外削り、断面形態は高台外面を削り出した三角形と台形状を成すものとある。畳付けを含め外底は露胎。(図 10、13 ~ 17、21)

4 類 - 高台幅が広く浅い。断面形態は四角形を呈する。畳付けを含め外底は露胎。内底面見込みに印花文を施すものと無文がある。高台器肉が厚い。ピロースクタイプ。(図 26、27、30 ~ 32、36)

5 類 - 高台外面を斜位に削り出し断面形態は三角形を呈する。内底と腰下部から畳付けを含め外底は露胎。見込みに字款を施文するものと無文がある。比較的浅い碗である。2 に対して器肉は薄い。(図 23、33 ~ 35)

2. 鉢 総数 3 点得られた。内訳は口縁が 2 点底部 1 点である。(図 45、46)

3. 皿 総数 199 点である。福建・広東系のものが多数を占め景德鎮窯産は僅かである。生産年代は 12C ~ 14C 前半の元代から 17C ~ 18C の清代までである。I ~ VII 類に分けられ、形状から A 口壳直口、B 口壳内湾に細分される。

I類：図 48 は胴部の中位で「く」字状に屈曲し口縁は内湾し立ち上がるものである。太宰府VI - 1

II類口禿皿

A-口禿直口：図 49 は胴部の直線的に逆「八」の字状に開き口縁は直口。口唇は角張り上部と内側が露胎した口禿である。見込みは盛り上がる。太宰府IX - 1

B-口禿内湾：図 50 は胴部にやや丸味をおび口縁は内湾。口唇は舌状で上部と内側が露胎した口禿である。太宰府IX

III類：直口皿 図 61 は胴部が内湾気味に立ち上がり口縁は直口を成す。口唇は舌状。高台外面脇に高台は小さく畳付けの外側から斜めに削り出し、外列りの断面形態が台形状を成す。外面に轆轤痕が顕著に残る。器肉が厚い。(ピロースクタイプ)

IV類：腰折れ皿 図 62 は腰折れの外反口縁で口唇は丸い、外面に轆轤痕を多く残す外底と内底が露胎している。

V類：直口平底皿 図 68 は逆「八」の字状に外に開く口縁は直で口唇は丸い口唇端部と外面は露胎している。器肉厚い。口唇に煤が付着、灯明皿である。

VI類：直口扱出し高台 口縁は直口、逆「八」の字状に直線的に外に開く。口唇は丸い。高台の四力所に扱いを加えた、扱ひ高台である。内底四力所に目痕が認められる。内底は丸く窪むものと中心が盛り上がるものとする。器肉は厚い。(図 74・75)

VII類：直口碁筒底 高台は碁筒底で、胴部に丸味を持つ内湾気味の直口。内面に型押し施文を施す。図 78

VIII類：型成形皿 型押し成形の皿である。(図 76、77、79)

・口縁破片資料

- 1類 - 外反 口縁が外反し身の深い皿である。(図 69)
 - 2類 - 直口 直行口縁である。逆「八」の字状に外に開きく。(図 67)
 - 3類 - 口唇掬形肥厚 口縁は口唇の断面形態が掬形に肥厚した直口。胴部は逆「八」の字状に開く。図 47
- ・底部破片資料：形状により 1～4類、さらに内底はA有文・B無文に分けられる。

1類 - 平底

- A- 底径の小さいやや底面の持ち上がった平底である。見込みに印花文を施している。I類の底部が考えられる。太宰府VI - 1 (図 51)
- B- 無文 (図 68)

2類 - 高台底

- A- 内底は露胎するものと施軸とある。(図 53、56～58、60)
- B- 無文。(図 52、54、55、59、66、73、84)

3類 - 碁筒底 (図 71、72)

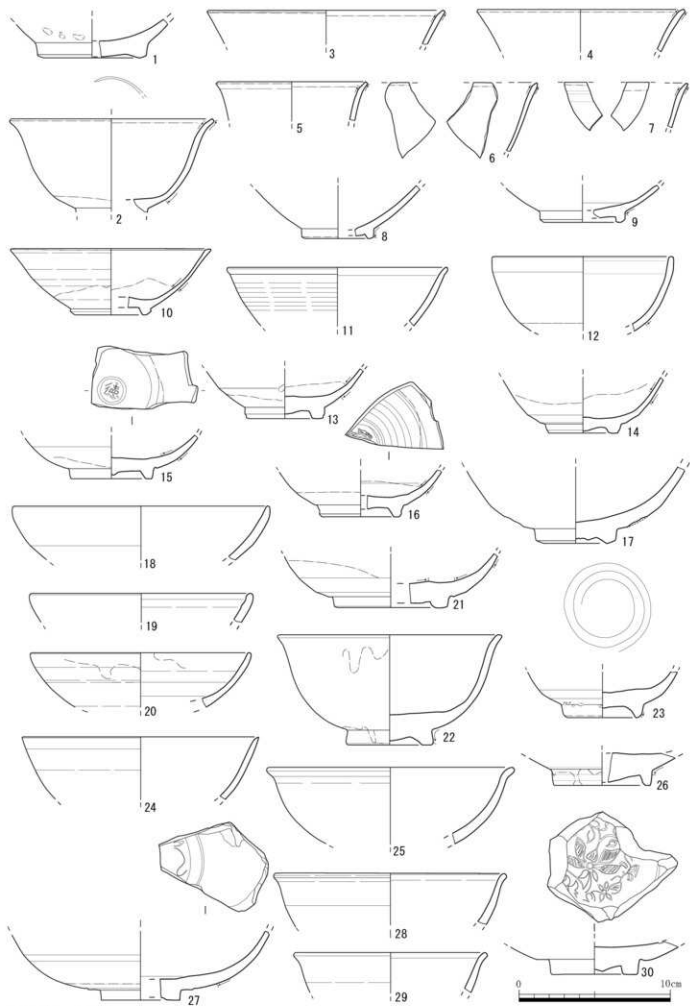
4類 - 幅広高台 幅の広い高台を持ち、断面形態は台形状。(図 83)

4. 杯 総数 197 点が得られた。生産地に景德鎮窯、徳化窯、福建・広東系があり、生産年代は 13C～14C の元代から 19C の清代、徳化窯の型成形までみられる。図 85 は胴部の開いた、浅めの杯である。高台は外列りで畳付けの外側を斜めに削りだしている。高台内は兜巾絞りに削られる。図 89、90 は明代の景德鎮窯系の筒型杯、端反杯である。図 87、88 は福建・広東系の角杯である。図 93、96 は清代の徳化窯製で型成形の杯である。

5. その他 瓶 32 点、壺 28 点、蓋 3 点、台湾産の急須 1 点、ベトナム産の碗 2 点が得られた。図 97 は胴が丸いので肩の玉縁短頸壺で体部の轆轤痕が顕著である。生産年代は 14C～15C の生産地は東南アジアで中国南からベトナムが考えられる。図 101 は高台から内側にくびれ外側に大きく開き立ち上がる。底部は蛇の目高台で列りは浅い内外面に轆轤痕が顕著である。生産年代は 13C～14C、生産地は福建・広東系である。

図 102 は上面観が菊花になる輪花の蓋である。型押し成形の縁部と突起は露胎している。生産年代 15C 末～16C 生産地は景德鎮である。図 103 は台湾産の急須である。胴が丸く口縁と底部に向かい絞る形態。口縁は筒状に立ち内面に輪状の蓋受けを有する。注ぎ口は円錐状で胴部の中位よりやや上面に上向きに貼付され注ぎ口の内面から複数孔が穿孔されている。底部は上げ底。蓋受けと外底は露胎。生産年代は 1868 年～終戦頃。

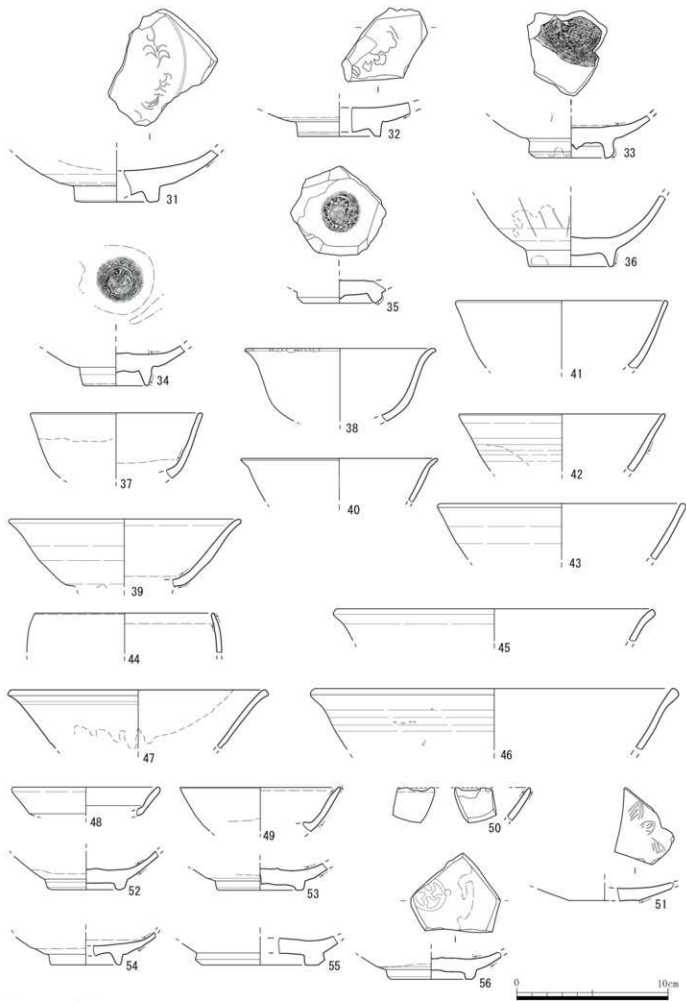
図 104、105 はベトナム産の碗でいずれも高台から逆「八」の字状に直線的に開き立ち上がる。口縁を残さないため口縁形態は不明である。図 104 は高台が細めの輪状高台をなし列りは浅い断面形態は四角状で丁寧な作りである。外底を除く全面に化粧掛けし透明釉を施している。焼成は不良である。図 105 は形態的に図 104 と酷似するが化粧掛けは成されない。高台の作りなどはやや雑で粗製といえる。いずれも生産年代は 14C～15C に位置づけられる。



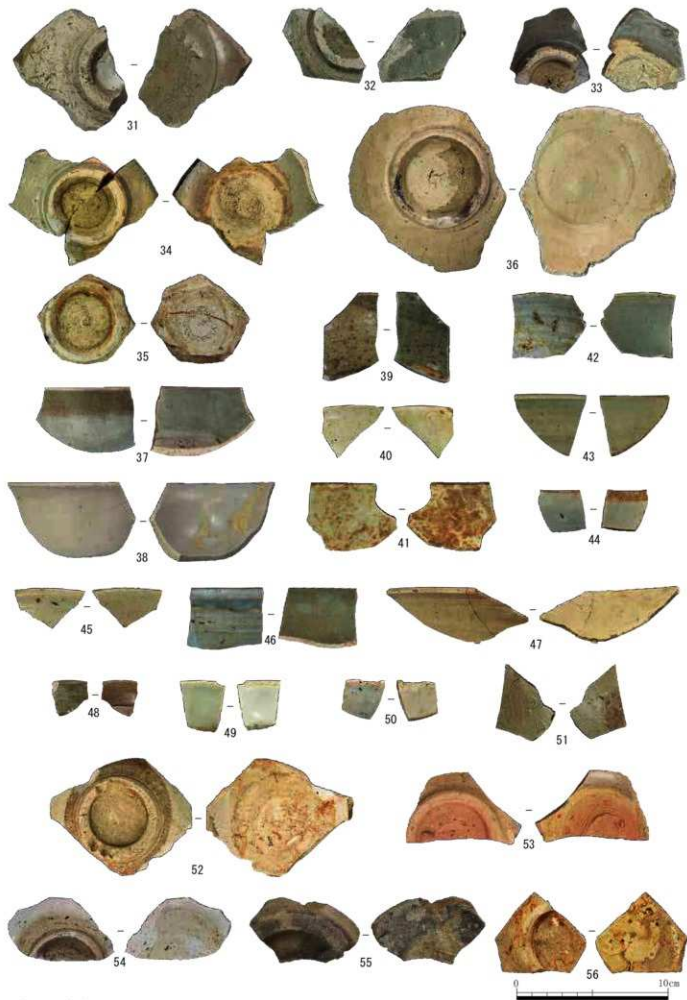
第 117 圖 白磁 1



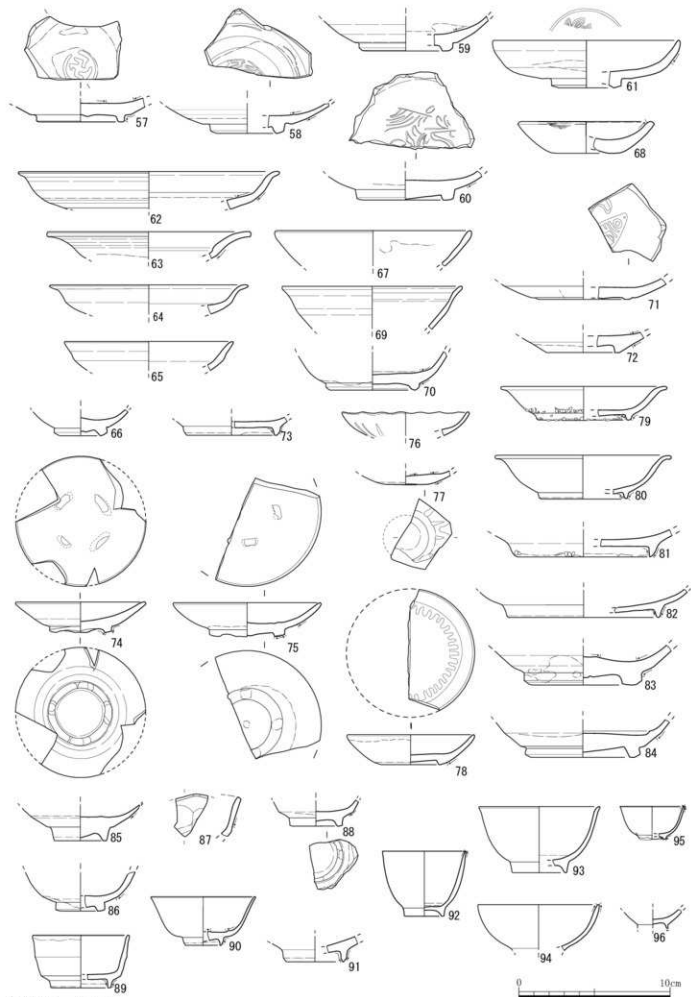
圖版 81 白磁 1



第 118 图 白磁 2



圖版 82 白磁 2



第 119 图 白磁 3



圖版 83 白磁 3

第65表-1 白磁観察一覧

初回観察	調査番号	分類	部位	口径 高さ (cm)	底径 (cm)	器形・文様構成	釉色・装束	表地質	生産年代 生産地・その他	地区・グリッド・器 種目・形式(器)番号
	1	B	底	—	7.2	内底は丸く窪む。高台内の割りは浅い。玉縁の裾部が	生成り色 外底露筋	灰白色 顔が	13C～14C 福建系	HA② R4 Ⅱ 三良 台 2605
	2	B	口	13.5	—	口縁は外反。口唇断面形内凹状。口唇の上と内側を露筋。口唇口縁、外表面に輪縁が浅く認められる。	灰白色 口唇上、内面、 外底露筋	白色 顔筋	13C～14C 福建系	HA② F1-②20-②2-G19 Ⅱ 器 台 761, 808, 1141, 1153, 1381 HA② H2 Ⅱ 量 584 台 2151
	3	B	口	15.6	—	縁は口縁で口唇形は角柱をなす。口唇の上と内側を露筋さ口唇を露筋する。外表面に輪縁が浅く認められる。	灰白色 口唇上、内面	白色 顔筋	13C～14C 福建系	HA③ S18 Ⅱ 5-12 台 356
	4	B	口	13.7	—	縁は口縁で口唇は内外側から覆われて実る。口唇の外側と内側を露筋さ口唇を露筋する。	灰白色 口唇上、内面	白色 顔筋	13C～14C 福建・広東系	HA③ F1-14 Ⅱ 台 1504
	5	B	口	10.0	—	縁は口縁で口唇形は角柱をなす。口唇の上と内側を露筋さ口唇を露筋する。外表面に輪縁が浅く認められる。	灰白色 口唇上、内面	灰白色 顔が	13C～14C 福建系	HA② A5 Ⅲ 品 8002 台 547
	6	B	口	—	—	縁は口縁で口唇は内外側から覆われて実る。口唇の外側と内側を露筋さ口唇を露筋する。外表面に輪縁が浅く認められる。	灰白色 口唇上、内面	白色 顔筋	13C～14C 福建・広東系	HA② T1 Ⅱ 808 台 547
	7	B	口	—	—	縁は口縁。口唇形は内凹状。口唇の外側、上面、内側を露筋。口唇を露筋する。外表面に輪縁が浅く認められる。	灰白色 口唇上、内面	白色 顔筋	13C～14C 福建・広東系	HA② B4 Ⅱ 既測 台 1211
	8	2B	底	—	4.8	高台は小さく低い。器付の外側を斜めに削り出す。断面形は外側りの右形を見込みは丸く窪み、一葉隙線を露筋する。	灰白色 外底露筋	白色 顔筋	13C～14C 福建・広東系	HA② A1 Ⅱ 808 台 470
	9	2B	底	—	5.6	高台は小さく低い。器付の外側を斜めに削り出す。断面形は外側りの右形を見込みは窪み、一葉隙線を露筋する。	青白色 外底露筋	白色 顔筋	12C～14C 福建・広東系	HA③ S17 Ⅱ 台 1726
	10	VA	口	13.2 4.4	5.4	高台は小さく、脚部は「八」の字。口縁は直口。口唇断面形は平凹三角状。高台の断面形は外側りの右形。	灰白色 内外底露筋	灰白色 顔が	13C～14C 福建系	HA② B3 Ⅲ 既測 器 8003 HA③ A12 Ⅱ 台 2352 台 2352
	11	VA	口	14.6	—	脚部にやや丸みを持ち外側面に開きながら立ち上がる。口縁は端反で、口唇は否状を露筋する。外表面に輪縁が浅く認められる。	灰白色	灰白色 顔が	14C 福建・広東系	HA② B3 Ⅲ 既測 器 8003 台 2265
	12	IV A	口	12.0	—	脚部に丸みを持ち口唇は内湾する口唇は丸い。外表面に輪縁を認められる。	黄褐色 内外底露筋	灰白色 顔が	13C～14C 福建・広東系	HA② T4 Ⅱ 808 台 368
	13	3B	底	—	5	器付の外側を斜めに削り出す。断面形が台形状。高台内は発中状に削り出し、高台縁は斜状に平凹。	黄褐色 外底露筋	灰白色 顔が	13C～14C 福建・広東系	HA③ L19 Ⅲ SP488 台 3616
	14	3B	底	—	4.6	器付の外側を斜めに削り出す。断面形が台形状をなし高台内は発中状に外表面に輪縁が浅く認められる。	灰白色 内外底露筋	白色 顔筋	13C～14C 福建・広東系	HA③ L19 Ⅲ 台 979 HA④ L20 Ⅲ 台 2729
	15	3A	底	—	5.6	脚部に丸みがあり高台内は割りの断面形が台形を成す。見込み中央に二葉隙線に「壺」の印文を施している。	生成り色 内底露筋	灰白色 顔が	13C～14C 福建・広東系	HA③ B16 Ⅱ 台 2905
	16	3A	底	—	5.4	脚部に丸みがあり高台内は割りの断面形が台形を成す。見込み中央に二葉隙線に印文を施している。	黄褐色 内外底露筋	灰白色 顔が	13C～14C 福建系	HA③ F13 Ⅱ 5-18 台 1027 HA③ A14 Ⅱ 台 2951
	17	3B	底	—	5.4	脚部はやや丸みを持ちながら立つ。高台径が比較的小さく高台の割りは浅い。	灰白色 内外底露筋	白色 顔筋	13C～14C 福建系	HA③ D5 Ⅱ 台 1412
	18	IV A	口	17.0	—	脚部は浅く丸みを持ち口唇は内湾する口唇は否状を成す。外表面に輪縁を浅く認められる。器内は端反。ビロースク	灰白色	灰白色 顔が	13C～14C 福建系	HA③ C12 Ⅱ 台 749
	19	IV A	口	14.8	—	口縁で内湾空域に穴が開く口唇は丸い。外表面に輪縁を浅く認められる。ビロースク	灰白色	灰白色 顔が	14C～15C 福建・広東系	HA④ G1 Ⅱ 台 2208
	20	IV B	口	14.6	—	脚部は浅く丸みを持ち口唇は内湾する口唇は丸い。内外表面に輪縁を認められる。	黄白色	灰白色 顔が	13C～14C 福建系	HA③ D11 Ⅱ 台 3248
	21	3B	底	—	7.6	脚部に張りがあり高台の割りは浅く断面形は四角形を成す。	灰白色 内底に蛇打輪縁	灰白色 顔が	13C～14C 福建系	HA② A20 Ⅱ 既測 台 1516
	22	V B	口	14.8 7.3	2.9	脚部は張り。口縁は外反口唇は丸い。高台は浅く小さい。断面形台形。高台内発中状に削り出し。見込みに一葉隙線、輪縁が浅く認められる。	灰白色 高台内底露筋	白色 顔筋	14C 福建系	HA④ B18-K10 Ⅱ 台 1973, 2041 台 135, H14 Ⅲ 台 2137, 2591
	23	5B	底	—	5.5	脚部に丸みを持ち外側面下部に器付の輪縁認められる。高台は小さく高台縁に斜めに削り出し、断面形は「高台を成す高台内は「八」の字に丸く窪み、一葉隙線に「壺」の印文を施している。見込みは葉の逆さの隙線を施している。	青白色 内外底露筋	白色 顔筋	明弘 福建系	HA② T2 Ⅱ 808 台 408
	24	VB	口	15.6	—	脚部は丸い。口縁は直口。口唇は実る。外表面に器付形と輪縁が認められる。	灰白色	灰白色 顔が	14C 福建系	HA③ A13-C13 Ⅲ 5-640 台 1136
	25	V B	口	16.4	—	脚部は丸みを持ち、口縁は外反。口唇は否状を成す。外表面に輪縁が認められる。ビロースク	灰白色	灰白色 顔が	14C～15C 福建・広東系	HA② J2 Ⅱ 既測 台 2341
	26	4B	底	—	6.4	高台は断面形が台形を成す。高台内に発中状に削り出ししている。見込みに一葉隙線を施している。	灰白色	灰白色 顔が	14C 福建系	HA③ F18 Ⅲ 5-10 台 1574
	27	4A	底	—	5.2	脚部に張り。脚部は丸い。高台が小さく高台の割りは浅く断面形は四角形。見込みに一葉隙線と印文を施す。ビロースク	灰白色 外底露筋	白色 顔筋	13C～15C 福建系	HA③ B6 Ⅲ 品 台 1753
	28	V B	口	14.0	—	脚部はやや丸みを持ち外側面に開きながら立ち上がる。口縁は端反で、口唇は丸い。ビロースク	灰白色 外底露筋	灰白色 顔が	14C 福建系	HA③ B14 Ⅱ 台 1430
	29	V B	口	12.8	—	脚部はやや丸みを持ち外側面に開きながら立ち上がる。口縁は端反で、口唇は丸い。ビロースク	灰白色 外底露筋	灰白色 顔が	14C～15C 福建系	HA② F1 Ⅱ 瓦屑 台 822
	30	4B	底	—	5.8	高台は発中状。高台の断面形は内凹。高台内は発中状削り出し。見込みに一葉隙線と印文を施す。ビロースク	灰白色 外底露筋	白色 顔筋	13C～14C 福建系	HA④ B8 Ⅲ 台 2500
	31	4A	底	—	5.6	高台の断面形は外側りの右形。高台内は発中状削り出し。見込みに一葉隙線と印文を施す。ビロースク	灰白色 外底露筋	白色 顔筋	14C～15C 福建系	HA③ D13 Ⅱ 台 3282
	32	4A	底	—	5.3	高台の断面形は外側りの右形。高台内は発中状削り出し。見込みに一葉隙線と印文を施す。ビロースク	灰白色 外底露筋	白色 顔が	13C～15C 福建系	HA② G2 Ⅱ 瓦屑 台 1727
	33	5A	底	—	5.7	器付の外側を斜めに削り出し、断面形は外側りの三角形。高台内は発中状削り出し。見込みは葉の逆さの隙線を施している。	灰白色 内外底露筋	白色 顔筋	14C～15C 福建・広東系	HA④ H18 Ⅲ SD41 台 2083
	34	5A	底	—	4.4	器付の外側を斜めに削り出し、断面形は外側りの三角形。高台内は発中状削り出し。見込み「壺」の字文周縁は葉文の印文を施す。	灰白色 内外底露筋	白色 顔筋	15C～16C 福建・広東系	HA③ D13 Ⅱ 台 3247
	35	5A	底	—	4.8	器付の外側を斜めに削り出し、断面形は外側りの三角形。高台内は発中状削り出し。見込みは葉の逆さの隙線を施す。	灰白色 内外底露筋	白色 顔筋	15C～16C 福建・広東系	HA④ G13 Ⅲ 台 2228

第65表-2 白磁観察一覧

国産/輸入	別名	器種	分類	部位	口径 高さ (cm)	底径 (cm)	器形・文様構成	釉色・顔料・貫入	表施色 ・質材・高彩	生産年代・ 生産地・その他	地区・グリッド・器 種群・行(段) 番号
第19段・ 観察区2	白磁	36	4B	底	—	5.8	胴が短く丸縁は外に広がり、外面に縦筋状の文を施文。高台の断面形状は外側の三角形。見込みは一室縁。	薄黄白色 外底高彩	白色 磁器	13C～14C 福建・広東系	HA③ B13 1 台3003
		37	VB	口	11.4	—	胴部に丸みを持ち外にやや開き直に立ち上がる。口縁は直口を呈し口縁は丸い。外底面に浅彫り縦一室縁。	灰白色 内外底高彩	白色 磁器	14C～15C 福建・広東系	HA③ D5 1 台2135
		38	VB	口	12.6	—	胴部に丸みを持ち口縁は外に、口縁は舌状。胴外面に型押成形の縁がある。口縁の一部を淺彫り縦一室縁とする。外底面は丸縁。	灰白色 全面高彩	白色 磁器	明代 福建系	HA③ F7 IV 台3228
		39	VC	口	15.4	—	胴部の傾斜と胴部は逆「八」の字状に外に向かい開く。口縁は短反口を呈し丸い。外面は縦筋状の筋がある。	灰白色 内外底高彩	白色 磁器	明代 福建・広東系	HA③ H4 III SK002
		40	VC	口	13.0	—	胴部に丸みを持ち外にやや開き直に立ち上がる。口縁は直口を呈し口縁は内外状で、他の縁線は施している。	灰白色 内外底高彩	白色 磁器	明代 福建・広東系	HA④ K18 III 台2657
		41	VC	口	14.0	—	胴部に丸みを持ち外にやや開き直に立ち上がる。口縁は直口を呈し口縁は内外状で、他の縁線は施している。	灰白色 内外底高彩	白色 磁器	17C頃 福建・広東系	HA④ B8 III 台2501
		42	VC	口	13.6	—	胴部に丸みを持ち外に開く。口縁は直口口縁は内外、外面は縦筋状の筋がある。	灰白色 外底高彩	白色 磁器	17C頃 福建・広東系	HA④ E19 II 台2073
		43	VC	口	16.4	—	胴部は逆「八」の字状に外に向く。口縁は直口口縁は内外、外面は縦筋状の筋がある。	灰白色 全面高彩	白色 磁器	16C～17C 福建・広東系	HA③ E11 II 台1458
		44	■	口 (口先)	11.8	—	胴部に丸みを持ち口縁は内湾する口縁は丸い。口縁上面と口縁内面を施文させている。口先の筋状部。	灰白色 口縁上面・口縁内面 外底高彩	白色 磁器	13C～14C 福建系	HA③ G20 II 反腹 台1036
		45	■	口	20.8	—	口縁は外反口縁の断面形状は球形	灰白色	白色 磁器	16C～17C 福建・広東系	HA③ H3 SP003SK005 台2166.2179
		46	■	口	23.8	—	胴部は逆「八」の字状に開く。口縁は口縁の断面形状が球形に肥厚した直口。	灰白色	白色 磁器	16C～17C 福建・広東系	HA③ B14 II S-20 台1037
		47	■	口	17.2	—	胴部は逆「八」の字状に開く。口縁は口縁の断面形状が球形に肥厚した直口。口縁上部に一室縁縁線。深彫。	灰白色	白色 磁器	14C頃 福建系	HA③ B5 II 台1653
		48	■	口	9.8	—	胴部の中心で「く」字状に傾斜し口縁は内湾し立ち上がり内側を引き上げる。口縁は舌状を成す。上唇筋は逆「八」に近い。	オリーブ灰色	白色 磁器	12C～14C頃 福建系	HA③ S12 II 台1726
		49	■	口	10.6	—	胴部は逆「八」の字状に開く口縁は直口。口縁は舟形と上面が高彩。口先、見込みは盛り上がる。外面の筋部から外底高彩。上唇筋は逆「八」に近い。	淡青灰色 内外底高彩	白色 磁器	13C～14C 内外底高彩	HA③ A14 III F S-11 台2018
50	■	口	—	—	胴部にやや丸味をおび、口縁は口縁は舌状で上部と内側の高彩した口である。上唇筋	灰白色 口縁高彩	白色 磁器	13C～14C中 福建系	HA③ S19 II 台3208		
51	■	底	—	4.6	底径の小さいやや短めの持ち上った平底である。内底に印花文を施している。	灰白色 外底高彩	白色 磁器	13C～14C 福建・広東系	HA④ K4 III 三員 台2066		
52	■	底	—	5.2	高台は筒が浅く断面形状が台形を成す。	灰白色 外底高彩	白色 磁器	13C～14C 福建・広東系	HA④ A14 皿下 S-11 台2094		
53	■	底	—	5.8	高台外縁部は逆「八」字状の湾りがあり貫付は外側から内側に割り出している。筒が浅く高台の断面形状が台形を成す。	灰白色 内外底高彩	白色 磁器	13C～14C 福建・広東系	HA③ D13 II 台3247		
54	■	底	—	4.8	高台は外側の断面形状が三角状を成す	灰白色 内外底高彩	白色 磁器	13C～14C 福建・広東系	HA③ B8 I 台1751		
55	■	底	—	7.6	高台は貫付口縁を斜めに割り出す。断面形状が台形を成す。	灰白色 内外底高彩	白色 磁器	13C～14C 福建・広東系	HA③ E17 II 台1575		
56	■	底	—	5.8	高台は貫付の外側から斜めに割り出し外側の断面形状が台形を成す。見込みに「正」の印花文を施文。	灰白色 内外底高彩	白色 磁器	13C～14C 福建・広東系	HA③ T9 III S-581 台1144		
第19段・ 観察区3	白磁	57	2A	底	—	5.8	高台は外側より貫付の外側から斜めに割り出し外側の断面形状が台形を成す。見込みに「正」の印花文を施文。	薄青灰白色 内外底高彩	白色 磁器	13C～14C 福建・広東系	HA③ C11 II 台3214
		58	2A	底	—	5	高台は小さく貫付の外側から斜めに割り出し外側の断面形状が台形を成す。見込みに凹形の印花文を施文。	薄青灰白色 内外底高彩	白色 磁器	13C～14C 福建・広東系	HA③ T17 II 台1446
		59	2B	底	—	6.2	高台は小さく貫付の外側から斜めに割り出し外側の断面形状が台形を成す。	薄青灰白色 内外底高彩	白色 磁器	14C頃 福建・広東系	HA④ F18 III 台2186
		60	2A	底	—	6.4	高台は浅くやや外側の断面形状が四角状を成す。見込みに印花の草文を施文。	灰白色 外底高彩	白色 磁器	14C頃 福建・広東系	HA④ G15 III 台2261
		61	■	口	12.4	—	口縁は逆「八」の字状に開く。口縁は舌状。高台外縁部に高台は小さく貫付外側から斜めに割り出し外側の断面形状が台形。胎内に厚い。(ビロースク)	灰白色	白色 磁器	14C頃 福建・広東系	HA③ K6 III 反腹 台1565.1771.1565
		62	■	口	17.3	—	胴部は外反口縁で口縁は丸い。外面に縦筋状の筋を多く残す外底と内底高彩が施している。	灰白色	白色 磁器	14C頃 福建・広東系	HA④ E18-E20・F17 III 台4585
		63	■	口	13.5	—	胴部は外反口縁で口縁は内外	灰白色	白色 磁器	明代 福建・広東系	HA④ G18 III 台2302
		64	■	口	13.1	—	胴部は外反口縁で口縁は丸い。外面に縦筋状の筋を多く残す。	灰白色	白色 磁器	14C～15C 福建・広東系	HA④ J2 II 台2520
		65	■	口	11.2	—	胴部の中心で傾斜し口縁は内湾し立ち上がり外反する。口縁は舌状を成す。	灰白色	白色 磁器	明代 福建・広東系	HA④ F14 III 台2110
		66	■	底	—	3.6	胴部に丸味を持ち高台は外側より貫付の外側を斜めに割り出す高台内は浅中彩。断面形状は台形状。見込みに盛り上がる。	灰白色 外底高彩	白色 磁器	14C後～15C 福建・広東系	HA③ T4 II 反腹 台363
		67	■	口	13.0	—	逆「八」の字状に外に開き口縁は直口。口縁は舌状を成す。	薄黄白色	白色 磁器	明代 福建・広東系	HA④ O19 III 台2865
68	■	V 口	9.0	—	胴部は逆「八」の字状に外に開く口縁は直口で口縁は丸い口縁部と外面は高彩している。胎内厚い。口縁に浅彫り筋状部がある。	灰白色	白色 磁器	14C前後 福建・広東系	HA③ A10 II 台1396		
69	■	口	11.9	—	胴部は外に開き口縁は一旦内より外反する。口縁は丸い。	灰白色	白色 磁器	14C頃 福建・広東系	HA③ B14 II S-20 台847		
70	■	口	—	5.8	胴部に丸味を持ち高台は小さく浅い外側より貫付の外側を斜めに割り出す断面形状は台形を成す。	灰白色 内外底高彩	白色 磁器	明代 福建・広東系	HA③ A11 III S-605 台1115		
71	■	底	—	6.4	筒の浅い器種。内底に印花の双文を施文。	薄青灰白色 外底高彩	白色 磁器	14C頃 福建・広東系	HA③ C13 II 台3211		

第 65 表-3 白磁観察一覧

図例掲載	図番号	分類	分組	部位	上径 (mm)	底径 (mm)	形状・文様構成	軸色・範囲・貫入	本地色・ 原料・目	生産年代・ 生産地・その他	地区・グリッド・番 通帳・台(段)番号
第 10 図	72	皿	3B	底	—	4.9	逆「八」の字状に外に開く底部は器筒状を成す。外底と見込みが一致。	灰白色	白色 磁質	明代 福建・広東系	HA ② B19 II 配 台 2427
	73		2B	底	—	3	高台は狭く断面形態は三角状をなす。	灰白色	白色 磁質	15C末～16C 景徳鎮窯	HA ③ E10 II 台 2037
	74		V	口一底	8.6	4.1	逆「八」の字状に外に開く。口縁は直口。口唇は丸。高台は四角筒に挟りを入れる。内底は丸く窪み内側面、蓋部は直縁を認める。器内は厚い。	灰白色	白色 磁質	15C～16C前 福建・広東系	HA ③ F17.18 III 台 2163.2182 HA ③ L1 II 台 2693
	75		VI	口一底	9.8	2.2	逆「八」の字状に外に開く。口縁は直口。口唇は丸。高台は狭り高台。内底は丸く窪み内側面、蓋部は直縁を認める。	灰白色	白色 磁質	15C～16C前 福建・広東系	HA ④ E9 III 5P73 台 3780
	76		VII	口	8.4	—	口縁は輪状を成し外面に花卉の型押しを施している。菊花を型押しした小皿である。	灰白色	白色 磁質	16C頃 景徳鎮窯	HA ③ J18 II 台 2571
	77		VIII	底	—	3	菊花を型押しした小皿の底部である。外面に花卉の型押しを施している。内底面に龍の打輪画が外縁を飾る。	灰白色	白色 磁質	16C 景徳鎮窯	HA ③ J18 II 台 2565
	78		IX	口一底	8.4	2.0	腹部に丸味を持ち内湾内側に立ち上がる。口縁は直口。口唇は丸い。高台は器筒状内面に逆「八」の字状を成す。	灰白色	白色 磁質	15C末～16C 景徳鎮窯	HA ③ K18 III 台 2063
	79		X	口一底	11.0	2.3	腹で膨らみ腹部は緩やかに広がる。口縁は外反。口唇丸い。高台は狭く断面形態は三角状。型押し成形。腹部に付けに付行がみられる。	灰白色	白色 磁質	16C 景徳鎮窯	HA ② H2 II Ⅲ HA ② H1 II Ⅲ 台 1161 台 1153
	80		XI	口一底	11.6	2.9	腹で膨らみ腹部は緩やかに広がる。口縁は外反する。口唇丸い。高台は狭く断面形態は三角状。型押し成形。	灰白色	白色 磁質	16C 景徳鎮窯	HA ③ B17 II 台 1159
	81		XII	底	—	8.8	高台は狭く断面形態は三角状をなす。型押し成形。腹部と付けに付行がみられる。	灰白色	白色 磁質	16C 景徳鎮窯	HA ③ L4 II 台 2716
82	XIII	底	—	9.8	高台は狭く断面形態は三角状をなす。型押し成形。	灰白色	白色 磁質	16C 景徳鎮窯	HA ③ B6 II 台 2816		
83	4B	底	—	7.8	高台外側面に削り出し、器の外側から斜めに削り出し外側部の断面形態が半円状を成す高台の輪郭が広い。	灰白色 内外底は露筋	白色 磁質	14C～15C 内蔵 福建・広東系	HA ② F1 I 台 2563		
84	2B	底	—	7.6	高台は外側面と付けの外側から斜めに削り出している削り出しの外側の断面形態が半円状。内底は有段状に削られ扁平。染付の可能性がある。	灰白色 外底と内底は露筋	白色 磁質	17C 福建・広東系	HA ② H2 II Ⅲ 台 1153		
85	—	底	—	3.4	腹部に丸味を持ち高台は外側で付けの外側を斜めに削り出す高台は外縁が鋭利に削られる。断面形態は三角状。	灰白色 内外底は露筋	白色 磁質	13C～14C頃 福建系	HA ③ B16 II 台 2424		
86	—	底	—	3.2	腹部に丸味を持ち高台は外側で付けを外側から削りに削り出す。断面形態は内底を成す。	灰白色	白色 磁質	14C～15C 福建系	HA ③ G13 III 5P888 台 3857		
87	—	口	—	—	腹部に多角面を有し口縁は山形になる外縁の外縁である。口唇は四角。	灰白色 外底露筋	白色 磁質	15C 福建・広東系	HA ③ L6 II Ⅲ 台 1286		
88	—	底	—	3.5	腹部は腹側削。腹部は逆「八」の字状に開く。外面は多角面に削り出す。底底は斜り高台。断面形態は四角筒。	灰白色 外底露筋	白色 磁質	15C 福建・広東系	HA ③ F15 II 5D41 台 2967		
89	—	口一底	6.4	—	腹が斜り高台露筋。口縁は直口。口唇は丸い。高台の断面形態は四角筒。内外底は扁平。外面の輪小形に露筋。	灰白色 付け付露筋	白色 磁質	15C末～16C前 景徳鎮窯	HA ③ K19 II 台 2671		
90	—	口一底	7.0	3.2	腹部が斜り高台露筋。逆「八」の字状に外に開く口縁は端反り口唇は尖る。高台は断面形態は三角状を成す。内底は扁平。	灰白色 龍の打輪画が	白色 磁質	16C 景徳鎮窯	HA ③ A14 II 台 1449		
91	—	底	—	3.8	高台は器筒状の外側から削り出す断面形態は三角状を成す。内底は扁平。	灰白色	白色 磁質	17C～18C 景徳鎮窯	HA ③ C5 II 台 1333		
92	—	口一底	5.6	4.3	腹部は斜り高台露筋はやや開き狭状に立つ。口縁は直口。口唇は尖る。高台は細く断面形態は四角筒。内外底は扁平。口唇は丸い。	灰白色 口唇、付け付露筋	白色 磁質	17C 福建系	HA ② B20 II Ⅲ 台 850		
93	—	口一底	8.0	4.4	腹部に丸味を持ち腹部は逆「八」の字状に外に開き口縁は端反る。口唇は尖り口唇。高台は断面形態は三角状を成す。型成形。	灰白色	白色 磁質	18C～19C 福建系	HA ③ R3 II 台 3099		
94	—	口	8.0	—	腹部に丸味を持ち腹部は逆「八」の字状に外に開き口縁は直口。口唇は尖り口唇。型成形。	灰白色	白色 磁質	17C～18C 景徳鎮窯	HA ③ T9 I 台 1211		
95	—	口一底	4.3	2.2	腹部に丸味を持ち腹部は外に開き口縁は端反る。口唇は尖り口唇。高台は断面形態が三角状を成す。型成形。	灰白色	白色 磁質	16C 景徳鎮窯	HA ② T4 II Ⅲ 台 363		
96	—	底	—	—	腹部は逆「八」の字状に直線的に開く。型成形。	灰白色	白色 磁質	18C～19C 福建系	HA ③ G14 I or II 台 2239		
97	—	口	11.0	—	口縁は玉縁。なで筒の弱縁の帯である。外面は輪軸帯が顕著である。	黄緑灰色	白色 磁質	14C～15C 東洋アジア	HA ③ C18 II 台 1840		
98	—	口	11.5	—	口縁は外反。口唇の上面が平坦で蓋部は先端は舌状である。蓋の付くものと考えられる。	灰白色	白色 磁質	明代 福建・広東系	HA ③ MN017-19 II 台 129		
99	—	口	8.5	—	口縁で短筒の小皿が鉢の口縁である。外面の腹部に下に一帯露筋が認められる。	灰白色	白色 磁質	13C～14C 福建・広東系	HA ③ B6 II 台 2816		
100	—	底	—	8	腹部は高台から内側にむけ外側面に大きく開く。底部は蛇の高台。内面に輪軸帯が顕著。	灰白色	白色 磁質	13C～14C前 福建・広東系	HA ③ T13 III Ⅲ 台 511 台 927		
101	—	底	—	6.8	腹部は高台からわずかに内側にむけ外側面に大きく開き立ち上がる。底部は蛇の高台付で斜りはい内面に輪軸帯が顕著。	灰白色	白色 磁質	13C～14C 福建系	HA ③ A14 III 台 1460.2025 HA ③ C13 II 台 2492		
102	蓋	口	10.6	—	上面腹帯が菊花にも輪軸帯の帯である。型押し成形の縁部と突起は露筋。	灰白色 型押し内面露筋	白色 磁質	15C末～16C 福建系	HA ③ A6 II 台 1681		
103	急須	口一底	8.3	9.5	腹部に丸味を持ち口縁は内側に開く。口縁は器筒に立ち上がる。内面に輪軸帯の帯を有する。注ぎ口の内面に腹部の中心よりやや上部に上向きに彫り込まれた。注ぎ口の内面に複数の孔が穿孔されている。底部は上付き。	灰白色 器蓋 器蓋 器蓋	白色 磁質	1868～純興 14C～15C 付付付	HA ③ D11 II 台 1300 HA ③ D10 II 529		
104	—	底	—	6.1	内底から器型に外に開き立ち上がる。高台は細めの輪状高台外側には狭く断面形態は内底状。底縁不立。	灰白色 器蓋 器蓋	白色 磁質	14C～15C 付付付	HA ③ F12 II 台 2093		
105	—	底	—	5	高台から器型に外に開き立ち上がる。高台は外側の断面形態は台形状。	灰白色 器蓋 器蓋	白色 磁質	14C～15C 付付付	HA ③ T4 II Ⅲ 台 365		

(13) その他の輸入陶磁器

出土量の少ない輸入陶磁器をここにまとめた。中国産は色絵 42 点、瑠璃釉 26 点、青磁染付 3 点、鉄釉染付 11 点、鉄釉磁器 3 点、翡翠釉 1 点、三彩 18 点、無釉陶器 18 点、黒釉陶器（天目）7 点、鉄絵 2 点、タイ産の鉄絵 6 点である（第 66 表）。

1. 色絵

碗が 21 点、皿 7 点、杯 7 点、合子（蓋）1 点、袋物 5 点、急須の 1 点が得られた。明代の景德鎮窯や清代の徳化窯と福建・広東系が得られている。

<碗> 図 1～8 は殆どが福建・広東系の 18C に位置づけられる。上絵のみの絵付けである。図 1～7 は腰の張る碗で口縁は端反りになる。高台の断面形態は先端が尖る、方形。外面に芝仙祝寿文、赤色草花文、窓絵、蓮弁文や篆字寿文を描いている。図 4 は外面に圏線を口縁の上段と腰部に巡らし、中位に穂に枝を配する丸窓絵と草花文を描く。腹下に蓮弁文を施文している。圏線、丸文、草花、蓮弁等の文様の輪郭を赤色で描き、緑色はダミ塗りする。福建・広東系の 18C に位置づけられる。図 8 は高台が露胎する内側の碗である。外面は高台脇に赤の三条の圏線と草花文を描く。見込みは二条圏線と草花文を圏線と輪郭を赤色で描き葉は緑色でダミ塗りしている。景德鎮窯の明代に位置づけられる。

<皿> 図 9～11 に示すものである。図 9 は腰が張り胴部は緩やかに広がる。口縁は外反する。外面はピーチ色が一面に広がるが特に口縁と高台に濃く残る。文様は不明。景德鎮窯の明代に位置づけられる。図 11 は福建・広東系の 18C に位置づけられる皿で腰部に丸味を持ち口縁は広がり端反る。高台はやや幅広く断面形態は台形。内面に三角繫文と圏線を巡らし側面と見込みに草花文を施文している。

<杯> 図 12～18 はいずれも型成形の徳化窯で 18C～19C 位置づけられる。

<袋物> 図 20～22。図 20 は瓶か小壺の胴部資料で外面に草花文を描いている。福建・広東系の 18C に位置づけられる。図 21 は瓶の頸部と考えられる資料で外面に赤色の雷文状の幾何学文を描いている。図 22 は外面に草花文を描く瓶か壺の資料で、被熱している。

<合子> 図 19 は合子の蓋である。縁部に帯状の肥厚部を持つ甲部はドーム状で上部はやや偏平である。縁部の内側に身部内に収まる突起を有する。外面の文様は染付で下絵を描き色絵の上絵を加えている。側面の外面に染付の圏線を上下に配し間に梅花を赤と緑の色絵で描く。甲部上面に染付の圏線と草花文を下絵として描き葉の輪郭と葉脈を赤の上絵で重ねている。景德鎮窯、明代に位置づけられる。

<急須> 図 23 は小振りで胴部が球状を成す。口縁は上面に引き上げ内面に輪状の蓋受けを有する。注ぎ口は基部に丸味を持ち注ぎ口の先端に向かい細くなる。胴部の中位よりやや上面に上向きに貼けされる。注ぎ口の内部に複数穿孔した半球形の茶こしが注ぎ口側より取り付けられる。注ぎ口の上と反対の胴上部に紐状で馬蹄形の耳を持つ。底部は甚奇底。外体面は轆轤痕が顕著である。外面に雲龍文、赤色は文様の輪郭と雲を描き、黄色で龍、髭、眉、目を緑色で描く。生産年代、産地は不明であるが文様の傾向から 19C 頃の中国産の可能性がある。

2. 瑠璃釉

杯が 8 点、小杯 4 点、瓶 10 点、香炉 1 点、蓋 1 点、器種不明 2 点が得られ轆轤成形と型成形がある。生産地は景德鎮窯、徳化窯で 18C 代に位置づけられる。杯、小杯、香炉は外面に瑠璃釉、内面に透明釉と掛け分ける。瓶は外面に瑠璃釉、内面は口縁と頸部の途中まで透明釉を掛けしている。無文である。図 24～35 に示した。

3. 青磁染付

碗 2 点と杯 1 点が得られた。図 36～38 に示した。図 36 は口縁が外反し口唇に覆輪。外面は青磁釉、内面に染付の幅広い圏線を巡らす。図 37 は腰に丸味を持ち外に開きながら立ち高台は畳付けの外面を斜めに削り出し断面形態は三角状。内底見込みに染付の二条圏線と捻子花を施文。図 38 は腰部が丸碗状。外面に青磁釉内面に染付の八卦文と見込みに菊花文を施文している。

4. 鉄釉染付

杯が 11 点得られている。図 39、40 に示した。図 39 は腰がやや膨らみ口縁に向かい直線的に開く口縁は外反、口唇は舌状を成す。高台は外削り畳み付けの外面から斜めに削り出している。断面形態は三角状。外面に鉄釉内面に染付の圏線見込みに二条圏線に山水文を描く。高台内に二条圏線と梵字を配している。

5. 鉄釉磁器

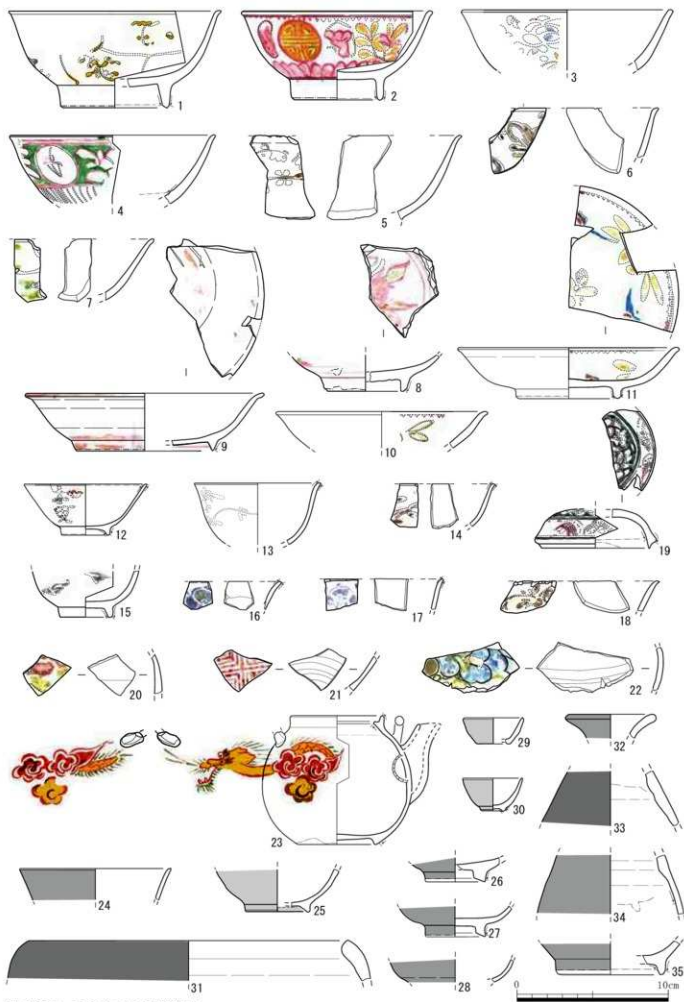
杯が 3 点得られている。図 41 は腰部が丸く直線的に立つ口縁は直口。唇は舌状を成す。外面に鉄釉。内面透明釉。図 42 は高台が短く断面形態は四角状。外面に鉄釉。内面透明釉。

6. 翡翠釉

皿 1 点が得られている。図 43 逆「八」の字状に外に開き、口縁は罽綠の輪花を成す。口唇は四角状である。

第 67 表 -1 その他の輸入陶磁器 観察一覧

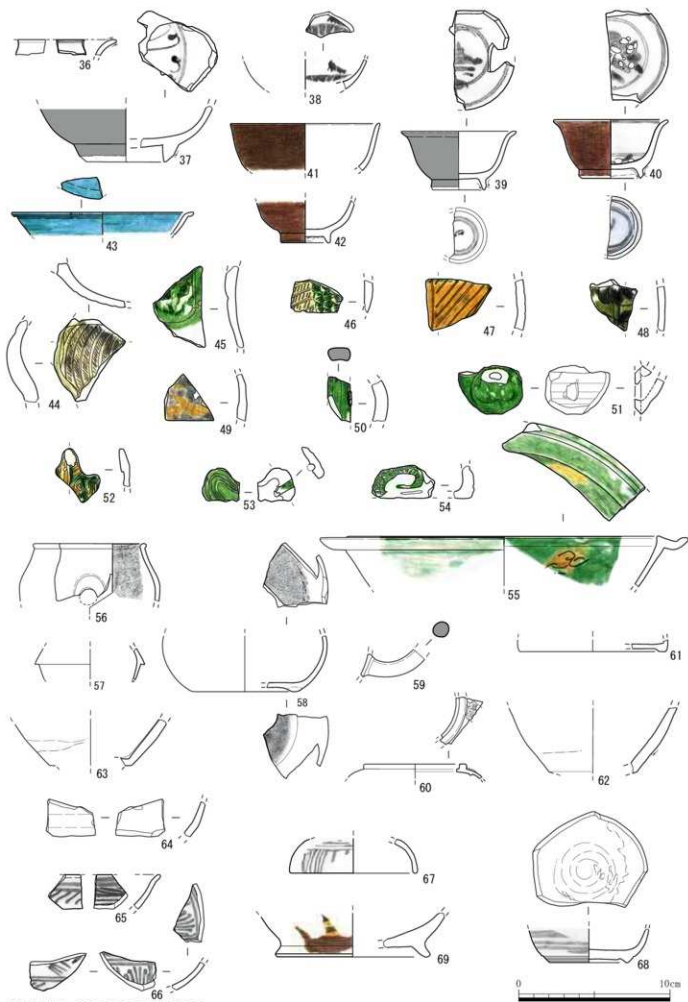
国名 産地	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	形状・文様構成	釉色・範囲	素地・図柄材・質	生産年代 生産地	地区・グリッド・背 透機・付 (R0 表示)	
色 色	杯	1	口	14.0 6.4	7.2	腰が張り脚部は直線で立つ。(口縁は反り、口内は舌状、高台の断面形は方形、外面に芝草文を描く。輪高底。	透明釉	白色 緑系	18C代 福建・広東系	HA ③ A7 II 品 台 1802	
		2	口	13.6 5.9	6.2	腰は直線で立つ。口縁は反り、口内は舌状、高台の断面形は方形。外面に赤・黒線、三角文、草花、蓮文、黄・青・丸雲文。	透明釉	灰白色 黒色輪線 緑系	18C代 福建・広東系	HA ③ D1 II 既測 台 360	
		3	口	14.0	-	腰は直線的に立ち口縁は直口、口内は丸い。外面に青色、黄色、赤文。	透明釉	灰白色 緑系	18C代 福建・広東系	HA ③ T5 II 品 台 2592	
		4	口	13.6	-	腰は直線的に立ち口縁は反り、口内は舌状。外面に脚部を口縁と脚部、間に二角、杖の図柄と草花文を軸下に蓮片を赤で描く。	透明釉	灰白色 緑系	18C代 福建・広東系	HA ③ E9 II 品 台 1302	
		5	口	-	-	腰は直線的に立ち口縁は反り、口内は舌状。外面に草花文を描くが輪の部分が著しく色の確認できない。	透明釉	灰白色 緑系	18C代 福建・広東系	HA ③ D2 II 既測 台 1370	
		6	口	-	-	腰は直線的に立ち口縁は反り、口内は舌状外面に黒で輪取りした黄土色の草花文を描く。	透明釉	灰白色 緑系	18C代 福建・広東系	HA ③ G7 II 品 台 1363	
		7	口	-	-	腰は直線的に立ち口縁は反り、口内は舌状。外面に赤で輪取りした黄土色の草花文を描く。	透明釉	白色 緑系	18C代 福建・広東系	HA ③ F13 III 品 台 2106	
		8	底	-	5.4	高台は内側で断面形は三角、外面は高台軸に二条の脚線と草花文を赤で書く。内底は「葉脚線」と草花文を赤と緑で書く。	透明釉 外灰高底	灰白色 緑系	明代 景徳鎮	HA ③ E5 III 品 台 1339	
		9	口	15.8 3.8	9.2	腰が張り脚部は腰やち広がる。口縁は外反、口内丸い。高台は低く断面形は三角状。腰と肩付けに砂目。地ベージュ色。	透明釉	灰白色 緑系	明代 景徳鎮	HA ③ K1 II 品 台 2605	
		10	口	14.0	-	腰は内湾状に立ち、口縁は反り、口内が丸くなる。口縁の内面脚部に三角文、草花文を文。	透明釉	灰白色、黒色輪線 緑系	18C代 福建・広東系	HA ③ D19 I 品 台 1531	
		11	口	14.6 3.4	6.95	腰は丸味。(口縁は反り、口内丸い。高台は短広で断面形は方形。口縁内に脚線、三角類文、内側と内底に草花文を描く。	透明釉 外付高底	灰白色、黒色輪線 緑系	18C代 福建・広東系	HA ③ C19 II 品 台 572	
		12	口	8.0 3.4	3.2	筒形の小林。口縁は直口、口内、外面に脚線に流注文。「寿」字文を描く。梨形底。高台内反文。	透明釉	白色 緑系	18C ~ 19C 徳化系	HA ③ D1 II 不建 台 831	
		13	口	8.4	-	腰から肩やちに置き口縁は端反り。外面に草花文を描くが輪高底不明。梨形底。	透明釉	白色 緑系	18C ~ 19C 徳化系	HA ③ B1 II 既測 台 1921	
		14	口	-	-	口ノ外側に草花文を描くが輪変色のため色不明。梨形底上灰色不明。	透明釉	白色 緑系	18C ~ 19C 徳化系	HA ③ B9 III 品 台 2972	
		15	底	-	3.6	腰からやや開き立つ外面に青色の草花文を描く。	透明釉	白色 緑系	18C ~ 19C 徳化系	HA ③ E1 II 既測 台 1025	
		16	口	-	-	口ノ外側に青色の草花文を描く。梨形底。	透明釉	白色 緑系	18C ~ 19C 徳化系	HA ③ A1 II 既測 台 430	
		17	口	-	-	口ノ外側青色の草花文を描く。梨形底。	透明釉	白色 緑系	18C ~ 19C 徳化系	HA ③ C12 II 品 台 1147	
		18	口	-	-	外面に草花文輪高底不明。梨形底。	透明釉	白色 緑系	18C ~ 19C 徳化系	HA ③ A1 II 既測 台 1290	
		19	合子蓋	口	底	4.0	-	外面に透けの脚線。腰に脚線赤赤と緑の土絵で書く。上面に脚の脚線と草花文に輪高と脚線赤土絵で写る。	透明釉	灰白色 黒色輪線 緑系	明代 景徳鎮
20	脚	-	-	-	-	外面に赤と黄色の草花文を描く。瓶か	内面高底 透明釉	灰白色 緑系	18C代 福建・広東系	HA ③ G6 I 品 台 2137	
21	袋物	脚	-	-	-	外面に赤の雷文杖の幾何学文を描く。瓶か	内面高底 透明釉	灰白色 緑系	不明	HA ③ R・S19 II 品 台 3016	
22	脚	-	-	-	-	外面に黒で輪部を赤と黄色で草花文を描く。瓶、瓶か	内面高底 透明釉	灰白色 緑系	不明	HA ③ F20 II 上 台 1546	
23	急須	口	底	6.3 5.8	5.2	腰は球形、口縁は直口、口内、外面に雲龍文を文。赤色、輪部。赤、黄色・黒、雲、緑色・黒、白、目。	透明釉	灰白色 緑系	19C 中国	HA ③ E20 II 上 台 706	
24	杯	口	10.0	-	口縁は端反る。	外側色 内透明	灰白色 緑系	18C 景徳鎮	HA ③ E3 II 品 台 1594		
25		底	-	4.2	脚線が丸い。高台断面形は三角。梨形底。脚線輪高底赤。	外側灰白色 内透明	白色 緑系	18C前 ~ 19C前 徳化系	HA ③ B3 III 品 台 2271		
26		底	-	4.0	高台の内側から斜めに削り出す。唇付内高底。	外側色 内透明	灰白色 緑系	18C 景徳鎮	HA ③ F18 II S-10 台 2097		
27		底	-	4.0	脚が丸い。高台の内側から斜めに削り出す。	外側色 内透明	灰白色 緑系	18C 景徳鎮	HA ③ R14 II 品 台 4554		
28		脚	-	-	脚が丸い梨形底。	外側色 内透明	灰白色 緑系	18C 景徳鎮	HA ③ D11 II 品 台 3248		
29		小林	口	底	4.0 1.7	2.3	高台から連「八」の字状に立ち上がる口内は実る。梨形底。	外側色 内透明	灰白色 緑系	18C 徳化系	HA ③ B3 II 不建 台 1350
30		口	底	4.1 2.2	1.7	高台から連「八」の字状に立ち上がる口内は実る。梨形底。	外側色 内透明	灰白色 緑系	18C 徳化系	HA ③ C4 II 既測 台 2452	
31	香炉	口	21.2	-	口縁は内湾し口内は内面が肥厚する。	外側色 内透明	灰白色 緑系	清初 不明	HA ③ A10 II 品 台 2811		
32	瓶	口	6.0	-	朝顔に置き口内は内反。	外側色 内透明	灰白色 緑系	18C 景徳鎮	HA ③ K2 II 品 台 2609		
33		脚	-	-	などで内面に繋ぎ輪がみられる。	外側色 内透明	灰白色 緑系	18C 景徳鎮	HA ③ A12 II 品 台 2873		
34		脚	-	-	などで内面に繋ぎ輪がみられる。	外側色 内透明	灰白色 緑系	18C 景徳鎮	HA ③ A14 II 品 台 2801		
35	底	-	7.2	高台付から外面から斜めに削り出した断面形は三角状。唇付高底。	外 内面・高台内	灰白色 緑系	18C 景徳鎮	HA ③ E19 I 品 台 1807			



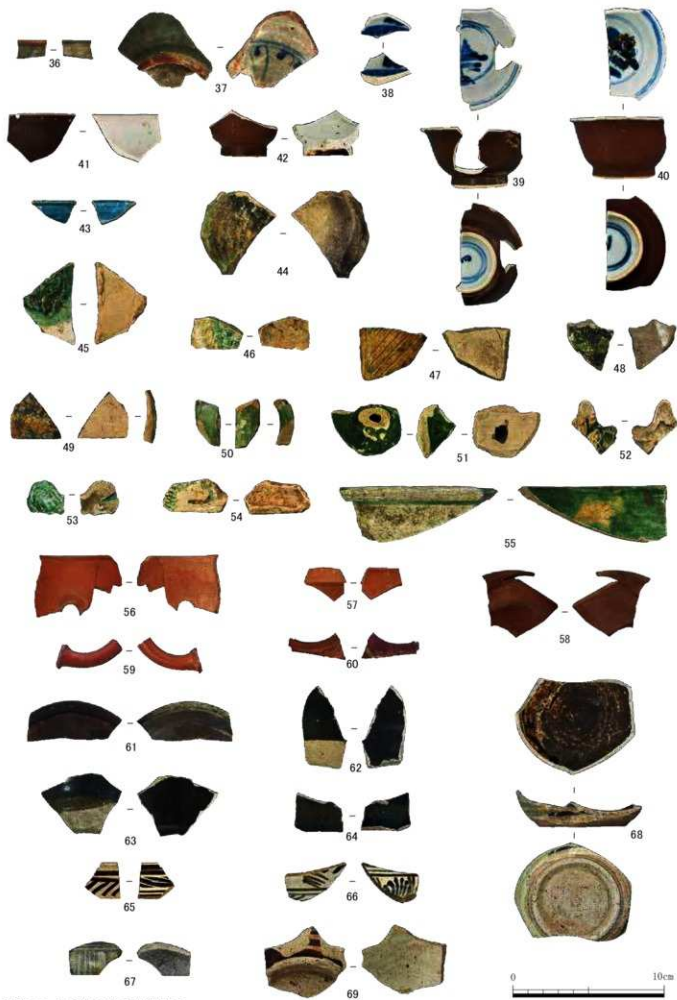
第123図 その他の輸入陶磁器 1



図版 85 その他の輸入陶磁器 1



第124図 その他の輸入陶磁器2



図版 86 その他の輸入陶磁器 2

第 67 表-2 その他の輸入陶磁器 観察一覧

国産別	調査番号	種別	器種	部位	口径 高さ (cm)	口径 底径 (cm)	形状・文様構成	釉色・範囲	素地・顔料・質	生産年代 生産地	地区・ブリード・特 徴・付 (R) 表
青磁 磁器 付	36	青磁 磁器 付	碗	口	—	—	口縁は外反、口縁は舌状、外面に青磁釉、口縁内に染付の菊文、口縁は肌焼成、内面に色付青磁、外底に色付青磁	外: 黄褐色 内: 灰白色	灰白色 磁質	16C末～17C前半 京都府	HA ③ H17 Ⅱ 台 2379
	底			—	5.3	裏に丸い、外側に平、高台の外面は三角状、外面に青磁釉、見込みに染付の菊文と磁器文を施す。外底は高台、内底: 青磁	外: 黄褐色 内: 灰白色	灰白色 磁質	16C後半～17C初 京都府	HA ③ L18 Ⅱ 台 2719	
	杯			製	—	—	腹が丸い丸胴状、外面に青磁釉内面に染付の八宝文見込みに菊文を施す。外底: 色付青磁	外: 薄紫褐色 内: 白色	灰白色 磁質	18C後 京都府	HA ③ R12 Ⅱ 台 1150
	杯			口一底	7.6 3.9	3.6	腹が膨らみ筒状で平口、口縁は外反、口縁は青、高台の外面は平、高台の内底に染付の菊文、内底: 青磁釉、内底: 染付青磁文、内面に内底に染付の菊文、外底: 色付青磁	外: 黄褐色 内: 白色	灰白色 磁質	17C末～18C初 京都府	HA ③ R15-17 Ⅳ 台 2144
鉄 磁器 付	39	鉄 磁器 付	杯	口一底	7.6 3.9	4.4	腹が膨らみ筒状で平口、口縁は外反、口縁は青、高台の外面は平、高台の内底に染付の菊文、内底: 青磁釉、内底: 染付青磁文、内面に内底に染付の菊文、外底: 色付青磁	外: 黄褐色 内: 白色	灰白色 磁質	17C末～18C初 京都府	HA ③ R14 Ⅰ 台 1104
	口一底			7.6 3.9	4.4	腹が膨らみ筒状で平口、口縁は外反、口縁は青、高台の外面は平、高台の内底に染付の菊文、内底: 青磁釉、内底: 染付青磁文、内面に内底に染付の菊文、外底: 色付青磁	外: 黄褐色 内: 白色	灰白色 磁質	17C末～18C初 京都府	HA ③ B19 Ⅱ Ⅲ 台 864	
鉄 磁器 器	41	鉄 磁器 器	杯	口	—	—	腹が丸く筒状に立つ口縁は平口、杯は舌状を成す。外面に青磁、内面透明釉、口縁	外: 黄褐色 内: 白色	灰白色 磁質	18C～19C	HA ③ F8 Ⅲ 5-656 台 740
	底			—	—	高台は短く断面形状は四角筒状、外面に青磁、内面透明釉、口縁	外: 黄褐色 内: 白色	灰白色 磁質	17C末～18C初	HA ③ T8-9 Ⅱ 台 1659	
青磁 磁器 付	43	青磁 磁器 付	皿	口	12.0	—	口縁「八」の字状に外側に開く口縁は青磁の輪花を成す。内底は四角筒状である。	外: トルコブルー色 内: トルコブルー色	灰白色 磁質	明代 福建・広東系	HA ③ G1 Ⅱ Ⅴ Ⅵ 台 1047
	製			—	—	胎厚、外面は掬形し成形による引文、上面に黄、緑、紫の輪花を施している。白磁地、磁器文は施していない。	外: 緑・黄・黒化藍土 内: 高台	生成り色	15C～16C 福建	HA ③ T2 Ⅱ Ⅵ 台 410	
	製			—	—	胎厚薄、水注が考えられる。掬形し成形、外面に緑の輪花を施している。緑釉が施されている。	外: 緑化藍土 内: 高台	生成り色	15C～16C 福建	HA ③ K1 Ⅲ 台 2606	
	製			—	—	胎厚薄、外面は掬形し成形による引文、上面に黄と緑の輪花を施している。	外: 緑・黄・黒化藍土 内: 高台	生成り色	15C～16C 福建	HA ③ K1 Ⅲ 台 2595	
	製			—	—	胎厚薄、外面は掬形し成形による引文、上面に黄と緑の輪花を施している。	外: 緑・黄・黒化藍土 内: 高台	生成り色	15C～16C 福建	HA ③ A12 Ⅲ 台 2352	
	製			—	—	外面に掬形を施す文様上から黒輪花を施している。内面に掬形。	外: 緑・黄・黒化藍土 内: 高台	生成り色	15C～16C 福建	HA ③ B16 Ⅲ 台 2139	
	製			—	—	胎厚薄、外面に掬形し成形、上面に黄と緑の輪花を施している。黒輪花。	外: 緑・黄・黒化藍土 内: 高台	生成り色	15C～16C 福建	HA ③ A14 Ⅱ S 11 台 2025	
	取手			—	—	外面に緑輪花を施している。取手細化	外: 緑・黄・黒化藍土 内: 高台	生成り色	15C～16C 福建	HA ③ T3 Ⅱ Ⅲ 台 308	
	注口			—	—	注口は口縁部分で外面に緑輪花を施している。内底は口径0.9cmの注口が穿たれている。輪花磁器が認められる。	外: 緑・黄・黒化藍土 内: 高台	生成り色	15C～16C 福建	HA ③ E11.12 Ⅲ 台 3300	
	製			—	—	胎厚薄、外面は掬形し成形による黄と黒の輪花を施している。	外: 緑・黄・黒化藍土 内: 高台	生成り色	15C～16C 福建	HA ③ K20 Ⅲ 台 2681	
水 滴	52	水 滴	口	—	—	—	胎厚薄、外面は掬形し成形による尾羽文、上面に緑の輪花を施している。	外: 緑化藍土 内: 高台	生成り色	15C～16C 福建	HA ③ H4 Ⅲ 台 2329
	底			—	—	胎厚薄、底面は扁平、外面には掬形し成形による輪花が口縁に盛り上がる。緑の輪花を施している。	外: 緑化藍土 内: 外底: 高台	生成り色	15C～16C 福建	HA ③ G15 Ⅲ 台 2248	
55	製	口	24.4	—	—	口縁「八」の字状に外側に開く口縁は青磁文および輪花は口縁に盛り上がる断面形状は掬形を成す。内底にハスの花を施す。	外: 緑・黄・透明・化藍土 内: 緑・黄・透明・化藍土	灰白色	15C～16C 福建	HA ③ N18 Ⅰ SK10 台 64	
中国 福建 磁器 器	56	中国 福建 磁器 器	水注 (4)	口	7.4	—	胎厚薄、口縁は絞りに上部が平な玉縁状、胴中に径1.1cmの孔を穿ち筒状に注口の掬形、内底は布目状の口縁。	—	褐色・黒 サンゴ 系磁器 細かい	18C～19C 元朝末	HA ③ B4 Ⅱ Ⅵ 台 1229
	先注 (3)			甲	7.3	—	ドーム状、縁部の内側に唇部の内面に収まる突起、器内面	—	褐色 黒磁料	18C～19C 元朝末	HA ③ G11 Ⅱ 台 2867
中国 福建 磁器 器	58	中国 福建 磁器 器	水注 (4)	底	—	7.0	胎は球形で筒状、内底に網目状が認められる。外底に字款あり	—	赤紫・黒褐色 サンゴ 系磁器	18C～19C 元朝末	HA ③ B5 Ⅱ Ⅵ 台 1217
	取手			—	—	—	胎に彫り付、断面形状が平口、磁器の取手である。	—	褐色 黒磁料	18C～19C 元朝末	HA ③ B10 Ⅲ 台 2121
61	口	6.8	—	—	—	—	球形で口縁は上面に引き上げ口縁、内面に輪花の垂受けを有する。外面に黒の輪花文	赤褐色 黒磁料	18C～19C 元朝末	HA ③ E5 Ⅲ 台 1411	
				底	—	9.7	胎の口縁付、胎部は筒状になることが推察できる。	紫色 黒磁料	18C～19C 元朝末	HA ③ A20 Ⅱ 上 台 1321	
62	製	—	—	—	—	—	高台筒に「元」字の掬形が認められる。胎は楕円に膨らみ立ち上がる。外底: 高台	外: 黄褐色 内: 黒褐色	14C～15C 福建	HA ③ S19 Ⅲ 台 3208	
				製	—	—	高台筒に「元」字の掬形が認められる。胎は楕円に膨らみ立ち上がる。外底: 高台	外: 黄褐色 内: 黒褐色	14C～15C 福建	HA ③ T10 Ⅲ SDB R001・台 1953	
64	製	—	—	—	—	—	胎厚薄に膨らむ。外底: 高台	外: 黄褐色 内: 黒褐色	14C～15C 福建	HA ③ E Ⅲ 5-3 台 429	
				製	—	—	口縁は顔反り、口縁は丸い、外面に二条線と平行線、内底に二条線の間に二行の文字を施す。施文方法は縁輪を沿って施す。文様は縁を取り巻く文文、向に二条線。	外: 化藍土・透明 内: 化藍土・透明	茶褐色 白磁磁料	15C～16C スコリア	HA ③ D5 Ⅰ 台 1348
66	製	—	—	—	—	—	胎は丸い、外面に二条線を含み内底の掬形、口縁、内底に二条の縁輪のみ下は格子状の文を施す。向に二条線。	外: 化藍土・透明 内: 化藍土・透明	茶褐色 白磁磁料	15C～16C スコリア	HA ③ T7 Ⅲ 5-279 台 2229
				口	8.3	—	胎厚薄に膨らむ。高台は筒状に二条、内底に二条の縁輪の掬形、内底に二条の縁輪のみ下は格子状の文を施す。向に二条線。	外: 化藍土・透明 内: 高台	淡灰色 黒白磁料	15C	HA ③ D11 Ⅲ 台 3248
68	製	—	—	—	—	—	胎は丸く、高台は筒状に二条、内底に二条の縁輪の掬形、内底に二条の縁輪のみ下は格子状の文を施す。向に二条線。	外: 化藍土・透明 内: 茶褐色 (縁輪)	淡灰色 黒白磁料	15C～16C スコリア	HA ③ K4 Ⅲ 台 2629
				底	—	10.2	胎厚薄に膨らむ。高台は筒状に「八」の字状、断面形状は平口、外面に黒と高台の縁輪、胎に輪花文を施す。	外: 化藍土・透明 内: 高台	淡褐色 黒系磁料 細かい	15C～16C タイ	HA ③ A13-C13 Ⅲ 5-640 台 1132

(14) 褐釉陶器・半練土器

総数 1779 点、中国産 1594 点、タイ産 144 点、東南アジア産 20 点、タイ産半練土器 7 点、不明 14 点が得られている。(第 68 表) 中国南部からタイにかけて地域で、生産地の特定できないものは東南アジア産で報告した。また壺・甕類の分類は形態、釉、素地から行ったが全形を窺える資料が得られていないことから、形態分類は首里城京の内(1998)、首里城御内原(2010)の資料を参考に行った。生産年代は京の内倉庫跡出土の褐釉陶器が 15C 前半から 15C 中葉以前に搬入されたことを示していることから、ほぼ同様の当該器は 14C~16C を中心とした明代の範疇に収まるといえる。

褐釉陶器の平面分布(第 125 図)は HA ③は縦軸が A・B・C、横軸が 12~14 グリッドに集中し、HA ②は西側のグスク期遺構、瓦屋又吉小と祝女殿内の東側に集中部がある。HA ④は特に集中部はないが西側が多いようである。

1. 中国産褐釉陶器・その他

総数 1594 点が得られ、器種別に壺 1535 点、甕 1 点、水注 10 点、鉢 15 点、播鉢 1 点、蓋 2 点があった。また、その他に灰釉の小壺 1 点・蓋 1 点、黄褐釉の壺 2 点、妬器の壺 1 点、袋物 1 点、壺 or 甕 23 点、不明 1 点がある。

壺・甕類

壺が貯蔵器であることは疑う余地のないものであるが、タイ産褐釉壺は容器そのものが輸入品ではなく輸入物資のコンテナとしての容器(タイ香花酒の貯蔵器)と考えられていることは周知のことであり⁸、褐釉陶器の帰属性を考える上で重要である。中国産褐釉の壺、甕においても法量はもとより内面の釉葉の有無は輸入物資(内容物)になんらかの違いがあると考え、法量と共に分類の判断に加えた。大型:内面施釉 92%、中型:内面施釉 48%、小型:内面施釉 26%で、内面施釉率は大型が特に多く 9 割である。中型はほぼ半数に施釉、小型に至っては施釉するものは 3 割以下であることがわかった。小型から大型へ内面施釉率は高くなる傾向にある。

Ⅰ類:大型(15C~17C)

肩が張り、器の最大径が胴上部にある。頸部は内向し、口縁は外側に折り返し外に張り出す。口縁部の断面形態は方形状、底部は全面施釉、全体の大きさに対して比較的底径が小さい。器面に轆轤痕が顕著である。1無頸:胴部が窄まり頸部を作らず口縁に至る。2短頸:頸部は内向し、口縁を外側に折り返す。A:鈎の上面がやや水平、B:鈎が斜行、C:先端のみ三角。(図 3・16・36・37~43)

Ⅱ類:中型(14C~16C)

頸部に無頸と短頸があり口縁部の形態は玉縁状、断面形態が三角状、四角状、鈎状とある。いずれも口縁の上端部を外側に折返し成型する。口径は 10cm 前後が多数を占め、最大は 10.8cm である。底径は 7.6cm~16.4cm であった。器面は外面内面共に轆轤痕を多く残すものと外面は調整され轆轤痕が認められないものとなる。内面と殆どの底部資料は無釉である。底部は内面露胎で円盤状の粘土を嵌め込んだ様な痕跡を外底に残す。1無頸:胴部が窄まり頸部を作らず口縁に至る。口縁は a:玉縁状、b:三角状、c:四角状、d:舌状を成す。(図 4・8~12)

2短頸:頸部は内向し、口縁を外側に折り返す。鈎縁状を成し断面形態は a:三角状、b:四角状、c:舌状を成す。(図 1・2・6・13~15)

Ⅲ類:小型(明代・清代)

口径が 8~9cm 大、底径が 6cm 大の小型壺類である。7 点が得られている。口縁は無頸壺が 1 点と残りは小破片で判然とし無い。底部は平底で胴部が卵形(図 29)と高台を持つ物(図 28)とある。図 5 は口縁の断面形が楕円状の玉縁を成す。図 7 は腰部に丸味を持ち口縁まで窄まるまで肩、無頸の小壺で器の最大径は腰部ある。口縁は内から外に折り三角状を成す、口縁の断面形は「フ」字状。図 18 は口縁が内向し口唇が外側に僅かに折り返す断面形は四角の小壺である。(図 5・7・18)

水注

図 52・53 は胴部に丸味を持ち口縁に向かい絞る。口縁はやや内彎気味に立ち上がる。口縁部上面は断面形が「T」字状に平坦に整えている。内面に蓋受けの鈎を有する。図 54 は胴部に丸味をもち、注ぎ口は筒状で胴部の中位やや上部に上向きに貼付されたことが推察できる。注ぎ口の内面から円孔が穿孔されている。図 55 底面から逆「八」の字状に開き立ち上がる。外底は上げ底で煤が付着している。

蓋類

図 45・47 はドーム状の甲部を持つ。図 45 は小型壺の蓋が考えられる。作りはかなり薄い。図 46 は口縁部が半円状で中央は平坦で円孔を持つ。図 45・47 の生産年代は明代。

鉢・播鉢

図 56 は最大径を腰部持ち、口縁に向かい窄まり口縁は内向する。かぼちゃ形。口唇は舌状。図 57 は口縁がやや肥

厚し内向する浅鉢。外面に横位の粘土凸帯を巡らしている。図 58 は小振りな揺り鉢である。胴部は逆「八」の字状に開き、口縁は内側に屈曲させ先端は反る。口唇は肥厚し先端は尖る、内側に斜行する平坦面を持つ。内面に八条の櫛目を屈曲面から施している。図 60・61 は口縁の上端が「T」の字状の平坦を持つ鉢である。胴部はいずれも逆「八」の字状に開き、口縁は内側に屈曲させている。口唇は外側に張り出す。図 59 は円盤状の罍を持つ鉢である。

その他

図 66 は灰釉の小壺である胴部が丸く口縁は無形で口唇は舌状、露胎している。生産年代は明代に位置づけられる。図 69 は灰釉の蓋で甲部から罍状の縁を持つ。図 67 は黄釉の壺の胴部である。器面に櫛目状の条痕を残す。生産年代は明代。図 70 は炆器（無釉陶器）壺である。口縁は直口を成し、内面に蓋を受ける罍状の突起がみられる。外面に粘土帯を縦に貼付、縦耳か把手と考えられる。生産年代は 13C ~ 15C に位置づけられる。

2. 東南アジア陶器

鉢 12 点と壺と考えられる破片が 8 点得られている。図 71 は胴部が筒型の深鉢と考えられる。口縁は一旦内彎させ口縁上面で外側に折り返し玉縁状を成す。外面に二条の横線と幅広の押し引き文を施文している。図 72 ~ 79 は壺と思われる胴部資料である。いずれも器面は叩き痕と粗い布目状の圧痕が認められ、生産年代は概ね 15C ~ 16C に位置づけられる。

3. タイ産褐釉陶器

タイ産褐釉陶器は総数 144 点、内訳は壺 139 点、甕 1 点で灰釉瓶が 4 点得られている。

壺・甕類

壺・甕類の分類は基本的には形態、釉、素地から行ったが今回、全形を窺えるものがなく、形態分類は首里城京の内の一括資料と首里城御内原の資料を参考に生産地で大別し I 類 4 種、II 類 3 種に分類した。

I 類：シーサッチャナライ壺 長頸四耳壺

口縁は肩部から大きくラッパ状に外反する。A：頸部の最小径の位置が下部にある。B：頸部の最小径の位置が中央部にある。15C ~ 16C 前に位置づけられる。

- 1：口縁部は罍縁状。罍の上端を揃まみあげる。口縁の断面形態は三角状。図 80
- 2：口縁部は罍縁状。罍の下端を斜め下に尖らす。口縁の断面形態は三角状。図 81
- 3：口縁部は罍縁状。罍は外側から内側に折り返している。罍の角は尖らない。図 82
- 4：口縁部は罍縁状。罍に丸味を持つ。図 83

II 類：メナムノイ壺

口縁は玉縁状を呈し、頸部の最小径の位置は中央よりやや上にある。15C ~ 16C 前に位置づけられる。

- 1：口縁がやや三角の玉縁。図 84
- 2：口縁の先端を外側から内側に折り曲げている。玉縁。図 85・86
- 3：口縁の先端を内側から外側に折り曲げている。玉縁。図 87

底部は図 91 に示す甕と図 89・90 に示す壺が得られている。図 89 は胴下部器壁に厚みがあり、立ち上がりは砲弾状の形態を示す。図 90 は胴にやや丸味があり立ち上がる。内面は轆轤痕を僅かに残す。底面砂目。内面は轆轤痕を残す。図 91 は立ち上がりが緩やかに開き立つ。底径が大きくフラットである。

瓶

図 92 は小瓶の胴部資料である。頸部が締まり胴部の最大径が下位にある瓢箪形を呈す。生産年代は 15C ~ 16C に位置づけられる。

4. タイ産半練土器

半練土器は 7 点得られ壺 5 点と蓋 2 点得られている。壺と蓋がありいずれも全形を窺えない小片のみの出土であった。生産年代は 15C ~ 16C に位置づけられる。

壺

図 95 は胴部が「く」の字状に屈曲する壺である胴上部に横位の二条沈線を施文している。図 96 は壺か鉢の底部である。底面から逆「八」の字状に開く。外面に煤の付着が認められる。

蓋

図 97・98 は断面形態が蹄状の落とし蓋である。図 97 は揃まみの資料である。図 98 は基部の資料である。

註：金武正紀 2000 「陶磁器が語るグスク時代の酒器」『琉球・東アジアの人と文化 上』高宮廣衛先生古希記念論集刊行会

第69表-1 中国・東南アジア産褐釉陶器観察一覧

(法量単位: cm)

図録 掲載 図版	器種	部位	分類	口縁 高径 底径	形状・特徴	釉 色・刷目・施き技法	素地 色・質・混和材	生産年代 生産地	地区・グリッド・研 遺跡・台 (O) 番号	
第127回・図版87	口		1	B 2b	10.2 — —	唇に丸味、口縁は外に折り返し、断面形状は「フ」字状で口縁上縁は扁平、短頸。	褐色 内面磨蝕 白色、褐色砂粒	14C ~ 15C 中国	HA ④ F13 III 台 2111	
			2	B 2b	10.0 — —	唇に丸味、頸部は内向し口縁は外に折り返す。断面形状は「フ」字状、口縁上縁は扁平、短頸。	褐色 内面磨蝕	14C ~ 15C 中国	HA ④ J14 III 台 2549	
			3	I 2C	13.6 — —	唇は内向、口縁は外に「く」の字に屈曲、帯に粘土帯を巻き、踏状を作る。口縁断面形状は四角状。	灰褐色 白質、内面磨蝕	14C ~ 15C 中国	HA ④ H4 III 台 2479	
			4	B 1a	10.7 — —	なで肩で口縁は玉縁状に内から外に丸める。内面と外面に輪轆が著しい。無頸。	緑灰色 内面磨蝕 口縁上、内	灰色 やや細かい 白色、褐色砂粒	14C ~ 15C 中国	HA ④ K1 SP1143 III 台 4004
			5	III	8.8 — —	なで肩、口縁は外に折り玉縁状、口縁の断面形状は「フ」字状で口縁上縁は扁平、無頸。(小壺)	緑灰色 全面 内面内面	灰色 やや細かい 白色、褐色砂粒	14C ~ 15C 中国	HA ④ J14 III 台 2153
			6	B 2b	10.3 0.4 ~ 0.5	頸部は内向、口縁は外に折り返す。口縁断面形状は「フ」字状。	褐色 内面磨蝕 口上、口内	赤褐色 やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ③ B17 II 台 3070
			7	III	9.6 0.2 ~ 0.4	唇大径が頸部より丸い。無頸で口縁は外に折る。口縁の断面形状は「フ」字状で、上縁は扁平、口縁は丸い。(唇大径: 11.5) (小壺)	黒褐色 内面磨蝕 口上、口内	褐色 やや細かい 白色砂粒。	明代 中国	HA ③ B14 5.20 II 台 1030
			8	B 1a	9.8 — —	口縁は玉縁状に内から外に丸め、上縁は扁平、無頸になると考えあり。	褐色 内面磨蝕 口上、口内	灰褐色 やや細かい 白色砂粒	15C ~ 16C 中国	HA ④ M19 III 台 1009
			9	B 1d	9.6 — —	口縁は内から外に折、上縁はやや丸い、口縁は丸い。無頸。	褐色 内面磨蝕 口上、口内	灰褐色 やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ④ K18 II 台 2651
			10	B 1b	10.8 — —	頸は丸く無頸、口縁は外に折り、断面形状は三角状の唇、口縁上縁、内面扁平にする。	褐色 内面磨蝕	黒褐色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 中国	HA ③ A11 II 台 2305
			11	B 1d	14.4 — —	頸部が窄まり、口縁は逆「八」の字状に開く踏状を持つ。胸の可能性あり。	褐色 全面磨蝕	灰褐色 やや細かい 白色、黒色砂粒	明代 中国	HA ③ N16 00105D I 台 139
			12	B 1b	10.5 0.3 ~ 0.6	頸部は内向、口縁の外に折り、断面形状は三角状の唇、口縁断面形状は「フ」字状、口縁上縁は扁平。	褐色 全面磨蝕 口上	灰褐色 やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ③ A13 S-11 II 台 4265
13	B 2a	10.4 — —	なで肩、頸部は内向、口縁は外に折り玉縁状、胴上縁と胴下部に輪轆を粘付している。	褐色 内面磨蝕	灰褐色 やや細かい 白色、黒色砂粒	明代 中国	HA ④ R4 II 台 2629 HA ④ K34 S82 III 台 3366 HA ④ OP18.19 SD4 II 台 2906			
14	B 2c	8.6 — —	頸部は上面に持ち上げ口縁は外側に折り返す。口縁は方形状をなす。胴上部に口轆を嵌す。	緑灰色 内面磨蝕	灰色 やや細かい 白色、褐色砂粒、	明代 中国	HA ④ G18 III 台 2324			
15	B 2a	10.0 — —	頸部は胴の上面に持ち上げ口縁の外側に僅かに折り返す。口縁は玉縁状。	褐色 内面磨蝕	褐色 やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ④ H1 SD51 II 台 3213.4			
16	I 2C	14.4 — —	頸部は上面に持ち上げ口縁の外側に折り返す。口縁は方形状をなす。	褐色 内面磨蝕	褐色 やや細かい 白色、褐色砂粒	15C ~ 16C 中国	HA ③ D13 II 台 3247			
17	I	17.6 0.8 —	口縁は方形状をなす。	褐色 全面磨蝕	褐色 やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ② F3 名産所 II 台 981			
18	III	8.0 0.3 ~ 0.4	口縁は内向し口縁は外側に僅かに折り返す口縁の断面形状は四角。(小壺)	褐色 全面磨蝕	赤褐色 やや細かい 白色、褐色砂粒	清代か 中国	HA ③ T9 II 台 2806			
19	中型	— 0.4 ~ 0.7 9.0	底部は円筒状の底面が薄し蓋状に広まっている。僅かにくびれて立ち上がる。	褐色 内面磨蝕	暗褐色 やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 福建・広東	HA ② T10 200小 II 台 635			
20	中型	— 7.6	底部は僅かにくびれて立ち上がる。底面砂目	褐色 内面磨蝕	褐色 底面磨射 斑紋良好	明代 中国	HA ③ A13-C13 5.640 II 台 1125			
21	中型	— 9.8	底部は円筒状の底面が薄し蓋状に広まっている。僅かにくびれて立ち上がる。	褐色 内面磨蝕	灰色サンド やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 中国	HA ④ G18 SD41 II 台 3066			
22	中型	— 0.6 9.0	底部は円筒状の底面が薄し蓋状に広まっている。僅かにくびれて立ち上がる。「ミ〜ガチ〜」か	黒褐色 底面磨蝕	紫褐色 やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 福建・広東	HA ② T8 高 II 台 638			
23	中型	— 10.2	底部は円筒状の蓋とふた状に広まっている。僅かにくびれ固き立つ。	灰褐色 底面磨蝕	暗褐色灰色サンド やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 中国南部	HA ④ F16 III 台 2146			
24	中型	— 0.4 ~ 0.8 9.2	底部は円筒状の底面が薄し蓋状に広まっている。僅かにくびれて立ち上がる。タイ差の可能性あり	褐色 底面磨蝕	紫褐色灰色サンド やや細かい 白色、褐色砂粒	明代 中国南部タイ	HA ③ D16 5.4 II 台 846			
25	中型	— 11.4	底部は内底の高きまでくびれ、外に開き立ち上がる。表面は輪轆痕が顕著である。	褐色 底面磨蝕	紫褐色褐色サンド やや細かい 白色、褐色砂粒	14C ~ 15C 中国	HA ④ G19 II 台 2306 HA ④ G18 II 台 2298			
26	製	— —	胴部に横ひの粘付部	紫褐色 全面磨蝕	黒褐色 やや細かい 白色、黒色砂粒	15C ~ 16C 中国	HA ③ A13 II 台 2705			

第69表-3 中国・東南アジア産褐釉陶器観察一覧

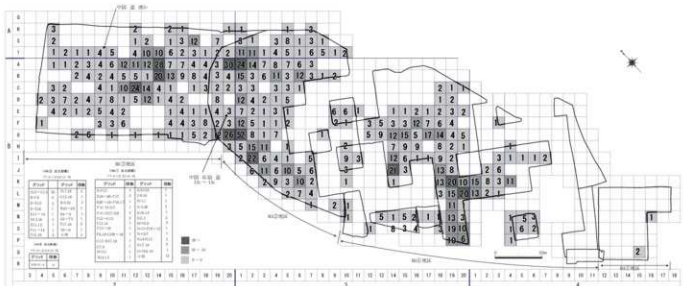
(法量単位: cm)

図号 図名	器種	部位	分類	口径 底径 高さ	形状・特徴	胎 色・裏面・焼き跡	表地 色・質・装飾材	生産年代 生産地	地区・グリッド・層 遺積・台(取)番号
第128回 図取89	甌	口	-	-	胴部に丸縁。注ぎ口は指状。胴部の中よりやや上に向きに着付。注ぎ口の内部に内孔。	灰色 内面磨光	黒灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	15C ~ 16C 中国	HA ④ J14 SD41 II 台 3013
					底面から逆「八」の字状に突き立ち上がる。外底は上げ底で底が付着している。	灰色 底面磨光	黒灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	15C ~ 16C 中国	HA ④ J14 SD41 II 台 3013.3054 HA ④ G14 SD41 II 台 3075
					最大径を無指持。口縁に向かい窄まり口縁は内向する。口は直。	緑褐色 口内、外底磨光	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	明代 中国	HA ② T07 Ⅱ Ⅲ 台 875 台 885
					口縁がやや厚押しした内向する浅鉢。外面に顔位の粘土凸部を巡らしている。	灰色 口内磨光	褐色 やや細かい 白色。褐色粒	明代 中国	HA ② H2 Ⅱ Ⅲ 台 2397
					胴部は内開く。口縁は内に屈曲させ先端は反る。口内は厚押し先端は尖り。内側に斜め平面を持つ。内面の顔面八条の帯目を施す。	灰色 内面磨光	褐色 やや細かい 白色。褐色粒	明代 中国	HA ② A3 Ⅱ Ⅲ 台 1621 HA ② A3 Ⅱ Ⅲ 台 496
					円錐状の器を持つ。口縁は四角状。	灰色 全面	褐色 やや細かい 白色。褐色粒	明代 中国	HA ④ P19 II 台 2890
					口縁は内側に屈曲させ上部は「丁」の字状の平坦を持つ。口縁は外側に張り出す。	赤褐色 内面磨光	赤褐色 やや細かい 白色。褐色粒	16C ~ 17C 中国南部	HA ② B4 Ⅱ Ⅲ 台 1205 HA ② B4 Ⅱ Ⅲ 台 1211
					胴部は逆「八」の字状に開く。口縁は内に屈曲。先端は平坦。口縁は外に張り出す。胴部に目皿状。	灰色 内面磨光	赤褐色 やや細かい 白色。褐色粒	16C ~ 17C 中国南部	HA ④ N16 P.116 III 台 127
					底は口縁の粘土を密着させ外底に条線を残す。立ち上がりは僅かにくびれ開く。逆の可能性あり。	灰色 底面磨光	赤褐色 やや細かい 白色。褐色粒	14C ~ 15C 中国	HA ④ P20 II 台 2894
					第129回 図取90	甌	底	-	逆「八」の字状に開く。外底はやや上げ底。逆の可能性あり。タイ高の可能性あり。
底面は外側に張り出し断面形が「く」の字にくびれ逆「八」の字状に開く。外底に砂目粒。	灰色 底面磨光	赤褐色 やや細かい 白色。褐色粒	16C ~ 17C 中国南部・ 東南アジア	HA ② G1 Ⅱ Ⅲ 台 1035					
底面はくびれ逆「八」の字状に開く。外底に砂目粒。	灰色 内面磨光	赤褐色 やや細かい 白色。褐色粒	16C ~ 17C 中国南部・ 東南アジア	HA ② B4 Ⅱ Ⅲ 台 1215					
底の小さくある胴部がなく口縁は無形で口内は舌状。磨光している。(小甌)	灰色 内底磨光	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	明代 中国	HA ③ A12 II 台 2873					
黄褐色の帯の胴部である。器面に磨目状の条線を残す。	生成り色 全面	生成り色 やや細かい 白色。黒色砂粒	明代 中国	HA ③ D11-14 II 台 1540					
黄褐色の袋物と考えられる。	黄色 全面	生成り色 細かい 黒色粒	明代 中国	HA ④ G16 III 台 2275					
灰褐色の蓋で中部から跨った縁を持つ。(胴径: 8.2cm)	灰色 半扉	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	明代 中国	HA ③ A13 S-11 II 台 4265					
底面は直口。内面に蓋を受ける筒状の突起。外面に粘土を縦に貼付。	無釉	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	13C ~ 15C 中国	HA ② E20 R0R II 上 台 707					
筒型の胴部から口縁は一日内開。玉縁状を成す。外面に二条の横線と縦線の押し引き文を施す。	無釉	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ② S4 Ⅱ Ⅲ 台 954					
甌?	甌	口	-	外面に布目状圧痕なのか叩き痕なのか不明。					無釉
				外面に布目状圧痕が認められる。	無釉	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ② K3 Ⅱ Ⅲ 台 319	
				外面に窪による条痕が認められる。	無釉	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ F11 II 台 3205	
				外面に布目状圧痕が認められる。	無釉	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ F17.18 S-10 II 台 2034	
				外面に布目状圧痕が認められる。	無釉	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ F17.18 S-10 II 台 2034	
				外面に布目状圧痕なのか叩き痕なのか不明。	無釉	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ A14 S-11 II 台 1258	
				外面に窪による条痕が認められる。	無釉	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ B16 II 台 3161	
				外面に布目状圧痕なのか叩き痕なのか不明。	無釉	灰色 やや細かい 白色。黒色砂粒	15C ~ 16C 東南アジア	HA ③ E9 II 台 1371	

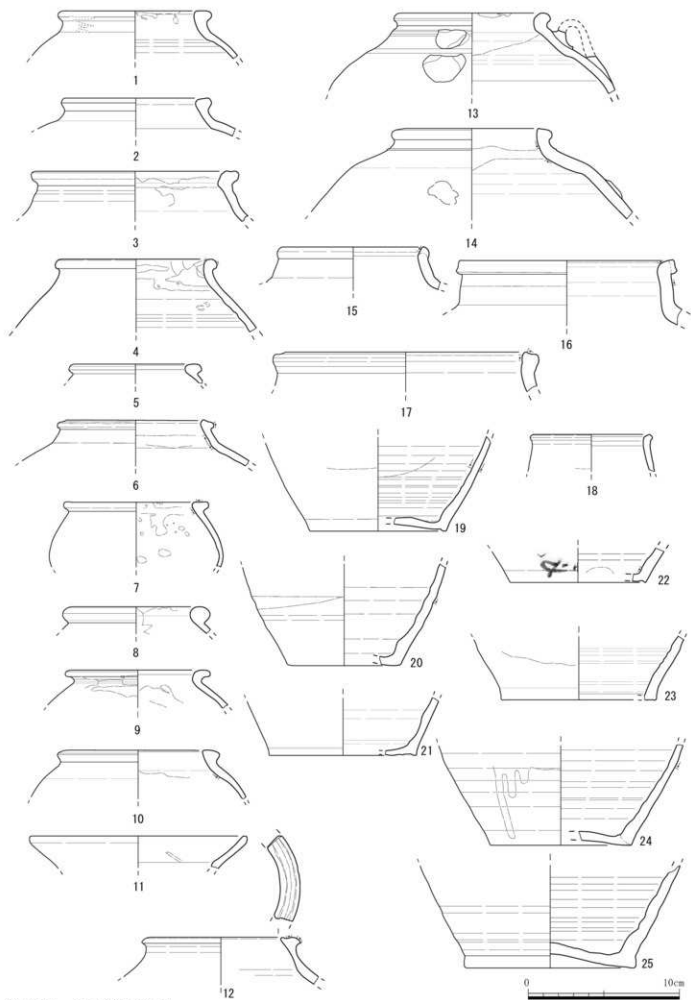
第70表 タイ産褐釉陶器・半練土器 観察一覧

(法量単位: cm)

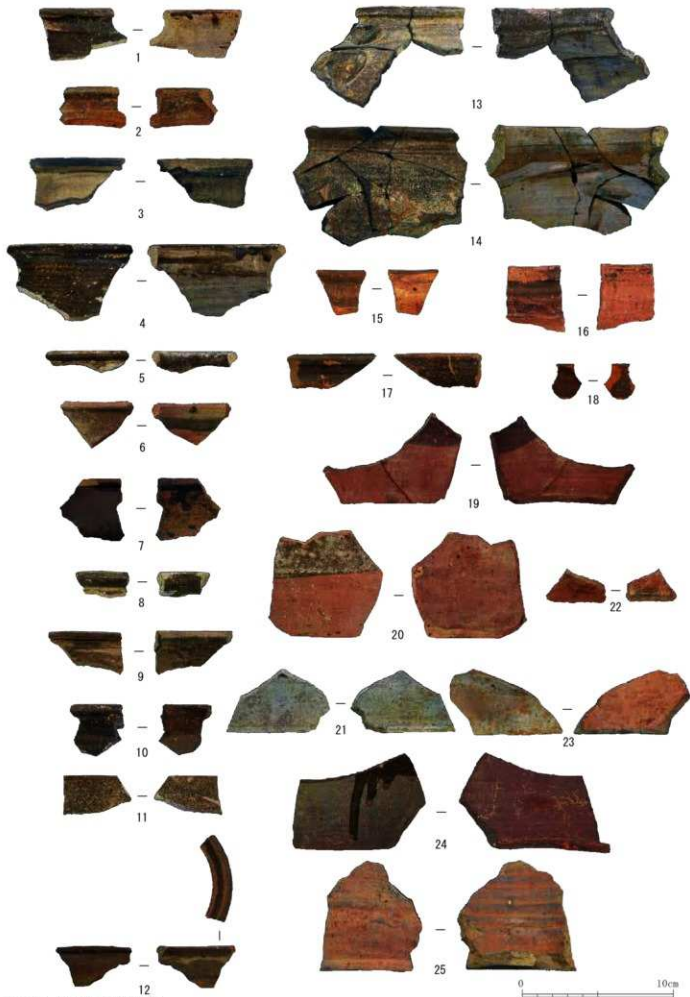
図版 図号	器種 器名	部位	分類	口径 底径	胴径 器高	器形・特徴	胎 色・範囲・焼成・具人	表地 色・質・装相材	生産年代 生産地	地区・グリッド・研 遺物・台(図)番号
第70図 図版 91	壺	口	Ⅰ類-1	17.6	—	口縁部は胴部からラッパ状に大きく外反し、口縁上縁を上に揃えみあげた断面は内反を成す。	黒褐色 口縁全体 具人	紫褐色 細かい 白色粒状砂粒。	15C~16C タイ	HA④ N15 Ⅱ 台 2793
			Ⅰ類-2	13.8	—	口縁端部の断面形状が三角状を呈する。ラッパ状に外に大きく開く。	黒褐色部分的に黄褐色 口縁上縁と胴部内側の輪を抜き取る。	黒灰色 細かい 白色砂粒。	15C~16C タイ	HA④ C19 Ⅲ 台 2674 HA④ I19 Ⅲ 台 2514
			Ⅰ類-3	12.2	—	口縁端部を外側から内側に折り返している。胴の内が丸まない。	褐色口縁上縁から胴部の内側の輪を抜き取る。	紫灰色と褐色サンド 細かい 白色砂粒。	15C~16C タイ	HA④ I15 Ⅱ 台 2482
			Ⅰ類-4	14.0	—	口縁の端部に丸みを持たせラッパ状に大きく外反している。	褐色部分的に黄褐色 口縁先端と胴部内側の輪を抜き取る。	灰色褐色サンド 細かい 白色粒子	15C~16C タイ	HA④ M19 Ⅲ 台 2747
			Ⅱ類-1	11.4	—	口縁がやや三角の玉縁を成し胴部の最小径の位置は中央よりやや上にある。	黒褐色 胴より下部の内側を抜き取る。	灰色褐色サンド 細かい 白色粒子	15C~16C タイ	HA④ L19 IV 台 981
			Ⅱ類-2	11.1	—	口縁の先端を外側から内側に折り返している。口縁は丸い。	褐色 口縁上縁から胴部内側の輪を抜き取る。	褐色 細かい 褐色、白色粒子	15C~16C タイ	HA④ A14 5-11 Ⅱ 台 1236
			Ⅱ類-2	11.8	—	口縁の先端を外側から内側に折り返している。口縁は丸い。	黒褐色 口縁全体	灰色 細かい 褐色、白色粒子	15C~16C タイ	HA④ A13 Ⅱ 台 2489 HA④ C12 Ⅱ 台 3182 HA④ A13 5-11 Ⅱ 台 4255
			Ⅱ類-3	11.0	—	口縁の先端を内側から外側に折り返している。口縁は丸い。	褐色 口縁上縁から胴部内側の輪を抜き取る。底色が目い。	褐色 細かい 褐色、白色粒子	15C~16C タイ?	HA④ A15 Ⅱ 台 1434
			Ⅲ類	—	—	小型の楕円である。口縁部の縁をうすく削り表面は円形に仕上がっている。	黒褐色 全体	灰色褐色サンド 細かい 褐色、白色粒子	15C~16C タイ	HA④ D-E15 5-4 Ⅱ 台 1477
			Ⅳ類	—	—	胴下部は鈴形、胴の内面は輪軸を成す。胴部の厚さが1.3cmと比較的厚いものとして底面は6mmと薄く作り。	黒褐色 全体	紫褐色 細かい 褐色、白色粒子	15C~16C タイ	HA④ T1 視測 Ⅱ 台 1088
			Ⅴ類	—	—	胴にやや丸味があり立ち上がり、内面は輪軸を成す。底面砂目。	緑褐色 底面無軸 焼成良好	紫褐色褐色サンド 細かい 白色粒状砂粒。	明代 タイ	HA④ C6 Ⅰ 台 1353
			Ⅵ類	—	—	底面は径が広くフラット。立ち上がりは僅かに開き立つ。	内面と胴下部は無軸	褐色 細かい 褐色、白色粒子	15C タイ	HA④ A13 Ⅱ 台 2489
			Ⅶ類	—	—	胴部が縮まり胴部の最大径が下位にある気流型を成す。底面丸みあり。	灰色 胴下部まで内面無軸	灰色 細かい 褐色、白色粒子	15C~16C タイ	HA④ G15 Ⅲ 台 2258
			Ⅷ類	—	—	外側に叩き痕のある口縁部は不明であるが断面は短縮文(短縮文)と認められる。	焼成良好	褐色 やや細かい 金赤、黒色、白色微粒子	15C~16C タイ	HA④ F18 Ⅱ 台 2173
Ⅷ類	—	—	底面付近に格子状の叩き痕が認められる。	焼成良好	赤褐色 やや細かい 金赤、黒色、白色微粒子	15C~16C タイ	HA④ G14 Ⅱ 台 2234			
Ⅷ類	—	—	胴部が「く」の字状に屈曲し横位沈線を二条施文している。	焼成良好	褐色 やや細かい 金赤、黒色微粒子	15C~16C タイ	HA② L7 照屋 Ⅱ 台 1424			
Ⅷ類	—	—	底面から逆「八」の字状に開き立つ平底で内面に輪軸が認められる。外面に砂目付。	焼成良好	褐色 やや細かい 金赤、白色微粒子	15C~16C タイ	HA④ H16 SP1613 Ⅲ 台 4294			
Ⅷ類	—	—	落し土の積みみである。断面形状は完成状。	焼成良好	褐色 やや細かい 褐色、白色微粒子	15C~16C タイ	HA④ G15 Ⅲ 台 2294			
Ⅷ類	—	—	断面形状が弓状を成す。落し土である。	焼成良好	黒褐色 やや細かい 褐色、白色微粒子	15C~16C タイ	HA④ E・F17 Ⅱ-Ⅲ 台 4574			



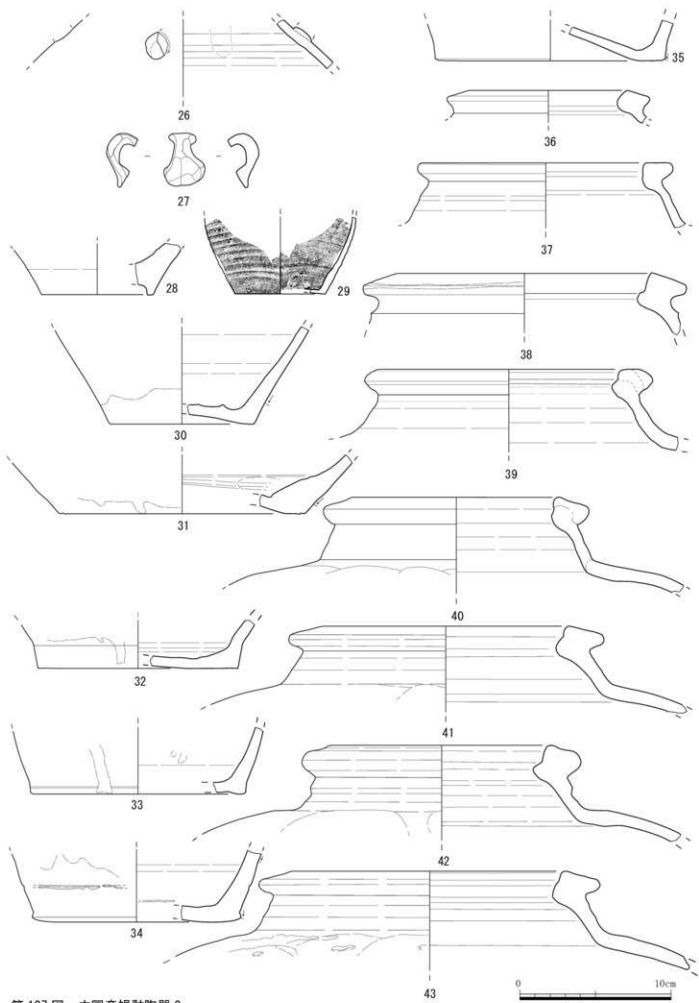
第125図 褐釉陶器 平面分布



第126图 中国産褐釉陶器 1



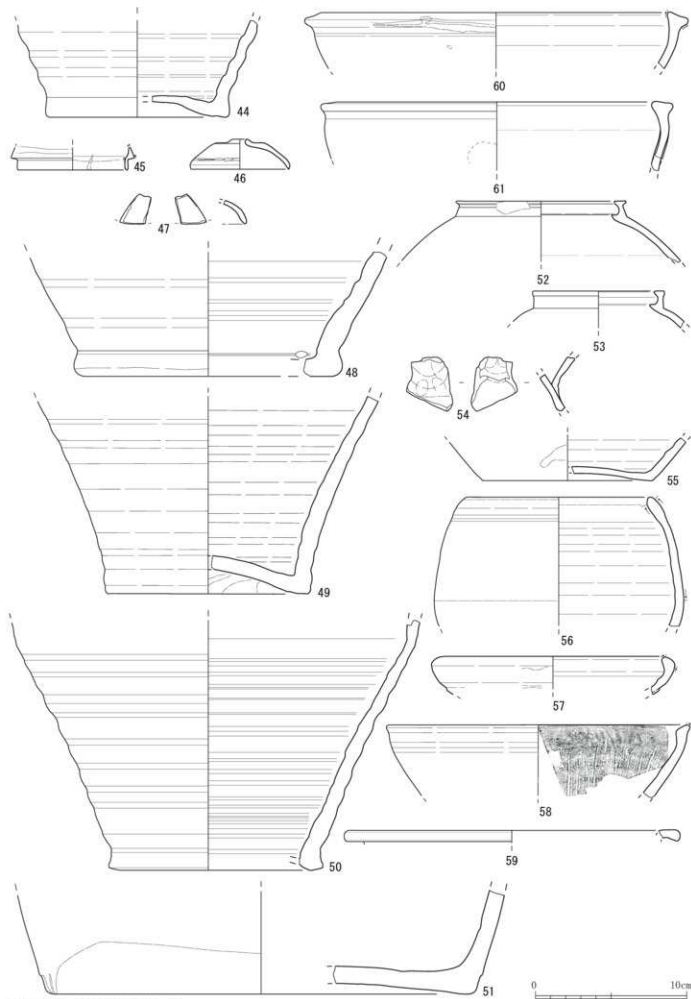
图版 87 中国产褐釉陶器 I



第 127 图 中国産褐釉陶器 2



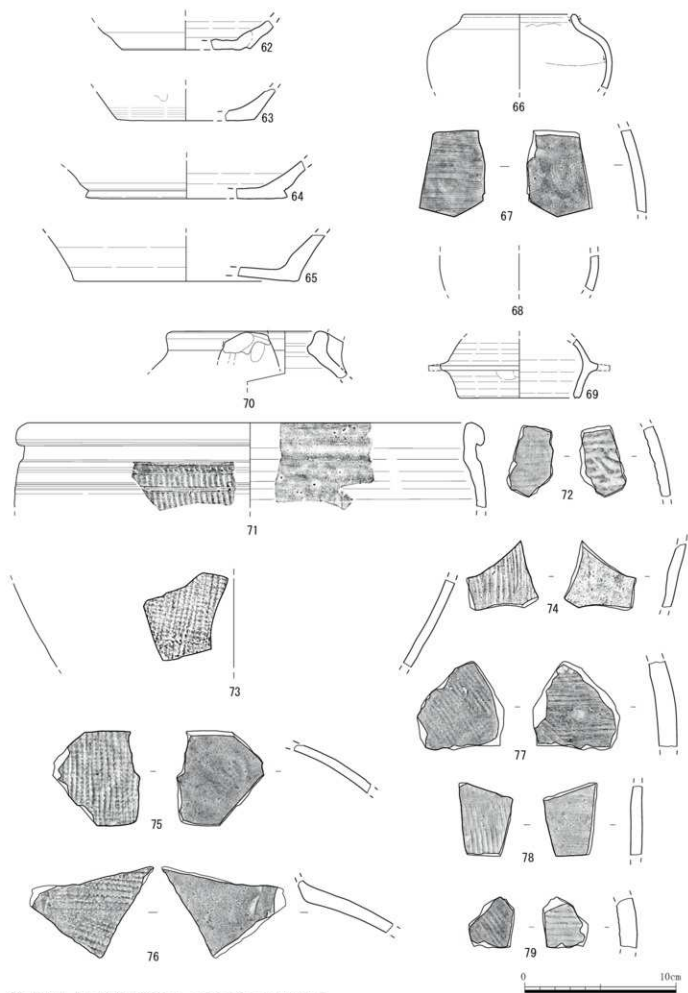
圖版 88 中國產褐釉陶器 2



第128图 中国産褐釉陶器 3



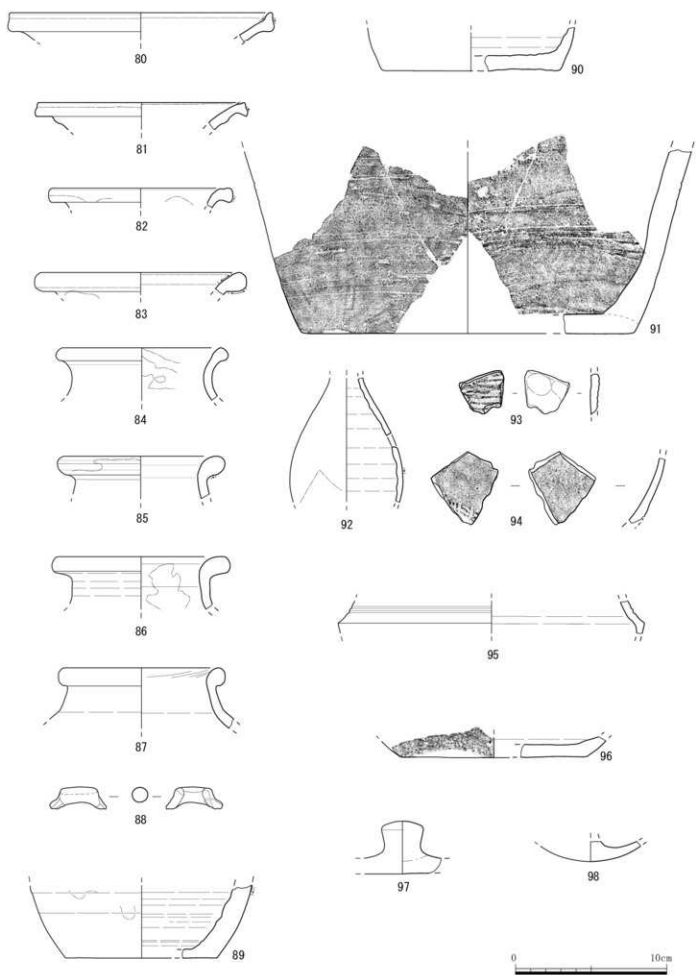
図版 89 中国産褐釉陶器 3



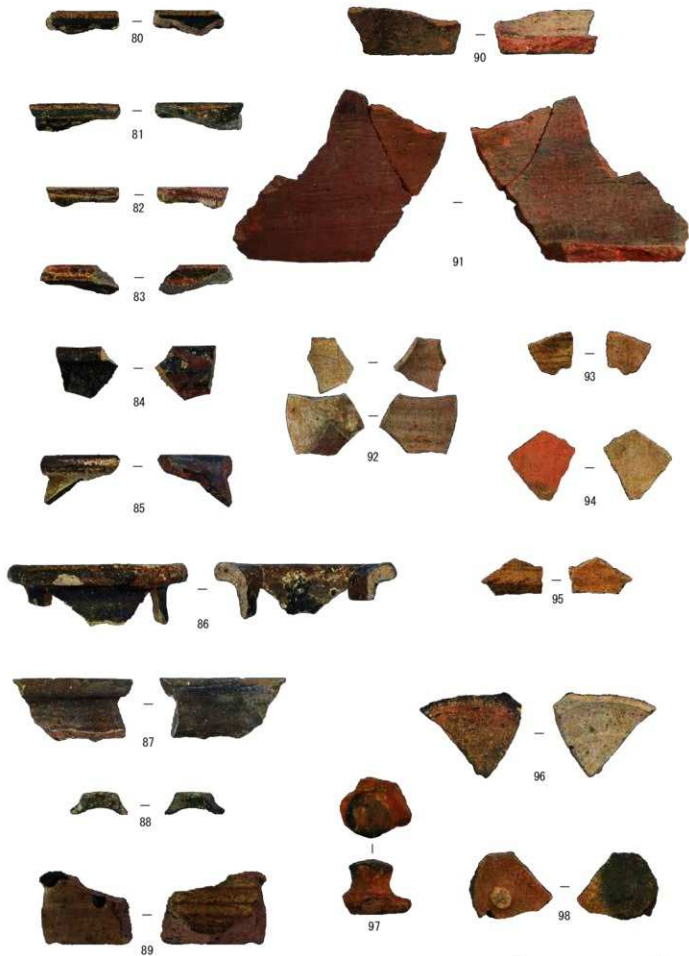
第129図 中国産褐釉陶器4・東南アジア産褐釉陶器



図版 90 中国産褐釉陶器 4・東南アジア産褐釉陶器



第130図 タイ産褐釉陶器・半練土器



図版 91 タイ産褐釉陶器・半練土器

(15) カムイヤキ

カムイヤキ 118 点が出土した。完品の出土はなく、口縁部 7 点・胴部 97 点・底部 13 点・把手 1 点が得られている(第 72 表)。確認できる器種はすべて壺であり、口径は 8.5cm～14.4cm と全体として小ぶりである。当該器の出土分布(第 133 図)は、主に HA ③の東から西に伸びるライン(T16、A14～16、B12～17、C12、D8～10、E10)があり S-640(自然流路)と重なる。HA ②(G20、G1)グリッドはグスク期の埋葬人骨(11号)と重なりグスク土器の出土地区とも重なっている。HA ①は(L14、M12・13、O14・15)グリッドに分布している。口縁の形態分類は新里分類に準拠する^{註1)}。

1. 口縁部

口縁は、口唇の断面形態が三角状を呈す「新里Ⅰ式」と、口唇の断面形態が四角状を呈す「新里Ⅵ式」がある。生産された年代は、11C 後半～14C 前半に位置づけられる。図 1 は頸部からラッパ状に外に開きながら上方に引き上げた後、外下方向に絞り帯状の肥厚口縁を作る。先端は尖り鉤状を示す。断面形は下方が尖る三角状で、新里分類のⅠ式 c に分類でき、生産年代は 11C 後半とされている。図 3 は長頸の口縁で直口気味に立ち、口縁上部で外反し口唇断面形態は隅丸方形を示す。内面に刻線の「十」字印があり、窯印の可能性がある。新里分類のⅥ式 a に分類でき、生産年代は 14C 前半に位置づけられる。口縁の形態別の出土状況は、Ⅰ式 2 点・Ⅵ式 a4 点・Ⅵ式 c1 点の計 7 点の出土があり、Ⅵ式 a がやや多く出土している。

2. 底部

底部の形態はすべて平底で、底から直線的に立つものとやや丸味を持つものがあり、底面は扁平と僅かに上げ底のものがある。作りは円盤状の粘土に側面(粘土紐)を積み上げるものではなく、底部の底面から約 2cm の高さまでは継ぎ目なしで作りあげている。底部の立ち上がり段階の凹みを手練りで作り、その上に粘土紐を積み上げ胴部まで作ると考えられる。この技法は沖縄の作陶にみられる「ウシチキー技法」と同一と考えられる^{註2)}。図 32 はやや上げ底の底部で、逆「八」の字状に外に向かい開き立ち上がる。底部側面はへら削りした後、ナデ調整で仕上げている。底面から約 1～2cm の高さから積み痕が現れる。内底面は格子状圧痕を疎らに残し、器肉は中央がやや厚く縁に向かい薄くなる。内底の立ち上がり部分は指ナデし、内体面に格子状圧痕が認められる。図 35 は底面から丸味を持ちながら外に開き立ち上がり、外底から外側面はへら削りした後ナデ調整で仕上げている。外底面から 2cm 程の高さに積み痕が見られる。内面はへら削りが顕著で圧痕は認められない。外底面は扁平である。図 36 は腰部を僅かに絞りやや括れをなす平底である。胴部は逆「八」の字状に外に開き立つ。外底及び底部側面はへら削りとナデ調整がなされる。外底面から 2.5cm 程の高さから積み痕が現れる。内体面は平行状圧痕を残している。底面の器肉は薄くなる。

3. 胴部

胴部の器面調整(叩き・ナデ・へら削り)は、外体面と内体面のセットで以下の 6 種に分類できる。

Ⅰ類：外体面に平行状叩痕や綾杉状叩痕、内体面に平行状圧痕や綾杉状圧痕とへら削り痕

Ⅱ類：外体面に平行状叩痕、内体面に格子状圧痕

Ⅲ類：外体面に平行状叩痕、内体面にナデ及びへら削り調整

Ⅳ類：外体面はナデ調整、内体面平行状圧痕と綾杉状圧痕

Ⅴ類：外体面はナデ調整、内体面は積み痕・指圧痕・へら削り痕・ナデ痕

Ⅵ類：外体面と内体面をナデ調整、外体面に文様が描かれる

外体面に見られる綾杉状痕や細かい格子状痕またはステッチ状痕は、平行叩痕が重なることにより生じると考えられるため、基本的には平行状叩痕に含めた。胴部はⅠ類の出土がやや多く、Ⅴ類・Ⅲ類・Ⅳ類・Ⅱ類の順となるが、ほぼ部位による差異といえる。

把手・有文：図 37 は横位の手練り方形、把手で平面の横軸の中央付近に溝を設けている。溝は一方方向にやや偏り、両端に薄く広がる貼付部を持つ。カムイヤキ古窯跡群Ⅳ(2005)に同様の把手の報告例がある。有文片は 5 点得られている。図 7・8・16 は横位の波線文で、図 7 は外面の頸部から肩部にかけ上下の圏線に 3 条の波線を巡らしている。図 8 は頸部に振り幅の大きい波文を一条施文している。図 16 は波の一部が確認できる資料である。図 17 は縦線に放射状に波線が伸びる。図 15 は横線のみ破片である。

<註文献>

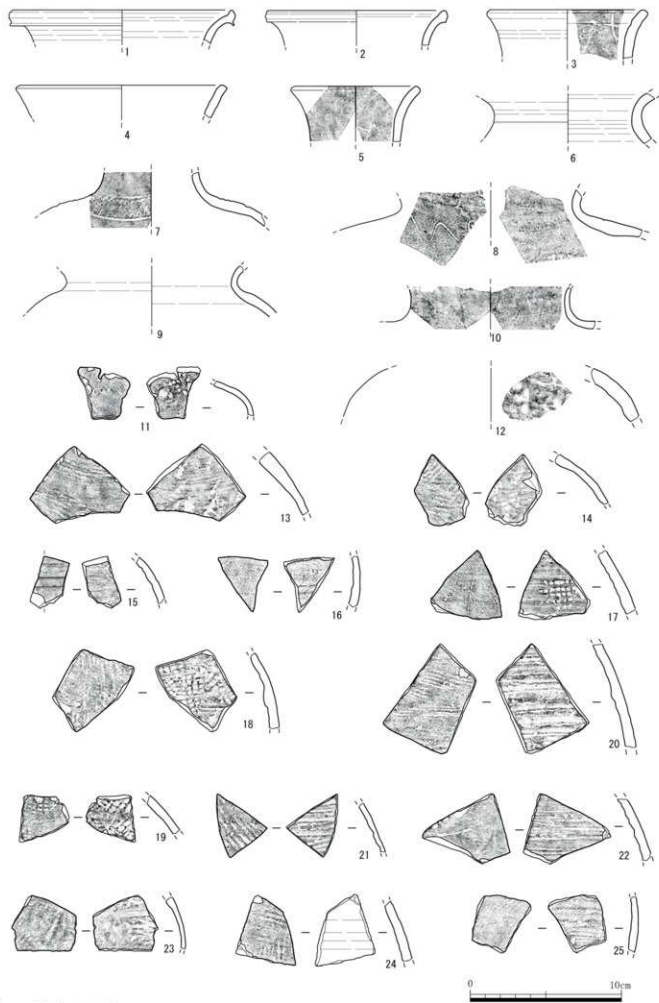
註 1：新里亮人 2003 「琉球列島における窯業生産の成立と発展」『考古学研究』49-1 考古学研究会

新里亮人 2007 「カムイヤキとカムイヤキ古窯跡群」特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島『東アジアの古代 130 号』

註 2：照屋善義 2000 『沖縄の陶器—技術と科学—』

第71表-1 カムイヤキ 観察一覽

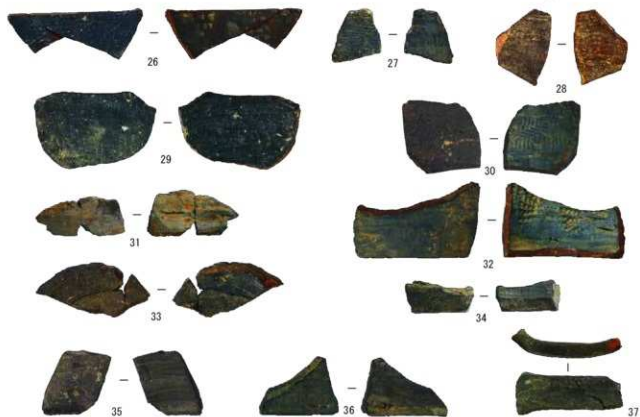
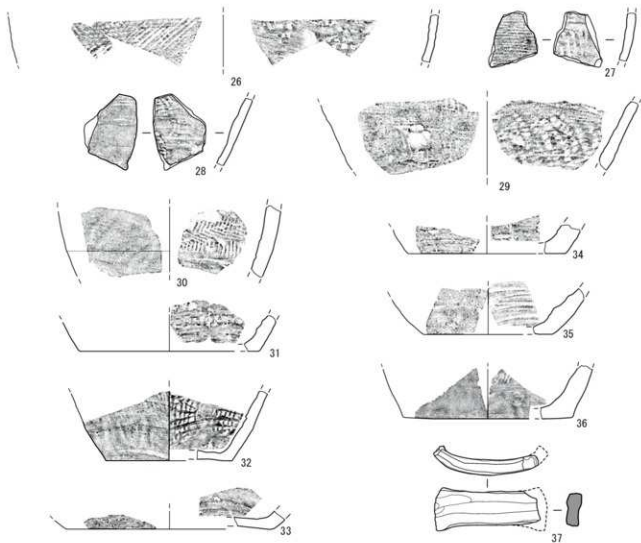
図版 図版	図 書 号	部 位	分 類 (甲)	口 径 径 径 (cm)	厚 (mm)	器形・文様	器面調整	素地・焼成・混和材	器色	地区・グリット・層 ・道幅・台番番号
第13 図版 92	口	V類	1	14.4 —	5	口縁は外側に大きく面を外反する。口料を三角状に肥厚させ、端部に沈線を描いている。(新里Ⅰ式c12C前平)	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗赤 焼成：良い 混和材：白色(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA③ R17 Ⅱ 台3093
			2	12.1 —	5	口縁は外側に大きく面を外反する。口料を三角状に肥厚させ、端部に沈線を描いている。(新里Ⅰ式c12C前平)	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗赤 焼成：良い 混和材：白色(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA③ T17 Ⅱ S-35 台1942
			3	10.6 —	6	長頸の外側に骨かに開く外反口縁。口料は丸く内面に肥厚し、考えられる「十」字文が地かいている。(新里Ⅰ式c14C前平)	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：茶・黒・白(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA③ B16 Ⅱ 台3139
			4	13.9 —	6	外に開く直口口縁。口料の断面形態は四角状。(新里Ⅰ式c14C前平)	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：明灰 裏：明灰	HA③ S17 Ⅱ 台1994
			5	8.5 —	6	骨かに開く外反口縁。長頸で比較的口径の小さい器である。口料は丸い。(新里Ⅰ式a14 Ⅱ型前平)	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗灰 焼成：良い 混和材：白色(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA③ C19 Ⅱ 祝院 台1644
			6	—	7	胴部から「く」の字状に屈曲する頸部片である。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：暗茶 裏：暗茶	HA③ A14 Ⅲ下 S-11 台4259
			7	—	7	肩の張った器形。頸部直下に二条の沈線文で区画した三条波線文を描いている。頸部片。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：灰 焼成：良好 混和材：白・黒・光(細)	表：灰 裏：灰	HA③ D9 Ⅰ 台1310
			8	—	9	肩の張った器形。頸部直下に沈線の一条波状文を描いている。頸部片。	表：ナデ 裏：ナデ・平行	素地：灰・茶 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：灰 裏：灰	HA② G4 Ⅱ 名産館 台1742
			9	—	6	胴部には「く」の字状に屈曲。口縁に向かい外に開く。肩は今や平張る。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：灰 焼成：良好 混和材：白石灰(細)	表：暗赤 裏：灰	HA③ A15 Ⅱ 台1425
			10	—	5	胴部には「く」の字状に屈曲。肩は平張る。頸部片。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗赤 焼成：良い 混和材：白色(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA① M12 Ⅲ 台21
			11	—	4	肩の張った小型器が考えられる。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：白色(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA③ F2 Ⅱ 名産館 台1680
第13 図版 93	胴	V類	12	—	9	肩が張り器壁は比較的厚め。	表：ナデ 裏：積痕指 圧痕ヘラ削	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：灰 裏：灰	HA③ E10 Ⅰ 台1380
			13	—	5~10	胴部、表面に叩打による平坦面が認められ、器壁は叩打ではない。	表：平行ナデ 裏：平行ナデ	素地：明灰 焼成：良好 混和材：白(細)	表：明灰 裏：明灰	HA② T19 Ⅱ 802 台529
			14	—	4~7	胴部、表面に叩打による平坦面が認められ、内面に粘土積の積痕が認められる。	表：平行・綾杉 裏：格子・ヘラ削	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白(微)	表：暗灰 裏：暗灰	HA② I 台658
			15	—	5	胴部、二条の横位沈線。	表：ナデ 裏：格子・ヘラ削	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白(微)	表：明灰 裏：明灰	HA④ K18 Ⅱ 台2651
			16	—	4~5	表面に曲線が確認できるが小片のため波線文になるかは不明。	表：ナデ 裏：ヘラ削・ナデ	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：白(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA④ E10 Ⅱ 台2034
			17	—	7	有軸の波線文、軸から左右に波線が斜め30度の角度で伸びる。小破片のため詳細不明。	表：ナデ 裏：格子・ヘラ削	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白(微)	表：暗灰 裏：暗灰	HA② B1 Ⅱ上 802 台590
			18	—	5~6	丸味のある胴上部片、内面に粘土積痕が認められる。	表：平行・ナデ 裏：格子・ナデ	素地：明灰 焼成：良好 混和材：白(微)	表：明灰 裏：明灰	HA④ H16 Ⅲ 台2374
			19	—	5~6	丸味のある胴上部片。	表：平行・ナデ 裏：格子・ナデ	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：明灰 裏：明灰	HA④ P20 Ⅱ 台2892
			20	—	5	丸味のある胴上部片。	表：平行・綾杉・ナデ 裏：格子・ヘラ削	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白(微)	表：暗灰 裏：暗灰	HA④ O19 Ⅲ 台2865
			21	—	3~4	丸味のある胴上部片。	表：平行・ナデ 裏：格子・ヘラ削	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白(細)	表：明灰 裏：明灰	HA① O14 Ⅲ 台29
			22	—	7	丸味のある胴上部片。	表：平行・ナデ 裏：ヘラ削	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白(細)	表：暗灰 裏：明茶	HA② C19 Ⅱ 802 台1393
第13 図版 93	胴	I類	23	—	3	丸味のある胴上部片、積痕が認められる。	表：平行・綾杉 裏：平行・ヘラ削	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白(微)	表：明灰 裏：明灰	HA④ I 台4591
			24	—	7	丸味のある胴上部片。	表：綾杉 裏：ヘラ削	素地：茶 焼成：良好 混和材：白・黒(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA③ B13 Ⅱ S-20 台2203
			25	—	6~7	丸味のある胴上部片。	表：ナデ 裏：平行・ヘラ削	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白(微)	表：暗灰 裏：暗灰	HA④ Q09-Q11 Ⅱ 台2900
			26	—	—	胴下部、甲き調整が行き届き器壁は薄い。	表：平行・綾杉 裏：格子	素地：暗灰 焼成：良い 混和材：白・黒(細)	表：暗茶 裏：暗灰	HA③ S20 Ⅱ 台3171
			27	—	5~6	胴下部、甲き調整が行き届き器壁は薄い。	表：平行・ナデ 裏：綾杉・ナデ	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白・黒(微)	表：明灰 裏：明灰	HA③ G17 Ⅱ 台2278
			28	—	0.6	胴下部、甲き調整が行き届き器壁は薄い。	表：平行・ナデ 裏：平行・ナデ	素地：暗赤 焼成：良好 混和材：白(微)	表：赤 裏：赤	HA④ O15 Ⅱ 00105D 台140
			29	—	7.5	胴下部、器壁は比較的厚めで凹凸が見られる。	表：平行・ナデ 裏：平行・ヘラ削	素地：明茶 焼成：良好 混和材：白・黒・光(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA④ 06-L06 台2528
			30	—	10	胴下部、器壁は比較的厚め。	表：ナデ 裏：平行・綾杉	素地：暗灰 焼成：良好 混和材：白(細)	表：暗灰 裏：暗灰	HA④ E10 Ⅱ 台2037
			31	—	6~10	底面からぐびれ気味に立ち上がる。内面に積み痕が確認できる。	表：ナデ 裏：ナデ	素地：明灰 焼成：良好 混和材：白(微)	表：明灰 裏：明灰	HA② G1 Ⅱ 瓦厨 台1037



第131図 カムイヤキ1



図版 92 カムイヤキ 1



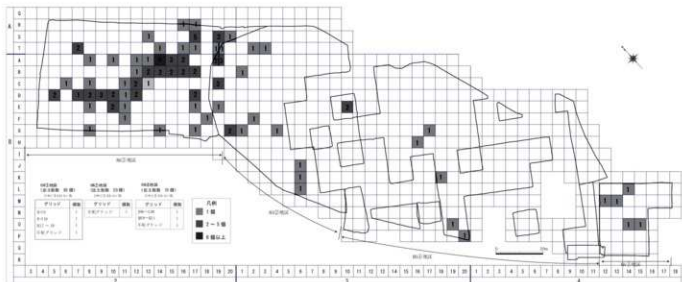
第132図・図版93 カムイヤキ 2

第71表-2 カムイヤキ 観察一覧

図版 図号	部位 番号	分類 (明)	口縁 直径 (cm)	厚 (mm)	器形・文様	器面調整	素地・焼成・混和材	器色	地区・グリット・層・遺構・台帳番号
第132 図・図版 93	32	Ⅱ類	8.4	6~9	上げ底の平底、直線内に関き立ち上がる。外底面から1~2cm程の高さから積みぬが現れる。器内は中央がやや厚く縁に向かい薄くなる。内底立ち上がりの内側は窪む。	表：平行・ナデ裏：格子・ナデ	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白（微）	表：暗灰黄：暗灰	HA② J6 Ⅱ 名座 台2632
	33	V類	13.6	6~10	外底及び底部側面は研磨仕上げ、外底面は上げ底。	表：平行・ナデ裏：へら削り	素地：暗茶 焼成：良好 混和材：白（微）	表：暗灰黄：暗灰	HA② C20 Ⅱ 瓦組 台935
	34	V類	10.4	8~14	門型にした粘土に粘土網を積み上げている。底面扁平。	表：へら削り裏：へら削り	素地：明灰 焼成：良好 混和材：白（微）	表：明灰黄：明灰	HA③ A15 Ⅱ 台1434
	35	V類	—	11	平底。外側面はへら削りし底面から2cm高に積みぬが、内面はへら削りで仕度を残さない外底面扁平。	表：ナデ裏：へら削り	素地：暗灰・茶 焼成：良好 混和材：白・黒（微）	表：暗灰黄：暗灰	HA③ D11 Ⅱ 台3248
	36	Ⅳ類	—	3.5	平底で腰部が僅かに抉れる。胴部は逆「八」の字状に外に関き立つ。外底面から2.5cm程の高さから積みぬが現れる底面の器内は薄くなる。	表：ナデ裏：平行・ナデ	素地：灰・暗茶 焼成：良好 混和材：白・黒（微）	表：灰黄：暗灰	HA③ A14 Ⅲ下 S-11 台116
	37	把手	—	—	楕円の長方形把手、巾2.2cmで断面形態は方形。貼付部に向かい薄く広がる平面の横軸の中央に溝状の凹みを設けている。内面は横の溝を一方に寄せている。	表：ナデ裏：ナデ	素地：赤 焼成：良好 混和材：白（微）	表：明灰黄：明灰	HA① L14 Ⅲ 台24

第72表 カムイヤキ 出土量

地区	層	遺構	口縁部			胴部						把手	底部	合計	
			11c後		14c前	11c~14c									
			I式	VI式	VI式	I類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	V類	Ⅵ類				
HA③	I	遺構				2	3	2	2	1			3	13	
		II	1		1	2	1	1	4				2	13	
		III	1	3		8	7	7	10	7	1		3	47	
		III下				1			1					2	8
		小計	2	3	1	14	9	11	14	17	2		10	83	
HA②	I	II上			1			6	1	2	1		3	15	
		小計	1			2	1			1			4	4	
		小計	1			3	2	6	1	2	2	3	20		
HA④	I	II			1								1	1	
		小計				2	2	1	2	2	2		9	9	
		小計				3	2	1	2	2	2		10	10	
HA①	I	III			1								1	1	
		III下				1					1	1		3	
		遺構						1						1	1
		小計				2	1				1	1		5	
合計			2	4	1	22	14	18	17	19	7	1	13	118	
部位別計			7			97						1	13		



第133図 カムイヤキ 平面分布

(16) 土器

貝塚時代後期、グスク時代、その他先島系と思われる土器が総数 4069 点出土し、第 73 表に全体の出土量を示した。小破片が多く、2.5cm 以下は分類から除外し、2913 点を対象とした。時期別には貝塚時代後期の土器が最も多く、次にグスク時代の土器と続く。地区別には HA ③ 出土が主で、中でも貝塚時代後期の土器が約 7 割を占める。次に多い HA ② では、貝塚時代後期土器とグスク土器がほぼ半々の出土である。層位的には HA ②・③ はⅡ層出土、HA ④ はⅡ・Ⅲ層から同数の出土、HA ① はⅢ層出土が多いなど、地区ごとに若干の違いが見られた。HA ②・③ ではグスク時代・貝塚時代後期の遺物の大半がⅡ層出土であることから、攪乱を受けているものと思われる。以下、時期別に記述する。

第 73 表 土器全体 出土量

地区	層	後期系						グスク			先島系			不明			合計
		口	胴	底	口(胴)	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	
HA③	I	11	108	17	3	20	3	1	4	2	1	2				66	240
	Ⅱ	64	666	127	20	237	30	3	28	4	2	34	4	405	1	1625	
	Ⅲ	5	70	12	3	18	2		11	2		4				97	224
	Ⅳ	1	15	3		7			2			1				7	36
	不明		8													9	17
小計	81	867	159	26	282	37	4	45	8	3	41	4	584	1	2142		
HA②	I	4	26	1	4	10	2		1			3			3	52	
	Ⅱ	36	338	37	21	265	38	1	14	1		34	3	304		1092	
	Ⅲ	6	37	2	5	28	4	1	2			2		45		132	
	Ⅳ	2	5	3	1	2	1							5		19	
	不明											1				1	
小計	48	406	43	31	305	43	2	18	1		39	3	357		1296		
HA④	I	1	3			1									4	9	
	Ⅱ	2	59	9		31	1		16	2		1	1	42	164		
	Ⅲ	7	49	16	2	50	4	6	14	1		1		76	226		
	Ⅳ	2	19	2		2						1		5	31		
小計	12	130	27	2	84	5	6	30	3		3	1	127	430			
HA①	I		2			1									12	15	
	Ⅱ	1	1												1	3	
	Ⅲ	11	28	7	5	31	2				1	16		62	163		
	Ⅳ	1	1			1								4	7		
小計	13	32	7	5	33	2				1	16		79	188			
不明	1	1	1		1						1			8	13		
合計	155	1436	237	64	705	87	12	93	12	4	100	8	1155	1	4069		
分類別計		1828			856			117			112		1156				

1. 貝塚時代後期 (第 137 図 1 ~ 第 139 図 93)

貝塚時代後期の土器が 1828 点得られ、分類した土器の 62.8% の割合を占める。第 135 図に示した平面分布を見ると、遺跡のほぼ全域で出土しており、その中でも HA ③ 出土が最も多く、特に S-640 (自然流路) を境に北側での出土が目立つ。その他、HA ② 榎女殿内からの出土も多く、隣接する平安原 B 遺跡 (2015) HB ② 口で出土したくびれ平底との関連性が考えられる。層位的には貝塚時代後期の砂層と考えられるⅣ層からの出土は少なく、攪乱からの出土が殆どであるが、平面分布ではまとまりが見られた。僅かに尖底系の土器も出土するが、大半はくびれ平底系の土器で、貝塚時代後期後半の時期に相当する。第 74・76 表に観察一覧をまとめ、口縁部・底部の順に記述する。胴部は 1436 点と多量に得られたが、小破片が多く、主なものは口縁部の項で記述した。その他の胴部は、口縁部の出土量からその大半がくびれ平底系に属すると思われる。<口縁部>

口縁部は 155 点が出土し、Ⅰ～Ⅲ類に分けた。胴部の一部もここで記述する。

Ⅰ類 (浜屋原式土器)

Ⅰ類は僅か 4 点が出土し、図 1～3 に口縁部 3 点を図示した。3 点とも鉢形で口縁部は外反する。胎土や混和材もほぼ同じである。出土地は HA ① L15、HA ② R 7・E20 とばらつく。

Ⅱ類 (大当原式土器)

Ⅱ類も僅か 3 点の出土で、口縁部 2 点・胴部 1 点を図 4～6 に図示した。いずれも薄手で粘土積み痕が明瞭である。図 4 は HA ② T6、図 5 は HA ② T 7 (SK277) と出土地が近いが、層位は前者がⅡ層、後者はⅢ層の遺構出土である。

Ⅲ類 (くびれ平底系土器)

Ⅲ類はくびれ平底系の口縁部で、アカジャンガー式土器とフェンサ下層式土器をまとめたものである。貝塚時代後期土器の主体となるもので、無文・泥質が多く、有文は少量であることから、殆どはフェンサ下層式土器と思われる。遺跡全体から出土するが、中でも HA ③ S17 が最も多く、その周辺のグリッドからも出土が目立つ。口縁部は 132 点が出土し、

<底部>

総数 237 点が得られた。尖底・乳房状尖底・丸底・平底・くびれ平底が出土し、第 134 図に分類別出土量を円グラフで示した。貝塚時代後期前半の尖底や乳房状尖底は少なく、後半のくびれ平底が 91% を占め、口縁部の出土状況ともほぼ一致する。その他、底厚がより厚い杯?と思われる底部やミニチュア土器の底部も 1 点ずつ出土した。第 135 図の平面分布を見ると遺跡のほぼ全域から出土し、尖底や乳房状尖底は口縁部の I・II 類、くびれ平底は口縁部の III 類の底部が想定される。第 76 表に個々の観察一覧を示した。以下、順に記述する。

尖底

尖底は僅か 6 点の出土で、4 点を図示した。形状の違いにより a:外底が尖るもの(図 38)、b:丸を呈するもの(図 39)、c:外底が平らなもの(図 40・41)に分類される。

乳房状尖底

乳房状尖底は 10 点と少なく、図 42~48 に 7 点を図示した。出土数は少ないが、様々な形状が見られ a~c に分類される。a は乳頭部が小振りで低く、b は乳頭部が中振りで低く、c は乳頭部が大振りで高い。a は図 42 に 1 点、b は図 43~45 に 3 点、c は図 46~48 に 3 点を図示した。図 46 は底厚がより厚く、図 48 は乳頭部がより大きい。

丸底

丸底は 1 点のみ得られ、図 49 に図示した。若干くびれて丸みを帯びながら立ち上がる。

平底

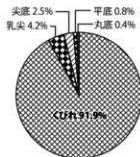
平底は僅か 2 点の出土で、図 50 に 1 点を図示した。薄手で堅致である。

くびれ平底

くびれ平底は 216 点と最も多く得られ、図 51~91 に 41 点を図示した。出土数が多いことから底厚を中心にくびれの強弱を組み合わせて以下のように分類(第 75 表)を行った。

底厚が厚い(1.4cm以上)ものは 2 種に分け、くびれが弱いものは a、強いものは b とした。a は図 51~60 に 10 点、b は図 61~63 に 3 点を図示した。胎土は a・b とも砂質・砂泥質が多い。大半は立ち上がりの角がやや丸みを呈するが、図 53・54 はシャープである。図 58 の外底は薄い粘土を貼付し、やや丸みを呈する。

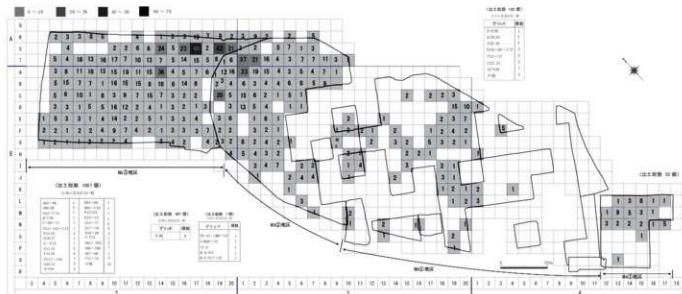
底厚が薄い(1.2cm以下)のものも 2 種に分け、くびれが弱いものは c、強いものは d とした。c は図 64~81 に 18 点、d は図 82~91 に 10 点を図示した。図 80・81 の 2 点は外底の立ち上がり部に細かい打刺痕が見られ、色調も他と異なることから二次加工の可能性が考えられる。図 91 の外底には楕円状の粘土が 5 カ所に貼付され、煤が付着している。胎



第 134 図 底部分類別出土量

第 75 表 くびれ平底 底径・底厚の関係 (cm)

分類	底径	底厚					計
		4.0 以下	4.1 5.0	5.1 7.0	6.1 7.0	7.0 以上	
厚手 (a・b)	2.0 以上	3	3	1			7
	1.4 ~ 1.9	5	13	17	4	3	42
薄手 (c・d)	1.0 ~ 1.2	5	4	28	10	7	54
	0.6 ~ 0.9	5	11	23	17	15	57
	0.5 以下	1	3	4	2	4	17
	不明			7			9
合計		19	34	80	33	26	216



第 135 図 後期土器 平面分布

第76表 後期土器(底部) 観察一覧

調査 区画	遺物 種類	分期	形状	底径 (cm)	底厚 (cm)	胎土 質	胎土 含率	石 質	光 (黒)	赤 色 部	磨 蝕	色 色 内 外	器 底 調整 内 外	地区・ヤナシ・層 遺物・台帳(取)番号			
第38回・ 調査区 95	丸底 平底	丸底	a 外底が尖る	—	1.2	砂	中・少	△	△	△	△	内・灰褐色	外・胎土色(胎)	HA③ S16 Ⅱ 台2318			
			b 外底丸い	—	1.8	砂	中・多	○	△	△	△	内・赤褐色, 内・暗褐色	不明(小破片)	HA① M14 Ⅲ 台00245D 台91			
			c 外底が平ら(底径が3cm以下)	2.0	1.0	硬砂	中・少	○	△	△	△	内・赤褐色	外・胎土色	HA② T8 Ⅱ 台879			
		乳状皮 丸底	a	乳胎部小・低い・外底平ら	1.8	1.0	硬砂	中・多	△	△	△	△	黒	外・赤褐色, 内・茶褐色	外・胎土色	HA③ T7 Ⅱ 台3297	
			b	乳胎部中・低い・外底平ら	2.5	2.0	砂	中・少	△	△	△	△	△	内・赤褐色	外・胎土色	HA② S0 Ⅱ 取169	
			c	乳胎部中・低い・外底上子底	2.9	1.2	砂	中・少	△	△	△	△	△	内・赤褐色, 内・茶褐色	外・胎土色	HA④ L20 Ⅲ SP1929 台4429	
			a	乳胎部中・高い・外底中央丸い	2.8	1.1	砂	中・少	○	△	△	△	△	外・赤褐色, 内・暗褐色	外・胎土色	HA④ H10 Ⅲ 台2336	
			b	乳胎部大・高い・外底中央丸い	3.4	2.5	砂	中・少	△	△	△	△	△	外・暗褐色, 内・暗褐色	外・胎土色	HA③ R16 Ⅱ 台928	
			c	乳胎部大・高い・外底丸い	3.0	2.0	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	外・灰茶, 内・茶褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ B14 Ⅲ S28 台2308	
			a	乳胎部大・高い・外底丸い	4.0	1.8	砂	中・中	○	△	△	△	△	内・赤褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA② S4 Ⅰ 台2546	
第38回・ 調査区 95	丸底 平底	丸底	外底平・立ち上がり丸	5.6	1.1	砂	中・多	○	○	○	○	○	内・赤褐色	外・胎土色	HA④ G15 Ⅲ 台2269		
			外底平・立ち上がり丸	5.8	0.5	硬砂	中・中	○	○	○	○	○	○	内・赤褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA④ G15 Ⅲ 台2267	
			くびれ弱・底厚が厚い	4.4	1.6	砂	中・多	○	○	○	○	○	○	外・淡茶, 内・灰茶色	外・胎土色, 内・胎土色	HA④ C17 Ⅲ 台1977	
			くびれ弱・底厚が厚い	5.0	1.7	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・茶褐色, 内・赤褐色	外・胎土色	HA④ F12 Ⅲ SP807 台3803	
			くびれ弱・底厚が厚い	5.0	2.0	砂	中・少	△	△	△	△	△	△	内・赤褐色	外・胎土色	HA③ D10 Ⅰ 台601	
			くびれ弱・底厚が厚い	4.5	1.5	砂	中・中	△	△	△	△	△	△	外・赤褐色, 内・灰褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ F18 Ⅱ S10 台2518	
			くびれ弱・底厚が厚い	5.0	1.8	砂	中・中	△	△	△	△	△	△	外・赤褐色, 内・暗褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ C6 Ⅱ 台1334	
			くびれ弱・底厚が厚い	5.0	1.5	砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・茶褐色, 内・茶褐色	外・胎土色, 内・茶褐色	HA③ A14 Ⅱ 台1423	
			くびれ弱・底厚が厚い	5.4	2.0	砂	中・中	△	△	△	△	△	△	光	外・胎土色, 内・暗褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ AF Ⅲ S528 台2767
			くびれ弱・底厚が厚い	5.4	1.5	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・灰茶, 内・暗褐色	外・胎土色	HA② H20 Ⅲ 取192	
第38回・ 調査区 95	丸底 平底	丸底	くびれ弱・底厚が厚い	6.6	1.7	砂	中・少	△	△	△	△	△	外・淡茶, 内・黄茶色	外・胎土色, 内・胎土色	HA② T2 Ⅱ 台408		
			くびれ弱・底厚が厚い	7.0	1.8	砂	中・中	△	△	△	△	△	△	内・赤褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA② G5 Ⅱ 台973	
			くびれ強・底厚が厚い	4.8	1.5	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・灰茶, 内・茶褐色	外・胎土色, 内・茶褐色	HA② A19 Ⅲ 台1530	
			くびれ強・底厚が厚い	5.2	1.8	硬砂	中・中	△	△	△	△	△	△	外・淡茶, 内・黄茶色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ E10 Ⅱ 台742 HA③ D10 Ⅰ 台601	
			くびれ強・底厚が厚い	5.3	1.8	砂	中・中	△	△	△	△	△	△	内・赤褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ S20 Ⅱ 台1166	
			くびれ弱・底面楕円状・底厚薄い	4.8 (5.3)	1.0	砂	中・少	△	△	△	△	△	△	内・暗褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA② L6 Ⅱ 取12	
			くびれ弱・外底中央上子底・底厚薄い	4.8	0.9	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・赤褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA① L15 Ⅲ 下0025D 台130	
			くびれ弱・底厚が厚い	5.1	1.2	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・赤褐色	内・灰褐色	HA④ F15-17 Ⅲ 台4566	
			くびれ弱・内底隆・底厚が厚い	6.0	1.2	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・淡茶, 内・灰茶色	外・胎土色	HA③ C13 Ⅱ 台1137	
			くびれ弱・底厚薄い	5.8	0.7	硬砂	中・中	△	△	△	△	△	△	内・赤褐色	内・胎土色	HA④ H16 Ⅲ 台2369	
第38回・ 調査区 95	丸底 平底	丸底	くびれ弱・底面楕円・底厚薄い	4.8 (5.3)	0.9	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	内・赤褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ A11 Ⅱ 台2805		
			くびれ弱・外底上子底・底厚が厚い	5.6	1.2	硬砂	中・中	△	△	△	△	△	△	外・赤褐色, 内・赤褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA② C19 Ⅱ 台1656	
			くびれ弱・底面楕円・底厚薄い	5.5 (6.0)	1.0	砂	中・中	○	○	○	○	○	○	外・胎土色	外・胎土色, 内・胎土色	HA④ L20 Ⅱ 台2734	
			くびれ弱・底厚薄い	6.0	—	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・暗褐色, 内・茶褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA④ D10 Ⅱ 台2004	
			くびれ弱・外底中央上子底・底厚薄い	6.0	0.9	泥	中・少	△	△	△	△	△	△	外・灰茶, 内・淡褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ B10 Ⅰ S37 台1952	
			くびれ弱・底厚薄い	6.3	0.8	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・淡褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ D② Ⅲ SK094 台2277	
			くびれ弱・底厚薄い	6.4	0.7	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・橙, 内・灰茶褐色	内・胎土色	HA④ M-N19 Ⅲ S15 台3242	
			くびれ弱・外底窪付・底厚薄い	6.8	0.9	砂	中・多	○	○	○	○	○	○	外・桃色, 内・灰茶色	外・胎土色, 内・胎土色	HA② T2 Ⅱ 台408	
			くびれ弱・底厚が厚い	7.0	1.1	泥	中・中	○	○	○	○	○	○	内・赤褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA④ A18 Ⅱ 台1419	
			くびれ弱・中央上子底・底厚が厚い	7.2	1.1	砂	中・多	△	△	△	△	△	△	黒	外・赤褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA④ I15 Ⅲ SP1811 台4375
第39回・ 調査区 96	丸底 平底	丸底	くびれ弱・外底上子底・底厚薄い	7.8	0.8	泥	中・多	○	○	○	○	○	△	外・赤褐色, 内・淡赤色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ G16 Ⅳ 台2184	
			くびれ弱・底厚が厚い	5.4	1.2	砂	中・多	○	○	○	○	○	○	内・淡褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ G4 Ⅱ 台1404	
			くびれ弱・底面楕円・底厚薄い	6.4	1.0	砂	中・中	○	○	○	○	○	○	外・茶褐色, 内・暗褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ D8 Ⅰ 台602	
			くびれ強・底面楕円・底厚薄い	5.2 (4.8)	1.0	泥	中・少	△	△	△	△	△	△	外・赤褐色, 内・灰褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA④ E10 Ⅱ SD52 台32186	
			くびれ弱・底厚が厚い	4.4	1.1	砂	中・多	○	○	○	○	○	○	黒	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ F10 Ⅱ 台2993	
			くびれ強・底厚薄い	5.2	1.0	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・黄褐色	内・胎土色	HA② E3 Ⅳ 取104	
			くびれ強・外底打割?底厚が厚い	6.0	1.1	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	外・赤褐色, 内・灰褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA② A2 Ⅱ 台480	
			くびれ強・外底中央上子底・底厚薄い	6.4	0.8	泥	中・少	△	△	△	△	△	△	外・灰茶, 内・灰褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ A11 Ⅲ 台3383	
			くびれ強・底厚薄い	6.4	1.0	砂	中・多	○	○	○	○	○	○	内・赤褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ S20 Ⅱ 台1166	
			くびれ強・底厚薄い	7.2	1.0	泥	中・多	○	○	○	○	○	○	黒	外・赤褐色, 内・赤褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ D4 Ⅱ 台1371
第39回・ 調査区 96	丸底 平底	丸底	くびれ強・底厚薄い	7.4	0.9	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	外・赤褐色, 内・灰褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA② T7 Ⅱ 台2128		
			くびれ強・底厚薄い	6.5	0.6	泥	中・少	△	△	△	△	△	△	外・桃色, 内・灰褐色	外・胎土色, 内・胎土色	HA③ T10 Ⅱ 台1332	
			くびれ強・底厚薄い	7.8	0.5	泥	中・少	△	△	△	△	△	△	内・赤褐色	内・胎土色	HA③ S20 Ⅱ 台3758	
			くびれ弱・底厚が厚い	4.0	4.6	硬砂	中・少	△	△	△	△	△	△	内・赤褐色	内・胎土色	HA② T5 Ⅱ 台2592	
			くびれ弱・立ち上がり丸・底厚薄い	3.2	0.8	砂	中・少	△	△	△	△	△	△	内・淡赤色	外・胎土色	HA③ B1 Ⅲ S-11 台3519	

凡例 (○) = 非常に多い, (○) = 多い, (△) = 少ない, (△) = 僅少

土はc・dとも砂質・砂泥質・泥質があり、後者が最も多く見られる。

第75表に底厚と底径の関係を示した。底厚の厚手・薄手共にくびれの強弱が見られることから、a・bを厚手、c・dを薄手としてまとめた。厚手は1.4～1.9cm、2.0cm以上、薄手は1.0～1.2cm、0.6～0.9cm、0.5cm以下の底厚に分けた。厚手が49点、薄手が151点と後者が70%も占め、くびれ平底の主体となる。底径は厚手・薄手とも5.1～6.0cmが80点と最も多い。詳細に見ると、厚手は底厚1.4～1.9cmが42点と圧倒的に多く、底径は4.1～6.0cmに収まるものが大半である。中には底厚が2.0cm以上のより厚手も見られ、底径は4.0～5.0cmと小型化する。薄手は底厚0.6～0.9cmが76点と多く、底径は5.1～6.0cmが主流となるが、4.1～7.1cm以上も多い。底厚1.0～1.2cmのものも底径は5.1～6.0cmが多く、次いで5.1～6.0cmと続く。全体的に厚手は底径が小さく、薄手は小～大サイズまで見られる。

その他

上記の分類より外れる2点を92・93に図示した。

図92は底径4cm、底厚が4.6cmとより厚い平底である。形状は坏が想定されるが、類例がなく不明である。外底より約1.5cm上の箇所には孔が見られ、貫通している。HA②T5Ⅱ層出土である。

図93はミニチュア土器である。底部は僅かにくびれ、胴部は余り張らない。口縁部は破損し、調整は丁寧である。HA③T14S11(石組遺構)Ⅱ層出土である。

2. グスク時代(第139図94～第141図162)

グスク時代の土器が総数856点出土し、分類した土器総数の29.4%の割合を占める(第73表)。HA②・③では貝塚時代後期の土器とグスク時代の土器が共にⅡ層出土、HA①ではいずれもⅢ層出土が多く見られた。胎土を見ると砂泥質や泥質が多く、白色粒を混和するものが殆どであるが、僅かに白色粒以外の混和材が見られるものもある。また、白色粒が細・中粒で少・中量(胎土分類:ハa)、粗粒で多量(胎土分類:ハb)に含む2タイプの胎土があるが、後者の一部は形状などの特徴からグスク土器の範疇より外し、先鳥系の土器へ含めた遺物もある。第136図の平面分布ではHA②G1で最も多く出土し、その周辺での出土も割と見られる。近くのHA②H5からグスク時代の人骨が出土する。次に出土量の多い箇所はHA③S17、HA②A20周辺である。グスク時代の土器と関連性の強いカムイヤキはHA③のA14辺りで多く出土し、HA②G20・1出土の土器とも見られ、グスクの土器と出土状況がほぼ一致する。古手の青磁・白磁もその南側でまとまりを見せる。第77表に胎土分類別出土量、第136図に平面分布、第78・79表に観察一覧を記す。口縁部から順に記述する。

<口縁部>

口縁部は頸部も合わせて64点が出土し、鍋・碗・甕・壺形の器種が得られた。胴部の胎土分類に合わせて見ると、Cハa(泥質・白色粒主体)、Bハa(砂泥質・白色粒主体)が殆どで、器厚は大半が5.1～8.0cmに収まる。以下、滑石混入多量、横耳などの特徴的な胴部もここに含めて器種別に記述する。

鍋形:29点が得られた。本遺跡出土の土器では最も多い器種で、a:多量の滑石混入、b:把手貼付、c:羽釜形、d:その他(把手無し)に細分して記述する。今回得られた鍋形は完形が無く全て破片で、dの中にはbが含まれる可能性も考えられる。1点のみ得られた碗形(図111)もここに含めた。

aは2点のみが出土し、図94・95に図示した。前者は口縁部で、外面に粘土を貼付し、若干膨らみを呈する箇所が見られる。後者は胴下部で、若干器厚が上下で異なる。滑石が多量に混入され、手触りが滑らかである。

bも出土量が少なく、8点を図示した。把手には縦長方形と横耳があり、前者は図96～100、後者は図101～103である。前者の図96は明瞭な縦長方形、図97・98はやや崩れた縦長方形、図99・100は方形が崩れて小さな略円形を呈する。大半が胎土に石英・砂粒を含み、図96・98は両面に滑石が少量塗布されている。後者の図101は口唇部と平行に小型の横耳が貼付される。白色粒を多量に含み、4mmと薄手である。図102・103の2点は大型の横耳把手で、胴部のみが得られた。前者は器厚が0.5cmと薄手、後者は0.8cmとやや厚手である。また、後者は粗い白色粒を多量含んでおり、先鳥系の土器Aと類似の胎土を呈するが、本町の後兼久原遺跡(2003)・宜野湾市の大山前門原第二遺跡(1999)等での出土例や、それらと形状が類似すること等からグスク土器に含めた。

cは図示した図104・105の2点のみが得られた。図104は口縁部上端から約2cm以下の箇所貼付され、図105は前者に比べて若干幅狭の罎である。

dは最も多く得られ、図106～115に10点を図示した。口唇部には舌状・角・丸があるが、内側の強弱度との相関関係は見られない。胎土と混和材を見ると、砂泥質・泥質が多く見られ、白色粒を含むものが多い。図110の口縁部内面には煤が見られる。図111は推算口径が12.8cmと小さく、碗形と思われ、鍋以外の用途が考えられる。1点のみの出土

で、今回は銅形の項で記述した。類例として糸数城跡（1991）・銘苅原遺跡（1997）がある。

壺形：16点の出土で、図116～118の3点を図示した。いずれも破片が小さく、全形は窺えない。

甕形：12点が得られ、全て図示した。壺はいずれも短頸で、a：口縁部が外反するもの、b：直状を呈するものに細分した。前者は図119～124に図示した。頸部の屈曲部が内面側に強く張り出し、厚くなるものも見られる。後者は図125～130に図示した。頸部が直角に折れ曲がり、胴部は張るものと思われる。

その他、器種不明のものが7点得られている。

第77表 グスク土器（胴部）胎土分類別出土量

器厚	胎土 = 混和材										A = 砂質				B = 砂泥質				C = 泥質				不明			合計	
	イ	ロ	ハ	ハ	ハ	ニ	ホ	ヘ	イ	ロ	ハ	ハ	ハ	ニ	ホ	ヘ	イ	ロ	ハ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ		ハ
① 5.0mm下	1							2		1	12			2	2		53		1	2			1				77
② 5.1～8.0mm	2	1	38			4	7	2	3	1	104			3	17	6	267		11	5					1	1	473
③ 8.1～10mm	2		11	2	1	3	1	1		19	1		1	1	50	5	2										100
④ 10.1mm以上				1		2	2	1		1	4			1		1	2										15
不明				1						3	13	2				8					5	2					6
合計	5	1	50	3	5	14	5	9	1	149	7	5	21	7	379	7	19	7	2	1	1	1	1	1	1	6	705
胎土別計				83							199						415									8	705

< 胴部 >

胴部は705点の出土で、小破片が多く、大半が銅形の胴部片と思われる。第77表に器厚・胎土・混和材の組み合わせで分類を行った。器厚は①：5.0mm以下の薄手、②：5.1～8.0mmの中間、③：8.1～10.0mmの厚手、④：10.1mm以上の厚手、胎土はA：砂質、B：砂泥質、C：泥質、混和材はイ：滑石混入、ロ：黒色粒主体、ハa：白色粒（薄手・やや細粒）主体に石英・赤粒、ハb：白色粒（厚手・粗粒）主体に石英・赤粒、ニ：赤色粒主体に白・砂粒、ホ：砂粒主体

第78表 グスク土器（口縁部・胴部）観察一覧

第四期後	器厚	分類	器種	部位	形状・特徴	口縁	胎土	粒度	石	赤	白	滑	滑	他	器色	器面調整	地味・ケラミド・層		
								含量	混入	混入	混入	混入	混入		外・内	表・裏	構成・取付番号		
390期前・開	94	a	銅	口	内湾・口唇部短広・滑石多量	30.0	砂	中・多			△	○	○	○	青	外・黒茶、内・焼灰褐色	内外・器面調整	HA ② J5 Ⅱ 台2823	
	滑石多量・手触り当所				—	砂	細・多	△					黒	外・焼灰、内・白灰褐色	内外・打	HA ③ A14 Ⅲ下 S11 台4266			
	把手胎付（縦長方形・厚端）				—	砂	細・中	○	△	△					外・茶褐色、内・褐色	内外・打	HA ③ A14 Ⅲ 台2951		
	把手胎付（縦長方形・やや斜傾）				—	砂	細・中	○	○	△					内外・茶褐色	内外・打	HA ② I 台789		
	把手胎付（縦長方形）				—	砂	細・少	△	△	△					内外・茶褐色	内外・器面調整	HA ③ B16 Ⅲ 台3139		
	95	b	口	把手胎付（短円形・小）	—	砂	細・少	△	△		黒	外・赤褐色、内・黄褐色	内外・打	HA ③ S2 Ⅱ 台955					
	把手胎付（短円形・小）			—	泥	中・中	△	△	△		茶	外・灰茶、内・灰褐色	内外・打	HA ③ S17 Ⅲ 台3105					
	口唇部平・把手胎付（口唇横に耳）			22.8	泥	粗・多	△	△	△				内外・焼灰褐色	内外・器面調整	HA ③ T1 Ⅲ 台343				
	大型把手胎付（横耳・短円）・薄手			—	砂	粗・多	△	△	△				内外・茶褐色	内外・打・器面調整	HA ③ A13 Ⅳ 台2148				
	大型把手胎付（横耳・短円）・やや厚手			25.6	（製注）	泥	粗・多	△	△	△				内外・茶褐色	内外・打・器面調整	HA ③ J6 Ⅲ 台1692			
104	c	銅	口	内湾。口唇部平・滑石凸部	—	砂	細・少	△	△					外・赤褐色、内・白灰褐色	内外・打	HA ③ S17 Ⅲ 台1648			
105				内湾（口唇部破損）・滑石凸部	—	砂	中・中	○	○					内外・暗茶褐色	内外・器面調整	HA ③ I14 Ⅲ 台25			
106				内湾（把手無し）・胴部張る・口唇部舌	—	砂	粗・中	○	△	△				外・赤茶、内・暗茶褐色	内外・器面調整	HA ③ M13 Ⅲ 台32			
107				内湾（把手無し）・胴部張る・口唇部舌	—	砂	細・中	○	○	△		黒	外・内・茶褐色	内外・器面調整	HA ③ J6 Ⅲ 台494				
108				内湾（把手無し）・胴部張る・口唇部平	—	砂	粗・中	○	○	△				内外・茶褐色	内外・器面調整	HA ③ C7 Ⅲ 台1255			
109				内湾（把手無し）・口唇平	—	砂	中・中	○	○	△				外・赤褐色、内・暗茶褐色	内外・打	HA ③ C5 Ⅲ 台2492			
110				d	銅	口	内湾（把手無し）・胴部張る・口唇部舌	20.0	泥	細・中	○	△	△				外・赤褐色、内・黒褐色（燻）	外・打 内・打ノ事	HA ③ D8 I 台602
111							内湾（把手無し）・胴部張る・口唇部舌	12.8	泥	中・中	○	○	△				内外・暗茶褐色	内外・打	HA ③ M9 I 台268
112							内湾（把手無し）・胴部張る・口唇部丸	16.4	泥	粗・少	△	△	△				内外・淡褐色	内外・刷毛	HA ③ D20 Ⅲ 台1051
113							内湾（把手無し）・胴部張る・口唇部舌	—	泥	粗・中	○	△	△		黒	内外・淡茶褐色	内外・打	HA ③ D20 Ⅲ 台343	
114	内湾（把手無し）・胴部張る・口唇部丸	—	泥				中・中	△	△	△				内外・淡褐色	内外・打	HA ③ C2 Ⅲ 台563			
115	内湾（把手無し）・口唇部丸	—	泥	粗・中	○	○	△				外・赤褐色、内・灰褐色	内外・打	HA ③ H1 Ⅲ 台1011						
116	e	銅	口	外反・胴部張り出し弱・口唇部丸	—	泥	細・中	○	△	△		茶	外・灰茶、内・暗褐色	内外・打	HA ③ A13-C13 Ⅲ下 台1132				
117				外反・胴部張り出し弱・口唇部丸	19.4	泥	細・小	△	△	△				内外・茶褐色	内外・器面調整	HA ③ A1 Ⅲ 台141			
118				外反・口唇部丸・胴部不明	—	泥	中・少	△	△	△				内外・打・灰褐色	内外・打	HA ③ B7 Ⅲ 台616			
119				外反・短頸・胴部張る・口唇部破損	12.0	砂	細・中	○	△	△		茶	外・赤褐色、内・灰褐色	内外・器面調整	HA ③ B16 Ⅲ 台3136				
120				外反・短頸・胴部張る・口唇部中や舌	18.6	泥	細・少	△	△	△				内外・淡茶褐色	内外・器面調整	HA ③ D20 Ⅲ 台3437			
121				外反・短頸・胴部張る・口唇部丸	14.6	泥	細・中	○	○	△				内外・茶褐色	内外・器面調整	HA ③ T16 Ⅲ 台1507			
122				外反・短頸・胴部張る・口唇部丸	16.0	砂	細・中	○	○	△				内外・茶褐色	内外・器面調整	HA ③ I16 Ⅲ SP1708 台4307			
123				b	銅	口	直・短頸・胴部張る・口唇部破損	15.4	泥	粗・中	○	△	△		茶	外・灰茶、内・淡褐色	内外・器面調整	HA ③ F17 Ⅲ 台1942	
124							直・短頸・胴部張る・口唇部破損	—	泥	粗・中	○	○		黒	外・赤褐色、内・灰褐色	内外・器面調整	HA ③ K6 Ⅲ 台1567		
125							口直・短頸・胴部不明・口唇部丸	20.6	砂	細・中	○	○	△				外・暗茶、内・赤褐色	内外・器面調整	HA ③ A13-C13 Ⅲ下 台1132
126	直・短頸・胴部張る・口唇部破損	—	泥				粗・多	○	○	△		茶	外・暗茶、内・淡褐色	内外・器面調整	HA ③ G8 Ⅲ 台624				
127	直・短頸・胴部張る・口唇部破損	—	泥				細・多	○	○	△				外・灰茶、内・淡褐色	内外・器面調整	HA ③ D19 Ⅲ 台5802			
128	c	銅	口	直・短（短）・短曲部・胴部張る・口唇丸	11.6	泥	中・中	○	△	△				内外・暗褐色	内外・刷毛	HA ③ C1 Ⅲ 台1044			
129				直・短（短）・短曲部・胴部張る・口唇丸	—	泥	中・中	○	○					外・灰褐色、内・暗褐色	内外・器面調整	HA ③ H2 Ⅲ SP130 台2136			
130				直・短（短）・短曲部・胴部張る・口唇丸	—	砂	細・中	○	○					外・赤褐色、内・茶褐色	内外・器面調整	HA ③ E9 Ⅲ 台751			

凡例 ○○=両面にあり、○=多い、△=少ない、△=僅少

に赤粒、へ：石英主体に赤・黒・砂粒、ト：灰色粒主体とし、それらの組み合わせで分類した。全体的に器厚は②が多く、Cの泥質が主体となる。混和材をみると、いずれの胎土もハaの白色粒主体が多く見られ、82.1%を占める。その中で②Cハaが267点（37.9%）と最も多く、次に②Bハaが104点（14.8%）と続く。その他、①・③Cハaと②Aハaが約40～50点前後出土する。口縁部もほぼ同じ状況を見せ、②ハaが本遺跡のグスク土器の主体となる。

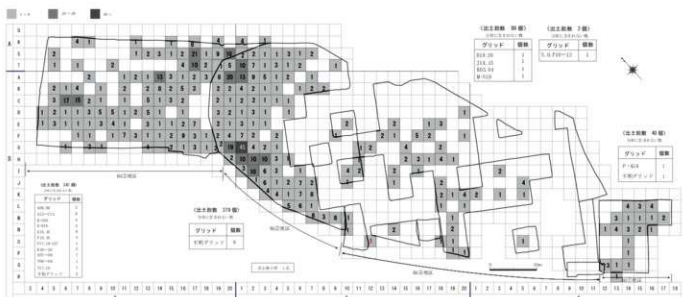
< 底部 >

底部は全て平底で、立ち上がり部の形状により分類した。底径の大きな平底が多く、口縁部の器種で見られた鍋・壺・

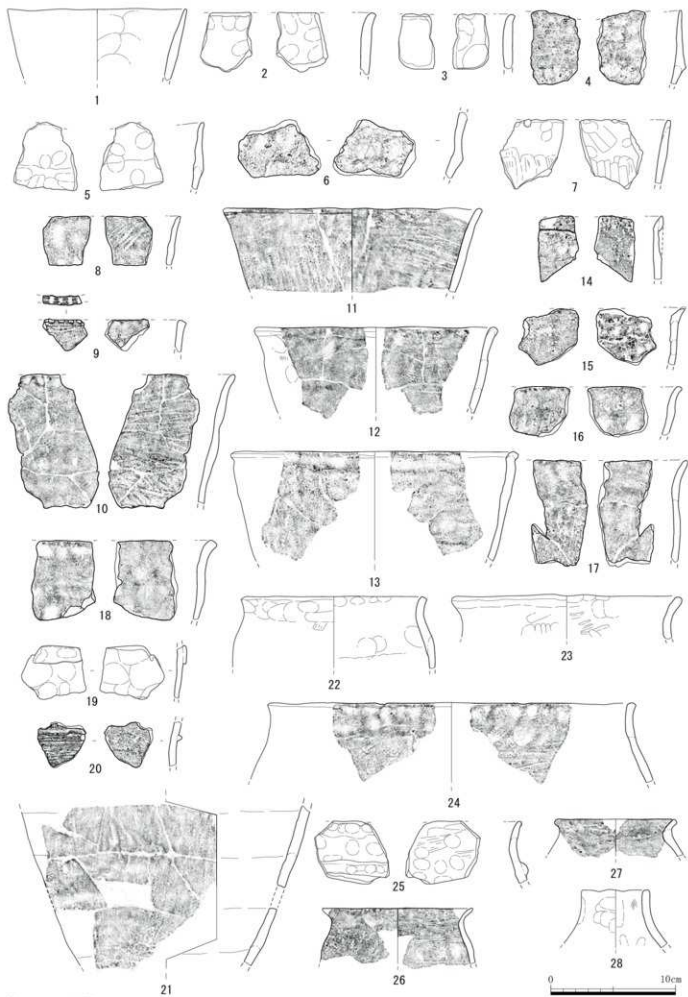
第79表 グスク土器（底部）観察一覧

第49図	調査	分類	形状・特徴	底径 (cm)	底厚 (cm)	胎土	粒度 含量	石英 含有	赤 粒	黒 粒	白 色 粒	他	器種 外内・内面	器厚調整 外内・内面	地区・ゾナド・層 遺跡・台帳（図）番号
第49図・調査97	a	131	立ち上がり丸・胴部やや重る	12.4	0.6	砂灰質	粗・多	△	△	○	△	△	外・黒泥、内・茶褐色	内外・フ	HA③ A15 Ⅱ台 1450
		132	立ち上がり丸・胴部やや重る	11.8	1.0	砂灰質	中・中	△	△	△	△	△	外内・茶褐色	内外・フ	HA③ E5 I台 1897
		133	立ち上がり丸・胴部やや重る	—	0.7	砂質	中・多	△	△	△	△	△	外・赤泥、内・淡茶褐色	内外・フ	HA④ F16 Ⅱ台 2151
		134	立ち上がり丸・胴部やや重る	—	0.7	砂質	中・中	△	△	△	△	△	外・茶泥、内・淡赤褐色	内外・フ	HA③ A20 Ⅱ台 1286
		135	立ち上がり丸・胴部やや重る	14.0	0.7	砂質	中・多	△	△	△	△	△	外内・暗茶褐色	内外・フ	HA① L15 Ⅱ重 0025D台 135
		136	立ち上がり丸・胴部やや重る	—	0.7	砂質	粗・多	△	△	△	△	△	外・黒泥、内・茶褐色	内外・フ	HA③ E6 I台 649
		137	立ち上がり丸・胴部やや重る・小(陶刀)	5.1	0.6	泥	中・中	△	△	△	△	△	外・黒泥、内・灰茶褐色	内外・フ	HA③ A4 Ⅱ台 1634
		138	立ち上がり丸・胴部やや重る	9.0	0.8	泥	中・中	△	△	△	△	△	外・黒泥、内・灰茶褐色	内外・フ	HA③ S19 Ⅱ台 1167
		139	立ち上がり丸・胴部やや重る	19.4	0.8	砂質	中・中	△	△	△	△	△	外・暗泥、内・黄茶褐色	内外・指跡面・フ	HA③ S19 Ⅱ台 3178
		140	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	19.0	1.3	泥	中・少	△	△	△	△	△	外・灰泥、内・茶褐色	内外・フ	HA③ G20 Ⅱ台 1048
		141	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	9.8	0.7	砂	細・中	△	△	△	△	△	内外・灰褐色	内外・フ	HA③ G2 Ⅱ台 1747
		142	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	9.0	0.5	泥	中・少	△	△	△	△	△	外・灰茶褐色、内・灰褐色	外・フ、削り内・フ	HA③ C1 Ⅱ台 1720
		143	立ち上がり角(外底)・内底緩やか 外底、白色粒多量	9.4	1.3	泥	粗・多	○	△	△	△	△	外・灰褐色、内・灰褐色	外・網目内・フ	HA③ C7 Ⅱ台 1335
		144	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	10.0	0.6	泥	中・中	△	△	△	△	△	外・灰泥、内・茶褐色	内外・フ	HA③ L6 Ⅱ台 1267
145	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	8.0	0.5	砂質	中・中	△	△	△	△	△	外・灰泥、内・茶褐色	内外・フ、削り	HA③ F16 Ⅱ台 1962		
146	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	12.0	0.6	泥	粗・多	△	△	△	△	△	外・黒泥、内・淡褐色	内外・フ	HA① L16 Ⅱ重 0025D台 146		
147	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	7.6	0.5	泥	粗・中	△	△	△	△	△	外・暗泥、内・灰茶褐色	内外・フ	HA③ D10 Ⅱ台 625		
148	立ち上がり角(外底)・内底緩やか外底重る?	10.4	0.9	泥	中・中	△	△	△	△	△	外・淡茶、内・灰茶褐色	内外・フ	HA③ G17 Ⅱ S-10 台 2113		
150	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	11.0	1.3	泥	中・少	△	△	△	△	△	外・暗泥、内・灰茶褐色	内外・フ	HA③ E13 Ⅱ台 1144		
151	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	8.0	0.8	泥	中・少	△	△	△	△	△	外・暗泥、内・茶褐色	内外・フ、削り	HA③ G20 Ⅱ台 1046		
152	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	6.6	0.4	泥	細・中	△	△	△	△	△	外・黄泥、内・黄茶褐色	内外・フ	HA③ H1 V Ⅱ重 2224		
153	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	—	0.9	砂質	細・少	△	△	△	△	△	外・黒泥、内・茶褐色	内外・フ	HA③ R7 Ⅱ台 1557		
154	立ち上がり角(外底)・内底緩やか外底重る?	—	0.6	泥	粗・中	△	△	△	△	△	外・暗泥、内・茶褐色	外・フ、内・削り	HA③ T16 Ⅱ台 2707		
155	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	—	0.9	泥	中・中	△	△	△	△	△	外・灰泥、内・茶褐色	内外・フ	HA③ H1 Ⅱ台 1011		
156	立ち上がり角(外底)・内底緩やか 外立ち上がり削り	11.2	0.9	泥	中・中	△	△	△	△	△	外・黒泥、内・暗茶褐色	内外・フ	HA③ G20 Ⅱ台 1049		
157	立ち上がり角(外底)・内底緩やか	16.0	0.5	泥	中・多	△	△	△	△	△	外・黒泥、内・茶褐色	内外・指跡面・フ	HA④ K20 Ⅱ台 2692		
158	立ち上がり角(内外)	—	0.6	砂質	細・多	△	△	△	△	△	外・暗泥、内・茶褐色	内外・フ	HA③ B7 Ⅱ台 4557		
159	立ち上がり角(内外)	11.4	0.6	砂質	細・多	△	△	△	△	△	内外・暗茶褐色	内外・フ	HA③ C7 Ⅱ台 1335		
160	立ち上がり急・胴部縮らむ・底重る(丸)	7.8	0.3	泥	粗・多	△	△	△	△	△	内外・灰褐色	内外・フ	HA③ C6 I Ⅱ台 1353		
161	一面のみ残存・外底薄(白色粒多量)	—	1.0	砂質	中・中	△	△	△	△	△	内外・茶褐色	内外・フ	HA③ L5 Ⅱ台 1270		
162	二面平・上底・内底緩やか・くびれ	4.0	0.4	泥	中・少	△	△	△	△	△	外・暗泥、内・灰褐色	内外・フ	HA③ M7 Ⅱ重 SK252 台 2056		

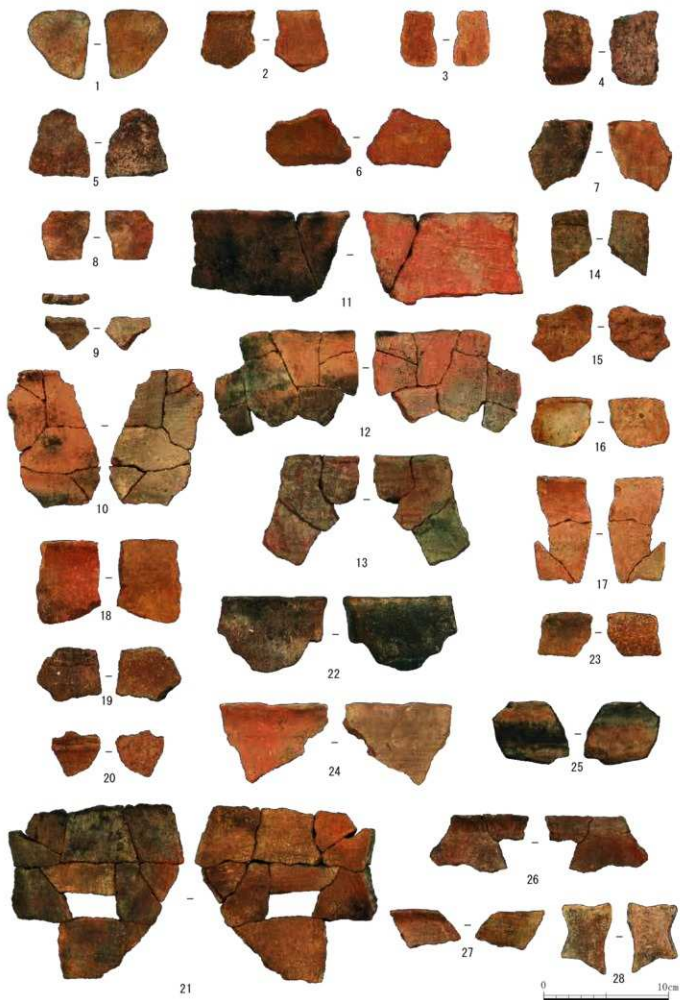
凡例 (○・非常に多い) (△)・多い (△)・少ない (△)・僅少



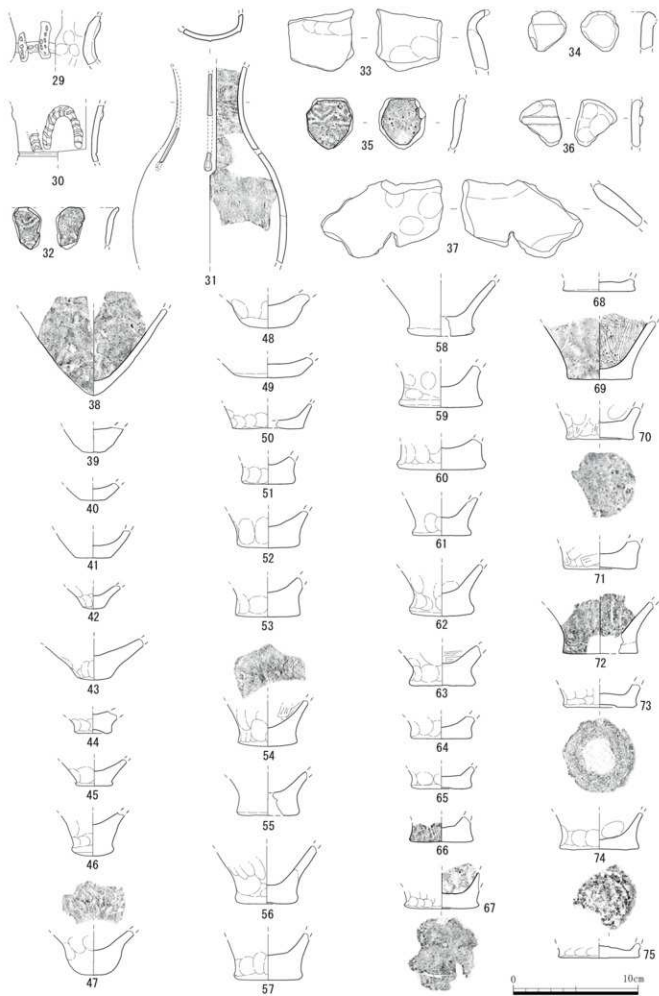
第136図 グスク土器 平面分布



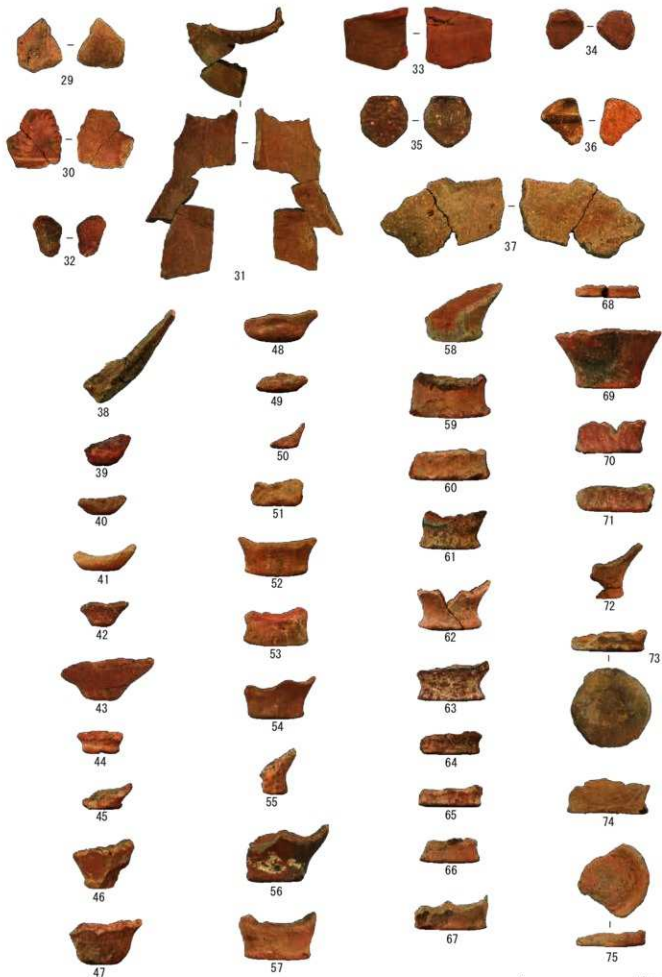
第 137 圖 土器 1



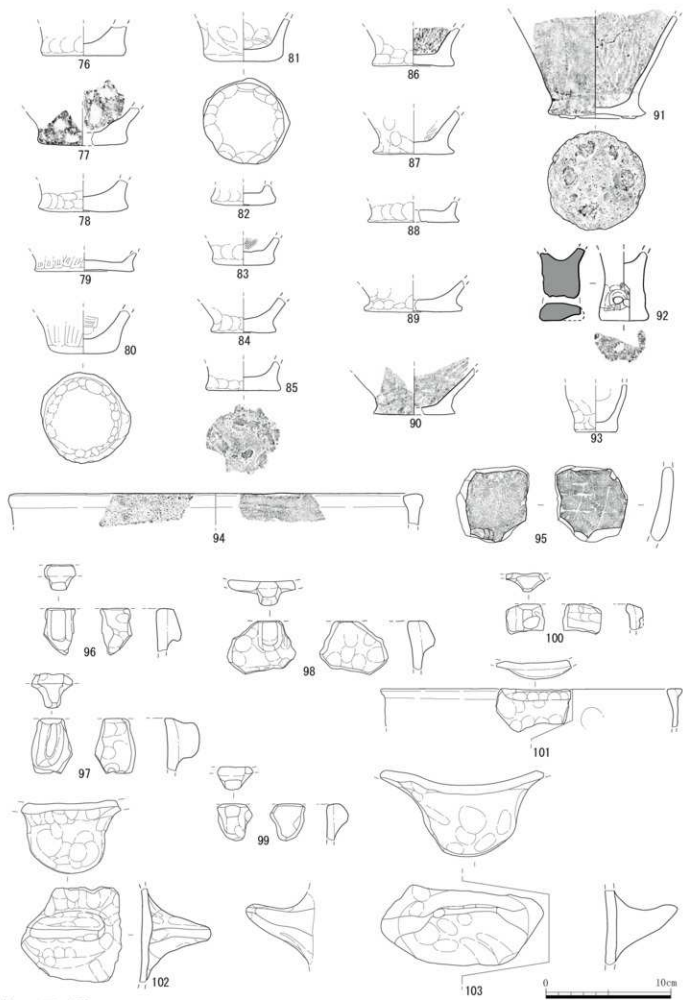
图版 94 土器 I



第138图 土器2



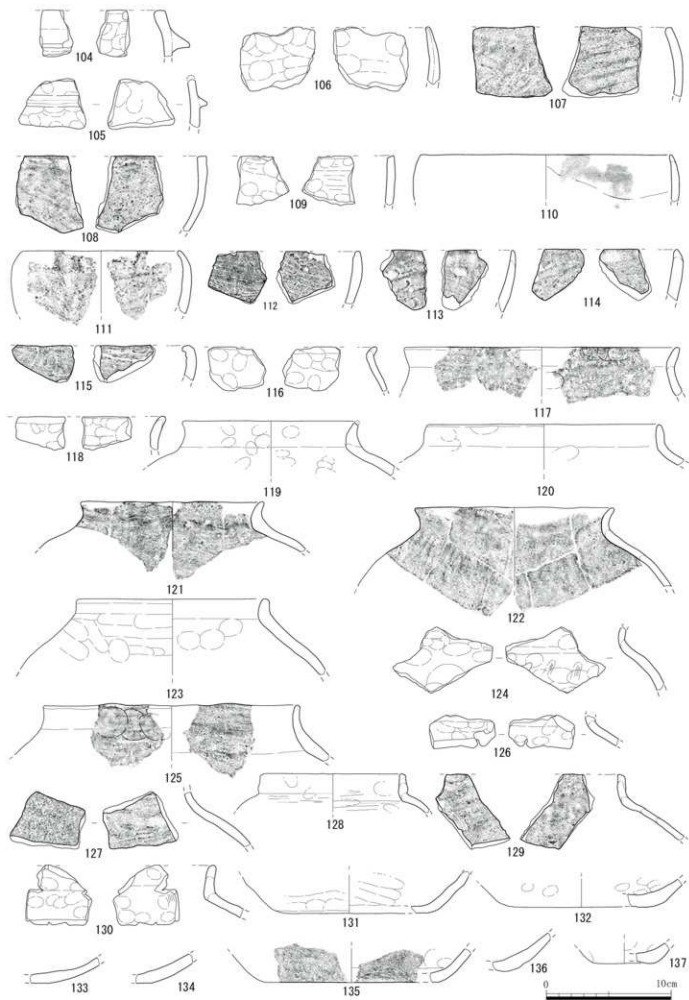
圖版 95 土器 2



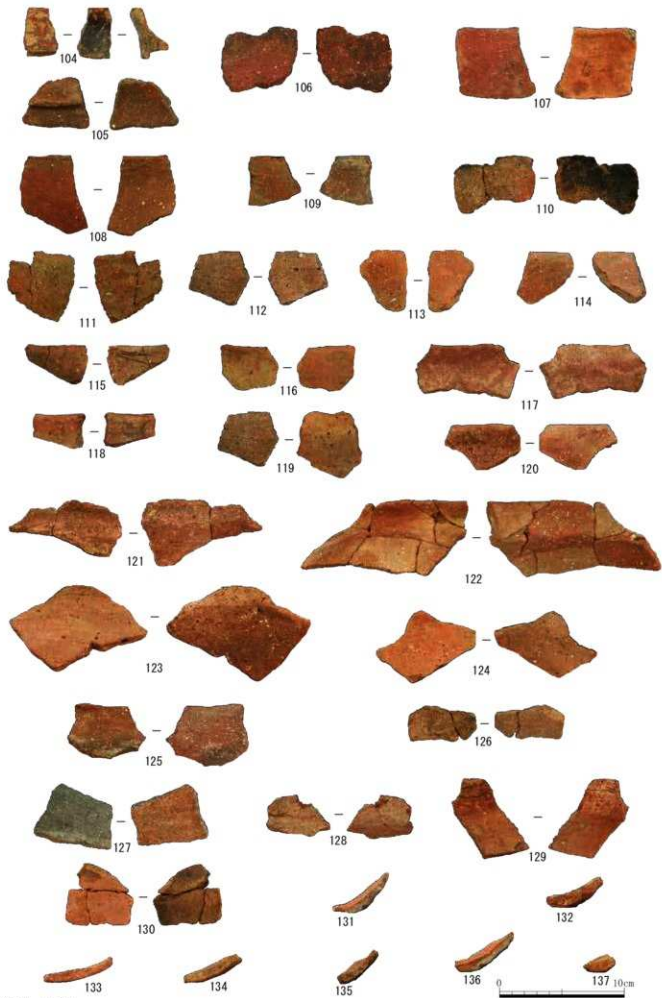
第139图 土器3



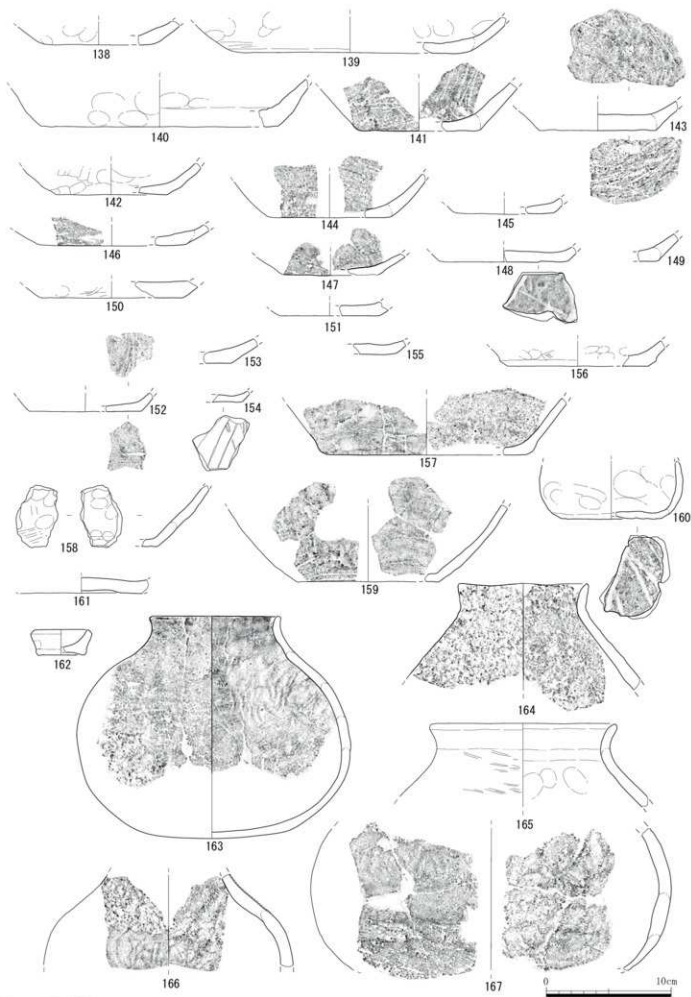
圖版 96 土器 3



第140图 土器4



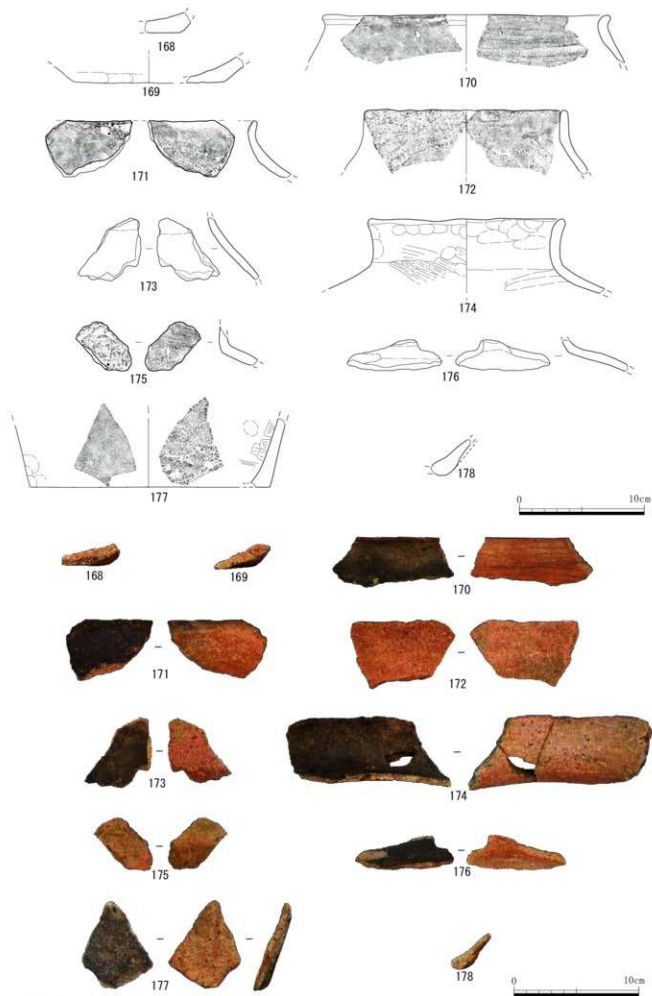
圖版 97 土器 4



第 141 图 土器 5



圖版 98 土器 5



第 142 图 · 图版 99 土器 6

(17) 土製品

22点が出土しており、粘土を使用した一次製品と土器を転用した二次製品に大別出来る。円盤状製品と同じ時期に製作された可能性もあるが、今回は素材と形状の違いにより土製品として扱った(第81表)。一次製品は僅か2点、他の20点は二次製品で、貝塚時代後期の土器片とグスク時代の土器片を用いたものが約半数ずつ得られた。Ⅱ層出土で攪乱遺物が多いが、貝塚時代後期の時期に所属する遺物もある。HA③・②での出土が目立ち、後者の地区では祝女殿内に集中する。HA④でも3点が得られた。円盤状製品もHA②においては祝女殿内出土が多く、本製品と出土地が重なる。

本町では伊礼原D遺跡(2013)・伊礼原A遺跡(2014)・平安山原B遺跡(2015)などでも数点が得られているが、本遺跡では22点と多い。詳細は第82表の観察一覧に示し、一次製品から順に記述する。

一次製品は図1・2の2点で、今のところ類例がない。前者は残存部から円形が想定され、孔は中心から少しずれて施される。外面には弧状の沈線文が3mm間隔で5本施されている。孔には紐ずれの痕は見られないが、形状から装飾品の可能性が考えられる。後者の平面形は振り子に類似し、薄く平らに整形されて外周の縁には細かい打割痕が見られる。

器を利用した二次製品は、①方形と②円形に分けられる。前者は図3・4の2点が得られた。図3は上部を両面とも研磨している。類例がなく、用途などは不明である。図4は両面を研磨し、正方形に整形したものである。製作時期が円盤状製品と同時期の可能性も考えられる。

後者は18点が出土し、図5～13の9点を図示した。部位の利の用を見と、後期土器は底部、グスク土器は若干胴部片が多い。

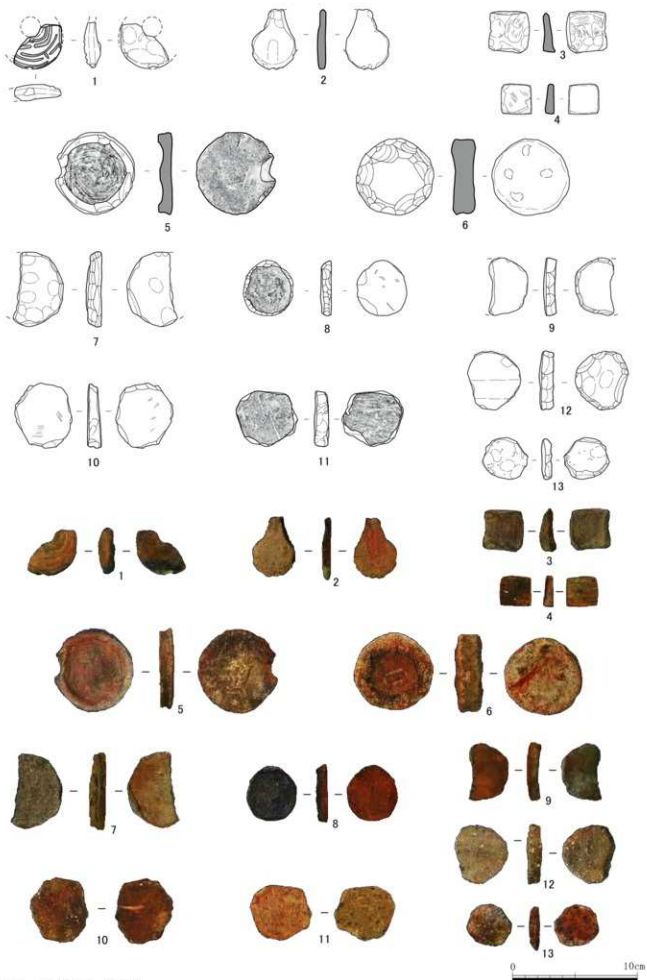
図5は底部の立ち上がり部が丁寧に研磨されており、手触りが滑らかである。図6～13は粗雑な打割痕で、製作途中の可能性も考えられる。胴部を使用するものは楕円形も多い。打割方向は図10・11・13が両面、図12は内→外面で行われている。報告外も含めてサイズは小さいものが多く、径3.0cm以下が7点、径5.0cm以下が8点得られた。径6.0cmのやや中サイズのもの報告した3点のみで、くびれ平底自体を利用している。

第81表 土製品出土量

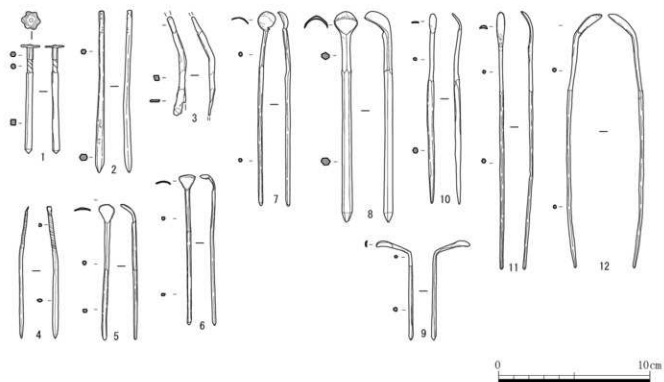
地区	層	遺物	分類				合計
			後期系	グスク	先島系	不明	
HA③		I	1			2	3
		II	3	1			4
		S-13	1				1
		S-28		1			1
HA②		II上		1		1	
		II	2	6	1	9	
HA④		II		1		1	
		III	1			1	
		IV	1			1	
合計			9	10	1	2	22

第82表 土製品観察一覧

第四図 四番号	分類	素材	形状	使用部位	大きさ・現存 縦×横(cm)	器厚 (mm)	胎土	観察事項	備考	地区・アットド・層 遺物・台帳番号	
第143 図・ 図版 100	一次製品	粘土	円形? (推定)	—	3.6×3.5 (半欠品)	6～11	砂質	有孔・外面に弧状の沈線文 内面は凹凸・径5cmの円形?	周縁一部に僅かな 保付着	HA③A16 II S-13台2248	
			不定形	—	4.7×3.5	5	砂質	無文・薄手・周縁を細かい打割 で整形(振り子状)	ほぼ平ら・円形部 の径は約3cm	HA②A19 II 701台1889	
	二次製品 ①	グスク 土器	方形	底部 (くびれ平)	3.2×3.2	4～10	泥質	底部を方形状に削削・上部 のみ両面より研磨(やや尖る)	調整痕有り 6分・指頭痕	HA③A10 II 台2869	
			方形	胴部	2.4×2.4	5～8	泥質	胴部片を方形に加工(ヘア) 片面は丁寧な研磨	器形の違いから胴 下部の可能性	HA④K18 II 台2653	
	後期 土器			円形 (くびれ平)	—	6.0×6.0	—	泥質	立ち上がり部を平らに研磨 (滑らか)・他には加工痕跡無し	内底研毛目顕著	HA③T9 I 台1223
					—	6.0×6.0	—	砂質	立ち上がり部を削削(複数回) 製作途中?	厚手・外底に粘土 塊有り	HA④G12-13 IV 台4493
					円形 (くびれ平)	6.0×3.6 (半欠品)	8～11	泥質	周縁を打割(複数回) 胎土に整形	くびれ平底の中央 盛り上がり	HA③A11 II 台1736
					楕円形 (くびれ平)	4.3×4.0	5～7	泥砂質	全体的に摩耗・底部の立ち 上がり部周縁を細かく打割	薄手・摩耗	HA③D14 I 台1281
					円形	胴部 (底面近く)	3.5×2.8 (半欠品)	7	砂質	細かく打割(内→外) 円形状に整形	僅かに湾曲
	二次製品 ②	グスク 土器		楕円形 (縦長)	胴部 (底面近く)	5.0×4.2	7～11	泥質	削削(両面より打割) 周縁に角が残る	デ・混和材に 白色粒	HA②T3 II 台398
					胴部	3.5×4.4	8	泥質	削削後に細かい打割 (両面より打割)	閉り痕有り やや湾曲	HA②T1 II 台1090
					胴部 (縦長)	4.7×4.2	9	泥砂質	削削(内→外・複数回)周縁を 楕円状に打割)・角が残る	厚手・白色粒多量	HA③B14 II S-28 台2312
					円形	胴部	3.1×3.4	6	泥質	削削(両面よりやや円形に 打割)・角が残る	デ (混和材核)



第 143 图 · 图版 100 土製品



第 145 图 · 图版 101 簪

呈する。政和通寶(図8)は1111年初鑄造の折二銭である。本品は「政」と「和」の文字配置のズレが大きい。南宋銭(図9):端平通寶(図9)の1点のみである。出土した銭貨で最も大きく、当三銭とされる。今帰仁城跡(1983今帰仁村教委)で欠損品の出土事例があるが、本資料は完品である。

明銭(図10・11・13・14):洪武通寶は計3点得られ、うち2点を図示した(図10・11)。いずれもHA④の出土である。永楽通寶は2点得られた(図13・14)。図14は「楽」「通」部分が欠落するが、字面は明瞭である。

清銭(図12・15):乾隆通寶(図12)は、金メッキが施される薄手のもので、4ヶ所に径1mmの孔が認められる。裏面には鑄造地を示す文字が残っていた。雲南宝雲局製か。道光通寶(図15)は1782年初鑄造である。裏面に文字あり。日本銭(図16~24・26):寛永通寶31点と無文銭3点の計34点が出土した。寛永通寶はHA②で18点と最も多く、祝女殿内屋敷のウワーフルからは3枚重なった状態で出土している。鑄造期間は3期に大別されるが、1期(古寛永、1636~1659年)が2点(図20・21)、2期(文銭、1668~1683年)が計4点(図16)、それ以外は3期(1697年~)に位置づけられる。3期のものには、裏面に「元」のある「高津銭」(1741年~)が2点(図17)、「足」のある「足尾銭」(1741~)が2点(図18)も認められた。無文銭の図24は鉄銭と思われる。図26は銅製で、型抜きにより片方の縁が湾曲している。

不明銭(図25・27):図27は、径3.0cmに対して孔径0.45cmと小さく、たたいて伸ばしたものであることが分かる。素材は中国銭であると思われる。

小結

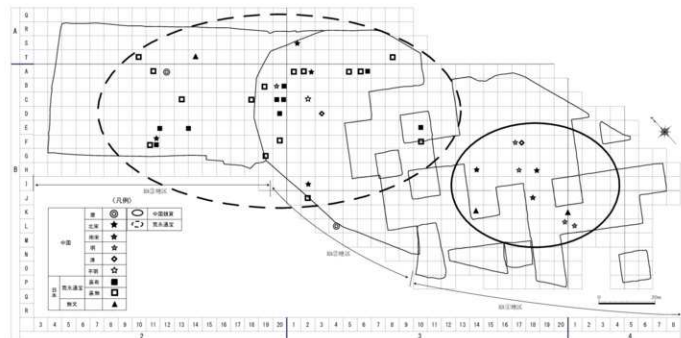
近世鑄造と分かる銭貨(清銭・寛永通寶)については、道光通寶1点を除いて全て近世居住域(SD42以北)からの出土である。これに対して中世以前の輸入銭(後代の模鑄銭を含む可能性あり)は、青磁や染付などの中国陶磁器が多いHA④地区からの出土が最も多くなっている。また、折二銭や当三銭といった大銭に磨輪されたものがみられないことも考えると、中世銭貨の多くは宮城Ⅶ期におけるあり方を物語っていると見てよいであろう。村落遺跡からの複数の大銭出土は、改めて特記すべき事例である。

また、唐銭である開元通寶・乾元重宝の出土地点周辺では、貝塚時代後期の人骨・土器も出土している。これらの唐銭が、当地において宮城Ⅲ期にもたらされたものとしても矛盾は生じない結果となった。

註:宮城弘樹 2008「琉球出土銭貨の研究」『出土銭貨』第28号 出土銭貨研究会

第85表 銭貨出土量

地区	期	遺跡	中国				寛永通寶		無文		合計
			唐	北宋	南宋	明	清	不明	寛有	寛無	
HA④	Ⅱ		1	1				2	7	11	
	Ⅲ	S211		1						1	2
HA④	小計		1	2					2	7	13
	Ⅱ				1	1	1	5	13	1	22
HA④	Ⅲ	SK24.9	1	2						1	3
	小計		1	2		1	1	5	13	1	25
HA④	Ⅱ			1	2	1		1	1	1	6
	Ⅲ	SD41		1						1	2
HA④	Ⅲ			1	2					1	4
	Ⅲ	SP1220							1	1	2
合計	Ⅱ		2	1	4	1	1	1	1	1	12
	Ⅲ		2	6	1	5	2	2	8	22	3

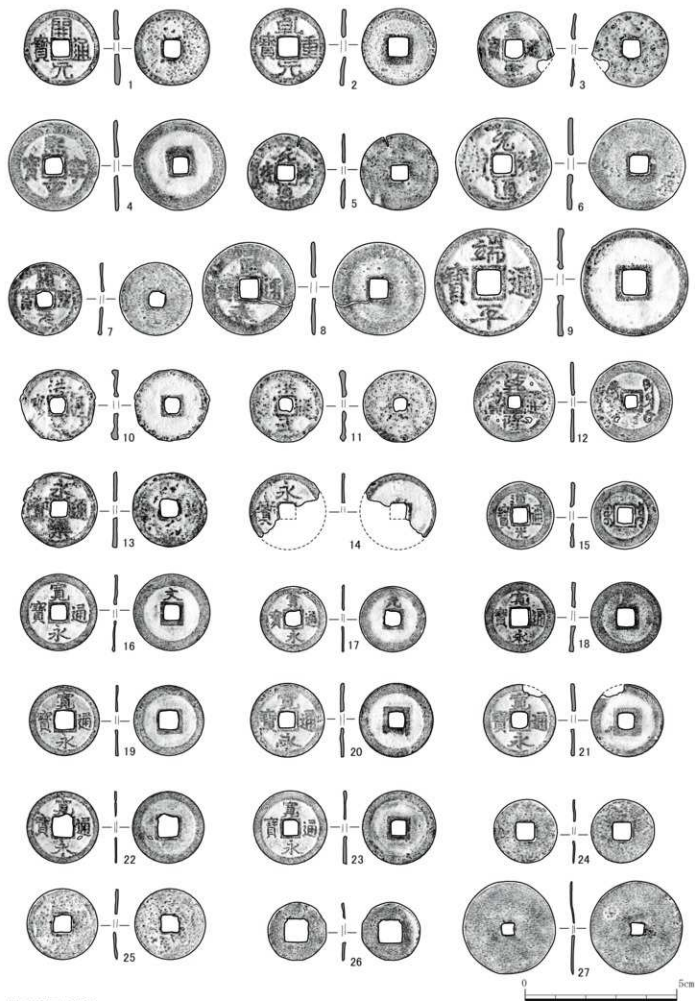


第146図 銭貨平面分布

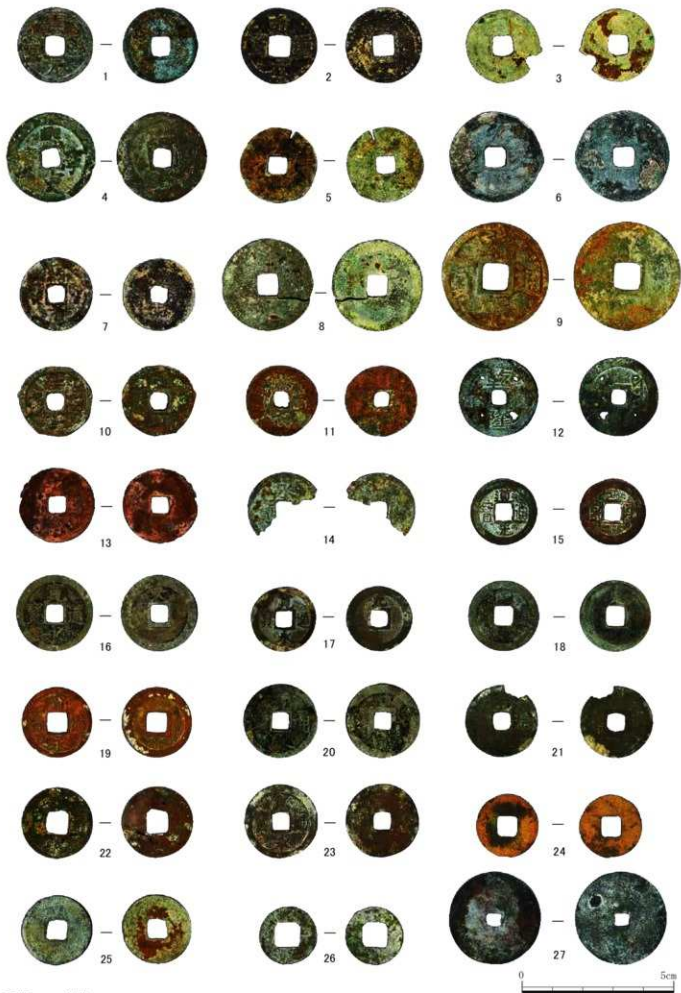
第86表 銭貨観察一覧

国名 年号	銭貨名 銭文	背文 文字	初鋳地	現存	外径 (cm)	内径 (cm)	縁幅 (mm)	重量 (g)	字体	内縁・観察	地区・グレード・鋳 造所・台帳番号		
1	開元通寶	不明	621	唐	完	2.7	0.70	1.5	0.50	7.5	縁・字明瞭。	HA② L4 Ⅱ 三島 取 99	
2	乾元重寶	無	758	唐	完	2.4	0.70	1.8	1.00	3.8	当十銭。縁・字明瞭。	HA② A12 Ⅱ 台 630	
3	皇宋通寶	不明	1038	北宋	完	2.4	0.70	2.0	0.10	2.5	高書 欠け・ヒビ割れ・おみ、強い。縁書。	HA③ S1 Ⅱ 台 699	
4	熙寧通寶	無	1071	北宋	完	2.9	0.70	3.0	0.08	7.1	高書 折二銭。裏面の孔縁不揃い。縁書。	HA② A2 Ⅲ SK004 取 15	
5	元豐通寶	不明	1078	北宋	完	2.5	0.50	3.0	0.10	3.1	行書 ヒビ割れ。	HA③ H14 Ⅱ SD41 台 3029	
6	元祐通寶	無	1093	北宋	完	3.1	0.70	2.0	0.20	11.0	行書 折二銭。「基」部にバリ。強い。縁書。	HA② E2 Ⅲ SP9 取 106	
7	紹聖元寶	無	1094	北宋	完	2.4	0.60	2.5	1.00	4.0	篆書 字面磨滅。孔にバリ。	HA③ F11 Ⅱ S2 台 608	
8	政和通寶	無	1111	北宋	完	4.1	0.70	3.0	0.10	6.7	分書 折二銭。字面磨滅。ヒビ割れ。縁書。	HA④ H18 Ⅲ 台 3029	
9	端平通寶	無	1234	南宋	完	3.6	1.10	2.0	0.20	11.0	当三銭。縁・字明瞭。縁書。	HA④ J18 Ⅱ 台 4615	
10	洪武通寶	無	1368	明	完	3.2	0.70	3.0	0.20	3.0	字明瞭。孔にバリあり。	HA④ L1 Ⅱ 台 1218	
11	洪武通寶	不明	1368	明	完	2.4	0.60	2.0	0.20	3.7	字明瞭。孔にバリあり。ヒビ割れ・おみ。表面に強い赤錆。	HA④ H17 Ⅲ 台 1203	
12	洪武通寶	不明	1368	明	1/2	2.2	0.60	1.0	0.10	1.9	縁・字明瞭。	HA④ L20 Ⅲ 台 1219	
13	永樂通寶	文字	1736	清	完	2.6	0.55	3.0	0.20	5.7	字明瞭。4箇所に小孔。縁書。	HA② D3 Ⅱ 祝院 取 87	
14	永樂通寶	無	1408	明	完	2.5	0.65	2.0	0.10	4.1	字面磨滅。程かに薄い。	HA② B20 Ⅱ 祝院 取 190	
15	永樂通寶	無	1408	明	1/2	1.0	0.65	1.5	0.10	1.7	「葉」通。元。字明瞭。孔にバリあり。	HA③ F17 Ⅱ 台 1198	
16	道光通寶	文字	1782	清	完	3.2	0.50	2.0	0.10	3.8	字明瞭。孔にバリ。	HA④ F17 Ⅱ 台 4614	
—	寛永通寶	文	1668	日本	完	2.4	0.65	2.5	0.10	3.1	縁・字明瞭。白銅銭？	HA② A6 Ⅲ 高 台 4131	
—	寛永通寶	文	1668	日本	完	2.4	0.65	2.0	0.10	3.2	縁・字明瞭。	HA② D20 Ⅲ上 祝院 番合 台 4127	
—	寛永通寶	不明	—	—	完	3.0	—	—	0.08	12.6	3枚が重なったままくっついてる。	HA② B19 Ⅱ 祝院 フ02 取 3	
—	寛永通寶	不明	—	—	完	2.1	0.65	2.0	0.07	2.4	表面のみ強い赤錆。	HA② B19 Ⅱ 祝院 フ02 取 5	
—	寛永通寶	文	1668	日本	完	2.4	0.65	2.0	0.06	3.5	字明瞭。おみ。	HA② B20 Ⅱ 祝院 取 8	
16	寛永通寶	文	1668	日本	完	2.5	0.50	2.0	0.10	3.8	縁・字明瞭。孔にバリ。	HA③ E10 Ⅲ 台 1186	
—	寛永通寶	元	1741	日本	3/4	2.0	0.60	2.0	0.10	1.8	孔にバリ。	HA③ F11 Ⅱ 台 667	
17	寛永通寶	元	1741	日本	完	2.2	0.60	2.0	0.10	2.2	字明瞭。孔にバリ。	HA③ E11~14 Ⅲ 台 659	
18	寛永通寶	足	1741	日本	完	2.2	0.68	2.0	0.20	2.4	字明瞭。	HA② G20 Ⅲ 瓦屋 取 9	
—	寛永通寶	足	1741	日本	完	2.2	0.68	—	0.20	2.6	字面磨滅。	HA② G20 Ⅲ 瓦屋 取 9	
—	寛永通寶	無	—	—	1/2	2.2	0.68	2.0	0.03	1.7	字明瞭。	HA② B19 Ⅱ 祝院 フ01 取 2	
—	寛永通寶	無	—	—	完	2.2	0.65	2.0	0.08	2.7	表面のみ赤錆。	HA② B19 Ⅱ 祝院 フ02 取 4	
—	寛永通寶	無	—	—	完	2.4	0.71	—	0.20	3.8	—	HA② A6 Ⅲ 高 取 30	
—	寛永通寶	無	—	—	日本	3/4	2.4	0.63	2.0	0.06	2.5	縁・字明瞭。ヒビ割れ・おみ。	HA② G19 Ⅲ 瓦屋 取 10
—	寛永通寶	不明	—	—	完	2.3	0.70	2.0	0.05	2.8	字明瞭。おみ。縁書。	HA② T8 Ⅲ 高 取 29	
—	寛永通寶	無	—	—	完	2.2	0.68	2.0	0.10	3.0	—	HA② F20 Ⅲ 瓦屋 取 62	
—	寛永通寶	無	—	—	完	2.2	0.68	2.0	0.09	2.8	—	HA② A1 Ⅱ 祝院 取 46	
19	寛永通寶	無	—	—	完	2.3	0.60	1.5	1.00	2.1	縁・字明瞭。赤味が強い。	HA③ T10 Ⅲ 台 670	
—	寛永通寶	無	—	—	完	2.3	0.68	2.0	0.02	2.5	—	HA② A2 Ⅲ 祝院(同屋) 取 15	
—	寛永通寶	無	—	—	完	2.2	0.80	2.0	0.01	1.9	字不明瞭。裏面縁なし。ヒビ割れ。	HA② J2 Ⅲ 瓦屋 取 41	
—	寛永通寶	無	—	—	完	2.3	0.60	2.0	0.10	2.8	孔にバリ。	HA③ F10 Ⅲ 台 1193	
20	寛永通寶	無	1636	日本	完	2.5	0.60	2.0	1.00	2.8	字明瞭。縁書。古寛永。	HA③ T10 Ⅲ 台 671	
21	寛永通寶	無	1636	日本	完	2.4	0.65	1.0	1.00	3.6	字明瞭。古寛永。	HA③ C18 Ⅲ 台 654	
22	寛永通寶	無	—	—	完	2.0	0.78	1.5	1.00	2.0	薄い。孔大きい。	HA③ A11 Ⅲ 台 662	
23	寛永通寶	無	—	—	完	2.4	0.62	2.0	1.00	3.1	字明瞭。	HA③ A11 Ⅲ 台 640	
—	寛永通寶	無	—	—	日本	3/4	2.4	0.65	2.0	1.00	1.7	—	HA③ C13 Ⅲ 台 655
—	寛永通寶	無	—	—	完	2.5	0.68	2.0	0.10	2.5	ヒビ割れ・おみ。縁書。	HA③ F11 Ⅲ 台 667	
—	寛永通寶	無	—	—	完	2.4	0.65	2.0	0.10	2.5	縁書。	HA② A5 Ⅲ SK002 台 4121	
24	無文銭	無	—	—	完	2.1	0.60	—	0.10	1.2	—	HA③ K14 Ⅲ 台 1216	
25	〇〇銭	無	不明	不明	完	2.3	0.60	1.5	0.10	2.0	不明 孔にバリ残る。おみ。縁書。中国？	HA③ K20.01 Ⅲ SP1220 台 4069	
26	無文銭	無	—	—	完	1.9	0.85	1.0	1.00	0.9	— 型抜き。表から裏に縁曲がる。縁書。	HA③ T14 Ⅲ下 S-11 台 672	
—	無文銭	無	—	—	完	1.8	0.75	—	0.04	1.1	— 型抜き。表から裏に縁曲がる。	HA③ T2 Ⅲ 祝院 台 4129	
27	不明	不明	不明	不明	完	3.0	0.45	—	0.02	3.8	不明 タタキにより、孔は小さく。縁は薄い。模範銭か。	HA② C2 Ⅲ 祝院 取 184	

○(内側) ○(外側) □(欠) 完(ほぼ完成)



第 147 圖 錢貨



圖版 102 錢貨

第88表は、平面分布における円盤状製品の出土状況を受け、屋敷跡・遺構の出土量を示した。HA②の屋敷跡では祝女殿内が圧倒的に多く137点、照屋先生、瓦屋又吉小、名嘉座、畠は二桁台を示し、祝女殿内小、三良又吉小、東大屋小、アガリミチ、ナカミチ、ワキミチの道路遺構全体で一桁台である。この結果HA②では、ほぼ戦前の屋敷跡から出土していることが判る。

HA③の屋敷跡では、HA②に比較し多くないが、詳細は大屋、浦伊礼小、ナカミチで二桁台、その他の屋敷、石組遺構に少量認められる。種類で見ると、沖繩産無軸陶器が最も多く、次いで本土産磁器が出土する。青磁、染付、白磁、沖繩産施釉陶器は二桁台である。

次に素材となる陶磁器類の産地や年代の特徴を、確認した範囲内で記述する。

中国産（青磁・白磁・染付・褐釉陶器）

青磁の多くは底部を使用している。その中で、ある程度の年代把握ができた資料を示した。器形を判断できた中では、碗が31点と最も多く、次いで皿9点となっている。窯の産地は龍泉窯が30点、福建・広東系5点とほぼ龍泉窯である。年代別では14C～15Cが3点、14C～16Cが3点、14C後半～15C前半1点、14C後半～15C中頃18点、14C末～15C代1点、15C後半～16C中頃2点、15C代4点、明代1点である。

白磁も底部を使用したものが多い。器形の判断できる資料は碗が9点、皿7点、小碗1点、杯1点である。窯の産地は、景德鎮が1点、龍泉窯1点、福建・広東系14点、徳化窯2点で福建・広東系が多い。年代別では、14C～15Cが7点、14C後半～15C中頃2点、16C後半頃1点、17C～18C1点、17C代3点、18C～19C2点である。

染付は碗が38点、皿1点、小碗1点でほとんどが碗である。産地は福建・広東系が31点、徳化窯1点、年代は17C～18Cが30点、18C代7点、18C～19Cが1点である。

褐釉陶器は県内遺跡で中国産・タイ産・ベトナム産の資料が出土するが、当遺跡の円盤状製品に点数は少なく、中国産の資料が4点である。部位は胴部が3点、底部が1点で、図化した資料は胴部1点である。底部資料は底径5.8cmと小さく、平底で器形は小型の壺が想定される。年代の把握できたものは16C代が1点ある。以上、青磁・白磁・染付に関しては、高台のつくりや見込み部分の特徴から古手の資料を使用していることが判った。

本土産（陶器・磁器）

本土産磁器は胴部が多く、図柄の中心部を残し打ち欠くため、器形の判断できる資料は少ない。器種の把握ができた資料は碗が4点と小碗6点、皿2点、底径の大きさから、大皿の底部と考えられるものがある。産地・年代で判断できた資料は、肥前・波佐見焼（18C前～中頃、江戸後期1780年～1860年）、瀬戸・美濃産（明治以降～大正時代）、砥部焼などがみられる。また、高台の形態が三日月高台（片薄高台）になるものが幾つか確認された。高台を削り出す際、轆轤の中心を外れ高台の輪が三日月状に不整形な円を生じたもので、古唐津などにみられるものである。

本土産陶器は点数が少ないが、図柄などから判断できたものには瀬戸・美濃焼の他、内野山焼・薩摩焼も少量ながら確認されている。

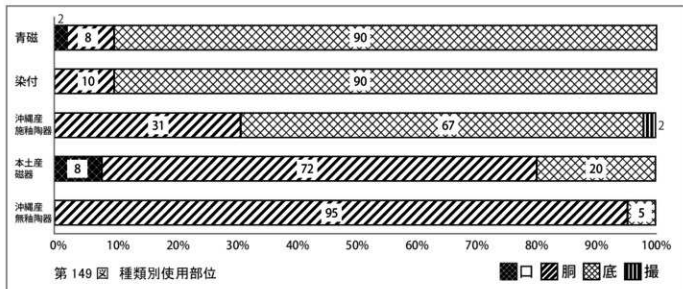
沖繩産（施釉・無軸）陶器

沖繩産施釉陶器は底部が多く、器種は碗が多い。沖繩産無軸陶器は壺類が多い傾向にあり、胴部は中央部分を細かく打割るため器種の特定は困難だが、底部は底径サイズから大小様々な大きさの壺類がある。

第149図では、量の多い種類を部位別に比率で示した。青磁・染付・沖繩産施釉陶器は大半が底部を用い、沖繩産無軸陶器・本土産磁器は逆に胴部が多く使用される。青磁・染付は圧倒的に底部が多く90%を占める。沖繩産施釉陶器は67%が底部、31%が胴部である。胴部の使用が多い本土産磁器の割合は、胴部72%、底部20%、口縁部8%である。沖繩産無軸陶器は胴部が95%、底部は僅かに5%である。図に示した器種も含め遺物全体の割合は（瓦及び本土産磁器の口縁～底部を除く）、口縁部12点で2.2%、胴部336点で60.6%、底部206点で37.2%と部位全体では胴部が多く、青磁・白磁・染付に限り底部が多い。

第88表 屋敷別遺物出土量

屋敷 (ミチ)名	中国産										合計
	青磁	染付	白磁	青磁?白磁?	本土産磁器	本土産磁器	沖繩産施釉陶器	沖繩産無軸陶器	陶土器	不明陶器	
祝女殿内	12	19	7		1	34	17	46	1		137
祝女殿内小								1			1
瓦屋又吉小	1	1	3			12	2	8			27
照屋先生	6	3	3		1	5	4	12	1		35
三良又吉小	1	1	1					4			7
名嘉座	3	3				5	3	11			25
東大屋小		1				1	1	1			4
畠	3	8	2			5	17	2			37
アガリミチ	2	1				1	1	4			9
ナカミチ	2	2	1			13		11			29
ワキミチ	1	2				4		1			8
ウラミチ	1						1	1			3
大屋		1				11		3	1		16
浦伊礼小			1	1		5	3	8		1	19
小碗小						3	1				4
神楽堂								1			1
遺構大屋小							1				1
土坑								1			1
石組遺構			1								1
自然露出			1								1
合計	32	42	20	1	2	100	33	130	5	1	364



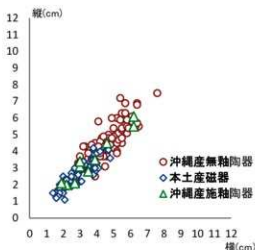
第149図 種類別使用部位

■ 口 ■ 胴 ■ 底 ■ 握

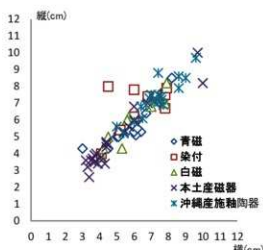
第150・151図は、完形円盤状製品の計測値分布図で、使用部位（胴部・底部）ごとに示している。正円から外れる資料の方がむしろ多く、本土産磁器の胴部など図柄で上下が判断できる資料では、縦軸が短い傾向が認められる。また、大きさの違いで遊具としての用途も若干変わると推測されたが、分布が示すように全体的には大・中・小のような明確な区別はできず、胴部資料は1cm台～7cm台、底部資料は3cm台～10cm台の範囲に収まっている。

しかし器種ごとに検討してみると、胴部では特定の器種においてサイズの分散が認められた。本土産磁器は1cm台～4cm台のサイズに集中しており、使用器種には小碗や小杯が多い。これに対して沖縄産無釉陶器は2cm台後半以上のものに限られており、本土産磁器のような小型のものはない。沖縄産無釉陶器には器壁の厚い壺・甕が多いことに起因しているが、重量比では差異がもっと際立つことが考えられる。

底部資料については、高台径・底径がそのまま円盤状製品の大きさとなることが多い。種類ごとの点数が少ないため、胴部資料のような集中傾向や器種による偏りは判断しにくい。青磁は2cm台～8cm台で、器種に碗・小碗・皿・小杯など多くの器形がみられるが、比較的底径の小さい資料を使用している。染付は4cm台～7cm台後半で、形状が縦長などの非円形の資料が多い。雑な打ち割りでは腰部が残ってしまうことがその原因と思われる。白磁は4cm台～8cm台であるが、底部自体が少ない。本土産磁器は4cm前後、6cm前後、10cm台が認められ、10cm台は底径の大きな大皿を使用している。沖縄産施釉陶器は5cm台から9cm台があり集中するのは7cm台が多い。



第150図 種類別計測値散布図(胴部)

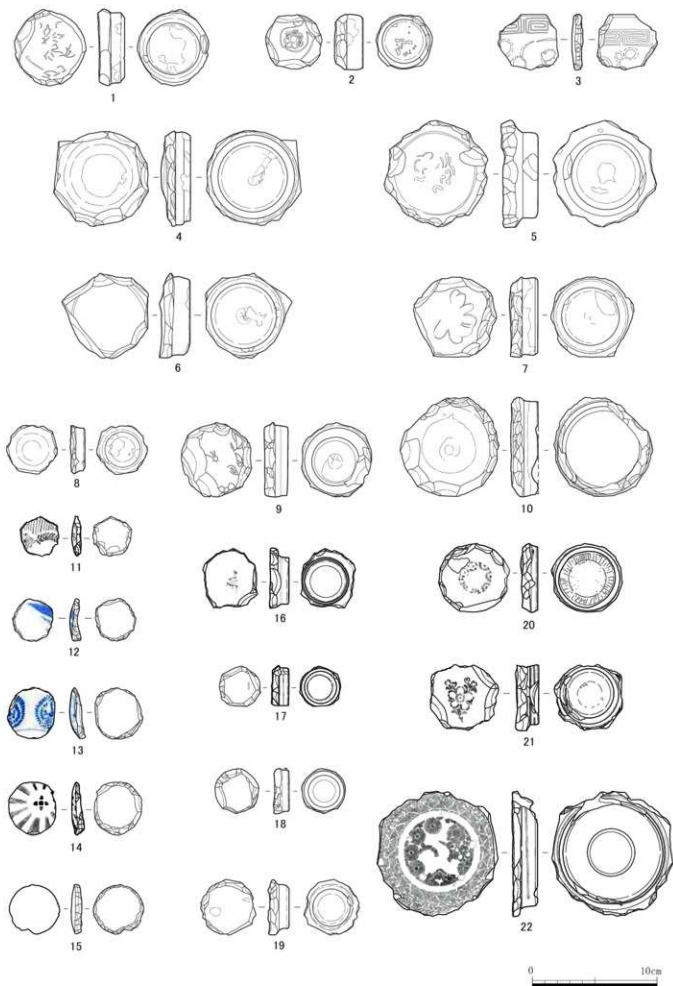


第151図 種類別計測値散布図(底部)

第89表 円盤状製品観察一覧

法量単位 (mm/g)

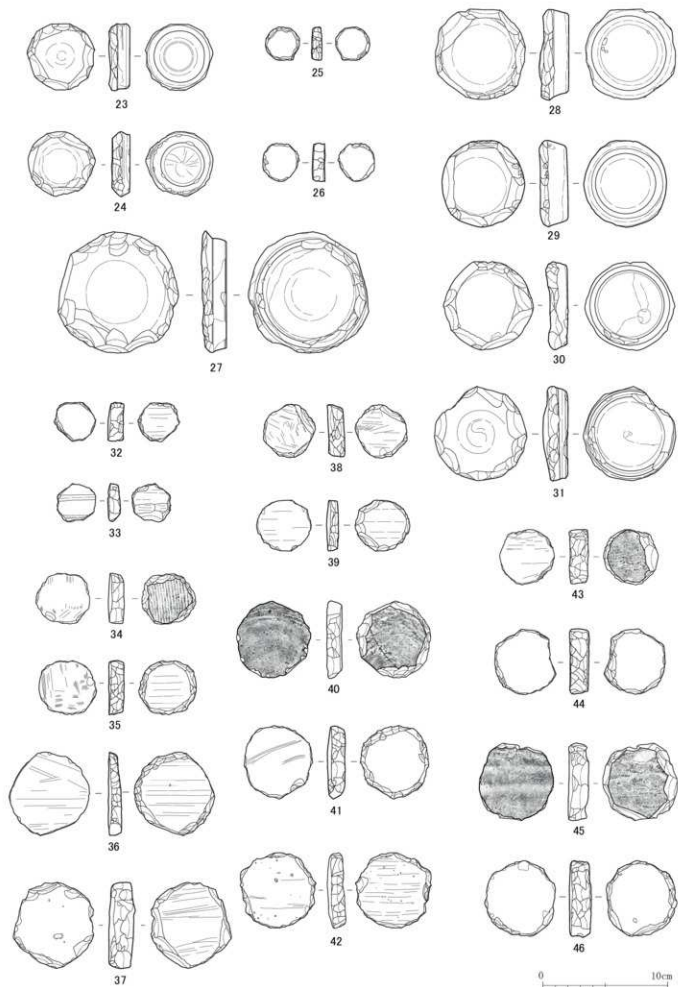
製品 図取	図取 No.	種類	品種	部位	完/破	観察事項	縦	横	厚さ	直径	高さ	選別・グリッド・番号 選別・台帳 (取上) 番号
	1	青磁	皿	底部	完形	見込み印文花、輪の跡あり、高台部分を残し、打ち割りが僅、一部角を欠す	6.1	5.8	2.1	5.6	73.9	HA ② A2 B 取 181 X-30146.298 Y-25553.977 Z-2.195
	2	青磁	一	底部	完形	見込み印文花、輪は高台内まで打ける、輪は楕状、色調は緑青色、赤地は黒い、打ち割りが	4.3	4.5	2.3	4.1	50.6	HA ② A3 S 5 B ア ガリミチ台 1561
	3	青磁	碗	口縁部	完形	外面に雷雲文・ラウ式蓮華文、内面も同文様を施す、打ち割りを残す	4.2	4.5	-	19.5	HA ② D20 B 台 2012	
	4	青磁	一	底部	完形	見込み輪割ぎ、輪の色調は乳白色、赤地は赤味を帯び、打ち割りは高台、内を成し一部角を欠す	7.6	7.6	2.3	6.8	134.3	HA ③ G8 B 台 2650
	5	青磁	碗	底部	完形	見込み白印文、輪は高台内まで打ける、輪の色調は深緑青色、打ち割り高台厚い(平)手	8.5	8.2	2.9	6.6	180.4	HA ③ A10 B 台 1777
	6	白磁	碗	底部	完形	福寿系、16C 後半、打ち割りは無い	6.8	7.0	2.5	6.0	85.1	HA ③ K19 B 台 2668
	7	青磁	碗	底部	完形	龜泉系、14C 末～15C 代、見込みに印文花	6.4	6.7	2.3	6.2	101.4	HA ③ F18 B 台 2182
	8	白磁	小碗 皿?	底部	完形	高台のつくりは薄な仕上げ、打ち割りは高台のみを残し、円に施す	3.8	4.1	1.2	3.4	13.5	HA ② T1 B 台 637
	9	白磁	碗	底部	完形	見込みに印文花、高台輪なし、打ち割りは高台をきわまで見込	6.0	5.6	1.9	5.5	75.5	HA ③ R7 B 高台 2475
	10	染付	一	底部	完形	見込み輪割ぎ、輪は高台内に及ぶ、打ち割り一部割	7.9	7.9	2.2	7.8	126.1	HA ③ B2 I 台 2536
	11	本土産磁器	小碗	側部	完形	部は割一線部、輪縁に植物の葉の図柄を施す、打ち割りは円に近いかや中までなすり	3.2	3.1	0.7	-	6.7	HA ③ C15 B S 5 台 986
	12	本土産磁器	小碗	側部	完形	割一線部、墨が墨すの図柄不明、下部や中ない、打ち割りは表面円に近く、裏面内側を欠し一部割	3.4	3.2	0.9	-	8.6	HA ③ F14 N 台 3216
	13	本土産磁器	小碗	側部	完形	割一線部で丸九丸と幾部の割線1条、打ち割り丁字	4.1	3.8	1.3	-	12.0	HA ③ C12 B 台 3215
	14	本土産磁器	碗	側部	完形	旭川産を推定、丸九式赤の野梨式系、12日足文に類似図柄、中心花四輪、裏面打ち割り内側	4.2	3.8	1.0	-	13.5	HA ③ F10 B 台 1866
	15	本土産磁器	碗	側部	完形	図柄は「茶壺か」有り、図柄の打ち割りは丁字で細い、ほぼ円形に近い、部内を欠し一部割	3.9	4.0	0.8	-	12.1	HA ③ E20 B 上 台 715
	16	染付	小碗 皿?	底部	完形	見込み部分に「寿」の文字、輪は貫付けがなく、高台内まで打ける、高台、輪を欠し丸打ち割り	4.7	4.4	1.6	3.7	29.3	HA ③ F9 S-32 B 台 1900
	17	本土産磁器	小碗	底部	完形	高台に2条、高台内1条の割線、高台の打ち割り種	3.2	3.3	1.4	3.0	13.6	HA ③ E3 B ナカミチ台 1462
	18	本土産磁器	小碗	底部	完形	見込みに割線なく、高台も欠け付なし、小碗で、貫付け部分や中幅あり、とちも高台の内側を欠し	3.6	3.5	1.3	2.6	14.9	HA ③ F20 B 上 台 1546
	19	本土産磁器	碗	底部	完形	見込み、高台、内輪、割線なし、貫付け輪なし、高台より若干内側を欠し打欠く、打ち割り円形、わりを欠	4.4	4.4	1.7	3.6	22.3	HA ③ G8 B 台 2155
	20	本土産磁器	碗	底部	完形	割線あり、見込みに輪、輪の図柄、高台内側に筋なし種、高台を欠し、貫付け丸味を帯び、打ち割り丁字	5.6	5.7	1.4	5.2	26.0	HA ③ C1 B 上 台 567
	21	本土産磁器	碗	底部	完形	見込みに輪と白濁、高台も一本割線を引く、輪は貫付け以外高台内に及ぶ、打ち割りは中までなすり	5.3	5.4	1.9	4.8	40.5	HA ③ F16 B 台 1962
	22	本土産磁器	大皿	底部	完形	見込みに輪と白濁、輪の図柄、裏面は蛇の目高台(筋込み?)で高台が低い、他の資料と比較して大きい	10.0	9.7	2.1	8.4	175.8	HA ③ S20-03.020-02 B 台 1616
	23	本土産陶器	一	底部	完形	内面山輪、輪の色調：見込み黄褐色、輪～高台は緑褐色、三日月高台、高台残し打ち割り種	5.3	5.4	1.7	5.2	41.4	HA ③ S19 B 台 1162
	24	沖縄産無釉陶器	碗	底部	完形	見込みに輪、周囲を輪割ぎ、直径小さい、打ち割り種	5.2	5.4	1.4	3.6	43.0	HA ③ B11 B 台 2814
	25	沖縄産無釉陶器	碗?	側部	完形	内面内輪と外側の打ち割りは円に近く赤地は摩耗	2.7	2.7	0.8	-	10.0	HA ③ K01 B 台 2595
	26	沖縄産無釉陶器	碗?	側部	完形	外面黒輪、内面白濁輪、縁線を細かく円に打ち割	3.1	3.0	1.0	-	9.0	HA ③ G13 B SD42 台 3148
	27	沖縄産無釉陶器	碗	底部	完形	貫付に輪なし、高台内は輪、一部破れ欠し打欠く	9.7	9.6	2.0	8.6	130.3	HA ③ D4 B 台 2689
	28	沖縄産無釉陶器	碗	底部	完形	見込み輪割ぎ、色調は白濁輪、貫付けに輪なし、高台内に輪割け施す、打ち割りは高台を欠し部分	7.2	7.3	2.3	6.2	85.6	HA ③ A18 S-12 B 台 532
	29	沖縄産無釉陶器	碗	底部	完形	見込みに輪割ぎ、色調は白濁輪、貫付けに輪なく、高台内側に輪割け施す、打ち割りは丁字	6.9	6.7	2.3	5.8	101.2	HA ③ D-E15 B S-4 B 1477
	30	沖縄産無釉陶器	碗	底部	完形	貫付け輪なし、高台内も一部輪割け、打ち割り大きい	7.1	7.2	1.7	6.3	60.7	HA ③ D3 B 既取付 1082
	31	沖縄産無釉陶器	碗	底部	完形	見込み無輪、赤地は黒い、高台なし、円に打割る	7.5	7.4	2.0	7.0	64.2	HA ③ B2 D5 B 台 1412
	32	沖縄産無釉陶器	碗?	側部	完形	磨化変成地、内面に調整部が確認、円に近く一部角を残す、打ち割りはや中割	3.1	3.3	1.3	-	17.0	HA ③ B2 G11 B 台 1838
	33	沖縄産無釉陶器	碗?	側部	完形	外面はマンガン釉で内面黒輪、縁線を円に打割る	3.1	3.2	1.0	-	15.6	HA ③ E10 SD52 B 台 3217.3
	34	沖縄産無釉陶器	すり鉢	側部	完形	内面割目跡、外、外面から調整部、打ち割り円割	4.0	4.3	1.4	-	24.3	HA ③ B1 B 既取付 1945
	35	沖縄産無釉陶器	碗?	側部	完形	磨化は平削でいい、色調は外赤褐色、内面赤褐色、内面に調整部、打ち割りは厚い円形で細い	4.2	4.6	1.2	-	32.1	HA ③ E2 B 上 台 1507
	36	沖縄産無釉陶器	碗?	側部	完形	磨化は薄く、色調は外面が茶褐色、内面赤褐色、打ち割りは2ヶ所角を残し、他の部分には細い	6.8	6.4	1.1	-	52.9	HA ③ G17 B S10 台 2108
	37	沖縄産無釉陶器	碗?	側部	完形	磨化は厚く、色調は外面が茶褐色、内面赤褐色、内面横方向にカーブ、厚みの内面に筋がはいりて細い	6.9	6.4	2.1	-	102.6	HA ③ D20 B1 台 742
	38	沖縄産無釉陶器	碗?	側部	完形	外面平削、内面横方向にカーブ、色調は外面が茶褐色、内面赤褐色、断面に藍色層有り、打ち割りは円	4.4	4.3	1.5	-	32.2	HA ③ D16 B 台 3203
	39	沖縄産無釉陶器	碗	側部	完形	色調：内外面と赤褐色、断面に調整部、打ち割り丁字	4.0	4.4	0.9	-	17.3	HA ③ R7 I 台 2542
	40	沖縄産無釉陶器	碗?	底部	完形	立ち上がりなし底面、平削、内外面褐色、打ち割り丁字	6.2	5.9	1.2	-	57.6	HA ③ K6 B 既取付 1771
	41	沖縄産無釉陶器	碗?	側部	完形	内面にへうによる調整部、打ち割りは丁字	5.9	5.5	1.0	-	53.2	HA ③ F11 B 台 1359
	42	沖縄産無釉陶器	碗?	側部	完形	割径小さい想定、外面がパタタ気泡点した粗筋	6.0	6.0	1.5	-	52.3	HA ③ F13 B 台 1171
	43	瓦	平瓦	一	完形	外面上部に植物の図柄、内面は布目織、サイズ小さく、打ち割りは円形に近い(平削)で細い	4.4	4.4	1.6	-	32.9	HA ③ G11 B 台 1868
	44	瓦	一	破割	完形	外面、内面も平削、色調は内外面とも赤褐色、打ち割りは丁字ではほぼ円形を呈し、一部欠けを生じる	5.3	4.8	1.5	-	49.4	HA ③ D15 B S-4 台 867
	45	瓦	平瓦	一	完形	外面は楕圓とへう削り、内面に布目織、打ち割り丁字	6.2	6.0	1.6	-	56.5	HA ③ N9 I 台 669
	46	瓦	一	完形	完形	外面楕圓かに調整部、内面に布目織、打ち割りが細い	6.1	5.8	1.7	-	60.5	HA ③ E13 B 台 1169



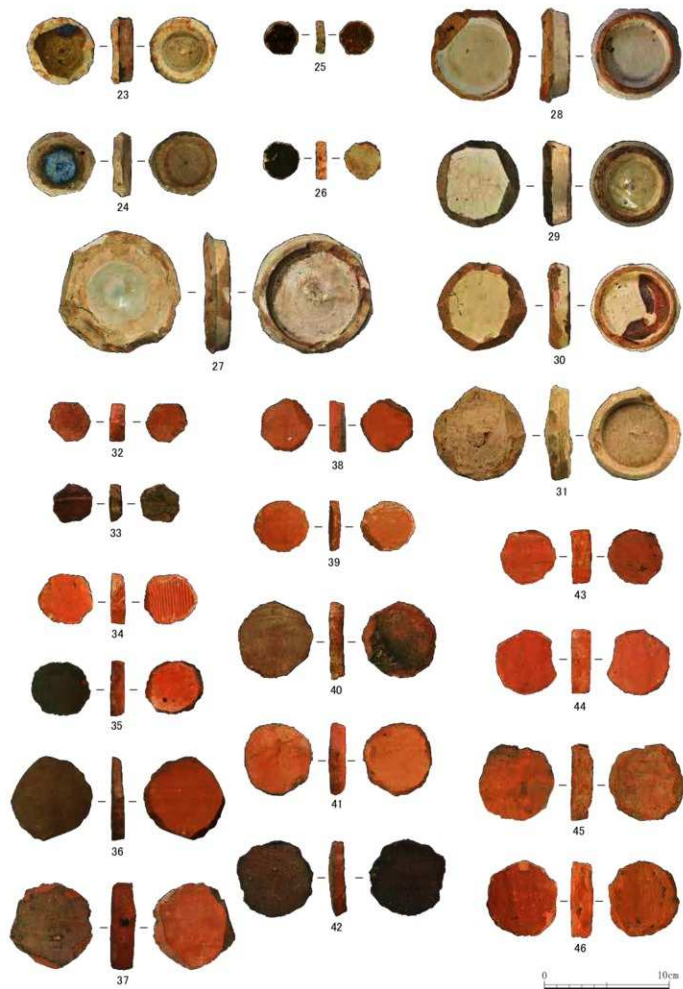
第 152 图 円盤状製品 1



圖版 103 円盤状製品 1



第 153 圖 円盤状製品 2



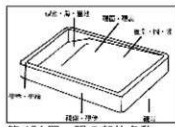
図版 104 円盤状製品 2

(21) 硯 (すずり)

硯は、HA②9点・HA③9点・HA④2点の総数20点出土した。全ての資料がⅡ層以上からの出土であるため、その所属時期は近代まで下る可能性もある。全て破損資料であった。第90表に出土量を示している。

第90表 硯出土量

地区	層	遺構	タイプ			不明			計				
			石質	赤色頁岩	黒炭頁岩	砂岩?	赤色頁岩	黒炭頁岩		砂岩?			
HA③	Ⅱ	遺構	1	1		1	2	1	6				
						1	1		3				
HA②	Ⅱ	上 瓦殿	1				1		1				
							2	2	1	5			
HA④	Ⅱ	SD51			1				1				
					1					1			
合計			1	2	1	2	2	5	1	3	2	1	20



第154図 硯の部位名称

全ての資料が長方硯と思われる、古手とされる楕円形や円形、異形態の硯は出土していない。幅広のものとの幅の細いものが認められ、便宜上前者を「大」、後者を「小」と呼称する。長さが判る資料のうち、大の最長値は13.7cm(図1)を測る。幅は大で7cm台が4点、小で幅6cm台9点であり、最も幅の細い資料は5.4cmであった。厚さに関しては、硯縁の破損資料が多く確実な値が測れたものは少ないが、概ね2cm台、薄いもので1.7cmの資料が確認できた。例外もあるが、硯の厚さはその幅に比例する傾向にある。

図1は、最も完形に近い資料の1つであるが、墨池の右上端を破損している。表裏面には細かい線状痕が確認できる。硯面の中央部分はすり減り度合いが激しく、使用頻度の高さを示している。裏面右上に「三八」の刻み文字が確認できた。図2は右側端を破損しており、全体の幅は測定できない。この資料も硯面の中央がすり減り、表裏面にキズが認められる。図3も上端を破損する。硯縁の劣化が著しく、中央部は刃物痕が無数にみられる。前述の2点同様に硯面中央、墨堂は繰り返し使用したため深く抉れ、すり減る。図4は、残存部が全体の二分の一程度と推測される。墨池の部分にあたる硯縁の内側が曲線を成し、断面で確認できるとおり墨池の部分が高い。図示資料の中では最も幅が広い。これもやはり硯面中央がすり減っていた。図5も上端が破損し全体の長さは不明である。他の資料との相違点は、裏面の硯背部分に一段の縁を設けている点である。この資料も図3同様に硯幅が小さい。類似した資料は、首里城跡一下之御庭跡の報告で認められる。同報告では、硯背部分に文字を刻んだ資料が見受けられるが、多くは年号・月日・所有者氏名などを刻んだものと思われる。今回の資料は漢数字のみ判別されたもの、それ以外はほぼ判読不能である。

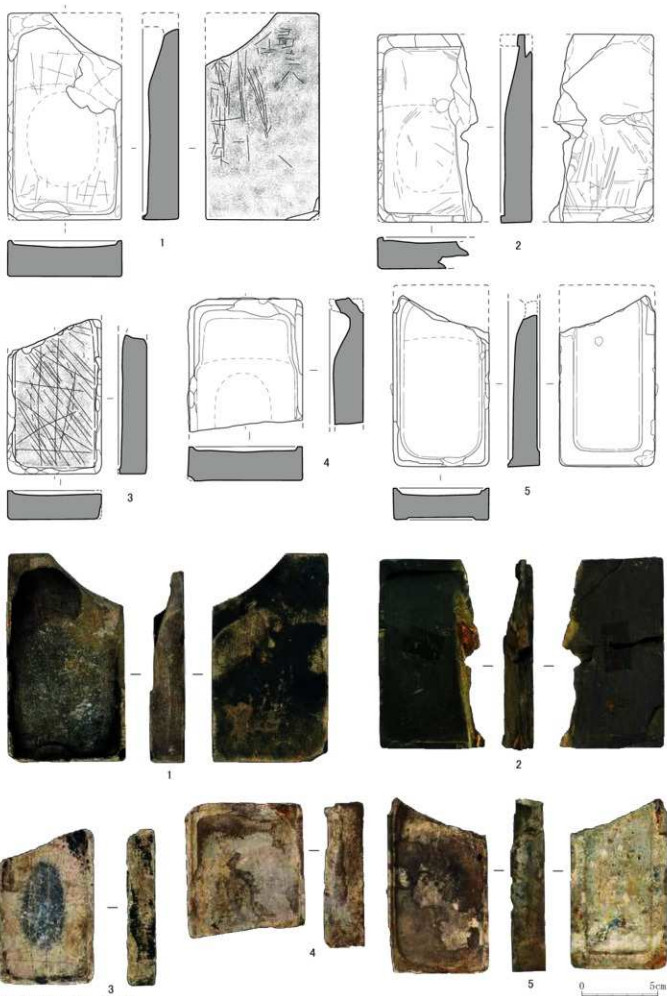
今回の出土資料では、頁岩・黒色頁岩・赤色頁岩・凝灰岩・砂岩の石材を使用しており、大・小両タイプのものどちらにも確認される。また、図示掲載しなかったが、人工石の裏面に石板(黒色頁岩)を貼り付けた硯が1点出土している。硯の産地で知られる山口県下関の赤間石・滋賀県近江の高嶋石・三重県熊野の那智黒など本土産や、中国産の石材は確認できていない。その他の図示掲載以外の資料についても、第91表に個別の観察一覧を示している。

第91表 硯観察一覧

法量単位 (cm³ g)

検出 地域	遺構 番号	残存部 形状	残存 状態	残存 割合	破損箇所	形状	表面・墨池/縁 石	裏面縁/上縁 有無	色調	石質	計測値			遺・ワットド・前 遺構・台座(取)番号
											残存長	残存幅	高さ	
第155 区 105	1	長方形	欠損	9/10残存	墨池・破損	幅広	無し	無し	灰色	砂岩?	13.7	7.5	2.4	344 HA③ F10 台 1935
	2	長方形	破損	2/3程度	石・硯縁破損	幅広	無し	無し	黒炭色	黒色頁岩	12.4	6.9	2.0	274 HA② E19 Ⅱ 瓦殿 7 01 台 864
	3	長方形	欠損	8/10程度	墨池・破損	幅広	無し	無し	明砂褐色	黒炭頁岩	10.2	6.2	1.9	196 HA③ E10 Ⅱ 台 3212.3
	4	方形	平欠	8/10程度	墨池・硯縁破損	幅広	墨池・縁石	無し	明砂褐色	黒炭頁岩	8.8	7.6	2.3	189.6 HA③ C20 Ⅱ 上 瓦殿 台 571
	5	長方形	破損	9/10程度	墨池・破損	幅広	墨池・縁石	無し	明砂褐色	砂岩?	11.3	6.4	2.1	214.5 HA③ E2 Ⅱ 上 瓦殿 台 1498
	6	長方形	破損	2/10程度	墨池・墨堂破損	無し	無し	縁・上縁成	茶褐色	赤色頁岩	8.8	2.2	1.8	49.7 HA② T4 Ⅱ 瓦殿 台 362
	7	不定形	破片	1/10程度	墨池・墨堂破損	無し	無し	石板破損付	黒炭色	黒色頁岩	7.5	4.6	2.0	35.2 HA② Ⅱ 瓦殿 台 637
	8	三角形	破片	2/10程度	墨池・破損	無し	無し	縁・上縁成	明砂褐色	黒炭頁岩	4.7	6.0	2.1	39.6 HA② F20 Ⅱ 瓦殿 台 816
	9	方形	破片	1/3程度	墨池・墨堂破損	幅広	無し	無し	青灰色	砂岩?	6.9	6.0	—	98.5 HA② K6 Ⅱ 三 瓦 台 692
	10	不定形	破片	1/10程度	墨池・墨堂破損	無し	無し	無し	茶褐色	赤色頁岩	4.8	4.2	—	28 HA② E19 Ⅱ 上 瓦殿 台 703
	11	不定形	破片	1/10程度	墨池・墨堂破損	無し	無し	無し	赤褐色	赤色頁岩	7.3	2.2	—	11.6 HA② T1 Ⅱ 瓦殿 台 525
	12	方形	平欠	1/2程度	硯縁・破損	幅広	無し	無し	赤褐色	赤色頁岩	7.3	7.2	—	188.8 HA③ B8 Ⅱ 5-12 台 975
	13	長方形	平欠	8/10程度	墨池・破損	幅広	無し	縁・上縁成	明砂褐色	黒炭頁岩	9.6	6.4	2.2	186 HA③ G11 Ⅱ 台 1658
	14	不定形	破片	2/10程度	墨池・破損	幅広	無し	縁・上縁成	緑茶褐色	赤色頁岩	4.8	6.1	2.2	12.5 HA③ F17 Ⅱ 5-10 台 1226
	15	不定形	破片	1/10程度	墨池・破損	幅広	無し	裏面・幾何学格?	明砂褐色	黒炭頁岩	3.0	7.2	2.0	23.5 HA③ F16 Ⅱ 5-3 台 682
16	不定形	破片	2/10程度	墨池・破損	幅広	無し	縁・上縁成	赤褐色	赤色頁岩	7.0	5.4	1.7	102 HA③ E5 Ⅱ 台 1361	
17	不定形	破片	1/4残存	墨池・破損	幅広	無し	無し	灰色	砂岩?	4.7	6.1	—	71 HA③ A10 Ⅱ 台 2818	
18	方形	破片	1/3程度	墨池・硯縁破損	幅広	無し	無し	緑灰色	頁岩	6.5	6.4	—	88 HA③ F17.18 Ⅱ 5-10 台 2034	
19	不定形	破片	1/4残存	墨池・硯縁破損	幅広	無し	縁・上縁成	灰色	砂岩?	4.6	6.0	2.5	99.7 HA③ F11 Ⅱ 5-2 台 959	
20	不定形	破片	1/4残存	墨池・硯縁破損	幅広	無し	無し	灰色	砂岩?	5.6	6.1	2.3	71.7 HA③ E9 Ⅱ 5-9 台 1075	

凡例：欠損一部が欠ける程度 平欠一辺のみ残存 破損二辺の以下残存 破片一残存が一部程度



第155图·图版105 镜

(22) 煙管

煙管は総数 45 点得られた。種類は羅字煙管と延べ煙管の 2 タイプがある。羅字煙管は雁首と吸口を中央の吸管で繋ぐタイプで、素材別出土数は雁首が石製（シルト岩・砂岩・泥岩）6 点、陶製（沖繩産無釉陶器・沖繩産施釉陶器）20 点、金属製（真鍮？もしくは銅？）3 点が得られ、吸口は陶製（沖繩産施釉陶器）2 点、磁器製（中国産緑釉磁器、本土産肥前系磁器）2 点、金属製（真鍮？と銅？）7 点である。延べ煙管は雁首から吸口まで同一素材の一体型を成すタイプで、出土数は 5 点と少ない。素材別では金属製の真鍮？3 点と銅？2 点の 2 種類が出土した。

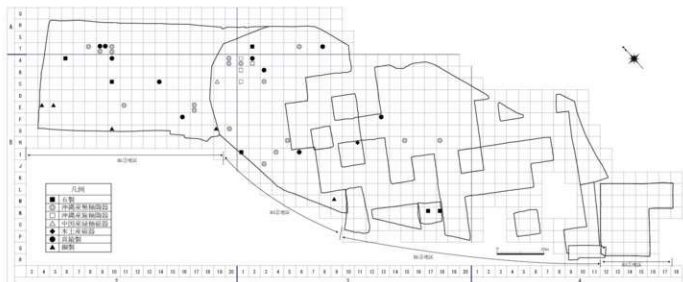
羅字煙管の雁首が 29 点出土しているの 비해、吸口の数量が 11 点と少ない。石製の煙管は雁首のみ出土している。陶製も沖繩産無釉陶器は雁首のみ出土しており、吸口では出土していない。沖繩産施釉陶器は、雁首・吸口とも 2 点ずつ認められたが、軸葉の種類は異なる。金属製の雁首・吸口も同数ではなく、セット関係を導き出すに至らない。破損資料が多く、完形は 22 点の出土である。

地区別では HA ②から 21 点と多く、次いで HA ③が 18 点、HA ④は 6 点の出土である。遺構はⅢ層に集中し、層序別みると、Ⅰ層 5 点、Ⅱ層 30 点、Ⅲ層 2 点、Ⅲ層遺構 7 点、Ⅳ層 1 点でⅡ層が多い。Ⅱ層には屋敷跡の資料も含まれるため詳細は後述する。第 92 表に全体の出土量を示した。

第 156 図に調査区ごとの分布状況を示した。調査範囲では HA ③と HA ②に集中する。個別にみると HA ③が T 8～T 10・A 10 グリッドに集中、E 17 では 2 点出土する。HA ②では T 2・A 20～A 2・B 1・B 3・C 19・C 1・C 3 で集中、このグリッドは祝女殿内にあたる箇所である。祝女殿内からは 9 点、G 19・G 20・I 1 は瓦屋又吉小、H 5・I 4・I 6 は名嘉座の屋敷跡にあたる。地区別遺構は HA ③が A 6・S-256、T 8・S-273-P2 の 2 点、HA ②が SK002 埋土層 3 点、HA ④の P73・P77 が 2 点、層序は全てⅢ層で 7 点である。種類別では沖繩産無釉陶器がⅡ層屋敷跡で 8 点と点数が多く、Ⅲ層遺構で 2 点、遺構外で 8 点出土する。石製は HA ③の A 6・C 10 から 2 点、HA ②の T 2・I 1 屋敷跡で 2 点、HA ④はⅢ層遺構で 2 点出土する。全体の割合は主に HA ②の遺構周辺に多く、HA ③では S-640（自然流路）から北側グリッドの一部集中的で、自然流路から南側のグリッドでは散在傾向にある。

第 92 表 煙管出土量

地区・層	名跡 部位 種類 素材 完・破	羅字煙管														延べ煙管		小計	合計		
		雁首				吸口				その他						一体型					
		石製	陶製	金属製	金属製	陶製	磁器製	金属製	金属製	金属製	金属製	金属製	金属製	金属製	金属製	金属製	金属製				
HA ③	Ⅰ		1																3	18	
Ⅱ			5		1													12			
Ⅲ	遺構	1	1															2			
Ⅳ						1												1			
HA ②	Ⅰ																		2	21	
Ⅱ		1	1		8		1		1	1								16			
Ⅲ	遺構				1	1			1									3			
Ⅳ					1													2			
HA ④	Ⅰ																		2	6	
Ⅱ	遺構		1	1														2			
小計					1	2	2	16	1	1	1	2	2	1	1	4	2	1	2	1	2
合計					1	1	2	2	16	1	1	2	2	1	1	4	2	1	2	1	2
合計					29									11					5		45



第 156 図 煙管 平面分布

第93表はⅡ層の屋敷跡から出土した煙管を細分したものである。前述の第92表で屋敷跡はⅡ層に含めた為、戦前のもので表に示した。屋敷跡は数多く確認されているが、煙管は4箇所の屋敷跡から認められ戦前の屋敷関連のミチなどを含め18点である。祝女殿内では煙管が他の屋敷より多く9点出土した。名嘉座・瓦屋又吉小・大屋の屋敷では3点から1点と少ない。ワキミチ・ナカミチ・畠からは僅か出土している。

上記の表はⅡ層の屋敷跡の個別表だが、Ⅲ層遺構や遺構外の資料とも検討してみた。Ⅲ層遺構からは全体で7点の出土で、屋敷跡(Ⅱ層)の18点が多い。遺構から外れた資料は20点であったが、層序分けするとⅠ層5点、Ⅱ層12点、Ⅲ層2点、Ⅳ層1点となり、この場合も屋敷跡から出土する煙管が多いことが判る。

材質では沖縄産無軸陶器の雁首が多く8点である。例外的な資料では中国産緑釉磁器の吸口が1点認められる。又、沖縄産施釉陶器の雁首と吸口は各1点ずつ認められた。資料の観察状態では軸葉の種類はどちらも透明釉を施しており、軸葉の細かい点は多少異なるが、中央羅字の部分で繋ぐため小口の径が同じであれば軸葉が異なる場合でもセットとして使用した可能性も考えられる。雁首・吸口両側の小口径の数値が同様の計測値を示す。

又、素材の面から屋敷跡・Ⅲ層遺構・遺構外と比較してみると、沖縄産無軸陶器は屋敷内と遺構以外の箇所で9点の同数、Ⅲ層遺構は4点、本土産磁器は遺構以外から1点である。石製の雁首は、屋敷跡(Ⅱ層)、Ⅲ層遺構から各3点、金属製の煙管の出土が遺構以外の箇所では11点に対し、屋敷跡では4点と少ない。相対的に言えるのは層序分けでは屋敷跡の出土が多く、材質別では屋敷跡から金属製の煙管は少ないことが判断できる。

1類：羅字煙管—羅字煙管は素材の種類が多く年代により変遷が辿れる資料もあり多種多様である。雁首と吸口に分けられ、それを繋ぐ接続部分、吸管(羅字)はほとんど竹(竹管)を用いている。

1：雁首—種類は石製・金属製・陶製の3種類が確認され、さらに各々素材別に細分される。

ア：石製—石製の部位は雁首のみで、吸口は県内遺跡でも出土がない。雁首は6点出土し、シルト岩2点、砂岩2点、泥岩2点と石質は微妙に異なるがほぼ同素材とみてよい。

a：砂岩—図9は長軸、短軸、厚みともほぼ同程度で円筒形を呈す。側面は軽く面取りをされている。

b：泥岩—図10は、やや歪で火皿から小口部分にあたる箇所のでっぱりが簡素である。貫通する孔の開け方も雑である。図11は、図9・10に比べサイズが大きく上面・下面・側面とも丁寧に面取りされている。色調は青灰色を呈し、乾燥の為ひび割れが生じている。

c：シルト岩—2点で、完形と破損資料が各1点ずつ出土した。完形資料は51.0gと最も重い。

イ：陶製—沖縄産無軸陶器が多く18点、沖縄産施釉陶器は2点で透明釉と黒釉の2種類が出土している。沖縄産無軸陶器は火皿の上面観、小口の形状が八角形を呈し、沖縄産施釉陶器は円形を成す。宜興窯の模倣品に類似するものは火皿、小口とも面取りが多く多面体を呈し円形に近い。

a：沖縄産無軸陶器—図1は火皿部分が破損、径が大きい。雑なつくりで面取りが八角形ではなく、七角形を呈す。図2は火皿・小口の両端が欠ける。形状は八角形を呈す。図3は、火皿の立ち上がりが高く、図4・5の雁首を含め、沖縄産無軸陶器の中で色調がやや赤色を呈す。首部の面取りは細かく多面的、角を可能な限りおとし円形に仕上げる意図がみられる。火皿の縁がラッパ状に開き、形状も上面観は一般的な八角形ではなく、円形を呈す。小口の断面も同様事が言える。他の沖縄産無軸陶器に比べ、中国・明代の宜興窯・朱泥(紫泥)の影響を受けた印象を持ち、模倣したものと考えられ類似資料が幾つか出土している。

b：沖縄産施釉陶器—図6は脂反し(やにがえし)から首部にかけて破損している。色調は淡緑色を呈し、軸葉は透明釉である。図7は完形資料で、黒釉が掛けられている。火皿の部分は径が小さく、つくりは雑で脂反しの部分は粘土が薄く透けている。首部の形状も円筒形を呈し小口まで直口する。

ウ：金属製—真鍮製と銅製?と思われる資料の2種類、3点出土している。

a：真鍮製?—真鍮は銅と亜鉛の合金で六四真鍮(銅60%、亜鉛40%)、七三真鍮(銅70%、亜鉛30%)と様々な種類がある。出土している資料は雁首の火皿部分が破損し作図に至っていない。

b：銅製?—図8は小口付近上面が潰れ、溶接継ぎ目から裂ける。真鍮と比較し、軽量である。

2：吸口—雁首に比べ出土量が少ないが、磁器製、陶製、金属製の種類があり各々産地、素材で細分される。

第93表 煙管 屋敷別出土量

名称(ミチ)名	素材	羅字煙管(雁首)				羅字煙管(吸口)		
		真鍮製	石製	沖縄産無軸陶器	沖縄産施釉陶器	中国産緑釉磁器	沖縄産施釉陶器	真鍮製
祝女殿内		1	1	1	3	1	1	1
名嘉座						2		
瓦屋又吉小			1		1			
ワキミチ						1		
畠						1		
ナカミチ		1						
大屋			1					

ア：陶製－沖繩産施釉陶器が2点確認されたのみである。

a：沖繩産施釉陶器－図12の特徴は胴部が張り、三日月状の刻みが施される。口付の部分の孔は小さい。釉薬は小口際までは至らない。色調は全体が淡緑色で刻みの部分は若干青味を帯びる。類例資料が湧田古窯跡(1)で出土している。もう1点は胴部に刻みは施されず、孔内部は吸管が止まるよう上げ底状になる。

イ：磁器製－中国産、本土産の産地が違う種類がそれぞれ1点ずつ出土している。

a：中国産－図13の1点のみ出土、他の資料に比べ小型を呈す。口付部分の径は小さく、小口は欠けている。全体に緑釉を掛けるが、釉薬に含まれる鉛の影響で肩部分の表面は銀色の色調が露呈、低下度焼成のため銀化現象をおこし変質したものである。産地は福建省、中国産緑釉磁器という同定結果が出ている。

b：本土産－1点のみの出土である。羅字煙管の吸口と思われ、縦方向に破損、長軸、小口、口付は割れない。小口の外面周囲に須度で描かれた図柄は瓔珞文(ようらくもん)である。

ウ：金属製－吸口も雁首同様に真鍮製?6点、銅製?1点が出土している。

a：真鍮製?－図17は肩から口付に向かい先細りになる。細くなる箇所は六面体を呈す。図16も全体に円筒形を呈し前者のような面はつくられていない。図17より口付の部分は径が若干大きく、貫通する孔も大きい。同様の形状の資料が他1点出土している。図15も長さも前者2点に比べ短く、小口から肩にかけてやや膨らむ。口付の部分は僅かに丸みを帯びる。同じ長さの資料が他2点出土している。

b：銅製?－図14は銅製?と考えられる資料で、軽量で小口から口付まで径のサイズは変化せず、筒形で窪み、折れが数カ所に認められる。

Ⅱ類：延べ煙管－雁首～吸口まで一体型で素材は全て金属製、真鍮3点・銅2点の計5点が出土した。

A：真鍮製－銅素材に比較し硬質である。図18は火皿が僅かに潰れる。真鍮製?と考えられ、裏面に「明視堂」の文字を彫り、丸印に×の刻印が認められる。「明視堂」は県外出身者が戦前まで那覇に店を構えていた。

B：銅製－軟質で真鍮より軽く加工が容易で、製作時は金色の発色が華美な印象を与えたものと推測される。軟質のため劣化した際、器形の損傷が激しく、今回は作図していない。

小結

今回調査の遺物内容は戦前、近代～近世の時期が主体で、煙管もこれまで本町で報告した遺跡のうち最も多く出土した。種類や素材も多様で、県内遺跡の煙管と同種の類例資料が幾つか確認できた。本土では金属製煙管が主流だが沖繩では金属製以外に陶製や石製の煙管が多く出土する。県内で最も多く出土する遺跡は湧田古窯跡で、比較すると雁首部分の出土が多い点も本遺跡と共通する。

特徴的な点を挙げると、量的に沖繩産無釉陶器の出土が多いが、雁首はあるが、吸口の出土例はない。雁首は火皿、小口とも断面八角形を呈す。沖繩産施釉陶器は雁首、吸口とも出土する。図12の沖繩産施釉陶器の吸口は胴部にある刻みの形状など安仁屋トゥンヤマ遺跡、湧田古窯跡で類例資料がみられる。

石製の雁首は台湾の遺跡^{註1}から出土例もあり台湾から伝搬したとも想定される。県内で出土する石製の雁首は模倣品ではないかも推測される。石製雁首は首里城でも出土、磚を再利用した二次製品の雁首未製品が出土している。

図18の真鍮製?煙管の裏面に刻印のある「明視堂」とは、戦前、那覇で県外出身者が営む煙管を扱う店である。武器の携帯禁止時代、護身用に雁首から吸い口までが長い煙管を所持したという事例がある。

沖繩産無釉陶器の中でも色調にやや赤みを帯び、朱色を呈す資料がある。他の無釉陶器より若干つくりも良く薄手である。中国、明代の宣興窯の朱泥、又は紫泥と呼ばれ茶器や急須などに多くみられるもので、煙管にも朱泥(紫泥)の影響を受け、模倣したと推測される。雁首の首部及び小口の面取りは細かく、火皿の部分がややラッパ状に開く。類似資料が多く出土している。

図13の中国産緑釉磁器の吸口は他の資料と比較すると小型である。表面に銀色を呈す部分が認められ、同定の結果、銀化現象であるとのご教示を頂いた^{註2}。銀化現象とは中国漢代の鉛釉陶器やペルシャ陶器などで、時代を経て風化、銀色になったものをいう。

文献では琉球のノロは「煙草ふけふけ云々」と唱え、祭祀に関わる場面で煙草を祈祷の道具として使っている。そのため屋敷跡、特に祝女殿内で煙管が多く出土したのも納得される。

註1：N区係「三奇堂社内遺址受相関水利工程影響範囲地政考古発掘工作計画」台南県政府の委託を受け中央研究院歴史語言研究所が執行した研究報告 2004.98頁、図版201

註2：大橋康二氏による。

第94表 羅字煙管(雁首)観察一覧

法量單位 (cm/g)

巡回 回数	回番号	種類	素材	観察事項	完/破	長さ	火皿の高さ			高さ	地区・グリッド・番 道標・台帳(記)番号	
							外径	内径	小口			
第157回・ 図取106	1	砂岩	サイズ:小型 形状:面取り有り、角を削り円形、一部歪み有り	完	2.0	2.4	外:2.0×1.9 内:1.4×1.4	外:1.1×1.0 内:0.8×0.6	8.6	HA③ N17.18 Ⅱ P77 取100		
	2	石炭	素材:丸く平削り 状態:一部欠けが生じる、形状:つくりは粗雑	完	2.3	3.4	外:2.5×2.2 内:1.6×1.5	外:1.2×1.0 内:0.9×0.9	28.5	HA③ C10 S-17 Ⅱ 台3425		
	3	泥岩	サイズ:長方形、面取り粗雑あり 状態:面取りが弱く生じる	完	2.7	4.9	外:2.8×2.6 内:1.4×1.4	外:1.0×0.8 内:0.8×0.7	49.9	HA③ N18 Ⅲ P73 取99		
	4	沖縄産無鉛鉛炭	小口断面:八角形 状態:大皿:大きい、火皿:一部欠ける	破	4.1	2.0 (0.3)	外:2.1 内:1.5	外:1.6×1.5 内:0.8	14.0	HA③ H15 Ⅲ 台1205		
	5	沖縄産無鉛鉛炭	状態:大皿:平削、小口の断面欠ける サイズ:大きい、つくりは粗雑	破	残存 4.1	1.8 (0.0)	残存:外:2.2 内:1.7	外:1.8×1.7 内:1.1×0.9	10.6	HA③ T8 S-272 PⅢ 台2441		
	6	沖縄産無鉛鉛炭	状態:小口断面:欠ける、色調:全面赤褐色つく り、面取り:なし(面取り)の痕跡のみか?	破	残存 2.6	1.5 (0.2)	外:1.7 内:1.2	—	6.0	HA③ T9 Ⅰ 台1212		
	7	陶製	状態:小口断面:大きい、火皿:立ち上がり短い	破	3.5	1.3 (0.1)	外:1.8×1.7 内:1.3×1.2	—	5.0	HA③ E11 Ⅱ 台1422		
	8	沖縄産無鉛鉛炭	状態:縦方向に大きく破損 火皿:立ち上がり僅かに残存	破	残存 3.4	—	—	外:1.4 内:0.8	3.1	HA② H104 名産Ⅱ Ⅱ 台1117		
	9	沖縄産無鉛鉛炭	状態:全面透り跡を伴う 破損:破けた面を突き出す	破	3.0	(0.0)	外:1.7 内:1.4×1.3	外:1.5 内:0.9	6.0	HA② C1 R09 Ⅱ 台2531		
	10	沖縄産無鉛鉛炭	火皿のサイズ:小型、火皿の形状:楕円形 状態:火皿の内面まで破損有り	完	3.0	1.3 (—)	外:1.6×1.3 内:1.2×1.0	外:1.2 内:0.8	4.2	HA② A1 R01 SK002 Ⅱ 台2203		
	11	金属製 銅?	表面:上面磨かれ、小口:潰れ、歪み有り 火皿の径:小さい	完	3.7	1.8 (0.6)	外:1.0 内:0.9	外:1.1×1.0 内:1.0×0.9	5.5	HA③ E4 Ⅱ 台604		
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
—	石炭	—	シルト岩	状態:大皿:小口断面に破損、一部平削、孔一部残	破	—	—	—	6.1	HA③ A6 S256 Ⅲ 台2385		
		—	シルト岩	色調:青灰色、表面:粗雑に平削、形状:面取りあり	完	3.1	3.9	外:2.8,内:2.5	外:1.3,内:0.8	51.0	HA② T2 R09 Ⅱ 台4218	
	—	—	砂岩	形状:面取り有り、部分的に平削面、角は鋭い	完	2.4	3.1	外:2.3,内:1.5	外:1.4,内:1.0	27.0	HA② Ⅱ Ⅱ Ⅱ 取109	
	—	—	沖縄産無鉛鉛炭	状態:大皿破損、小口断面:円形、太さ変化なし	破	3.1	—	—	外:1.5,内:1.0	7.5	HA③ E17 Ⅱ 台1315	
	—	—	沖縄産無鉛鉛炭	状態:大皿破損、小口断面:円形、面・継ぎ目面	破	2.8	—	—	外:1.4,内:0.8	4.7	HA③ E17 Ⅱ 台1583	
	—	—	沖縄産無鉛鉛炭	状態:ほぼ円形、小口:円形、面取り細かい	破	残存 2.3	—	—	—	1.9	HA③ T10 Ⅱ 台2853	
	—	—	沖縄産無鉛鉛炭	破片、形状:大皿上面・小口断面:八角形?	破	2.1	—	—	—	2.7	HA③ T10 Ⅱ 台1776	
	—	—	沖縄産無鉛鉛炭	破片、形状:大皿上面・小口断面:八角形?	破	2.1	—	—	—	2.7	HA③ T10 Ⅱ 台1776	
	—	—	沖縄産無鉛鉛炭	状態:大皿平欠、形状:小口:八角も八角形?	破	残存 4.2	1.20(2)	—	外:1.5,内:0.9	10.1	HA② A20 R09 Ⅱ 取155	
	—	—	沖縄産無鉛鉛炭	ほぼ円形、表面の一部、小口断面:楕円八角形	破	—	—	—	—	1.8	HA② T6 Ⅲ 台776	
	—	陶製	—	沖縄産無鉛鉛炭	状態:大皿、小口断面、小口断面:八角形	破	—	—	—	—	4.1	HA② J3 Yメネズ Ⅱ 台1056
—			沖縄産無鉛鉛炭	状態:大皿平欠、面取り:小口断面面	破	—	—	—	—	外:1.5,内:0.9	3.7	HA② A1 名産 SK002 Ⅱ 台2203
—			沖縄産無鉛鉛炭	状態:小口大きく破損、面取り:破けた面多量	破	—	—	外:1.9,内:1.3	—	3.0	HA② A20 R09 P02-04 Ⅱ 台1885	
—			沖縄産無鉛鉛炭	状態:大皿丸型破損、色調:赤・黒色面焼き多量	破	—	—	—	外:1.4,内:0.9	4.9	HA② C3 破損 Ⅱ 台497	
—			沖縄産無鉛鉛炭	状態:大皿:大皿平欠、小口断面:楕円八角形	破	—	—	外:1.8,内:1.1	—	3.6	HA② H5 名産Ⅱ 台976	
—			沖縄産無鉛鉛炭	状態:小破片、計測不可、色調:赤色	破	—	—	—	—	1.0	HA② J3 Yメネズ Ⅱ 台2407	
—			沖縄産無鉛鉛炭	状態:大皿全て破損、小口断面:八角形	破	—	—	—	—	外:1.6,内:1.0	9.0	HA③ H18 Ⅱ 台2388
—			金属製 銅?	状態:大皿:面取りから平削、小口断面:六角形	破	残存 4.7	—	—	外:0.9,内:0.8	7.3	HA③ A10 Ⅱ 台664	
—			—	—	—	—	—	—	—	—	—	
—			—	—	—	—	—	—	—	—	—	
—			—	—	—	—	—	—	—	—	—	

大皿の高さ:断面図からの高さ()内は断面のみ高さ
破:破:大皿、小口、潰れ、歪みがある場合

第95表 羅字煙管(吸口)観察一覧

法量單位 (cm/g)

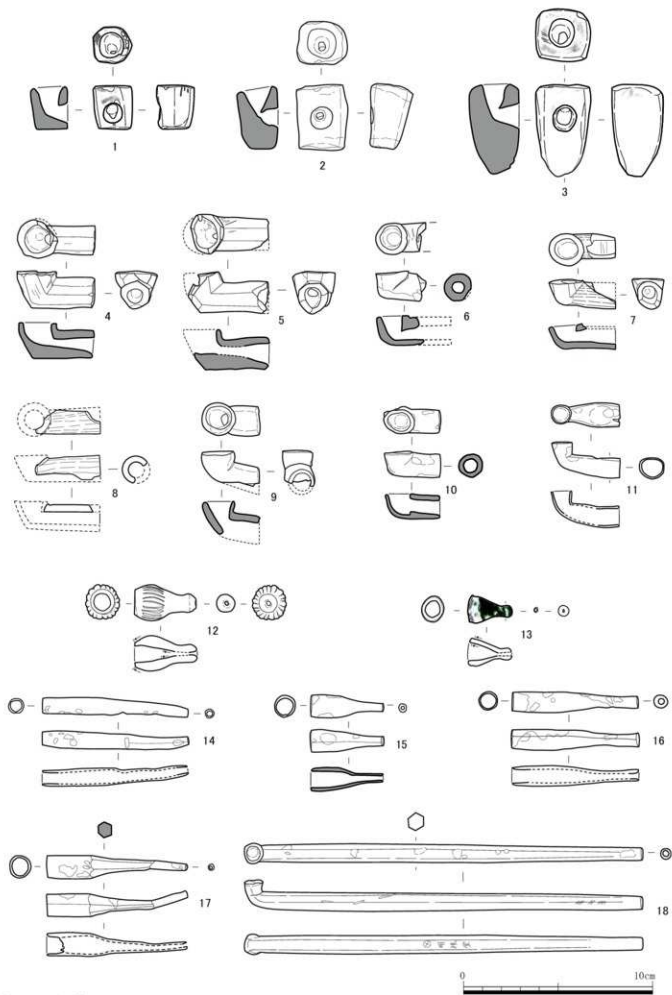
巡回 回数	回番号	種類	素材	観察事項	完/破	長軸 (長さ)	短軸 (最大)	小口		高さ	地区・グリッド・番 道標・台帳(記)番号			
								外径	内径					
第157回・ 図取106	12	陶製	沖縄産無鉛鉛炭	状態:全体に透り跡有り 破り跡:1箇所見られる	完	3.3	1.8	1.3	1.0	0.4	7.4	HA② A2 Ⅲ SK032 R09 Ⅱ 台2441		
	13	—	中国産無鉛鉛炭	長軸サイズ:短小型、小口歪みあり 1径の孔:開口部小さい	完	2.3	1.5	1.4×1.3	0.9×0.8	0.7	2.6	HA② C19 Ⅲ 破損 台1656		
	14	—	銅?	長軸サイズ:充分長さあり 断面が平たい、2分所で折れ曲がる	完	7.7	1.0	0.8	0.7	0.5	0.3	7.2	HA③ G10 Ⅲ 破損 台665	
	15	—	金属製 真鍮?	長軸サイズ:短め、重量有り	完	3.9	1.2	1.2	0.9	0.5	0.3	8.5	HA② T8 Ⅰ 品 台2547	
	16	—	—	真鍮?	長軸サイズ:長さあり 1径の開口部:開口部不齊	完	6.7	1.1	1.0	0.8	0.7	0.4	10.0	HA② F13 Ⅲ 台1197
	17	—	—	真鍮?	小口断面:円形 1径の開口部:六角形歪み、重量感あり	完	7.7	1.3	1.2	1.0	0.4	0.2	13.8	HA③ T9 Ⅰ 台1212
	—	—	—	真鍮?	長軸:長さ不明、1径:破損	破	4.8	1.2	1.2	1.0	—	—	11.8	HA③ T9 Ⅲ 破損 台663
—	—	—	金属製 真鍮?	長軸:短め、小口:潰れ、開口部悪い	破	残存 4.0	1.3	—	—	—	0.7	0.3	6.9	HA② H6 Ⅲ 名産 取73
—	—	—	真鍮?	長軸サイズ:長め、開口部悪い	完	7.3	1.2	1.0	0.7	0.8	0.3	13.1	HA② B3 Ⅲ 破損 取178	
—	—	—	陶製	沖縄産無鉛鉛炭	状態:白濁、孔内部:貫通部2段	完	3.3	2.0	1.6	1.0	0.8	0.5	10.0	HA② B1 Ⅲ 破損 台1942
—	—	—	磁器製	本土産磁器	形状不明、絵付:残存で磨滅多量	破	残存 2.7	残存 2.1	—	—	—	—	—	HA④ H11 Ⅱ 台2342

第96表 延べ煙管観察一覧

法量單位 (cm/g)

巡回 回数	回番号	種類	素材	観察事項	完/破	長軸 (最大)	短軸 (最大)	火皿の高さ		口径	高さ	地区・グリッド・番 道標・台帳(記)番号		
								外径	内径					
第157回・ 図取106	18	金属製	真鍮?	形状:羅字断面は八角形、火皿:中や浅くなる 目印:凹か窪く円形成形	完	21.1	1.0	1.4 (0.6)	1.1	0.8	0.6	46.4	HA③ C14 Ⅰ 取 台563	
	—	—	—	形状:羅字断面は丸く円形、羅字に羅字目 部有り、状態:一部折れ曲がり、電氣あり	完	18.5	0.8	1.4 (0.4)	0.9	0.7	0.6	0.4	20.2	HA③ E5 Ⅲ 取 台673
	—	—	—	状態:部分に折れ曲がり、電氣あり 形状:羅字断面は丸く、円筒形	完	18.3	0.8	1.6 (0.5)	1.0	0.8	0.6	0.4	15.3	HA③ C19 Ⅲ 取 台562
	—	—	—	状態:折れ付き一部破損、明確でない 形状:羅字断面は八角形と円筒	完	20.6	0.9	1.3 (0.6)	1.0	0.8	0.6	0.4	31.7	HA③ F16 S-3 Ⅲ 取 台607
	—	—	—	真鍮?	状態:大皿、1径、面取り粗 雑:大皿、1径(計測不明)	破	残存 12.4	1.0	大皿破損	—	—	—	—	38.0

() 内の数値は火皿の高さ



第 157 图 煙管



0 10cm

圖版 106 煙管

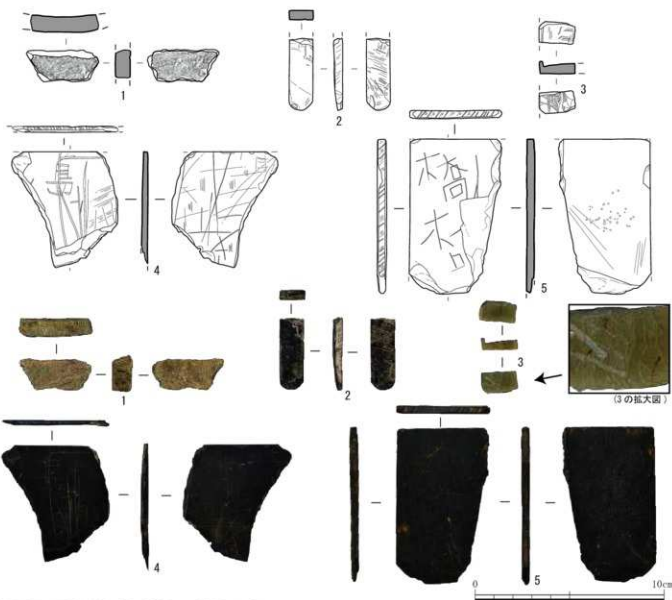
(23) 滑石製品・石製品・石板

滑石製品1点・石製品2点・石板が7点、計10点出土し、そのうち石板は使用痕が認められる資料2点を図化した。全てⅡ層からの出土で、地区別ではHA②で石製品1点、石板1点、HA③で滑石製品1点、石製品1点、石板5点、HA④から石板が1点出土した。図1は滑石製石鍋の胴部片で軽く湾曲し、反りがみられる。二次加工の素材と考えられる。HA②・③からは滑石混入のガスク土器も出土している。図2の残存形状は平面観が「U」字状を呈し細かい線状痕が認められ、特に裏面に多い。図3の石製品は断面が「L」字状の立ち上がりを呈し緑の様に認められる為、器の類と思われる。裏面に陰刻文で青海波状の図柄が確認できる。石質は軟玉で産地は日本・中国・韓国にあり沖縄本島に産出せず、中国では彫刻材、印材に用いられている。図4の石板は先端の鋭利なもので線書きの痕跡があり表面に「鳥」の文字、裏面は不明瞭だが「目」の文字に読み取れる。図5も、線書きで、「橋」「木」の文字が確認できる。検出された遺構は、S-12（浦伊礼小溝）、瓦屋、S-10（ナカミチ）、SD41（サカミチ）で、全て戦前の屋敷跡と道関連からの出土である。

第97表 滑石製品・石製品・石板 観察一覧

(法量単位: cm, g)

図版 図号	図号	器種	完/破	残存	形状	断面 形状	加工痕/ 使用痕	石質	最大長	最大幅	最大厚	重さ	地区・グリッド・層・遺構・台帳番号
第 158 図・ 図版 107	1	滑石製品	破損	一部	平皿	反る?		滑石	1.7	3.5	0.8	10.0	HA③ D8 B 台745
	2	石製品	破損	一部	縦長舌状	扁平 薄手	線状痕:裏面 磨痕:側面	滑石片岩	3.8	1.3	0.5	5.1	HA③ A18 B S12 台3561
	3	石製品	破片	縁あり	不定形	薄	裏面:縦形	軟玉	1.2	1.9	0.5	2.4	HA④ 102 B 瓦屋 台2325
	4	石板	破損	一部	扁平	薄	使用痕:線書き	黑色千枚岩	6.1	5.6	0.3	15.5	HA③ C17 B S10 台3484
	5	石板	破損	一部	扁平 板状	薄	使用痕:線書き	黑色頁岩	8.2	4.8	0.4	34.7	HA③ J14 B SD41 台3049.2



第158図・図版107 滑石製品・石製品・石板

(24) 鍛冶関連遺物

鍛冶関連遺物は羽口、鉄滓、炉壁、焼土が確認された。主なものを第 160 図に示し、平面分布を第 159 図、出土量を第 98 表にまとめた。以下それぞれについて略述する。

1. 羽口

羽口先端とその他破片の出土総数は 14 個、総重量は 421.1 g で、ほぼⅡ層出土(第 98 表)である。炉側先端部の形状は、円筒形(図 1・2)、角筒形(図 3)があり、気泡痕が見られる溶融物が先端に付着し、縁辺部側面にも見られることから炉壁面より僅かに突出していたものと考えられる。第 160 図に特徴的な HA③出土の 3 点、第 159 図に平面分布を示す。

図 1 は、外径約 9.4 cm、風道孔径約 2.3 cm、断面形は円形、重量 77g、D8、Ⅱ層出土。図 2 は、風道孔周囲が欠損し先端外縁部に溶融物が付着する。外径約 8.4 cm、風道孔径は約 3.7 cm、重量 69.4 g、D8～E8 自然流路(S-640)Ⅲ層下出土。同図 3 は 1 辺が約 8 cm の隅丸方形と見られ、風道孔径は約 4.3 cm、重量 45.1 g、G7、Ⅱ層出土。羽口の土質は、砂粒や石英等を含む砂質と含まない泥質がある。先端部の溶融物付着面にはガラス質状の光沢も見られる。破損部に見られる色調は外側が褐色を呈し内側へ橙褐色となり、風道口面は褐色を呈する。

2. 鉄滓

鉄滓の出土総数は 146 個、総重量は約 17,267.8g、出土個数の約 74%がⅡ層出土(第 98 表)である。椀形滓が大半で不定形のものもある。全体形が窺える資料は少ない。図 4 の縁に厚みのあるもの(約 3cm)、図 5 のやや薄いもの(約 2cm)、図 6 の薄いもの(約 1cm)に大別される第 160 図に特徴的な資料を図示し、第 159 図に平面分布を示す。

図 4 は椀形滓、僅かに欠損部が見られる。上面縁に炉壁に近いことで生じたと思われる反り上がりがある。白色粒(石灰岩?)、砂粒、貝片の付着が上面の中央部にあり、下面では全体的に見られる。色調は褐色が主体であるが、欠損部は暗灰色を呈し、表面に比して気泡痕が多い。全体的に土や砂が付着したものである。最大径は 12.8 cm、重量 1,028 g、C11、Ⅱ層出土。同図 5 は椀形滓としたが、上面は滓の重なりによる段差があり中央部が窪み、下面は塊が突出する。表面は僅かに赤錆色部分に砂粒が付着する。色調は全体的には茶褐色であるが、暗灰色部がまだらに露出する。重量 295 g、C11、Ⅱ層出土。図 6 は前述の 2 点に比して薄く、上面縁に滓の固まりが付着する。最大幅は 8 cm、重さ 132 g、B10、S-37 出土。

椀形滓の破片は縁辺部片や中央部片があり、前者には 3 cm×5cm 程度の大きさが目立つ。破損面が鋭い光沢を有しガラス質の粒が目立つものや粒々状の塊も見られる。色調は暗黒灰色、暗灰色、暗灰色に赤錆色(白色粒、石英が付着する)がある。図示を割愛したが、図 6 に類似する薄くて扁平なものにも滓が重なるもの、極端に薄いものも見られる。また、炉壁に接したために縁辺の一部が縦位に広がる面となり焼土が付着したと考えられるものもある。

3. 炉壁

鍛冶炉の溶融物が付着した炉壁と見られるもので、表面は炉内側面と見られ、裏面は羽口と同様な土や色調の破損面、総出土数は 182 個、総重量は 4,069.6g、出土個数の約 81%がⅡ層出土(第 98 表)である。鍛冶炉の送風口と見られる大型破片 2 点を図 7・8、第 159 図に平面分布を示す。

図 7 は、残存する孔の最大径が 2.4 cm。孔は土の盛り上りの中央に位置しており、孔の周辺にはガラス質の溶融物を含む滓の付着物による盛り上がりが見られる。表面は緑灰色や灰白色を呈し、気泡痕が部分的に集中する。裏面の破損面の孔周囲にはやや弧状を呈するひび割れが見られ、羽口の接合面の可能性があるものと思われる。重量 139 g、D10、Ⅱ層出土。

図 8 は、孔から 5～8cm 離れたところでは、気泡痕が弧状にまとまり赤錆色を呈する。この部分は反り上がっており、炉壁形状が変化するところと思われる。孔周辺は図 7 のような溶融物の付着はほとんど見られないが暗褐色を呈する範囲が幅約 3.5 cm で円形に広がり、灰色を主に灰緑色や暗灰色がまだらに広がる色調を呈する。裏面の焼土には、羽口の接合面と思われるひび割れは見られない。石灰塊や砂粒の混入が目立つ。重量 320 g、C11、Ⅱ層出土。

4. 焼土

総出土数は 165 個、総重量は 2,186.5g、約 47%がⅡ層約 43%がⅢ層出土である。第 159 図に平面分布を示す。焼土はいずれも小破片であるが、図示は割愛したが平坦な整形面を 1 面、または 2 面、3 面有するものがあり、植物痕の有無の特徴が見られる。土質は砂質、色調は羽口や炉壁、鉄滓に付着する焼土に類似するものと、砂粒を多量に含む脆いものがあり色調は橙褐色と褐色を呈するものがある。後者は羽口や炉壁とは異なるものと思われる。

小結

これらの鍛冶関連遺物は HA③に多い。第 98 表に示した出土状況で見るとほぼⅡ層出土である。Ⅱ層が堆積する立地で見ると、HA③では自然流路(S-640)、流路の東側で丘陵からの土砂の影響を他地区よりも受けた一帯、流路西側

の砂丘上堆積に大別され、HA ②④は砂丘上の堆積である。HA ①は北側が砂丘、南側には自然小流路群が検出され、鍛冶関連遺物は出土していない。

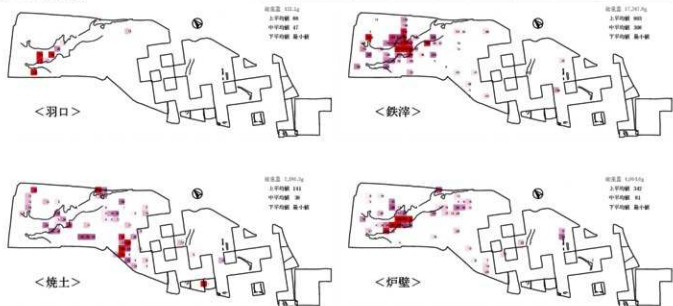
第159図の平面分布では、羽口、鉄滓、炉壁はHA ③A～D11～14の自然流路(S-640)の中段で幅広となる一帯、HA ③DE8～10の流路下流側の流路が分岐する一帯にまとまりが見られる。出土分布の密度は低い、出土箇所では鉄滓と炉壁は同様な広がりである。遺構出土にはHA ③S・T・A～C5～10で検出されたピット群や石組遺構、HA ②F～M19・20、1～6にまとまる土坑・ピット群からの出土、HA ④E・F19で出土量は少ないが鉄滓・炉壁・焼土が出土している。鉄滓には33箇の2面目遺構に横乱溝で示したS-7(R・S11・12、T・A12)、炉壁にはSD59にⅢ層出土のものもある。鉄滓・炉壁・焼土の中でⅢ層・Ⅲ層下出土のものは、遺構出土が多いが伴発遺物では明確に古い時期を示す結果は得られていない。鍛冶関連遺物に見られる平面分布は、Ⅲ～Ⅱ層期にかけて鍛冶場が移動した可能性、または、ムラの変遷を示唆するものと思われる。

戦前の集落配置に当てはめると、屋敷地内や道路(ウラムチ、ナカミチ)、集落南・東側の耕作地となる。鍛冶遺構は、本調査区内や隣接する遺跡においても発見されていないが、火を強く受けた遺構には、祝女殿内で「風呂場」のような施設が検出され、コンクリート製の溜枘状構造物があり燃焼痕跡も認められる(註:第V章1節4を参照)。本調査区内の出土状況から鍛冶遺構はHA ③付近の丘陵側またはHA ②の西側に可能性があるものと考えられる。隣接する遺跡には、既報告の「平安山原B遺跡」(2015)

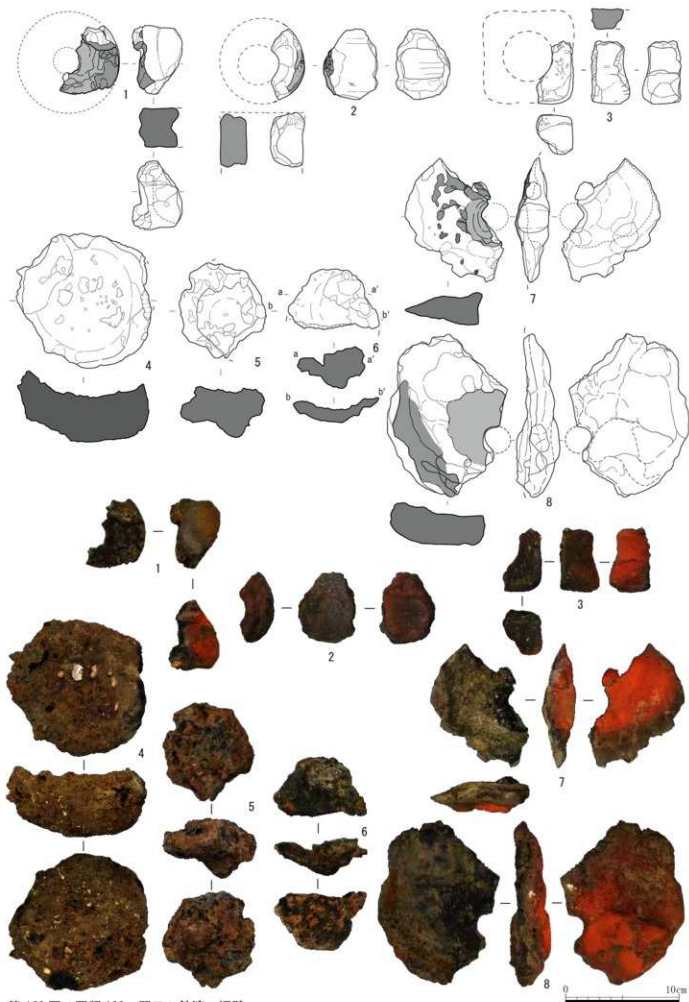
第98表 鍛冶関連遺物出土量 (法量単位: g)

地区	層	羽口		鉄滓		炉壁		焼土		
		個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	
HA ③	Ⅰ層			12	863.0	18	296.0	1	29.1	
	Ⅱ層	12	337.3	96	14008.8	117	3225.1	37	641.3	
	Ⅲ層			3	1086.0	5	55.9	5	34.1	
	Ⅲ層下	1	71.0	8	758.5	1	30.3	8	29.5	
	合計	13	408.3	119	16716.3	141	3607.3	51	734.0	
HA ②	Ⅰ層			2	45.0			3	9.0	
	Ⅱ層上					1	5.0	3	17.1	
	Ⅱ層	1	12.8	17	184.3	29	298.2	40	624.8	
	Ⅲ層			4	115.8	1	12.0	62	657.3	
	合計	1	12.8	23	345.1	31	315.2	108	1308.2	
HA ④	Ⅰ層									
	Ⅱ層			2	159.4	2	17.0	2	20.7	
	Ⅱ～Ⅲ層			2	47.0	3	31.0			
	Ⅲ層					5	99.1	4	123.6	
	合計			4	206.4	10	147.1	6	144.3	
別別合計	Ⅰ層			14	908.0	18	296.0	4	38.1	
	Ⅱ層上					1	5.0	3	17.1	
	Ⅱ層	13	350.1	115	14352.5	148	3540.3	79	1286.8	
	Ⅱ～Ⅲ層			2	47.0	3	31.0			
	Ⅲ層			7	1201.8	11	167.0	71	815.0	
Ⅲ層下	1	71.0	8	758.5	1	30.3	8	29.5		
合計			14	421.1	146	17267.8	182	4069.6	165	2186.5

の燃焼施設(1018SX)、サーター屋跡の窯跡1(石組の窯跡)近くで検出された窯跡2が想起されるが、同遺跡の調査では羽口と焼土の出土は少量である。戦前の旧字平安山には、鍛冶屋の記録や証言は得られていないが、「鍛冶屋」に関連する地名として、『北谷町史』(民俗下)、『北谷町の地名』に記載されるHA ③北側の丘陵谷間を通る道に「カンジャヤーヌスバ(鍛冶屋の近く)」の名称がある。戦前の北谷村内(現在の嘉手納町域を除く)には、桑江ヌ前屋取に鍛冶屋をしていた「瓦屋(カーラヤー)カンジャヤー小(グワー)」、「ユールヤー」(註:第V章1節4を参照)、「細工(セーク)カンジャヤー小」、「大(ウフ)カンジャヤー」、土勢頭屋取に「鍛冶屋城間(カンジャヤーグシクマ)」がある。



第159図 羽口・鉄滓・焼土・炉壁 重量平面分布



第 160 图 · 图版 108 羽口·鉄滓·炉壁

(25) 埴

4点が得られた。いずれも破片資料であり、3辺が残存するものがないために平面形状は不明である。辺の残存率が最も高いものから、少なくとも1辺が15cm以上を測る。いずれの資料も灰色の色調を呈し、厚さが約5cm、表面が平滑であること等が共通しており、全て同タイプのものであった可能性がある。図1には幅6～8mmほどのピッチで平行する線刻のようなものが認められた。成形痕であろうか。これ以外の刻印・ヘラ描といった痕跡は、外面に残存していなかった。

県内の埴については、首里城跡及び湧田古窯跡での出土例が知られている。『首里城跡』(2010 県埋文センター)において上原静氏が埴の分類を行っており、以下に略示する。

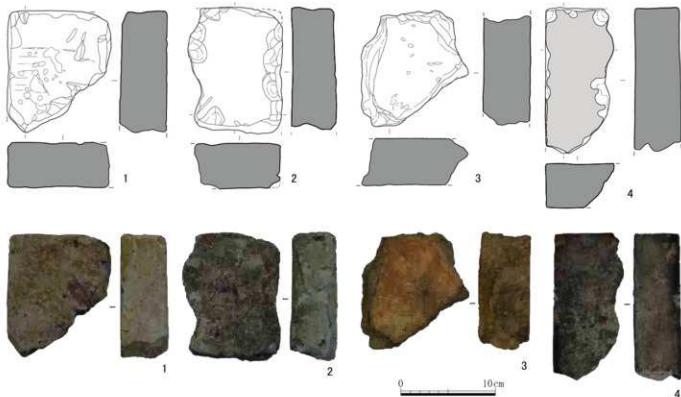
I：長方形で、長軸の側面が短軸の両側面に段を成形し、複数組み合わせて使用するもの。灰色を呈する。

II：長方形で、下駄状の突起を成形するもの。厚手はみられず、灰色を呈する。

III：正方形形または三角形で、平面敷き用のもの。灰色と赤色のものがある。

IV：長方形で、積み重ね用のもの。灰色と赤色のものがあり、大量の漆喰が付着する。

今回の出土資料は、III、平面敷き用タイプに当たるものと思われ、中でも厚手であるa類、という分類がなされることになる。近世に帰属すべき遺物であるが、当該期の平安山において平面敷きの埴を伴うような施設があったとは、出土点数の面からも俄かには考えにくい。現状では何処からか何らかの理由で持ち帰ったもの、とするのが妥当と思われるが、今後その出自が明らかにしていくことが課題である。



第161図・図版109 埴

第99表 埴 観察一覧

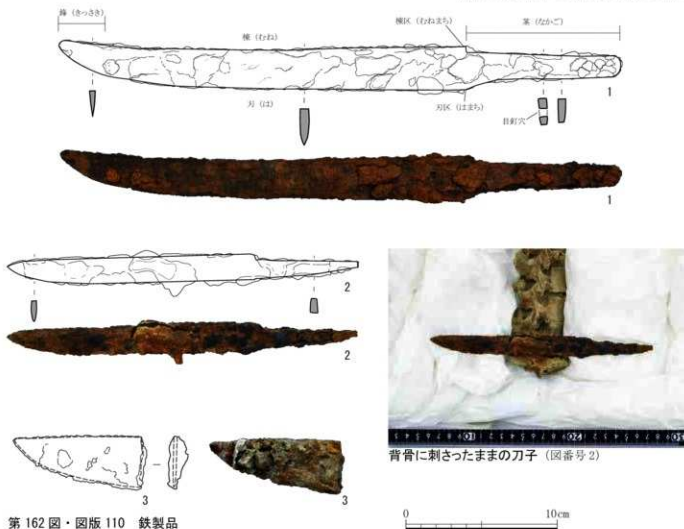
(法量単位: cm, g)

調査年度	図番	残存部位	長	短	厚	重量	観察事項	出土人物	出土地点
第161図 図版109	1	角1	12.9	10.7	5.0	813	表面に幅6～8mmほどのピッチで平行する線刻あり。	灰黒色・赤褐色	平A① F14 SD42 台 284
	2	角1	13.0	9.1	4.9	804	表面がやや黒ずんでいる。	灰黒色	平A③ B16 II 台 3320-1
	3	角無	11.5	10.3	5.0	709	表面劣化。表面に漆喰付着。	灰黒色	平A② A1 R2M 取 148
	4	角1	15.2	6.9	5.0	590	表面・側面に漆喰付着。	灰黒色	平A③ B16 II 台 3320-2

(26) 鉄製品

2点の鉄刀類が出土した。類例として参考にした今帰仁城跡・勝連城跡からは、刀子として分類されたものが多く出土しているが、最大のもは今帰仁城跡志慶真門郭出土の完品で、その刃長が15.3cmである(1983今帰仁村教委)。今回出土した2点はいずれもそのサイズを凌駕している。1はHA④Ⅲ層(南北ベルト1-23層)から出土した完品形で、刃長が約27cmで全体の反りが小さいことから、「短刀」に分類できる。鋒(きっさき)付近は棟側に緩やかに反る。棟区(むねまち)には明瞭な段を有し、茎(なかご)はほぼ真っ直ぐ延びている。X線撮影により、茎中央に径5mmの目釘穴が1穴確認された。2は人骨12の背骨に刺さった状態で見つかった資料である。刃先棟側は僅かに内傾するが、棟はほぼ直状となる。刃区の段が殆どなく、茎が刃側に偏っている。目釘穴はX線撮影でも認められなかった。刃長は約16.4cmと長いものの、勝連城跡出土の刀子に類似した形態のものが散見されるため、現状では大型の刀子として取り扱うべきかと思われる。しかしながら、一般的に刀子の用途は小刀のような万能工具と捉えられることが多く、その意味において今回の出土状態は異常と言える。沖縄県内でこれまで刀子としてきたものにも武器としての性格があるのか、今回の事例が極めてイレギュラーなものなのか、今後検討を要するであろう。周辺での遺物出土状況から考えると、1・2ともにグスク時代～近世初頭の範疇に入る蓋然性は高い。3は過去の試掘調査出土のもので、既に鉄鏝として報告されている破片資料である(2008北谷町教委)。旧ナガサ川本流域にあたる地点から得られたため帰属年代を推定することは難しいが、改めて形状を観察してみると、前述2点との類似性が強いため、本項で再掲載するものである。

※部位の名称は『図説江戸考古学研究叢書』(2001)を参照した。



第162図・図版110 鉄製品

第100表 鉄製品観察一覧

法量単位: (cm³/g)

図版 図号	図番号	形種	全長	刃長	厚	重量	観察事項	出土地点		
第162図 図版110	1	短刀	37.1	27.0	10.1	2.8	0.57	253.0	鋒が僅かに反る。茎中央付近に目釘穴1つ。	HA④B3F15 墓壇 台4495
	2	刀子?	23.2	16.4	6.8	1.7	0.32	—	刃先棟側に内傾する。茎が刃側に偏る。目釘穴なし。	HA④B3H19 人骨12 背骨
	3	刀子?	(8.5)	—	—	3.3	0.38	(32.4)	刃先部のみの破片資料。刃先棟側は直状。	伊D 試掘3-5 (B4G~E20)

(27) 石器

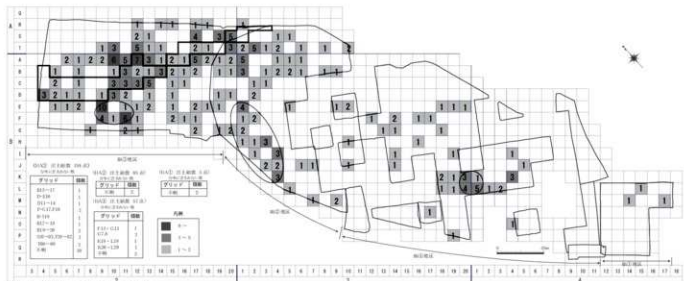
石器は石斧、敲石、敲石兼磨石、磨石、台石、石皿、砥石、クガニ石、石板などの器種が確認でき総数 333 点出土した。器種のうち最も多いものは磨石で 128 点、次いで砥石 54 点、石斧 52 点である。特徴としてこれまで本町の既報告には各遺跡に 1 点の出土であったクガニ石が、今回は 8 点と多く、それに反し石皿は 1 点と少ない。又、ガスク相当期と考えられる砥石もこれまでより多く出土している。

地区別では HA ① 5 点、HA ④ 54 点、HA ② 83 点、HA ③ 191 点で、HA ③からの出土が最も多い。層序は相対的にどの地区もⅡ層出土が多く、個別にみると石斧は HA ③のⅡ層で最も多く 19 点、敲石兼磨石は HA ②のⅡ層で 16 点である。磨石も同様に HA ②のⅡ層 18 点、さらに、HA ③のⅠ層 10 点、Ⅱ層遺構 17 点、Ⅱ層で 57 点出土している。砥石は HA ③のⅡ層遺構 7 点、Ⅱ層で 18 点、HA ②のⅡ層 12 点である。第 101 表に全体の出土量を示した。

第 163 図は調査区における石器の出土状況を平面分布に示したものである。HA ③のグリッド A～C10～13 で一つのまとまり E・F9～11 で一つ、HA ③・②の S～B17～2 は集中部と捉えることができる。その他 E～K1～4 でも僅かに認められる。HA ④・①では出土量が極端に減少し 1 点から 2 点の出土で散見され、K・L20・1 で一つの小さい集中部とも考えられる。

第 101 表 石器 出土量

地区	層	器種		石斧					敲石	敲石兼磨石	磨石	台石	石皿	クガニ石	砥石		用途不明石皿	石板	合計	
		大型	中型大	中型小	小型	サイズ不明									目録後期	ガスク期				
		基部	刃部	粗加工	基部	刃部	粗加工													
HA ③	I								3	2	10				2	1	1		22	
	II 遺構			1	1				1							1			2	
	II 遺構							2	8	1	17			1	5	2	2	3	45	
	III 遺構	2	1	4				5	4	3	8	3	57		3	12	6	2	2	112
	III 遺構																		1	
	IV											4				1			5	
HA ②	I								1										1	
	II 遺構																		2	
	II 遺構										2	2			1				7	
	III 遺構	1	1	3						7	16	18	6		1	2	10	2	1	67
	III 遺構									1	1	2				1			1	7
	小計	1	5	1	1					8	18	22	6	1	1	4	11	3	1	83
HA ④	I									1	1								3	
	II 遺構									1	1								5	
	II 遺構										3								9	
	III 遺構			1	2						1	1							4	
	III 遺構					1	1			1	1	4				2			20	
	IV	1	1	2	1	2	1			2	2	6							3	
HA ①	I								1	8	3	17				3	6	1	1	54
	II 遺構										1					1			2	
	小計										1					1			5	
合計	3	5	10	4	9	8	4		38	29	128	7	1	8	54	9	7		333	



第 163 図 石器 平面分布

1. 石斧

石斧は52点の出土で石器全体の15.6%を占め、磨石・砥石に次いで多く、石器のなかで編年年代の基準になる器種である。完形31点、破損資料17点、(基部9点、刃部8点)粗加工品4点で、完形には若干の刃こぼれや、軽く刃の潰れた資料も含めたが、刃部形態が把握可能なものは少ない。又、刃の潰れのみられる資料は敲石に転用したと考えられるが、石斧として形態の判る限り分類し集計に含めた。転用品は8点で石斧の形状を留めつつ刃部が大きく潰れ、刃先の潰れた幅が1cm以上で面を成すもの、なお且つ敲きの痕跡や擦痕などが認められたものを転用品とした。

分類は全体の平面・側面観、刃部の平面・側面観とサイズで分け、形態分類は佐原真氏¹⁾、サイズに関しては平口哲夫氏²⁾の報告を参考に一部変更した。

I-1. 形態 (平面)

- A. 撥形—三味線のバチ形を呈し、基端頭部が小さく刃部に向かい比較的幅広になる
- B. 短冊形—長方形を呈し、幅広のものと幅がないものも有り、基部から刃部までほぼ同じ幅をもつ
- C. 柱状形—全体の形状が柱状を呈すもの
- D. 不定形・不明—撥形、短冊形、柱状形の中間タイプ、或いは基部、刃部が破損により、形態不明

I-2. 形態 (側面)

- イ. 基部が肉厚タイプ—乳房状石斧、太形始刃などの大型の石斧に多く両刃、始刃に多くみられる
- ロ. 基部が薄手タイプ—扁平石斧など、片刃が付くことが多い

II. 刃部形態

平面観

1. 円刃—刃の中心から左右にラウンド状に刃が付く
2. 直刃—刃の中心から直線で刃の左右に角をつくる
3. 偏刃—刃の付け方、長さが左右で異なる
4. 刃部破損 (分類不可)

側面観

- a. 両刃タイプ—両面から均等に刃を研ぎ出す (始刃も含む)
- b. 両刃の片刃—両刃と片刃の中間タイプ
- c. 片刃の両刃—両刃と片刃の中間タイプ
- d. 片刃タイプ—刃の付方、研ぎ出しが片面から強く研ぎ出す

III. サイズ分類

1. 大型—長さが13cm以上、又は重量が400gを超えるもの
2. 中型—大 長さが11~13cm、又は重量が300g程度のもの
3. 中型—小 長さが8~11cm、又は重量が200g程度のもの
4. 小型— 長さが8cm以下、又は重量が100g以下のもの
5. 不明・その他—基部、又は刃部のみ残存、平面形態の長さが二分の一以上破損している

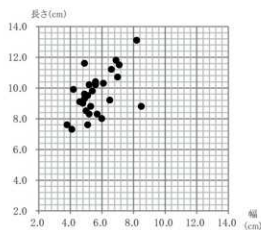
第102表に石斧の形態別にサイズの割合を比較した。形態では撥形が最も多く16点、短冊形10点、柱状形1点である。他に不定形10点、分類不可11点、粗加工品が4点認められた。不定形としたものには撥形と短冊形の中間タイプや、どちらにも属さないものを含めた。サイズでは大型3点、中型—大5点、中型—小は19点、小型が4点、サイズ不明21点で不明資料を除き中型—小が最も多い。形態とサイズで比較すると大型は全て短冊形、中型—大はわずかに撥形が多く、短冊形、不定形は1点ずつである。中型—小も撥形が多い。

全体的に分類不可・サイズ不明が多く、明確な傾向は掴めていないが、撥形の中型—小が今回の調査では最も多く出土することになる。

第164図に石斧の長さ・幅の計測を行い、大きさの傾向を示した。図に示した対象は基部、刃部の半欠資料は除外した。小型の資料は7cm台が3点で、8~10cm台が14点、10~12cm台が10点である。サイズの大きな資料では13cm台が認められる。長さ8.8cm、幅8.5cmとサイズ比が同じ値を示す資料は図2の大型に含めた資料で刃部の研ぎ直しを繰り返したと考えられ長さが極端に短い。

第102表 石斧形態別分類

形態	サイズ					合計
	大型	中型—大	中型—小	小型	不明	
撥形		3	10	3		16
短冊形	3	1	3		3	10
柱状形					1	1
不定形		1	6	1	2	10
分類不可 (基部、刃部破損)					11	11
粗加工					4	4
合計	3	5	19	4	21	52



第164図 石斧(完形)長さ×幅の相関

2. 敲石

敲石としたものは38点で出土量全体の11.4%と敲きの用途のみに使用された資料は磨石に比較して少ない。地区別ではHA③が最も多く22点、HA②は8点、HA④も8点である。どの地区も層序はⅡ層及びⅡ層遺構からの出土が多く、Ⅳ層ではHA③で1点のみ確認された。形態では図35の石敲状の資料、図30の球状に面を成すもの、図32のやや厚手のもの、その他、長楕円や楕円形、半円形、略円形なども認められた。

3. 敲石兼磨石

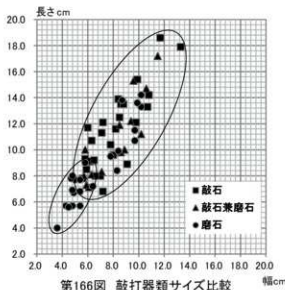
敲石兼磨石は29点と全体の8.7%程度で、今回は兼用で使用した資料は点数的に少ない。地区別ではHA①で2点、HA②は18点、HA④3点、HA③6点とHA②が多く、層序ではやはりⅡ層出土が多い。特にHA②のⅡ層は16点でそのほとんどを占める。形態は敲石、磨石と大きく変化はないが、磨りに使用後、研磨面の中心や側面に浅く敲打痕が認められる資料が多い。

4. 磨石

磨石は最も多く128点得られ、全体の38.4%を占める。地区別でHA③が89点と圧倒的に多く、次いでHA②から22点、HA④が17点である。層序ではⅡ層からの出土が57点と多い。形態は大別して石敲状、球形、円形などの形態が認められたが、図42の磨石は他の資料に比べ、かなり大型を成すが破損し大きさが不明である。

上記3種類の敲打器類について長さ・幅のサイズ比較を第166図に示した。完形に近い資料を計測し、敲石27点、敲石兼磨石13点、磨石23点の合計63点を対象に扱った。

その結果、敲石は長さ6cm台から18cmと小型から大型の資料が認められた。長さ・幅の比率の範囲では全体に長楕円形の形状が多いことが判る。敲石兼磨石も又、長さ7cm台から17cm台まで、幅は5cm台から11cm台で大ききの基準が一定していない。磨石は最小の資料で長さ・幅ともに4cm台のものから、14cm台の範囲までで大きさにばらつきが認められるが、サイズは磨石で小型のサイズを使用していることが判る。全体では磨石が小型、敲石がやや大型の素材を選択していると考えられる。



第166図 敲打器類サイズ比較

第104表 敲石・敲石兼磨石・磨石 観察一覧

法量単位 (cm, g)

地区別	調査年	器種	形態	側面形態	加工/使用痕	完/破	石種	観察事項	最大長	最大幅	最大厚	重さ	地区・クワッド・層遺構・台帳(取)番号
第173号・区画14	30	敲石	球形	厚手	敲打痕 窪み	完形	砂岩	形状:角の短いサイコロ形。使用面:六面体を成す窪み;各面中央に有り。敲打痕:表面中央に有り	6.8	7.2	6.3	456	HA② R4 II 三良
	31	敲石兼磨石	楕円形	厚手	敲打痕 研磨痕	完形	花崗閃緑岩	敲打痕:表裏面。中央に有り 研磨痕:表裏面。右側:花崗閃緑岩とは異なるか?	9.8	8.6	5.7	8240	HA② B10 I S37 台3255
	32	敲石	略円形	厚手	敲打痕 窪み	完形	硬質 燧石	敲打痕:表裏。裏面。上下不明瞭に確認 窪み:表裏面。下面やや深い。研磨痕:中央に一部深い	8.9	9.1	6.3	850	HA③ L01 II 台1327
	33	敲石	楕円形	薄手	敲打痕 研磨痕	破損	黄レイ岩	敲打痕:表面中央に明瞭に確認。研磨:敲打凹辺。裏面一部削れ有り(裏面)。上面石高面有り	8.2	6.9	4.6	440	HA③ E19 IV 台1246
	34	敲石	半円形	厚手	敲打痕 窪み	破損	玄武岩	形状:裏面破損。自然面露出。敲打痕:表面中央に浅く浅く窪み 石質:硬質で良好	8.9	8.2	5.4	5120	HA② S17 II S35 台3444
	35	敲石	石敲状	薄手	敲打痕	完形	砂岩	敲打痕:表面中央明瞭。両側面。上下ともに僅かに有り 研磨:僅かに有り	9.6	8.0	4.2	575	HA③ R4 II 台1320
36	敲石兼磨石	楕円形	薄手	敲打痕 研磨痕	完形	砂質片岩	敲打痕:表面中央浅く確認。研磨痕:表裏面に面研磨方向:使用向き表面磨方向。裏面横方向	11.2	10.2	5.5	980	HA② L20 III SP1204 台4053	
第174号・区画15	37	敲石兼磨石	楕円形	薄手	敲打痕 研磨痕	破損	角閃石安山岩	敲打痕:表面中央。側面。厚縁にあり 研磨:表裏面全面にあり	11.9	8.5	5.8	780.5	HA③ I 台3309
	38	敲石	楕円形	薄手	敲打痕 研磨痕	完形	無輝岩	形状:両側面にくびれ状窪み。敲打痕:表裏面。側面。上下面に僅かに。研磨:表裏面明瞭。磨打部凸る	14.2	10.2	4.7	1260	HA③ I 台4597
	39	敲石	長楕円形	薄手	敲打痕 窪み	完形	砂岩	敲打痕:表裏面中央。側面に明瞭な凹み	10.7	6.3	3.4	373	HA② H4 II 名産庫 台65
	40	敲石兼磨石	長楕円形	薄手	敲打痕 研磨痕	完形	玄武岩	形状:楕円形が異形。横断面:三角錐。敲打痕:表裏面。両側面窪み研磨:部分的に黒光り確認	10.0	5.8	3.3	253	HA② E1 II 祝院 台4198
	41	敲石兼磨石	三角錐形	厚手	敲打痕 研磨痕	完形	角閃岩	敲打痕:表裏面。側面。上面の3方角。研磨:表裏面。下面一部に確認確認。敲打。研磨。部分的に黒く染けた痕跡	10.0	8.9	5.7	800	HA③ L1 III 台1293
	42	磨石	球形	不明	研磨痕	破損	花崗閃緑岩	形状:球定球形。残存半完形の1/8以下。破損部:自然面露出 研磨:破損部以外研磨有り	18.1	11.2	9.9	2000	HA② R4 II 三良 取100

5. 石皿

石皿は破損資料1点の出土で使用痕から石皿と判断したが、敲石や磨石の出土量と比較し、量的に少ない。形状はおそらく原形の二分の程度と推測され不定形で、使用面は表面のみ認められ裏面と上下面、側面片側は大きく破損する。残存する使用面の中央は緩やかな窪みを有し、拳大の磨石が填る大きさを呈す。出土地 HA ㉔ E1. 瓦屋又吉小, II層上層、計測値: 残存長 22.3cm、残存幅 13.0cm、残存厚 7.0cm、重量 2.3kg、石質: 砂岩

6. クガニ石

クガニ石は本調査で破損資料を含め8点と石器全体の2.4%にすぎないが、本町既報告の各遺跡に1点出土のところ、今回は比較的数量が得られた。地区別では HA ㉔ 1点、HA ㉔ 7点で、層序の内訳は1層から2点、II層5点、IV層1点の出土である。図化した資料は5点でIV層資料は破損品のため除外した。遺構からは祝女殿内1点、S-7で1点、S-27で1点出土したがS-27は攪乱されておりI層扱いとした。石質の種類は角閃石安山岩2点、斑レイ岩2点、砂岩4点である。

図43は形状が半月状で図44に比べ平面観の縦幅が短く、上端の稜線は幅があり通常のものと若干異なる。下部は弧状を呈し中央に敲打痕がみられる。石質が角閃石安山岩のため表裏面の研磨はかなり顕著である。

図44は平面観がやや半月状を呈し、上部が細く上端に1cm程度の稜線が認められる。下部は上部とは逆に5cm前後の幅をもち、敲きの痕跡はみられず表裏面は軽い研磨痕が認められる。石質は砂岩を使用し重量感がある。

図45はこれまでの資料に比べ小型で平面観は隅丸方形を呈し、側面は上端が細く稜線をつくる。表裏面は全体に浅い研磨が施され、中心の一部は研磨がさらに明瞭である。

図46は全体に細身の杖状の形態で、表面は研磨され両端から下面にかけて左右の形状がアンバランスなつくりを呈す。表裏面に小さく敲打痕が認められ又、下部には大きな敲打痕が明瞭に窺える。石質は砂岩を用いている。II層 祝女殿内 アサギ出土。

図47は平面観が楕円状で出土した資料のなかで最も大きく、裏面は上部から中心近くまで破損している。石質も特徴的で硬質の斑レイ岩を使用し重量も8点のうち3.400gと最も重い。S-27 1層 攪乱出土。

クガニ石は白木原氏が名称づけた石器で民俗資料のクガニシ(黄金石)⁸³⁾が由来となる。奄美諸島に多く確認されており、北はトカラ列島の中之島、タチバナ遺跡から、南は沖縄本島中部、嘉手納町野国貝塚まで出土する。その他、各地の遺跡でも出土例があり北原貝塚(1995)、平敷屋トウバル遺跡(1996)でも出土している。白木原氏の分類では、A型: 上辺に凸帯のあるもの(断面ピリケン形)、B型: 上辺に凸帯のないもの(断面倒卵型)とする。今回は白木原氏の提唱する分類に従い同様に試みたところ、本遺跡の資料は、全てB型の範疇に収まる。以下観察表に詳細を記述した。民俗事例

クガニ石は奄美・徳之島でも多くの発見例があり村祭り、年中行事で使用されるという。クガニシは別名ムチタボレイシ、又はホマイシとも言うが、徳之島では部落によって呼び名が違う。往時7月の収穫後、若者たちがムチタボレをするのに「黄金と餅と替えて給われ」と歌いながら石を担いで家々を訪れ、歌の終わるのに合わせて地面に落とし餅を貰う。クガニシを持つのは男女問わず若者で、状況により4~7箇のクガニシを大ききの順に持っていくとの事。このことから白木原氏はクガニ石を差して考古遺物であり、民俗資料でもあると述べている。

第105表 クガニ石観察一覧

法量単位 (cm, g)

図44	図45	図46	平面形態	側面形態	加工痕/使用痕	定/破	石質	観察事項	最大長	最大幅	最大厚	重さ	地区・グリッド・層遺構・台帳(図)番号
第175号・図44・116	43	半月形	B型	敲打痕 研磨	定形	角閃石安山岩	表裏面: 二面研磨。表面: 中央に敲打痕 下面: 中央大きく浅い凹打。両側面: 縁一部欠け	9.0	19.1	6.2	1877.0	HA ㉔ C10 II 台 3311	
	44	半月形	B型	成形 研磨	定形	砂岩	表裏面: 研磨痕。上辺: 細かい成形による無数の 敲打 上辺: 稜線をもつ	12.2	20.2	7.0	3000.0	HA ㉔ A12 II 台 2336	
	45	隅丸方形	B型	敲打痕 研磨	定形	砂岩	色調: 赤く変色。風化? 表裏面: 研磨 側面: 稜線有り。上辺: 1cm程度の稜線。下面: 敲 打有り	9.4	12.4	5.8	1000.0	HA ㉔ C3 B 2階 台 4195	
	46	楕円杖形	B型	敲打痕 研磨	定形	砂岩	成形: 良好。表裏面: 中央に浅い敲打痕 上辺: 研磨により稜線。下面: やや窪み/窪み二方所	8.1	15.3	6.0	1380.0	HA ㉔ C11 II 台 3269	
	47	半月形	B型	敲打痕 研磨	定形	斑レイ岩	表裏面: 研磨。一部窪み研磨らず 研磨: 部分的に消滅。表面: 上辺が欠け	14.6	20.8	6.3	3400.0	HA ㉔ D04 I S-27 台 3260	
国・図44なし	—	不定形	B型	成形・研磨	破損	角閃石安山岩	形状: 半欠。上辺: 粗広 研磨: 表裏顕著側面: 自然面呈す	11.5	8.3	6.7	875.0	HA ㉔ T12 II S-7 台 3424	
	—	不定形	B型	成形	破損	斑レイ岩	形状: 半欠。上辺稜線: 幅9mm。表面: 成形打撃 研磨: 上辺	8.0	12.6	6.2	472.5	HA ㉔ A10 IV 台 3261	
	—	不定形	B型	成形	破損	砂岩	形状: 半欠。上辺稜線: 幅: 2.2cm。表面: 緩く面 を成す	9.6	11.2	6.6	1168.0	HA ㉔ I 台 3267	

7. 砥石

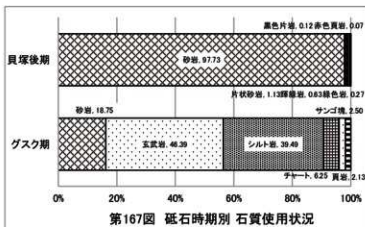
砥石は総数 54 点出土し全体の 16.2%で磨石に次いで多い。縄属時期により形態や使用痕が若干異なり、貝塚後期の砥石とグスク相当期と想定される砥石の 2 種類が確認された。貝塚後期と考えられる砥石は 27 点で、グスク相当期と考えられる砥石も 27 点出土した。出土地区は HA ① 2 点、HA ④ 9 点、HA ⑤ 15 点、HA ③ 28 点である。

層序は I 層 4 点、II 層 38 点、II 層上部 2 点、III 層 9 点、III 層下部 1 点で II 層からの出土が最も多く、グスク相当期の砥石は II 層の屋敷跡から多く出土している。貝塚後期の砥石は形態が板状や不定形のものが多く、破片の爲図化した資料は全てグスク相当期の砥石である。特徴として細かい切り傷状の刃物痕が多く、金属（鉄、他）の研磨に使用したと推測され貝塚後期の砥石と比較して多面的に使用している点が上げられる。さらに携帯用に穿孔のある資料も確認できた。札状・板状・角柱状・扇状の形態など、全ての資料に該当しないが、分類した資料はどれも使用痕に共通点が多い。又、グスク土器の出土状況と兼ね併せてみるとグスク相当期の砥石も時期的に対応するかと推測される。

図 48～図 51 は形態が角柱形の範疇と捉えた。図 49 は、中心の使用頻度が高めで中央から外側に反る。図 50 は 48 と同形のやや大きい角柱形で使用痕が 3 面に認められ、細かな無数の切り傷状擦痕で石斧を研ぐための砥石と使用痕が違ふ。図 51 の石質は片状砂岩を使用し後期的である。図 52～図 57 は前者に比較し扁平状、薄手を呈す。図 52 は扁平・不定形で、図 53 は形が整い使用痕が顕著、図 54 も板状を成し図 55 は両面使用で中心がかなり薄い。図 56 においても表裏面が反り上がり、図 57 になるとさらに薄く、石質は特徴的なシルト岩を用いている。

図 58～図 60 は小型資料で、58 は横断面が正方形の角柱形を成し、59 は若干、短冊状を呈す。図 60 の砥石は小型札状で表面上部中央に穿孔痕が確認できるが、裏面まで貫通しない。図 61 は素材が異なりサング塊（ハマサンゴ）を用いて上面中央に穿孔し裏面まで貫通、携帯用砥石と考えられる。砥石として馴染みのない素材で表裏、両側面、上面の五面に研磨が認められ形状は方形を成す。図 62 は破損し側面の厚みは一定、上面を穿孔し貫通する。図 63・64 は扇形の形状を呈し上部より下部が若干厚い。上端中央に穿孔痕が確認されるが、図 64 では貫通しない。両者はどちらも上端が破損、表裏・両側面とも使用痕が確認される。図 65 は表面から上面へ穿孔するが、上面の平坦面と穿孔以外に使用痕は認められない。

石質の点から考察するとグスク相当期の砥石の産地は沖縄産と考えにくい玄武岩が多いことが特徴的である。



第 106 表 砥石形態別 使用面比較

形態	1面		2面		3面		4面		5面		多面体	合計
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
板状	1		1		1		1		1			4
扇形									1			2
角柱										4	1	5
札状											1	1
三角形	1											1
圓角方形	1											1
楕円形					1							1
加幅形									1			1
長形				1								1
板内形								1				1
板外形									1			1
不定形	10	1	7		1	4	1					125
電形					1							1
扁平・不定形	2			3		1		1	2			9
合計	15	1	8	6	2	7	2	8	4	1	1	54

第 167 図に貝塚後期と思われる砥石とグスク相当期の砥石を石質別に比較した。貝塚後期の砥石は砂岩が 97.8%を占め、圧倒的に多い。その他の数%には片状砂岩、輝緑岩、緑色岩、黒色片岩、赤色頁岩が使用されている。

グスク相当期と考えられる砥石には玄武岩が 46.4%と最も多く、それと二分する量でシルト岩が 39.5%を占める。次いで砂岩が 18.7%と若干少なく、他の石質はチャート、サング塊、頁岩が使われている。

第 106 表に砥石の形態と使用面について分類を行った。形態は大別を試みたが不定形の資料が多く 14 形態に分類、使用面では 1 面から 5 面又、多面体の使用も確認された。貝塚後期の砥石は 1 面使用が 15 点、2 面 8 点、3 面 2 点、4 面 2 点の合計 27 点である。グスク相当期の砥石は 1 面使用が 1 点のみ、2 面 6 点、3 面 7 点、4 面 8 点、5 面 4 点、多面体 1 点の合計 27 点である。貝塚後期とグスク相当期の砥石が回数にも関わらず貝塚後期の砥石は 1 面のみの使用が最も多く、グスク相当期の砥石は複数面の使用が多い。貝塚後期の砥石は、置き砥石として使用面が表面、又は表裏面の 2 面に使用痕の認められる資料であり、グスク相当期の砥石は手持ち砥石と考えられサイズもそれほど大型ではな

い。又、穿孔があるものは携帯用と考えられる。ガスク相当期の砥石は、浦添城跡でも確認され、伊礼原B遺跡・E遺跡(2008)及び伊礼原E遺跡(2010)では、戦前に使用したと考えられる砥石も出土している。

第107表 砥石観察一覧

法量単位 (cm, g)

調査年度	調査区	発掘	時期	形態	加工痕/使用痕	完/破	石質	観察事項	最大長	最大幅	最大厚	重さ	地区・グリッド・副遺跡・台帳 (取) 番号	
第176区・調査区117			48	ガスク期	角柱	研磨痕・線状痕	完形	玄武岩	形状：上下両端未成形成いは自然面。砥石面跡：表裏面・側面。線状痕：表裏面・側面	9.3	4.3	3.7	170	HA④B3 F12 SP870 台3834
			49	ガスク期	角柱	研磨痕	完形	玄武岩	形状：上面磨削面跡有り、後内使用砥石面跡：表裏面・側面。線状痕：表裏面・側面	4.0	6.1	4.7	156	HA②H3 II 名品庫 台1155
			50	ガスク期	角柱	研磨痕・線状痕	完形	玄武岩	形状：上下両端未成形成いは自然面。砥石面跡：全面・刃物砥ぎ。線状痕有り	10.0	5.9	5.1	330	HA①M14 II 取14
			51	ガスク期?	角柱	研磨痕	完形	砂岩	形状：8の字形状。上下自然面。厚み：側面不均等使用痕：表裏面・側面	14.1	8.3	6.1	904	HA②D2 II R02 台4199
			52	ガスク期	扁平・不定形	研磨痕・線状痕	破損	玄武岩	形状：上下端部破損。自然面露出砥石面跡：表裏面・側面。線状痕：各使用面有り	6.6	5.1	3.4	156.5	HA②B9 II R02 小台1001
			53	ガスク期	扁平・不定形	研磨痕・線状痕	破損	玄武岩	形状：上面破損。長さ不明砥石面跡：上面有り、下面斜めに使用痕	7.5	6.8	2.8	164	HA②T8 II 高台4255
			54	ガスク期	扁平・不定形	研磨痕・線状痕	破損	玄武岩	形状：上下・両側面大きき不明。状態：表面中央突起使用痕：上面有り、線状痕も有り	4.5	7.7	2.5	93.1	HA②C2 I R02 台4240
			55	ガスク期	扁平・不定形	研磨痕・線状痕	破損	玄武岩	形状：側面破損。中央薄く、左右削り、反り上がる使用痕：かなり深い。線状痕：全面有り、刃物砥ぎ	7.5	8.7	3.9	163	HA④N17 III P39 台75
			56	ガスク期	扁平・不定形	研磨痕	破損	玄武岩	形状：上下・両側面破損。形状推測不可使用痕：表裏面。使用状況：中央薄く、縁が反る	5.7	7.8	3.2	151.5	HA③R14 I S-90 台3397
			57	ガスク期	扁平・不定形	研磨痕・線状痕	破損	シルト岩	形状：上下破損。全体形状不明。薄手でヘリが反る使用痕：表裏面に明顯。色調：灰色のシルト岩有り	4.2	8.6	1.3	85.0	HA③E13 II 台3447
			58	ガスク期	角柱	研磨痕	破損	玄武岩	形状：上下破損・長さ不明。四角柱砥石面跡：上面。うち一面研削面跡、シルト岩有り	3.1	2.1	2.0	19.6	HA③R15 II 台1279
59	ガスク期	短筒形	研磨痕	破損	玄武岩	形状：小型・短筒形。一面破損。手持ち砥石	3.2	2.8	1.6	21	HA②C19 II 瓦屋 台929			
60	ガスク期	札形	研磨痕・穿孔痕	破損	砂岩	形状：長方形・薄く札形。下部破損・長さ不明砥石面跡：上面有り、穿孔痕。上面中央穿孔・貫通せず	3.9	2.2	0.8	13.2	HA②J03 II SX01 名品庫 取105			
61	ガスク期	長方形	研磨痕・押痕・穿孔痕	完形	サンゴ塊 (ハマサンゴ)	砥石面跡：四面有り、押痕：表裏面・上面・片側面穿孔痕：表面下部中央穿孔・裏面まで貫通	9.1	6.3	3.0	118.4	HA①E II R02 台4211			
62	ガスク期	扁平・不定形	研磨痕・穿孔痕・線状痕	破損	玄武岩	形状：上下・片側面・下面一部欠損穿孔痕：上面中央側面から穿孔。研磨痕：砥石面跡	5.9	5.5	1.9	80	HA④K0-L20 III SP1223 台4076			
63	ガスク期	扇形	研磨痕・穿孔痕	破損	玄武岩	形状：上面・片側面・下面一部欠損穿孔痕：上面中央側面から穿孔。研磨痕：砥石面跡	9.1	6.9	3.7	213	HA②B8 II 高台1192			
64	ガスク期	扇形	研磨痕・穿孔痕	破損	玄武岩	形状：上面欠損。下縁縁・面成す。研磨痕：表裏・両側面穿孔痕：上面中央・裏面まで貫通せず	6.7	4.1	2.7	73.2	HA③C12 II 台3333			
65	ガスク期	楕円形	研磨痕・穿孔痕	完形	砂岩	使用痕：両側面部分の上面磨削面跡穿孔痕：表面中央より上面へ貫通	5.9	4.5	2.8	140	HA④K20 III 台1326			

< 石質 >

石器・石材は石器333点、石材383点、自然礫445点の総計1,161点出土した。石質同定の対象は石器のみに限定し、今回は石材等の同定は行っていない。石器にみられる岩石は系統として火成岩9種、変成岩7種、堆積岩9種の3系統25種から成る。全体をとおし火成岩系統の岩石は重量比では少ないが種類は多く認められた。

第168図に出土した主な岩石の比率を示した。出土量の多い順に列挙すると砂岩57.5%、斑レイ岩11.0%、角閃石安山岩5.0%、輝緑岩4.9%、角閃岩3.9%、玄武岩3.8%、片状砂岩2.6%、輝石角閃石安山岩2.5%、花崗閃緑岩2.0%、閃緑岩1.4%、礫質砂岩1.2%、シルト岩1.1%、緑色岩0.8%、石英安山岩0.7%、砂質頁岩0.7%、泥岩0.4%、チャート0.2%、サンゴ塊(ハマサンゴ)0.1%、頁岩0.1%である。

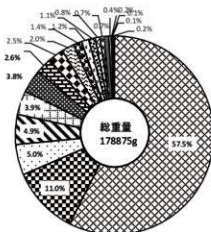
その他に含めた粘板岩、泥質片岩、黒色千枚岩、黒色片岩、黒色頁岩、赤色頁岩(黄鉄鉱含む)等の岩石は比率にして0.1%に満たず、それらをまとめた合計が0.2%となる。

堆積岩系統の岩石は砂岩、礫質砂岩、頁岩、黒色頁岩、赤色頁岩、泥岩、シルト岩、チャート、サンゴ塊(ハマサンゴ)など、最も多いのは砂岩の57.5%で沖繩本島に最も多い岩石である。同じ堆積岩系統の岩石にも、産出される地層の地質年代の違いで確認される産地がそれぞれ異なる。

変成岩系統の岩石は緑色岩、片状砂岩、砂質片岩、泥質片岩、粘板岩、黒色片岩、黒色千枚岩などが確認され、最も多いものは片状砂岩で全体の2.6%を示し沖繩本島でも採取される。変成岩系統の岩石も変成作用の違い、変成度の高低差で採取される産地は異なり主に沖繩本島中部以北で産出される。

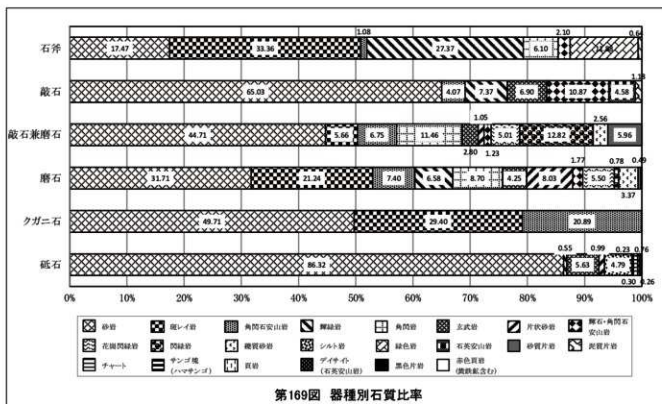
火成岩系統で出土した岩石は斑レイ岩、輝石角閃石安山岩、角閃石安山岩、輝緑岩、角閃岩、玄武岩、花崗閃緑岩、閃緑岩、石英安山岩で最も多いのは斑レイ岩の11.0%である。火成岩系統の岩石には成り立ちで大きく分け深成岩、半深成岩、火山岩、火砕岩がある。火成岩系統の岩石は、八重山諸島、特に西表島、久米島では確認されるが、沖繩本島では堆積岩系統・変成岩系統の岩石に比較して最も産出されない種類の岩石である。半深成岩は恩納村、中新世紀の地質におけ

る火山岩は南部糸満周辺、名護から本部半島のごく一部の限られた地層に僅かに確認される。石器に使用される石質には火成岩など県外産と思われる岩石も多く、火成岩の産地は沖縄本島から程近い徳之島以北の産地という同定結果もある。火成岩の石器は本島外からの持ち込みとも想定されるが、産出地の確定は露頭した地層と比較検討が必要で安易に決定づけることはできない。



第168図 石質組成 (%)

砂岩	砂質片岩
斑レイ岩	泥岩
角閃石安山岩	チャート
輝緑岩	サンゴ塊 (ハマサンゴ)
角閃岩	頁岩
玄武岩	その他
片状砂岩	(その他詳細)
輝石角閃石安山岩	粘板岩
花崗閃緑岩	泥質片岩
閃緑岩	黒色千枚岩
礫質砂岩	黒色片岩
シルト岩	黒色頁岩
緑色岩	赤色頁岩 (黄鉄鉱含む)
石英安山岩	



第169図 器種別石質比率

第169図に石器で集計した器種のうち点数の多い6器種について石質の割合を示した。石斧では斑レイ岩が33.36%で最も多く、次いで輝緑岩が27.37%、砂岩17.43%、緑色岩11.88%で上位を占める。斑レイ岩は石斧に多用される岩石で前回報告の平安山原B遺跡(2015)でも多く出土した。

敲石は砂岩が65.03%と大半を占めるしかし、輝石角閃石安山岩の10.87%、角閃石安山岩4.07%、玄武岩6.90%はほとんど沖縄本島では産出されない。

敲石兼磨石は砂岩が44.71%を占める。使用された岩石は11種類が確認され、堆積岩系統のうち砂岩や変成岩系統の片岩類が多い。

磨石は砂岩が31.71%、斑レイ岩が21.24%で5割以上を占め、岩石も13種類と最も多い。敲打器類(敲石・敲石兼磨石・磨石)は石器のなかでも出土量が多く、岩石の種類も他の石器に比較し多い傾向にある。

クガニ石は砂岩が49.71%、斑レイ岩29.40%、角閃石安山岩20.89%で3種類と最も少なく数量的なことも関係し、

限られた岩石を使用している。

砥石は砂岩が86.32%と8割以上で、玄武岩5.63%、シルト岩4.79%の3種類が上位にある。これらの種類以外に片状砂岩0.99%、チャート0.76%、輝緑岩0.55%、サンゴ塊（ハマサンゴ）0.30%、頁岩0.26%、緑色岩0.23%、黒色片岩0.10%、赤色頁岩0.06%などがわずかに確認された。砥石の項目でふれた貝塚後期とグスク相当期の時期別の使用状況では、明確に石材を選択していることが認められ、この項目では時期別の比較とは別に砥石全体における割合を示している。

小結

本調査で出土した石器は層序では上層からの出土も多く、遺物の編年時期が曖昧な部分も多々ある。遺跡の主体が中世～近世、近代又、戦前の遺物が多いことや攪乱層が阻んでいるのが一因と思われる。石器以外の遺物で陶磁器類が大半を占め、石板の出土もあり遺物の内容は時期的に新しく、かなり近世寄りの様相を呈す。

石器の器種で判断できるものは、可能な限り分類を行ったが詳細な分析までは至らず不明な点も多く残った。石器の内容は貝塚後期とグスク相当期の遺物と考えられる。

石斧は石器全体のなかで点数自体が少ない。サイズの点からは中型から小型資料が多く、大型に属す石斧は少ない。特徴として石斧に刃部の潰れた資料が多く、敲石などに転用している点が挙げられる。又、粗加工だけのもの、再加工したと推測されるもの、刃部の研ぎ直しが曖昧なものが認められ丁寧に作られた資料が少ない。石斧のほとんどが作りの雑な在産の石斧で、模倣品と思われる資料は数点認められたが、持ち込みの可能性のある精巧なつくりの石斧は今回全く出土していない。貝塚後期後半から石斧の出土が減少することは周知されており、石斧に代用される他の資料があると考えられる。

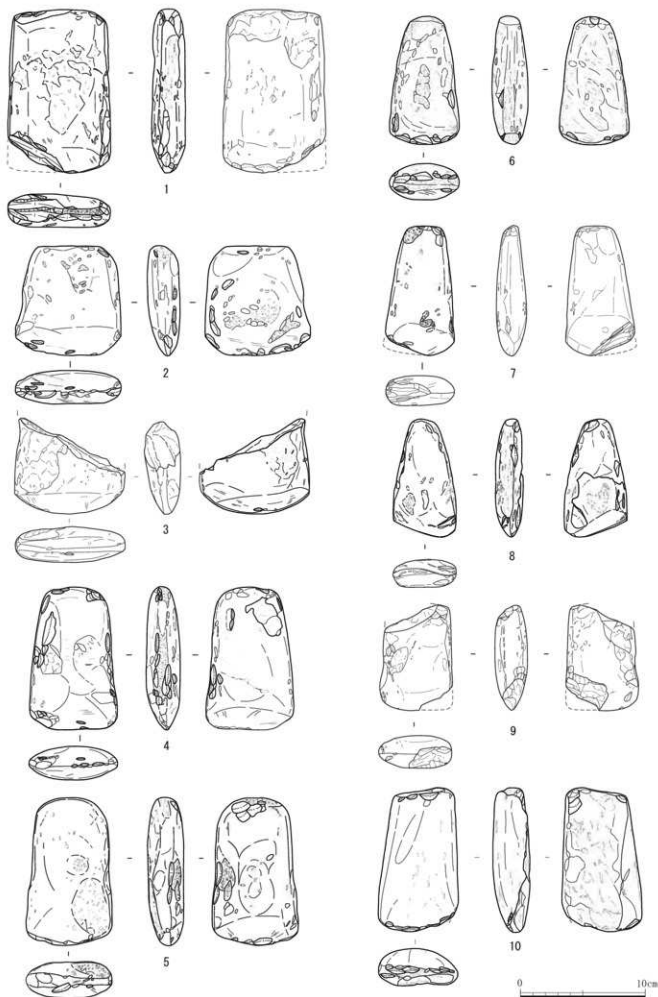
敲石、敲石兼磨石、磨石などの敲打器類は出土量も多く、石鱗状、厚手、扁平、不定形など数種類の形態が認められた。これらの資料は貝塚後期以降も使用されていたと考えられる。

クガニ石が8点も出土したことも挙げられる。クガニ石の用途は白木原和美氏の調査では、徳之島の祭りにおいて年中行事の際、かけ声や唄を歌いクガニシ（黄金石）を用いるとする。与論島、沖永良部島、徳之島、奄美大島などで出土例があり、クガニ石の報告には軟質の砂岩、細粒砂岩以外に角閃石輝石安山岩、花崗岩などの石質の資料も認められている。砥石は貝塚後期の砥石に加え、グスク相当期の砥石がこれまでより多く確認できた。石質も沖縄本島外と思われる火成岩系統の玄武岩を用いた砥石が目立つ。使用痕やそれぞれの特徴からグスク期以降、近世時期まで使用していたとみられる。グスク相当期の砥石が多く出土したことで、鑄造初期の鉄などの金属類、刃物が存在したと推測される。砥石は現代でも使用する道具で形態や石質などに変化はあるものの、用途の変わらない石器である。

註1：佐原真 1977 石斧論—横斧から縦斧へ—「考古論集 慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集 別冊」松崎寿和先生退官記念事業会

註2：平口哲夫 1991「木製品を作り出した石器」季刊考古学 第35号 徳山閣出版 pp75-77

註3：白木原和美 1978「クガニシ」pp121-139『法文論叢』41号 熊本大学 法文学会



第 170 图 石器 1



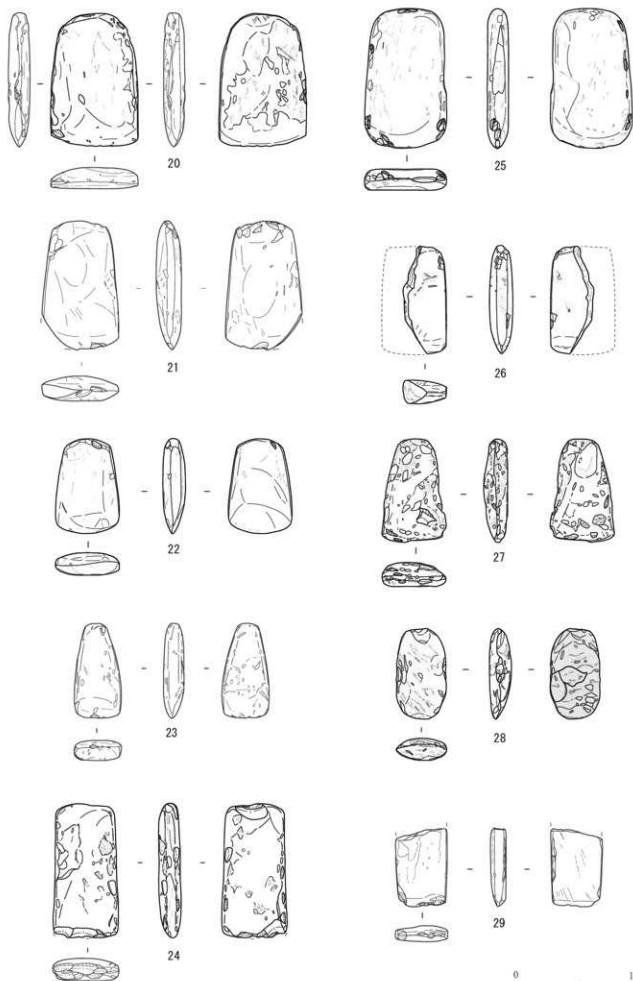
圖版 111 石器 1



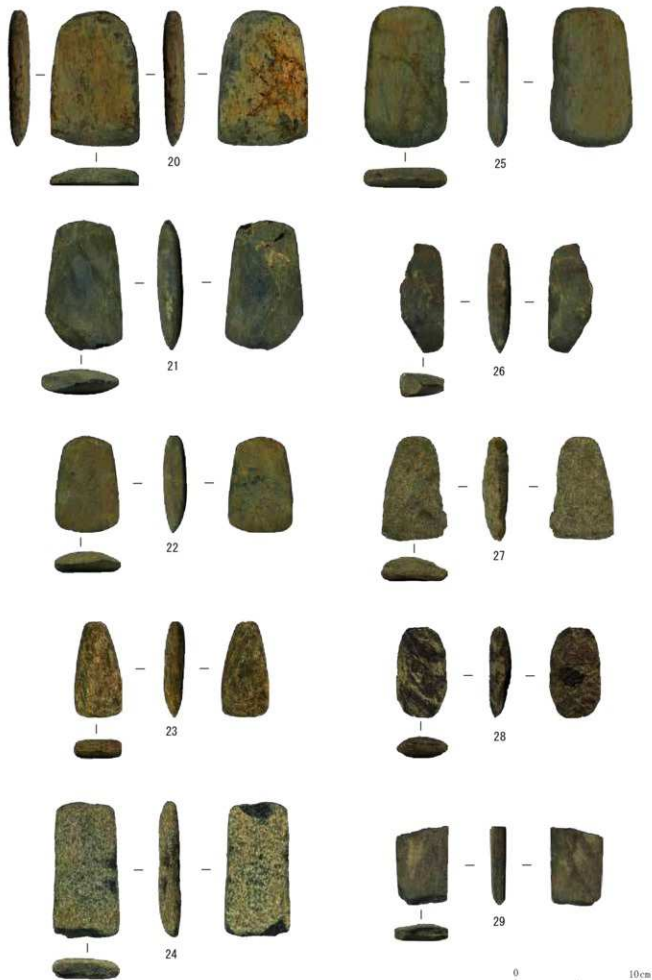
第 171 图 石器 2



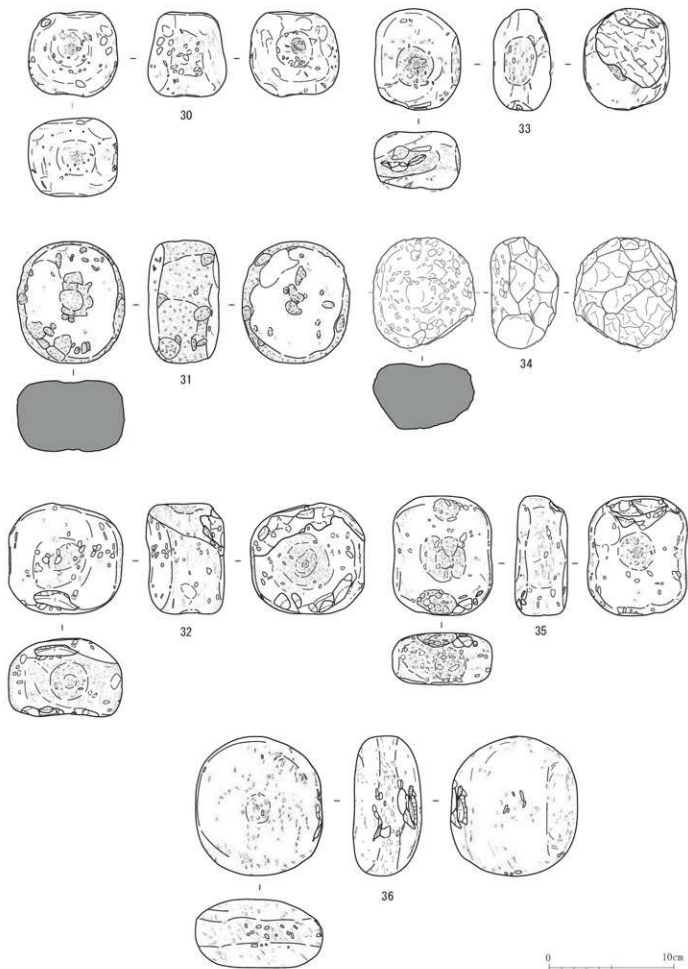
圖版 112 石器 2



第 172 图 石器 3



图版 113 石器 3

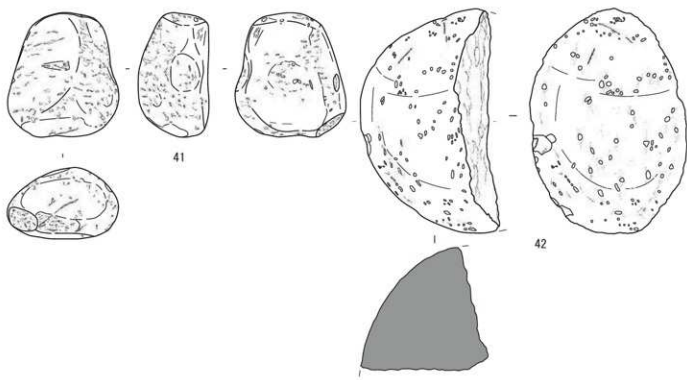
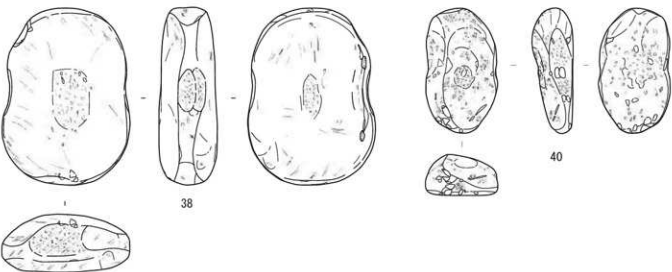
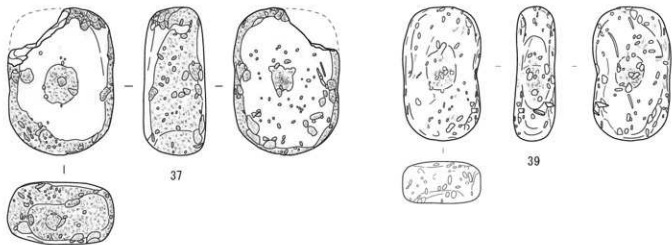


第 173 图 石器 4

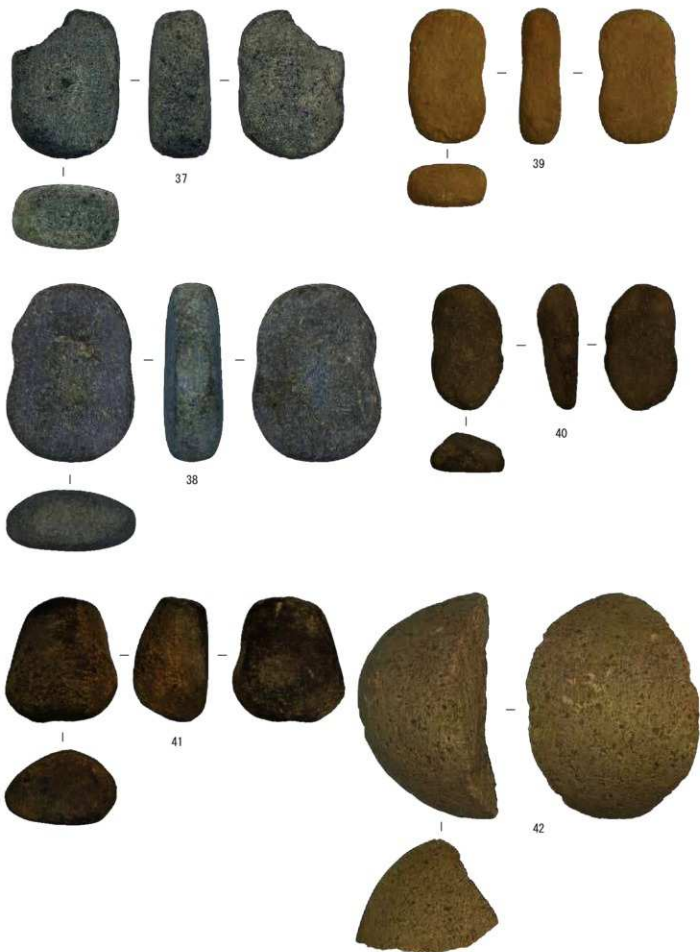
0 10cm



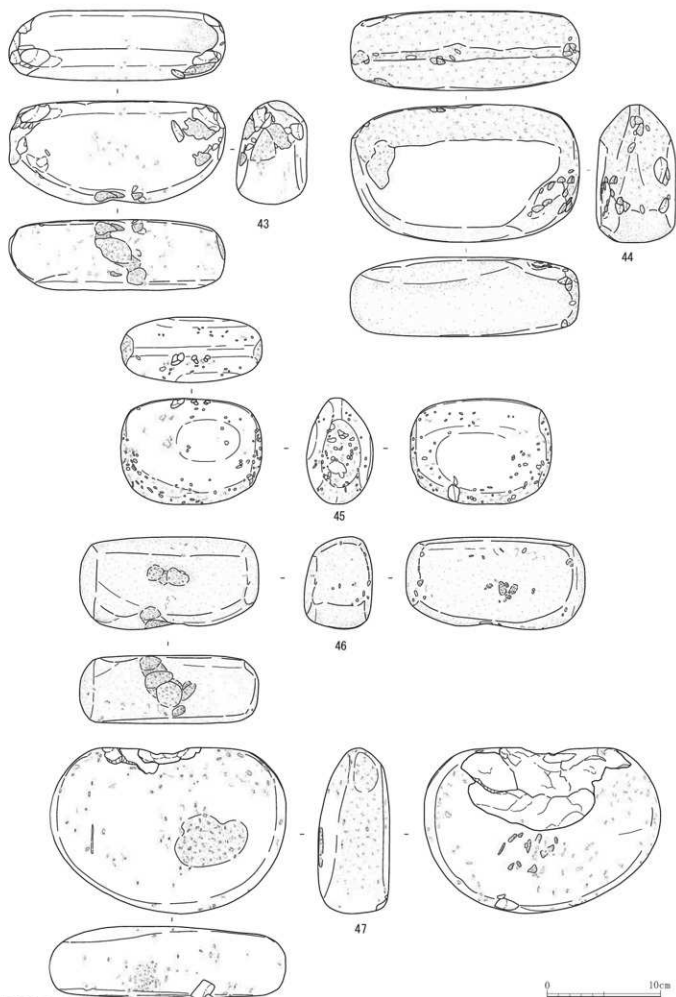
圖版 114 石器 4



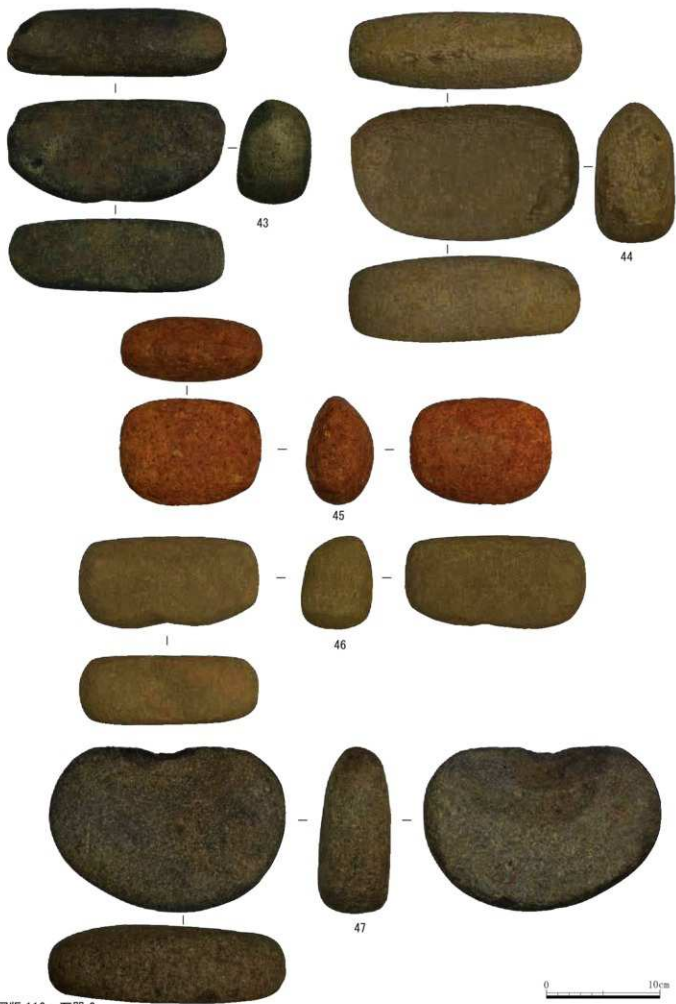
0 10cm



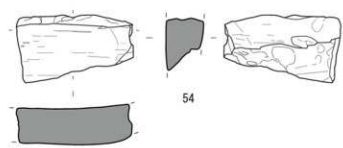
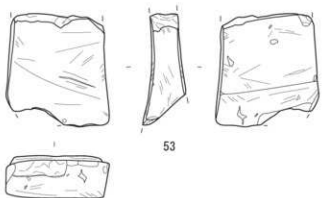
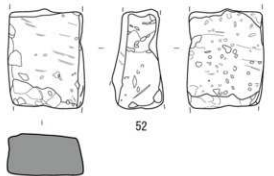
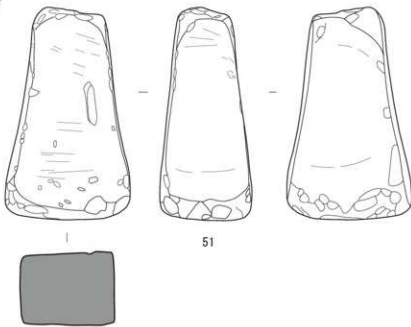
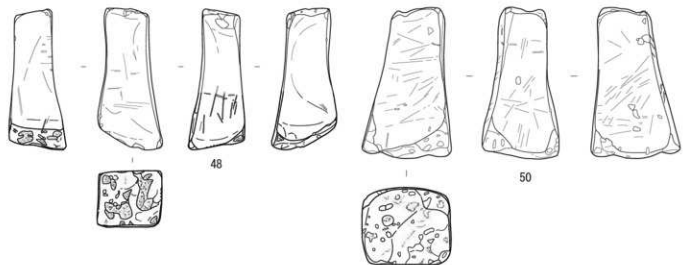
图版 115 石器 5



第175图 石器6



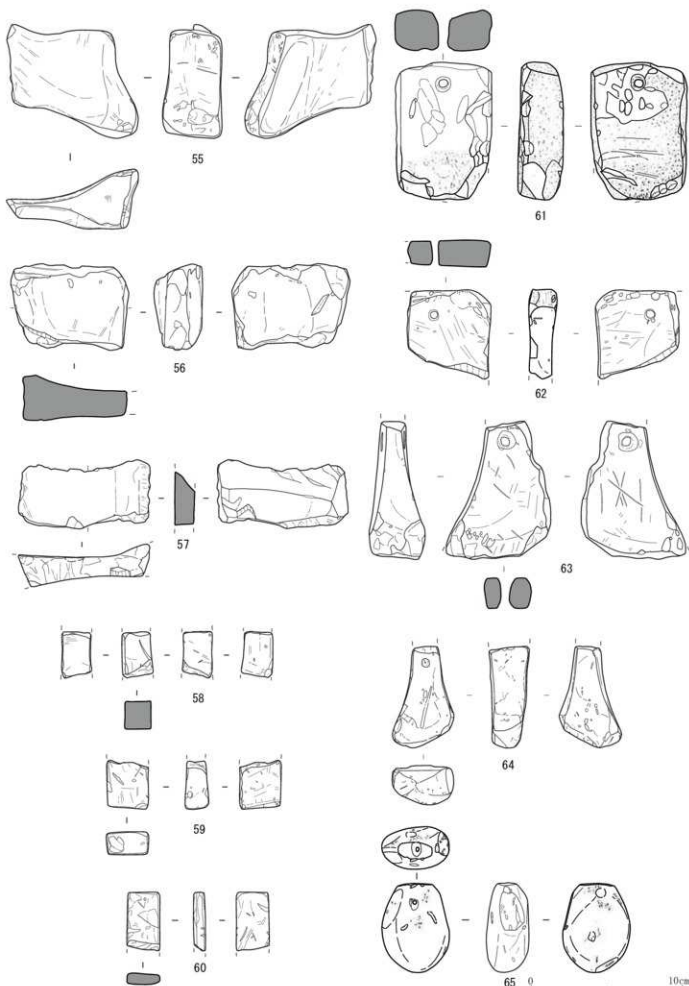
圖版 116 石器 6



第 176 图 石器 7



圖版 117 石器 7



第 177 图 石器 8



图版 118 石器 8

(28) 貝製品 (第 181 ~ 184 図・図版 119 ~ 125)

貝製品は素材貝も含めて HA③ 161 点、HA② 181 点、HA④ 49 点、HA① 6 点の計 397 点の出土である。出土層は層序(第 2 節)や他の遺物でもふれたように近現代～貝塚時代後期の遺物まで数時期の遺物が混在するⅡ層に多い。出土分布をみると HA③ の自然流路 (S-640) 沿いに貝塚時代後期、HA② の内陸側と海岸側に分かれ、HA④ にグスク時代相当期の製品が出土する傾向がみられる。また、これまで報告されたキャンプ桑江北側地区の遺跡の調査成果や、出土した土器・中国産陶磁器から概ね貝塚時代後期とグスク時代以降に分けられる。出土量の多い二枚貝有孔製品・タカラガイ製品については分類や集計を行い、図示したものについては観察一覧を示した。また、他の製品については図掲載以外も観察一覧を示した。以下、貝塚時代後期とグスク時代以降の 2 つの時期に分けて略述する。

貝塚時代後期

装飾品と考えられるもの(貝輪・円盤状製品・巻貝製品・札状製品など)と実用品と考えられるもの(ヤコウガイ製匙・ホラガイ有孔製品・二枚貝有孔製品など)、貝交易の素材貝(大形イモガイ・ゴホウラ・ヤコウガイ)が出土した。以下、略述する。
・装飾品と考えられるもの

<貝輪> 1 点出土した。図 1 はメンガイ類の外縁を幅 1.0cm 残し外殻を丁寧に研磨するもので凹部分のみに自然面を残す。HA① N13 IV 層(白砂)の出土で近接する貝塚時代後期の遺跡からの流れ込みの可能性が高い。

<イモガイ円盤状製品> (図 2・3) 大形イモガイ(アンボンクロザメ)の螺塔部を切り取り、円盤状に加工しもので 2 点出土した。図 2 は螺塔部、体層の切り取り部を丁寧に研磨、図 3 は体層面を打割し平らにするもので、殻頂に若干の研磨が確認されることから製作途中と思われる。大きさは前者が 5.8cm、後者が 5.7cm を測る。出土は前者が HA②、後者は HA③ の出土で 90cm と離れている。

<イモガイ有孔製品> 図 4 は色残りの良いアンボンクロザメである。殻頂部に径 2.0cm の孔、及び外唇に打割が確認され、殻径は 6.0cm を測る。類例は伊礼原遺跡(2007・2014)に出土することから貝輪などの未製品であろうか。HA④ の下層確認調査の出土で貝輪と同様、周辺遺跡からの流れ込みの遺物と思われる。

(自然貝) 後述するゴホウラと同様、南海産貝輪交易の対象貝である。貝集積遺構は検出されていないが、大形イモガイの計測を行い第 108 表に示した。HA③ 8 点・HA② 13 点・HA④ 1 点・HA① 1 点(製品)の計 23 点出土した。殻径の大きさを比較すると HA② は 3.5 ~ 3.9cm が 38% と多く、HA③ は 4.5 ~ 5.9cm の大きめが多い。前述したイモガイの製品に比べると小さい。

<巻貝製品> 小形の巻貝の加工品で、体層面を腹面と背面とから研磨するもの(a)、貝の原形を残し殻頂に穿孔するもの(b)、貝に敲打・打割を加えたもの(c)がある。

a: 図 5 ハブミナシ・図 6 マクラガイ(クチゲロマクラ)がある。図 5 は背・腹面を研磨し断面から三角形を呈するもので殻縁はなく、殻頂も穿孔する。図 6 は背・腹面から厚さ 0.4cm の均一に板状、殻頂にも研磨による穿孔がある。両者は断面形は異なるが同じような加工である。類例はくびれ平底を主体とする本部町兼久原貝塚(1977)・恩納村熱田貝塚(1979)で報告されている。図 5・6 は HA② の 14・5 と近接して得られ、近くからは貝塚時代後期の人骨も出土している。b: 図 7 は殻頂に粗孔、体層に若干の研磨。図 8 はニシキミナシの殻頂を研磨し穿孔、外唇を打割したもの

第 108 表 大形イモガイ大きさ(殻径)別出土量

地区 貝種	HA③ アンボン クロザメ	HA② アンボン クロザメ	HA④ クロフ モドク	HA① アンボン クロザメ	HA② クロフ モドク	合計
殻径 (cm)						
3.5 ~ 3.9		5				5
4.0 ~ 4.4						1
4.5 ~ 4.9	2	1	1			4
5.0 ~ 5.4	3	2	2			7
5.5 ~ 5.9	2	1				3
6.0 ~ 6.4				1		1
6.5 ~ 6.9	1					1
合計	8	10	3	1	1	23

第 109 表 貝輪・円盤・巻貝・札状観察一覧

(計測単位: cm, g)

図版 番号	貝種	製品	完成	高さ (mm)	殻径 (mm)	厚さ	重さ	観察事項	地区・クワッド・別 遺跡・付録(図)番号	
181 119	7	貝輪	1/3	10.3	6.3	0.3	8.0	外殻及び内殻は研磨面。凹部分は自然。色残△	HA① N13 Ⅱ 台 220	
	15	円盤	2/3	6.1	5.8	0.8	56.5	螺塔研磨面。体層面研磨面。色残△	HA② Ⅱ B 取 26	
	14	円盤	2/3	5.7	5.7	0.9	52.8	体層・打割面。面平。色残△。風化△	HA③ E9 Ⅱ 台 1595	
	30	有孔	2/3	11.2	6.0	6.4	230.0	殻頂・打割で穿孔。外唇打割調整。色残△	HA④ V 台 4622	
	5	巻貝	1/3	2.1	1.7	-	4.8	腹・背研削。断面三角形。殻頂・研磨。敲打・欠。色残○	HA② H Ⅱ 付録 貝 228	
	10	巻貝	2/3	2.4	1.0	0.4	1.0	板状に研磨。殻頂・研磨穿孔	HA② E5 Ⅱ 取 113	
	7	35	巻貝	1/3	4.5	1.8	20.0	殻頂打割。穿孔。風化△	HA③ A14 Ⅲ 下 S-11 台 2025	
	31	35	巻貝	2/3	3.1	2.9	-	31.0	殻頂・殻頂・研磨。穿孔	HA④ K20 Ⅲ SP520 台 3643
	9	1	巻貝	2/3	2.1	1.8	1.6	6.0	日全体を研磨。殻頂・有孔。胴部・摩擦。胴部も研磨。丸味帯びる・摩擦も研磨。外唇・色残。色残△	HA③ T13 Ⅲ 下 S-11 貝 107
	10	3	巻貝	1/3	10.1	3.4	3.3	81.0	殻頂に敲打研磨面。殻頂丸味。色残○	HA③ F9 Ⅱ S-32 台 2054
	-	4	巻貝	1/3	9.0	4.7	4.0	31.9	打割調整 6 個の孔。外唇を直状に加工。	HA③ Ⅱ 下 台 4697
図版 119	11	8	札状	1/3	1.4	3.9	0.3	4.6	大形イモガイの殻頂利用。表面・研磨面。外唇中央に「M」の状。広田上層の未製品?。色残△	HA③ T10 Ⅱ 台 618
図版 120	12	260	札状	1/3	6.6	2.2	0.4	8.6	殻頂全研磨。外殻・研磨。一部表層残る。殻頂研磨面	HA③ A8 Ⅱ

(凡例) ○:多・強, ○:普通, △:少・弱

である。HA④ K20 Ⅲ層、SP520 からの出土で貝色の残りが明瞭。図9は小形イモガイ(マダライモ)を磨き肩部及び全面に丸みを帯び、研磨面を持たない。同様な加工は奄美市マツノ遺跡(2006)で報告例がある。c: 図10はチョウセンアツソデガイを敲打により殻口の頂部を平らにして、さらに殻頂も丸味を帯びるもので加工途中と考えられる。図版119は、小形のイトマキボラで体層の螺肋の凹部に6個の孔を外殻→内殻に穿孔し、更に外唇を直状に加工するものでいずれも打割によるもの。先端を研磨するものは、シヌグ堂遺跡(1985)になど貝塚時代前V期に報告例がある。



図版119 イトマキボラ製品

< 札状製品 > 板状に加工したもので大形イモガイとヤコウガイを素とするものがある。図11は大形イモガイの外唇近くを長方形の板状に切り取り、一辺のほぼ中央に「M」字状の抉りを施し全面研磨するもので、平面形は広田上層タイプに似るが文様は施されていない。HA③ T10の出土である。広田上層タイプの施文されたものや未製品が近接する伊礼原D遺跡(2008)、「M」字状に抉るものは伊礼原遺跡(2014)で報告されている。図12は完形でヤコウガイを板状に加工するもので、背面上部の螺肋を深く削り真珠層が露呈する。平面形は長楕円を呈する。HA③ A8 Ⅱ層の出土で類例はなく用途は不明。



図版120 ゴホウラ・アツソデガイ

< ゴボウラ有孔 > 肉厚のゴボウラに径0.2cm前後の小孔を施すものが2点出土した。いずれも平面形は不定形で丸味を帯び風化が著しい。

図13はゴボウラの袖部に径0.2cmの孔が施され、内面はアバタにより空洞となる部分に当たり、ほかに外面に未貫通の孔らしきものがある。図14は殻が肉厚なことからゴボウラと考えられるもので径0.2cmの小孔を2個施が不定形。いずれも類例がみられない。

< ゴボウラ・アツソデガイ > 伊礼原遺跡(2014)や平安山原B遺跡(2015)で貝輪や貝集積遺構が検出され、「南海産貝輪交易」(木下1996)の対象貝とされている。自然貝も含め、観察一覧(第111表)と写真(図版120)を掲載した。HA③ 4点・HA② 4点、HA④ 6点の計14点で調査区の全面に散り、出土層はHA③・HA②ではⅡ層、HA④ではⅢ層で得られている(第178図)。HA③では図15を含めS-640(自然流路)沿いで出土。背面欠3点、腹面のみ4点、ほぼ完形2点、背面頂部片3点、袖部2点である。加工が確認されたのは図15と製品5・38である。図15は背面の前溝近くを破損、風化が進む小形のゴボウラである。上袖部を打割して整え、背面の付着していたヘビガイを全て削り、腹面とさらに内唇部分に研磨が認められる。ヘビガイをクリーニングする3工程の資料は伊礼原D遺跡(2013)でも得られている。

第111表 ゴボウラ・アツソデガイ製品・素材貝 観察一覧

(注:単位はcm, g)

調査区	調査層	製品番号	貝種	部位	完成	縦径	横径	高さ	厚み	孔あり	孔なし	ヘビ	風化	観察事項	地区・グリッド・層遺構・台帳(取)貝目
伊礼原遺跡	13	8	ゴボウラ	袖部	1/3	9.2	3.0	62.0	×	×	×	×	×	袖部、背面穿孔・1個は未貫通。孔径0.2cm。孔裏面はアバタ	HA② A20 Ⅱ 202 貝1604
	14	25	ゴボウラ?	—	完	4.0	3.2	10.0	—	—	—	—	—	内殻から穿孔。回転穿孔。孔径0.2cm	HA② T1 Ⅱ 貝998
	15	1	ゴボウラ	完形	完	12.6	10.4	33.0	○	×	×	×	×	背面一部欠。背面・ヘビガイ除去。研磨面、複数確認。外唇・打割欠。	HA③ C13 Ⅲ 台581
	—	2	ゴボウラ	背面欠	2/3	12.1	10.6	317.5	△	×	×	×	×	上袖欠。1回削削。	HA③ B17 Ⅱ 台583
	—	3	ゴボウラ	背面欠	2/3	14.9	11.5	459.0	×	△	×	×	×	上袖欠(直状)。7ヶ窪深い。死貝	HA③ E15 Ⅱ S-4 台615
	—	4	?????ガイ	袖部	1/5	6.3	3.4	21.9	×	×	×	×	×	袖部のみ。	HA③ B10 Ⅰ S-37 台1951
	—	5	ゴボウラ	背面欠	2/3	13.5	10.6	37.8	△	×	×	×	×	上袖欠。背面欠・1回削削。	HA② D1 Ⅱ 不建 貝1001
	—	6	ゴボウラ	背面頂部	3	5.5	3.3	28.5	—	×	×	×	×	背面頂部・とくに人工なし。	HA② D3 Ⅲ 上 貝1348
	—	7	ゴボウラ	袖部	1/4	11.6	3.3	113.5	○	×	×	×	×	袖部のみ。加工なし。	HA② S7 Ⅱ 品 貝1690
	—	9	ゴボウラ	背面	1/4	8.0	3.4	46.4	×	×	×	×	×	背面。褐色付着。	HA② A2 Ⅱ 202 貝911
	—	37	ゴボウラ	腹面	1/2	14.1	7.5	205.5	—	△	×	×	×	幼貝か。薄い。背面欠。殻頂縁部に打割3回。殻薄い	HA④ J16 Ⅰ 台778
	—	38	ゴボウラ	完形	完	14.4	11.9	503.5	×	×	×	×	×	背面。前溝孔。上袖欠	HA④ D19.20 Ⅱ 上 台4470
	—	39	ゴボウラ	背面	2/3	13.0	6.7	256.0	×	×	×	×	×	体層。顕著死貝	HA④ F18 Ⅲ 台319
	—	40	ゴボウラ	背面頂部	1/2	4.8	—	20.0	×	×	×	×	×	円形。腹面破片。1回で割れる。加工か残存か不明。摩耗	HA④ H16 Ⅲ 台557
	—	41	ゴボウラ	背面頂部	1/5	6.1	5.3	34.5	×	×	×	×	×	加工面。	HA④ K18 Ⅲ 台409
—	47	ゴボウラ	腹面	1/3	10.8	6.4	112.0	×	×	×	×	×	体層?。加工面。	HA④ G19 Ⅲ 台498	

(丸:孔。完:ほぼ完。○:多・僅。○:普通。△:少・僅。△:僅少。×:なし。—:不明・判断不可)

< ヤコウガイ環状製品 > ヤコウガイの背面部を切り取り、環状に加工したもので2点出土した。図16は殻口近くで隅丸方形を呈し、図17は円形を呈するものである。後者は螺肋を削り込み、周縁も丁寧に仕上げるもので、残存から円形を呈するが内縁の加工についてははっきりしない。両者は平面形が各々異なるため、用途も異なる可能性がある。前者は孔の大きさから渡喜仁浜原貝塚(1978)に類似する。

<ヤコウガイ製品> ヤコウガイの背面を用いたものであるが完形はなく、柄4点、身6点(未製品を含む)の10点の出土で、HA③のS-640(自然流路)の両側で得られている。また、自然貝も多く得られ、貝殻の素材貝の可能性が高く⁴⁾第112表に示した。身:図18は中でも最も残りの良いものである。ヤコウガイの背面を大きく割とり、外殻、螺肋と周縁をかなり研磨したもので、外殻は真珠層が露出する。図19も破片だが、大形の貝を用いほぼ全面に真珠層を露出。図20は外表を残すものである。柄:図22は殻口を柄にし、中ほどに径0.6cmの孔を有するもので、周縁は丁寧に研磨される。柄の幅は5.5cmと匙でも大きい方である。図21は幅8.3cmと柄の幅が大きい。殻口の形状に合わせている。

(自然貝) ヤコウガイは奄美諸島では7C頃から「ヤコウガイ交易」があったとされ、沖縄諸島でも貝塚時代後期に背面、グスク時代以降に腹面を用いた貝殻が出土する。また御細工所跡(1991)や首里城跡(2008)・湧田古窯跡(1999)・渡地村跡(2007)などで破片が多数出土する。遺跡から出土するヤコウガイはこれら交易の対象の可能性が考えられるため、自然貝も分類集計した。第112表によると自然貝は147点で完形は1点、他は破片が総重量10829.7g、平均73.7gである。ヤコウガイの完形の重さは853.5gを量り、個体数(B:殻頂+完形)は27個体である。地区別にはHA③52点、総重量7632.1g、平均146.8g、HA②86点、総重量3117.8g、平均36.3g、HA④7点、総重量129.9g、平均18.6g、HA①2点、総重量398.4g、平均199.2gでHA②出土のヤコウガイが細かい。HA①は0021SDの出土である。残存部位でみるとHA③では体層奥(A)25%・殻口(D)39%、HA②では体層奥(A)8%・殻口(D)58%と異なる。HA③では背面、HA②では腹面の匙が出土することから自然貝の出土はそれを反映することから食用ではなく製品の素材として捕獲していたと考えられる。

第113表 ヤコウガイ環状・匙観察一覧

地区別	遺跡名	出土番号	器種	使用部位	完成	縦	横	厚さ	重さ	観察事項	アパタ	色残り	へじ	風化	地区・グランド・遺跡層・台帳(表)番号
第122区	環状	16	6	背面	—	1.2	8.2	5.4	0.4	35.6	圓長方形、殻口、内外縁一打削後、研削、丸味、螺肋は加工無し。	△	△	—	HA③ A11 Ⅱ 台637
		17	88	背面	—	1.3	7.1	3.8	0.4	32.0	円形、体層奥、螺肋一研削、直珠層、周縁一研削、丸味	△	△	—	HA③ C6 Ⅱ 台4322
		18	13	身	□	2.3	5.6	13.3	0.3	99.0	外欠一部欠、研削磨面、螺肋一研削磨面。	△	△	△	HA③ C7 Ⅱ 台103
		19	15	身	□	1.4	7.3	5.6	0.4	25.7	縦長び円縁、内側も丁寧に研削、外表一部削りに残る。殻頂側に付く。	△	△	—	HA③ A13 Ⅱ 台634
		20	10	身	□	1.5	4.2	6	0.5	20.0	外表一欠、周縁一研削。	—	○	○	HA③ R17 Ⅱ 台3092
		21	14	柄	□	1.4	5.7	8.3	0.4	33.9	殻口、外欠一欠、周縁一研削、螺肋一調整有り。	—	○	—	HA③ D11 Ⅱ 台322
		22	16	柄	□	1.4	8.2	6.3	0.3	41.1	殻口、外欠一欠、研削、周縁一研削、螺肋一調整有り。	—	○	—	HA③ D4 Ⅱ 台636
		22	16	柄	□	1.3	7.2	9.2	0.4	87.6	体層、外欠一欠、周縁一内研削。	—	○	○	HA③ C6 Ⅱ 台4356
		—	220	柄	□	1.3	6.1	3.9	0.4	12.3	直珠層、背面、前溝孔一削、研削磨面。	—	△	△	HA③ B13 Ⅱ 台1586
		—	267	柄	□	1.3	6.8	3.4	0.4	17.5	外殻一欠、外欠一部欠、研削一調整有り、柄のカーブ。	×	△	×	HA③ C18 Ⅱ 台88
図・複製なし	—	29	柄	□	1.3	6.6	5.6	—	46.4	周縁一打削。	△	△	△	HA④ N6 Ⅱ 台1026	
	—	33	身	□	1.4	5.6	1.5	0.4	12.4	周縁一研削、外殻一研削、直珠層、露出	×	△	△	HA④ K20 Ⅱ 台3673	

(凡例) ○:普通、△:少・痕、×:なし

<ホラガイ有孔製品> ホラガイの腹面に穿孔するものでHA③で3点、HA①で1点得られている。図23は大きいめの資料である。第114表に示したように小さいサイズのものも出土しており、用途は細分される。

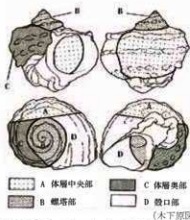
<ヤコウガイ容器> 2点出土した。図24はヤコウガイの殻頂及びへソ部、さらに螺肋を打削、外唇を研磨したものである。図25は小形ヤコウガイではあるが、前者と同様、外唇を割りと、さらに打削調整するものである。腹面にも若干の加工がみられる。両者は大きさが異なり、前者は鍋、後者は杯などに用いたと思われる。

第114表 ホラガイ・ヤコウガイ容器観察一覧

(法量単位:cm, g)

地区別	遺跡名	出土番号	貝種	分類	完成	縦(殻長)	横(殻幅)	厚さ	孔径	孔口	重さ	観察事項	アパタ	色残り	厚	へじ	風化	地区・グランド・遺跡層・台帳(表)番号
第122区	容器	23	1	有孔	1/2	29	12.9	88	2.6	2.5	512.5	背面欠、殻頂欠一部欠、1孔、厚削、7%、丸貝(黒白)	○	×	○	×	HA③ S13 Ⅱ 台579	
		24	133	有孔	完	—	—	—	×	×	830.5	外殻及びへソ部一打削、殻頂欠、螺肋一打削。	△	△	×	×	HA③ B16 Ⅱ 台190	
		25	103	有孔	完	7.9	6.2	—	×	×	76.6	外殻一部欠、口削一打削。	△	△	×	×	HA③ T11-12 Ⅱ 台2841	
図・複製なし	容器	—	4	有孔	完	14	5.7	4.4	3.1	2.7	41.2	殻頂欠、容量50cc。	○	×	×	×	HA③ S9 Ⅱ 台5.01 台2906	
		—	4	有孔	完	20.5	7.7	6	3.8	3.1	41.2	殻頂欠、外殻一打削、容量150cc。	×	×	×	×	HA③ A13 Ⅱ 台2177	
図・複製なし	杯	—	4	有孔	完	20.5	7.7	6	3.8	3.1	41.2	殻頂欠、外殻一打削、容量150cc。	×	×	×	×	HA③ A13 Ⅱ 台2177	
		—	14	有孔	1/2	36	14.0	—	6.8	3.9	3847.0	内側の孔、孔削、背面欠。	○	△	△	△	HA③ 1 Ⅱ 台214	

(凡例) ○:多・痕、△:普通、△:少・痕、×:なし、—:不明・計測不可



第179図 ヤコウガイの部位の分類

第112表 ヤコウガイ未製品・自然貝分類出土一覧

地区別	分類	加工上				自然貝				合計		
		A	B	C	D	A	B	C	D			
HA③	Ⅰ	—	—	1	1	—	—	—	—	5	4	
	Ⅱ	9	1	1	2	2	5	7	3	8	43	
	Ⅲ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
	Ⅳ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
小計	9	1	1	4	2	5	8	4	10	7	52	
HA②	Ⅰ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	
	Ⅱ	3	6	1	8	5	1	4	15	1	1	78
	Ⅲ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
	Ⅳ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
小計	3	6	1	8	7	2	4	16	3	24	11	86
HA④	Ⅰ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5
	Ⅱ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	Ⅲ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	Ⅳ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
小計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
HA①	Ⅰ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
	Ⅱ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	13	11	2	12	4	9	24	7	34	18	1	147

A:体層中央 B:螺肋 C:体層奥(腹) D:殻口

<タカラガイ製品> タカラガイの背面を割取り周縁を整えたもので、民俗事例から漁網縄とされる。本品は殻軸を残すもの(A)と調整したもの(B)がある。地区別にはHA③64点・HA②37点・HA④2点・HA①1点の計104点で、HA③で61.5%、HA②で35.6%とほとんどを占める(第178図)。貝種別にはハナマルユキ76点、ハナヒラダカラ20点、キヨロダカラ5点、ヤクシマダカラ2点、ホシダカラ1点でハナマルユキが73.1%を占め民俗例と同じである。HA③ではS-640(自然流路)や遺構等で得られ(第178図)HA②ではHA③側と西側多く、HA④・①で少ないことから自然流路(S-640)が埋まった17C以降の遺物と推測される。タカラガイ製縄の使用上限はグスク期⁴であるが民俗事例から近年までの使用が確認される。

第120表 タカラガイ製品出土量

分類	ハナマルユキ	ハナヒラダカラ	キヨロダカラ	ヤクシマダカラ	ホシダカラ	合計
A③	21	4	2			27
A②	14	4	1			19
A④	9	1	1	1		12
B③	25	8	1			34
B②	3	2		1		6
空・不 軸なし	3	1	1		1	5
軸なし	1					1
合計	76	20	5	2	1	104

Aタイプが58点、Bタイプが40点と前者が多い。(第120表)

第121表 タカラガイ製品観察一覧

(法量単位: cm, g)

年代別	調査区	製品番号	貝種	分類	完成	縦	横	厚さ	高さ	両縁	観察事項	色残り	腐化	地区・グリッド・層遺構・台帳(表)番号
第184回・調査区125	53	3	A③	完	2.6	1.8	0.8	2.7	整	殻軸一有、両縁打削一層。	×	○	HA③ A13 B 台2201	
	54	17	A③	完	3.3	2.1	0.8	5.5	整	殻軸一有、両縁打削一層。	○	×	HA③ S17 B S-35 台2060	
	55	16	A②	完	2.6	2	0.9	4.3	整	殻軸一有、両縁打削一層。	△	△	HA③ G8 B 台2190	
	56	9	B③	完	2.5	1.8	0.8	3.3	整	殻軸一有、両縁打削一層。	△	△	HA③ S17 B S-35 台1993	
	57	40	B③	完	3.3	2.5	1	8.1	整	整、殻軸一有、やや欠、両縁打削一層。	△	△	HA③ B10 B 台2066	
	58	5	A③	完	3.6	2.8	1.2	11.2	整	殻軸一有、欠。	△	△	HA① M14 B 00245 台109	
	59	54	B③	完	2.9	2.2	0.6	4.8	整	殻軸一有、両縁打削一層。	△	△	HA② A6 B 00416 1636	
	60	12	B③	完	3.4	2.5	0.9	7.3	整	整、殻軸一有、殻軸一有、両縁打削一層。	△	△	HA③ T19 F S34 台1975	

(凡例) 分類: ①②③は小分類(調査1997参照)。○: 普通, △: 少・弱, ×: なし

<マガキガイ製品> マガキガイの体層を打削して殻軸を残すもの(a)、螺塔部を切り取り平玉状にして上下面を研磨するもの(b)、マガキガイの形を残して殻頂及び体層面を研磨するもの(c)がある。HA③2点・HA②22点・HA④5点の計29点の出土で、そのほとんどはHA②の出土である。a: 15点出土でそのうちの3点を図示した。本タイプは貝小玉の製作工程の一部(勝連城跡1990、渡地村跡2012)、あるいは独奏(カウジ浜貝塚1994・首里城跡線門大遺跡2003)と報告されている。本遺跡出土のa(図61~63)は奄美の民俗事例(恵原隆盛)³から独奏と判断される。b(図64~67): 殻頂及び体層面を研磨するもので、特に体層面の研磨は顕著である。図66をみると体層を打削した後、研磨するもので製作工程が窺える。a・bの加工は外層を割取りや体層を打削調整する点で共通の加工がある。これらの出土地はHA②の「SK」で出土する。c: 図68は螺塔部を研磨、外層を打削するものでaの失敗か別の製品かは不

第122表 マガキガイ製品観察一覧

(法量単位: cm, g)

年代別	調査区	製品番号	分類	完成	縦	横	厚さ	高さ	両縁	観察事項	色残り	腐化	地区・グリッド・層遺構・台帳(表)番号	
第184回・調査区125	61	9	a	完	3.4	2.7	—	—	15.2	体層-打削、軸一有、殻口欠、色残り○			HA② H2-SK2 B 台2143	
	62	5	a	完	2.4	1.8	—	—	3.2	体層-打削、軸一有、殻口欠、色残り○			HA② 17-SK1 B 台2015	
	63	1	a	完	2.7	2.1	—	—	9.3	体層-打削、やや摩耗、軸一有、殻口欠、色残り○			HA② H4-SK12 B 台2177	
	64	20	a	完	2.9	2.9	0.9	0.9	10.1	体層-研磨調整、殻頂-研磨調整、研削、色残り○			HA② F-20 B 台1819	
	65	11	b	完	2.9	2.8	1.1	0.6	0.6	11.5	体層-研磨、殻頂-研削、殻口直状、研削、両面、色残り○			HA② H5 B 取77
	66	12	b	完	2.8	2.6	1.4	0.6	0.5	12.5	体層-研磨調整、殻頂-打削、殻口欠、色残り○			HA② 105 B 名産庫 取114
	67	9	b	完	2.9	2.7	1.1	0.6	0.6	9.5	体層-水平、摩耗、殻頂-研削、殻口直状、色残り○			HA③ B3 B 0001 635
	68	22	c	2/3	4.7	2.7	2.5	—	—	20.9	螺塔研削○、体層もほぼ研削、なめらか、外層大きく削りと、色残り○			HA② B4 B 0002 1067
	—	6		完	2.6	2.1	—	—	—	7.0	体層-打削、軸一有、殻口欠、色残り○			HA② J5 B P3 台2041
	—	222		完	2.3	2.2	—	—	—	6.9	軸-平欠、外層-打削、色残り○			HA② E15 B S-4 貝1467
同・調査区なし	—	3	a	完	3.1	2.3	—	—	—	12.5	体層-打削、軸一有、殻口一割、色残り○			HA② M7-SK1 B 台2060
	—	4	a	完	2.3	2.3	—	—	—	11.0	体層-打削、殻頂一有、軸一有、若干のこぶ、色残り○			HA② G1-SK2 B 台2090
	—	7	a	完	1.7	2.0	—	—	—	6.2	体層-打削、殻頂一有、軸一有、殻口欠、色残り△			HA② G2-SK3 B 台2062
	—	8	a	完	2.4	1.8	—	—	—	5.0	体層-打削、軸一有、殻口欠、色残り○			HA② H3-SK3 B 台2164
	—	10	a	完	1.7	2.3	—	—	—	8.9	体層-打削、殻頂一有、軸一有、殻口欠、色残り△			HA② M9-SK4 B 台2059
	—	2	a	完	2.3	2.6	—	—	—	13.6	体層-打削、軸一有(平欠)、殻口欠、色残り○			HA② 11-SK5 B 台1986
	—	2	a	完	2.5	2.7	—	—	—	13.0	両縁打削○、殻軸一有、殻口欠、色残り○			HA④ F9-10 B SK6 25
	—	11	a	完	2.0	2.9	—	—	—	13.8	体層-打削、殻頂一有、色残り○			HA② H1-SK7 B 台2130
	—	21	a	完	2.4	2.4	2.8	0.9	0.8	4.3	体層-打削後、研削調整、殻頂-研削調整、殻口直状、アバタ○、摩耗○			HA② G 19 B 0001 貝1162
	—	18	a	完	3.0	2.9	1.7	0.5	0.4	18.6	体層-打削後、研削、殻頂-摩耗、殻口欠、色残り○			HA② A2 B 0001 520
—	19	a	完	2.7	2.5	1.1	0.4	0.5	8.7	体層-打削、殻頂-研削、殻口欠、色残り○			HA② T3 B 0001 565	
—	16	a	完	2.5	2.6	1.2	0.6	0.5	9.4	体層-打削、殻頂一打削、殻口欠、色残り△			HA② G20 B 丸屋 貝144	
—	17	a	完	1.5	2.5	1.4	0.5	0.4	10.0	体層-打削、殻頂-打削、殻口欠、色残り△			HA② G20 B 丸屋 貝167	
—	12	a	完	3.2	2.7	2.2	0.6	0.5	14.2	体層-打削、殻軸欠、色残り○			HA② G 1 B 丸屋 貝2072	
—	223	a	完	2.5	2.3	—	—	—	9.5	軸-平欠、割れ、摩耗、腐化○			HA③ E5 I 貝2083	
—	23	b	完	2.7	2.5	1.7	0.6	0.6	12.8	殻頂一有(孔)一打削、体層-打削、やや平削、軸なし			HA④ 119 B 台748	
—	24	b	完	3.1	3.0	1.3	0.7	0.7	14.2	軸なし、殻頂-打削、孔-体層-打削、水平、色残り○			HA④ K18 B 台903	
—	25	b	完	2.7	2.6	1.4	—	—	11.3	軸なし、殻頂-磨れ、打削、体層-打削、水平、色残り○			HA④ E19 B 台170	
—	1	a	完	2.6	2.7	—	—	—	14.0	両縁打削○、殻軸平欠、外層-打削、且一摩耗、色残り○			HA④ 012 B 台144	

(凡例) 完: ほぼ完、(一): 計測不可、○: 多・強、△: 普通、△: 少・弱

明。前述の2タイプとは異なる製品の可能性も考えられる。平面分布をみるとHA②のGラインから西側、A・B3、HA④で出土することから上限を15C代に想定される。打割したマガキガイは伊礼原D遺跡(2013)や伊礼原遺跡(2014)でも出土しており、本遺跡の出土状況からほぼ同じ所属時期が推定される。

<巻貝粗孔製品> 中・大形タカラガイやクモガイに径1.0cm程度の粗孔を施すもので、民俗事例(恵原2016)から子供玩具と思われる⁹⁵。図69はハラダカラ・図70はホシキヌタで他にハチジョウダカラが2点出土している。穿孔の方向は外殻→内殻である。伊礼原D遺跡(2008)ではヤクシマダカラが出土している。他に、グスク期の遺跡や古墓からの報告例もある。

大形タカラガイに出土をみると貝塚時代後期の平安山原B遺跡や貝塚時代前IV期の伊礼原E遺跡ではホシダカラの製品が多く得られ、自然貝でもホシダカラが優勢である。本地域では、ハチジョウダカラの出土は少ないことから意図的にハチジョウダカラを用いたのであろうか⁹⁷。

図71はクモガイの背面と腹面に粗孔を施すもので、いずれも外殻→内殻に穿孔する。外唇の突起は欠落し丸味を帯びる。玩具ではないが他にスズギガイの突起がなく、腹面を穿孔するもの2個、背面を穿孔するもの1個、クモガイの腹面を穿孔するもの1個が出土した(図版121)。伊礼原D遺跡(2013)の巻き貝の穿孔と同様、食用のためと考えられる。

第123表 巻貝粗孔製品観察一覧

年代 層別	調査 区画	製品 番号	貝種	完備 度	縦 径 (mm)	横 径 (mm)	孔径	孔口	重さ	観察事項	色残	風化	地区・クワット・貝 遺跡・台帳(No)番号	
													Ⅰ	Ⅱ
平安山原B	69	2	タカラ	完	7.7	5.2	1.1	1.3	65.5	前縁-粗孔。孔-不定形。穿孔!外-内。	△	△	HA③ F4 Ⅱ	貝4392
	70	4	タカラ	完	4.9	3	0.5	2.4	20.4	前縁-粗孔。孔-楕円。穿孔!外-内。	△	○	HA③ D9 Ⅱ	貝261
	71	228	クモ	完	10.9	7.3	1.6	1.6	130.8	背面孔(水管開口)一やや方形。穿孔!外-内。 腹面孔3.5×2.5。腹孔(体殻)縦楕円。	△	△	HA③ B14 Ⅱ	S20 貝8612
伊礼原D	-	46	タカラ	完	4.8	2.9	1.0	0.8	18.4	前縁-粗孔。孔-方形。打割。	○	-	HA④ K20 Ⅲ	SP1273 台4119
	-	264	クモ	完	6.7	4.15	0.9	1.2	29.9	前縁-粗孔。孔-楕円。自然の可能性も	○	-	HA③ E4 Ⅰ	名嘉座 貝1586
	-	262	クモ	完	8.7	6.4	0.6	0.7	108.4	前縁-粗孔。自然かも。自然の可能性も	○	○	HA③ 貝4371	

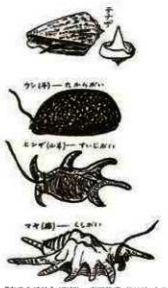
(凡例) ○:多・強、○:普通、△:少・弱、-:不明・計測不可

<碁石> 近現代に属するもので図72は貝を直径2.0cm、厚さ0.4cmの円形に加工したものである。表面に貝の成長線、裏面に内殻の乳白色が確認できる。HA②J4Ⅱ層片の出土。伊礼原遺跡(2014)と比較すると0.4cmと厚く、断面は角をなす。

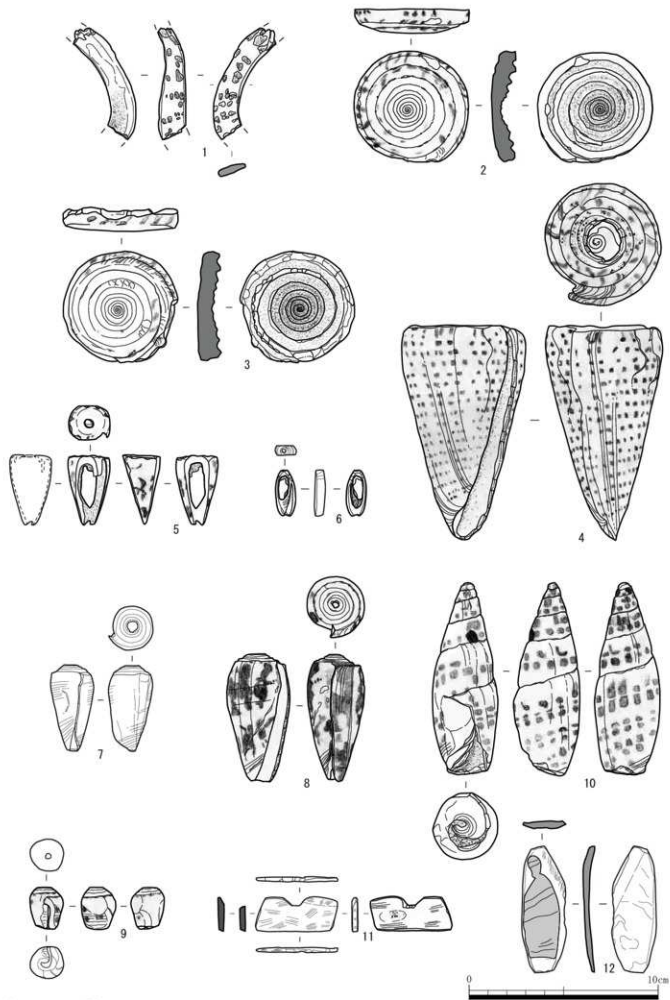
貝塚時代後期の二枚貝有孔製品135個、グスク時代相当期のタカラガイ製品は民俗事例などから漁網鍾しているが、対象となる本遺跡出土の魚類をみるとHA③で7点、HA④で7点、HA④10点・HA①2点計32点(I~V層含む)と非常に少なく、「漁網鍾」の用途や骨の保存状態など疑問が残る。

<註>

- 註1:ヤコウガイはサンゴ礁の礁斜面に生息する。本遺跡は礁斜面まで現海岸線でも4kmと距離があり、容易には捕獲できないことから製品などを作るため意図的に採集したと思われる。
- 註2:ヤコウガイの蓋の薄い部分を連続して剥離したものの「螺蓋製貝斧」で報告していたが報告例が多くなり、「貝斧」の機能以外の用途も含まれることから「螺蓋製貝器」とした。
- 註3:シャコガイは民俗事例やクマヤ洞穴遺跡、メンガイ類は貝志原貝塚や長浜金久遺跡、リュウキュウサルボオは南洋諸島(海洋博公園海洋文化館展示)などで例がある。(島袋2004)
- 註4:勝連城跡(1964)の本丸で報告され、本製品の上限ととらえられている。
- 註5:奄美では「テナザ」・沖縄では「ティラジャー」と呼び、子供玩具。(恵原2009・上江洲1972)
- 註6:上に同じ。
- 註7:大形タカラガイは貝製品に用いるのが多く、キャンプ桑江北側地区でもホシダカラの製品や自然貝の出土。ハチジョウダカラは出土数が少ない。(呉星・島袋2013)



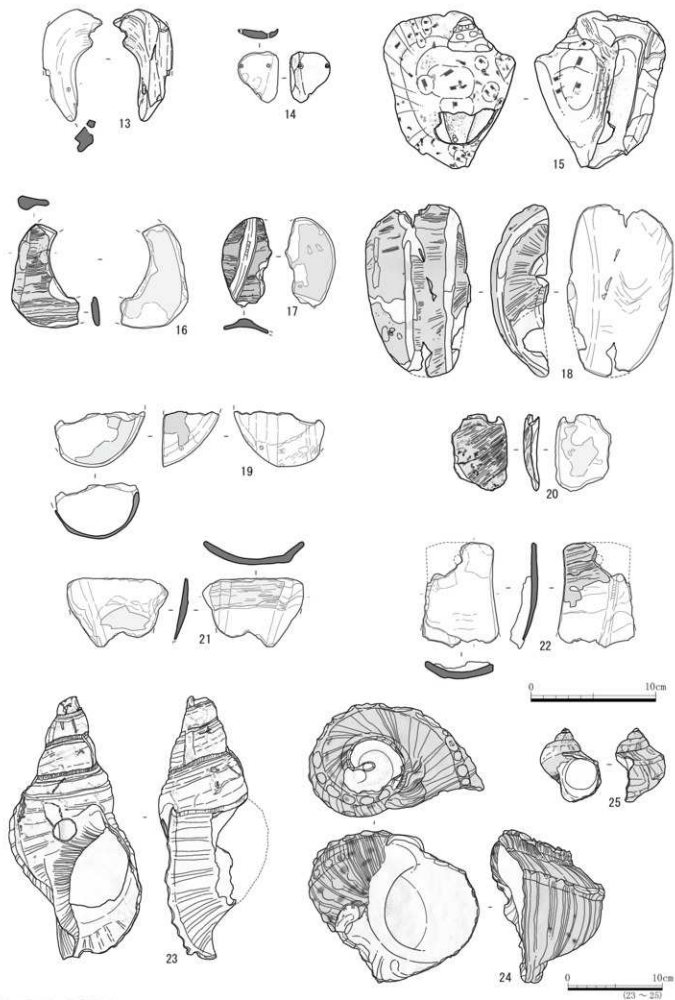
図版121 スズギガイ(穿孔貝)



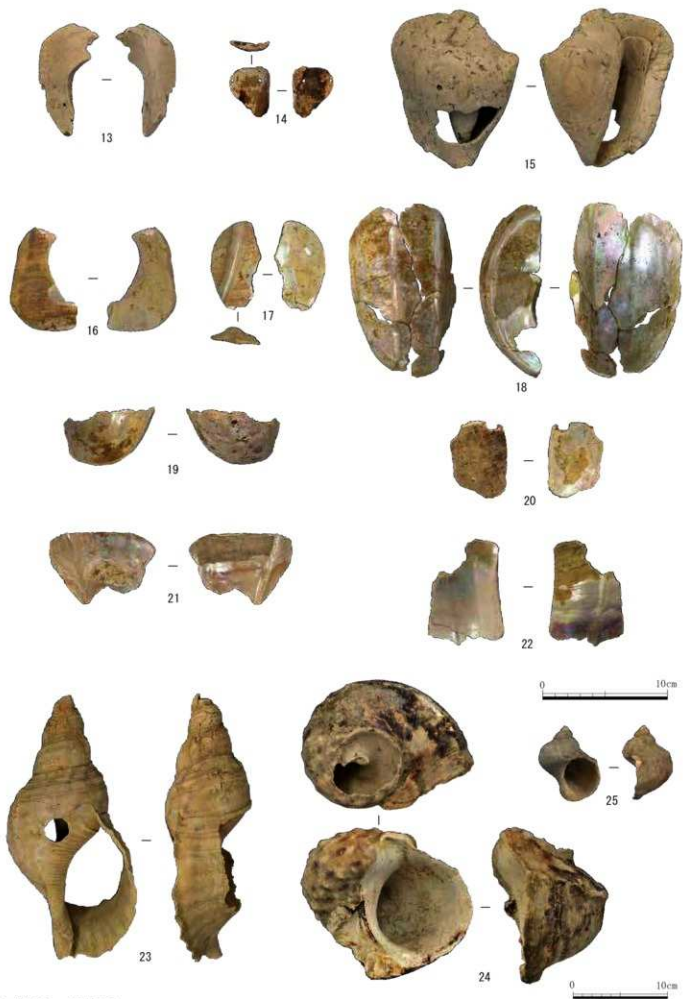
第 181 图 貝製品 1



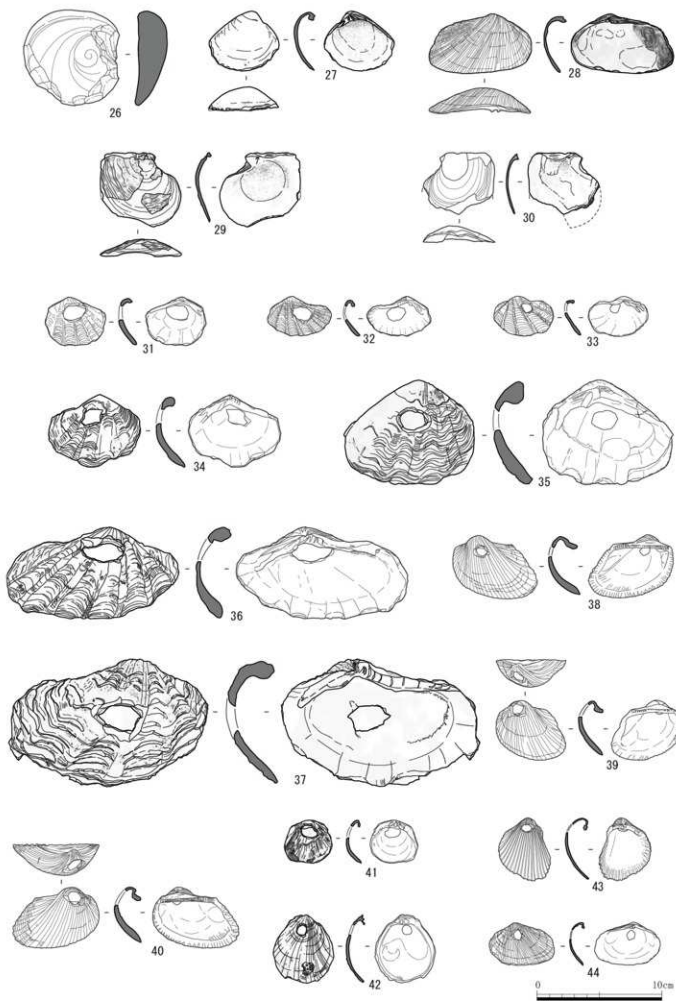
图版 122 貝製品 1



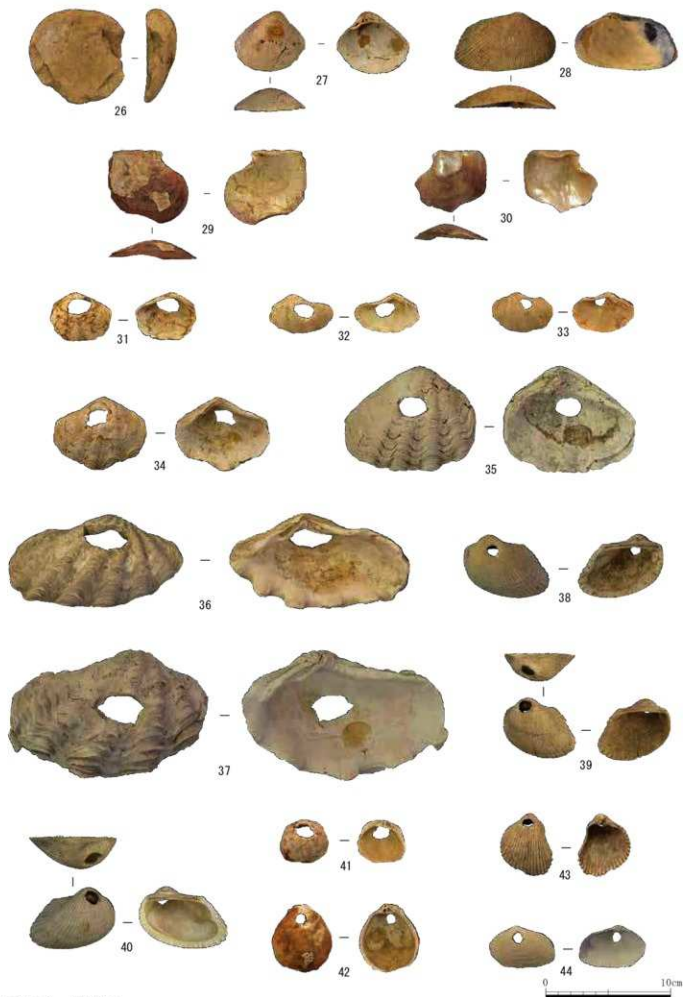
第182図 貝製品2



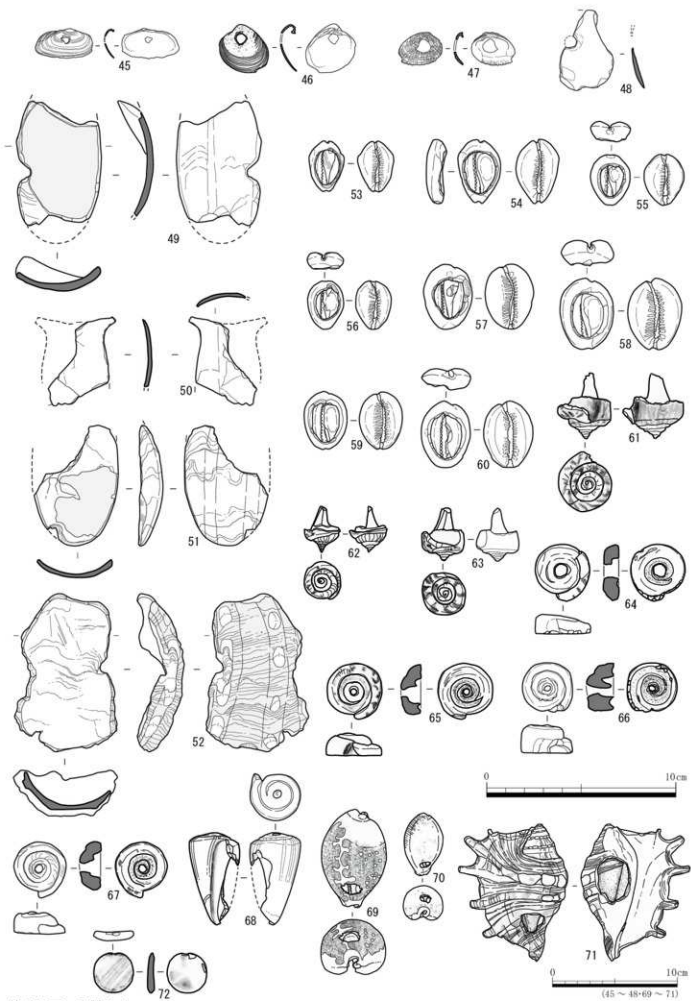
図版 123 貝製品 2



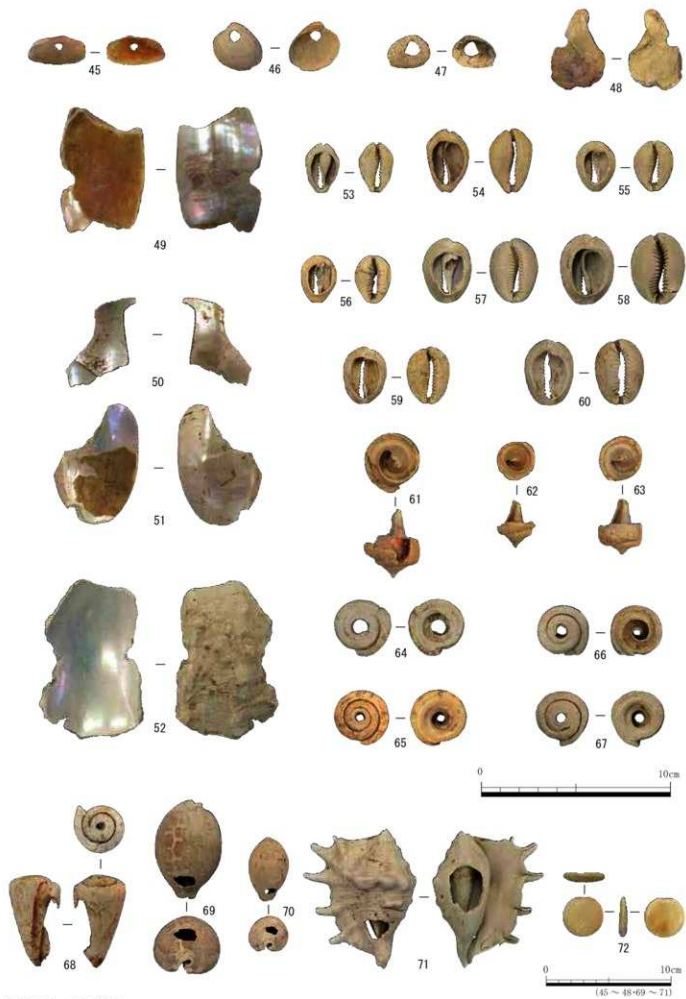
第 183 圖 貝製品 3



図版 124 貝製品 3



第184圖 貝製品4



図版 125 貝製品 4

(29) 骨製品 (第 185 図・図版 126)

HA ③ 3 点・HA ② 6 点・HA ④ 1 点の計 10 点出土した。これらは形態によって貝塚時代後期以前とグスク時代以降に分けられる。概ね貝塚時代後期以前は HA ③ S-640 (自然流路) に沿うように出土し、HA ② では内陸側に偏るようである。出土量が少ないため、すべてを図示し、観察一覧と出土量を示す。以下時代ごとに略述する。

<貝塚時代後期以前>

図 1 は小形のサメ歯である。基部の片面に穿孔が確認されるが貫通しない。孔は不定形で、自然の可能性も否定できない。図 2 はジュゴンの肋骨の一端を方形に加工し穿孔するもので、段を有することから棒状に加工して先端は尖るものと思われる。砂辺貝塚 (1994) やシヌガ堂遺跡 (1985) など貝塚時代前Ⅳ～Ⅴ期に出土。図 3 もジュゴンの肋骨に加工したものであるが、太さが 3.2×2.8cm と他に比べて大きい、両端に切断痕と側面に粗削りを残す。長さ(8.0cm)

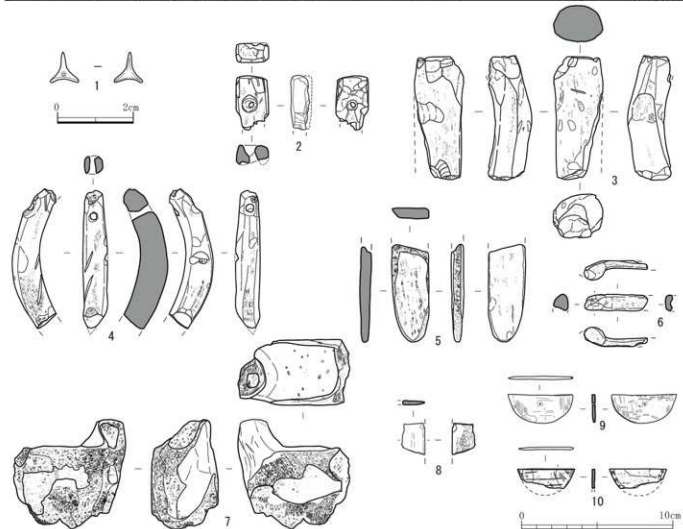
第 124 表 骨製品出土量

製品 種類	骨孔	棒状	不明	板状	半月状	板状	半月状	合計
	サメ	ジュゴン	海胆	ウミガメ	クジラ	ウシ?	ウシ?	
地区	面	肋骨	肋骨	甲殻	肋骨?	四股骨	四股骨	
HA ③	Ⅱ	2				1	3	
HA ②	Ⅱ	1	1	1	1	1	5	
HA ④	Ⅴ						1	1
合計		3	1	1	1	1	2	10

第 125 表 骨製品観察一覧

(法基単位: cm, g)

図版 図号	製品	種類	部位	完成	縦	横	厚さ	重さ	観察事項	地区・グリッド・期 遺跡・台帳 (北) 台帳
1	骨孔	サメ	歯	完	0.7	0.7	0.15	0.01	基部に穿孔。孔は不定形。未貫通。	HA ③ V 下層遺跡 台 4625
2	棒状	ジュゴン	肋骨	1/3	3.4	2.3	1.2	10.9	一端を方形。他は扁圓。棒状。表面・断面・破損。穿孔。両面。外径 1.0、内径 0.5。縁。部分黒化。	HA ③ C10 Ⅱ 台 642
3	棒状	ジュゴン	肋骨	完	8.0	3.2	2.8	60.8	両端に切断痕。側面を粗く削る。石化。	HA ② T1 Ⅱ 貝層まり 台 3764
4	棒状	ジュゴン	肋骨	完	1.8	1.8	1.0	22.3	一端に穿孔。他端両面から削りへつ状。孔は削ってから穿孔。孔は同じ大きさ。中央に丸縁が 2 条。光沢あり。	HA ③ F6 Ⅱ 台 3098
5	板状	ウミガメ	甲殻	2/3	6.5	2.5	0.7	8.3	板状。先端「J」字状。側面のみ加工。先端 1 面のみの削り。割開なし。	HA ② A8 Ⅱ 品 台 3947
6	半月状	クジラ	肋骨?	1/3	4.2	1.0	1.0	3.9	海胆などの肋骨。端状。先端は丸形。直線状に加工。黒化。淡白色。伊礼層。伊 Ⅱ	HA ③ T6 Ⅱ 品 台 784
7	不明	海胆	棒状	3/5	5.5	7.2	4.3	79.5	棒状の突起。表。裏面を削り。研削。側面・自然。割開無	HA ② C5 Ⅱ 伊 3 号 台 3718
8	板状	ウシ?	四股骨	完	2.1	1.5	0.6	1.3	板状。結構緻密。光沢あり。表面に海綿組織。両縁薄く海綿組織。粗い。黒化。光沢	HA ② A2 Ⅱ 祝岡 台 424
9	半月状	ウシ?	四股骨	完	1.9	4.3	0.2	2.0	三日月。やや扁。中央に径 0.1 の孔。	HA ③ A12 Ⅱ S7 台 991
10	半月状	ウシ?	四股骨	完	2.0	3.8	0.2	0.9	三日月。表面は 2 面の研削。裏面に海綿組織。両縁薄く。	HA ② F4 Ⅱ P.2 台 2086



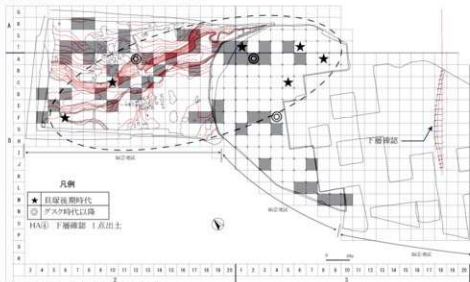
第 185 図 骨製品

から前述の製作途中と思われる。図4 ジュゴンの肋骨で横断面が1.82×1.65cmと細い。小さい肋骨で弧状をなし、端部の外縁を抉り、孔を施す。孔は内径と外径がほぼ同じである。他端は両方から斜めに削りヘラ状をなす。穿孔の状況や骨の大きさを勘案するとグスク時代に属する可能性がある。グスク時代のジュゴン製品は豊見城村宜保アガリヌ御嶽(2003)で報告されている。

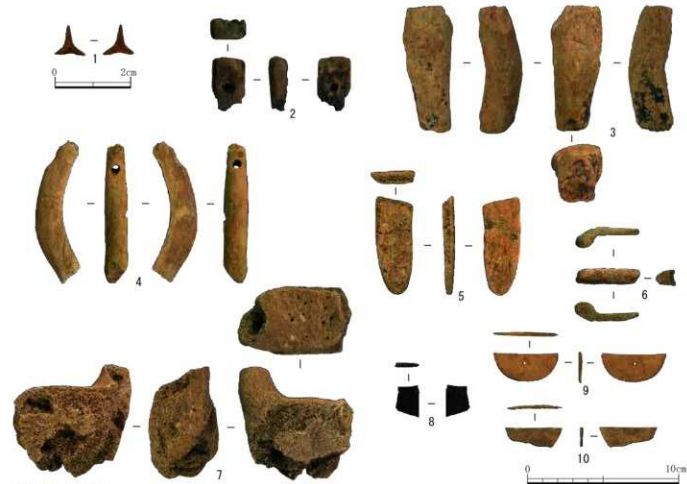
素材からここで記述した。図5はウミガメの甲板を「U」字状にかたどり、片面から削りヘラ状をなす。形状は実用的だが、厚さ0.7cmで骨質は柔らかい。図6はクジラなどの海獣骨の肋骨のたぐいを削り、半環状にしたものである。伊礼原遺跡(2007)や伊礼原E遺跡(2012)で類別があることから貝塚時代前IV期に属する遺物と思われる。骨は被熱ため黒化する。図7は前述と同様、クジラなどの海獣の椎体を加工したものである。椎体の棘突起、椎体の表・裏面を削り、平らにしたもので側面は自然を残す。加工途中と考えられる。

<グスク時代以降>

図8～10はウシなどの大形のほ乳類の四肢骨を板状に加工したものである。図8は一端を加工したもので、裏面は粗い海綿組織が残る。黒化し、光沢がある。図9・10はウシなどの四肢骨を半月状に型どり、ヘラ状に加工したもので、弧状の縁は薄く削る。前者は完形でほぼ中央に径0.1cmの孔を施す。骨の厚さから骨端に近い部分を用いたものと思われる。類別は伊礼原D遺跡(2013)伊礼原遺跡(2014)にある。



第186図 骨製品 平面分布



図版126 骨製品

第IV章 科学的分析

第1節 平安山原A遺跡から採集された脊椎動物遺体の概要

桶泉岳二（早稲田大学）

1. 資料と分析方法

平安山原A遺跡ではH19・H21～H23年度の発掘調査において多数の脊椎動物遺体（魚骨・獣骨など）が出土した。ここではその概要について報告する。

調査区は東側からHA①地区(H19年度調査)・HA④地区(H23年度調査)、HA②地区(H21年度調査)、HA③地区(H22年度調査)に区分されている。骨類を出土した層準・年代は、下位からV層、IV層（貝塚時代後期の可能性大）、III層（近世以前）、II層（近代～終戦時）、I層（攪乱・表土）である。

分析資料のほとんどは発掘現場において手で拾い上げられたもの（ピックアップ資料）であるが、HA③地区「埋裏(S-14)」の内容物については水洗選別による回収が行われている。分析方法は基本的に桶泉(2007)の方法を踏襲した。なお哺乳類の四肢骨については、骨幹の全周を残さない破片は原則として同定対象から除外した。遺体の予備的な同定は鳥袋春美氏の指導のもとに整理作業員諸氏が行い、筆者が同定結果の確認と集計・図表作成を行った。ただし現時点では多くの資料（特に鳥類と比較的小型の哺乳類）が同定未了であるため、以下で述べる同定結果は暫定的なものである。

2. 分析結果

同定結果のローデータについては付録のCDに収録した（付表145～147）。組成の集計については、資料数が膨大であり、また同定未了の資料も多いため、ここでは最小個体数(MNI)の算出は見送り、同定標本数(NISP)のみを第127表に示した。

出土数：同定対象となった資料の総数は6023点で、このうちII層出土資料が4542点（II層上を含む、以下同様）と圧倒的に多く、とくにHA③地区が2700点、HA②地区が1547点と遺跡西部（屋敷跡が明確に確認された範囲）に集中している。次いで多いのがIII層出土資料（1083点、III層下を含む）で、とくにHA④地区が837点、HA②地区が129点と多く、II層とは対照的に遺跡の東半部に分布が偏る。その他の層準ではI層が278点とやや多いが、IV層は40点、V層は19点と、いずれも少数である。

脊椎動物遺体の概要：資料数の多いIII層～I層について脊椎動物遺体全体の組成をみると（図1）、各層準ともにイノシシ/ブタ、ウシ、ウマが主体をなす点で一貫している。その他に魚類、両生類、爬虫類、鳥類、小型哺乳類、海生哺乳類も確認されているが、いずれも少数である。

魚類：全層準を通じて出土数は少ない。硬骨魚綱（真骨類）15分類群が確認された。資料数が比較的多いII層・III層について組成をみると、ともにフエフキダイ科・ハリセンボン科が多く、II層ではベラ科・ハタ科・ブダイ科、III層ではブダイ科・クロダイ属がこれに次ぐ。その他にフグ科、モンガラカワハギ科、アジ科などが確認されている。

両生類・爬虫類・鳥類：両生類ではカエル類、爬虫類ではヘビ類、ウミガメ類、リクガメ類（おそらくリュウキュウヤマガメ）が確認された。ヘビ類は2つのタイプがみられ（ヘビ類A・Bとした）、ヘビ類Aはハブの可能性が高い。鳥類の多くはニワトリ（およびその可能性の高いもの）だが、それ以外の種類も混じる。II層HA②地区では出土量が多い。

陸生哺乳類：全体的にイノシシ/ブタ、ウシ、ウマが多く、ヤギがこれに次ぐ。イヌも普通にみられる。層位的には、III層とI層ではウシ、II層ではイノシシ/ブタ（ほとんどはブタと思われる）が多く、II層HA②地区ではヤギもやや多い。その他にトガリネズミ科？、ネズミ科、ウサギ科、ネコが確認されている。

イノシシ/ブタについては詳細な形態学的検討を行っていないが、野生のリュウキュウイノシシに類するものと、明らかにブタと判断されるものがあり、前者については野生イノシシが含まれる可能性もあることから、前者を「イノシシ/ブタ」、後者を「ブタ」とした。III層では前者、II～I層では後者が多い。

II層では保存良好なブタの下顎骨が多数出土しており、とくにHA③の「石組12(S-5)」からは集中的に出土している。これらは形態的にみて明らかにブタと判断されるが、サイズは比較的小型で、現在の一般的なブタよりかなり小さい。歯の萌出状況に基づく推定年齢は、大半の個体が1.5歳前後（乳臼歯を残すか前臼歯が萌出中、M3は未萌出～萌出中）でよく揃っており、かなり画一的な屠殺が行われていたことがうかがわれる。

HA③地区蒲伊礼小屋敷内C-16グリッドで確認された「埋裏(S-14)」の内部には多数の骨が含まれていたため、水洗選別によって内容物の回収が行われた。検出された骨の大半はブタで、ほかにヤギ・ウシ・小型哺乳類・魚類がわずかに混じる(小型哺乳類と魚類は同定未了)。ブタは全身の骨格が確認された。最小個体数については厳密な集計を終えていないが、主要四肢骨に基づく値は5~6個体前後である。左右のある部位についてはペアリングを試みたが、ペアになるものは少なく、各部位0~1組、まれに2組が確認されたのみである。ブタの骨には、一部の部位(中節骨・末節骨など)を除き、解体痕(カットマークやスパイラルフラクチャーなど)がきわめて顕著に認められた。解体方法はかなり荒っぽく、切断はナタ状の刃物による叩き切り(チョッピング)で行われており、四肢骨では打撃の衝撃で切断されているものも多い(刃物を使ってはいるが、「切る」というよりも「叩き割る」印象である)。ただしナイフ状の刃物による引き切り傷も普通にみられる。切断する位置などについての検討は今後の課題だが、四肢骨にはある程度の規則性がみられるようである。肋骨や中手骨・中足骨には現代の「ソーキ」や「テビチ」に類する切断方法も認められた。いっぽう頭蓋骨では前頭骨~頭頂骨付近に縦・横の切断痕が多数認められ、一撃で完全に切断された資料もみられる。同様の解体方法はHA②・HA③地区出土の他のブタ頭蓋骨でも確認された。こうした解体方法は頭蓋骨を十字状(もしくはさらに細かい単位)に分割することを意図したものと生まれ、脳の抽出などを目的とした通常の解体とみるには念が入りすぎているようにも感じられる。この点についてはさらなる検討が必要である。

海生哺乳類: ジュゴンとイルカ・クジラ類(大型ハクジラ類を含む)が確認された。いずれも出土数は少ない。

3. 付記

以上に記載した資料とは別に、HA④地区のI17~I18グリッド境界付近からイヌの遺体が交連状態で検出されている。確認された部位は頭骨~胸椎前半と肋骨および左右前肢である。脊柱の胸椎後半以降と肋骨最後部および後肢は後世の掘削攪乱により欠失している。

謝辞: 分析作業に際しては、島袋春美氏・山城安生氏・東門研治氏・松原哲志氏ほか北谷町教育委員会の皆様より多大なご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。

参考文献

種泉岳二(2007)『伊礼原遺跡から出土した脊椎動物遺体群』、『伊礼原遺跡—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—』(北谷町教育委員会編)、沖縄県北谷町教育委員会、pp480-534。

第126表 平安山原A遺跡から採集された脊椎動物遺体の種名一覧

硬骨魚類	OSTEICHTHYES	爬虫類	REPTILIA
ウナギ属?	Argallia sp.?	ヘビ類A	Serpentes A
ウツボ科	Muraenidae	ヘビ類B	Serpentes b
コイ科?	Cyprinidae?	リュウキュウヤマガメ	Geomydia spengleri japonica
ハタ科(マハタ型)	Serranidae cf. Epinephelus	ウミガメ類	Cheloniidae
アジ科	Carangidae		
クロダイ属	Acanthopagrus sp.	鳥類	AVES
キツネフエフキ	Lethrinus miniatus	ニワトリ	Gallus gallus
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	Lethrinus cf. L. nebulosus	哺乳類	MAMMALIA
ベラ科(シロクラベラ型)	Labridae cf. Cheredon shoensisii	トガリネズミ科?	Soricidae?
ベラ科B	Labridae B	ネズミ科	Muridae
アオブダイ属	Scarus sp.	ウサギ科	Leporidae
アイゴ属	Siganus sp.	ネコ	Felis catus
モンガラカワハギ科	Balistidae	イヌ	Canis familiaris
フダ科	Tetraodontidae	イノシシ/ブタ	Sus scrofa
ハリセンボン科	Diodontidae	キジ	Capra hircus
		ウシ	Bos taurus
		ウマ	Equus ferus
両生類	AMPHIBIA	ジュゴン	Dugong dugon
カエル類	Anura	大型ハクジラ類	Odontoceti (large)
(右段につづく)			

第 127 表 -2 平安山原 A 遺跡における脊椎動物遺体の組成 (NISF)

* 魚類の種類・カメ類の詳細位置不明の甲殻化石は除外した。

種類	II層																	合計						
	HA ②																							
	瓦屋又古小		三倉又古小		祝女館内										名座座		東大屋小		石 14 S25		島		他	
瓦屋 8	他			797	フル 01	フル	瓦葺り	不明建物	母屋	他	跡付土坑	祝女館内小	聖屋先生	SX01	他									
ウナギ属?																								0
ウツボ科																								0
コイ科?																								0
マハタ型			1																			1		2
ハタ科																								1
ハタ型							1																	1
アジ科																								0
クロダイ属																								0
ハマフエフキ型	1																							1
ネツネフエフキ																								0
フエキダイ属											1													1
フエキダイ科											1		1											2
タイ型											1													1
シロクラベラ型											1													1
ベラ科 他			1																					2
ベラ科																								1
アオボダイ属			1								1													3
ブダイ科																								0
アイゴ属																								0
モンガラカワハギ科																								1
フグ科																								2
ハリセンボン科			<3>																					2
魚骨類確認																								0
魚骨類特定不可																								1
魚類合計	1	1	3	1	0	0	1	0	0	8	0	0	1	0	5	0	0	1	0	22				22
カエル																								12
ヘビ類 A			8																					8
ヘビ類 B																								0
リクガメ																								0
ウミガメ																								5
ニワトリ			1	1		3																		15
ニワトリ?			1																					10
鳥類 (特定未了)			1																					2
鳥類 (特定不可)			1																					11
水生爬虫・鳥類合計	0	12	1	0	3	0	0	0	0	24	0	0	1	0	6	0	15	1	0	63				63
トガリネズミ科?																								0
ネズミ科	1	6																						145
ウサギ科																								4
ウサギ科?																								4
ネコ			1																					2
ネコ?																								0
イヌ			1				1	2																13
イヌ?			1	2																				10
小型獣 (特定未了)			2	1																				14
小型獣 (特定不可)			1			1																		13
イノシシ/ブタ			21	6		5	1	1	3															154
ブタ	1	24	6	1	9	4	4	1																252
ブタ?			2																					8
ヤギ			6	1	2	4																		105
ヤギ?			1	2																				25
ウシ			30	7		3	6	21	2	1														227
ウシ?						1																		2
ウマ			15	2			6	21	1	7														133
ウマ?																								0
ウシ/ウマ	1	9	4				2	8	3															101
ウシ/ウマ?																								0
哺乳類 (特定未了)																								1
哺乳類 (特定不可)			10	7		3																		134
ジュゴン																								4
ジュゴン?																								0
大型ハクジラ類																								0
クジラ類																								0
イルカ/クジラ類																								0
海獣																								0
海獣?																								0
哺乳類計	3	128	40	4	25	20	61	11	8	620	71	11	36	6	67	9	144	56	3	1351				1351
総計	4	141	44	5	28	20	62	11	8	652	71	11	38	6	78	9	159	58	3	1436				1436

第 127 表 -3 平安山原 A 遺跡における脊椎動物遺体の組成 (NISP)

* 魚類の種・カメ類の詳細位置不明の甲板破片は除外した。

種別	日別																			他	合計						
	HA③																										
	S-2	S-3	S-4	S-10	S-11	S-12	S-13	S-16	S-30	S-40	S-640	99ヶ	遺伊乳小	大塚	仲葉	埋蔵 S-14	骨集中	石 12 S-5	石 14 S-25	石 16 S-38	石 19 S-692						
ウナ平属?																									0		
ウツボ科																									0		
コイ科?																									0		
マハタ型																									0		
ハタ科																									0		
ハタ型																									0		
アジ科											1													1	2		
クロダイ属																									0		
ハマフエフキ型																									0		
ネツネフエフキ																									0		
フエフキダイ属																									0		
フエフキダイ科																									1	1	
タイ型																									0		
シロクラベラ型																									1	1	
ベラ科 B																									0		
ベラ科																									0		
アオプダイ属																									0		
ブダイ科																									0		
アイゴ属																									0		
モンガラカワハギ科																									0		
フダ科																									0		
ハリセンボン科																									4	4	
直片類未確認																									0		
直片類同定不可																									0		
魚類合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	8	
カエル																										0	
ヘビ類 A																										0	
ヘビ類 B																										0	
シクガメ																										0	
ウミガメ												<1>													4	4	
ニワトリ																1									5	6	
ニワトリ?					1													1							8	9	
鳥類 (同定未了)																1			1		1				3		
鳥類 (同定不可)																									2	2	
水生爬虫・鳥類合計	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	1	0	1	0	19	24		
トガリネズミ科?																										0	
ネズミ科											1															1	
ウサギ科			2																							2	
ウサギ科?																										0	
ネコ																										0	
ネコ?					1							1														2	4
イヌ					1						3	3														10	17
イヌ?						1						1														2	4
小型獣 (同定未了)					1						1	2				9										2	15
小型獣 (同定不可)					2																					5	7
イノシシ/ブタ																										3	3
ブタ	8	10	5	5	26	15	4	5	3	3	9	13	1	2		907		49	6	24	5			319	1419		
ブタ?																			1		24	1			1	3	
キギ	2	2	3	1		9	1						1		1		5		5		2				57	89	
キギ?																		1			1					4	6
ウシ	1	1			20	5	4	2	5	1	34	37			1	1	18		1						412	543	
ウシ?																										1	2
ウマ	1	1		1	14	2	5	1				13	10			2				1					198	249	
ウマ?																										1	1
ウシ/ウマ				1	18	1	1	1			2	7	18				2								133	184	
ウシ/ウマ?																										12	12
哺乳類 (同定未了)	1				1							1	1													24	28
哺乳類 (同定不可)	1	2	2	1	8	3		1			1	1	2	1		1	1		1						47	73	
ジュゴン												1														2	3
ジュゴン?																										0	0
大型ハクジラ類																										0	0
クジラ類													1													1	1
イルカ/クジラ類																										1	1
鳥類											1															1	0
魚類合計	14	16	13	8	93	36	15	10	8	7	72	89	3	3	4	924	20	56	8	27	6			1236	2668		
総計	14	16	13	8	93	37	15	10	8	7	73	89	3	3	4	926	20	57	8	28	6			1262	2700		

第127表-4 平安山原A遺跡における脊椎動物遺体の組成 (NISF)

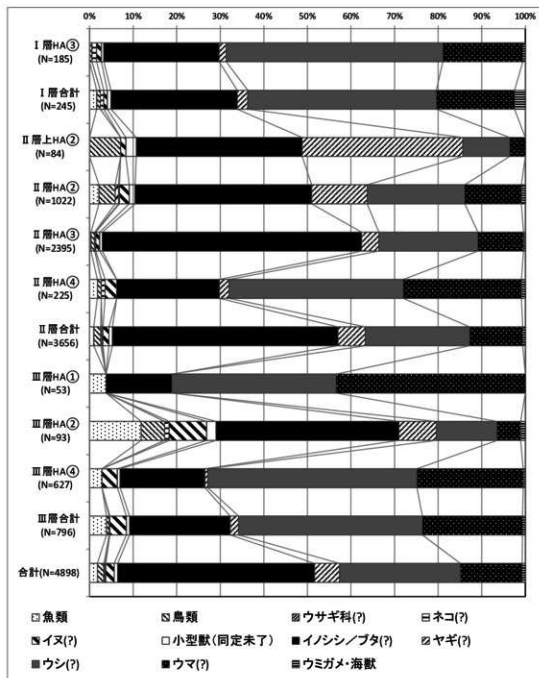
* 魚類の種・カメ類の詳細位置不明の甲板破片は除外した。

種類	目録							II 目録		目録										
	HA ④							合計	HA ③	HA ①				HA ②						
	SD5	SD41	SD42	SD43	他	合計	0021 SD			0024 SD	他	合計	SK 001	SK 002	SK 003	SK 004	SK 005	SK 009	他	合計
ウナギ類?						0				0									0	
ウツボ科						0				0									0	
コイ科?						0				0									0	
マハタ型						2				0									0	
ハタ科						1				0				1					1	
ハタ型						1				0									0	
アジ科						2				0									0	
クロダイ属				1	1	1				0						1			1	
ハマフエフキ型						1				0			1						1	
ネツネフエフキ				1	1	1				0									0	
フエフキダイ属						1				0			1						1	
フエフキダイ科						3				0	1		1						2	
タイ型						1				0			1						1	
シロクラペラ型						2				0			1						1	
ペラ科B						2				0									0	
ペラ科						1				0									0	
アオブダイ属						3				0					1				1	
フダイ科						0				0									0	
アイゴ属						0				0									0	
モンガラカワハズ科						1				0								1	1	
フグ科						2				0									0	
ハリセンボン科				1	1	7				0									<1>	
真骨類未確認						0				0			1						1	
真骨類同定不可				1	1	2				0									0	
魚類合計	0	0	0	0	4	4	34	0	0	0	0	2	2	2	3	1	1	1	11	
カエル						12				0									0	
ヘビ類A						8				0									0	
ヘビ類B						0				0									0	
リクガメ						0				0									0	
ウミガメ						9				0			1	<1>					<3>	
ニワトリ						21				0					2				2	
ニワトリ?				2	2	21				0			2						2	
鳥類 (同定未了)						5				0									0	
鳥類 (同定不可)						13				0			1						1	
両生・爬虫・鳥類合計	0	0	0	0	2	2	89	0	0	0	0	0	3	1	0	2	0	0	6	
トガリネズミ科?						0				0		1							1	
ネズミ科						146				0									0	
ウサギ科						6				0									0	
ウサギ科?						4				0									0	
ネコ				2	2	4				0								1	1	
ネコ?						4				0									0	
イヌ			1		3	4	34			0			1					4	5	
イヌ?			1		1	2	16			0				1				2	3	
小型獣 (同定未了)						29				0		1		1					2	
小型獣 (同定不可)			1		10	11	31			0		1						1	2	
イノシシ/ブタ	2	6	8		35	51	209	2		6	2	8	2	3	3	1	4	4	17	
ブタ			1		1	2	1673	1		0		1	4		4	1		12	22	
ブタ?						11				0									0	
ヤギ			1		2	3	197			0		2	1		2	1			6	
ヤギ?			1		1	2	33			0				1				1	2	
ウシ	7	13	3	8	59	90	871	13	6	6	7	19	3	5	2		1	2	13	
ウシ?						4				1									0	
ウマ	1	8	2	2	48	61	445	10		11	12	23		2				3	5	
ウマ?						1				0									0	
ウシ/ウマ	1	2			23	26	312	7		3	3	2	1	3	1			2	12	
ウシ/ウマ?					1	1	13			0									0	
哺乳類 (同定未了)					1	1	30			0									0	
哺乳類 (同定不可)	1	3			10	14	222	2		0	3	1	2	4	1			10	21	
ジュゴン					2	2	9			0									0	
ジュゴン?						0				0									0	
大型ハクジラ類						0				0									0	
クジラ類						1				0									0	
イルカ/クジラ類						1				0									0	
海狸						1				0									0	
海狸?						0				0									0	
哺乳類計	13	35	15	10	199	272	4307	35	7	26	21	54	17	18	6	18	7	4	42	112
総計	13	35	15	10	205	278	4430	35	7	26	23	56	22	21	9	21	8	5	43	129

第127表-5 平安山原A遺跡における脊椎動物遺体の組成 (NISF)

* 魚類の種・カメ類の詳細位置不明の平均値は除外した。

種類	層						重層下			IV層				V層				不明		合計
	HA③		HA④		合計	合計	HA①	HA③	合計	HA①	HA②	HA③	HA④	合計	HA③	HA④	HA②	HA③		
	S582	他	合計	SP450															他	
ウナギ属?	0			1	1	1		0						0					1	
ウツボ科	0			0	0	0								0	5				6	
コイ科?	0			0	0	0								0	1				1	
マハタ型	0			0	0	0								0	0				2	
ハタ科	0			0	1	1		0						0	0				2	
ハタ型	0			0	0	0		0						0	1				2	
アジ科	0			0	0	0		0						0	0				2	
クロダイ属	0			2	2	3		0						0	0				4	
ハマフエフキ型	0			0	1	1		0						0	0				2	
キツネフエフキ	0			0	0	0		0						0	1				1	
フエフキダイ属	0			0	1	1		0						0	0				2	
フエフキダイ科	0			1	1	3		0						0	0				6	
タイ型	0			0	1	1		0						0	0				2	
シロクラベラ型	0			0	1	1		0						0	0				3	
ベラ科B	0			0	0	0		0						0	0				2	
ベラ科	0			0	0	0		0						0	0				1	
アオブダイ属	0			2	2	3		0						0	0				6	
ブダイ科	0			1	1	1		0						0	2				3	
アイゴ属	0			0	0	0		0						0	1				1	
モンガラカワハブリ科	0			0	0	1		0						0	0				2	
フグ科	0			0	0	2		0						0	0				4	
ハリセンボン科	0			6	6	6		0						0	0				13	
真骨類親縁種	0			2	2	3		0						0	0				3	
真骨類同定不可	0			3	3	3		0						0	7			1	16	
魚類合計	0	0	0	0	18	18	31	0	0	0	0	0	0	0	17	0	0	1	87	
カエル	0			0	0	0		0						0	0				12	
ヘビ類A	0			35	35	35		0						0	1				44	
ヘビ類B	0			1	1	1		0						0	1				3	
リクガメ	<1>			0	0	0		0						0	0			<1>	12	
ウミガメ	0			0	0	1		1	1		1			1	0				0	
ニトリ	0			0	0	2		0						0	0				25	
ニトリ?	0			0	0	2		0					1	1	0				26	
鳥類 (同定未了)	0			0	0	0		0						0	0				7	
鳥類 (同定不可)	0			0	0	1		0						0	0				16	
両生・爬虫・鳥類合計	0	0	0	0	36	36	42	0	1	1	0	1	0	1	2	2	0	0	145	
トガリネズミ科?	0			0	0	1		0						0	0				1	
ネズミ科	0			5	5	5		0						1	1				152	
ウサギ科	0			0	0	0		0						0	0				6	
ウサギ科?	0			0	0	0		0						0	0				4	
ネコ	0			0	0	1		0						0	0				5	
ネコ?	0			0	0	0		0						0	0				6	
イヌ	0	3		7	10	15	1	1						9	9				61	
イヌ?	0	2		10	12	15		0						1	1				33	
小型獣 (同定未了)	0			4	4	6		0					1	1	1				40	
小型獣 (同定不可)	0			29	29	31		2	2					1	1				70	
イノシシ/ブタ	1	1		117	117	143		0						5	5			4	390	
ブタ	2	12	14	5	5	41		5	5				2	5	2			2	181	
ブタ?	0			0	0	0		0						0	0				12	
キギ	2	1	3	1	1	10		0						0	0			1	241	
キギ?	0			3	3	5		0						0	0				42	
ウシ	2	2		301	301	335	1	5	6	1			2	4	7			2	1349	
ウシ?	0			0	1	1		0						0	0				6	
ウマ	2	2		153	153	183	1	1	2				1	4	5			2	694	
ウマ?	0			0	0	0		0						0	0				1	
ウシ/ウマ	7	7		108	108	130	12	12			1			4	5				498	
ウシ/ウマ?	0			0	0	0		0						0	0				13	
哺乳類 (同定未了)	0			1	1	1		0						0	0				34	
哺乳類 (同定不可)	2			31	31	54		0						0	0			1	298	
ジュゴン	0			3	3	3		0						1	1				14	
ジュゴン?	0			0	0	0		0						0	0				1	
大型ハクジラ類	0			0	0	0		0						0	0				3	
クジラ類	0			0	0	0		0						0	0				2	
イルカ/クジラ類	1			1	0	1		0						0	0				2	
海獣	0			0	0	0		0						0	0				1	
海獣?	0			0	0	0		0						0	0				1	
哺乳類合計	7	25	32	5	778	783	981	3	25	28	1	1	6	30	38	0	2	10	13	5791
総計	7	25	32	5	832	837	1054	3	26	29	1	2	6	31	40	19	2	10	14	6023



第187図 平安山原A遺跡における層準・地区別の脊椎動物遺体の組成(NISP比)

* N≧50の層準・地区のみ表示。自然の遺骸と思われるカエル・ヘビ・トガリネズミ科・ネズミ科は除外した。

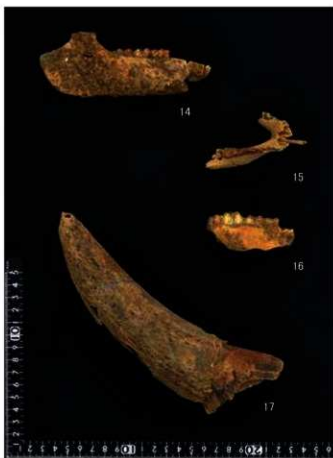
* ウサギ科・ネコ・イヌ・イノシシ/ブタ・ヤギ・ウシ・ウマはそれぞれ「？」付きの資料も含む。



ハタ科 (マハタ型) 1 前鰓蓋骨 (L) 2 歯骨 (L) ハタ科 3 主上顎骨 (R) フェフキダイ属 (ハマフエフキ型) 4 前上顎骨 (L) フェフキダイ属 5 口蓋骨 (R) フェフキダイ科 6 歯骨 (R) 7 主上顎骨 (L) 8 方骨 (R) ペラ科 (シロタラペラ型) 9 下咽頭骨
ペラ科 10 上咽頭骨 (L) 11 下咽頭骨 ペラ科 12 前上顎骨 (R) アオブダイ属 13 前上顎骨 (R) 14 歯骨 (R)
モンガラカワハギ科 15 脛骨 16 背棘軸 フグ科 17 前上顎骨 or 歯骨 ハリセンボン科 18 前上顎骨 or 歯骨



ウミガメ類 19 肋骨板 20 縁骨板 21 頂骨板 ジュゴン 22 頭頂骨 23 胸椎 24・25 肋骨 ハクジラ類 26～28 歯 ヘビ類 (ハブ型) 29 椎骨
図版 127 脊椎動物遺体 1 (上段: 魚類、下段: ウミガメ類・ジュゴン・ハクジラ類・ヘビ類)



ネズミ亜科(小) 1 下顎骨(R) ネズミ科(大型) 2 脛骨(L) ウサギ科 3 下顎骨(L) 4 脛骨(L) ネコ 5 下顎骨(R) 6 上腕骨(L)
イヌ 7 下顎骨(R) 8 下顎骨(L) 9 脊椎 10 肩甲骨(L) 11 橈骨(R) 12 尺骨(L) 13 脛骨(L) イノシシ/ブタ 14 下顎骨(R) 15 下顎骨(L・R)
16 下顎骨(R) ウシ 17 前頭骨(角芯)



ブタ 18 前頭骨+頭頂骨(L・R) 19 前頭骨(R) イノシシ/ブタ 20 前頭骨(関節結節)(L) 21 後頭骨(後頭顆)(L) 22 後頭骨(後頭顆)(R)
23 下顎大歯L(オス) ブタ 24 脊椎 25・26 下顎骨(L・R) 27 下顎骨(L) 28 肩甲骨(L) 29 肩甲骨(L) 30 上腕骨(R) 31 上腕骨(L) 32 橈骨(R)
33 尺骨+橈骨(R) 34 尺骨(R)

図版 128 脊椎動物遺体 2 (上段: ネズミ科・ウサギ科・ネコ・イヌ・イノシシ/ブタ・ウシ、下段: ブタ・イノシシ/ブタ)



フタ 1 寛骨 (R) 2 大腸骨 (R) 3 大腸骨 (L) 4 脛骨 (L) 5 脛骨 (R) 6 踵骨 (L) 7 距骨 (L) 8 第3中手骨 (R) 9 第3中手骨 (L)
 10 第4中手骨 (R) 11 第4中手骨 (L) 12 第5中手骨 (R) 13 第3中足骨 (R) 14 第4中足骨 (L) 15 第5中足骨 (L) 16 基節骨 17 中節骨
 18 末節骨 イノシシ/フタ 19 寛骨 (L)



ヤギ 20・21 下顎骨 (R) 22 肩甲骨 (L) 23 上腕骨 (R) 24 上腕骨 (L) 25 尺骨 (L) 26 尺骨・橈骨 (L) 27 尺骨 (R) 28 中手骨 (L) 29 寛骨 (R)
 30 寛骨 (R) 31 大腸骨 (L) 32 脛骨 (R) 33 脛骨 (L) 34 距骨 (L) 35 踵骨 (R) 36 中足骨 37 中足骨 (L) 34 基節骨

図版 129 脊椎動物遺体 3 (上段: フタ・イノシシ/フタ、下段: ヤギ)



図版 130 解体痕のある脊椎動物遺体 (上段: プタ、下段: プタ・ヤギ)

1 前頭骨+頭頂骨(L) 2 頭頂骨+後頭骨(R) 3 頭頂骨+後頭骨(L) 4 上顎骨(L・R) 5 下顎骨(L) 6 頸椎 7 椎骨棘突起先端部 8 頸椎
9 軸椎 10 胸椎椎体 11~13 腰椎 14~16 肋骨 17 肩甲骨(R) 18 肩甲骨(L) 19-20 上腕骨(R) 21 第3中足骨(R) 22・23 橈骨(L)
24 脛骨(R) 25 尺骨(L) 26 尺骨(L)



27・28 寛骨(L) 29 寛骨(R) 30・31 大腿骨(R) 32・33 脛骨(L) 34 脛骨(R) 35・36 腓骨 37・38 踵骨(R) 39・40 距骨(R)
41 膝蓋骨(L) 42 中手/中手骨 43 第2中手骨(L) 44 第3中手骨(L) 45 第4中手骨(R) 46 第4中足骨(L) 47 第5中足骨(R) 48・49 基節骨
50 中節骨 51 末節骨 ヤギ 52 肩甲骨(R) 53・54 寛骨(R)

図版 130 解体痕のある脊椎動物遺体 (上段: プタ、下段: プタ・ヤギ)

第2節 平安山原A遺跡の調査で得られた貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

平安山原A遺跡は沖縄島中部西岸・北谷町に位置する沖縄貝塚時代後期から戦前までの遺跡であり、大面積の発掘調査が行われていた地域に存在し、本遺跡もそのひとつである。この平安山原A遺跡では、戦前の居住域が不幸な太平洋戦争による土地接収の結果、ある種バックされていた状況が想定され、この時期の人々の生活を考古学的に明らかにできる可能性が指摘されている。この興味深い遺跡の貝類遺体を検討する機会を与えて頂いたので、ここに簡単にはあるが結果を報告したい。報告に先立ち、種々お世話になった北谷町教育委員会の島袋春美・山城安生・東門研治の各氏、大量の貝類遺体の同定・集計・人力を頂いて頂いた資料室の方々に御礼申し上げます。

対象サンプルと調査地点について

今回の報告対象サンプルは、平成19年度調査のHA①地区、平成21～23年度調査のHA②～HA④地区にわたり、ピックアップ法によって得られたもので、土壌サンプルから抽出された遺体は含まれていない。得られた貝類は種の同定・出土部位・生死等を記録して、各グリッドの包含層および遺構ごとに集計を行った。報告者は、大部分の種の同定を行い、一部の誤同定と考えられる種に関しては沖縄の類似種に修正したが、一部には未確認のものも残ってしまった。データが膨大であったため、前報の平安山原B遺跡と同様に（黒住、2015）、出土数は同定標本数（NISP）として処理した。同定標本数の場合、チョウセンサザエ等は殻とフタ・破片が、二枚貝では左右殻と破片が、それぞれ1として集計され、破片の多くなる大形種や二枚貝で、最少個体数よりも過大評価となってしまっている。ただ、今回のデータ間での比較には大きな影響を与えないと考えられる。

各時代の土器や他の人工遺物等で分布集中域が認められており、貝類でもグリッドを単位として、第188図に示したイ～カの14区に区分して集計を進めた。その結果が第130表である。なお、これらの14地区以外からも貝類は出土しており、図版には14の区以外から出土した種も掲載している。

結果及び考察

今回、14の区の総合計として107,563個体と膨大な数の貝類遺体が出土しており、他の地点とも併せて本遺跡からは海産腹足類34科180種、海産二枚貝類21科81種、淡水産腹足類3科7種、陸産腹足類4科8種が確認された。

14の区の合計では、サンゴ礁のイノー内に生息するマガキガイが37.4%と最も多く、次いで内湾の砂泥底で見られる二枚貝のリュウキュウシラトリが6.7%となっていた。その他、リュウキュウシラトリと類似した内湾の二枚貝類も多く、それらはマスオガイ（5.1%）・ヌノメガイ（4.6%）・リュウキュウマスオ（3.8%）・カワラガイ（2.6%）・ユウカゲハマグリ（2.4%）・ホソスジイナミ（2.2%）等であった。サンゴ礁の巻貝では、イノー内に生息するオニツノガイ（3.4%）・クモガイ（3.3%）も多く、干瀬で見られるチョウセンサザエが3.4%、礁斜面のサラサバテイルが4.3%と目立っていた。これらの12種で全体の79.1%と大半を占めていた。ただ、発掘時の観察では、小形のリュウキュウミニナも極めて多くの個体が集中している地点もあり、小形であることからピックアップの対象とならず、もしかするとこの種の一部はオニツノガイとされている可能性も否定できない。

今回はサンゴ礁の貝類としてマガキガイで、内湾の貝類としてリュウキュウシラトリで代表させて、この2種の各区における頻度（%）から、食用貝類遺体の分析を試みた。第130表で、ある区の一つの層での出土数が極めて多い主体的な層が存在した場合には上下の層からの出土個体は主体的な層に由来する可能性が高いものと考え、一括して対象とした。一方、各層の出土数に大きな差のない場合には、層ごとに計算し、上下の層のものは含めなかった。

これらの過程を経て、リュウキュウシラトリの割合を基準に示したものが第128表である。全体を通してみると、1）リュウキュウシラトリとマガキガイはある程度、一方が多い場合には他方が少ないという傾向が認められる、2）同じ区の層ごとの割合は余りまとまらない、3）時代ごとの差は明瞭ではないものの、多少まとまる可能性もある、と言った点が指摘できるようである。

1）の2種の割合に関しては、リュウキュウシラトリの採集される内湾とマガキガイの採れるサンゴ礁を何らかの形で使い分けていた結果かもしれない。特に、第128表の下部に示した3つのものではマガキガイが半数以上を占め、リュウキュウシラトリが2%未満と明瞭な差が認められた。表の上部のリュウキュウシラトリの多い層でも、マガキガイの少ない傾向が存在するようであった。

一方で、2)の同じ区内の層ごとの比較では、又区のⅡ層(近世)とⅢ層(貝塚後期～近世)のように2つの層の割合が極めて類似しているものは、一方の時代の貝類組成を反映している可能性も高い。しかし、ル区のⅡ層(近世)とⅢ層(グスク～近世)ではかなり相違が認められている。現場での観察では、チ区でリュウキュウシラトリやマスオガイが集中していたことを観察しており、その結果はある程度第128表に反映されているものの、この層ではマガキガイも多く、小さな単位での廃棄をどのように捉えるかも今後の課題と言えよう。

本遺跡で最も興味深いと想定される時代変遷を考えた3)では、貝塚後期以前の4つは比較的リュウキュウシラトリの多い第128表の上部に存在し、マガキガイの多いものは表の下部のグスク～近世にやや下部に多い傾向があるかもしれない。一方で、近代からの時期の堆積とされるチ区Ⅱ層主体とリ区のⅡ層では、かなり組成が異なっていた。

今回極めて明瞭に区や時代ごとの貝類遺体の変遷を示すことはできなかった。この要因には様々なことが想定されるが、一つには本地域が貝塚時代後期から戦前まで継続的に集落を含む人間活動の場であったために、過去の時代の貝類が掘削などにより攪乱を受けていることが考えられる。一方で、沖縄島のグスク時代の多くの遺跡では、内湾のカンギクヤカニモリ類、あるいは河口干潟のアラスジケマンが優占する貝類遺体群が知られている(例えば黒住, 2002等)。しかし、本地域ではこのような傾向にないことも示してきた(例えば黒住, 2008)。このように平安山原A遺跡でも、これまでに発掘されたグスク本体とは異なる集落の遺跡であることに起因するとも考えられ、またこの遺跡の人々が必ずしも農耕にのみ従事していない可能性も想定される。

本遺跡の一部からは土壌サンプルも採取されており、ホ区の西端ではリュウキュウウミナガが集中している状況も確認しているので、今後、そのサンプルの処理を含め、本遺跡の貝類遺体を再度検討する機会があればと考えている。

第128表 平安山原A遺跡におけるリュウキュウシラトリとマガキガイの頻度(%)

地区	貝種	リュウキュウシラトリ	マガキガイ
カ:	Ⅳ層/貝塚後期以前(N=2288)	37.0	0.1
チ:	Ⅱ層主体/近代～(N=4968)	32.8	16.0
カ:	Ⅲ層下/グスク～近世(N=1776)	28.8	0.9
ヲ:	Ⅳ層/貝塚後期(N=345)	14.2	17.7
ト:	Ⅱ層主体/近代～(N=955)	12.3	18.3
又:	Ⅳ層/貝塚後期(N=222)	9.0	9.5
ニ:	Ⅱ層主体/近世～近代(N=1904)	8.4	25.2
ヲ:	Ⅲ層/グスク～近世(N=14786)	7.6	17.8
リ:	Ⅲ層/グスク～近世(N=349)	5.7	24.4
ヘ:	Ⅱ層主体/貝塚後期～近世(N=3431)	5.7	24.4
ル:	Ⅳ層/貝塚後期以前(N=545)	5.3	23.5
ル:	Ⅱ層/近世以降(N=4464)	5.3	46.1
リ:	Ⅱ層/近代(N=693)	5.2	24.5
ロ:	Ⅱ層/グスク～近世(N=9984)	3.8	39.8
又:	Ⅱ層/近世(N=2032)	3.2	43.1
又:	Ⅲ層/貝塚後期～近世(N=2763)	3.1	31.0
イ:	Ⅱ層主体/近世(N=1904)	2.9	23.3
ホ:	Ⅱ層主体/近世～近代(N=28682)	2.3	44.2
ル:	Ⅲ層/グスク～近世(N=14786)	2.1	49.9
ハ:	Ⅱ層/近世～近代(N=1776)	1.5	57.7
ワ:	Ⅲ層/グスク～近世(N=1776)	1.5	57.7
ロ:	Ⅲ下層/グスク～近世(N=3553)	1.4	63.2

<引用文献>

- 黒住耐二, 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活. In 木下高子(編), 先史琉球の生産と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp. 67-86. 熊本大学文学部.
- 黒住耐二, 2008. 伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体. 伊礼原D遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (28): 168-183, 197-200.
- 黒住耐二, 2015. 平安山原B遺跡の調査で得られた貝類遺体. 平安山原B遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (37): 388-404.

第129表 平安山原A遺跡出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型。

和名	学名	生息場所 類型	図面 番号	和名	学名	生息場所 類型	図面 番号
軟体動物門 Mollusca				コシノガイ科	Cypraea (Fronsaria) erosa	I-2-b	83
腹足綱 Gastropoda				ハナマルユキ	Cypraea (Rav.) caputserpentis	I-3-a	84
ツタノ科 Patellidae				ハシジヨウダカウ	Cypraea (Mauritia) mauritiana	I-1-a	95
オオツタノハ	Scutellastra optima	VI		ヤナギボリダカウ	Cypraea (Luria) isabella	I-2-b	
ユメガサガイ科 Nacellidae				ヤクサンダカウ	Cypraea (Arabic) arabica	I-2-a	85
オホベッコウガイ	Celina testudinaria	I-1-a	3	ホウヤクノツマダカウ	Cypraea (Arabic) arguta	II-2-a	86
ユメガサガイ科 Lotidae				タルダカウ	Cypraea (Takosoides) teres	I-2-a	9
リュウキョウウノアシ	Patelloida saccharina	I-1-a	2	ホシダカウ	Cypraea (Talparia) talpa	I-2-a	
ミミガイ科 Haliotidae				ホシダカウ	Cypraea (S.) tigris	I-2-c	
イボアナゴ	Haliotis (Sanhalotis) varia	I-2-a	4	ヒメホシダカウ	Cypraea (Syncaia) lynx	I-2-b	90
マツノゴ	Haliotis (Elysiotis) ovina	I-3-a	5	ホシダカウ	Cypraea (Mystampodium) vitellus	I-2-a	91
ミミガイ	Haliotis (Haliotis) asinina	I-3-a	4	タマガイ科 Naticidae			
リュウケツ科 Turbinidae				トミガイ	Polinices namidus	I-2-c	99
コシダカサザ	Turbo (Marma) stenogymus	I-2-a	16	ホウヤクノミガイ	Polinices Flemingianus	I-2-c	100
チュウセンソサザ	Turbo (Marma) angustosoma	I-3-a	7-8	シロハツノキトミガイ	Polinices vabouis	I-2-c	101
リュウケツ	Turbo (Turbo) petholatus	I-4-b	15	リスガイ	Mammilla melanosoma	I-2-c	102
ヤウマガイ	Turbo (Lunatic) marmoratus	I-4-a	9-10	ネズミガイ	Mammilla sinuata	I-2-c	
カンギク	Laurella moniliformis	II-1-b	11	コウカダマ	Natica stellata	I-4-c	105
オオウラウズ	Astrum rhodostoma	I-2-a	13	ホウシュノタマ	Notochelonic guaiteriana	II-1-c	104
ニシキウス科 Trochidae				アコノマフダ	Naticarius onca	I-2-c	107
ニシキウス	Trochus (Trochus) maculatus	I-2-a	18	ヤツシロガイ科 Tonnicidae			
ムコサキ	Trochus (Trochus) stultus	I-3-a	17	トナリ	Tonina perca	I-2-c	109
ムコサキチネモジツウ	Trochus (Trochus) s. sacellum?	I-4-a	24	トナリ	Tonina cepa	I-2-c	110
ギンタカハマ	Trochus (Trochus) pyramis	I-4-a	19	イワウタノキ	Maka (Quinaculus) pomum	I-2-c	108
コシダカサツカハマ	Trochus (Trochus) triseriatus	I-4-a	20	フジツガイ科 Ranellidae			
ベニシロダカ	Trochus (Trochus) conus	I-4-a	21	ミツダボロ	Cymatium (Mon.) nicobaricum	I-2-a	111
ササノハシラ	Trochus (Trochus) niloticus	I-4-a	22	シヤムボロ	Cymatium (Monoplex) aquatile	I-2-a	112
オホキライノダマ	Mastodonta lina	II-1-b	23	シヤムボロ	Cymatium (Monoplex) pilare	I-4-a	113
アマオボネ科 Neticidae				シヤボロ	Cymatium (G.) muricinum	I-2-a	115
インダミアアマオボネ	Netia (Ritena) helicinoides	I-0-a	26	ヒメミツダボロ	Cymatum (Turritello) labiosum	I-4-a	
ヒメインダミアアマオボネ	Netia (Ritena) trisita	I-0-a	27	オオウツガイ	Cymatum (Kamataria) pyrum (Linnaeus, 1758)	I-4-a	116
アウシジママガイ	Netia (Ritena) undata	I-1-a	33	ホネガイ科 Buridae			
キウマガイ	Netia (Ritena) pilicata	I-0-a	28	オホウツガイ	Bursa (S.) bafuis dunkeri	I-3-a	120
リュウキョウウアママガイ	Netia (Ritena) insculpta	I-0-a	29	イワウツガイ	Bursa (S.) bafuis dunkeri	I-3-a	120
アマオボネ	Netia (Thebystyla) albicilla	I-1-b	30	オホニシ	Tutufa rebeta	I-4-a	121
マルアマオボネ	Netia (Thebystyla) squamulata	I-1-b	31	シロクニナルトボロ	Tutufa bafu	I-4-a	122
オホマルアマオボネ	Netia (Thebystyla) chamaeleon	I-1-b	32	オホニナルトボロ	Tutufa bafu	I-4-a	122
ヒツノキチネモジ	Netia (Thebystyla) planospira	II-0-a	34	シロカハシ	Tutufa bafu	I-4-a	123
ニシキアマオボネ	Netia (Amphipræna) polita	I-1-c	35	トウムリガイ科 Cassidae			
カノコガイ	Netitha soeverbianus	II-0-c	38	アメガイ	Casmaria ponderosa	I-4-c	126
ニセヒロクツカノコ	Clithron siquajirensis	II-1-b	39	ヒナシロ	Casmaria erinaceus	I-4-c	127
フナマガイ	Septaria porcellana	IV-5		アツキガイ科 Muricidae			
タニシ科 Vitraperidae				ガシネキボロ	Chicoreus buranensis	I-2-a	128
マダニ	Chitipangopaludina chinensis	IV-6		コシノガイ	Chicoreus ramosus	I-4-a	129
ヤマタニシ科 Cyclophoridae				テマリシ	Thais (Stramonita) savignyi	II-1-a	
オキナヤマタニシ	Cyclophorus turgidus	V-8		コウニシ	Thais (Semicerithium) squamosa	II-1-a	140
オニシノガイ科 Cerithiidae				シラケモガイ	Thais (Stramonita) armigera	I-3-a	131
オニシノガイ	Cerithium (Cerithium) molulosum	I-2-c	41	ツクツクシ	Manicella hippocastanum	I-1-a	132
オニシノガイ	Cerithium (Cerithium) columanum	I-2-a	42	レインシ	Manicella tuberosa	I-3-a	133
メネシノガイ	Cerithium (Cerithium) echinatum	I-4-b	43	レインシ	"Crossia" sp.		
トウダカニモリ	Rhinoclavis sinensis	I-2-c		レイシダマンモネ	Muricodrupa fusca (Kuster, 1862)	I-1-b	139
クワニモリ	Clypeomorus chemnitziana	I-1-b	45	ハナワレシ	Nassa vexillum	I-3-a	138
カサノミシノモリ	Clypeomorus bifasciata	I-1-b	46	ムコサキガイレイシ	Drupa (S.) morum	I-3-a	135
ネイロガイ科 Cerithiidae				ムコサキガイレイシ	Drupa ricinus albolaris	I-3-a	137
フナヘナガイ (付物)	Cerithiidae (Cerithiidae) moerchi	III-0-d	53	アガカレレイシ	Drupa (Ricinella) robustataus	I-3-a	136
カワイ	Cerithiidae (Cer.) djadjariensis	III-1-c		ネイロガイレイシ	Drupa (Drupina) gubulata	I-3-a	141
セシシノガイ	Telescopium telescopium	III-0-c	51	オニコブシ科 Vaisidea			
マドベチノミナ	Terebralia sulcata	III-1-c	52	オニコブシ	Vasum ceramium	I-3-a	143
キハノミナ	Terebralia pascaris	III-1-c		ヨウムツビシノ	Vasum turbinellum	I-2-a	144
ウミコナ科 Batillariidae				フトコロガイ科 Columbellidae			
リュウキョウウミナ	Batillaria flexisiphonata	III-1-c	54	フトコロガイ	Euplia vesiculor	II-2-d	145
イボウミナ	Batillaria zonata	III-1-c		ズンバガイ科 Buccinidae			
ゴマコナ科 Planaxidae				シラベッコウハイ	Japeuthria cingulata	II-1-b	151
ゴマコナ	Planaxis sulcatus	I-0-a	60	オリレヨウガイ科 Nassariidae			
トウガタコナ科 Thiaridae				オシロイ	Nassarius arcularia	II-2-c	147
トウガタコナ	Thiara scabra	IV-5-b	224	ヒメオシロイ	Nassarius sp. cf. nodifer	II-2-c	147
ヌノメカコナ	Melanoidea tuberculata	IV-6	225	オシロイ	Nassarius coronatus	II-1-c	148
スガクワナ	Stenonitarsa uniformis	IV-6	28	イボムシロ	Nitidulites albescens	II-2-c	149
ヨウクワナ	Stenonitarsa plicata	IV-6	227	イボトマキガイ科 Fasciolaridae			
イボヤカワナ	Tarebia granifera	IV-6		シロツクリ	Pleuroplaca trapezium	I-2-b	153
カワニ科 Pleuroceridae				ヒメトマキボロ	Pleuroplaca trapezium patell	I-2-b	154
カワニ	Semiuksopira bensoni	IV-5-b	230	ナギトマキボロ	Pleuroplaca filamentosa	I-2-a	155
スイシヤウガイ科 Strombidae				ツノマタネボロ	Latirus lecheri	I-3-a	157
ムシシヤウ	Strombus (Canarium) mutabilis	I-2-c	62	リュウキョウツノマタ	Latirus polygomus	I-3-a	156
ヤサガタカシヤウ	Strombus (Canarium) microrreum	I-4-c		ヤシノボロ	Leucostoma smaragdula	I-3-a	158
オハツロガイ	Strombus (Canarium) ureum	II-2-c	75	マクラガイ科 Olividae			
フトスジムカシヤウ	Strombus (Canarium) labiatum	II-2-c		サツナバ	Oliva annulata	I-2-c	163
ネギマツガガイ	Strombus (Gibberulus) g. gibbosus	II-1-c	65	マクラガイ	Oliva sp.		
マツガガイ	Strombus (Coronureus) labiatus	I-2-a	66	シロツクリ科 Harpidae			
スイシヤウガイ	Strombus (Laeostrombus) turarellae	II-2-c	69	ヒメシロツクリ	Harpa amoretta	I-2-c	162
イボシロ	Strombus (Frentlog) lentiginosus	I-2-c	67	シロツクリ	Harpa major	I-2-c	
マイノツダガイ	Strombus (Epirotimus) aurifascia Linnaeus, 1758	I-4-c	68	フダガイ科 Mitridae			
ペンシヤウ	Strombus (Euprotomus) bulla	I-4-c	76	チュウセンフデ	Mitra mitra	I-2-c	168
アツシ	Strombus (Tricornis) bherites	I-4-c	70	ヒメチュウセンフデ	Mitra episcopal	I-2-c	170
ゴムウラ	Strombus (Tricornis) levisimul	I-4-c		オホオビツガイ	Mitra ambigua	I-4-c	169
クモガイ	Lambis lambis	I-2-c	72	コガシヤタテ	Nebularia chrysostroma	I-4-c	171
ラクダガイ	Lambis truncata sebæ	I-4-c		シロオビヤタテ	Strigatella ambarella	I-2-b	172
スイダガイ	Harpaga chagra	I-2-a	74	イモフデ	Perygia dactylus	I-1-b	167
ムカシガイ科 Vermetidae				ミノシヤウガイ科 Costellariidae			
フクサチベ	Doridopoma maximum	I-2-c	79	ミノシヤウ	Velulum haledatum	II-2-c	
リュウキョウウヘビガイ	Serpulorbis trimerisvarius	I-2-a	78	オホノミノシヤウ	Velulum plicatum	II-2-c	166
ツカガガイ科 Cypraeidae				イモガイ科 Conidae			
ネイロダカウ	Cypraea (Monetaria) moneta	I-1-a	80	マダライモ	Conus (Virroconus) ebraeus	I-1-a	174
ハシヒラダカウ	Cypraea (Monetaria) annulus	I-1-a	81	サヤガイイモ	Conus (Virroconus) fulgurum	I-1-a	173
ナツモドネ	Cypraea (Erosca) erosca	I-2-b	82	ジュズダサヤガイイモ	Conus (Virroconus) coronatus	I-1-a	

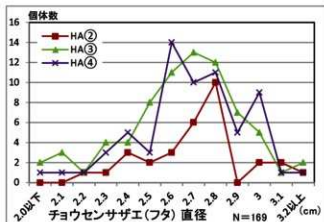
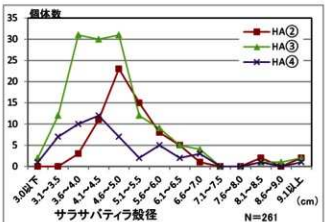
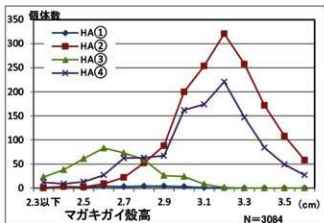
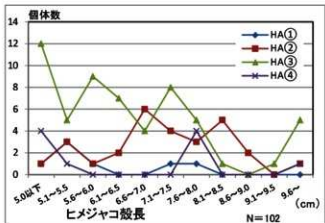
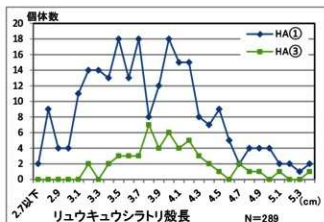
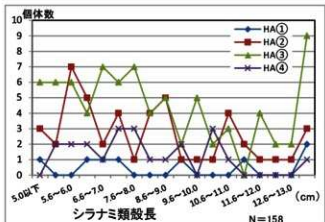
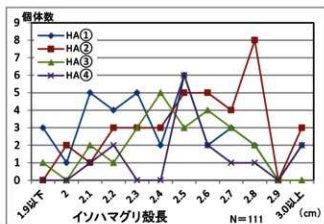
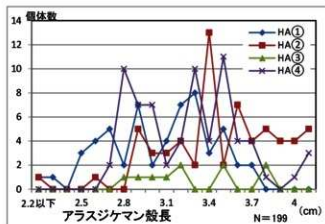
和名	学名	生息場所 種数	固有 種数
ハブワイモ	<i>Conus (Virroconus) spissalis</i>	I-1-a	4
ガクワイモ	<i>Conus (Virroconus) musculus</i>	I-2-a	2
ネムシマキモ	<i>Conus (Virgiconus) flavidus</i>	I-2-a	178
イシシマキモ	<i>Conus (Virgiconus) lividus</i>	I-2-a	180
ヤキモ	<i>Conus (Virgiconus) emaculatus</i>	I-2-c	181
ペニエタダキモ	<i>Conus (Virgiconus) balastratus</i>	I-4-a	4
イボカハバモ	<i>Conus (Virgiconus) distans</i>	I-2-c	2
オトモイモ	<i>Conus (Virgiconus) virgo</i>	I-4-c	2
ヤキボシシロイモ	<i>Conus (Rhiziconus) miles</i>	I-3-a	183
ヤササミン	<i>Conus (Rhiziconus) capitatus</i>	I-2-c	184
カバミナシ	<i>Conus (Rhiziconus) vexillum</i>	I-4-b	185
アラレモ	<i>Conus (Chelyconus) catus</i>	I-3-a	4
ハイロキミナシ	<i>Conus (Rhiziconus) rufus</i>	I-2-a	190
ヤキモ	<i>Conus (Paniconus) magus</i>	I-2-c	191
ササモクキ	<i>Conus (Dauciconus) striatus</i>	I-2-c	192
ヒマワキモ	<i>Conus (Dauciconus) planorbis</i>	I-2-c	2
シロマダライモ	<i>Conus (Hermes) massaliata</i>	I-4-b	177
アジロモ	<i>Conus (Dauciconus) penaeus</i>	II-2-c	193
ハイモ	<i>Conus (Dauciconus) reifer</i>	I-4-b	179
タダヤサミナシ	<i>Conus (Dauciconus) sordidus</i>	I-2-c	194
ツボモ	<i>Conus (Dauciconus) aulicus</i>	I-4-c	197
ニシキミナシ	<i>Conus (Strioconus) striatus</i>	I-2-c	198
アソビモ	<i>Conus (Gastroidium) geographus</i>	I-2-c	199
ナナヨウロコミナシ	<i>Conus (s.s.) muricatus</i>	II-2-c	200
ミカドミナシ	<i>Conus (Rhombus) imperialis</i>	I-2-c	201
アカシミナシ	<i>Conus (Leptoconus) generalis</i>	I-2-c	202
ナカササミナシ	<i>Conus (Leptoconus) longiphysus</i>	I-2-c	187
ゴフモ	<i>Conus (Paniculus) palustris</i>	I-2-c	203
コシモ	<i>Conus (Paniculus) areolatus</i>	I-2-c	204
クロザメドキ	<i>Conus (Lithobus) eburneus</i>	I-2-c	208
アンボンクロザメ	<i>Conus (Lithobus) literatus</i>	I-2-c	209
クロザメドキ	<i>Conus (Lithobus) leopardus</i>	I-2-c	210
ウダマダガイ科 Turridae			
ウダマダガイ目	Turridae gen. et sp.		
タケノコガイ科 Terebridae			
タケノコガイ	<i>Terebra subulata</i>	I-2-c	217
リウケウキウタケ	<i>Oxymys maculatus</i>	I-2-c	218
ナツメガイ科 Bullidae			
ナツメガイ	<i>Bulla vermiosa</i>	I-2-c	220
ウツコガイ科 Atyidae			
ウツコガイ	<i>Aliculastrum cylindricum</i>	II-2-c	219
アフリカマダガイ科 Achatinidae			
アフリカマダガイ	<i>Achatina fulica</i>	V-9	231
ナンバノマイガイ科 Camaenidae			
シュリマイマイ	<i>Saisama (s.s.) m. mercatoria</i> var.	V-8	232
カレンシマイマイ	<i>Saisama (s.s.) m. katsuremensis</i>	V-7	236
ヤバシマイマイ	<i>Saisama (s.s.) m. arata</i>	V-7	237
オキナノクマタマイマイ	<i>Saisama (Luchu) cuconiana</i>	V-8	200
オナジマイマイ科 Bradybaenidae			
ハンダナマイマイ	<i>Bradybaena cirrualis</i>	V-8	238
オキナノウスカママイマイ	<i>Acusta d. despecta</i>	V-8	239
和製属 Viviparidae			
フネガイ科 Arcidae			
フネガイ	<i>Arca avellana</i>	I-2-a	2
オキタカハ	<i>Arca ventricosa</i>	I-2-a	5
エダ	<i>Barbatia (Barbatia) trapezina</i>	I-1-a	1
オキナガサエダ	<i>Barbatia foliata</i>	I-2-a	7
オキナノエダ	<i>Barbatia lacertata</i>	I-4-a	4
ペニエダ	<i>Barbatia (Isa.) amygdalomostum</i>	I-2-a	6
クロミノエダ	<i>Barbatia (Stylacera) cruciata</i>	II-2-b	3
リウケウキウサルボ	<i>Anadara (Anadara) antiquata</i>	II-2-b	9
ハイガイ (イサザ)	<i>Tegillarca granosa f. abessa</i>	III-1-c	8
イガイ科 Mytilidae			
リュウケウヒロ	<i>Modiolus arciculatus</i>	I-1-a	11
ウグイスガイ科 Perididae			
ミドリアサリ	<i>Pinctada panassense</i>	I-1-a	14
アコヤガイ	<i>Pinctada fucata</i>	II-2-b	14
クロコウガイ	<i>Pinctada margaritifera</i>	I-4-a	12
シュモクアオリ科 Isognomonidae			
カシノアオリ科 一種	<i>Isognomon sp. cf. perna</i>	I-1-a	16
シュモクアオリ	<i>Isognomon isognomon</i>	II-2-b	15
ミノガイ科 Limidae			
ミノガイ	<i>Lima vulgaris</i>	I-2-a	18
イタサヤ科 Pectinidae			
リュウケウアサリ	<i>Comptopallium radula</i>	II-2-c	17
ウミギク科 Spondyliidae			
メンガイ類	<i>Spondylus</i> spp.	I-2-a	20
ベッコウガキ科 Pinctonontidae			
シッコウガキ	<i>Hyotissa hyotiss</i>	I-2-c	2
イタダキ科 Ostreidae			
シマ (17?) ガキ	<i>Crossostrea bilineata</i>	III-1-a	25
オハグロガキ	<i>Saccostrea mardox</i>	I-1-a	21
オハグロガキモドキ	<i>Saccostrea circumscuta</i>	II-1-b	22
ノキリガキ	<i>Dendroostrea sandwichensis</i>	II-2-a	23
シロシメガキ	<i>Ostrea fluctigera</i>	II-2-b	24
ツギガイ科 Lucinidae			
ツギガイ	<i>Codakia tigera</i>	I-2-c	27
クチペニエガイ	<i>Codakia punctata</i>	I-2-c	28
ウツツキガイ	<i>Codakia paysonorum</i>	II-2-c	29
ヒツツキガイ	<i>epicodakia bella</i>	I-2-c	30
カブラツキガイ	<i>Anodontia edentata</i>	II-2-c	31
トマヤガイ科 Carditidae			
トマヤガイ	<i>Carditia leana</i>	II-1-a	98
キウワカ科 Chamidae			
キウワカ類	<i>Chama isostoma</i>	I-1-a	34
ケイトウガイ	<i>Chama dunkeri</i>	I-2-a	35
シロザル	<i>Chama brassica</i>	I-4-a	36
キクザル	<i>Chama sp.</i>	II-2-a	4
キクザル類	<i>Chama</i> spp.		37

歩 目 計	HA(地区)																合計	HA(地区)				合計	地区別 合計											
	II	III	IV	計	II	III	IV	計	II	III	IV	計	I	II	III	IV		計	II	III	IV			計										
1	1	2			1	1							1	1	2							3				7								
				1	1																	1				1								
						1	1															2				3								
								1	1													1				1								
16	19	1728	18	11	4	33	61	82	3	146	89	11	257	25	382	9	94	5	108	9	7	10	26	695	4	5	15	9	33	33	3047			
6	1	10	81	7	3	10	10	4	1	15	20	4	57	2	83	11	69	80	1	2		6	9	197		1	1	1	1	353				
			1				3	2		5	4	1	10	1	16		4	1	5					26		10	6	16	16	81				
			9	2		2	2	2	1	7			8											12						23				
21	21	44	4	2		6	2	2	2	2	2	3	5	1	4	20	2	27	1	2		1	4	44	1	2	2	5	5	106				
7	9	11																												19				
	1	9				2	2	4		10	14		1	5	6		1		2	3	25								37					
																														1				
			2							2	2		1	1	1							1	4							7				
7	7	74				7	5	12	7	1	46	1	55	3	11	2	16	1		2	3	86				2	2	2	2	165				
15	15	159		4	1	5	12	27	1	40	34	14	205	4	257	9	67	76	1	4	1	21	27	405	4	7	9	6	26	26	821			
4	4	94	3	2		5	5	14	4	23	13	5	85	2	105	1	21	22	5	1	4	10	165							366				
													3		3							3								3				
																						1								1				
53	2	56	2204	20	19	5	44	58	82	5	145	112	24	377	34	547	1	15	97	6	119	1	3	1	29	34	889	3	7	22	13	45	45	4277
																															1			
							1	1			1	1	2										3								3			
2	2	2																													1			
			1																												3			
1	1	2																													1			
18	20	31																													33			
8	8	18											2	2	1	10	1	12	1		1	2	16								42			
1	1	2				2	1	3								1	1						4								6			
																															1			
			4							1			1	2	2		2						4								9			
			5																												5			
																															1			
			1																												1			
			2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	2	3	3	3	3	3	3	9			
70	2	74	1432	23	8	1	32	106	96	5	207	208	22	617	25	872	1	24	126	8	159	3	8	10	64	85	1355	22	4	1	27	27	3372	
																															1			
			1											1	1								1								55			
542	542	555				4		4					1	1	3	3							8								672			
103	103	103																													103			
																															2			
																															3			
																															2			
			77																												79			
			1																												1			
842	842	1038						1	1														1								1040			
		8																													13			
		13						1	1	1						2							3								18			
																															17			
			1																												17			
																															1			
			5	5	6																										1			
			1																												6			
			3	5	25			1	1	2	1	2	6		9		1	1													37			
			7										2		2		2	2													28			
								2					6		6		1	6	7												15			
36	40	563	15	11	2	28	47	63	4	114	97	10	285	6	398	39	103	3	145	3	7	9	57	76	761					1720				
736	25	794	14485	170	85	12	267	876	856	21	1753	2056	262	7374	128	9820	4	241	925	61	1231	19	212	145	1025	1401	14472	2	48	22	2	74	37224	
6	6	198					11	23	34	23	2	113	1	139		15	1	16	4	1	4	9	198							534				
			4																												6			
																															4			
			1																												1			
59	2	78	1219	24	11	7	42	114	153	3	270	251	14	497	25	787	1	15	95	3	113	15	10	17	42	1254	1	6	9	6	22	22	3279	

第130表-5 平安山原A遺跡から得られた貝類遺体の同定標本数

貝類	地区別	HA③地区														HA④地区															
		イ				ロ				ハ				ニ				ホ				ヘ				ト					
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		
45	シラナミ類	4	54	5	6	60	16	126	1	21	164	28	28	1	34	2	37	298	2	318	1	321	29	29	18	1	19				
46	ナガジャコ																			31	31	3	3								
47	ヒレジャコ		5	1	6	7	27	9	43	7	7	6	6	62																	
48	ヒメジャコ	2	39	2	2	45	9	58	17	84	8	8	7	32	39	176			161	161	25	1	26	2	10	12	1				
49	シッコウガリ	3	26	9	13	51	22	101	3	21	147	27	27	4	26	1	31	256	2	483	485	49	49	2	22	4	28	5			
50	ヒレジャコ?		1		1																										
51	シヤゴウ		14	2	1	17	3	19	1	15	38	8	8	1	3	4	67		82	82	9	9									
52	リュウキュウハカガイ		4	1	1	6		9	6	15				12	12	33	29	29	18	18			7	7							
53	タママキ		1		1		1		1		1	3	4	6					1	1											
54	ユキガイ																														
55	リュウキュウアサリ																														
56	イソハマグリ	1	17	18	16	52	3	6	5	14				21	1	22	88	1	173	174	22	22	9	9	1						
57	ケチハガイ類						1		1								1														
58	ナミノコマスオ		1		1			1	1												1	1									
59	リュウキュウナミノコ		1		1			1	1										1	1											
60	ニッコウガイ																			4	4	2	2								
61	ヒメニッコウガイ													1	1	1	1	1	1	1											
62	ミヅキヒメザラ							1	1								1														
63	アマサギ																														
64	リュウキュウシラトリ	5	48	4	7	64	30	381	2	49	462	15	15	7	147	6	160	701	1	660	1	662	196	196	14	100	3	117	3		
65	イチョウシラトリ類							1		1								1													
66	ヌノメイチョウシラトリ																					1	1								
67	サメザラ						3		3				1	1	4				12	12					1	1					
68	モチヅキザラ						1	3		4			1	1	5				8	8	1	1			1	1					
69	サメザラモドキ																														
70	リュウキュウマスオ	4	22	7	8	41	38	979	2	156	1175	30	30	26	1	27	1273	1	963	964	58	1	59	22	1	23	5				
71	マスオガイ	8	99	22	11	140	50	1068	4	110	1232	15	15	4	169	8	181	1568	2	827	829	678	678	5	97	5	107	3			
72	シシナシシミ	1	10	1	12	1	13	2	16	4	4	2	2	2	34				43	43	1	1	2	2							
73	ヌノメガイ	4	40	21	19	84	40	334	161	535	100	100	4	37	1	42	761	1	1155	2	1158	107	107	1	25	26	10				
74	オオヌノメガイ																														
75	アラヌノメガイ		2	1	3	2	23	7	32	1	1	1	1	1	37	1	239	240	6	6	1	1	2								
76	カノアサリ																														
77	ホソジギナミ	1	29	4	6	40	9	90	34	133	3	3	1	38	39	215	1	244	245	1	93	1	95	4	17	1	22	3			
78	アラスジケマン	1	24	3	5	33	5	67	1	11	84			1	23	24	141	1	335	1	337	110	110	2	12	14	1				
79	ユウカゲハマグリ	2	25	3	6	36	3	34	2	9	48	2	2	3	104	1	108	194	140	140	45	45	10	61	1	72	2				
80	ウスハマグリ類																														
81	ケショウキミナエシ		1		1													1													
82	オノノカガミ		1		1	2		2		2	1	3	4	7				15	15	5	5	2	1	3							
83	ダテオキシジミ																														
84	オキシジミ類1																														
85	リュウキュウアサリ		1		1			1	1									2	15	15	2	2									
86	ヒメアサリ		4	1	5	1	14	2	17	2	2	10	10	34				21	21	4	4	4	4								
87	スダレハマグリ	5	72	6	5	88	1	19	1	3	24	1	1	37	4	41	154	31	31	15	15	8	8	1							
88	トウデュマリハマグリ																		1	1											
89	ハマグリ類似種						1		1				1	1	2				1	1											
90	マルスダレガイ科1																														
91	マルスダレガイ科																														
92	マルスダレガイ科2																														
93	オミナエシ																														
94	レモンハマグリ?																														
95	マルオミナエシ																														
96	フジイロハマグリ?																														
97	オキシジミ類2																		1	1											
98	トマヤガイ						1		1									1													
	一役員合計	49	722	142	128	1041	304	3781	28	738	4851	302	302	41	978	35	1054	7248	18	7787	8	7814	2	1779	5	1786	57	513	20	590	48
	職員類 - 二役員合計	124	1588	383	336	2431	1089	10360	67	3783	15499	1073	1073	67	2087	52	2206	21209	90	30300	40	30160	33	3603	34	3670	99	891	44	1034	142
	区(イ〜カ)別合計		2431					15499			1073			2206			21209		30160		3670				1034						
	地区(HA③-④)別合計							21209																							

子		HA(地区)																		HA(地区)						地区別 合計										
		リ						ヌ						ル						カ																
		日	月	計	日	月	計	日	月	計	日	月	計	日	月	計	日	月	計	日	月	計	日	月	計		合計	日	月	計						
14	14	383	16	15	6	37	37	88	4	129	137	4	447	29	617	19	88	9	116	15	1	14	30	929	8	16	5	29	29	1639						
		34																												35						
			2			2	1	1		2	6	2	15	1	24		3	3							31	3		3	3	96						
9	1	11	210	11	2	3	16	14	14	1	29	7	7	81	17	112	4	24	3	31	1	5	6	12	200	1	3	18	7	29	29	615				
51	56	618	18	3	21	46	37	5	88	36	14	75	6	131	1	11	53	2	67				1	1	308	3	3	6	6	1188	1					
5	5	96	1	3	1	5	10	8	18	22	2	49	3	76	2	13	1	16					3	3	118	2	1	2	1	6	6	287				
28	28	82	5	2	7	2	6	1	9	2	1	29	6	38	3	53	2	58	1				5	6	118	19	30	63	52	164	164	397				
		1	1			1																				1	6	5	19	30	30	38				
1	1	1														2	2								2						2		1			
29	4	34	239	5	4	9	4	8	2	14	15	4	19	38	1	11	60	2	74	2		7	9	144	8	23	43	39	113	113	584					
										1				1		1	1								2							3		3		
														1	1										1	1				1	1	5		5		
5	5	11				1		1	1					1	2	2								4		4	4	4	4	19		19				
2	2	3													1	1								1		2	9	11	11	16		16				
																1	1								1							1		1		
1627	1630	2605	36	20	14	70	65	86	20	171	237	28	316	29	610	54	401	49	504	3	8		27	38	1393	122	279	702	846	1949	1949	6648				
										1				1																		6	6	6	8	
							1																				1	1	1	1	1	3		3		
		13				1		1		1	7	8			3	3									12	1	1	2	2	2	31		31			
3	3	12	1			1	3	3	3	5	8			4	4									16	1	1	2	2	35		35		35			
						1	1			1	1														1	1	3					3		3		
108	113	1159	13	9	3	25	33	186	27	246	64	69	483	11	627	1	50	215	13	279	2		17	19	1196	6	40	70	58	174	174	3802				
145	2	150	1764	55	20	4	79	27	222	20	269	97	82	425	25	629	25	304	16	345	8	4		53	65	1387	20	56	131	158	365	365	5084			
1	1	47	1			1	3	3	6	7	3	16	26			4	1	5	1					1	39	3	1	4	4	4	124		124			
99	2	111	1402	38	18	1	57	114	239	25	378	204	58	940	37	1239	1	67	475	36	579	9	10	11	88	118	2371	8	5	15	3	31	31	4563		
														1	1												1						1		1	
6	6	254	4	1		5	12	23	1	36	24	11	174	6	215	4	68	1	73	1	4	1	14	20	349							640		640		
80	5	88	450	14	3	17	26	47	16	89	123	39	428	19	609	51	353	9	413	9	27	3	139	178	1306	5	30	61	109	205	205	2176				
37	2	40	501	3	14	4	21	41	35	2	78	88	14	139	6	247	1	23	188	15	227	10	2	12	24	597	7	35	99	59	200	200	1439			
189	191	448	14	8	8	30	4	20	10	34	9	3	46	12	70	8	265	36	309	2			4	6	449	22	150	512	616	1300	1300	2391				
										1					1											1	1	1	1	3	3	4		4		
7	1	8	31				3	7	10	4		3	2	9		2	26	3	31	1		3	4	54	6	16	28	30	80	80	172		172			
																											3	9	32	117	161	161		161		
																																	1		1	
							1	4	2	1	7	2		5	1	8	3	16	3	22					38		3	3	8	14	14	71		71		
9	1	10	39	1	1	1	3	1	5	2	8	3	18	1	25	1	39	2	42	1		5	6	84	1	20	23	46	90	90	247		247			
13	14	68	4	3	7	2	9	1	12	8	1	25	3	37	1	17	18							74	9	18	13	40	40	336		336				
										2		1	3													3						4		4		
1	1	2								1	1	1	3	1	1	1	3									6							10		10	
																													1	2	4	7	7	7		7
																													3	3	3	3		3		3
2857	24	2929	13119	363	162	59	584	564	1236	160	1954	1356	407	4536	287	6576	6	396	3389	253	4035	34	113	33	487	667	13816	300	1103	2381	2881	6865	6865	41088		
3733	68	3943	40807	726	377	99	1202	2136	2953	240	3331	4681	861	15708	388	21838	16	926	3769	374	7087	70	458	246	1843	2617	38095	345	1265	2879	2963	7452	7452	107563		
5943	40807		1202			5351						21838			7087								2617		38095			7452		7452		107563		107563		



第189図 優占種のサイズ組成変化

第3節 平安山原A遺跡より出土した人骨について

藤田 祐樹(沖縄県立博物館・美術館)

はじめに

平安山原A遺跡では、ある程度まとまりを持って出土した12ユニットの人骨(1号~12号)のほか、部分骨が各所から発見された。まとまりを持った12ユニットの人骨には、比較的保存がよく形態学的に同一個体と認識できる人骨(例えば5号、11号、12号)もあるが、多くは断片的で個体識別は難しい。本稿では、部位の重複や性別・年齢の相違など、明らかに別個体と認識されるものが含まれる場合には指摘するが、積極的に別個体であることを示唆できない場合には、基本的に同一個体に属すると考えることにする。

個体骨は、破損が著しく、細片化していたため、頭骨と主要な四肢骨は可能な限り接合を試みた。計測可能な状態まで頭骨を復元できたものが3点(5号、7号、12号)、顔面部(3号)のみを復元できたものが1個体ある。椎骨や肋骨にも接合できそうな細片が認められたが、作業時間の都合で実現できなかった。復元した結果、性別や年齢を推定できる場合にはこうした情報と、病変等を記載した。

接合に際しては、竹串や歯ブラシで砂を物理的に除去し、破断面にこびりついた砂は必要に応じてアルコールを少量塗布して洗浄した。破断面の接着には、アセトン可溶性の接着剤Butvar(Polyvinyl Butyral Resin, Eastman Chemical Company, USA)を用いた。馬場(1991)の定義に従って計測を行い、計測項目の番号(Martin No.)を表に記した。埋葬状態は、実測図と残存する骨片の状態に基づいて記載し、12号人骨については詳細な現地確認を行った。

まとまりのある12ユニットの人骨の他に、断片的に出土した部分骨が遺物収蔵コンテナ2箱分程度ある。保存のよい長管骨なども含まれるが、分析時間と紙面の都合により、本稿では一覽表への記載のみにとどめた。いずれも発掘段階で人骨と認識されたものだが、中には人骨であるか判断が難しい小破片も含まれている。これらについては、一覽表で分類群「不明」とした。

特筆すべきものとして、下顎切歯4本の抜歯が確認できた3体(うち1体は左側切歯2本の抜歯があるが右側は破損で確認できない)と、刃物共伴個体埋葬人骨(12号)がある。后者は20代前半と考えられる成人女性で、刃渡り16.4cmの刀子を伴っていたが、この刃物は左腹部に生前に刺されたものと考えられる。以下では、12ユニットの人骨の特徴を記載するが、特に刃物共伴の12号人骨は興味深い事例と考えられるために詳細に記載する。

1号人骨(人骨01)

成人の部分骨である。脳頭蓋の頭頂部付近(前頭骨の一部と左右の頭頂骨の一部)と後頭部付近(後頭骨と側頭骨の一部)、下顎骨の歯列部分、右上腕骨の骨幹部、右鎖骨、足根骨の一部などが保存されている。性別の判定は難しいが、鎖骨はかなり太く、肋鎖靭帯圧痕が発達している。上腕骨の骨幹部は左右には細いが前後径が大きく、三角筋粗面の一部を観察する限り発達しているようである。歯列はほとんど残っていないが、下顎の右の切歯二本は歯槽部が閉鎖しており、抜歯の可能性がある。左の切歯部は破損しており確認できない。右の臼歯列の歯槽部は多孔質で退縮が認められ、歯周病による歯の脱落があったらしく第二小臼歯から第三大臼歯まで歯槽が変形しているか、閉じている。左の大臼歯から第一大臼歯は残されており、咬耗は中程度である。下顎切歯4本の抜歯は、琉球列島の先史人骨では女性に多く認められることから、本個体も女性である可能性が高い。

2号人骨(人骨02)

成人の部分骨で後頭骨、下顎骨の左側、軸椎、左膝蓋骨、左大腿骨の骨幹部(1/2程度)、右腓骨骨幹部(1/2程度)が現存している。下顎第三大臼歯が完全に萌出し、かつ、ほぼ未咬耗であることから若い成人と推測される。性別の判定は困難だが、下顎体は華奢で女性的な印象を受ける。注目すべき点として、下顎骨の切歯部分が左右とも歯槽が完全に閉鎖している点である。残存する左小臼歯2本が健康であることを考えると、齶蝕などによる脱落とは考えにくく、生前に抜歯された可能性が高い。右側の顎骨は破損により確認できないが、おそらく下顎切歯4本の抜歯が行われたと推測される。

3号人骨(人骨03)

成人の部分骨で前頭骨から顔面部、右頭頂骨の一部、後頭骨の一部、左側頭骨の一部など頭骨破片のほか、下顎骨、

左肩甲骨の関節部、右上腕骨の骨幹破片、手部の骨少数が残存している。性別の判定は困難であるが、下顎骨の骨体は華奢で女性的な印象をうける。わずかに残る上腕骨も太くはない。左下顎第三大白歯がほぼ未咬耗で萌出しており、右上顎第二大白歯の咬耗もわずかであることから、若い成人と推定される。下顎骨の切歯4本が脱落して歯槽が閉鎖しており、抜歯と考えられる。残存する下顎小臼歯にはわずかに歯石の付着が認められるが、齶触は確認できない。

4号人骨（人骨04）

成人の部分骨で、左下顎骨の一部、右鎖骨、右上腕骨、右桡骨、右尺骨、手部の骨数点、右膝蓋骨、左脛骨の骨幹、左腓骨の骨幹、左右の足部の骨一部が残存している。右腕の骨が頑丈で関節も大きいことから男性と考えられ、四肢骨は成人サイズながら桡骨の遠位骨端が未癒合であることから20歳前後と推測される。左上顎の中切歯も咬耗がわずかである。

5号人骨（人骨05）

成人の頭骨、下顎骨、左右の肩甲骨、左上腕と尺骨、右腕尺骨の一部（1/3程度）細片化した寛骨と仙骨の一部、足部の骨が少数ある。大坐骨切痕の一部が残存しており、男性と判定される。四肢骨も骨幹が太くしっかりしており、関節も大きく男性的である。年齢は恥骨結合部が右側のみ残存しており、20代後半から30代後半と推測される。歯も右第三大白歯のみ未萌出で、他の歯はすべて萌出しており、こうした年齢観と矛盾しない。咬耗は、Lovejoy (1985)の基準で上顎がE~F、下顎がG-Hである。上顎切歯と犬歯は死後消失で歯槽開放しているが、上顎右中切歯のみ歯根が残存し、かつ軽度の咬耗が認められることから、この歯は生前に折れ、歯根が歯肉から露出していたと考えられる。下顎の歯は全て残存している。臼歯列には上下顎ともエナメル質減形成が認められ、下顎の切歯と犬歯には歯石が付着している。齶触は認められない。

6号人骨（人骨06）

複数体の部分骨が混入しているが、全てが断片的であり、個体識別をすることは困難である。部位の識別できる骨としては、右の桡骨の一部が2個体分、腓骨、中足骨などがある。桡骨はいずれもかなりしっかりとっていて筋付着部も明瞭で男性的な印象をうける。断片的であるが、部位の重複があり、別個体が混入していることは疑いない。さらに腓骨の骨幹部（3cm程度）は華奢で、上述の桡骨と同一個体とは考えにくい。中足骨については形態的に個体を議論できない。

7号人骨（人骨07）

成人の頭蓋骨、右尺骨と手の一部、右の脛骨が保存されている。頭蓋骨は前頭骨の眉間部が破損消失している以外は、ほとんど残っている。短頭、低顔傾向があり、琉球列島の先史時代人に一般的な特徴が見受けられる。

8号人骨（人骨08）

成人頭骨の後頭部と、前頭骨を除く顔面部が残存している。全体的に華奢で、乳様突起も小さいことから女性的な印象をうけるが、性別判定は難しい。歯は左右とも犬歯、第一小臼歯、第一・二大白歯が残存しており、全ての歯にエナメル質減形成が認められる。失われた歯は全て歯槽が開放しており、右の第三大白歯も歯槽開放していて萌出していたことがわかる。左側は破損により確認できない。

9号人骨（人骨09）

成人の頭骨（後頭部）と、細片化した体肢骨、体幹骨がある。後頭骨は縫合線が内板・外板とも開放していて比較的若い成人と考えられるが、断片的であり、詳しい情報はわからない。体幹・体肢骨も同様である。同一個体に属するかどうかは、形態的には否定も肯定もできないが、出土状況の実測図では肋骨が解剖学的位置を保っているように並んでおり、頭骨との位置関係もおおむね解剖学的位置に近いと捉えられる。右肩甲骨の位置はやや乱れているが、やはり同一個体の一部が少し動いたと考えることができ、したがって出土状況からは個体骨とみなすことも可能である。

明らかな別個体として、乳児の上腕骨（全長67.7mm）が1点混入していた。

10号人骨(人骨10)

幼児の個体骨で、細片化した頭骨と遊離歯、左鎖骨、左腕骨、大腿骨片、肋骨片、尺骨片、椎骨片など各部の骨があり、部位の重複もなくサイズも似通っていることから同一個体と推定される。全体に破損が著しいが、体幹骨や上肢骨の破片が比較的多く、下肢骨片は少ない。出土状況の実測図を見ると、頭に隣接して肋骨が並び、さらに前腕の骨と思われる二本の長管骨が認められる。頭位を南東にして、仰臥位にあるように見える。

遊離歯は、上顎の左乳中切歯、左犬歯、左右第二乳臼歯、左第一臼歯(永久歯)の形成途中の歯冠、下顎の左右の乳臼歯と左右の第一大臼歯(永久歯)の形成途中の歯冠がある。第二臼歯は上下顎ともほぼ未咬耗であり、また、第一大臼歯の歯冠がかなり形成されていることから、Ubelaker (1978)の基準で2歳8ヶ月と判定される。

11号人骨(人骨11)

伏臥屈葬でほぼ全身の骨が保存されており、疑いようのない個体埋葬である。左右の上顎骨から左頬骨、下顎骨の大部分、そして体幹のかなりの部分が保存されているが、骨端の破損により全長を計測できる長幹骨はない。四肢骨はいずれも華奢で関節部が小ぶりであることから女性と考えられる。左の第三大臼歯が上下とも萌出しており、成人であるが、咬耗はあまり進んでいない。右の第二、第三大臼歯から後ろは破損消失しているが、その他の歯はすべて保存されている。全体的に歯石がわずかに付着し、左右とも上下切歯と犬歯にエナメル質減形成が認められる。齶蝕はないが、左上第二切歯はソケットが拡大しており、歯周病を患っていたと推測される。

12号人骨(人骨12)

成人女性の個体埋葬である。上下の第三大臼歯が萌出しているが咬耗がほとんど認められず、腸骨翼や大腿骨頭の骨端線がわずかに残ることから、20代前半と推測される。身長は大腿骨長をピアソンの式にあてはめて、153.6cmと推定された。骨体は太くないが、粗線や上胸筋付着部が発達し、前腕・下腿部の骨間縁が発達する。右下顎骨頭に軽度の顎関節症が認められ、左右下顎第2・3大臼歯の歯冠部、右下顎第2大臼歯、左第2大臼歯頰側に、それぞれC1段階の齶蝕が認められる。さらに左右下顎犬歯に3本のエナメル質減形成があり、Massler et al (1941)の基準で3.5~4歳、4.5~5歳、5.5~6歳に成長阻害となるような状況だったようである。

楕円形の土坑墓に埋葬されているが、人骨の解剖学的位置関係は部分的であり、白骨化の過程で遺体が埋葬(あるいは再葬)されたことは疑いない。脊椎と肋骨、下肢の膝関節、足部などはそれぞれ関節していたが、仙骨と寛骨が大きく異なる位置から出土したり、頭骨と頸骨もまったく異なる位置関係にあるなど、人骨は全体に大きく動いており、埋葬中にこのような移動が生じるとは考えられない。右尺骨や左足部が全て欠損していることも、埋葬ないし再葬の過程で取りこぼされたと考えれば説明できる。

共伴の刀子は、刃渡り16.4cmであり、刃部を上にして、第一腰椎の左横突起部分を破砕して、腹側から背側に貫通していた。椎骨の保存はよいが、第一腰椎の左横突起は半砕されており、ここに刀子が位置している。単なる副葬品が埋葬の過程でこのような位置関係になるとは考えにくく、遺体に刺さっていたものと推測するのが妥当である。脊椎は関節した状態であったことから、白骨化の過程で椎骨周辺に軟部組織が残っている状態で埋葬されたが、問題の刀子はこうした軟部組織と骨にしっかりと食い込んでいたために位置関係が動かなかったと考えれば説明できる。

刀子の位置は生体では左腹部で肋骨の直下であり、刃部を上にして、腹から背に向かって刺さっていたことになる。ちょうど肝臓をつらぬく位置であり、この傷が死因となったとしても不思議ではない。

まとめ

断片的な人骨が多く、形態学的に議論できることは限られている。しかしながら、下顎骨が保存される1~3号は、いずれも下顎切歯4本の抜歯が行われている。琉球列島ではこれまでグスク時代以後の抜歯例は知られていないことを考えると、この3体は先史時代の集団に属する可能性が高い。また、特に、下顎切歯4本の抜歯は、沖縄貝塚時代後期の女性個体で多く知られているが(片桐ほか, 2007; 小橋川ほか, 2009; 徳瀬ほか, 2009)、縄文時代晩期の仲宗根貝塚でも1例のみ報告されている(藤田 & 比嘉, 2012)。頭骨を復元できた5号と7号は、いずれも短頭、低顔傾向があり、こうした特徴も琉球列島の先史時代人によく見られる特徴である。

これに対し、刃物を共伴する女性は、鉄器を伴うことから中世以後であることは間違いのないだろうが、形態学的にも中世以後とみなして矛盾しない特徴が認められる。すなわち、長頭、歯槽性突頭であり、これらの形態的特徴は琉球列島ではグスク時代以後の集団に一般的である。

したがって、本遺跡は、先史時代とグスク時代以後の両方において埋葬地としても利用されていたようである。埋葬当時の状況をとどめる人骨は少ないが、部分的に解剖学的位置関係を保った出土状況は、埋葬人骨が後世の攪乱によって乱されたことを推察させる。周辺から出土した多数の断片的な人骨は、こうした攪乱プロセスによって散乱していったものかもしれない。そうだとすれば、この遺跡には今回報告した12ユニットより本来はずっと多くの埋葬人骨があったことになる。

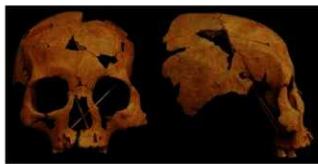
埋葬状況が確認された人骨の中で、特筆すべきは刃物共伴人骨(12号)である。先述のとおり刀子で左腹部を前方から刺されており、この刺傷が死因となった可能性は高い。刀子がある以上、こうした用途に使用されることには不思議はないかも知れないが、20代の女性が刺殺された理由や、当時としては貴重品であろう刀子がなぜ使用後に持ち去られず現場に残されたのか、そして、白骨化の途中で埋葬された理由は何かなど、数多くの疑問が残る。発掘された情報からこうした謎を解明するには幾多の推論を重ねなければならないため差し控えるが、このうち刀子が抜き去られなかった理由については、例えば骨や靱帯に深く刺さってしまい事後短時間で抜くことが困難であったと考えることもできる。いずれにせよ、集落に程近い場所での、こうした事件が生じた事実は、グスク時代の社会環境を考えるうえで興味深い事例のひとつとなることだろう。

<参考文献>

- 馬場悠男(1991)人類学講座別巻1人体計測法Ⅱ人骨計測法。人類学講座編纂委員会編、雄山閣出版。
- 藤田恒太郎、桐野忠大、山下靖雄。(1995) 骨の解剖学 第22版、金原出版株式会社。
- 藤田祐樹、比嘉清和。(2012) 東京大学総合研究博物館所蔵の仲宗根貝塚出土資料。沖縄市郷土博物館紀要あやみや 21: 31-36。
- 片桐千亜紀、小嶋川剛、島袋里恵子、土肥直美。(2007) 具志川島岩立遺跡出土人骨の再整理。沖縄県立埋蔵文化財センター紀要 沖縄埋文研究 5: 1-24。
- 小嶋川剛、片桐千亜紀、徳嶺里江、本村麻里衣、大城歩、天願瑞実、菅原広史、土肥直美、米田穂。(2009) 沖縄県談谷村大当原貝塚出土人骨について。沖縄県立埋蔵文化財センター紀要 沖縄埋文研究 6: 27-40。
- 徳嶺里江、片桐千亜紀、小嶋川剛、本村麻里衣、大城歩、天願瑞実、菅原広史、土肥直美、米田穂。(2009) 沖縄県座間味村古座間味シル地区砂丘地出土人骨について。沖縄県立埋蔵文化財センター紀要 沖縄埋文研究 6: 41-52。
- Lovejoy C. O. (1985) Dental Wear in the Libben Population: Its Functional Pattern and Role in the Determination of Adult Skeletal Age at Death. *American Journal of Physical Anthropology* 68:47-56.
- Massler M., Schour L., Poncher H. G. (1941) Developmental pattern of the child as reflected in the calcification pattern of the teeth. *Am. J. Dis. Child.* 62: 33-67.
- Ubelaker D. H. (1978) *Human skeletal remains: Excavation, analysis, Interpretation.* Chicago: Aldine.
- William M Bass. (1987) *Human Osteology - A laboratory and field manual - 3rd edition.* Missouri Archaeological Society.



図版 131 11号人骨の出土状況



図版 132 3号人骨の頭骨(左:正面、右:左側面)



図版 133 7号人骨の頭骨（左から正面、左側面、上面）



図版 134 11号人骨の頭骨（左から正面、右側面、上面）



図版 135 12号人骨の頭骨（左から正面、左側面、上面）



図版 136 12号人骨の出土状況

ピットの中でまとまっており、脊椎や膝関節などは関節しているが、仙骨から骨盤が大きくはずれ、頭骨と脊椎も完全に離れるなど、ピット内の自然の移動では考えられない位置関係にある。



図版 138 刃物を伴う成人女性
腹部に横たわる刀子は、腰椎の横突起を破砕して食い込んでいる。



図版 137 刀子と椎骨の位置関係

脊椎の腹側左前方から撮影しており、刀子は写真右側が先端、左下が柄である。手前にある第二腰椎の横突起と比較すると、第一腰椎の横突起が刃物によって破砕されていることがわかる。

第131表 平安山原 A 遺跡出土土人の四肢骨計測値

Unit No.		1号		4号	5号	7号	11号		12号	
		右	右	左	右	右	左	右	左	
上腕骨	1	最大長		293	279				301	299
	4	下端幅		62.16	64.26		(48)	50.1	48.65	(46.57)
	5	中央最大幅	22.98	23.46	22.65		18.06	18.66	19.31	19
	6	中央最小幅	13.63	16.44	19.02		14.56	14.86	13.46	14.32
	7	最小周	58	60.5	66.5		52.3	53	53	52
	7a	中央周	63	64.5	68		54	57	56	54
	6/5	体断面示数	0.59	0.70	0.84		0.81	0.80	0.70	0.75
	7/1	長厚示数		0.21	0.24				0.18	0.17
尺骨	1	最大長		(250)	251					240
	2	生理長		(220)	224					212
	3	最小周		37	36		30.5	32		31
	11	体矢状径		13.12	14.55		10.43	11.05		9.6
	12	体横径		15.44	17.21		15.73	16.65		13.92
	3/2	長厚示数		0.17	0.16					0.15
11/12	体断面示数		0.85	0.85		0.66	0.66		0.69	
橈骨	1	最大長		222		(240)			226	226
	2	生理長		216					216	217
	3	最小周		37		46	36	36	32	33
	4	体横径		16.94		17.67	13.85	14.8	14.62	14.78
	5	体矢状径		10.58		13.33	11.04	10.36	10.4	10.3
	5(6)	下端幅		33.92		(34)			29.74	2973
	3/2	長厚示数		0.17					0.15	0.15
5/4	体断面示数		0.62		0.75	0.80	0.70	0.71	0.70	
大腸骨	1	最大長							416	416
	2	全長							416	(414)
	6	体中央矢状径					24.89	24.63	26.89	26.09
	7	体中央横径					24.42	24.15	22.14	23.39
	8	体中央周径					77	75	78	77
	9	体上横径					28.43	26.56	28.57	30.37
	10	体上矢状径					22.97	22.59	21.32	21.45
	18	頭垂直径								38.92
	19	頭矢状径								38.47
	20	頭周径								122
	8/2	長厚示数								0.19
	6/7	長厚示数					1.02	1.02	1.21	1.12
	10/9	体上断面示数					0.81	0.85	0.75	0.71
	(6+7)/2	頭丈示数							24.515	24.74
脛骨	1	最大長							339	342
	8	中央最大径					25.88	25.66	26.77	26.47
	8a	栄養孔位最大径					29.01	29.87	28.79	28.18
	9	中央横径					18.25	18.88	17.32	17.92
	9a	栄養孔位横径					19.49	20.11	17.45	18.15
	10a	骨体周					68.5	68.5	69	71
	10a	栄養孔位周					78	80	75	76
	10b	最小周					63	64	64	64
	9/8	中央断面示数					0.71	0.74	0.65	0.68
	9a/8a	栄養孔位断面示数					0.67	0.67	0.61	0.64
腓骨	1	最大長								
	2	中央最大径					14.27	14.77		
	3	中央最小径					9.48	9.02		
	4	中央周径					40	38.5		
	3/2	中央断面示数					0.66	0.61		

括弧つきの数字は推定値

最大長が計測不能の場合には、形態的特徴から中央位を推測して中央位での計測項目を参考値として計測した

第4節 平安山原 A 遺跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平安山原 A 遺跡は、沖縄本島中部の北谷町に所在し、現在の北谷町役場の北西側に位置する。キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査で発見され、戦前の遺構とグスク時代から弥生相当期の遺物が確認されている。

本報告では、平安山原 A 遺跡から出土した人骨 3 点と土器付着炭化物について、その年代観を得ることを目的とし放射性炭素年代測定を実施する。さらに土壌洗い出し済試料を対象として、炭化種実の同定を実施する。

1. 放射性炭素年代測定

(1) 試料

平安山原 A 遺跡から出土した、土器付着炭化物 1 点と人骨 3 点である。

(2) 分析方法

炭化材・炭化物は、土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット・超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

この試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱して CO₂ を発生させる。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。

骨試料はコラーゲン抽出（Collagen Extraction）を行う。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土壌等の付着物を取り除く。試料をピーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

0.2M の水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったピーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで 1 時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉砕用セルに入れ、粉砕する。リン塩酸除去のため試料を透析膜に入れて 1M の塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

抽出した試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させ、液体窒素とエタノール+ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中間時に ¹³C/¹²C の測定も行うため、この値を用いて δ ¹³C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer) を使い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正は、CALIB7.1.0 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ、2 σ 双方の値を計算する。σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算・再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。

(3) 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表 4 に、暦年較正結果を表 5 に示す。試料の測定年代（補正年代）は、SK100 土器付着炭化物（第 141 図 163）が 240 ± 20BP、人骨 12（巻首図版 9）左腓骨片が 1,580 ± 20BP、人骨 05（巻首図版 11）No 2 左腕骨が 1,070 ± 20BP、人骨 11（巻首図版 10）No 4 肋骨が 830 ± 20BP の値を示す。

測定誤差を σ として計算させた結果、SK100 土器付着炭化物は calAD1,647-1,793、人骨 12 左腓骨片が calAD425-534、人骨 05 No.2 左桡骨が calAD907-1,014、人骨 11 No.4 肋骨が calAD1,191-1,250 である。

第 133 表 平安山原 A 遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料名 試料番号	種類	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	測定年代 BP	Code No.
SK100 土器付着炭化物	炭化物	240 ± 20	-20.51 ± 0.24	170 ± 20	IAAA-143593
人骨 12 左腓骨片	骨	1,580 ± 20	-16.91 ± 0.44	1,450 ± 20	IAAA-150210
人骨 05 No.2 左桡骨	骨	1,070 ± 20	-15.55 ± 0.64	920 ± 20	IAAA-150211
人骨 11 No.4 肋骨	骨	830 ± 20	-16.29 ± 0.64	690 ± 20	IAAA-150212

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基準として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

第 134 表 平安山原 A 遺跡の暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.	
		σ	cal AD	—	cal AD	cal	BP			—
SK100 土器付着 炭化物	239 ± 23	σ	cal AD 1,647	—	cal AD 1,665	cal BP 303	—	285	0.775	IAAA-143593
			cal AD 1,785	—	cal AD 1,793	cal BP 165	—	157	0.225	
		2 σ	cal AD 1,638	—	cal AD 1,675	cal BP 312	—	275	0.660	
			cal AD 1,777	—	cal AD 1,799	cal BP 173	—	151	0.305	
人骨 12 左腓骨片	1,582 ± 24	σ	cal AD 425	—	cal AD 435	cal BP 1,525	—	1,515	0.112	IAAA-150210
			cal AD 449	—	cal AD 471	cal BP 1,501	—	1,479	0.258	
		2 σ	cal AD 486	—	cal AD 534	cal BP 1,464	—	1,416	0.630	
			cal AD 418	—	cal AD 540	cal BP 1,532	—	1,410	1.000	
人骨 05 No.2 左桡骨	1,072 ± 23	σ	cal AD 907	—	cal AD 914	cal BP 1,043	—	1,036	0.084	IAAA-150211
			cal AD 968	—	cal AD 1,014	cal BP 982	—	936	0.916	
		2 σ	cal AD 898	—	cal AD 924	cal BP 1,052	—	1,026	0.186	
			cal AD 944	—	cal AD 1,018	cal BP 1,006	—	932	0.814	
人骨 11 No.4 肋骨	829 ± 24	σ	cal AD 1,191	—	cal AD 1,198	cal BP 759	—	752	0.121	IAAA-150212
		2 σ	cal AD 1,204	—	cal AD 1,250	cal BP 746	—	700	0.879	
			cal AD 1,167	—	cal AD 1,258	cal BP 783	—	692	1.000	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015M Stuiver and PJ Reimer) を使用。

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が判りやすいように、1 桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、2 σ は 95% である。

5) 相対比は、 σ 、2 σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(4) 考察

土器付着炭化物は、HA④K1・L1 グリッドに位置する SK100 から出土した土器に付着した炭化物とされる。補正年代は 240 ± 20BP、暦年較正値は calAD1,647-1,793 で 17 世紀中頃から 18 世紀末を示した。発掘調査所見によると、出土地点は近世期の集落址とされており、今回の結果は調和的と言える。

人骨 3 点についてみると、補正年代は人骨 12 が 1,580 ± 20BP、人骨 05 No.2 が 1,070 ± 20BP、人骨 11 No.4 が 830 ± 20BP で、暦年較正値は calAD425-534、calAD907-1,014、calAD1,191-1,250 を示した。それぞれ、5 世紀から 6 世紀前半、10 世紀から 11 世紀前半、12 世紀末から 13 世紀中頃で年代幅のある結果となった。なお、年代測定結果を細かくみれば、人骨 05 No.2 と人骨 11 No.4 は貝塚時代終末からグスク時代と近い年代であり、人骨 12 は貝塚時代後期中葉と古い年代である。

発掘調査所見によれば、人骨はグスク時代を想定しており、人骨 05 No.2 と人骨 11 No.4 は概ね調和する年代とみることができ。一方、人骨 12 の年代は想定よりも古い結果となった。この試料については、コラーゲンの回収率が 1% 以下と低い値であった。南 (2013) によると、コラーゲンの回収率が 1% 以下の場合には、得られた放射性炭素年代測定の信頼度が低いことが多いとされる記述がある。今回の結果は、これらの影響を受けた可能性が考えられる。

遺跡発掘調査は、考古学的手法で行われているのであるから、発掘調査での仮説や根拠の検討があってこそ利用する前提ができるのであり、年代測定の先行に関しては十分な考慮が必要であるという様態を示すものとなった。今回の結果から出土状況や共存遺物を検討し、引き続き調査をすることが望まれる。

2. 種実同定

(1) 試料

試料は、平安山原 A 遺跡の G19 石組遺構 10(HA ②台 3069、3072) と、C1 祝女殿内(HA ②台 3167) より出土した種実遺体 3 試料で、全て乾燥した状態で袋に入っている。

発掘調査所見によれば、試料は、戦前の沖縄産無釉陶器(図版 6)の裏から獣骨とともに出土し、大豆(ダイズ)の可能性が指摘されている。種実同定は、2 試料(HA ②台 3069,3072)は全てを対象に実施する。残りの 1 試料(HA ②台 3167)は多量のため、保存状態が良好な 100 個を目処とした抽出同定と、全てを検鏡対象とし、他の種類の種実の確認を目的とした精査を実施する。

(2) 分析方法

試料を粒径 4mm・2mm・1mm・0.5mm の篩に通し、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体をピンセットで抽出する。種実遺体の同定は、現生標本および中村・戸部訳(2009)、塚腰(2013)等を参考に実施し、個数と重量を計測し、結果を一覧表で示す。また、一部の種実を対象として、長さ、幅、厚さ等をデジタルノグスで計測し、結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体等を分類群別に容器に入れて保管する。

(3) 結果

同定結果を表 6 に示す。全 3 試料を通じて、被子植物 3 分類群(木本のヤマモモ、草本のトウゴマ・ソラマメ)213 個の種実遺体が同定され、栽培種のトウゴマの種子が 109 個(2.8g)と、ソラマメの炭化種子が 102 個(20.1g)+78.8g 確認された。以下に、試料別出土状況を述べる。

・G19 石組遺構 10(HA ②台 3069)

栽培種のトウゴマの種皮の破片が 2 個(0.002g) 同定され、最大 9.2mm を測る。分析残渣は、炭化材や植物片・骨片・砂泥等が確認された。

・G19 石組遺構 10(HA ②台 3072)

常緑広葉樹のヤマモモの核が 2 個(0.1g)と、栽培種のトウゴマの種子が 16 個(1.4g)、種皮の破片が 91 個(1.4g)の、計 109 個(2.9g)が同定され、トウゴマの種子 16 個を計測対象としている。分析残渣は、植物片や砂泥等が確認された。

・C1 祝女殿内(HA ②台 3167)

炭化した栽培種のソラマメの果実・種子が 5 個(1.1g)、種子が 95 個(18.9g)、半分が 2 個(0.1g)の、計 102 個(20.1g)が同定され、全てを計測対象としている。分析残渣は、ソラマメの炭化種子主体が 78.8g、その他(炭化材や岩片、砂泥主体)が 17.3g を量り、ソラマメの微細片を含む。

・種実遺体の記載

種実遺体の保存状態は、ヤマモモとトウゴマは比較的良好で、ソラマメは全て炭化している。また、ソラマメの表面には果皮が残る種子も確認された。各分類群の写真を図版 2 に、主な種実遺体の計測値を表 7 に示して同定根拠とし、以下に形態的特徴等を述べる。

・ヤマモモ(*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.) ヤマモモ科ヤマモモ属

核(内果皮)は灰褐色、長さ 7.9mm、幅 5.9mm、厚さ 4.0mm の歪でやや扁平な広楕円体。内果皮は硬く、表面には微細な網目模様があり粗面(図版 2-1)。

・トウゴマ(*Ricinus communis* L.) トウダイグサ科トウゴマ属

種子は暗灰褐色、主に倒卵状長楕円体を呈す。背面は丸みがあり、基部に Y 字状の稜状突起がある(図版 2-2c3c で顕著)。腹面は平らで正中線がやや窪み、背線(珠柄と珠皮が合着してできたもの)がある(図版 2-3b で顕著)。破片は Y 字状の稜に沿って割れた個体が多く、内部は中空で内乳や子葉を欠損する。種皮は薄く(種皮厚 0.4mm)硬く、表面は粗面、断面は柵状組織が内側に湾曲する(図版 2-4)。

長さ、幅、厚さが完全な出土種子 15 個の計測値は、長さは、最小 9.3~最大 12.7(平均 11.4 ± 標準偏差 1.1)mm、幅は 6.3~9.2(平均 7.9 ± 0.9)mm、厚さは 4.3~6.9(平均 5.9 ± 0.8)mm であった(表 7)。

・ソラマメ(*Vicia fava* L.) マメ科ソラマメ属

果実(莢)・種子は炭化しており黒色、種子はやや扁平な直方体状長楕円体を呈す。本分析では、臍が残存する完形 100 個と、子葉の合わせ目に沿って割れ、幼芽等が残存する半分 2 個を同定計測対象としている。

長さ・幅・厚さが完全な炭化種子 100 個(19.7g)の計測値は、長さは、最小 8.4~最大 13.3(平均 10.7 ± 標準偏差 1.0)mm、幅は 5.6~9.4(平均 7.8 ± 0.8)mm、厚さは 5.0~8.4(平均 6.8 ± 0.7)mm、重量は 0.09~0.35(平均 0.20 ± 0.05)g であった。また、計測 100 個のうち、臍の保存状態が良好な種子 18 個の計測値は、臍長は 4.4~6.6(平均 5.5 ± 0.6)mm、臍幅は 1.3~2.3(平均 1.6 ± 0.3)mm であった(表 7)。

種子は、側面中央や腹面がやや窪み（図版 2-5a,b）、一端（臍側）が厚くなる個体が多い（図版 2-5c,d で顕著）。臍は一端にあり、細長い長楕円形を呈し、「露出タイプ」（小畑,2008;2011）に該当する。臍の一端には維管束が種子に入る部分がある（図版 2-5e 下側）。臍の反対側にも外側に細長く小さな穴（珠孔）がある（図版 2-5e 上側）。

種皮は薄く、表面はやや平滑で、内部の子葉は粗面である。子葉の合わせ目に沿って半分に分かれた内部は粗面で、腹面の臍付近に短い幼根や胚軸があり、先端から幼芽が子葉内部に向かって短く延びる（図版 2-7,8）。

出土種子は、臍の位置や大きさ、幼芽等の位置等がダイズやアズキなどの他の豆類とは明らかに区別され、ソラマメに同定される。

また、一部の種子の表面には果実の破片が付着し、繊維状の部分が確認された（図版 2-6）。果実は、完形ならば、大粒種で 10cm 内外、幅 3cm、小粒種で長さ 4～5cm、幅 1cm 程度のやや扁平な紡錘体を呈し、長軸方向に 1 本の縫合線がある。果皮は数層から成り、外部は繊維状で内部には海绵状組織があり、1 果実内に通常 2～4 個つく種子を保護している。

第 135 表 平安山原 A 遺跡の種実同定結果

試料名				分類群	部位・状態		個数	重量 (g)	備考
HA ②台 3069	G19	石組遺構 10	H22.01.14	トウゴマ	種皮	破片	2	0.002	最大 9.2mm
				ヤマモモ	核		2	0.1	
HA ②台 3072	G19	石組遺構 10	H22.01.14	トウゴマ	種子	完形	16	1.4	
					種皮	破片	91	1.4	
HA ②台 3167	C1	祝女殿内	H22.02.11	ソラマメ	炭化果実・種子	完形	5	1.1	計測 No.92-96
						完形	95	18.9	計測 No.1-91,97-100
					炭化種子	半分	2	0.1	計測 No.1-2
					分析残渣 (ソラマメ主体)		—	78.8	
					分析残渣 (炭化材・岩片・砂泥)		—	17.3	ソラマメ微細片を含む

注)HA ②台 3167 は多量のため、状態良好な 100 個を目処とした同定と、他の種実の確認を目的とした精査を実施している。

(4) 考察

平安山原 A 遺跡の G19 石組遺構 10 より出土した種実遺体は、栽培種のトウゴマの種子と常緑広葉樹のヤマモモの核に同定され、C1 祝女殿内より多量出土した種実遺体は、栽培種のソラマメの炭化した種子に同定された。

発掘調査所見によれば、試料は戦前の沖縄産無釉陶器の裏から獣骨とともに出土し、大豆（ダイズ）の可能性が指摘されていたが、分析の結果、ダイズとは区別され、ソラマメに同定された。

C1 祝女殿内より多量出土したソラマメは、種子が食用される植物質食料で、星川 (1980) や堀田編 (1989) によれば、大粒種がアフリカ北部原産、小粒種が中央アジア原産で、「聖武天皇の天平 8(736)年に、中国を経て渡来したインド僧が伝えたものを、僧行基が武庫（現、兵庫県）で試作したのが最初とされ、これが現在の品種、於多福の始まりと伝えられる」と記されている。

ソラマメの出土炭化種子群は、遺跡周辺で栽培されていたのか、近辺より持ち込まれたのかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆され、食用されることなく火を受けたとみなされる。また、一部の表面に果皮片が付着した種子が確認されたことから、果実（莢）の状態で火を受けた可能性がある。

管見の限り、ソラマメの遺跡出土例は殆ど確認されていない。今回の多量出土は、沖縄におけるソラマメ（方言名でトウマミー）の系譜や戦前のソラマメ栽培・利用を考える上で貴重な考古資料である。

一方、G19 石組遺構 10 より出土したトウゴマは、種子が油料（ヒマシ油）や薬用に利用されるほかに、毒性タンパク質リシン、有毒アルカロイドであるリシニンを含むが、加熱によって分解する。出土種子は、遺跡周辺で栽培されていたのか、近辺より持ち込まれたのかは不明であるが、当時利用された油料植物と示唆される。

堀田編 (1989) によれば、トウゴマは熱帯東アフリカ原産で、「古代エジプトで 6000 年前から利用され、日本には 9 世紀ごろに中国から渡来した」と記されている。一方、柴田 (1958) によれば、「支那では新修本草 (659) に初めて記載され、日本では倭名抄 (923-930) にカラカシワの名の記録があり、その時代から栽培されたらしく、種子を薬用とし、印肉用とし、時計の発明と共にこれに用いられた」と記されており、現段階では確実な渡来時期は不明である。管見の限り、トウゴマの遺跡出土例は極めて少なく、大阪市難波宮下層期とされる 6 世紀後葉の R331 や 7 世紀前半の R360 から確認される程度である（パリーノ・サーヴェイ株式会社）。読谷村史の戦時記録（読谷村史編集委員会,2002）によれば、「戦時体制下の生活飛行機の油の基になる「チャンダカシー」（植物名ヒマ）の種子が配られ植え付けた」と、トウゴマの栽培が記録されている。

トウゴマとともに確認されたヤマモモは、高木になる常緑広葉樹で、現在の本地域にも分布する。また、ヤマモモは、果実が食用される有用植物で、現在でもイシムムやミジウムムの方言名で親しまれている。当時の遺跡周辺の照葉樹林内から採取され、食用のために利用された可能性は充分考えられる。

<引用文献>

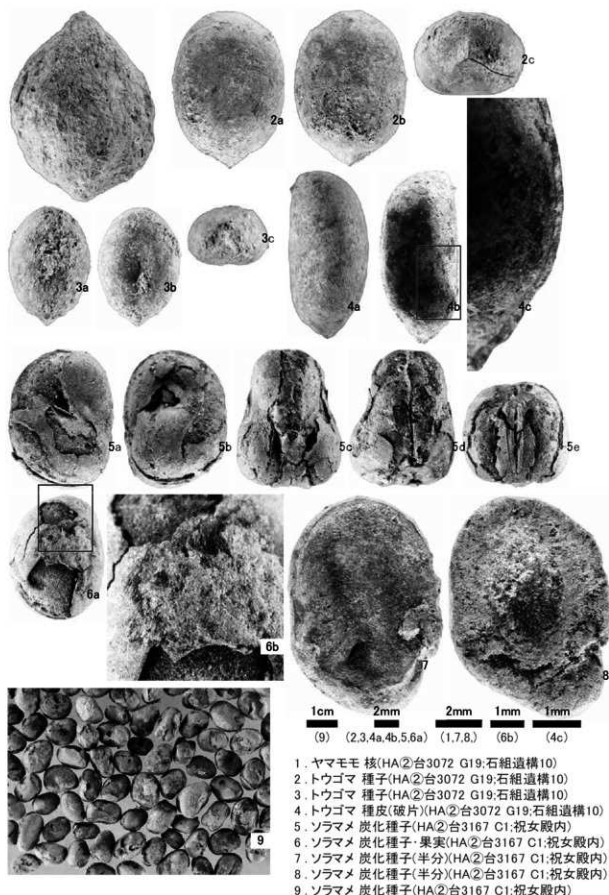
- 伊達 元成・青野 友哉・大島 直行・松田 宏介,2009,陸産・海産の食料資源摂取率を人骨の炭素 14 年代から求める試み,総研大文化科学研究,第 5 号,73-79.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 堀田 満(代表)編,1989,世界有用植物事典,平凡社,1499p.
- 星川清規,1980,新編食用作物,株式会社養賢堂,697p.
- 橋本 真紀夫,2015,埋蔵文化財と自然科学,考古学ジャーナル 676,ニューサイエンス社,25-28
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 南 雅代,2013,骨試料の年代測定,フィッション・トラック ニュースレター 第 26 号,76p.
- 宮城 静雄,2002,渡具知,談谷村史編集委員会編,談谷村史五巻資料編 4「戦時記録」上巻,204-211.
- 中村信一・戸部 博(訳),2009,植物形態の事典(新装版),ヴェルナー・ラウ(著),朝倉書店,340p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版),東北大学出版会,678p.
- 小畑弘己,2008,マメ科種子同定法,「極東先史古代の雑穀 3」,日本学術振興会平成 16～19 年度科学研究費補助金(基盤 B-2)(課題番号 16320110)「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書,小畑弘己編,熊本大学埋蔵文化財調査室,225-252.
- 小畑弘己,2011,東北アジア古民族植物学と縄文農耕,同成社,309p.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,2010,難波宮下層の谷出土木材樹種および種実遺体の同定,財団法人大阪市文化財協会編,難波宮址の研究 第 十六,82-107.
- 柴田桂太編,1958,資源植物事典(増補改訂版),株式会社北隆館,904p.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- 塚腰 実,2013,ソラマメのへそと珠孔,大阪市立自然史博物館編,Nature Study,59 巻 10 号,大阪市立自然史博物館友会の会,132-133.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第136表 平安山原 A 遺跡の主な種実遺体の計測値

図記名	分類 部位	No.	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	胴長 (mm)	胴幅 (mm)	備考			
HA台3072	石 組 10	ヤマモモ 核	—	0.07	7.9	5.9	4.0	—	—	図版2-1		
			1	0.08	12.5	8.9	6.7	—	—	—	図版2-2	
			2	0.03	9.3	6.3	4.3	—	—	—	図版2-3	
			3	0.08	12.0	8.3	6.7	—	—	—		
			4	0.06	12.1	8.1	5.9	—	—	—		
			5	0.09	12.7	8.0	6.7	—	—	—		
			6	0.08	11.9	8.3	6.1	—	—	—		
			7	0.16	10.8	7.1	5.3	—	—	—		
			8	0.06	11.3	7.9	5.8	—	—	—		
			9	0.08	12.3	8.5	6.9	—	—	—		
			10	0.08	12.0	8.2	6.2	—	—	—		
			11	0.04	10.4	6.7	4.9	—	—	—		
			12	0.13	9.9	6.7	4.9	—	—	—		
			13	0.05	10.1	6.5	4.6	—	—	—		
			14	0.10	12.7	9.2	6.6	—	—	—		
			15	0.20 *	11.7	8.2	6.1	—	—	—	倉庫で 砂光処理	
16	0.07 +	12.6	9.2 +	6.4 +	—	—	—	一部欠損				
総本数			—	15	15	15	—	—				
最小			—	9.3	6.3	4.3	—	—				
最大			—	12.7	9.2	6.9	—	—				
平均			—	11.4	7.9	5.9	—	—				
標準 偏差			—	1.1	0.9	0.8	—	—				
HA台3072	石 組 10	トウゴマ 種子	1	0.04 +	9.7	7.1	3.1 +	—	—	—	図版2-8	
			2	0.09 +	9.3	6.7	3.2 +	—	—	—	図版2-7	
			1	0.17	11.1	8.5	8.4	5.8	1.3	—	—	図版2-5
			2	0.24	11.6	8.5	7.7	6.1	1.4	—	—	
			3	0.20	11.4	8.3	7.6	5.8	1.6	—	—	
			4	0.17	12.1	8.0	7.6	6.6	1.4	—	—	
			5	0.33	11.3	9.2	7.6	5.7	1.8	—	—	
			6	0.15	11.3	7.9	8.1	5.1	1.6	—	—	
			7	0.25	11.7	8.6	7.4	4.4	1.4	—	—	
			8	0.22	10.4	7.7	5.9	5.4	1.5	—	—	
			9	0.17	10.0	7.3	6.3	5.2	1.7	—	—	
			10	0.18	11.2	7.6	7.1	5.7	1.7	—	—	
			11	0.15	10.3	7.4	7.4	—	—	—	—	
			12	0.21	11.2	8.5	7.1	—	—	—	—	
			13	0.23	11.7	8.3	6.3	—	—	—	—	
			14	0.21	9.6	7.3	7.2	—	—	—	—	
15	0.16	12.2	8.1	7.4	—	—	—	—				
16	0.12	9.1	6.0	5.6	—	—	—	—				
17	0.16	10.6	7.6	7.4	—	—	—	—				
18	0.26	11.5	8.3	7.5	—	—	—	—				
19	0.16	10.7	8.1	7.4	—	—	—	—				
20	0.23	10.8	8.6	7.2	—	—	—	—				
21	0.09	9.8	7.4	6.0	—	—	—	—				
22	0.22	11.1	7.5	7.0	—	—	—	—				
23	0.15	10.1	7.5	6.9	—	—	—	—				
24	0.19	10.2	8.1	7.4	—	—	—	—				
25	0.20	9.5	7.8	7.5	—	—	—	—				
26	0.24	11.8	7.9	7.5	—	—	—	—				
27	0.16	10.6	7.9	6.7	—	—	—	—				
28	0.33	12.1	7.7	7.3	6.3	2.3	—	—				
29	0.24	12.6	9.3	8.0	—	—	—	—				
30	0.14	10.4	7.6	7.3	—	—	—	—				
31	0.22	12.4	9.1	7.5	—	—	—	—				
32	0.23	10.2	7.4	7.0	—	—	—	—				
33	0.28	12.2	9.2	7.8	—	—	—	—				
34	0.16	10.9	7.3	7.6	—	—	—	—				
35	0.22	12.4	9.2	8.0	—	—	—	—				
36	0.26	11.2	7.5	6.1	—	—	—	—				
37	0.17	9.7	7.3	6.4	—	—	—	—				
38	0.11	10.6	7.2	6.6	—	—	—	—				
39	0.17	10.1	8.0	6.1	—	—	—	—				
40	0.26	11.3	7.0	6.7	—	—	—	—				
41	0.18	10.7	8.5	7.0	—	—	—	—				
42	0.23	12.3	9.0	6.9	—	—	—	—				

図記名	分類 部位	No.	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	胴長 (mm)	胴幅 (mm)	備考		
HA台3167	石 組 10	ソラ マメ 種子	43	0.26	11.2	8.3	7.0	—	—		
			44	0.23	10.7	8.9	7.3	—	—		
			45	0.15	11.2	8.4	7.4	—	—		
			46	0.14	9.6	7.2	6.9	—	—		
			47	0.10	8.9	6.1	5.6	—	—		
			48	0.35	11.4	7.2	7.3	—	—		
			49	0.20	9.8	7.7	6.3	—	—		
			50	0.16	9.1	6.4	6.3	—	—		
			51	0.23	13.3	8.3	6.2	—	—		
			52	0.20	10.4	7.3	6.0	5.2	1.4	—	
			53	0.28	11.7	8.7	7.0	—	—		
			54	0.25	10.8	8.1	6.4	—	—		
			55	0.16	10.2	7.4	6.3	—	—		
			56	0.30	11.6	8.6	7.2	—	—		
			57	0.18	10.7	8.3	7.6	—	—		
			58	0.25	10.7	7.4	7.3	—	—		
			58	0.25	10.7	7.4	7.3	—	—		
			59	0.14	9.0	6.8	5.4	—	—		
			60	0.17	9.7	7.1	6.2	—	—		
			61	0.21	10.4	8.1	7.1	—	—		
			62	0.15	11.2	8.8	7.0	—	—		
			63	0.24	11.8	9.0	7.4	—	—		
			64	0.23	11.8	9.3	7.8	—	—		
			65	0.18	10.2	7.9	7.7	—	—		
			66	0.13	10.6	8.0	7.2	—	—		
			67	0.19	9.8	7.2	7.0	—	—		
			68	0.19	10.6	8.5	7.0	—	—		
			69	0.13	9.4	7.0	6.7	—	—		
			70	0.14	9.3	7.2	6.6	—	—		
			71	0.09	9.5	7.2	6.9	—	—		
			72	0.25	10.8	7.3	6.4	5.0	1.6	—	
			73	0.25	10.4	8.4	6.4	—	—		
			74	0.17	10.3	7.4	6.4	—	—		
			75	0.18	10.0	7.3	6.6	—	—		
			76	0.12	10.4	7.9	6.9	—	—		
			77	0.10	8.8	7.0	5.8	—	—		
			78	0.12	9.1	6.1	5.5	—	—		
			79	0.17	9.2	6.9	7.2	—	—		
			80	0.12	8.4	5.6	5.0	—	—		
			81	0.31	11.4	8.2	6.3	—	—		
			82	0.20	11.5	7.2	7.1	—	—		
			83	0.23	10.7	7.4	6.1	—	—		
			84	0.23	10.4	7.4	6.8	—	—		
85	0.14	11.8	8.1	7.3	—	—					
86	0.24	10.9	8.2	5.7	5.1	1.5	—				
87	0.20	10.3	7.7	7.1	—	—					
88	0.18	9.6	7.4	6.5	4.6	2.0	—				
89	0.20	10.5	7.2	5.3	—	—					
90	0.14	9.0	5.8	5.7	—	—					
91	0.22	10.6	7.7	6.6	—	—					
92	0.21	11.1	8.3	7.3	6.0	1.3	—	果皮残存			
93	0.20	11.6	7.8	6.9	5.3	1.7	—	果皮残存			
94	0.32	12.0	8.7	7.7	—	—	—	果皮残存			
95	0.22	10.9	7.9	6.3	5.0	1.7	—	果皮残存			
96	0.16	9.4	6.5	5.7	—	—	—	果皮残存			
97	0.16	9.2	7.4	6.0	—	—	—	果皮残存			
98	0.20	10.0	7.6	5.6	—	—	—	果皮残存 図版2-6			
99	0.24	12.1	9.4	7.7	—	—	—				
100	0.16	11.4	8.4	7.6	—	—	—				
総本数			100	100	100	100	18	18			
最小			0.09	8.4	5.6	5.0	4.4	1.3			
最大			0.35	13.3	9.4	8.4	6.6	2.3			
平均			0.20	10.7	7.8	6.8	5.5	1.6			
標準 偏差			0.05	1.0	0.8	0.7	0.6	0.3			

注)計測はデジタルノギスを使用し、欠損は残存部に「+」で示す。



図版139 平安山原 A 遺跡の種実遺体

第5節 平安山原 A 遺跡ビーチロックの年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平安山原 A 遺跡は、沖縄県中頭郡北谷町に所在し、沖縄本島中部の東シナ海に臨む海岸低地に位置する。今回分析対象としたビーチロックは、下層確認トレンチから採取したもので、標高 1 m から 1 m 50 cm の間に位置する。

潮間帯の砂浜に岩石状に固結した堆積物として認められるビーチロックは、日本列島における分布箇所の約 93% が珊瑚礁地域にあることから、珊瑚礁海岸に特有に見られる海岸微地形とされている(田中, 1990)。したがって、ビーチロックの形成年代を調べることによって、過去の海水準を推定するという研究もこれまでに多くなされてきた。ビーチロックは、これまでに確認されている混入した人工遺物の状況などから、数 100 年から数十年以内の極めて短時間に岩石として形成されるものであり、したがって、一般にその構成物や混入物の生成年代をもってビーチロックの形成年代とすることができる(田中, 1990)。

本報告は北谷町沿岸に所在したビーチロックの年代資料を得ることにより、ビーチロックの形成に関する情報の収集が目的である。

1. 試料

試料は、平安山原 A 遺跡から採取したビーチロックに含まれる貝類 6 点である。各試料の詳細は、第 137 表の年代測定結果に示す。

2. 分析方法

分析は AMS 法で実施する。試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット・超音波洗浄などにより物理的に除去する。試料の表面を HCl を用いて約 30% 溶かし、汚染された可能性のある部分を除去する(Edg 処理)。

試料中の炭酸カルシウム(CaCO₃)を分解し、CO₂を発生させる。その後、真空ラインで不純物(水など)を取り除き、CO₂を精製する。これを鉄で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma: 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

第 137 表 放射性炭素年代測定結果

地点名	試料番号	試料の質	種類	処理	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
ビーチロック上部	①	貝殻	マスオガイ	Edg	3,110 ± 30	-4.12 ± 0.29	2,770 ± 30	IAAA-143224
ビーチロック上部	② or ③	貝殻	チョウセンサザエ	Edg	2,290 ± 30	4.02 ± 0.31	1,820 ± 30	IAAA-143225
ビーチロック上部	④	貝殻	イモガイ	Edg	4,120 ± 30	-1.88 ± 0.32	3,740 ± 30	IAAA-143226
ビーチロック上部	⑤	貝殻	リュウキュウマスオガイ	Edg	2,600 ± 30	-2.96 ± 0.30	2,240 ± 30	IAAA-143227
ビーチロック上部	⑥	貝殻	マスオガイ	Edg	2,630 ± 30	-4.67 ± 0.31	2,300 ± 30	IAAA-143228
ビーチロック上部	⑦	貝殻	サメザラ	Edg	1,620 ± 20	-0.73 ± 0.25	1,230 ± 20	IAAA-143229

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲)を年代値に換算した値。

3. 結果と考察

同位体効果による補正を行った測定結果を第 137 表に、暦年較正結果を第 138 表に示す。試料の測定年代(補正年代)は、試料番号①が 3,110 ± 30BP、試料番号② or ③が 2,290 ± 30BP、試料番号④が 4,120 ± 30BP、試料番号⑤が 2,600 ± 30BP、試料番号⑥が 2,630 ± 30BP、試料番号⑦が 1,620 ± 20BP の値を示す。

暦年較正とは、大気中の¹³C濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹³C濃度の変動、及び半減期の違い(¹³Cの半減期 5,730 ± 40 年)を較正することである。暦年較正は、CALIB7.1.0のマニュアルにしたがって、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行

第138表 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)										相対比	Code No.			
		σ	cal	BC	978	—	cal	BC	888	cal	BP			2,927	—	2,837
ビーチロック 上部:①	3,109 ± 26	σ	cal	BC	978	—	cal	BC	888	cal	BP	2,927	—	2,837	1.000	IAAA-143224
		2σ	cal	BC	1,019	—	cal	BC	836	cal	BP	2,968	—	2,785	1.000	
ビーチロック 上部:② or ③	2,290 ± 25	σ	cal	AD	11	—	cal	AD	89	cal	BP	1,939	—	1,861	1.000	IAAA-143225
		2σ	cal	BC	29	—	cal	AD	128	cal	BP	1,978	—	1,822	1.000	
ビーチロック 上部:④	4,118 ± 27	σ	cal	BC	2,279	—	cal	BC	2,179	cal	BP	4,228	—	4,128	1.000	IAAA-143226
		2σ	cal	BC	2,329	—	cal	BC	2,125	cal	BP	4,278	—	4,074	1.000	
ビーチロック 上部:⑤	2,600 ± 26	σ	cal	BC	383	—	cal	BC	305	cal	BP	2,332	—	2,254	1.000	IAAA-143227
		2σ	cal	BC	393	—	cal	BC	225	cal	BP	2,342	—	2,174	1.000	
ビーチロック 上部:⑥	2,632 ± 25	σ	cal	BC	393	—	cal	BC	345	cal	BP	2,342	—	2,294	1.000	IAAA-143228
		2σ	cal	BC	462	—	cal	BC	297	cal	BP	2,411	—	2,246	0.994	
ビーチロック 上部:⑦	1,620 ± 23	σ	cal	AD	719	—	cal	AD	787	cal	BP	1,231	—	1,163	1.000	IAAA-143229
		2σ	cal	AD	691	—	cal	AD	835	cal	BP	1,259	—	1,115	1.000	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の内計算や比較が円いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。

5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

う。また、いずれの試料も海棲の貝であり、 $\delta^{13}\text{C}$ の値からみても海洋由来の炭素によって構成されていると考えられることから、海洋炭素に由来する較正曲線を用いた暦年較正を行う。リザーバー効果による補正に関しては、地域的な補正を行うための情報に乏しいため、海洋での一般的な値(暦年較正プログラムのdefault値である約400年)を用い、地域による補正は考慮していない。暦年較正は北半球の大気中炭素による較正曲線を用い、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算・再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

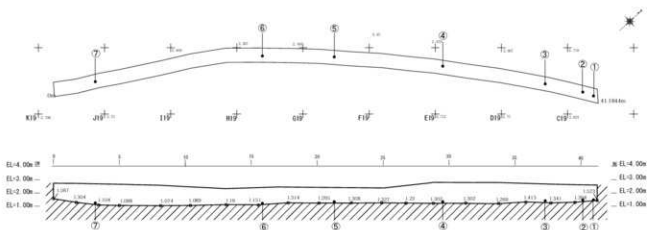
測定誤差をσとして計算させた結果、試料番号①がcalBC 978-888、試料番号② or ③がcalAD 11-89、試料番号④がcalBC 2,279-2,179、試料番号⑤がcalBC 383-305、試料番号⑥がcalBC 393-345、試料番号⑦がcalAD 719-787である。これまでに琉球列島各地で測定されたビーチロックの形成年代について、田中(1990)は、3,000～4,500年前、1,000～2,000年前、現在～500年前(いずれもBP)の3つのグループにまとめられるとしている。

ビーチロックから採取された貝殻の放射性炭素年代は、補正年代で4,120 ± 30BP～1,620 ± 20BPの値が得られ、この範囲内に入るもの大きな開きがあった。これらがビーチロックの生成年代を示しているとするれば、今回の結果に限るならば、複数の時期に生成されたビーチロックが混在している可能性がある。また、事前の予測ではサンプリング箇所の方山方向に古い傾向があるとされていたが、ビーチロック上部:④より海側においては合致するものの、陸側においてはビーチロックの形成の過程には単純ではないことを物語っている。もう一つ考慮すべき点として測定を行った貝殻は、流水や津波などにより周辺から流れ込んだのちに取り込まれた可能性も考えられ、必ずしもビーチロックの生成を示すものではない。このため、同一層位の貝殻に関して複数点の年代測定を行い、最も新しい年代を採用し層位的な検討をすることが、より詳細なビーチロックの生成年代の検討につながるものである。あわせて、これらビーチロックの堆積層位や標高、および貝類の生育環境などを考慮し、由来を検討する必要がある。

今後も、各地のビーチロックの形成年代の測定例を多数蓄積することができれば、より精度の高い完新世の海水準の状況が明らかになることが期待される。

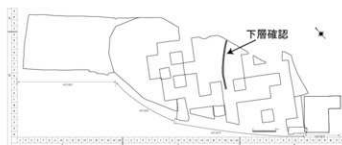
<引用文献>

田中好國,1990,石になった砂浜 ビーチロック,日本のサング礁地域1 熱い自然-サング礁の環境誌,古今書院,137-151.



第 190 図 下層確認トレンチ (試料採取箇所)

0 10m



第 191 図 下層確認箇所



全景 (東から)



断面検出



試料検出



試料検出

図版 140 下層確認状況

第6節 平安山原A遺跡鉄製品分析結果報告

株式会社 文化財サービス

はじめに

平安山原A遺跡は、沖縄県中頭郡北谷町に所在し、沖縄本島中部の東シナ海に臨む海岸低地に位置する。分析試料は、遺跡より出土した人骨の腹部から背中に向けて刺さった刀子である。

1. 試料

試料はグスク時代のもので推定され、全長20cm程の刀子から採取された4破片である。いずれも全体が錆化し、金属鉄が残存しない状態であった。そこで金属顕微鏡で4破片の断面を観察した。その後最も残存状態の良い(内部に非金属介在物が確認できた)1点(HEI-3)を選択して、マクロおよび顕微鏡写真を撮影し、EPMAを用い非金属介在物の定性・定量分析を実施した。

なお、本分析は、日鉄住金テクノロジー株式会社の協力を得て行ったものである。

2. 分析方法

(1) マクロ組織

本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡組織よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

(2) 顕微鏡組織

金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

(3) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

日本電子製 JXA-8800RL (波長分散型 5 チャンネル) にて含有元素の定性・定量分析を実施した。試料電流は 2.0×10^{-8} アンペア、ビーム径 $3\mu\text{m}$ 、補正法は ZAF に従った。

反射電子像 (COMP) は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される箇所ほど明るく、軽い元素で構成される箇所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。また各元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性 X 線像の撮影も適宜行った。

3. 結果

(1) マクロ組織

図版 141 ①に示す。観察面全体が錆化しており、金属鉄部は残存していない。また錆化に伴い内部に層状の割れが生じている。これは折り返し鍛錬が施された鍛造製品の特徴といえる。

(2) 顕微鏡組織

図版 141 ②③に示す。素地部分は錆化鉄で、全体に金属組織の痕跡は不明瞭であった。ただし④の反射電子像をみると、パーライト (Pearlite) と推測される、層状組織痕跡が微かに観察される。炭素含有率の推定も難しいが、素地はフェライト (Ferrite: α 鉄) であった場合、この箇所は芯金 (軟鉄) の可能性が高いと考えられる。

また③の中央には鍛打によって、細長く展伸した形状の非金属介在物が確認された。その組成に関しては、EPMA 調査の項で詳述する。

(3) EPMA 調査

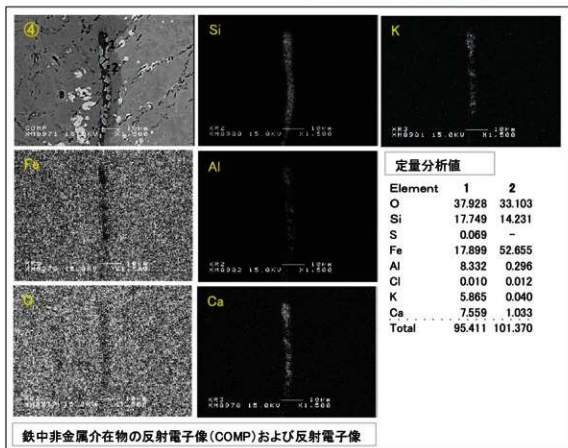
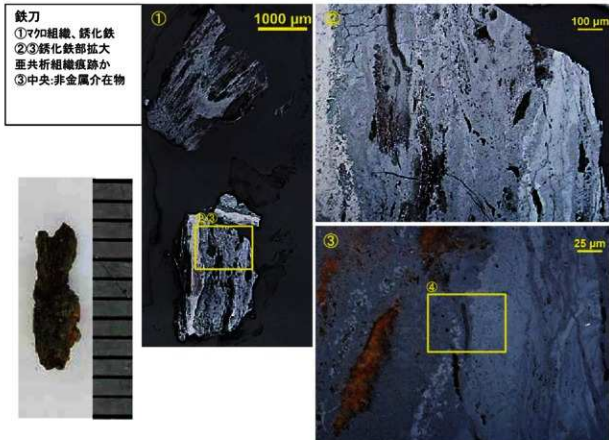
図版 141 ④中央に鉄中非金属介在物の反射電子像 (COMP) を示す。素地部分は特性 X 線像をみると珪素 (Si)、アルミニウム (Al)、カルシウム (Ca)、カリウム (K) に強い反応がある。定量分析値は $17.7\% \text{Si} - 8.3\% \text{Al} - 7.6\% \text{Ca} - 5.9\% \text{K} - 17.9\% \text{O}$ (分析点 1) であった。非晶質珪酸塩である。また微細な淡灰色結晶は、特性 X 線像では鉄 (Fe)、珪素 (Si) に反応がみられる。定量分析値は $52.7\% \text{FeO} - 14.2\% \text{Si} - 1.0\% \text{Ca} - 33.1\% \text{O}$ (分析点 2) であった。ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) で、少量ライム (CaO) を固溶する。

4. 考察

刀子から採取された小破片 4 点は、いずれも錆化が進んでおり金属鉄が残存しない状態であった。最も残存状態の良い破片 (HEI-3) は、亜共析組織 (フェライト・少量パーライト) と推定される痕跡が部分的に観察された。この破

片は芯金（軟鉄）部分であった可能性が高いと考えられる。

また内部には鍛打に伴い展伸した形状の非金属介在物も確認された。EPMAを用いた定性・定量分析の結果、非金属介在物の素地はガラス質滓（非晶質硅酸塩）で、微細なファヤライトが晶出することが明らかとなった。この組成からは、鉄素材を熱間で折り返し鍛錬した時の鍛接剤（粘土汁・藁灰）による介在物と推定される。



鉄中非金属介在物の反射電子像 (COMP) および反射電子像

図版141 鉄刀の顕微鏡組織・EPMA調査結果

第V章 まとめ

第1節 遺物・遺構が示す近代化

今回出土した近代遺物・遺構は多種多様である。製造販売・構築の実年代を辿ることができるものも多く含まれ、人々に与えた影響や生活変化を捉える上においては、非常に有効なアイテムと言える。また、『北谷町史』や郷友会が発刊した各「字誌」には、聞き取り調査による戦前の様子を伝えた証言が多く残されている。肉声が文書化されたものであり、戦前の生活ぶりを実感できる最良の記録と言える。その他、新聞記事・商品広告や民俗・文献研究等も参考にするとともに、個々の遺物・遺構が持つ社会背景をマッチングさせることで、つい70年ほど前まで存在していた平安山集落での生活実態に迫りたい。

なお、第三章第3節：近現代遺物及び本節をまとめるにあたっては、多くの企業の担当者やその道の権威者に対して個別に問い合わせを行った。特に以下の方々にはご丁寧に対応していただき、非常に有益なご教示を賜った。深謝の意を表したい。

公益社団法人 日本装削蹄協会	蹄鉄
味の素株式会社 広報部 牛島康明氏	化学調味料
キッコーマン株式会社 国際食文化研究センター	醤油
株式会社ウテナ 広報宣伝部 八重樫亜弥氏	化粧クリーム
株式会社アサヒコーポレーション 受注センター	ゴム靴
日本歯科医史学会 日本大学松戸歯学部 渋谷鑑氏	入れ歯

1. 金属製品

鉄鎌

草刈鎌が14点、稲刈鎌が1点見つかっている。戦前沖縄における草刈鎌は、殆どが高知県で作られた「土佐鎌」と呼ばれるものであったという。明治末期頃から熊本や鹿児島の人によって移入され、民具の中ではいち早く外来商品化したとされる。一方の稲刈鎌についても、一時期熊本からの移入があったものの、使いにくいのであまり普及しなかったとされ、今回の出土比率はこれらのことを裏付ける結果となった。いずれにしても、沖縄における鎌類については、これより前にはその存在が明確に確認されておらず、需要の空白を狙って南九州系の商人が介在したことが予想される。



鉄鎌刃部

ステンレス製菜切り包丁

刃の平（ひら）に「日満 神徳 登録 STAINLESS STEEL」の線刻が認められた。「日満」という対等国家的な表現からすると、少なくとも満州国が成立した1932（昭和7）年以降のものであり、満州に関連の深い場所で製造された可能性が高いように思われる。1933（昭和8）年には昭和製鋼所が満州に移転し、世界でも指折りの製鉄拠点となっていた。戦前においてステンレス鋼製造技術は既に確立されていたが、他の刃物はいずれも鉄製であること、かなり使い込んでいるところからすると、高価或いは稀少性のある代物であったのであろう。出征や満鉄従事のために大陸に渡った者は北谷村でも少なくなく、その彼らが持ち帰ったものとの想像も可能である。



包丁刃の平の線刻

銀メッキスプーン

祝女殿内屋敷からの出土である。陽刻・デザイン・規格から、アメリカのWm.Rogers製「COTILION パターン（1937年）」のアイスティー／パフェスプーンであることが判明した。海外からの出稼ぎから戻った者から譲り受けたということも十分考えられるが、買い求めたものとするならば、当時の沖縄で入手可能な物品がかなり多様であったことが窺える資料となる。『琉球新報』1917（大正6）年記事には、那覇の並川商店が西洋料理用ナイフ・フォーク等を取り扱っていることが記載されている。また、購入目



アメリカ製スプーン

的が必ずしもアイステリー用とは限らないが、当時の紅茶については、『沖縄タイムス』1922（大正11）年の広告にて、那覇の丹下商店が他の嗜好品とともに取り扱っていることが分かる。

2. ガラス瓶

個体数の種別集計をするにあたって、分類は桜井（2006）に準じた。しかし、分類しきれないもの（例えば、飲料と調味料、酒類と清涼飲料、日常生活品と文具、それぞれの間で分類作業が難航した）も多数あったため、以下のような大別し留めた。併せて個体数と出土比率を示すが、この数値には米軍由来の可能性が高いもの（コカ・コーラ瓶やワウエイボトルのビール瓶等）は含まれていない。

飲料・調味料瓶：50点（20.5%）	化粧瓶：86点（35.2%）	薬瓶：50点（20.5%）
日用品瓶：21点（8.6%）	不明瓶：37点（15.2%）	

化粧瓶が突出して大きな割合を占めており、これは学校・駅舎・病院等といった公共施設の遺跡や、軍壕・軍病院・共同墓地等といった県内の戦争関連遺跡には認められない傾向である。しかしこの出土比率と、当時の生活者が購入した品目の比率の間には、考慮すべき以下の事象がある。

- ① 飲料・調味料瓶については、既に「回収再利用（リターナブル）」がなされていた。『沖縄タイムス』1922（大正11）年の清酒広告にも、当該店印の一升瓶を持参するとその代金を支払う旨が記載されている。
⇒1本の瓶に対して複数回の売買行為があった可能性を考える必要がある。
- ② 飲料瓶は「転用」されることが多かった。特に戦中の物資不足の際には、全く中身の異なるものを入れて販売した例もあり、1943（昭和18）年には丸善がサイダー瓶やビール瓶にインクを詰めて販売していたという。製造販売業者でなくとも、使い勝手の良い瓶は、個人が別目的でリユースしたことも充分に予想できる。
⇒出土した飲料瓶の本来の中身が判明しても、最終的な目的が全く異なっていた可能性を考慮しなければならない。
- ③ ラムネ瓶は壊されて中からビー玉が取り出されることが多々あった。ラムネ玉を使ったビー玉遊びは、明治30年頃から始まったとされる。今回出土したラムネ瓶には完品がなく、それとは別に無色のビー玉が1点認められている。また手頃なサイズの瓶は円盤状に加工して、やはり子供たちの遊びに使用されることがあった。
⇒ある種の瓶は意図的に破碎されるため、個体数集計に影響を与える可能性がある。
- ④ 明治末頃には、那覇西町に沖縄初となるガラス工場が創業し、その原料として屑ガラスが集められた。この屑ガラスには「白い瓶」「一升瓶」「醤油瓶」が含まれた。
⇒カレット資源として回収されるため、購入されて確実に存在したはずの瓶が消滅することにより、本来購入された個体数に変動が生じる。

酒類

ビール瓶8点のうち、1点は王冠栓でエンボスなし、残りは全て1906（明治39）年設立の大日本麦酒製であった。更にこのうち1点は、コルク栓でキックをもつ古いタイプのものであった。この他に、キックがみられるものやエンボスが全くないものをワインと判断し、8点の資料を得ている。清酒として判断できるものはなかった。遺跡からの出土資料の中には、鉄製の「王冠抜き」も4点見つかっているが、王冠栓自体は1点も得られていない。

沖縄の人々とビールとの関わり合いは、当時の新聞記事・広告からも垣間見える。大正年間には、奥武山公園でビアホールが例年開業されていたこと、ビールの輸入が大きく増加してその8割が那覇で消費されていたこと等が掲載されており、都市部においてビールは非常に好まれていたことが分かる。北谷村におけるビールについての記述は少ないが、以下のような話が残っている。

「戦前、空手家が自宅を訪れた師匠をビールで接待した。師匠が帰る、片付けた残り物のビールを飲んだ台所の女性たちが、「アギジャビヨー、馬の小便だよ。」と、初めてのビールの味に吃驚した。」

この話から、男性にはある程度飲まれていたビールではあるが、女性たちにはどんな味がするのか全く認知されていなかったことが分かる。那覇のような都市部に比べると、ビール普及の程度はかなり低かったのであろう。



大日本麦酒株式会社製ビール瓶

泡盛は一貫して沖縄の人に好まれていたようであるが、基本的には大塚からの量り売りや陶器瓶への詰め売りが主であった。泡盛を最初にガラス瓶詰りしたのは識名酒造とされるが、それも戦後の話であり、しかもソースの空き瓶を利用したとある。瑞泉酒造でも当初の瓶はビールや醤油瓶の回収で賄っており、王冠栓はコーラのを整形し直して使ったという。『戦記』にも「日本兵からもらった泡盛の一升瓶」という文言が出てくるが、これも何かの空き瓶に量り売りしてもらったものと考えるのが妥当であろう。

牛乳

5 勾瓶と 1 合瓶という 2 種類の規格が認められた。前者は明治から大正年間の牛乳瓶規格で、口部が確認できるものは全てスクリュウ栓である。日本における牛乳瓶の蓋は、初期の頃はコルク栓や紙巻であったのが、その後王冠栓や紙蓋になっていくことが知られているが、スクリュウ栓も少数ながら存在していた。北谷町上勢頭古墓群でも「九〇互入」即ち 5 勾瓶が 1 点報告されていて、これもスクリュウ瓶である。今回の出土資料には「上原牛乳店」のエンボスを持つものがあり、このような店名入り容器の製造が島外でなされたとは考えにくい。戦前の県内で飲料容器としてのガラス瓶が製造されたという記録は見当たらなかったが、スクリュウ口の牛乳瓶は島内で製造され、そのことが沖縄の地域性を示している可能性は高い。



牛乳瓶

1 合瓶は 1970 (昭和 45) 年に容量標準が 200ml に変わるまで続いた、昭和前半期の規格である。側面に「消毒」に関わる文言がエンボスされているものが多いが、これには 1900 (明治 33) 年の「牛乳営業取締規則」以降、消毒・殺菌の指導・義務化が段階的に強化されていったことが反映されている。

『沖縄毎日新聞』1914 (大正 3) 年記事に、前年中の県内牛乳搾取高等が記載されている。これによると、乳牛頭数は名護 6 頭・嘉手納 14 頭・宮古島 2 頭、また営業者 (搾乳業者のことと思われる) は名護 3・嘉手納 6・宮古島 1 とあり、嘉手納が大正年間には県内最大の牛乳生産拠点であったことが分かる。

更に昭和頃の話として、現北谷町域内には 2 軒の牛乳屋があったという記録が残っている。

- ① 北谷・乳屋崎原 (チャーヤサチバル) : 白と黒の混ざった牛乳が 6 頭おり、牛乳は搾ってから沸騰させて、一合や五勾毎に牛乳瓶に詰めていた。雇人二人が、「崎原牛乳箱」と記された約 50 本入りの箱を毛布のようなもので包んで配達していた。昭和の初めて一合が五銭の値段であった。(『町史 3』)
- ② 桑江又前屋取・チャーチャー : 北谷、屋宜仲山から牛乳を仕入れていたらしい。自転車で配達していた。(『地名』)

小売・配達のを消費するだけでなく、搾乳量の減った乳牛を飼い、自分で搾乳・煮沸消毒したという例もあった。戦前の北谷においては既に飲乳の習慣が根付いてことが窺える。ただし証言記録を見る限り、これは母乳が出ない場合や大人を含む病人に対して与えられる場合が多く、現在のように恒常的に牛乳を飲む人はかなり少なかったようである。

化学調味料

【鈴木商店 (現・味の素株式会社)】の「味の素」が 4 点得られており、瓶の形状・サイズや底面エンボスから、「味の素」が宮内省御用達となった 1927 (昭和 2) 年以降の 15g (4 勾) 入り瓶であることが判明した。



『平上誌』に残る証言に、「戦前一般家庭の調味料は、塩、味噌が主で、醤油、砂糖、酢などはめったに使わなかった。味噌はどの家庭でも作った。醤油、甘酒なども作る家庭もあった。」とあり、塩・味噌以外の調味料の使用については非常に消極的な印象を受ける。それでいながら、化学調味料瓶が複数出土することについては、些か意外な感がある。



味の素・味の鑑

しかし、味の素株式会社への問い合わせや、公表されている同社史の検討から、戦前の沖縄では「味の素」がかなり多量に出回っていたことが分かった。人気商品ゆえに集客のための安売り・乱売されることも多く、これを防ぐために特約店等からなる「沖縄県味の素会」という組織が 1930 (昭和 5) 年までに成立していた。

また、「味の素」と類似形状の資料が 1 点認められており、この底面には右書きで「味の鑑」とエンボスされている。味の素株式会社広報部によると、この商品は大阪の石川屋調味料製作所で製造販売されたもので、「味の素」の類似品は 1920 (大正 9) 年頃から関西を中心に登場し、その数 35 銘柄にも及んだそうである。余談になるが、沖縄では戦後

もこのような類似品が多く出回っており、1964（昭和39）年頃にはうま味の主成分であるMSGの人口あたりの使用量は沖縄が世界一だったという。

醤油

醤油瓶のうち1点にはロゴマークのエンボスがあり、【野田醤油醸造（現・キッコーマン株式会社）】の「亀甲萬醤油」であることが分かった。同社35年史によると、エンボスを持つ容器瓶の製造は1931（昭和6）年以降とされる。

前引用にあるように、北谷での醤油の使用頻度は低かったようであるが、篤農家に近いウフジネー（大所帯）では自家製造されていたという。しかしその一方で、バサムチャー（荷馬車業者）が那期から運んでくるマチャニー（商店の発注品）の中にも醤油が含まれており、村内でも醤油を取り扱うマチャ（商店）が数軒認められる。

沖縄市開地屋取集落遺跡でも同瓶と思われるものが出土しているが、年配者への聞き取り調査ではそのような瓶を見たり使ったりしたという話はなかったとのことなので、小売の段階では泡盛同様に量り売りされていた可能性もある。

沖縄島内での本格的な醤油醸造は、1905（明治38）年に浜田商店が久米町で開始しており、大正期には年間1,000石を生産できるようになった。しかし、まだまだ馴染みの薄いものだったようで、『沖縄朝日新聞』1925（大正14）年の那期西本町・慶田支店広告には、ビール・清酒・洋酒と併記されて醤油が宣伝されている。この醤油自体は「亀甲萬」ではないが、この頃の醤油が移入された移入酒類と同程度の価値をもつ存在であったことが窺える。

昭和に入ると、移入醤油も次第に沖縄で根付いていったようである。キッコーマン国際食文化研究センターによると、米軍統治下の沖縄にキッコーマン醤油を輸出できるようになったのは1951（昭和26）年であったが、これは沖縄の人々からの要望が非常に強かったためであった。現地産業保護政策により翌年輸入が禁止されるものの、島内需要者の要望は依然として強く、1953（昭和28）年には禁止が解除されている。



亀甲萬醤油

整髪料

椿油・香油のうち来歴のはっきりしているのは1点のみで、【島村商店（現・株式会社シマムラ）】の「鈴虫香油」（1912～）である。この他「サハラ香油」のエンボスを持つものが4点、「白椿」のエンボスを持つものが2点得られており、前者は大阪市中央区上本町西で製造されていたらしいこと以外は詳細不明、後者は全く出自が分かっていない。

これらの髪油については、化粧クリーム等の白色瓶よりも早く出回っていた可能性がある。1887（明治20）年には、有力寄留商人平尾喜八の甥・平尾巳之吉が独立する際、香油や歯磨粉等の小間物行商を始め、財を成している。当初髪油は、グマムグワーウヤー（小間物売り）によって、櫛・糸・針・石鹸・マッチ等と一緒に販売または卵と交換されていたもので、その卵は那期の市場で売り、その代金でまた小間物の仕入れをしていたという。北谷村内にも髪油や煙草等の行商から身を興し、マチャを開業した者もいた。しかし大正末頃からは、髪油は薬屋で店舗販売されるようになったという。

一方ボマードについては、【井田京栄堂】の「メヌマボマード」（1918～）が2点、出自不明の「メナミボマード」が2点得られている。前者はそれまで出回っていた海外製品と異なり、純植物油を原料にしたことから全国的にヒットした商品として知られる。

戦前北谷の調髪事情については、『平上誌』に以下のような記載がある。「**断髪屋で粘りのあるボマードを付けて自慢する者もいた。男性はダンバチャー（断髪屋）を利用するが、女性はカンパーを自分で結っていた。」「僅かではあるが、バリカンを購入して自宅で散髪する家庭もあった。」「女学生のオカッパは自宅で調髪していた。」**これらの証言は、整髪料や調髪具の使用状況を何となく想起させるものである。出土した鉄製品の中には、指掛けのある「理容鉏」2点認められている。平安山集落にもケンドー治いに断髪屋は存在していたが、この理容鉏は自宅での調髪用とも考えることができる。



メヌマボマード

化粧クリーム

【久保政吉商店（現・株式会社ウテナ）】の「ウテナ・パニングクリーム」、【平尾眞平商店（1954年廃業）】の「レートクリーム」「レートメリー」「レートフード」、【天野源七商店（現・株式会社ヘチマコロ）】の「ヘチマクリーム」の他、来歴不明なものもかなり多く認められた。最も点数の多かったのが「ウテナ・パニングクリーム」の11点であったので、株式会社ウテナ広報宣伝部に問い合わせた結果、以下のような情報提供を得た。



ウテナクリーム

- ・出土したガラス瓶の形状等から、1928（昭和3）～1943（昭和18）年の間に生産販売されたものである。
- ・水谷八重子ら当時の人気女優をイメージキャラクターに、新聞・雑誌等で大々的に広告されていた。
- ・特段「ハイカラなもの」という区別はなく、手頃な価格設定で幅広い年代に好まれた。
- ・沖縄への正規流通ルートはなかったが、鹿児島島の卸が運んでいた「レート」商品とともに持ち込まれていたのではないかと推測される。
- ・最も早く沖縄進出を図った化粧品会社は「ナリス化粧品」で、訪問販売ルートでの顧客開拓をしていたらしい。

今回の出土遺物にこの「ナリス化粧品」製品と判別できるものは含まれていないが、同社の創業が1932（昭和7）年であることからすると、本土系化粧品の本格的な沖縄流通は、全体として概ね昭和10年代とするのが妥当であろう。

3. 北谷への島外品流入経路

島外からの品々の移入を担っていたのは、「寄留商人」と呼ばれる県外からの移住商人である。彼らが沖縄に姿を現し始めるのは1870年代後半頃からで、那覇を拠点に商業活動を行った。島外からの移入品である今回の出土資料が、郷里にも副拠点を置いていた寄留商人を通じてもたらされたことはほぼ確実であり、寄留商人の拠点である那覇が島外品の主たる受け入れ地であったことが推察できる。

那覇にもたらされた島外品は、バサムチャー（荷馬車業者）によって北谷村まで届けられたことが諸記録に残されている。彼らは、那覇への往路には砂糖樽を積み、復路はマチャニー（商店の発注品）を積んで帰ることが専らであった。マチャ（商店）からの買い出し要望は年中通してあり、バサムチャーはその商品を買出しして各マチャまで直接運んだ。マチャにとっては商品の購入が確実で安全性があり、バサムチャーにとっては往路の砂糖運搬だけでは少ない稼ぎを復路で補えるというメリットもあって、両者の間には長年に渡る信頼関係が築かれていたという。また、買い出しの要望はマチャだけでなく篤農家からも頻繁にあり、篤農家の多い上勢頭・下勢頭では、バサムチャーの家まで直接足を運んで品物購入の依頼する人もいた。

また、1923（大正12）年までの記録でしかないが、白米・大豆・昆布・素麺・石油については、嘉手納に近い比謝港からの移入があったことが分かっている。バサムチャーの中には那覇ではなく嘉手納との間で運搬行為をした者も存在しており、小さいマチャは嘉手納から仕入れることもあったという。このように全ての移入品が那覇のみからもたらされた訳ではないが、生活必需品ではない個人的嗜好品については、那覇の寄留商人が関わっていたと考えるのが自然である。今回特に出土点数の多かった化粧品類もやはり、那覇卸業者—荷馬車業者（或いは行商人）経由で北谷村のマチャ或いは個人にもたらされたことは想像し易い。

4. 生活習俗に関わること

風呂（入浴）

ここで言う「風呂（入浴）」とは、「容器に溜めたお湯に浸かる」行為を指す。現在の沖縄では「風呂（入浴）」の習慣は殆どないと言われ、「シャワーを浴びる」ことが主流になっていることは、全国的にも知られている。亜熱帯の沖縄ではお湯に浸かって温まる必要がない、ということがその主たる理由であるならば、戦前においても「水浴び」「湯浴び」が、身体を洗うための通常のスタイルであったことになる。証言記録にも「当時の人たちは日頃、海や川で水浴びをしていたが、冬になると週一回程度、家庭で湯を沸かし浴びた。」（『平上誌』）、「夏だと村井戸で浴びたり、また自宅の井戸で浴びたりした。冬はお湯を沸かしてハンジリ（半切り＝たいり）に入れ、台所近くで浴びたりした。」（『町史3』）というのがある。

しかし同時に「風呂（入浴）」に関わる証言が散見されたので、以下に要約して示す。

- ① 「銭湯は桑江又前と野里又前の二カ所にあったが、嘉手納まで行くこともあった。正月の銭湯は大変な混みようで、夜の明けまで営業していたが、先に入った人の垢が浮いて汚かった。」（『平上誌』）
- ② 「昭和2年にマチャを開店した亀島家は、昭和7年頃に、店構えを大きくし、商品も増やしていった。その際風呂場を造り、母屋との間に大きな水タンクも設置した。」（『平上誌』）
- ③ 「ミーヤーの五右衛門風呂は、（寄留していた）兵隊に占領され、家人は夜中使用することになった。風呂に入る順番も、まず大佐が入り、大尉、少尉、将校の後に曹長、兵長、一等兵が入った。その後に夜遅くから家族の使用となるが、汚れているので炊き直して使用した。」（『平上誌』）
- ④ 桑江又前屋敷のユーフルヤー：「風呂屋と鍛冶屋をしていた。」（『地名』）

⑤ 伊礼のチサバ：「風呂屋もしていた。ナガサ（※川の名前）から水を引いて風呂を沸かしていた。」（『地名』）

これらの記録からは、論理的に以下のような事柄を導き出すことができる。まず戦前の北谷村には、「銭湯」「風呂屋」という職業が存在した。そしてお湯の中に人が浸かったから「垢が浮いて」いたということになる。また「五右衛門風呂」をもつ家もあった。五右衛門風呂も中に人が浸かるものであって、浴び湯を沸かすための単なる釜ではない。従って、戦前の北谷には「風呂（入浴）」という行為が確実にあったことになる。しかしながら、風呂は全世界にあるものでもなく、その設置にはある程度の財力が必要であったようである。「風呂（入浴）」の頻度は低く、通常は「水浴び」「湯浴び」をしていた。だからこそ、「銭湯」や「風呂屋」が成立していたと考えられる。また、風呂を沸かすには「水」と「火」が必要である。「水」を得るために、②では「大きな水タンクを設置」して、⑤では「ナガサから水を引いて」いる。「火」については、④では鍛冶屋との兼業によって、火力を有効に使ったことが想像できる。

今回の平安山原A遺跡の調査では、祝女殿内屋敷から「風呂場」のような施設が検出されている。井戸から長く伸びた暗渠状の上水路が開口した付近に、コンクリート製の溜槽状構造物があり、燃焼痕跡も認められる。これが「風呂場」だとして、どのように湯を沸かしたのかは分かりかねるのだが、「水」と「火」という要素は揃っている。うるまし楚南村跡でも、「風呂」としてセメント製の溜槽状のものが報告されており、その外壁には「昭和七年度 旧九月設立」という刻字がみられた。

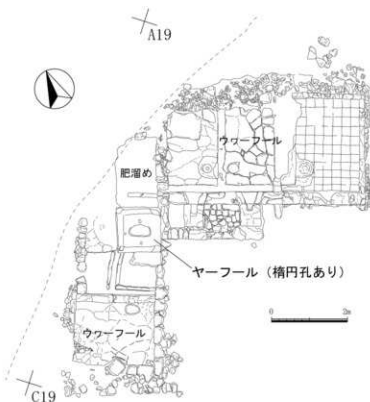
和式風便所

祝女殿内屋敷からは和式便所の痕跡が検出された。コンクリートに楕円形の穴が削り貫かれただけのもので、ウーパールと並置されているが、明らかに別な空間として設けられている。排泄物は豚舎ではなく、直接肥溜めに行くようになっている。また、前述の楚南村跡でもセメント製の和式便所が見ついている。これもウーパールの横に位置しており、聞き取りによるとその築造は昭和初期頃とのことである。

この和式風への改良は、1944（昭和19）年に日本軍が北谷村に進駐した際、一般民家にも一部の日本兵が寄宿したことから関連があるものと、本整理作業当初は捉えていた。『戦記』に残る浜川区長の証言を以下に要約する。

「戦前の便所はフルだったが、豚が供出物だったので、「豚に糞は食わずな！」という命令も出た。しかし生活は容易に変えられず、そのままフルを使用していた。内地の兵隊たちはそれを嫌がり、道端や民家の側などで用を足していた。フルでする場合でも、仲間の兵隊に豚のしっぽを捕まえさせ、その隙に用を足す有様だった。」

ウーパールを継続使用する地元民と、それになかなか対応できない内地の兵隊との間で、混乱が生じていたことが窺える。しかし、明治30年代から始まった風俗改良運動の中で、1916（大正5）年頃にはウーパールを新設することが禁止され、トゥーシヌミーも潰すこととされた。その結果、ウーパールの脇にはヤーフルと呼ばれる汲み取り式便所が設置されるようになるが、祝女殿内屋敷での検出状況は、まさにこの流れに適合する。なお、昭和に入っても改良運動は続いており、家畜防疫員は警察官と一緒に農家を巡回し、豚舎改善の指導を行っている。



第192図 祝女殿内屋敷の便所 (S=1/100)

『朝日新聞・銚後美談』1943（昭和18年）には、平安山集落について「中頭郡北谷村字平安山は昭和九年、生活改善特別指導部落の指定を受け、以来駐立植、電の改善、改良便所等県下の優良部落として農業改善や生活刷新に住民一致協力の躍進をつけ、県下に新興部落の名が高い。（後略）」との記事が掲載されている。結果として生活改善に成功したという内容ではあるが、1934（昭和9）年の段階で生活改善特別指導部落の指定を受けていることも事実である。従って、集落全体としての便所の改善は1934～1943年の間に進められたことになる。

この改善化についてのもう1つの傍証となるのが、今回出土した長方形を呈する信楽焼の和式大便器の破片である。この形状はそれまでの木製を模したもので、その後、品質を高める為に高温で焼成するようになり、歪みの出にくい小判形に変化していく。祝文殿内屋敷のヤーフールの楕円孔も、この便器設置を前提として割り貫かれたもののようにも思える。



信楽焼の方形大便器片

ウマへの装蹄

1890（明治23）年、蹄鉄工は国家資格とされ、その養成は獣医学校や農学校付属の蹄鉄専科で行われた。ただし、この場合の蹄鉄工とは装蹄・削蹄を行う者のことであり、「造蹄」自体には特に資格を必要とはしなかった。蹄鉄は、造り自体がそれほど複雑ではなく、しかも消耗品でもあるため、ムラの鍛冶屋で製造された可能性が高い。

今回出土した蹄鉄22点は、いずれも長方形を呈する6か所の釘穴を有しており、釘穴上に溝をもたない「無溝式蹄鉄」である。石垣島を含む県内各遺跡で確認できた出土資料も、ほぼこれと類似している。前方弧状部分には、殆どのものが舌部をもってそれが上方に折り曲げられているが、舌部を有さずに湾曲部全体を反り返すものもみられる。公益社団法人日本装蹄協会によると、舌部を有するものは小型ウマ用である可能性が高いとのこと。証言記録でも北谷で飼われていたのはナク（宮古）・シマグワ（島小）・ザッス（雑種）で、ザッスのみが比較的大型とされる。出土した蹄鉄には少なくとも大中小3つのサイズがあり、後端部形状や全体的な湾曲度合には異同が認められる。これは、前肢・後肢の形状や馬の個体差の違いに加え、蹄鉄製作者が単一ではないことを感じさせる。

沖縄への蹄鉄技術の導入は1920（大正9）年以降、日本政府による家畜改良政策に伴ったものとされる。元来日本の在来馬は蹄が強く、蹄鉄がなくともさほど問題がなかったが、荷馬車・客馬車業の発生に伴い、多くの荷を引くことによる馬蹄への負担増もあって、以後「装蹄」が根付いていったことは想像に難くない。しかしその場合は必ず、処々に装蹄の有資格者がいたはずである。前述のようにその資格取得にあたっては獣医学校や農学校付属での履修が必須となるが、1916（大正5）年には既に嘉手納に移転していた県立農学校が、このことに無関係ではなかったものと思われる。



大小の蹄鉄

入れ歯

出土した資料について日本歯科医学会に問い合わせ、多くの情報提供を得た。日本における義歯の歴史は室町時代に遡る。「木床義歯」或いは「皇国義歯」と呼ばれるもので、人工歯には象牙・象牙骨を使用していた。明治に至るまでの約300年間使用されていたが、高価であったため一般庶民への普及はなかったという。1852年、アメリカのタイヤメーカーであるグッドイヤー社が高温・高圧で固めた蒸和ガムの開発に成功、それが義歯の「床」に利用されるようになった。また人工の歯部については、1845年頃、アメリカのS.S.White社によって精巧な陶製品が開発された。これらの新素材によって作られた義歯は、1880（明治13）年頃に日本へ輸入され、それ以降、義歯の主流はこの「ゴム床義歯（西洋義歯）」となる。国産の「ゴム床義歯」は、1909（明治42）年頃に蒸和釜の開発に成功した山中卯八（現・株式会社吉田製作所の創設者）によって始まり、現在のレジン床に変わるの第二次大戦後のこととなる。

県内での出土事例として、沖縄戦直後に設置された宜野座村内の共同墓地のものがある。上下顎用がともに複数得られており、サイズや形状は一様ではない。この中には人工歯の抜け落ちそうな部分に金具で補強されているものもみられるため、そのような義歯のメンテナンス技術を持つ者が存在したことになる。戦前の北谷村内には少なくとも歯医者2軒あったが、通常の歯の治療以外にこのような義歯の提供やメンテナンスにまで関わっていたのかは不明である。

いずれにしても、流通した年代幅が限定できる近代遺物の1つであり、歯科医学史においても貴重な資料として捉えることのできる出土事例となった。考古遺物としては珍品と言えるが、今後の資料蓄積で施療・流通の実態が解明されていくものと思われる。



入れ歯

関係年表

西暦	元号年	世界・日本	沖縄・北谷	移入品	経済	貨幣	本紙	在地
1868年	明治元	明治維新。						
1869年	明治2							
1870年	明治3							
1871年	明治4	新貨条例制定、1円を単位とする。		東京でラムネの製造開始。				
1872年	明治5	琉球藩設置。						
1873年	明治6	砂糖の自由貿易が許される。						
1874年	明治7							
1875年	明治8			日本人製造による最初のサイダー「日の出餅」発売。				
1876年	明治9		寄留商人が沖縄に現れる。					
1877年	明治10	西南戦争勃発。		開拓使麦酒醸造所「札幌麦酒」発売。				
1878年	明治11							
1879年	明治12	沖縄県設置。	島外から安価な焼物が大量流入。					
1880年	明治13			ゴム床義歯の輸入開始。				
1881年	明治14		ノロに対する新たな役俵支給の決定。					
1882年	明治15		北谷小学校設置。					
1883年	明治16							
1884年	明治17			明治屋「三ツ矢平野水」発売。				
1885年	明治18		酸化コバルト顔料の本格的な使用開始。					
1886年	明治19							
1887年	明治20			国産の玉ラムネ瓶の製造・発売。				
1888年	明治21			JBC・明治屋「キリンビール」発売。				
1889年	明治22	大日本帝国憲法発布。	敷地・家屋の制限令徹底。	秋元己之助「日の出餅」を「金線サイダー」に改称。				
1890年	明治23	蹴球工の国家資格化。		日本麦酒「恵比寿ビール」発売。				
1891年	明治24							
1892年	明治25			大阪麦酒「アサヒビール」発売。				
1893年	明治26							
1894年	明治27	日清戦争勃発。	玉那覇酒造工場が北谷で創業。					
1895年	明治28							
1896年	明治29							
1897年	明治30	貨幣法制定により、円の価値が倍に。						
1898年	明治31							
1899年	明治32		土地整理法発布。					
1900年	明治33			国産ビールへの王冠栓使用開始。 牛乳ガラス瓶が義務付けられる。				
1901年	明治34							
1902年	明治35							
1903年	明治36		土地整理事業終了。					
1904年	明治37	日露戦争勃発。		国産サイダーへの王冠栓使用開始。				
1905年	明治38							
1906年	明治39	南満州鉄道設立。	国頭街道改築工事が平安山村まで達する。	日本・札幌・大阪が合併し、大日本麦酒創立。				
1907年	明治40			帝国醸泉「三ツ矢印平野シャンペンサイダー」発売。				
1908年	明治41		北谷間切から北谷村に改称。					
1909年	明治42			鈴木製菓所「味の素」発売。 新大空山田安民薬房「ロート目薬」発売。				
1910年	明治43	帝国在郷軍人会発足。	沖縄県諸縁処分発布。	肥後守ナフ、商標登録。				
1911年	明治44		沖縄製糖株式会社嘉手納工場竣工。 北谷村役場が平安山ヌ上に移転。					
1912年	大正元			島村商店「鈴虫香油」発売。				
1913年	大正2							
1914年	大正3	第一次世界大戦勃発 帝国在郷軍人会に海軍が加わる。	砥部焼の流入が始まる？	布引醸泉所「ダイヤモンドレモン」発売。 桃谷醸大屋「白色美濃水」発売。				
1915年	大正4			大野福七商店「ヘブマクリーム」発売。 平尾賢平商店「レートフード」発売。				
1916年	大正5		ウーパール新造が禁止される。 沖縄県立農学校が嘉手納に移転。	那覇ビヤホール営業広告（『新報』）。				
1917年	大正6							
1918年	大正7			平尾賢平商店「レートメリ」発売。 井田京栄堂「メヌマポード」発売。				
1919年	大正8							
1920年	大正9		沖縄県に蹴球技術が導入される。	「味の素」の類似品が登場。				
1921年	大正10			日本麦酒醸泉、帝国醸泉を合併。				
1922年	大正11		沖縄県営鉄道嘉手納線の開通。	清酒同販・紅茶の販売広告（『タイムス』）。 日本足袋「貼付式地下足袋」発明。				
1923年	大正12	関東大震災。						
1924年	大正13		「ソツツ地獄」始まる。 西表島北で海底火山爆發（軽石大発生）。					
1925年	大正14			ビール輸入増大記事（『沖朝』）。				
1926年	昭和元	民芸運動始まる。						
1927年	昭和2			鈴木商店「味の素」（出土版）発売。				
1928年	昭和3			久保政吉商店「ウテナクリーム」発売。				
1929年	昭和4		北谷郵便局で電信業務始まる（二重子の使用）。					
1930年	昭和5	昭和恐慌（～1931）。		この頃までに「沖縄味の素会」が組織化。 両口眼眼鏡の発明。				
1931年	昭和6		那覇に百貨店山形屋が開店。					
1932年	昭和7	満州国建国。 管理通貨制へ移行。		化粧品沖縄島四販売の先駆者・ナリス化粧品創業。				
1933年	昭和8	昭和製菓所が満州に移転。		大日本麦酒、日本麦酒醸泉を合併。				
1934年	昭和9		平安山、生活改善特別指導部署の指定。	大日本除虫菊「キンチョール」発売。				
1935年	昭和10							
1936年	昭和11							
1937年	昭和12	日中戦争勃発。		出士スプーン製造。				
1938年	昭和13	補助貨幣の製造開始。						
1939年	昭和14	国民徴用令が公布。						
1940年	昭和15	ゴム廢物統制令。						
1941年	昭和16	太平洋戦争勃発。 金融収束令公布。						
1942年	昭和17	食糧管理法制定。「供出」開始。	北谷小学校設置60周年。 平安山新興部落記事（『朝日』）。					
1943年	昭和18		沖縄守備隊→第32軍が創設される。 日本軍、北谷村に進駐。	「ウテナクリーム」ガラス瓶製造中止→統制。				
1944年	昭和19							
1945年	昭和20	終戦。	平安山集落ほとんどが焼失。→米軍上陸。					

王府支配期

1期

貨幣経済導入期

有田燦等の大量流入期

沖縄産産物の低ま期

経済成熟・大戦好況期

2期

恐慌不況期

不完全回復・戦時統制期

3期

統制期

民芸運動による復興期

第2節 戦前の平安山ノロについて

最後の平安山ノロ・島袋カナ

伝わっている最後の「平安山ノロ」は、島袋カナという人物である。『町史』や『ノロ』等の各文獻に残る彼女についての記録を、以下に整理する。

島袋カナは「ノロ殿内」或いは「ノロ殿内小」の娘で、「大屋（ウフヤ）」に嫁いだ。ノロ職に就いた時期は不明であるが、それまでは前任のノロが途絶えていた。「ヌールパーパー」と呼ばれていたらしいが、平安山部落内では「ウフヤのおばさん」という呼ばれ方もされている。1944年頃まで管轄地である平安山・桑江・伊礼・浜川・砂辺で祭祀を行っており、その巡拝には「ノロ殿内」の子供たちがビンシームチャー（祭具や荷物持ち）として同伴した。「ノロ殿内」での折願後、「大屋」の神棚を拝み、次いで「大屋」の娘を同行させて平安山の殿へ赴いた、という。「瓦屋又吉小のおばさん」と親しくしており、1945年3月28日頃の平安山爆撃の際も、他所から「瓦屋又吉小のおばさん」の墓へ避難してきた。しかし運悪くその墓が爆撃され、他の人々とともに亡くなった。死亡時は高齢（80代）であった。

島袋カナの生家

カナの生家について、『町史3』では「ノロ殿内小」、『ノロ』では「ノロ殿内」と記述が異なっているが、これは聞き取りを行った話者による違いであり、どちらかが誤認しているものと考えられる。そこで、『町史5』に記載されている各字各世帯の家族数と戦死者の男女別人数を調べることにした。島袋カナは「大屋（ウフヤ）」に嫁いでおり、艦砲射撃で亡くなっているののであるが、その「大屋」に関する記録では戦死者が0になっている。この点について、『北谷町のノロ』執筆者である高江洲氏にご意見を伺ったところ、「もしかするとノロということで、ノロ殿内に含まれている可能性があるのでは」とのことであった。ところが、その「ノロ殿内」の戦死者はこれまた0であり、「ノロ殿内小」の戦死者が男1名・女1名となっていたのである。このことからカナの生家は「ノロ殿内小」の方であると考えられるのが妥当であろう。

「ノロ殿内」と「ノロ殿内小」は混同し易いが明らかに別家であり、一連の発掘調査においても全く別の屋敷として存在する。しかし、屋号や屋敷の立地からすると、後者は前者にごく近い関係の分家であったことが予想される。ここからは、カナは「ノロ殿内小」の生まれで、その家は「ノロ殿内」の分家であるということをも前提として稿を進めるが、両家のこれ以上の混同を避けるため、「ノロ殿内」＝「本家」、「ノロ殿内小」＝「分家」と仮称することにする。

平安山ノロの継承

カナの前任ノロは途絶えていたという。つまり、ノロを輩出すべき「本家」にノロを継承すべき女性がいなかったがために、「分家」出身のカナがそれを継いだということになる。ノロの継承については、父系親族内かつ三親等内（母→娘、姉→妹、叔母→姪、祖母→孫）という原則であったものが、近代になると一般的に婚入してきた嫁による継承、いわゆる「嫁継ぎ」に変化することが指摘されている。同じ旧村内の北谷ノロ殿内における継承は、まさにこの典型と言える。これに対して、カナのように分家からのノロ輩出ということであれば、父系親族による継承ということになり、伝統的なあり方であったと見ることもできる。

カナの死亡年から生年を逆算すると、1860～1865年頃となる。1903年時には30歳代後半～40歳代前半であったことになり、既に大屋に嫁いでいたものと考えられる。先代のノロがいつ途絶えたのかは全くの不明であるが、ノロが不在であれば各字の行事に支障をきたすはずであり、ノロ殿内一門にノロとしての資質を備えた適齢の女性がいたならば、ノロ職就任を要請されることもあったのではないだろうか。1903年時のカナの年齢からすると、既にノロ職に就いていたとしても不思議はない。

また、前述したカナの戦死が「ノロ分家」にカウントされていたことにも、このノロ職に伴った財産の流れが関係している可能性がある。ノロとして亡くなったからには、ノロを輩出して財産が引き継がれた生家の構成員と見なされるのは、決して不自然ではない。

ノロ財産の継承

王府時代には公職であったノロには、ノロクモイ地或いはヌール地と呼ばれた知行・役地が支給された。しかし1899（明治32）～1903（明治36）年の土地整理事業において、村持とならない土地はノロの所有となった。同法は村が共有地にしていた叶掛（小作）にしていたもののみ共有地と認めたため、殆どのノロクモイ地がノロ及びノロ殿内の所有地に帰した、と言われる（『ノロ』）。

北谷ノロの場合、1903年時にノロにあった者がヌルジー（ヌール地）を私有したという。このノロは他家へ嫁いでいたが、次のノロが姪（父系親族）であったことから、財産も生家であるノロ殿内に帰属したと想像できる。

同じ頃、平安山でも当然ながら、こうしたノロ財産の私有化がなされた、或いは試みられたものと推察する。「ノロ及びノロ殿内の所有地に帰した」ことを言い換えると、平安山ノロ財産はカナと「本家」の所有となった、ということになる。

「本家」の状況

しかしながら、「本家」がノロ財産を本当に継承したかについては、以下の聞き取り記録からは疑いが持たれる。「北谷町のノロ」の話者の1人に「本家」の娘がいる。大正7年生で、行事の時はカナのビンシームチャー（祭具や荷物持ち）として同伴したことがある人物である。彼女の両親は、「**浜川の屋号ヌルンチグワーから平安山ノロ殿内へ夫婦養子に入った**」とされる。この「**浜川の屋号ヌルンチグワー**」が指す家は不明であるが、「**夫婦養子に入った**」時期は彼女が生まれた後のことであるので、大正末頃のことであろうか。土地整理事業からは約20年の歳月が流れている。彼女の証言によると、この頃の「ノロ本家」は「**並々ならぬ困窮した状態**」で、「**家屋も人が住めるような状態ではなかった**」ということである。ノロ財産を継承したものの、後に全く別次元の理由で家勢が衰退したということも考えられるが、「本家」がノロクモイ地を継承しなかったという可能性として残る。

また、「本家」が夫婦養子を取った理由は、「**子が無かったから**」だという。家勢が衰えていたとは言え、当主には「本家」を存続させる意識があったということである。同じく子供がなくて血縁が途絶えたという知花のノロ殿内の場合、ノロの夫（婿養子）の血縁から養嗣子（男子）を取っている（1987 上江洲）。ノロ職がどうなったかの具体的な記述はないが、文脈からするとこの養嗣子の嫁が継承したものとと思われる。このようにノロが不在であっても「本家」を存続させるといった意識は、知花ノロにも共通して感じられ、将来的にはノロを再び「本家」から輩出させたいという目的が潜在していたものと思われる。事実、近年の平安山ノロ殿内の「**拝み**」については、『ノロ』の話者（「本家」の娘）と現当主の妻が担っている。

発掘調査から見る「分家」

当屋敷は、その大部分が調査対象地にならなかったため、詳細は不明と言わざるを得ない。しかし特記される遺物として、「分家」付近から出土した信楽焼の大便器片がある。長方形を呈するもので、陶製大便器としては古手のものである。鮮やかに施釉されており、当時は高級品であったとされる。生活改良運動の一環で、全県下で便器の和風改良が進められたが、平安山部落はそれに成功したとの新聞記事も残っている。一方の「本家」でも和風改良の形跡はあり、楕円形の孔を持つヤーフルが見つまっている。この楕円形孔も陶製大便器をはじめ込む用意があったように感じられるが、方形のものよりは便器の形式的には時期が遅かったと言える。いち早く高級な方形大便器を導入したと思われる「分家」は、カナがノロ財産を継承したことによって相応の財力をもっていたのではないかと推定できる。

発掘調査から見る「本家」

大正末頃に因窮を極めたこととされる「本家」であるが、発掘調査で検出された屋敷跡を見る限り、そのような印象は全く受けない。厚い盛土に伴って、精緻な作りの戸戸から延びた上水路・風呂場等が検出された他、重厚な基礎をもつ畜舎、豚4頭分のウーフル、石組の貯水池や排水路等、下部構造を見る限りでは平安山で唯一の立派な屋敷である。また、銀メッキの舶来ティースプーンや化学調味料「味の素」瓶は当屋敷からのみの出土であり、純農村にあってはややハイカラさも感じられる。陶磁器類やガラス瓶の出土量も他家に比べて圧倒的に多く、屋敷の残存の良さを考慮しても余りあるものがある。当家を継いだ夫婦養子が、独力かどうかはともかく、昭和10年代までにここまで家勢を盛り返したということになる。

これら調査成果の中で最も難解であったのが、入り口の左側で検出された「不明建物」である。外周には6本の石製柱の残骸が認められ、床面は漆喰貼りである。建物隅にはバショウ葉脈痕のあるコンクリート製の箱のようなものも残っていた。長らくこの建物の用途が解明できずにいたが、出土遺物の平面分布を検討したところ、鍋・火炉・火取の出土比率が突出して高いことが分かった。また、近代日用品の項で掲載した「磁器製化粧クリーム瓶?」も、この不明建物からの出土であるが、その外底面には「平」字の墨書が残っていた。もし、この「平」字が「平安山」を示しているのであれば、この磁器瓶は個人ではなく部落の共有物とみなすこともできる。この不明建物が集落の主要道路（ナカミチ）に面して立地していることも考えると、部落の人々が出入り・集合するような共同施設であったのではないだろうか。



第193図 祝女殿内屋敷不明建物付近 (S=1/100)

その場合、建物内に残存していたコンクリート製の箱は、祭壇のようなものであったとも考えられる。

『ノロ』には、平安山ノロの祭祀の様子が伝えられている。各字の拝所を巡る前にまずノロ殿内で祈願したとされるが、この場所を連想されるものとして「**神屋**」或いは「**ノロ社**」という施設名が登場する。当時、部落の男性は「**本家**」屋敷に入ることが禁じられていたとの証言もあるため、神聖な場所は屋敷内にあったと考えられ、母屋の手前右側で検出された「アサギ」がこれに当たるとするのが妥当であろう。しかし、今回検出された「不明建物」にも部落における公共性が感じられるため、祭祀に関わる何らかの施設であったということも、可能性の1つとして提示しておきたい。

第3節 各期遺物の平面分布の検討

今回報告した平安山A遺跡の各調査区では、近代以降の擾乱の影響を大きく受けていたこともあり、複数種類あったであろう近世以前の土層を完全明確に判別・把握するに至らなかった。しかしながら豊富に得られた出土遺物からは、この地における貝塚時代後期からの継続的な生活痕跡を読み取ることができ、各時期の平面分布域に大まかな変遷があることが看取された。

人々の居住に密接に関連するものと考えられる土坑やピットについては、多くは砂層上面で検出されたものであったため、前節までの個別の報告は簡便なものに留めた。しかし、その立地には明らかな疎密を認めることができ、遺物の平面分布とクロスチェックすることにより、各期における居住域中心部の変遷を推定し得る。また、砂層中から検出された詳細時期不明な人骨や、形態からの時期判別が容易ではない遺物（鉄製品等）についても、より蓋然性の高い帰属時期を同様の手法によって推定し得る。破片数を基にした分析であること、時期分類に重なりが生じること、といった問題を含んでいるが、遺跡全体を巨視的に捉えるにあたっては、それほどの大過はないものと思われる。

指標となる各種土器の帰属時期を以下のように分類し、グリッドごとの出土破片数を基にして集計を行った。

平A・I期（貝塚時代後期）	土器（主にくびれ平底期）
平A・II期（11～14C）	ブスク土器・カムイヤキ・白磁
平A・III期（14～17C）	白磁・青磁・染付・本土産陶磁器
平A・IV期（17～20C）	白磁・青磁・染付・本土産陶磁器
平A・V期（近代）	本土産陶磁器

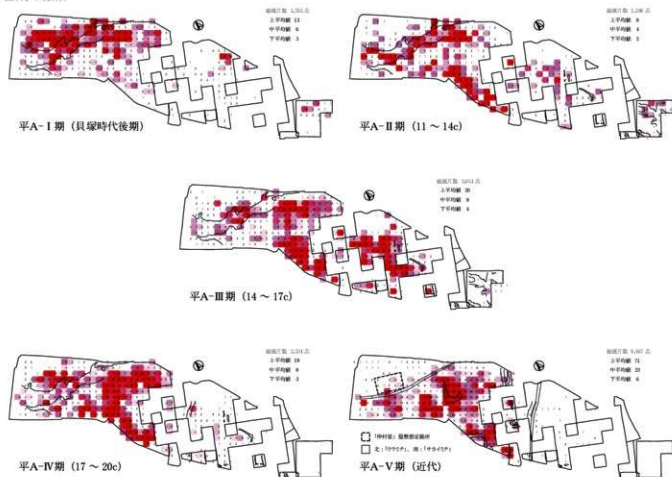
区分時期によって破片数の絶対量は大きく異なるため、平面的変遷を相対的に比較できるように、分布の疎密表示をするにあたって作為的な調整を行った。遺物の多寡に応じて各グリッド枠を塗り潰すのにあたって、各期の出土破片数に中平均値・上平均値・下平均値を設定し、塗り潰しの濃淡を決定している。

中平均値：集計対象とした破片総数を出土したグリッド数で除した平均値。

上平均値：中平均値を上回るグリッドの破片総数をそのグリッド数で除した平均値。

下平均値：中平均値を下回るグリッドの破片総数をそのグリッド数で除した平均値。

各期の様相



第 194 図 遺物 時期別 平面分布

平A - I 期 (貝塚時代後期) : 破片数 1,705 点 (全て土器)

対象となった貝塚時代後期の土器の殆どは、くびれ平底期に比定された。HA ③地区の自然流路 (S-640) に沿うように、その内外に密な分布が認められている。この流路上流にあたる平安山原B遺跡 (2015 北谷町教委) では、大当原式期には湿地堆積が進行していたことが確認されている。このことから、流路の狭小な部分では既に閉塞していたことが推定され、下流側での流水はなかったものと思われる。各期中、最も北側に分布が偏在した格好を呈している。

平A - II 期 (11 ~ 14C) : 破片数 1,196 点 (ブスク土器 802、カムイヤキ 110、白磁 106、青磁 178)

自然流路より北側での遺物分布は疎化し、全体的に分布域が南下する。HA ②地区西側に高密度な範囲が認められ、これはI層から検出された人骨の密集域とも重なっている。人骨の中には抜歯が認められる個体もあるため、これらについてはI期に属する可能性が高い。しかし全ての人骨がI期のものと言える材料も揃っていないため、この分布域の重なりはひとまず留意すべきであろう。また、最も南側のHA ①地区でも遺物出土が認められており、この頃までにこの場所が完全に陸化していたことが窺える。

平A - III 期 (14 ~ 17C) : 破片数 3,051 点 (白磁 246、青磁 1,779、染付 556、本土産陶器 216、本土産磁器 254)

HA ②・③地区ではII期との大きな変化はみられないが、HA ④地区における遺物出土が格段に増加しており、この傾向は後述する青磁の分布に特に顕著である。この地区は、土坑・ピットが最も密に検出され、明瞭な居住痕跡が残る区域であり、また鉄製刀が2点出土したところでもある。各期の平面分布を比較する限り、これらの遺構・遺物の主体となる帰属時期は当該期である蓋然性は高い。

平A - IV 期 (17 ~ 20C) : 破片数 2,534 点 (白磁 265、青磁 89、染付 1,726、本土産陶器 323、本土産磁器 131)

遺物分布の主体は再度HA ②・③地区に移り、遺跡南方のHA ①・④地区、特に大型溝SD41・42以南では極端な疎化が認められた。当該期にはHA ①において石列が構築されており、これが契機となって耕作域が拡大したものと考え

られる。換言すると、平安山を「居住域」と「耕作域」とに南北半割するような空間設定がこの時期に始まったことを窺わせており、その結果人工遺物を伴うような人的働きかけが少ない耕作域において、遺物出土が減少したものと考えられる。

平A - V期（近代）：破片数 6,467点（全て近代本土産陶磁器）

当該期の遺物分布は、近代屋敷跡の配置とほぼ一致する。平安山南半での非分布という点はIV期と全く共通しているため、集落における居住域・耕作域の認識が、IV期からそのまま引き継がれていたことが推定される。「ウラムチ」以北での出土量も減少しているのは、ここに屋敷を構えていた「仲村渠」が早い段階で転居したことに起因するものと考えられる。

器種ごとの様相

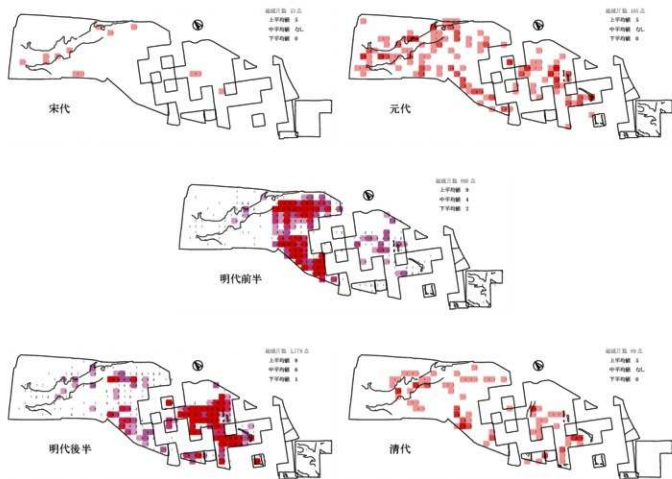
前項の各器種混在分布図を展開して器種ごとの分布図を示すのに加え、単体では時期決定が困難である器種（貝製品・鳥獣魚骨・沖縄産施釉陶器）も同様の手法で図示する。このことにより、各期における後者の出土傾向をある程度把握することができるものと思われる。なお、器種によっては前述I～V期に亘らないものもあるため、適宜時期細分のピッチ子を変えて提示する。

① 青磁：破片数 2,066点（宋代 13、元代 165、明代前半 860、明代後半 939、清代 89）

明代が突出して多く87%を占めるため、これを更に前半（14C～15C中頃）と後半（15C中頃以降）に分離して作業を行った。

その結果、第195図にあるように、青磁の分布域に明瞭な差異が認められた。明代前半期にはHA②地区に、後半期にはHA④地区に密集しており、それぞれに土坑・ピットの密集域が伴っている。特に後者の遺構密度は非常に高く、当該期の遺構構築の特性を暗示しているかのようである。

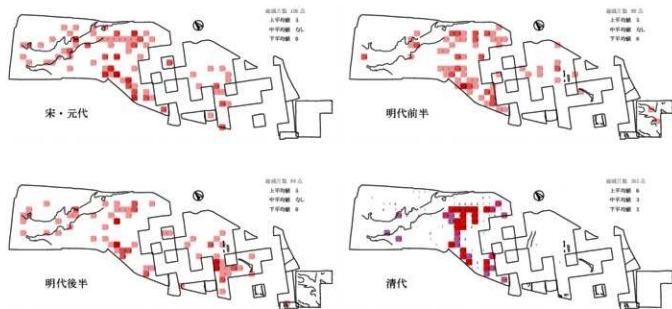
清代（平A - IV期に相当）については、SD42以南の耕作域にも分布が広がっていることが特に目立つ。耕作域という空間確定がなされたのが、清代半ばであったことの傍証とも捉えることができる。



第195図 青磁 時期別平面分布

② 白磁：破片数 549 点（宋・元代 106、明代前半 89、明代後半 89、清代 265）

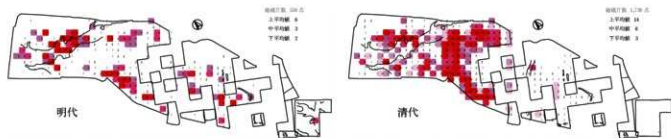
特に古手の白磁については点数が少ないため、宋代と元代を合算して図化した。明代も多くはないのであるが、青磁との比較のために分図したが、宋元代・明代前半・明代後半は平均値が 2 以上にならなかったため、今回の手法による分布図としてはあまり有意ではない。それでも青磁ほどの明瞭さはないものの、分布傾向は青磁に類似共通していると思われることは可能であろう。



第 196 図 白磁 時期別平面分布

③ 染付：破片点数 2,282 点（明代 556、清代 1,726）

染付は破片点数において青磁を凌駕しており、全体分布を牽引する重要器種の 1 つとなっている。明代・清代のものに限られるため、2 期の分図となったが、当該期の変遷を如実に物語っている。



第 197 図 染付 時期別平面分布

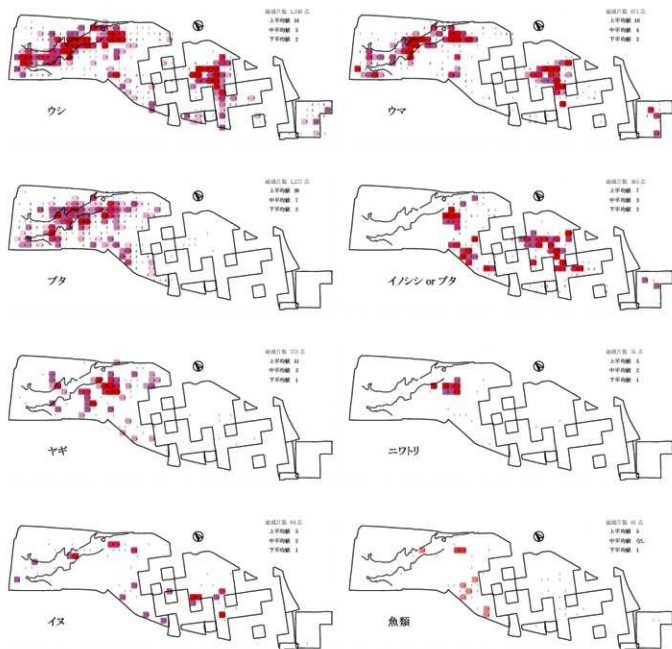
④ 脊椎動物骨：種同定破片数 4,132 点

遺物単体では帰属時期を示さない遺物のうち、貝殻に次いで点数の多いものが脊椎動物骨である。同定作業によって分別したものを分布図化したところ、極めて興味深い傾向が看取された。

まず「ウシ（1,340 点）」と「ウマ（671 点）」であるが、両者の分布は非常に似通った出土傾向にある。その特徴とし以下の事象が挙げられる。

- ・遺跡北側では自然流路 S-640 に沿うように出土している。
- ・遺跡中央の HA ④地区においても、高い出土点数・密度を誇っている。
- ・人工遺物の出土が少ない遺跡南側の HA ①地区においても、若干の出土をみる。

大型動物である上に、食用というより農耕用の動物であるため、例え最終的には食用として供されたにしても、他の食用動物とは廃棄のされ方に違いが生じることは留意しなくてはならないであろう。しかしこの出土傾向からは、少な



第198図 脊椎動物骨種別平面分布

くともこれらの農耕用動物は、HA ④地区の盛行期であるダスク時代～近世前半期から利用されていたことは、ほぼ確実であろう。

次に「ブタ (1,277点)」と「イノシシ or ブタ (365点)」を比較してみたい。文字通り後者にもブタが混在することが考えられるが、同定破片数においては「ブタ」としたものが圧倒的に多い。「ブタ」の分布はほぼHA ②・③地区に限定され、平A - IV・V期の分布に重なっている。沖縄では18世紀に豚の増産が始まり、豚食文化が発展していったこととまさに符号する。これに対して「イノシシ or ブタ」としたものは、HA ③地区では認められず、代わりにHA ④地区で目立っている。平A - III期及び青磁 - 明代後半の分布傾向とよく類似すると言えよう。「イノシシ or ブタ」としたものに「ブタ」が混在しているにしてもそれはごく少数であり、主体となっているのはイノシシ或いはイノシシに形質的に近いブタである、という推論がこの顕著な分布の違いから導き出せる。

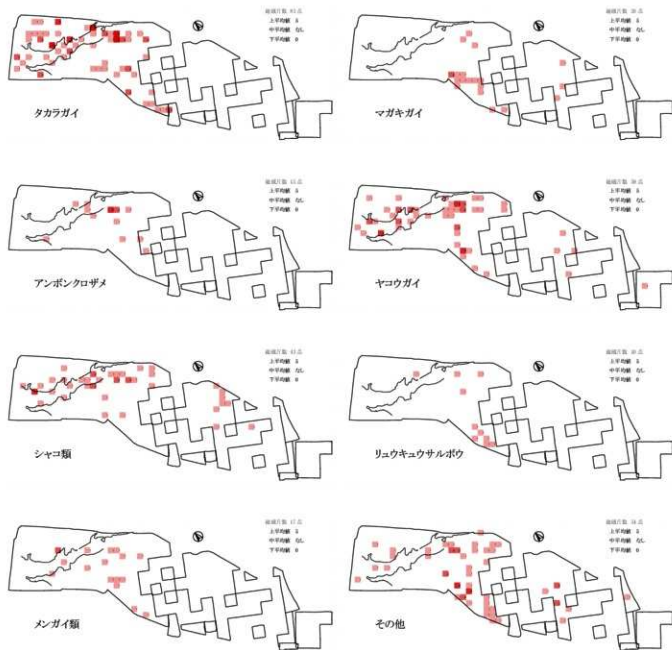
ブタと似たような分布傾向を示しているのが、「ヤギ (273点)」と「ニワトリ (51点)」である。戦前の北谷では、牛馬を飼育していたのは、中流以上の裕福な農家であったが、豚・山羊・鶏はヒンスー（貧乏）でも飼養していたという。ヤギが沖縄に入って来たのは本土より古く、一般的には15世紀中とされるが、この分布図からはダスク～近世前半期にヤギが存在していたという痕跡は辿れない結果となっている。

「イヌ(94点)」は同定点数が少ないものの、これ以外にも HA ④地区において、埋葬された半身骨格がIV層中から検出されており、平安山原 A 遺跡においては最も古くから人間と関わっていた動物として捉えられる。埋葬されているあり方から、伴侶動物としての視点をもっての考察が必要となるが、単に分布状況を見るならば、「ウシ」「ウマ」に近い傾向を示している。

「魚類(61点)」については、点数が少なくあまり多くを語れないが、海浜近くの砂丘上に立地する遺跡としては、出土量が非常に少ない印象を受ける。

⑤ 貝製品：総点数 301 点

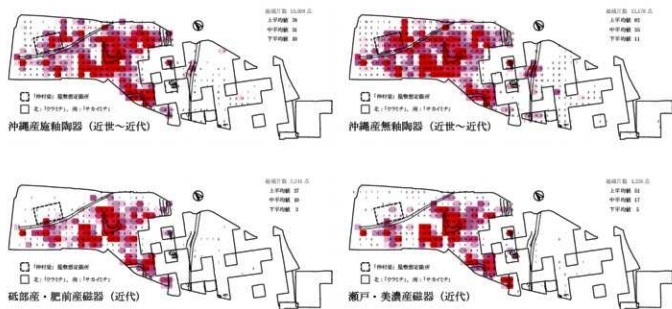
7種を抽出の上、その他を一括し、8分図した。全ての種の出土点数が100点を下回るため、他器種に比べると分布図の有意性は低い。しかしながら、それぞれの貝種が個性をもった分布状況を示しているように感じられる。特に貝鍾主要3種(タカラガイ・シャコ類・リュウキュウサルボウ)についてはそれが顕著であり、各種貝鍾の盛行期を推定する上で、興味深い結果が得られた。



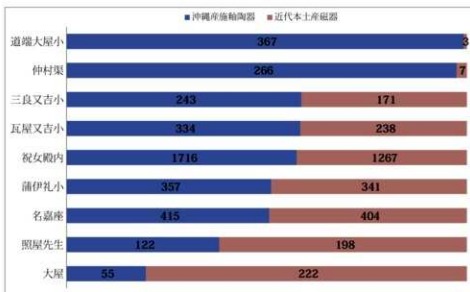
第 199 図 貝製品 種別平面分布

沖縄産陶器についての分布検討

これまで見てきたように、今回の調査成果に対しての遺物の平面分布検証を行うことは、巨視的な傾向を把握させ、考古的に考え得る様々な事象を想起させる有意な作業として捉えることができる。更にこの応用として、今回最も豊富に得られた沖縄産無軸陶器・沖縄産施軸陶器についても、その技法の新古等について論理的に導き出せる要素がないか、時間の許す限り横索を続けた。



第 200 図 沖縄産陶器・本土産磁器 平面分布



第 201 図 各屋敷における碗・小碗・皿の産地比率

第 139 表 各屋敷出土のガラス瓶

屋敷名	個体数
祝女殿内	124
照屋先生	17
浦伊礼小	13
道端大屋小	11
大屋	8
三良又吉小	8
小渡小	7
名嘉座	5
東大屋小	5
西大屋小	5
瓦屋又吉小	2
祝女殿内小	1
仲村渠	0

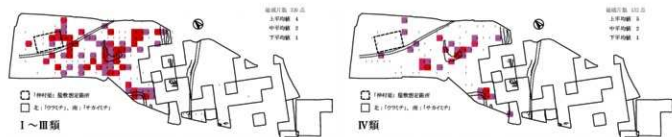
沖縄産陶器は近世以降、即ち平 A - IV ~ V 期の範疇で製造・使用された遺物である。遺物分布図においてこの IV 期と V 期との間に認められる変化は、前節で述べた通り、「ウラムチ」以北における遺物の減少である。調査対象区内の中で「ウラムチ」以北に唯一屋敷を構えていた「仲村渠」は、沖縄戦を迎えることなく大阪に転居していた。転居の時期は不明であるが、以後の屋敷跡地では新たな物品の購入や廃棄がなかったと考えることができるため、この点を重視してみたい。

第 200 図上段は、沖縄産施軸陶器及び沖縄産無軸陶器それぞれ全部の平面分布である。平 A - IV ~ V 期というスパンの様相を示すもので、「仲村渠」屋敷にもその分布は及んでいる。これに対して第 200 図下段は、近代に限った低部産・肥前産及び瀬戸・美濃産磁器の分布図であるが、「仲村渠」屋敷からの出土比率は格段に減少していることが読み取れる。第 201 図では、沖縄産施軸陶器と近代本土産磁器の比率を、屋敷ごとに示している（対象器種は碗・小碗・皿に限り、調査面積が狭く破片数が少なかった「東大屋小」「小渡小」「祝女殿内小」は、対象から除いた）。「仲村渠」は「道端大屋小」

とともに、近代本土産磁器の出土が極端に少ない屋敷数であることが分かる。更に、第139表はガラス瓶の出土状況である。米軍由来のもの（コカコーラやワンウェイビールボトル）、或いはその疑いの強いもの（オーウェンズ・イリノイ社製瓶）を除くと、「仲村渠」以外の全ての屋敷から出土していた。今回出土したガラス瓶の殆どは大正以後、特に昭和期に購入されたものが目立つ。これらのことから考えると、「仲村渠」は近代集落の中に存在していたが、近代磁器やガラス瓶の購入・廃棄活動が非常に少ないまま、転居してしまった。或いは転居当時に使用可能なものは、大阪に持って行ったか近隣者に引き取ってもらったことも考えられる。いずれにしても、「仲村渠」周辺から出土した遺物は近代後半まで下らない可能性が高く、この前提に立つと、ある器種についての器形や技法の変化・変遷の顕在化が期待できる。

① 沖縄産無釉播鉢：分類対象点数 458 点

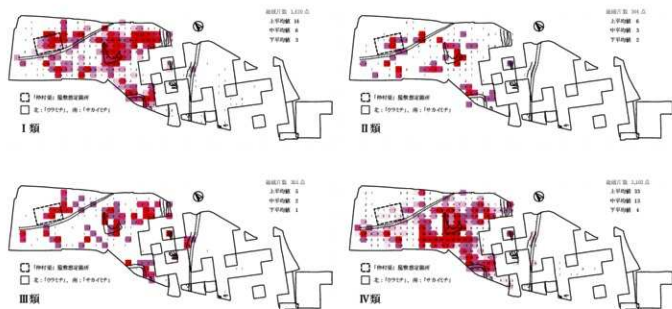
播鉢については、その器形変化に応じてⅠ～Ⅳ類に分類している。安里分類（1987）に則ったものであり、口縁部が逆「L」字形となり、胴部に丸みを帯びるⅣ類が最後出のものとしてされている。このことに基づき、Ⅰ～Ⅲ類とⅣ類とに分離して、分布図を作成した。この結果、播鉢Ⅳ類は前掲した本土産近代磁器の分布と似通った傾向を示している。「仲村渠」周辺からⅣ類の出土が全くない訳ではないが、Ⅰ～Ⅲ類との傾向の違いが明瞭であることは興味深い。



第202図 沖縄産無釉陶器（播鉢）平面分布

② 沖縄産施釉碗：分類対象点数 5,131 点

施釉碗についても播鉢と同様の図化を行った。白化粧を施す碗Ⅳ類が、技法上の最後出の群と考えられるのであるが、播鉢Ⅳ類同様に「仲村渠」周辺での出土が明らかに減少している。



第203図 沖縄産施釉陶器（碗）平面分布

上記の2器種のⅣ類資料がいずれも最後出であったであろうことは、分布図の上からも再確認できたと考えようである。問題はその変化がいつ頃に起こったかということになるが、具体的な年代を挙げるには至らない。しかし、近代中においてある一軒の家が転居した場合、陶磁器の組成に影響を少なからず与えることとなる事例として提示しておくたい。今後の発掘調査において近代集落が検出された場合、このようなアプローチも蓄積すれば有望な手法となり得るものとする。

第4節 出土遺物のまとめ

今回の調査成果から平安山原A遺跡は標高3～5mの砂丘地に位置し、貝塚時代後期から近・現代まで継続的に生活していたことが判った。しかし、近代以降の擾乱の影響を受けそれ以前の遺物包含層を把握するには至らなかった。前節で示したように各時期の遺物の平面分布から貝塚時代後期から近代までの時期的変遷を把握することができた。

本節ではほぼ同時期の遺跡と比較し(第140表)、村落遺跡の時代を象徴する遺物の出土量をまとめてみた。比較遺跡の基準として、

- ① ほぼ同時期であること。
- ② キャンプ桑江北側地区で本遺跡と同じような出土を示す遺跡。
- ③ 港(波地村跡)や生産遺跡(湧田古窯跡)・寺(天界寺跡)など首里王府関連遺跡を除く。

第140表 遺跡別主な遺物出土量

番号	遺跡	標高(m)	所在	土器	滑石	カムイヤキ	青磁	白磁	染付	形輪陶器	瓦葺土器	近世磁器	近世陶器	沖繩産施釉	沖繩産無釉	陶瓦土器	近代磁器	合計
1	平安山原A遺跡	5	北谷町	4056	1	118	2802	1065	2507	1779		428	620	10491	13640	3721	7104	48332
2	伊礼原D遺跡	5	北谷町	5752			521	139	297	483	4	16	9	149	244	74		7688
3	安仁屋トゥンヤマ遺跡	20	北谷町	835	3	79	551	451	580	271	○	131	4	1770	1600	1044	17	7336
4	小堀原遺跡	5	北谷町	2100	526	224	28	244	22	23			5	693	656	206	272	4999
5	後兼久原遺跡	20	北谷町	626	89	649	2250	384	209	1048			2	60	4	○	32	5353
6	宜野座ヌ古島遺跡	32	宜野座村				3650	726	1369		1	564	10					6320
7	大山前門原第一遺跡	32.7	宜野湾市	205		4	189	93	168	69	3		18	175	229	60	255	1468
8	喜友名グスク	55	宜野湾市	7832	2	50	1507	322	370	899	5	1	1510	1623	981	895	15997	
9	嘉数トゥンヤマ遺跡	69	宜野湾市	2955		172	3151	761	1039	1195	22	438		5515	6103	14439		35790
10	城間遺跡	15	浦添市	7350		7	92	40	586			8		1000	1327	3145	230	13785
11	小塚村跡	25	那覇市	175		5	21	8	22		52		19	882	894	694	523	3295
12	識名原遺跡	81	那覇市	771		10	211	40	218	163	4	2	2	1552	1904	804		5681
13	津嘉山古島遺跡	11	南風原町	6378		42	677	119	75	283	6	12	10	605	293	236	47	8783
14	仲間村跡B地点	11.5	南風原町			462	1335	4217	446	3	1394	8	1297	5888	587			15637

○凡例>小堀原遺跡(2009,2012の合計)嘉数トゥンヤマ遺跡1+IIの合計。タイ産形輪陶器と中国産形輪陶器は合計。土器は先史・グスク土器の合計。○は出土有。

表に示したように他の遺跡に比べると本遺跡は貝塚時代後期から近・現代までの遺物の出土量が卓越する。本遺跡と同じようにどの時期の遺物も多い遺跡としては宜野湾市嘉数トゥンヤマ遺跡(2009)、喜友名グスク(1999)、南風原町仲間村跡B地点(2005)がある。また、中国産陶磁器の出土の割合が低い遺跡としては城間遺跡(1992)、識名原遺跡(2001)、中国産陶磁器の出土の割合が高い遺跡としては宜野座ヌ古島遺跡(2010)後兼久原遺跡(2003)があり、大方3つのグループに分けられる。

遺跡の立地をみると、南風原仲間村跡B地点は標高11.5mの非石灰岩地域(島尻層)で、海岸まで距離があるが、1950年代までは潮の干満を利用して小舟で西の長堂川を那覇と結ぶ水運としていたようである⁽²¹⁾。

喜友名グスクは標高55mと高く、ウーワフルの検出や近代磁器の出土など本遺跡と宜野座ヌ古島遺跡は標高32mで、中国産の青磁・白磁・染付が得られ、沖繩産陶器はあまり得られていない。また、近世の本土陶器が多く出土することから両遺跡共に近世までの集落の存在が想定できる。また、第140表に示された遺跡は標高10～81mの石灰岩丘陵や島尻層の微高地に立地する。標高5mの砂丘地に立地するのは本遺跡や伊礼原D遺跡などキャンプ桑江北側地区の遺跡のみで、特にⅢ期・Ⅳ期の青磁・白磁・染付など中国産陶磁器を主体とする遺跡で砂丘地に立地するのは稀である。

ここでは出土遺物についての特徴と他遺跡との比較を試みた。以下、遺物ごとに略述する。

土器：総数4056点得られ、後期土器(くびれ平底)1828点、グスク土器856点、近世の先島土器117点、不明112点⁽²²⁾が得られた。第140表の遺跡で後期土器が多く得られるのは北谷町のみで、他はグスク土器の出土が主である⁽²³⁾。後期土器は浜屋原式土器・大当原式土器などの尖底系が7.1%なのに対し、くびれ平底土器⁽²⁴⁾は91.8%と主体をなす。くびれ平底を主体とする遺跡はこれまでに報告されたキャンプ桑江北側地区では、伊礼原D遺跡(2013)の4409SX⁽²⁵⁾、平安山原B遺跡HB⁽²⁶⁾が口がある。後者は本遺跡に近接することから、延長上にあると思われる。

グスク土器のうち大形把手(第139図102・103)は後兼久原遺跡(1997)、安仁屋トゥンヤマ遺跡(1992)、浦添原遺跡(2005)など、グスク期の遺跡で数点、普遍的に得られ、この時期の土器と捉えられるが、その出自は不明である。それに伴う白磁玉縁碗やカムイヤキも出土する点で共通する。

図163はHA⁽²⁷⁾の柱穴が集中する場所から出土しており、240±20BPの結果得られた。時期的にも符合し、近世期の土器の使用を示すものである。

石器：総数 333 点得られ、主なものは磨石 128 点、砥石 54 点、石斧 52 点である。石斧は平面分布から HA③ S-640 (自然流路) や HA④ の柱穴が集中する K・L18～20 に出土するようである。後者の出土は二次転用品が多いようである。本地区はⅢ期以降の遺物が主体であることから、その頃まで石斧を二次使用していたことが判る。

砥石は 54 点と多く、そのうち貝塚時代後期が 27 点、グスク時代が 27 点である。貝塚後期の砥石の平均重量は 1224.7g、グスク期の平均重量は 182.0g と約 10 分の 1 で、使用の方法や研磨対象物が違うようである。石材は前者が砂岩、後者が玄武岩を主体とする。玄武岩を用いた砥石は現在のところ沖縄諸島では類例がなく、本遺跡のみで、16 点と出土量も多い。Ⅲ期の時期の搬入ルートとして中国産陶磁器との関連も想定される。

クガニ石は特異な形状の石で、本遺跡からは HA③ S-640 (自然流路) 周辺から 8 点得られた。沖縄諸島では貝塚後期の平敷屋トウバル遺跡 (1996)、野国貝塚 (1968)、久良波貝塚 (1994)、伊武部貝塚 (1983)、清水貝塚 (1989)、近隣では小堀原遺跡 (2012)、平安山原地区 (2011) で各々 1 点出土するが本遺跡の 8 点出土は久米島の清水貝塚の 12 点に次で多い。所属時期は土器や貝製品などを加味すると貝塚後期としても矛盾はない。用途については本文でも述べたように白木原区の指摘する民俗事例を含め、検討課題である。

貝製品：総数 397 点得られ、貝塚後期以前とグスク時代以降に大きく分かれる。土器でもふれたようにくびれ平底期のもとしては貝符 (図 10)、二枚貝有孔製品 (第 183 図)、がある。しかし、大形イモガイの円盤状製品 (図 2) やゴホウラの研磨 (図 15) などはいくびれ平底土器期以前の平安山原 B 遺跡の時期に近いものである。ヤコウガイ製品については貝塚後期の背面利用のもの (図 18・22) とグスク時代の腹面利用のもの (図 49・50・51) が平面分布で面的に異なり、時代により異なる形状の匙を使用していたことが証左された。また、グスク時代以降のマガキガイ製品、網の錘と思われるタカラガイ製品が S-640 (自然流路) と内陸側からも検出され、カムイヤキや古手の白磁・青磁と重なるようで、その上限を示唆しているようである⁽²⁵⁾。

骨製品：貝塚時代後期以前のジュゴンや海獣骨を素材とするものが主であるが、図 4・9 のようにグスク時代以降もある。特に図 9 について伊礼原 D 遺跡など近世以降の遺跡で出土例が増え、用途の解明が待たれる。

中国産陶磁器：青磁・白磁・染付 (青花) の出土量は琉球王府関連の首里城跡・天界寺跡・湧田古窯跡・渡地村跡の遺跡を除くと本遺跡が最も多い (第 140 表)。器種別に見ると碗が 4747 点 (79.7%)、皿が 740 点 (12.4%)、杯・小碗が 262 点 (4.4%)、瓶が 124 点 (2.1%)、壺が 44 点 (0.7%)、鉢が 34 点 (0.6%)、他に急須や袋物が各々数点得られた。碗は明代には龍泉窯の青磁が主体で 75%、福建・広東系が 15% を占める。清代には福建・広東系の染付が 89%、龍泉窯は 1% で前者が多くなる。碗の出土点数は明代・清代ともさほど変化はないが、時代が新しくなると福建・広東に移行するのは対中国貿易に変化があったことが窺え、歴史背景を証左するものであろう。また、17C 後半からは沖縄産釉陶器の生産が始まる⁽²⁶⁾。平田典通が中国に渡り、広東碗を真似て製作したようで⁽²⁷⁾、碗の需要に応えたものと思われる。

皿も明代には龍泉窯が 79.6%、福建・広東系が 13.5%、わずかに徳化窯が認められるが、清代には福建・広東系が 85.8%、龍泉窯が 5.5%、徳化窯が 7.1% と変わってくる。杯・小碗についてみると明代は龍泉窯 78.8%、福建・広東系 13.5%、徳化窯 5.8%、清代には龍泉窯 4.4%、福建・広東系が 0.6%、徳化窯 91.7% と徳化窯が大半を占める。出土数の少ない瓶は景徳鎮などの上品品である。以上の状況から時代や産地、及び器種ごとに窯の組成に変化のあることがわかった。このような状況は平安山原 A 遺跡に限ったものでなく、中国と貿易をしていた琉球王府全体に関連する。中国や琉球王府の情勢から大方、村落遺跡と琉球王府関連遺跡とは異なる状況も想定されることから各遺跡の詳細な分析・検討が望まれる。

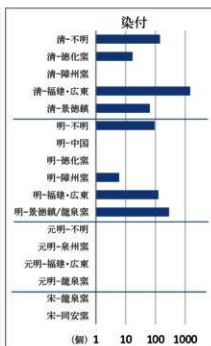
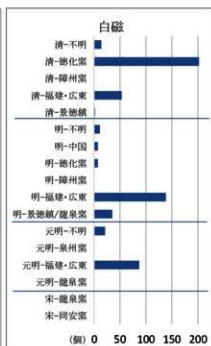
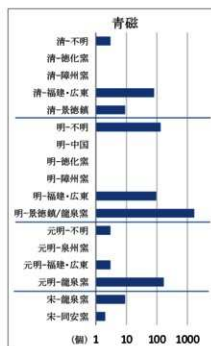
以下、青磁・白磁・染付の時代・窯ごとの変遷を第 204 図に示し、主な遺物の変遷を第 205～207 図に示した。青磁：2802 点の出土で、第 205 図に示したように 12～19C 代まで得られ、中でも明代が全体の 65% を占める。

第 141 表 砥石遺跡・石質別出土量

番号	遺跡	発行年	石質													合計					
			玄武岩	石炭四稜石	角閃石安山岩	輝緑石	凝灰岩	流紋岩	黒色千枚岩	黒色片岩	頁岩	赤色頁岩	粘板岩	砂岩	細粒砂岩		礫質砂岩	片状砂岩	シルト岩	チャート	サンゴ
1	伊礼原 A 遺跡	2014						1						6	1						8
2	伊礼原 B 遺跡	2008					2														2
3	伊礼原 D 遺跡	2008	なし			3															4
4	伊礼原 D 遺跡	2013					1	1							1		2				5
5	伊礼原 E 遺跡	2008					1														1
6	伊礼原 E 遺跡	2010						1						6	1	1					9
7	伊礼原遺跡	2014						1						2	1	1					5
8	伊礼原遺跡 (グスク)	2014		1		1	4	1						6	1						14
9	伊礼原遺跡 (国外)	2014					1							2	1						4
10	後兼久原遺跡	2004												1							1
11	平安山 A 遺跡 (グスク)	2016	16								1			2			5	1	1	26	
12	平安山 A 後	2016			1	1				1	1		13			1					18
13	平安山 B 遺跡	2015					7				1			1							9

第142表 中国産磁器時代・器種別出土量

器種	宋			元・明初			明					清					不明			合計					
	同安窯	龍泉窯	龍泉窯	福建・広東	泉州窯	不明	景德鎮/龍泉窯	福建・広東	漳州窯	德化窯	中国	不明	景德鎮	福建・広東	漳州窯	德化窯	不明	景德鎮	福建・広東		德化窯	タイ	東島	不明	
碗	2	9	140	2	1	3	1281	87			108	1	77			1	11	41			4	1	487	2256	
皿			3	1			234	4			3	2	3								1	1	20	280	
大皿			1				7																	8	
盤			20				59				1										1			9	90
瓶							42										3	1					8	54	
蓋							14																	14	
鉢			2				5	3			2						3							15	
高杯							2																	2	
杯							4										3							7	
香炉							3										3							8	
碗 or 皿							1										2							3	4
水注							1																	1	
袋物																								4	4
不明											17							1	2					36	56
合計	2	9	166	3	1	3	1653	94			131	9	80	0	0	3	26	45			5	2	567	2799	
碗				63		9	4	77			6	1	50		23	7		8						299	547
鉢							1						1											3	
皿				20		12	27	48		5	3			1	5	2				1	1			69	194
杯				1			2	7		2	1	1	1		158	1					3			19	196
瓶							1				1													24	26
蓋				3			1	1		5	1											2		16	28
香爐							1																	2	3
碗 or 皿							2				1					20								4	27
瓶 or							2										2							4	27
総類																	1							1	1
合計				87		21	35	138		7	7	11	2	53	0	206	14				11	4		433	1029
碗							143	118	2		80	19	1368	1	2	127	1	9						74	1944
皿							86	8	4		1	13	5	105	4	7	6							27	266
小皿													15	1		2									18
杯							33			1	4					8	5		4					2	57
鉢																13								2	16
瓶							25						4	5		2	2	1						5	44
蓋													1	4			7							1	13
袋物							1																		1
水注							1																		1
蓋																1									1
レンゲ																1	1								2
合計							289	126	6	1	1	94	65	1479	1	17	142	11	20					111	2363
合計	2	9	166	90	1	24	1977	358	6	8	8	236	76	1612	1	223	159	37	76	4	5	2	1111	6191	
時代別合計	11			281										2071							1235				

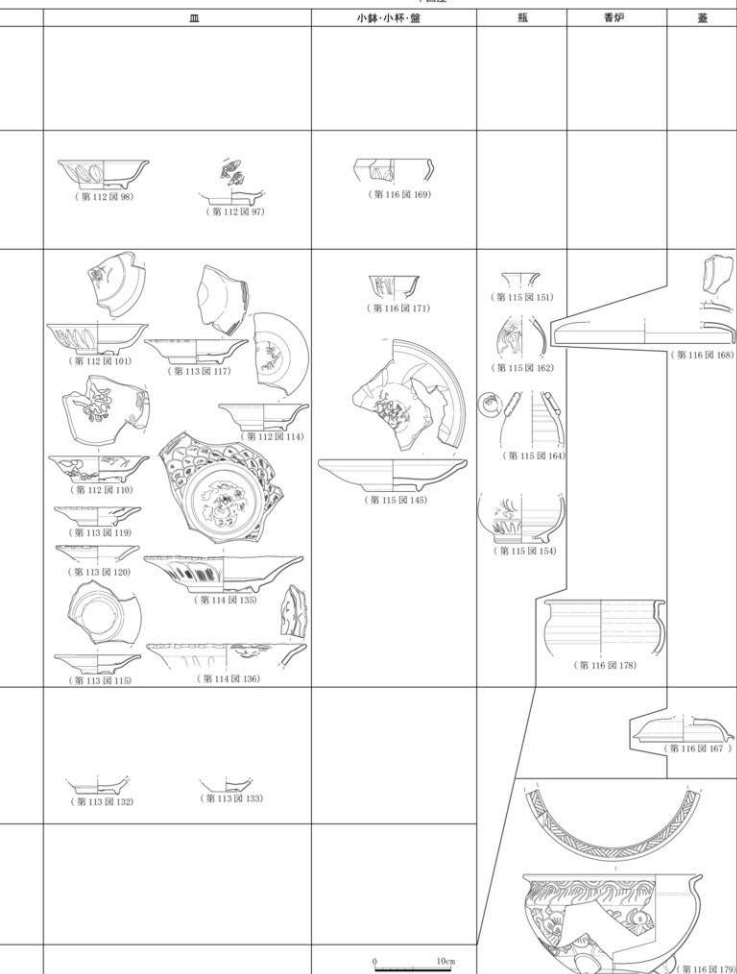


第204図 中国産磁器時代・窯別出土量

生産地	中国産			
生産年代	器種			
	碗			
12世紀～13世紀	(第107図8)	(第107図2)	(第107図6)	(第107図7)
13世紀～14世紀	(第107図10)	(第107図14)	(第107図11)	(第107図20)
14世紀～15世紀	(第108図24)	(第108図35)	(第110図73)	(第110図75)
	(第108図31)	(第108図32)	(第110図72)	(第109図45)
	(第108図25)	(第108図34)	(第110図71)	(第110図50)
	(第109図43)	(第109図49)	(第110図74)	(第110図50)
	(第109図46)	(第109図49)	(第111図92)	(第111図84)
15世紀～16世紀	(第109図58)	(第109図60)	(第110図78)	(第110図64)
	(第109図58)	(第110図67)		(第110図64)
16世紀～17世紀	(第116図177)	(第111図90)	(第111図95)	
18世紀～19世紀				

第205図 青磁 時代別変遷

中国産



(年代) 宋(南宋): 12世紀~13世紀 / 元: 13世紀~14世紀 / 明: 14世紀~17世紀 / 清: 17世紀~20世紀

生產地	中國產				
生產年代	器種	碗	盃	杯	壺·盞·急須
12世紀~13世紀					
13世紀~14世紀					
14世紀~15世紀					
15世紀~16世紀					
16世紀~17世紀					
18世紀~19世紀					

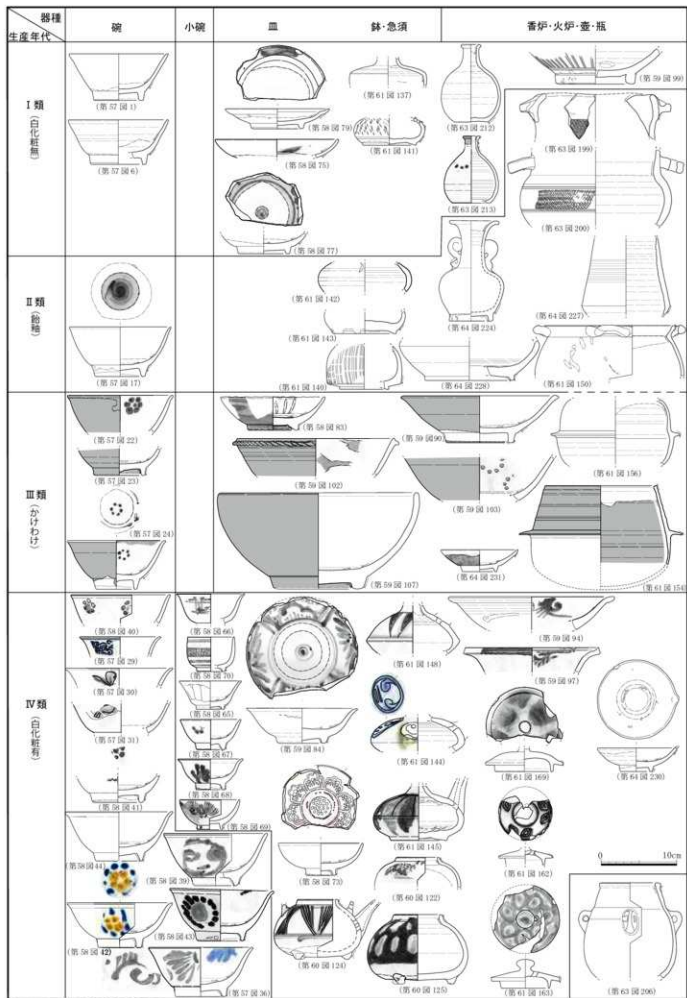
第 206 圖 白磁 時代別変遷

(年代) 宋 (南宋) : 12 世紀~13 世紀 / 元 : 13 世紀~14 世紀 / 明 : 14 世紀~17 世紀 / 清 : 17 世紀~20 世紀

生産地	中国産				
生産年代	碗	皿	瓶	杯	蓋
15世紀～16世紀	<p>(第97図8)</p> <p>(第97図22)</p> <p>(第97図20)</p> <p>(第98図31)</p> <p>(第98図29)</p> <p>(第97図5)</p>	<p>(第101図112)</p> <p>(第101図119)</p> <p>(第101図118)</p>	<p>(第103図160)</p> <p>(第104図190)</p>	<p>(第104図190)</p>	<p>(第104図190)</p>
16世紀～17世紀	<p>(第98図43)</p> <p>(第98図46)</p> <p>(第98図61)</p> <p>(第98図47)</p> <p>(第99図54)</p> <p>(第99図55)</p> <p>(第99図71)</p>	<p>(第101図128)</p> <p>(第101図132)</p> <p>(第101図133)</p> <p>(第102図137)</p>	<p>(第104図190)</p> <p>(第104図209)</p> <p>(第104図207)</p>		
17世紀～18世紀	<p>(第99図62)</p> <p>(第99図76)</p> <p>(第99図63)</p>	<p>(第102図135)</p> <p>(第102図136)</p>			
18世紀	<p>(第100図83)</p> <p>(第100図107)</p> <p>(第100図101)</p> <p>(第100図88)</p> <p>(第100図93)</p>	<p>(第103図152)</p> <p>(第102図147)</p>			
18世紀～19世紀					<p>(第104図188)</p> <p>(第103図170)</p>

第207図 染付時代別変遷

(年代) 宋(南宋)：12世紀～13世紀/元：13世紀～14世紀/明：14世紀～17世紀/清：17世紀～20世紀



第208図 沖繩産施釉陶器 分類

層	遺構 C14測定値	HA③	HA②	HA④	HA①
I II 層	祝女御殿内 道端大屋小 三良又吉小 照屋先生 東大屋小 祝女御殿内小 小滝小 瀧伊小 名墓座 瓦屋又吉小 大屋 仲村渠				
III 層	土器付着炭化物 240±20BP (SK100) HA④柱穴群				
IV 層	自然成路 (S-640) 人骨1号 人骨2号 人骨3号				
V 層					

第209図 時代別出土遺物変遷

器種別には碗が2256点(80.6%)、ついで皿10. %、盤3.9%、瓶と続く。最も古いものは12～13C代で、同安窯、龍泉窯の生産である。内陸側の後兼久原遺跡でも出土している。

13～14C代の鎊蓮弁文(図18)は龍泉窯、柳塘文碗(図10)は福建・広東系で、前者は後兼久原遺跡・北谷城(2010)で確認されているが出土数は少ない。

14～15C代の出土が最も多く、蓮弁文碗(図24・25・31)、ラマ連弁文(図43)、人形手(図46)、無文(図74)、印花文(図84)等の碗、腰折れ皿(図101)稜花皿(図117)、輪花大皿(図135)、鈎縁の盤(図145)、杯(図171)、双耳瓶(図164)、蓋(図168)など種類も多い。図168の被蓋は珍しい。図74は福建・広東系でそれ以外はすべて龍泉窯のものである。これらはほとんど首里城で出土する。出土量も多く、伊礼原D遺跡(2013)、伊礼原遺跡(2014)でも多く得られ、HA④で多く得られる。

15～16C代の龍泉窯の線刻蓮弁文碗(図58・60・64)、若干削れた福建・広東系碗(図67)などが出土する。出土量は少なく、湧田古窯跡や渡地村跡で出土する。皿は碁笥底(図133)、腰折れ(図132)で前者が龍泉窯、後者が福建・広東系である。他に蓋(図167)も出土。

16～17C代からは出土量も少ない。器種は碗が主で、福建・広東系(図94・95)が多くなる。

18～19C代は出土量も減少する。大形香炉(図179)は景德鎮窯産で祝女殿内の出土で、当時の経済力を窺わせるものである。

白磁:1065点の出土で第206図に示したように12～19Cまでのものが得られた。

12～13C代は玉縁口縁碗(図1)が得られ、近くの後兼久原遺跡や小堀原遺跡などゴスク時代初期の遺跡に普遍的に出土するもので、HA③の内陸側で出土している。

13～14C代はピロースクタイプ(図18)や外反碗(図2)、口壳げ碗(図44)など福建・広東系が主体である。外反碗(図22)はやや新しいようである。皿は「く」字状に湾曲するもの(図48)、逆「ハ」字状に開くもの(図49)、見込みに印花文を施すもの(図51)、ピロースクタイプの皿(図61)、ほかに短頸壺(図99・101)などが得られた。そのほとんどは福建・広東系である。

14～15C代は口縁部が外反するピロースク皿碗(図25・27・30・31)、灯明皿(図68)など福建・広東系である。

15～16C代は線刻蓮弁文碗(図36)、見込みに印花文(図33)、「堂」と雷文(図34)は底部は兜絞り状の特徴がある。皿は切高台(図74)いずれも福建・広東系である。筒状の腰折れの杯(図89)、形押し輪花状の蓋(図102)は前者に比べて薄手で上質である。いずれも景德鎮窯である。

16～17C代は出土量が少ない。外反碗で型押成形(図38)、銹釉で覆輪を施す碗(図41)、逆「ハ」字状の碗(図46)など福建・広東系。型押成形の外反皿(図80)、同じく型押成形の口壳げ杯(図92)などあり、前者が景德鎮窯、後者が徳化窯である。

18～19C代は碗が少なく、徳化窯の口壳げ型成形(図83)など小碗の出土が多い。他に1866～終戦までの台湾産の急須(図103)が出土している。

総じて12～13C、13～14Cのやや古手の時期が器種は多いようである。

染付:2507点の出土である。青磁や白磁のように12～14C代のもはなく、15～16C代から出土が多くなる。

15～16C代は碗・皿・杯などの器種がみられる。碗をみると外反碗の亀甲繫文+松竹(図5)、宝相唐草文(図8)、直口碗は外面にアラベスク文(図22・29・31)、外面に図14芭蕉文、見込みに法螺貝(図28)がある。皿をみると外反し、外面に宝相花唐草文、見込みに玉取獅子文(図112)、碁笥底で内外面に芭蕉文を施す(図118・119)ものがある。杯についてみると馬上杯は外面に唐草文、見込みに「福」の字款(図180)、腰折れの有段を成す杯で、外面に折枝と虫を描き、腰に如意頭繫文を巡らす。見込みに草花文、高台内に方形銘款「角幅」を付す(図160)などの器種もある。

16～17C代は碗・皿・瓶・蓋など器種も豊富である。碗をみると外面に唐草文(図45・54)、外面に豹皮文(図46)、輪花口縁に外面に花鳥画(図47)、外面に竹に鳥文(図51)、見込みに蛇目軸刺ぎを施すもの(図54)、撥形碗で外面に半梅花文と略化した唐草文(図55)、逆「ハ」字状で口縁に團線を施すもの(図71)がある。図55・71は福建・広東系、他は景德鎮窯の産である。皿についてみると見込みに蕉葉文を施す灯明皿(図128)、直口で内面の口縁に四方禪文(図132)、内面に雨龍文(図133)、端反り口縁で内面に花唐草文、高台に銘款を施すもの(図137)で、いずれも景德鎮窯である。

17～18C代は碗・皿が主である。略化した唐草文(図62)、腰部が逆「L」字状の印花の菊花と草花文(図76)、外面に草花文(図63)これらは素地も灰白色、呉須の発色悪く、福建・広東系である。図62は大ぶりの碗で内外面に牡丹唐草文を施す上質の碗で景德鎮窯。直口で福建・広東系、外面に草花文(図186)と團線(図135)18C代になると

碗のほとんどが福建・広東系である。直口碗は菊花唐草文(図83)、丸文(図101)、端反碗は腰部に縦線で蓮弁文をなぞらえ、外面に龍文(図107)、半梅花と寿文の区画文(図88)、草花文(図93)を施すものである。高台内に「和美」(図88)、「金美」(図107)の銘款がある。皿は15.0cm前後と大きく、端反りで型押し成形で内面に半梅花、唐草、龍文(図152)、「志在書中」の人物図(図141)を描くものがある。福建・広東系である。

19C代は碗はなく、景德鎮・徳化窯の杯が得られた。上等品であろう。

青磁・白磁・染付などの中国産陶磁器の出土量を第142表に示した。これによると宋代は全体で11点、元・明代は白磁と青磁が得られ、明代は青磁がそのほとんどを占める。清代は白磁が多く、染付はこれに続く。産地も福建・広東系が多くなる。

沖繩産施釉陶器：出土総数10,491点で出土数の多い碗を中心に施釉の方法で4つに分けた(第208図)。I類の灰釉碗は17世紀後半から「湧田焼」として作られ始めるが、壺屋古窯群Ⅲ(1997)・壺屋古窯群Ⅴ(2008)でも窯跡から検出され、壺屋古窯群Ⅲでは灰釉碗の比率が高い⁽⁹⁸⁾。また生産地についても名護市古我知でも焼かれていた(松島)報告があり、その下限は不明確である。本遺跡では碗が5000点余と多く、調査面積も広い範囲で、平安山集落跡ということもあり、第3節で示したように分類した碗で、時期的な変遷が追えるようである。灰釉碗については多数の論考⁽⁹⁹⁾があり、湧田古窯跡をはじめ、多くの遺跡で分類が試みられている。沖繩では、近世・近代の遺跡が重なって検出されることが多く、上位に生活する人々によって、攪乱を受けているのがほとんどである。従って、層位による検討は困難と思われる。先学の研究や壺屋焼の伝承から灰釉碗(I類)→皿類(掛け分け)→IV類(白化磁)への変遷は技術史の観点から示されているが、前出の理由から発掘調査された遺跡での検証がされていないのが現状である。加飾においても灰釉碗に鉄釉で草花文を施す(第57図16)のが古手とされる。本遺跡では家田の指摘する肥前の写しの皿(第58図79)が出土し、平安山原B遺跡ではその原形とされる肥前の皿(平安山原B遺跡-第119図8~10)もあり、沖繩産施釉の初源を示す資料と思われる。本遺跡の出土状況を見るとI類が主体をなす仲村渠では小ぶりの三島手のトビガンナ(図41)の酒器が得られている。碗のイチッンの文様の加飾の変遷は第54図に示したが、その古手(図22)も仲村渠の出土である。碗以外の器種も詳細に検討すると沖繩産施釉陶器「上焼」の由来が明らかになると思われる。酒器(図137)や徳利(図212)、三島手の鉢(図199)、凝った形の火炉(図199・200)やIV類(図227・228)なども出土。逆に茶釜(図156)、羽釜(図154)など当時の先端をゆく焼き物も出土。沖繩産施釉陶器の器種も多種に及んでいる。技術史的な側面として酸化コバルト釉導入以前の呉須(図29・122)や線彫り(図31)、1885年には酸化コバルト釉が導入され⁽¹⁰⁰⁾、イチッンや呉須絵(図36・43・125)にも用いられ、さらに1920年代後半から罌板・罌棒が導入され、匣(さや)やハマを用いるようになった。このような変化は製品にもみだすことができ、イチッンも伏せて加飾していたが、その後、口縁を上にしたまま施文(図68)ようになる。また、本土産近代磁器の加飾や鋳型などの影響を受けた小碗(図69)など壺屋焼の技術の変革を示している。

沖繩産無釉陶器：13,640点で出土数は最も多い。壺や甕類の大型が多いことに起因すると思われる。平面分布でHA③・④に分布の中心がある。これは近代(V期)の遺物分布と重なる。今回はプタの油が入っていたもの壺(第22図5)、豆類のはいていた甕(第22図1)。ヤギ・プタなどの骨を廃棄した甕(図版7)、ウーパールーの餌入れに使用した鉢(第22図3)など具体的な使用の確認されたものが検出されている。壺にプタ骨が入った状態は喜友名グスク(1999)でも報告されており、戦前の食生活の一端⁽¹⁰¹⁾が窺える資料である。これ以外に出土量は少ないが碗や瓶などで小ぶりのものが出土する。碗類は初期壺屋⁽¹⁰²⁾とされるものもあり、平面分布でもHA④に見られる。また、緻密で薄手の壺類も確認され、喜名焼の可能性も考えられる。播鉢の分類も口縁部形態、口唇幅、帯目幅、方向など観察し、分類を試みた。古手とされるI・II類が若干多いようである。貯蔵具の壺や甕はHA②・HA③に集中し、HA④では少ない。褐釉陶器も貯蔵具の壺が多いが、HA④に多いよう、貯蔵具は褐釉陶器から沖繩産無釉陶器へ移行が考えられる。出土量が多く、時間的制約もあり、数量を提示するまでにはいたらなかった。今後の課題である。

本土産磁器(近代)：7,104点で、沖繩産陶器について多く、その中でも小碗の出土が圧倒的に多かった。生産地としては全体の約65%を瀬戸・美濃が占め、34.6%が肥前系(砥部産の21%を含む)である。施文技法別では銅板転写がやや多く、型紙刷り・クロム青磁・手描き・ゴム判・色絵・吹き絵・盛り絵が確認できた(第23表)。型紙刷りでは中碗が多く産地としては砥部産が99%近くを占めていた。砥部産の型紙刷り碗には直口碗と外反碗(四寸碗)があり、外面と見込み文様及びハマ痕の有無から15種の組み合わせを確認した。次に時期的変遷を試みるため、これらをさらに地文でまとめたところ、今回出土の型紙碗について3つの事が推測された。①直口碗では見込みに蛇の目刺ぎを行う時期(型紙碗の初期)から統制番号が賦される時期まで同じ型紙が使用され作り続けられたものもあった。②外反碗には主とする文様が同じでも、鹿の子・網代・四方禰を地文とするものと点描を地文とするものが見られたので地文の簡略化が想定できた。③花唐草を描く外反碗には五弁花と六弁花が見られ、他遺跡⁽¹⁰³⁾では砥部産の型紙刷り碗に中国染付に由来

を見ることのできる花唐草文様が見られる事から、点描とは別の文様変遷の可能性が想定される。

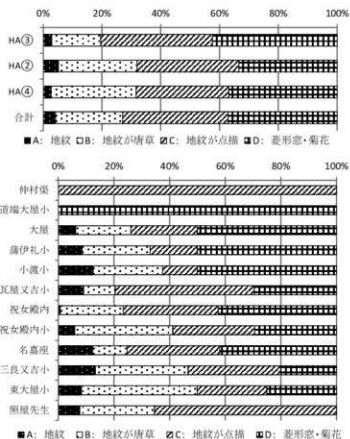
また、鹿の子文様(図45)や網代(図46)をAグループ、地文が唐草をBグループ、地文が点描をCグループ、点描のうち、民具事例や近代遺跡で普遍的に出土する「菱形窓菊文花」をDグループとし出土の割合を出した。Dグループの中には、外底に統制番号(図51)の賦された物もあった。その結果、全体ではAグループ4.1%、Bグループ22.8%、Cグループ35.8%、「菱形窓菊文花」のDグループ37.1%を示し、地区別にはHA③にC・Dの割合が高いようである。この分類を屋敷別に見ると仲村渠・道端大屋小は前節で示したように出土量は僅少で、Dグループが50.0%を占める蒲伊礼小、小渡小、祝女殿内、名嘉座、Bグループが多い東大屋小、三良又吉小、祝女殿内小、Cグループが多い瓦屋又吉小、Dグループが無い照屋先生となった。他遺跡を見ると喜友名グスクの一括資料はCとDグループにあたり、北谷町の古墓群などではDグループ、天界寺跡IではA～Dグループ全てが出土し、中でもDグループの古手タイプが確認されている。これらの遺跡は出土量もあり、分類も試みられているが量的な表示がなく、正確な比較は困難であった。

近代の遺跡からは多数の型紙刷りが出土しており、1914年の砥部焼きの流入以後の短期ではあるが、地文の分類を通して、その変遷あるいは遺跡の性格を知る手がかりになると思われる。また、外反碗(四寸碗)が沖繩独自の器形⁽²¹⁾⁽²²⁾であれば、近代沖繩の村落の分析に有効な遺物と思われる。また、型紙文様の比率は本遺跡の特性かあるいは沖繩全体の傾向なのか、今後の近代遺跡での型紙刷り碗の文様の分類が待たれる。出土量の分析は近代磁器の搬入と沖繩産陶器の生産との関連が具体的に実証できるものと思われる。

陶質土器:今回はHA③・②・④の出土であるが、いずれの地区でも鍋・急須・火炉が多く出土し、各地区とも屋敷跡の範囲に集中していた。屋敷別では祝女殿内がどの器種も大幅に多く中でも不明建物から多く出土した。混和材のサイズに極微細から砂粒ほどの大きさまで幅が見られた。詳細な分析にはいたらなかった。

瓦質土器:赤色(a)と灰色(b)に分けた。aからは「馬蹄形焜炉」が多数出土した。第143表にまとめたように湧田古窯跡など近世から近代遺跡に確認されている。各々の遺跡報告書では「瓦質土器」あるいは「陶質土器」に分類され、遺物の扱いが曖昧である。火入れ部が方形・炉部が円形なものは本土の奈良・江戸の遺跡で確認されているが、本品のような火入れ部が大きく、炉部が開口(上面「U」字状)する馬蹄形状のものは見られない。現段階では沖繩独自の形状と判断される。胎土は粉殻を含み、瓦質土器に近いものと砂質の強い陶質土器に近いものがある。火入れの鈎幅や形状にもバリエーションがあり、形態の分類も可能性がある。第143表に示した出土遺跡から、その上限は湧田古窯跡であるが、その生産地は不明である。

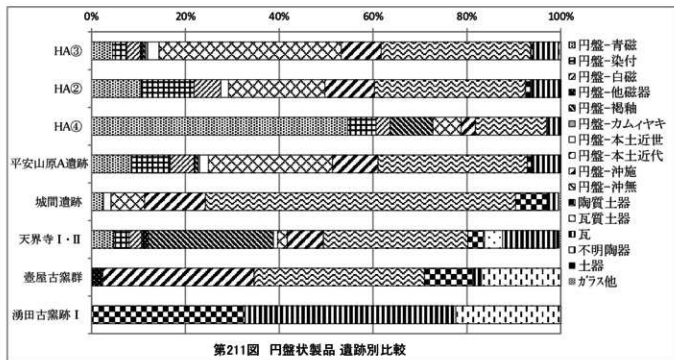
円盤状製品は出土総数590点で、湧田古窯跡I(1993)777点に次いで多い。



第210図 型紙地紋 地区・屋敷別比較

第143表 馬蹄形焜炉 出土遺跡一覧

番号	遺跡	所在	発行年
1	平安山原A遺跡	北谷町	2016
2	安仁屋トウヤマ遺跡	北谷町	1992
3	玉代勢原遺跡	北谷町	1993
4	大山前門原第一遺跡	宜野湾市	2012
5	高数トウヤマ遺跡	宜野湾市	2009
6	喜友名グスク	宜野湾市	1999
7	普天間古集落ほか	宜野湾市	2015
8	城原遺跡	浦添市	1992
9	喜友名前原第一古墓群	浦添市	2007
10	真志喜ウンスクモ	浦添市	2002
11	伊良波西遺跡	豊見城市	1996
12	(宮)上の毛	那覇市	2005
13	(宮)城原門地区	那覇市	2006
14	(宮)城原南側下地区	那覇市	2004
15	(宮)真珠遺跡	那覇市	2006
16	(宮)下之御庭	那覇市	2001
17	(宮)御内原北地区	那覇市	2010
18	天界寺I	那覇市	2001
19	天界寺II	那覇市	2002
20	小祿村群	那覇市	2014
21	壺屋古窯跡I	那覇市	1992
22	湧田古窯跡II	那覇市	1995
23	湧田古窯跡IV	那覇市	1999
24	渡地村跡	那覇市	2007



第211図 円盤状製品 遺跡別比較

100点以上出土した遺跡としては首里城跡下之御庭(2001)318点、天界寺跡Ⅰ・Ⅱ(2001・2002)364点、渡地村跡(2007)274点などの琉球王府関連遺跡、壺屋古窯跡Ⅰ(1992)104点、湧田古窯跡Ⅰ(1993)777点などの窯業関連遺跡、城間遺跡(1992)236点、普天間古集落(2015)127点で、本遺跡と同じ集落遺跡があげられる。遺跡別の円盤状製品の組成をみると琉球王府関連の天界寺跡Ⅱでは褐釉陶器、渡地村跡では青磁の割合が高く、窯業関連の湧田古窯跡では陶質土器と瓦が大半を占め、壺屋古窯群では沖縄産施釉・無釉陶器がほぼ同じ割合を示す。本遺跡では沖縄産無釉陶器と近代本土産磁器の割合が高いが、青磁・白磁・染付などの出土数も他より多い。地区別にみるとHA④では中国産が50%、沖縄産無釉陶器28%を占め、HA③・HA②では沖縄産無釉陶器。本土産近代磁器が大半を占めるが、HA②では青磁・染付の割合が高くなるようである。首里城跡御内原北地区(2013)では17C前半とされる造成層からの中国産褐釉陶器が多いことなどを加味すると、本遺跡の円盤状製品は中国産を主体とする時期と沖縄産無釉陶器・本土産近代磁器を主体とする2つの時期に分かれ、前者がHA④、後者がHA③・②に見られ、HA②は他の遺跡と同様に2つの時期が重なると思われる。大きさをみると城間遺跡では大きさは3～5cm台が主、首里城跡-下之御庭(2001)では3.0cm台、湧田古窯跡Ⅰ(1993)では4～5cm台が多い。本遺跡も3.0～5.0cm台が多い。

脊椎動物遺体: 前節の示したようにウシ・ウマの平面分布に偏りが見られ、他の遺物の分布から、Ⅲ期に居住域と耕作域の分かれるようである。これは島津侵攻後の時期とも重なり、自然派生的な土地利用の変化というよりは琉球王府の施策に起因する可能性が考えられる。また、近代のブタ骨の傷痕検出また、沖縄産無釉陶器の壺(第22図5)からのブタ油の検出、ヤギ骨の出土などはⅣ・Ⅴ期の食料事情を具体的に示し、出土遺物から当時の証言を裏付けるものである。

人骨: HA②とHA④で検出された人骨は人骨の分析や検出の状態から3つの時期の可能性が想定された。

a) 貝塚時代後期前半: 1～3号(HA②H4)人骨から下顎切歯4本の抜歯、5号(HA②H3)・7号(HA②H20)は形質が短頭・低顔の持つもので、貝塚時代後期と考えられる。抜歯の習俗は貝塚時代後期の中でも宜野湾市安座間第一遺跡や木綿原遺跡・古座間味貝塚・大当原貝塚C地点など前半の時期で検出されている⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。

b) グスク時代: 人骨11(HA②H3)は埋葬形態からグスク期に属すると考えられ、伊礼原D遺跡に同様な形態がある。
c) 15～16C代: HA④人骨12は集落(南側の柱穴の集中)とは反対の北側で検出され、刃物を伴い、白骨化の途中で埋葬されたことなど謎が多い。

<まとめと課題>

① 本遺跡は近代平安山集落にあたり、近代遺物も多数発見され、祝女殿内及びその周辺の屋敷も確認でき、当時使用



図版 142 壺内検出ブタ油(15kg)

- していた本土産近代陶磁器・沖縄産陶器も多数得られたことにより、『北谷町の地名』や『北谷町史』の記録された事象についても証左され、米軍基地掘取以前の村落の様子が明らかにされた。
- ② 本遺跡は貝塚時代後期から近代まで長期的に砂丘地に住み続け、近代以前の遺物包含層は明確には確認できないが、各時期の遺物の平面分布により、集落が展開していく様子が具体化された。近世期に遺物の平面分布から居住域と耕作地と区分が明確に分かれたことは本遺跡の成果といえる。
- ③ 特に脊椎動物遺体の平面分布は貝塚時代後期から近代までの食料の変遷もより具体的になり、移入されたとされるウシ・ブタ・ニワトリが近世、ヤギが近代であることがわかった。本遺跡は全体的に魚類遺体の出土が僅少で漁撈への依存度が低いことが窺えた。貝類遺体はⅣ・Ⅴ期にはマガキガイを主に採取していた。
- ④ 脊椎動物遺体の分析から近代のブタ・ウシ骨に解体痕から確認され、金属器の使用や解体方法が想定された。ブタ油の検出から使用された沖縄産無軸陶器の壺の形状が明らかになった。
- ⑤ 沖縄産無軸陶器のうち、ウワーフルで使用された鉢（第22図3）、ヤギ・ブタの検出された裏（図版7）など器種がわかり、遺跡から出土する器種がより具体化されるであろう。
- ⑥ 近世の湧田窯産の樽・瓦質の播種、煙管・ヤコウガイ製匙・簀などのほか、薩摩焼きの裏や肥前の陶磁器があり、その中には東南アジアあるいはヨーロッパ輸出用モデルの碗や皿が出土した。当時の平安山集落が、沖縄の村落集落の中でも財力があることを想起させる。
- ⑦ 近世・近代集落遺跡は第140表に示したように高いところに位置するが、標高5m前後の沖積低地に立地する平安山原A遺跡をはじめ、キャンプ桑江北側の遺跡など稀である。その原因一つとして、耕作地と水量のある河川（ナガサ）など、自然地形に起因するのではなかろうか、今後の課題である。
- ⑧ 鍛冶関連遺物（羽口・炉壁・鉄洋・焼土）得られており、鍛冶遺構のあった可能性が高く、農具の生産の可能性が想定される。
- ⑨ 遺跡からはあまり確認されてない植物の種子（ソラマメ・エゴマ）の検出があり、近代農業の栽培植物の一端が窺えた。
- ⑩ 清代には中国徳化窯の小碗が多く得られ、その後の沖縄産施釉陶器や本土産近代磁器でも小碗が多くなることに関連するのかもしれない。また、陶質土器の急須・本土産陶器の土瓶など喫茶関連遺物の時期や使用や変遷が今後の検討課題である。
- ⑪ 灰軸碗（1類）は本遺跡・平安山原B遺跡・小堀原遺跡でみると¹¹⁾碗の約3割を占めるが、HA③の内陸側に所在する仲村渠でも多く得られ、本土産磁器が僅少である等、古い様相が確認できた。しかし、窯跡である那覇市壺屋古窯跡Ⅲ・Ⅴでも着着した灰軸碗が得られ、灰軸碗の製造期間の時期が不明瞭で、下限については今後の課題である。
- ⑫ 砂丘に含まれている貝殻からその形成は4118±27BPから1620±23BPまで幅があることがわかった。

<註>

- 註1：南風原町教委.2005.「津嘉山古島遺跡・仲間村跡A地点・仲間村跡B地点・津嘉山クボ遺跡」、『南風原文化財調査報告書』第4集
- 註2：喜友名グスクでは貝塚前期・後期土器がわずかに得られている。
- 註3：くびれ平底系土器にはアカジャンガー式土器とフェンサ下層式土器があり、本遺跡のものは底部を厚さと大きさで分類を試みたが、明確な傾向は得られなかった、今後の検討課題とした。
- 註4：4409SXは幅約8m、深さ1.2mの内陸側に深くなるもので泥炭層、主に貝塚後期の遺物が出土、性格は不明
- 註5：勝連城跡で出土、タカラガイ製錬の上限とされている。
- 註6：1617年に薩摩・島津藩に懇請し、3人の朝鮮人陶工連れて帰り、湧田において陶法を指導。
- 註7：平田典通は1670年に中国に渡り、1673年に帰国。
- 註8：平安山原B遺跡（2015）で壺屋古窯群Ⅲの灰軸碗が74.3%、平安山原B遺跡8.7%の比較がある。
- 註9：灰軸碗の生産年代は知念勇（1988）・池田榮史（2011）・津波古聡（1986）・家田淳一（2000）の論考がある。
- 註10：「壺屋焼近代百年のあゆみ」2008 壺屋焼き物 10周年記念特別展、壺屋焼物博物館
- 註11：宜野湾市史、ウワークルシー「行事の時などは、裏に保存してある豚のソーキ骨（アハラ骨）でだしを取った」壺の中のブタの骨が検出され、民具で「塩付け壺」と呼称されるタイプである
- 註12：「首里城跡『御内原北地区』発掘調査報告書Ⅰ」で提示。p177 沖縄産無軸陶器の中に初期壺屋「碗」、天目模倣碗もあり。
- 註13：沖縄県埋文.2001.『天界寺跡Ⅰ』、沖縄県立埋文文化財センター調査報告書第2集の第44図15
- 註14：「鏡水土砂場原A遺跡」（2010）の報告で推察。
- 註15：新里貴之.2011.南西諸島における先史時代の墓制（Ⅲ）—沖縄諸島—、地域政策科学研究・鹿児島大学大学院人文社会科学研究所、No.8.P101-127 鹿児島大学大学院
- 註16：小堀原遺跡（32%）、平安山原B遺跡（21.8%）という結果がある。平安山原B遺跡（2015）P307

参考・引用文献

著者・題名	発行年	編著者・発行機関・集刊	参考・引用箇所
神樂島立神楽館 祝祭 30周年記念特別展 渡川人編	2002	神樂島立神楽館	祝祭神楽
北洋史 第 二巻 資料編 1 前近代・近代文庫資料	1986	北洋行役場	祝祭神楽
北洋史 第 二巻 資料編 2 民俗 上	1992	北洋行役場	祝祭神楽・近代代遺構遺物
北洋史 第 二巻 通史編	2005	北洋行教育委員会	祝祭神楽
北洋史の遺跡	1994	北洋行文化財保存委員会	祝祭神楽
キヤンツ系江島遺跡に伴う地誌調査	2005	北洋行文化財保存委員会	祝祭神楽
北洋史の地名	2006	北洋行文化財保存委員会	祝祭神楽
伊礼原遺跡	2007	北洋行文化財保存委員会	祝祭神楽
伊礼原遺跡・伊礼原遺跡	2008	北洋行文化財保存委員会	祝祭神楽・石器
伊礼原遺跡	2010	北洋行文化財保存委員会	祝祭神楽・石器
平安山原遺跡	2015	北洋行文化財保存委員会	祝祭神楽
上物誌 下巻 長春・人物編	2010	平安山原上物誌	祝祭神楽
北洋史 別巻 近代化と資料	1985	北洋行役場	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1987	北洋行役場	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1992	北洋行役場	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1995	北洋行役場	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2005	北洋行教育委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2007	北洋行教育委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1973	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1981	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1982	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1983	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1997	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2011	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1991	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2008	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2014	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1989	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2011	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2014	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2006	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1990	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2000	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2002	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1996	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2008	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2010	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2001	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2012	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2009	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	1994	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2000	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2002	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物
北洋史 別巻 近代化と資料	2000	北洋行文化財保存委員会	近代代遺構遺物

神楽川史 各編第 3 巻(考古)	1979	神楽川教育委員会	土器
思軒村跡田日域発掘調査報告書	2013	神楽川文化財調査報告書第 23 集	土器・貝製品
【友仁】周トウワンマ遺跡	1992	神楽川文化財調査報告書第 105 集	土器
【吉知】風見塚	1994	神楽川文化財調査報告書第 114 集	土器
【深田】日域	2007	神楽川立理蔵文化財センター調査報告書第 46 集	土器、円筒状製品
【真志】吉森川原遺跡	1994	立野市市文化財調査報告書第 18 集	土器
【大田】門原遺跡(遺構)	1999	立野市市文化財調査報告書第 30 集	土器
【糸巻】跡跡	1991	立野市市文化財調査報告書第 1 集	土器
【坂田】宮原遺跡	1997	野洲市文化財調査報告書第 35 集	土器
【伊礼】立遺跡・伊礼原A 遺跡	2014	北守町文化財調査報告書第 36 集	土器製品
【東原】田工原の研究	2008	京福大学/田工原研究会/出土資料第 28 号	瓦葺
【日本】上真原遺	1996	木村久男/立野市立理蔵調査会	瓦葺
【今福】加藤発掘調査報告書 1	1983	今福村文化財調査報告書第 9 集	瓦葺・鉄製品
【瀬田】宮原(1)	1993	神楽川文化財調査報告書第 111 集	瓦葺
【百里】立遺跡・下之瀬遺跡・登原門跡・瀬川門跡・本郷門跡発掘調査報告書一	2001	神楽川立理蔵文化財センター調査報告書第 3 集	瓦葺・円筒状製品・埴輪
【伊豆】立遺跡	2002	神楽川立理蔵文化財センター調査報告書第 10 集	瓦葺・円筒状製品・埴輪
【加志】城跡 1	2010	津城市文化財調査報告書第 8 集	円筒状製品
【天保】立遺跡 1	2002	神楽川立理蔵文化財センター調査報告書第 8 集	円筒状製品
【中野】城跡	2013	神楽川立理蔵文化財センター調査報告書第 67 集	円筒状製品・埴輪
【百里】城跡・新田原北地区発掘調査報告書(2)一	2013	神楽川立理蔵文化財センター調査報告書第 69 集	円筒状製品
【三谷】内遺跡・交和里内村工形形築地輪郭発掘報告書(工作計画)	2010	たごごの博物館・江戸博物館学芸・東京都市大学京神楽川	埴輪
【シラカワ】VOC と日置交差	2004	奈良県/右衛門政府の委託を受けた中央防災研究所が履行した研究報告書	埴輪
【北守】史跡 第三 資料編 2 民部(下)	1994	北守町役場	埴輪等
【神楽】の歴史書 第三十八回(企画西展)	2010	神楽市立郷土博物館	埴輪等
【浦添】よりどり屋 金風(上野城編)	2007	浦添市教育委員会/浦添市文化財調査研究発表報告書	埴輪等
【人楽】名カシラターガマ方眼遺跡の総合調査報告書	1998	立野市市文化財調査報告書第 29 集	埴輪等
【百里】城跡一跡(新田原北地区発掘調査報告書一)	2008	神楽川立理蔵文化財センター調査報告書第 44 集	埴輪
【伊礼】原D 遺跡	1990	神楽川の文化財第 11 集	瓦葺製品・貝製品
【熊田】城跡	2011	うま市市文化財調査報告書第 14 集	瓦葺製品・貝製品
【今福】加藤発掘調査書 2	2005	今福村文化財調査報告書第 20 集	瓦葺製品
【今福】加藤発掘調査書 3	2007	今福村文化財調査報告書第 24 集	瓦葺製品
【野田】片見見の石垣について	1980	高杉浩一/鳥取大学神楽川史学/神大論叢書第 1 巻 1 号	瓦葺
【石垣】遺跡一福寺から福寺へ一	1977	飯沼真/考古学論叢 歴史学編(和生大生)六三三論叢文集 別冊	瓦葺
【ケガニ】ニシ	1978	日本史和及/熊本大学法文学会/法文学論叢 41 号	瓦葺
【神楽】命作り出した石垣	1991	平田天/雄山閣出版/香川考古学第 35 号	瓦葺
【伊豆】立遺跡	1988	加藤三三/新田原出版	瓦葺
【伊豆】立遺跡	1995	鈴木誠三/和泉閣	瓦葺
【考古】資料の整理(一)編 文	2006	五ノ川遺蹟 /AVP・第一フェーズ	瓦葺
【名義】・やんばらの地置(1)	2011	遊楽一→遊楽志/京福博物館	瓦葺
【平安】山田地区(北野原遺)	2011	北守町文化財調査報告書第 33 集	瓦葺
【久良】城見塚	1983	神楽川文化財調査報告書第 51 集	瓦葺
【北原】田原	1994	神楽川文化財調査報告書第 116 集	瓦葺
【平敷】原トウバ(遺跡)	1995	神楽川文化財調査報告書第 123 集	瓦葺
【清水】田原	1996	神楽川文化財調査報告書第 125 集	瓦葺・貝製品
【南原】文化の継承・日の道の考古学一	1989	真山山村文化財調査報告書第 1 集	瓦葺
【瀬久】原日域発掘調査報告書	1996	本郷村文化財調査報告書	瓦葺
【瀬久】原日域発掘調査報告書	1977	本郷村教育委員会	瓦葺

マフット遺跡	2006	宮内庁文化財調査報告書第28集	近(代)賢	目録項目
琉球・中国・日本・朝鮮 年号対照表	2000	財団法人神城閣文化振興会 公文書管理部 史料編集室	近(代)賢	年号
近(代)韓城の常備商人	1984	西原 啓行 / ひるぎ 啓社	近代(金銀製品)	
糸島の民衆	1974	神城閣文化財調査報告書 / 神城閣教育委員会	近代(金銀製品)	調味料
神楽(大森林舞)	2012	うるま市文化財調査報告書第17集	ガラス皿	風呂
沖繩(トビレ)事件(ウ)	1983	沖縄タイムス社	ガラス皿	トビレ
南島の民衆(文)	2000	早川 公雄 / ボーダーライン社	ガラス皿	トビレ
北谷町のノロ	1987	上江 謙行 / ひるぎ 啓社	ガラス皿	ノロ
真志保石田第一遺跡・真志保ノロ境内村所産陶器類調査記録	2009	北谷町文化財調査報告書第17集	ガラス皿	ノロ
	2000	宮内庁市文化財保護調査報告第50集	ガラス皿	ノロ

参考 web サイト

web サイトページ名

アドレス

参考箇所

鎌倉(法皇)人形焼	モカへいきょく探検隊	日本の貨幣の歴史	http://www.mini.go.jp/kaks/page02.html/saska	近(代)賢
かつおかデジカメミュージアム	近(代)賢		http://www.minseim-city.kanazawa-kyo.jp/kfm/index.html	近(代)賢
SILVER PATTERN	Collision silver pattern		http://www.abvpattern.com/Conflictor%28ilver%28pattern.htm	近代(金銀製品)
肥後守・Higomokami	稔		http://www.fatime-hp.com/knives.html	近代(金銀製品)
アサヒ飲料	130年の歴史		http://www.asahibev.com/jp/enterainment/history/books/history/1881.html	ガラス皿
ACC 泉涌子	泉涌子ヒストリー		http://www.asahigroup-holdings.com/company/history/	ガラス皿
アサヒグループホールディングス	歴史・沿革		http://www.asahigroup-holdings.com/aboutus/history/index.html	ガラス皿
utena	について	ウテナ電選社	http://www.utena.co.jp/about-utena/history/index.html	ガラス皿
キウキマン	ホームページの始まり		http://www.kiki-man.com/corporate/about/history/01.html	ガラス皿
KINHO	日本綿染織株式会社	金糸の歩み	http://www.kicho.co.jp/kiniso/syumi/index.html	ガラス皿
サッポロビール	歴史・沿革		http://www.sapporobeer.jp/company/history/index.html	ガラス皿
株式会社ジマムラ	会社の歴史		http://www.ohvex.co.jp/about_history.html	ガラス皿
瑞興製靴株式会社	語り部の魂		http://www.zaizen.co.jp/aboutus/legend/article_00.html	ガラス皿
セーラー万年筆株式会社	沿革		http://www.sailor.co.jp/profile/history/index.html	ガラス皿
株式会社 京橋染織	フエキキの歴史		http://yoshinart.hustle.ne.jp/groupwork/company.html	ガラス皿
丸善株式会社	丸善の歩み		http://www.hioki.co.jp/history/25years.html	ガラス皿
株式会社 新田製菓	歴史		http://www.niitama.co.jp/corp/history/index.html	ガラス皿
ロート製菓株式会社	ロート製菓の歴史		http://www.rocosmetics.co.jp/history_museum/	ガラス皿
NCM	業界の歴史		http://www.sobito.co.jp/company/history/	ガラス皿
日本ガラスびん工業会	ガラスびんの歴史		http://www.jbcm.co.jp/cosmetics/history	ガラス皿
一般社団法人全国牛乳酪農改善協会	宅配牛乳歴史資料館		http://glashortle.org/what/index.html	ガラス皿
一般社団法人日本食品原料検査協会	食品原料まもろ会誌		http://renkaiyou.or.jp/	ガラス皿
福：福谷作文化財日記			http://setiyuken.jp/ink_soft_drinks.html	ガラス皿
アサヒシューズ	沿革		http://himegaki.sakura.ne.jp/blog-so-net/04.jp.archive%282004%2801%22	ガラス皿
南村伝次郎の日記(製作所)	吉田製作所 100年の歩み		http://www.sachi-shoes.co.jp/company/history.html	近代(日用品)
トビレ博物館			http://www.yoshida-per.co.jp/company/100years.html	近代(日用品)
特定非営利活動法人日本木下文化研究会	分会会 編集・下木研究会		http://www.woods-site.net/remodel/HAKUBUTUKAN.html	近代(日用品)
尾崎信正(金庫 貯金箱制作館)			http://shinyoketsuakura.ne.jp/index.htm	近代(日用品)
日本製鋼所(鋼板)			http://www.amashin.co.jp/sekai/p1.htm	木土産物(磁器)
古賀の世界	磁器記		http://mekonate.jp/area/old/tuket/yndynast/roki.html	木土産物(磁器)
			http://hooonookai.sakura.ne.jp/	磁器

報告書抄録

ふりがな	はんざんぼるいせき							
書名	平安山原A遺跡							
副書名	桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・平成21・平成22・平成23年度）							
巻次	-							
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編著者名	鳥袋春美・山城安生・松原哲志・上地千賀子・呉屋広江・比嘉優子・北條真子・土岐耕司 植泉岳二・黒住耐二・藤田祐樹・バリノ・サーヴェイ(株)・(株)文化財サービス							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2016年（平成28年）3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		m ²	
はんざんぼるいせき 平安山原A遺跡	沖縄県 北谷町 字伊平 小 平安山原	473260		26° 19′ 32″	127° 45′ 23″	20080107 ～ 20080229	700	土地区画整理事業に伴う 発掘調査
20091001 ～ 20100225						2,400		
20100819 ～ 20110221						3,900		
20110719 ～ 20120131						3,700		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
はんざんぼるいせき 平安山原A遺跡		近・現代	原敷跡(祝女殿内等) 道路跡(溝・石列等) 井戸跡 石組遺構 収納坑 食料残滓の廃棄痕跡	銭貨・鉄製品・ガラス瓶 円盤状製品・骨製品 日用品・石白・軽石製品 瓦・瓦二次製品		種実同定 : ヤマモモ・トウゴマ・ソラマメ SK100 土器付着炭化物試料 : 239 ± 23		
はんざんぼるいせき 平安山原A遺跡		近世 ～ 貝塚後期	自然流路 通路状石列遺構 土留状石列遺構 溝状遺構 ピット・土坑 食料残滓の廃棄痕跡 人骨 犬骨	土器・カムィヤキ・青磁 白磁・染付・陶磁器 陶質土器・瓦質土器 土製品・簪・銭貨・硯 円盤状製品・煙管・石板 滑石・石製品・石器 羽石・鉄滓・焼土・埴 鉄製品・貝製品・骨製品		人骨 貝塚時代後期: 短頭低顔・抜歯 グスク時代: 長頭・刀子共伴 ビーチロックに含まれる貝類試料 : 1620 ± 23 ~ 4118 ± 27		
要約	<p>平安山原A遺跡は平成19・21・22・23年度に合計4回の発掘調査が行われ、米軍接收以前の戦前生活面及び近世以前の遺構面が検出された。戦前面においては、字平安山集落が良好な状態で発見され、特に集落の中心であった祝女殿内では、多様な家内施設と共に多くの近代遺物が出土した。また、照屋先生屋敷では収納坑と呼ばれる土坑から、戦中安置された遺物が多数出土し、ラードが入ったままの油壺も確認できた。近世以前の遺構は、その帰属時期が貝塚後期～近世と幅広く、各期の遺構面を明確に区別することはできなかったが、くびれ平底期には遺跡北側に偏在していた生活範囲が、グスク期に入ると遺跡全体に広がっていくことが確認された。近世に入ると居住域と耕作域が明確に分けられるようになり、近代に至るまで踏襲されている。また、貝塚時代に形成された自然流路に対しては、石列等の構造物を設けることで、自然環境をうまく利用しようという姿勢も窺えた。合わせて、各期における墓域があったことも判明した。中には鉄製刀子が刺さったままのグスク期女性の骨等、非常に特異な事情を孕んだ遺構も検出された。遺跡下に広がるビーチロックについても含有物の年代測定を実施したところ、その形成過程の一端を窺うことができ、ナガサ川以北の平安山原全体の環境復原をするための一助となった。</p>							

北谷町文化財調査報告書 第38集

は ん ざん ぼる
平安山原A遺跡

—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・21・22・23年度）—

編集：北谷町教育委員会
発行年：2016年（平成28年）3月
〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地
TEL 098-936-3159
印刷：光文堂コミュニケーションズ株式会社
〒901-1111 沖縄県南風原町字兼城577番地
TEL 098-889-1131



北 谷 町